

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏名	鄭賢児
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 194 号
学位授与の日付	2015 年 3 月 12 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	友人間の「謝罪談話」における日韓対照研究 ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー

Name	Jung Hyun Aa
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 194
Date	March 12, 2015
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	A Study of Japan-Korea Comparison of 'Discourse of Apology' Between Friends -Focused from the perspective of discourse politeness theory-

友人間の「謝罪談話」における日韓対照研究
ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー

東京外国語大学

総合国際学研究科博士後期課程

鄭 賢 児

目 次

第1章 はじめに

1.1 研究の背景.....	1
1.2 研究目的.....	2
1.3 本研究の構成.....	3

第2章 先行研究

2.1 本研究における「謝罪すること」について.....	5
2.1.1 「謝罪すること」と関連用語の定義.....	5
2.1.2 発語内行為としての「謝罪」.....	7
2.2 「謝罪」に関する先行研究.....	11
2.2.1 日本語における謝罪研究.....	13
2.2.1.1 抽象的な発話行為としての謝罪の考察.....	13
2.2.1.2 謝罪に用いられる言語形式（定型表現）の研究.....	14
2.2.1.3 謝罪場面における具体的な謝罪行動の記述・分析.....	16
2.2.2 韓国語における謝罪研究.....	19
2.2.3 「謝罪」に関する日韓対照研究.....	21
2.2.3.1 謝罪に用いられる言語形式（定型表現）の研究.....	22
2.2.3.2 謝罪場面における具体的な謝罪行動の記述・分析.....	23
2.2.4 謝罪の先行研究からの考察.....	25
2.3 本研究における謝罪に対する応答と関わりがある言語行動の先行研究.....	27
2.3.1 否定的な言語行動に関する先行研究.....	27
2.3.1.1 不満表明に関する先行研究.....	27

2.3.1.2	断りに関する先行研究	28
2.3.1.3	その他の否定的な言語行動に関する先行研究	29
2.3.2	否定的ではない言語行動に関する先行研究	30
2.4	理論的枠組み—ポライトネス(Politeness)に関する研究	32
2.4.1	Lakoff の「ポライトネスの原理」	33
2.4.2	Grice の「会話の含意」と「協調の原理」	34
2.4.3	Leech の「ポライトネスの原理」	35
2.4.4	Brown and Levinson の「ポライトネス理論」	37
2.4.5	宇佐美の「ティスコース・ポライトネス理論」	42
2.4.6	その他のポライトネスに関する先行研究	47
2.4.7	ポライトネス理論のまとめ及び比較	48
2.4.8	「謝罪」と「ポライトネス理論」の関係	51
2.5	談話における先行研究	52
2.6	本研究で用いられる研究方法に関する先行研究	55
2.6.1	会話の研究におけるアプローチ	56
2.6.1.1	コミュニケーションの民族誌	56
2.6.1.2	認知と相互行為の社会言語学	57
2.6.1.3	エスノメソドロジーストによる「会話分析」	58
2.6.1.4	語用論的な立場からの「談話分析」	60
2.6.1.5	総合的会話分析（会話分析への言語社会心理学的アプローチ）	61
2.6.1.6	「会話分析」、「談話分析」、「総合的会話分析」のアプローチの比較	63
2.6.2	ロールプレイ調査方法に関する先行研究	64
2.6.3	文字化システムに関する先行研究	67
2.6.3.1	日本語の文字化システムに関する先行研究	67
2.6.3.2	韓国語の文字化システムに関する先行研究	71

第3章 本研究における研究課題と研究方法

3.1 本研究における研究課題と研究設問	74
3.2 本研究における研究方法	75
3.2.1 会話データの収集	75
3.2.1.1 会話データ収集における条件統制	75
3.2.1.2 会話データ収録の手順	76
3.2.2 ロールプレイ場面の設定	76
3.2.2.1 ロールプレイ場面の設定の概要	76
3.2.2.2 ロールプレイ場面における負担度の差の認定結果	79
3.2.3 本研究の会話データの文字化	82
3.2.3.1 基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)について	82
3.2.3.2 基本的な文字化の原則の韓国語版 (Basic Transcription System for Korean: BTKS) について	85
3.2.4 分析の信頼性(Cohen の Kappa(κ))	93

第4章 本研究の会話データに関する調査結果

4.1 会話データに関する基本情報	94
4.1.1 本研究の会話データの妥当性の確認	94
4.1.2 協力者に関する基本情報	95
4.1.3 会話時間と発話文に関する基本情報	100
4.2 フォローアップ・アンケート調査の結果	103
4.3 会話データに関するまとめ	105

第5章 謝罪談話の構造分析

5.1 謝罪談話における分析方法	107
5.1.1 謝罪談話の評定者間信頼性係数	112
5.2 謝罪談話に関する日韓対照の分析結果及び考察	112

5.2.1	負担度が軽い場合の日韓母語話者の謝罪談話の分析結果及び考察	112
5.2.2	負担度が重い場合の日韓母語話者の謝罪談話の分析結果及び考察	116
5.2.3	負担度が軽い場合と重い場合の日韓母語話者の謝罪談話のまとめ	124
5.3	日韓母語話者における謝罪談話の分析結果及び考察(負担度が軽い場合)	126
5.3.1	負担度が軽い場合の日本語母語話者における謝罪談話の分析結果及び考察	126
5.3.1.1	負担度が軽い場合の日本語母語話者における謝罪談話の展開とその構造の特徴	126
5.3.1.2	負担度が軽い場合の日本語母語話者における謝罪談話の相互作用の特徴	131
5.3.2	負担度が軽い場合の韓国語母語話者における謝罪談話の分析結果及び考察	133
5.3.2.1	負担度が軽い場合の韓国語母語話者における謝罪談話の展開とその構造の特徴	134
5.3.2.2	負担度が軽い場合の韓国語母語話者における謝罪談話の相互作用の特徴	139
5.4	負担度が軽い場合の日韓母語話者における謝罪談話のまとめ	141
5.5	日韓母語話者における謝罪談話の分析結果及び考察(負担度が重い場合)	142
5.5.1	負担度が重い場合の日本語母語話者における謝罪談話の分析結果及び考察	143
5.5.1.1	負担度が重い場合の日本語母語話者における謝罪談話の展開とその構造の特徴	143
5.5.1.2	負担度が重い場合の日本語母語話者における謝罪談話の相互作用の特徴	149
5.5.2	負担度が重い場合の韓国語母語話者における謝罪談話の分析結果及び考察	158
5.5.2.1	負担度が重い場合の韓国語母語話者における謝罪談話の展開とその構造の特徴	159
5.5.2.2	負担度が重い場合の韓国語母語話者における謝罪談話の相互作用の特徴	164
5.6	負担度が重い場合の日韓母語話者における謝罪談話のまとめ	173
5.7	謝罪談話の構造に関するまとめ	174

第6章 謝罪行動のプロセスの分析

6.1	謝罪行動における分析方法	177
6.1.1	謝罪発話文	178
6.1.2	謝罪関連発話文の分類	179
6.1.3	応答関連発話文の分類	186
6.1.4	謝罪行動のコーディングの仕方	191

6.1.5	謝罪行動の評定者間信頼性係数	194
6.2	謝罪行動における日韓対照の分析結果及び考察	194
6.2.1	負担度が軽い場合の日韓母語話者の謝罪行動の分析結果及び考察	201
6.2.2	負担度が重い場合の日韓母語話者の謝罪行動の分析結果及び考察	204
6.2.3	負担度が軽い場合と重い場合の日韓母語話者の謝罪行動のまとめ	208
6.3	日韓母語話者における謝罪行動の分析結果及び考察(負担度が軽い場合)	210
6.3.1	負担度が軽い場合の日本語母語話者の謝罪行動の分析結果及び考察	210
6.3.1.1	負担度が軽い場合の日本語母語話者における謝罪行動の抽出結果及び考察	210
6.3.1.2	負担度が軽い場合の日本語母語話者における謝罪行動の相互作用の特徴	213
6.3.2	負担度が軽い場合の韓国語母語話者の謝罪行動の分析結果及び考察	220
6.3.2.1	負担度が軽い場合の韓国語母語話者における謝罪行動の抽出結果及び考察	220
6.3.2.2	負担度が軽い場合の韓国語母語話者における謝罪行動の相互作用の特徴	223
6.4	負担度が軽い場合の日韓母語話者における謝罪行動のまとめ	233
6.5	日韓母語話者における謝罪行動の分析結果及び考察(負担度が重い場合)	234
6.5.1	負担度が重い場合の日本語母語話者の謝罪行動の分析結果及び考察	234
6.5.1.1	負担度が重い場合の日本語母語話者における謝罪行動の抽出結果及び考察	235
6.5.1.2	負担度が重い場合の日本語母語話者における謝罪行動の相互作用の特徴	239
6.5.2	負担度が重い場合の韓国語母語話者の謝罪行動の分析結果及び考察	255
6.5.2.1	負担度が重い場合の韓国語母語話者における謝罪行動の抽出結果及び考察	255
6.5.2.2	負担度が重い場合の韓国語母語話者における謝罪行動の相互作用の特徴	259
6.6	負担度が重い場合の日韓母語話者における謝罪行動のまとめ	273
6.7	謝罪行動のプロセスに関するまとめ	275

第7章 謝罪発話文と応答発話文の分析

7.1	「謝罪発話文と応答発話文」における分析方法	279
7.1.1	謝罪発話文における分類	279

7.1.2	応答発話文における分類	280
7.1.3	「謝罪発話文と応答発話文」の評定者間信頼性係数	282
7.2	「謝罪発話文と応答発話文」に関する日韓対照の分析結果及び考察	282
7.2.1	負担度が軽い場合の日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の分析結果	287
7.2.2	負担度が重い場合の日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の分析結果	291
7.2.3	負担度が軽い場合と重い場合の日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」 のまとめ	293
7.3	日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の分析結果及び考察(負担度が軽い場い)	295
7.3.1	負担度が軽い場合の日本語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の 分析結果及び考察	295
7.3.1.1	負担度が軽い場合の日本語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の 抽出結果及び考察	295
7.3.1.2	負担度が軽い場合の日本語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の 相互作用の特徴	297
7.3.2	負担度が軽い場合の韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の 分析結果及び考察	301
7.3.2.1	負担度が軽い場合の韓国語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の 抽出結果及び考察	301
7.3.2.2	負担度が軽い場合の韓国語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の 相互作用の特徴	304
7.4	負担度が軽い場合の日韓母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」のまとめ	308
7.5	日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の分析結果及び考察(負担度が重い場い)	309
7.5.1	負担度が重い場合の日本語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の 分析結果及び考察	309
7.5.1.1	負担度が重い場合の日本語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の 抽出結果及び考察	310
7.5.1.2	負担度が重い場合の日本語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の 相互作用の特徴	312
7.5.2	負担度が重い場合の韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の	

分析結果及び考察	316
7.5.2.1 負担度が重い場合の韓国語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の抽出結果及び考察	316
7.5.2.2 負担度が重い場合の韓国語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用の特徴	318
7.6 負担度が重い場合の日韓母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」のまとめ	322
7.7 「謝罪発話文と応答発話文」に関するまとめ	322

第8章 ディスコース・ポライトネス理論の観点からの考察

8.1 「謝罪談話」における日韓母語話者の基本状態とポライトネス効果	326
8.1.1 負担度が軽い場合の「謝罪談話」における日韓母語話者の有標行動とポライトネス効果	329
8.1.2 負担度が重い場合の「謝罪談話」における日韓母語話者の有標行動とポライトネス効果	334
8.2 「謝罪行動」のやりとりにおける日韓母語話者の基本状態とポライトネス効果	341
8.2.1 負担度が軽い場合の「謝罪行動」のやりとりにおける日韓母語話者の有標行動とポライトネス効果	345
8.2.2 負担度が重い場合の「謝罪行動」のやりとりにおける日韓母語話者の有標行動とポライトネス効果	348
8.3 「謝罪発話文と応答発話文」における日韓母語話者の基本状態とポライトネス効果	352
8.3.1 負担度が軽い場合の「謝罪発話文と応答発話文」における日韓母語話者の有標行動とポライトネス効果	353
8.3.1 負担度が重い場合の「謝罪発話文と応答発話文」における日韓母語話者の有標行動とポライトネス効果	355
8.4 ディスコース・ポライトネス理論の観点からの考察のまとめ	357

第9章 おわりに

9.1 結論	361
9.2 ポライトネスの研究への示唆	371
9.3 外国語教育の観点からの示唆	372
9.4 「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」に関する総合的考察	374
9.5 今後の課題	377
9.5.1 理論的な枠組みに関する今後の課題	377
9.5.2 その他の今後の課題	378

図表一覧

【表一覧】

表 2-1	用語の定義(辞典の比較を通して)	5
表 3-1	会話データ収集における条件統制	75
表 3-2	負担度が軽い謝罪場面のロールカードの内容(日本語、韓国語)	77
表 3-3	負担度が重い謝罪場面のロールカードの内容(日本語、韓国語)	78
表 3-4	日韓の女性母語話者の「申し訳なさ」の認識度の調査内容(日本語、韓国語)	79
表 3-5	日本語女性と韓国語女性の「申し訳なさ」の認識度の調査結果(平均と標準偏差)	81
表 3-6	日本語男性と韓国語男性の「申し訳なさ」の認識度の調査結果(平均と標準偏差)	81
表 3-7	BTSJ と BTSK の記号凡例	91
表 4-1	日本語男性母語話者の会話データの協力者に関する基本情報	95
表 4-2	日本語女性母語話者の会話データの協力者に関する基本情報	97
表 4-3	韓国語男性母語話者の会話データの協力者に関する基本情報	98
表 4-4	韓国語女性母語話者の会話データの協力者に関する基本情報	99
表 4-5	日本語母語話者と韓国語母語話者の会話時間	101
表 4-6	日本語母語話者と韓国語母語話者の発話文数	102
表 4-7	負担度が重い場合の日韓母語話者のフォローアップ・アンケート調査結果	103
表 4-8	負担度が軽い場合の日韓母語話者のフォローアップ・アンケート調査結果	104
表 5-1	日韓母語話者の「謝罪談話」における評定者間信頼性係数	112
表 5-2	日韓母語話者における負担度が軽い場合の謝罪談話を構成する各談話の抽出結果	112
表 5-3	負担度が軽い場合の日韓母語話者における謝罪談話の展開の類型	113
表 5-4	日韓母語話者における負担度が重い場合の謝罪談話を構成する各談話の抽出結果	117
表 5-5	負担度が重い場合の日韓母語話者における謝罪談話の展開の類型(受け入れる場合)	118
表 5-6	負担度が重い場合の日韓母語話者における謝罪談話の展開の類型(受け入れない場合)	122
表 5-7	負担度が軽い場合の日本語男性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開	126
表 5-8	負担度が軽い場合の日本語女性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開	128

表 5-9 負担度が軽い場合の韓国語男性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開	134
表 5-10 負担度が軽い場合の韓国語女性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開	136
表 5-11 負担度が重い場合の日本語男性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開	143
表 5-12 負担度が重い場合の日本語女性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開	146
表 5-13 負担度が重い場合の韓国語男性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開	159
表 5-14 負担度が重い場合の韓国語女性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開	161
表 6-1 謝罪関連発話文の分類と定義	185
表 6-2 応答関連発話文の分類と定義	190
表 6-3 日韓母語話者の「謝罪発話文」と「謝罪関連発話文」における評定者間信頼性係数	194
表 6-4 日韓母語話者の「応答関連発話文」における評定者間信頼性係数	194
表 6-5 負担度が軽い場合の謝罪行動を構成する発話文の頻度と割合	201
表 6-6 負担度が重い場合の謝罪行動を構成する発話文の頻度と割合	205
表 6-7 日本語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の頻度と割合(負担度が軽い場合)	210
表 6-8 韓国語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の頻度と割合(負担度が軽い場合)	220
表 6-9 日本語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の頻度と割合(負担度が重い場合)	235
表 6-10 韓国語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の頻度と割合(負担度が重い場合)	255
表 7-1 謝罪発話文を構成する意味公式の分類	280
表 7-2 応答発話文を構成する意味公式の分類	281
表 7-3 日韓母語話者の「謝罪発話文」における評定者間信頼係数	282
表 7-4 日韓母語話者の「応答発話文」における評定者間信頼係数	282
表 7-5 負担度が軽い場合の日韓母語話者の「謝罪発話文」の頻度と割合	287
表 7-6 負担度が軽い場合の日韓母語話者の「応答発話文」の頻度と割合	289
表 7-7 負担度が重い場合の日韓母語話者の「謝罪発話文」の頻度と割合	291
表 7-8 負担度が重い場合の日韓母語話者の「応答発話文」の頻度と割合	292
表 7-9 負担度が軽い場合の日本語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の頻度と割合	295
表 7-10 負担度が軽い場合の韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の頻度と割合	302
表 7-11 負担度が重い場合の日本語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の頻度と割合	310
表 7-12 負担度が重い場合の韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の頻度と割合	317

【図一覧】

図 2-1 フェイス侵害度の見積もり公式(Brown and Levinson 1987)	38
図 2-2 ストラテジーの選択を決定する状況	39
図 2-3 「見積もり差 (D e 値)」、「行動の適切性」、「ポライトネス効果」	46
図 5-1 日韓母語話者における負担度が軽い場合の謝罪談話を構成する各談話の割合	113
図 5-2 負担度が軽い場合の日韓母語話者における「謝罪談話」展開の種類の割合	115
図 5-3 日韓母語話者における負担度が重い場合の謝罪談話を構成する各談話の割合	117
図 5-4 負担度が重い場合の日韓母語話者における「謝罪談話」展開の種類の割合 (受け入れる場合)	120
図 5-4 負担度が重い場合の日韓母語話者における「謝罪談話」展開の種類の割合 (受け入れない場合)	123
図 6-1 謝罪行動を構成する発話文の割合の比較(負担度が軽い場合)	195
図 6-2 謝罪行動を構成する発話文の割合の比較(負担度が重い場合)	195
図 6-3 日本語男性における謝罪行動を構成する発話文の割合の比較	198
図 6-4 日本語女性における謝罪行動を構成する発話文の割合の比較	198
図 6-5 韓国語男性における謝罪行動を構成する発話文の割合の比較	199
図 6-6 韓国語女性における謝罪行動を構成する発話文の割合の比較	199
図 6-7 日本語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の総計に占める 割合の比較(負担軽)	211
図 6-8 韓国語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の総計に占める 割合の比較(負担軽)	221
図 6-9 日本語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の総計に占める 割合の比較(負担重)	236
図 6-10 韓国語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の総計に占める 割合の比較(負担重)	256
図 7-1 「謝罪発話文」を構成する意味公式の割合の比較(負担度が軽い場合)	283
図 7-2 「謝罪発話文」を構成する意味公式の割合の比較(負担度が重い場合)	283
図 7-3 「応答発話文」を構成する意味公式の割合の比較(負担度が軽い場合)	285
図 7-4 「応答発話文」を構成する意味公式の割合の比較(負担度が重い場合)	285

第1章 はじめに

1.1 研究の背景

自分の過ちにより相手側に何らかの被害をもたらした場合、その行動を反省している、あるいは、後悔しているということを見せないと深刻な誤解や摩擦が起こることを私たちはしばしば経験したことがあるだろう。

筆者の経験から一例を紹介する。筆者は韓国で日韓の貿易会社で働いたことがあるが、仕事の関係で何か問題が起こった場合、メールや電話、ファクス等を通して、その問題を解決するための働きかけを常に行っていた。その際、日本の取引先は、謝罪しながら、非常に丁寧な言葉で何かを要求してきたりするが、その要求が受け入れられないことを示しても、同様の要求を、更に、丁寧な言葉遣いで要求してきたことがある。その際、筆者は自分達の主張や意図は変えずに謝罪し、表現のみ丁寧にするのが、不愉快であった。その反面、こちら側では、日本の取引先に比べ、あまり謝罪していなかったため、向こう側に失礼な印象を与えたかもしれない。どうしてこのような摩擦が生まれるだろうか。日本の謝罪行動と韓国の謝罪行動はどこが違うのか、また、謝罪行動に対してどのように反応するのがいいのか、謝罪はしていないが、相手側に利益になることを提案したり、プレゼントをあげたりすることも「謝罪」ではないのか等々。こういった疑問の中から、日韓母語話者による「謝罪」という言語行動について研究したいと思うようになった。

謝罪という言語行動は、相手との社会関係を調整する行為であるが、定型表現の使用、社会の規範や倫理観と密接な結びつきなど、様々な特徴がある。また、自分の過ちや人にかけての迷惑などについて詫げる行為は、ほぼすべての文化、社会に存在し、日常の対人行動や人間関係の維持において機能している(熊谷、1993)。謝罪は、相手との間で生じた問題や摩擦を解決し、人間関係を修復するという目的を達成するための行為であるので、謝る側と謝られる側との相互作用のプロセスを通じて実現されるものとして捉えることが必要である。しかし、これまでの謝罪研究においては、謝る側に焦点を置いた研究が殆どであり、謝罪のやりとりを研究対象にしている研究は数少ない。中道・土井(1993)によると、「謝罪」の方略の基本構造の中で、謝罪の談話においては、談話の収束部分が重要で、一般に談話を収束させる決定権は優位の側が持つので、謝罪の場合は、相手方が謝罪を受け入れる意志を表示してくれなければ、収束に入ることは出来ないのが原則であると述べている。更に、外国語でコミュニケーションをする場合には、発音や語彙、文法などのいわゆる言語学的知識に加えて、その言語におけるものの考え方や相互作用のルールを知っていることが重要である。そうでないと、「ことば」は正しく使っていても思わぬ誤解や摩擦が生じたりする(中田、1989)。言語行動による摩擦や誤解などが起こりやすい異文化間コミュニケ

ーションの場では言語におけるものの考え方や相互作用のルールを知るのが更に重要だと考えられる。

謝罪という言語行動のやりとりは、謝罪し受け入れるか、受け入れないかの単純な問題ではなく、謝罪が受け入れられるように働きかける謝罪する側と謝罪される側の相互作用の問題、謝罪が受け入れられない場合の謝罪する側と謝罪される側の相互作用の問題、相互作用で表れる謝罪する側と謝罪される側の関係の問題、自分の過ちにより人に迷惑をかけることになった状況での対人配慮の問題、自分と相手のフェイスに関する侵害や配慮の問題等、様々なことを考慮しながら行わなければならない複雑な言語行動である。このように様々な問題が絡み合う謝罪という言語行動は、一発話文レベルだけでは正確に分析できないと考えられる。そこで、本研究では、実際にやりとりされた会話データを分析し考察を行う。

1.2 研究目的

本研究では、「謝罪するー反応する」という言語行動に注目し、そのやりとりの中で見られる日本語母語話者と韓国語母語話者の相違点や類似点を明らかにする。それによって、日韓母語話者の謝罪という言語行動の相互作用における対人配慮行動のメカニズムを探ることを主な目的とする。

また、これまでの謝罪研究においては、「性別差」や「負担度の差」を同時に研究したものはなく、更に、これらを相互作用の観点から研究したものはないと言っても過言ではない。本研究は、「謝罪するー反応する」という言語行動をより多角的に考察するため、「性別差」、「謝罪内容の負担度」の要因を条件統制し、日韓比較を行う。

続いて、これまでの謝罪研究は「謝罪定型表現」に関する研究や一発話文レベルでの研究がほとんどであった。しかし、本研究では、謝罪行動の相互作用をグローバルな観点からローカルな観点まで総合的に分析・考察するために、一発話文レベルの分析に留まらず、より大きな発話のまとまりである談話レベルや発話文レベル、双方を分析し考察する。

最後に、「謝罪するー反応する」という言語行動を、Brown and Levinson(1987)「ポライトネス理論」と宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008)と Usami(2002)の「ディスコース・ポライトネス理論 (Discourse Politeness theory)」¹を理論的枠組みにして考察する。円滑な人間関係の維持のための対人配慮行動であるポライトネスを、相互作用の観点からの謝罪行動に取り入れることにより、日本と韓国という異なる二つの文化や社会価値観などの相違点と類似点がより明確に見えてくると考えられる。

¹ Brown and Levinson(1987)「ポライトネス理論」と宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008)と Usami(2002)の「ディスコース・ポライトネス理論 (Discourse Politeness theory)」は 2.4.4 と 2.4.5 を参照されたい。

1.3 本研究の構成

本研究は9章で構成されている。

第1章では、「謝罪するー反応する」という言語行動を研究することになった背景と目的について言及する。

第2章では、「謝罪」についての定義を概観した上で、本研究で用いる関連用語の定義を行ない、謝罪行動を発話行為理論の観点から論じる。そして、謝罪に関する先行研究を概観した上で、批判的な観点から検討し、謝罪に対する応答と関連する言語行動について検討する。また、理論的枠組みになるポライトネスの理論について概観し、本研究で用いる「談話」における先行研究を概観する。続いて、会話の研究におけるアプローチを概観した上で、本研究で用いる研究方法である「総合的会話分析」について説明し、ロールプレイ調査方法に関する先行研究を概観する。最後に、日本語と韓国語における従来の文字化システムについて述べる。

第3章では、本研究の研究課題と研究方法の詳細を説明する。まず、本研究の会話データ収集における条件統制、収録の手順、ロールプレイ場面設定、ロールプレイ場面における負担度の差の認定結果について説明する。次に、本研究で用いる文字化システムである「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」²について述べる。さらに、文字化と分析項目の分析の信頼性を確認する手法(CohenのKappa(κ))について説明する。

第4章では、会話データの基本情報について述べる。まず、会話データの妥当性について説明し、協力者と会話時間、発話文に関する基本情報を述べる。また、会話の条件統制に関するフォローアップ・アンケート調査の結果を説明する。

第5章では、「謝罪会話」の中で、謝罪行動のやりとりを含むより大きなレベルの意味的なまとまりである「謝罪談話」を取り上げ、その全体像を解明することを試みる。

負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面の日韓母語話者の謝罪談話を構成する各談話を抽出し、謝罪談話の構造の類似点と相違点を全体的に比較しながら、考察を行う。次に、各談話がどのような展開を見せているのかを分析した後、会話例を見ながら相互作用の観点から見られる具体的な特徴を探る。さらに、謝罪談話の展開から見られる対人配慮行動をポライトネス理論から考察する。

第6章では、「謝罪談話」の中で、「謝罪するー反応する」という言語行動に関連したやりとりである「謝罪行動」のみ取り上げ、発話レベルでそのプロセスを分析し考察する。

負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面の日韓母語話者の謝罪行動のやりとりを発話文レベルで分析し考察を行う。まず、謝罪行動のプロセスの類似点や相違点等の特徴を全体的に比較しながら分析し考察を行い、分析結果から見られる日本社会と韓国社会の対人コミュニケーションの特徴を相互作用の観点から考察を試みる。次に、実際の会話例を通して謝罪する側と謝罪される側がどういう相互作用を行っているかを分析し具体的な

² 詳細は3.2.3.1を参照されたい。

特徴を探る。さらに、謝罪行動の特徴から見られる対人配慮行動をポライトネス理論から考察する。

第7章では、謝罪談話内において謝罪する側の「謝罪定型表現」が用いられた発話(謝罪発話文)やその直後に来る謝罪される側の応答(応答発話文)を中心に、「謝罪行動」という発話行為レベルの相互作用を分析し考察を行う。

負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面の日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」を取り上げる。まず、「謝罪発話文と応答発話文」の類似点や相違点等の特徴を全体的に分析し考察を行う。次に、実際の会話例を通して謝罪する側と謝罪される側がどのような相互作用を行っているかを分析し考察を行う。さらに、「謝罪発話文と応答発話文」の特徴から見られる対人配慮行動をポライトネス理論から考察する。

第8章では、5章、6章、7章の分析結果を「ディスコース・ポライトネス理論」の観点から総合的に考察する。

第9章では、各章における分析結果をまとめる。さらに、ポライトネスの研究や外国語教育に示唆できる点を考察した上で、今後の課題について述べる。

第2章 先行研究

本章では、まず、本研究で用いる主な用語の定義を行なった後、発話内行為としての「謝罪」を概観する。次に、日本語と韓国語の謝罪研究に関する先行研究を概観し、謝罪に対する応答と関わりがある言語行動について論じる。また、理論的枠組みになるポライトネス理論と本研究で捉える談話の概念について述べる。最後に、会話の分析におけるアプローチを概観した上で、本研究で用いる研究アプローチやについて述べる。

2.1 本研究における「謝罪すること」について

本節では「謝罪」についての定義を概観した上で、本研究で用いる関連用語の定義を行ない、発話行為理論の観点から論じる。

2.1.1 「謝罪すること」と関連用語の定義

相手に過ちを犯して許しを乞う言語行為を、日本語においては、謝罪、詫び、謝り、陳謝、深謝等の多様な用語で用いており、その定義は、辞典により若干異なっている。以下の表2-1で、その定義をまとめた。

表2-1 用語の定義(辞典の比較を通して)

金沢庄三郎(1973) 広辞林 三省堂編修所(第5版)	
謝る	: ①間違いを詫びる・許しを願う ②閉口して断わる・降参する。
謝り	: 謝ること・詫びること。
詫び	: 謝罪する、謝る。
謝する	: いとまごいをして、その場を立ち去る、詫びる・謝る、礼をいう、ことわる。
謝罪	: 罪をわびること、詫び。
陳謝	: 訳をいって謝ること。
深謝	: 深く謝ること、深く感謝すること、丁寧に詫びること。
西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫(2000) 岩波国語辞典 岩波書店(第6版)	
謝る	: ①悪かったと思ってわびる。 ②閉口する・閉口して断わる。
謝する	: ①そのことに対してお礼をいう。②謝る・詫びる。③断わる・謝絶する。
詫びる	: 丁寧に(心を込めて)わびる。詫び: 悪かったとあやまること。
謝罪	: 罪やあやまちを詫びること。
陳謝	: 訳を言って謝ること。
深謝	: ①深く感謝すること。 ②ひたすら詫びること。

林四郎・野元菊雄・南不二男・国松昭(2001) 例解新国語辞典 三省堂(第6版)
<p>謝る : 自分が悪かったことを認めて、許してくれるように相手に頼む。</p> <p>詫びる : 自分のしてしまった間違いや失敗などを許してくれるように相手に頼む。</p> <p>謝罪 : 人に迷惑や損害をかけたことに対して、申し訳ないという気持ちをあらわすこと。</p> <p>陳謝 : 公式に謝ること。</p> <p>深謝 : ①相手の好意や親切などに対して、深く感謝すること。 ②自分がしたあやまちなどを深く詫びること。</p>
柴田武・山田進 (2002) 類語大辞典 講談社
<p>謝る : 悪かったと思う気持ちを相手に言葉であらわす。</p> <p>謝する : 「謝る」よりも謝り方が単純な感じがする。</p> <p>詫びる : 申し訳なかったと謝る。</p> <p>謝罪 : 罪を認めて謝ること。「謝る」よりも、事柄が重大であり謝り方も大げさな感じがする。</p> <p>陳謝 : 理由を述べて謝ること。</p> <p>深謝 : 心から謝ること。</p>

表2-1をみると、「謝る」は、「間違いを詫びる」、「悪かったと思って詫びる」という定義もあるが、「閉口して断る」の定義もあり、「謝する」は、「謝る、詫びる」の定義と、「礼をいう、ことわる」の意味も持っている。「詫びる」は、「丁寧に」、「心を込めて」の意味が含まれており、「陳謝」は、「訳、理由」が強調され、「深謝」は、「感謝」の意味までも含まれる。「謝罪」は、「罪をわびること、罪やあやまちを詫びること、人に迷惑や損害をかけたことに対して申し訳ないという気持ちをあらわすこと、罪を認めて謝ること」と定義され、本研究で考えている概念の定義と一番関わりがあり、更に、先行研究においても「謝罪」という用語が最も幅広く用いられているため、本研究では、「謝罪」という用語を用いて研究を行うこととする。

先行研究の中で「謝罪」の定義を行ったものは、熊谷(1993)、大谷(1998)、近藤(2002)、彭国躍(2005)などがある。まず、熊谷(1993)は、謝罪を、話し手のあやまちや相手への被害などへの責任を認め、許しを乞い、それによって相手との人間関係における均衡を回復する行為であると定義している。また、大谷(1998)によると、謝罪は、謝罪者が被謝罪者の Negative Face を脅かしたことを認識し、それが謝罪者にとって不本意であり、何らかの方法でそのFTAを軽減したいという気持ちを伝える行為であるため、被謝罪者の Negative Face を守ろうとする Negative Politeness strategy となるという。しかし、同時に謝罪者が自らの非を認めるわけであるので、謝罪者にとっては、良く思われたいと思う Positive Face を自ら脅かす行為でもある³と述べている。

更に、近藤(2002)は、Barnlund and Yoshioka(1990)、Kondo(1997)及び Sugimoto(1998)の「謝

³ 大谷(1998)の謝罪に関する定義の概念は、2.4.4を参照。

罪」の共通概念をまとめ、謝罪を、offence⁴を犯してしまった為、その行為の責任を認め、相手との（社会的）関係を維持または再構築していくためにとる修復作業であると定義づけている。一方、彭国躍(2005)は、過去の行為への謝罪を、相手に不利益をもたらす命題行為の発生により人間関係が壊れた、または、壊れる可能性が生じたことについて修復を施す作業であると定義し、未来の行為への謝罪を、相手に不利益をもたらす命題行為が起こる前に、それが起こっても人間関係が壊れないように事前に補強する作業であると述べている。これらの定義から考えると、謝罪は、謝罪する側により壊れた人間関係を回復する言語行動であると言える。

本研究では、主に、熊谷(1993)に従い、ここでいう「回復する」ということは、彭国躍(2005)の謝罪の定義のように、未来の行為への謝罪を含めて考えることにする。

先行研究を参考し、本研究で用いる「謝罪」という言語行為の定義を行う。

「謝罪」とは、話し手のあやまちや相手への被害などへの責任を認め、許しを乞い、それによって相手との人間関係における均衡を回復する言語行為である。

この定義には「話し手」、「相手」、「あやまちや相手への被害」といった「謝罪行為」を構成する要素が示されているが、本研究では、これらを「謝罪する側」、「謝罪される側」、「謝罪内容」という述語を用いて説明する。

- ・ 謝罪する側 : あやまちを犯したり相手に被害を与え、それに対する謝りの意を示す側
- ・ 謝罪される側 : 謝罪する側が謝りの意を示す相手
- ・ 謝罪内容 : 謝罪する側は相手に謝る内容

また、分析のために、「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」という用語も用いるが、その定義は、各々の章で述べる⁵。

2.1.2 発語内行為としての「謝罪」

Austin(1962 / 坂本訳 1978 : 11-12)は、私たちが何かを口に出して言うことは、当の行為を実際に行うことになり、それらを行為遂行文(performative sentence)ないし、行為遂行的発言(performative utterance)、あるいは、簡単に「遂行文」ないし「遂行的発言」(performative)と呼ぶことを提案した。つまり、私たちが何かを言う(陳述する)ためだけにことばを使うのではなく、何かを行う(行為を遂行する)ためにことばを用いるのであると確信し、「行為遂行の仮説(performative hypothesis)」を立てた。そして、この確信こそが、発語内行為

⁴ 「誰かが非礼であったり、尊敬する態度を欠いたために生じる憤りや傷づいた気持ち、或いは不愉快な思い」を指す。

⁵ これらの定義は、会話例を見せながら説明しているため、各章ごとに定義を示すことが理解しやすいと判断される。

(illocutionary acts)の理論を導いたのである。しかし、Blakemore(1992 / 武内・山崎訳 1994 : 136)も指摘するように、遂行発話を非遂行発話から区別する有効な基準を設けるのが極端に困難であり、実際に Austin は最終的にこの区別を放棄し、すべての発話が行為の遂行であるとして扱っていた。

この理論は、ことばを発するときには私たちはどのような行為をいかにして行うのか、そしてその行為はどのように「成功」もしくは「失敗」することになるのかを明らかにしようとするものであるが、このような主張は、数多くの批判を受けることになる(Thomas 1995 / 田中他訳 1998 : 34-35)。しかし、Thomas(1995)は、Austin の「行為遂行の仮説」について、ことばは世界について何かを述べるためだけに用いられるのではなく、何らかの行為、世界にながしかの影響を及ぼしたり、世界を何らかの点で変えたりするような行為を遂行するためにことばを用いることもあるという洞察の影響は、人々の言語観に革命をもたらし、ただちに言語研究の分野としての語用論の発展をもたらしたと評価している。

Austin の指導を受けた Searle(1969 / 坂本・土屋訳 1986 : 26-27)は、「一つの言語を使用するということは、規則によって支配された行動形態に関与すること」という仮説を立て、言語を使用することは言語行為を遂行することであり、それらの行為が、一般に言語の要素の使用のための一定の規則によって可能となり、その規則に合致するように遂行されるという形式になると説明している。

Yule(1996 / 高司訳 2000:75-76)は、いかなる発話状況においても、発話を産出することによって遂行される行為は、三つの次元に分類されるとしている。第一の次元は「発語行為(locutionary act)」で、これは発話の基本的行為、有意味の言語表現を産出することである。第二の次元、すなわち、「発語内行為(illocutionary act)」は、発話のもつ伝達力を媒介にして遂行される。「主張」、「勧め」、「説明」など様々な伝達目的を遂行することは、発話のもつ「発語内的力(illocutionary force)」と称される。第三の次元、すなわち、「発語媒介行為(perlocutionary act)」は、その場の状況を読みつつ自分の意図する効力を聞き手が認識できるものと想定した上でのこと、つまり、「発語内行為」が聞き手の行動、思考、信念などに及ぼす結果(effect)であり、これは「発語媒介効力(perlocutionary effect)とよばれる。この中でも最も活発に議論されているのは発語内的力であり、「発話行為」という術語は狭義には発語内的力のことで説明している。

更に、Searle(1969)は、「発語内行為」を「陳述表示型(representatives)」、「行為指導型(directives)」、「行為拘束型(commissives)」、「態度表明型(expressives)」、「宣告命名型(declarations)」の5つの大きな部類に分類している⁶。

⁶「陳述表示型(representatives)」とは、話し手を当該の何かに拘束することで、話し手が自分の言葉を世界に適合させ、彼の信念を具体化する発話のことである。誓う、示唆する、仮定する等がこれに当たる。「行為指導型(directives)」とは、話し手が聞き手に何かをさせようとするあらゆる試みのことで、この部類の中で話し手は世界が彼の言葉を適合させるような未来の状況を達成することを望んでいるのであり、したがってこの部類の中には、ただ単

そして、「約束」という「発語内行為」を取り上げ、その行為の成立条件である「命題条件 (propositional condition)」、「事前条件 (preparatory condition)」、「誠実性条件 (sincerity condition)」、「本質条件 (essential condition)」を導き出している。尚、8つの発話行為、「依頼 (requesting)」、「断定 (asserting)」、「質問 (questioning)」、「感謝 (thanking)」、「助言 (advising)」、「警告 (warning)」、「挨拶 (greeting)」、「祝福 (congratulating)」について規則群の例を提案している(Thomas 1995 / 田中他訳 1998 : 101-102)。

しかし、Thomas(1995) は、Searle の「発語内行為の規則」には4つの相互に関連する問題が生じるという。

- ・ 様々な発語内行為を、いつでも十分に区別できるわけではないこと⁷。
- ・ 規則の不備な点を全て埋めようとすると、どうしてもないほど複雑で特殊な条件の集合を付け加えることになる。
- ・ ある発語内行為の最も普通の用法を排除し、変則的な用法を許すことがある。
- ・ 1つの発語内行為動詞が、一定範囲の、やや異なる複数の現象をカバーすることがあるし、複数の発語内行為の内容が「重複する」こともあるが、こうした事実が説明できない。

更に、Thomas(1995) は、Searle の規則は、複数の発話行為、例えば、「尋ねる(ask)」、「依頼する(request)」、「命じる(order)」、「命令する(command)」等は、一定の鍵となる特徴を共有していることをどうやって区別するかについては説明されていないことを指摘している。更に、Searle は、発話行為の規則を記述していると主張していながら、実際にやっていることは発話行為動詞の意味の記述にすぎないという重大な問題点があると述べている。しかし、発話行為を分析する際に、その発話がなされた社会の慣習を考慮する必要があると指摘したことは、Searle の重大な貢献であると評価している。

以下では、Searle の「発語内行為の規則」に基づき、Thomas (1995 / 田中他訳 1998) と西山(1983)、山梨(1986)、熊取谷(1988、1992)、中田(1989)、彭国躍(2005)を参考にし、「謝罪」における発話行為の諸条件について検討する。

に「命じる」や「要求する」だけでなく、より微妙な「丁寧に求める」等も含まれる。「行為拘束型(commisives)」とは、Austin からそのまま引き継がれた範疇で、世界を言葉に適合するよう変えることに関わる行為指導型と似ているが、ここでは話し手自身を行為に拘束することが重要なのであり、必然的に意図を含むことになる。「態度表明型(expressives)」は、この部類の発語内の意向は、命題内容で具体的に述べられた事態に関する誠実条件で指定された心理的状态を表現することである。具体例として、感謝する、お詫びを言う、嘆き悲しむ等が挙げられる。「宣告命名型(declarations)」は、それを発話することにおいて世界を変化させる行為で構成されており、その中にはオースティンが当初、遂行文と考えていた遂行動詞の多くが含まれている(Malcolm 1997 / 吉村・貫井・鎌田訳 1999)。

⁷ Searle による条件が、発話行為動詞の中心的もしくは最も典型的な用法のみをカバーするように設定されていることもある程度原因がある。

「謝罪」という発話行為の適切性条件は、以下の通りである。

Searle(1969 / 坂本・土屋訳 1986)より

命題内容条件	Sは、Sの過去の行為Aに対する遺憾の意を表現する。
準備 ⁸ 条件	Sは、Aが、Hの最大の利益にはならないと信じている。
誠実条件	Sは行為Aを後悔している。
本質条件	行為Aに対する謝罪と見なされる。

西山(1983)より

命題内容条件	命題内容Pは話し手Sの過去に行った行為について述べたものである。
準備条件	SはPを聞き手Hにとっていやなことであると見なしている。
誠実条件	Pの故にSはHに対して申し訳ないという気持ちを有している。
本質条件	SはPについて申し訳ないという気持ちをHに述べている。

山梨(1986)より

命題内容条件	PはXによる過去の行為
準備条件	Xは自分の行為がYにマイナスであると信じている。
誠実条件	Xは自分の行為を悔いている。
本質条件	Xは自分の行為に対するその気持ちの表出

熊取谷(1988)より

命題内容条件	話者の(通常過去の)行為或は話者の行為がもたらす(した)現実状況を表す。
準備 ⁹ 条件	(1)発話者は当該行為或は状況が聞き手にとって気分を害するものと見なしている。 (2)発話者は当該行為或は状況に対して責任を負うことを認める。
誠実条件	発話者は当該行為／状況に対して申し訳ないという感情や後悔の念を持っている。
本質条件	当該行為或は状況が生じたことに対する発話者の誠実条件で示された心的態度の表明。

上記のまとめから考えると、「謝罪」という発話行為の適切性条件は、熊取谷(1988)以外は、命題内容条件を過去の行為として捉えたものが多く、準備条件は、その行為が聞き手Hにマイナス(害する、利益にはならない、いやなこと、害する)になり、誠実条件では、話し手Sは、これらを後悔しており、この気持ちを、本質条件で表出することであると考える

⁸ 「事前条件」と、訳されていたが、一般的に多く用いる「準備条件」と統一した。

⁹ 「予備条件」と、表していたが、一般的に多く用いる「準備条件」と統一した。

れる。しかし、Vanderveken(1990 / 久保他訳 1997:115)が指摘するように、話し手が、一つの発語内行為の遂行が誠実なものとなるのは、その行為を行う場合に、その行為の遂行は表現する心的状態を持つ場合であり、そのような心的状態を持たない場合は不誠実な行為となるといい、従って、誠実条件は発語内効力に内在する重要な特徴であると述べている。

2.2 「謝罪」に関する先行研究

「謝罪」という言語行動は、微妙で複雑な人間関係の難しさを反映しており、更に、挨拶表現のような「定型表現」が用いられている等、他の言語行動に比べ、独特な特徴を持っている言語行動であると考えられる。三宅(2011:35)は、Coulmas(1981)の“indebtedness”という概念を「借り」と訳し説明しているが、“indebtedness”とは、誰かのおかげで自分が得たものを何らかの形で返さなければならないという気持ちであり、恩や借りを感ずると返済しなければならない、もしくは返済したいという気持ちが伴うと述べている。「謝罪」や「感謝」という言語行動は、正に、“indebtedness”の気持ちから現れるものだと考えられる。さらに、三宅(1993)は、謝罪研究の中で、山梨(1986)、中田(1989)、熊取谷(1992)の研究で用いられた恩、好意、負担、利益・不利益、返済といった概念は、この“indebtedness”と深い関連があると説明している。

謝罪は、1980年代から主に英語圏を中心に活発な研究が行われ、多数の研究成果が報告されている(Cohen and Olshtain(1981)、Owen(1983)、Olshtain and Cohen (1983)、Blum-Kulka and Olshtain(1984)、Garcia(1989)、Olshtain(1989)、Blum-Kulka and House and Kaser,eds.(1989)、Holme(1990)など)。更に、1990年代に入ってから、日本語と英語の対照研究も行われ、謝罪に関する異文化間の特徴を取り上げるものも数多く現れた(Barnlund and Yoshioka(1990)、Tanaka(1991)、Kondo(1997)、Sugimoto(1998) など)。

英語圏の謝罪研究の中で、Holme(1990)は、Olshtain and Cohen(1983)をもとに、謝罪の方策リストを作成し、どのような組み合わせで、それらが用いられるかを記述し、Blum-Kulka and Olshtain(1984)と Garcia(1989)は、第二言語教育の観点で、学習者が目標言語で行った謝罪を母語話者のものと比較する研究を行い、特に、Blum-Kulka and Olshtain(1984)は、三種の英語の変種(米・英・豪)や、ドイツ語、ロシア語等、計8種の言語において非母語話者と母語話者による謝罪および依頼の行為を比較対照する大規模な研究プロジェクトを行い、学習者が目標言語で謝罪を行う際の困難点や習得すべき方策等を予測・指摘し、効果的なコミュニケーション能力を育成するために行うべき点は何かについての問いを示唆している。更に、学習者と母語話者の謝罪行動の比較をもとに、社会文化的な言語運用能力をはかる評価基準を開発する試みもある(Cohen and Olshtain(1981))。また、Blum-Kulka and House and Kaser,eds.(1989 : 289-294)は、「異文化間発話行為研究プロジェクト(Cross Cultural Speech Act Realization Project : CCSARP)におけるコーディング・マニュアル(The CCSARP coding manual)を立て、その中で、「謝罪」においては、主に、①発語内効力指示装置 (IFID :

Illocutionary Force Indicating Device¹⁰）、②責任の認知 (Taking on Responsibility)、③説明もしくは理由(Explanation or Account)、④埋め合わせの申し出(Offer of Repair)、⑤繰り返しをしない約束(Promise of Forbearance)の 5 つの謝罪方略を抜粋した。また、Blum-Kulka and Olshtain(1984)、Blum-Kulka and House and Kaser,eds.(1989)は、研究方法として用いた DCT に、被害者が言うであろうと思う「発話」を書いてもらう欄の後に聞き手の返答が入っているものも設けている。更に、Owen(1983)は、謝罪に対する応答方略として、受け入れ拒絶(acknowledge)、受け入れ(accept)、拒絶(reject)の 3 つを設定し、主に、英語の分析に基づいて研究を行った。これらの英語圏の謝罪研究を見ると、主に、「謝罪定型表現」と「謝罪方略」に関する研究がなされ、謝罪に対する応答方策の分析を試みた研究も若干行われていることがわかる。

次に、日本語と英語の対照研究の謝罪研究について見てみよう。Barnlund and Yoshioka(1990)は、純粋な謝罪には、①謝罪者が身体的・物理的・社会的、あるいは精神的に他人を傷つけたと気が付き、②その損失や傷に自分が間接的あるいは直接的に責任があると意識し、③さらに自覚をすることが自己の義務であると認識する必要があると述べ、offence を犯した場合の日米間の社会規範の違いを明らかにした。更に、Tanaka(1991)は、日本人とオーストラリア人(大学生各 10 名)の謝罪について調べ、日本人の回答者は、オーストラリア人よりも、家族の誰かが犯した過失について謝る傾向があり、社会的距離や相互の力関係の相手との関係が、オーストラリア人よりも日本人の謝罪行動に大きな影響を与えていると述べている。Sugimoto(1998)は、謝罪する立場、謝罪を要する事柄、謝罪の表し方に関して調査し、アメリカは配偶者や子供、ペットが行った offence に対して代わりに謝罪するが、日本では、家族、親戚、学校から職場関係の友人(同僚、部下)など、自分と関係のある一員が offence を犯した場合に対しても謝罪が求められると報告し、いくつかの事例で説明している。これらの日本語と英語の謝罪の対照研究は、日本語と英語の謝罪する意識、謝罪の仕方、謝罪対象などの相違点を明らかにすることを目的になされてきたと言える。ここまで、英語圏や日本語と英語の謝罪の対照研究を簡単に概観してみたが、謝罪研究は、謝罪定型表現、謝罪方略、謝罪行動に対する考察、文化による相違点、母語話者と非母語話者による相違点などを中心に行われてきたことがわかる。

大谷(2008b)は、日本語と英語の対照研究を中心に謝罪研究を概観しているが、謝罪研究を、1)謝罪の普遍的な特徴を明らかにしようとした研究(特定の言語を対照とはせず、謝罪の行為やストラテジーなどを概括することで、その普遍的な特徴を明らかにしようとする研究)、2)個別言語に焦点を当てた研究(ある特定の言語を対象とし、その言語の謝罪の行為特徴、表現、ストラテジー、談話構造、謝罪に影響を与える文脈上の変数などを明らかに

¹⁰ 発話内効力指示装置(IFID : Illocutionary Force Indicating Device)は、謝罪するときに「謝罪します」や「すみません」と言うなど、「その発話によってどのような行為がなされているかを明らかにする定型的で慣例化した表現」(Blum-Kulka and House and Kaser,eds.(1989 : 290)である。

しようとする研究)、3)二言語（もしくはそれ以上の言語）間の対照研究(二言語、もしくはそれ以上の言語間で謝罪を様々な角度から対照することで、それぞれの言語での謝罪の特徴をより明確にしようとする研究。また、それぞれの言語文化の価値観や規範との関係を明らかにしようとする研究)、4)謝罪の習得研究(言語学習者の謝罪発話や談話の特徴を明らかにすることで、学習者の母語と学習言語間の相違点、習得の困難点、指導方法などを明らかにしようとする研究)の、四つに分類している。さらに、これらの研究を概観した上で、今後の課題として、インタラクションレベルからの分析の必要性を強調している。

また、熊谷(1993)は、謝罪のどのような面に焦点があてられるかという点から、謝罪研究を、1)抽象的な発話行為としての謝罪の考察、2)謝罪に用いられる言語形式（定型表現）の研究、3)謝罪場面¹¹における具体的な謝罪行動の記述・分析の、三つに分類している。この分類の中で、日本語と日韓対照研究において多く研究されているのは、2)と3)であるが、日本語においては、1)の研究もなされてきた。以下では、日本語と韓国語と日韓対照における謝罪研究を概観する。

2.2.1 日本語における謝罪研究

日本語の謝罪研究は、1)抽象的な発話行為としての謝罪の考察(熊取谷(1988・1992)、中田(1989)等)、2)謝罪に用いられる言語形式（定型表現）の研究(佐久間(1983)、金田一(1987)、森山(1999)、三宅(1993、2011)、大谷(2001、2002)、小野(2001)、山本(2004)、陶琳(2005)、井出(2005)、谷口(2010)等)、3)謝罪場面における具体的な謝罪行動の記述・分析の研究(池田(1993)、堀江・インカピロム・プリヤ(1993)、杉本(1997)、横溝環(2000)、松原(2001)、近藤(2002)、大谷(1998、2003、2008a、2013)、김연희(2004)、佐竹(2005)、ボイクマン・宇佐美(2005)、クモハマドナビル(2006)、鄭加偵(2006)、郭碧蘭(2012、2013)等)が行われてきた。この分類の中で、特に、3)の研究が多くなされており、1980年代の後半から2010年代の半ばにかけて様々な謝罪研究が行われてきた。また、日本では、これらの分類以外にも、日本文化や日本社会と結び付け謝罪を総合的に考察する研究(大淵(2010)、佐藤(2011)、榎本(2012)等)、謝罪の意識や心的態度に関する研究(鄭・上原(2005)、吉成(2006)等)、感謝における謝罪表現の意識を調べた研究や依頼の前置きとしての謝罪の機能等の研究(高田(1996)、頼美麗(2005)、ロング(2004、2005)、北綾子(2003)等)等、多様な分野から謝罪研究が活発に行われてきた。以下では、熊谷(1993)の分類の順に従い、日本語における謝罪研究をまとめる。

2.2.1.1 抽象的な発話行為としての謝罪の考察

日本では、熊取谷を中心に、抽象的な発話行為理論と謝罪を関係付け、考察した研究が行われている。熊取谷(1988)は、日本語の慣用的詫び表現及び感謝表現の多くが、発話行為

¹¹ 熊谷(1993)では、3)実際の場面における具体的な謝罪行動の記述・分析と分類されているが、「実際の場面」という用語は、自然会話等の実際の会話からの謝罪行動の記述・分析であると捉われる恐れがあるため、本研究では、研究者が研究目的に応じて収集した(DCT・ドラマ・ロールプレイ等)場面という意味で「謝罪場面」と記す。

理論に基づく適切性条件及び発語媒介意図と関係付けられるということを一明らかにし、詫び及び感謝表現が提起する問題には、隣接ペア、補修行動、丁寧行動などを含む談話行動の視点からの分析を行う必要があることを指摘した。さらに、発話行為を「発語媒介意図⇒発語内行為⇒発語媒介効果」という連鎖のなかで捉えることが詫びの表現の特徴を理解する上で重要であると説明している。また、熊取谷(1992a)は、日英語における修復のための戦略として、「①詫びる、②再発しない旨の約束、③釈明：不快状況が生じた理由・状況説明、④償いの申し出」の四つがあることを述べ、更に、詫びの戦略を、「①詫び・詫びることに対する言及(遂行発話、詫びの必要性の表明、詫びる方法を知らない旨の表明、詫び受け入れの要請、詫びの申し出)、②不快状況が生る／じた旨の表明、③不快状況に対する心的態度表明、④不快状況に対する責任表明、⑤許しを乞う」の五つに分類した。さらに、熊取谷(1992b)では、修復作業に対する応答の方略を、受け入れと拒絶に分け、更に、受け入れを、①明示的な放免(不快状況の評価の下方修正¹²、許しの表明)、②非明示的な放免の二つに再分類し、日英語における修復作業の発話交換の基本的なプロセスの構造を説明している。一方、中田(1989)は、映画・テレビドラマなどの脚本から日英各々陳謝400件、感謝400件の用例を抽出し、Searle(1969)と山梨(1986)の適切性条件を1つの尺度として検討した。その結果、英語の陳謝は自分が相手にとってマイナスなことをしてしまった際にそれを悔いる気持ちを表明すること、感謝は相手が自分にプラスなことをしてくれた際に恩を感じる気持ちを表明すること、という図式にほぼあてはまると言い、一方、日本語の陳謝と感謝は、そのような形に加えて、各々がA)行為の主体は相手、B)話し手がありがたいとすまないという二つの心的態度を合わせ持つ、という点で共通点が見られたと報告している。

2.2.1.2 謝罪に用いられる言語形式(定型表現)の研究

日本語の「謝罪定型表現」は、感謝、呼びかけ等の機能を持つ表現としても用いられる。以下では、これらの研究を分類し、謝罪に用いられる言語形式を概観する。

1) 「感謝」と「詫び」に関する研究

佐久間(1983)は、6つのドラマ作品から感謝表現約70例、詫び表現約60例を抽出し、感謝と詫びの表現形式と話し手の心理との関係を調べた。その結果、「ごめんなさい」、「すみません」、「恐れいります」、「ありがとう」の言語表現に関する話し手の心理は、「許しを乞う」、「自責」、「恐縮」、「喜び」の気持ちが少しずつオーバーラップし、言語表現を選択していくと説明し、「ありがとうございます」は自己の「喜び」の表現(自己志向的)であるのに対し、「すみません」は相手に対する「恐縮の念」の表現(他人志向的)であると述べている。森山(1999)は、お礼とは聞き手からの利害の提供に伴う不均衡の修復で、お詫びとは聞き手へ損害を与えたことによる不均衡の修復であり、両者は対人関係の修復としてまとめ

¹² 不快状況の評価の下方修正は、更に、offenseの深刻さの軽減と修復作業の必要性の否定に分類した。

ることができるという。さらに、これらの関係修復的言語行動のプロセスは、「初期状態⇒利害を含む事態⇒関係修復(顕在化)(ありがとう、すみません)⇒応答(否定)(どういたしまして、いいえ)⇒回復状態」であると説明した上で、文化や親疎関係によって、不均衡状態の認定や処理の方略は違うが、普遍的であると指摘している。

そして、三宅(1993)は、詫び表現が、感謝の意味で使われる場合や感謝と詫びを同時に感じている場合のみならず、あいさつとして使われる場合もあることを明らかにした。また、三宅(2011)は、1991年に「感謝」と「謝罪」に関する質問紙調査を、日本語話者122名・イギリス英語話者101名・アメリカ英語話者49名を対象に行った。その結果、イギリス英語話者は、感謝心理のときは感謝表現を、謝罪心理のときに謝罪表現を用いており、基本的に心理と言語表現が一致していると述べている。しかし、日本語話者の場合、謝罪表現が感謝にも謝罪にも広く用いられ、謝罪心理のときには謝罪表現を使うが、感謝心理のときにも謝罪表現がかなり使われ、分散心理(感謝と謝罪が入り交った心理)のときにも謝罪表現が使われやすいと報告している。次に、井出(2005)は、日本語の「すみません」という表現は、「一発話一機能」を基本的原理とする発話行為理論でいうところの、「感謝」と「謝罪」両方の機能を持つ表現であると述べている。さらに、「すみません」の7つの機能として、「機能1：謝罪の意志の表明」、「機能2：恩恵・負債の意思表示」、「機能3：依頼の合図」、「機能4：やりとり開始の合図」、「機能5：やりとり終了の合図」、「機能6：了解の意思表示」、「機能7：儀礼的相互認識」をあげている。また、「すみません」は、参与者間の関係の不均衡を、その場その場で「修復する」明示的役割を果たす一方、社会的繋がりを保持しようとする人々が、慣習的に互いの相互依存関係を確認し「維持する」上で暗示的な役割も果たしていると述べている。

2) 謝罪に用いられる言語形式に関する研究

金田一(1987)は、補償のあいさつとして「アリガトウ」「ゴメンナサイ」「申シワケナイ」「スミマセン」「シツレイシマス」といった例をあげながら、補償の力と原行為の重さを考察した。その結果、日本人が出会いや別れなどで、補償のあいさつを頻繁に使うのは、人と人との関係を重視する文化であり、補償のあいさつを使うことでお互いの関係を確認し、秩序立てておいてからでない、話が始まらないような心理を持っているからである説明している。

大谷(2001)は、謝罪の慣用表現が実際の談話の中でどのような機能を果たすかを日本語の「すみません」、「ごめん」、英語の「I'm Sorry」、「Excuse me」に着目して対照、検討した。英語の謝罪慣用表現は直接的なマイナス行為を含意した上で、多くの場合、実際に聞き手に対する関係修復の方略として使用されるが、日本語の場合は、実際に聞き手に対するマイナス行為が起こったか否かよりも、その可能性があり得ることにまで配慮することが社会的な規範となっているため、より間接的なマイナス行為にまで謝罪慣用表現が用いられる傾向が強いと説明している。更に、大谷(2002)は、話し手の心理や場面認識の言語文化間

での差に着目し、その分析を通して日本語と英語の謝罪慣用表現の特徴について考察を行った結果、謝罪慣用表現の誘発要因として、英語の場合、「話し手の責任」、「話し手の後悔」¹³の心理的要因を、日本語の場合、「聞き手の迷惑」の心理的要因と「聞き手の地位」の対人的要因を挙げている。この結果より、日本人は全体的に聞き手への「迷惑」と聞き手への「負い目」をアメリカ人より高く評価する傾向があり、日本人には「迷惑」への強い意識が存在することがわかったと報告している。

一方、小野(2001)は、9つの感謝場面と4つの謝罪場面を設定し、感謝と詫びの表現を取り上げ、アンケート調査を行った結果、20代はウチ・親の関係の場合、上・同等の相手にはもっとも軽い謝罪表現である「ごめん」を用いることが多いが、与えた被害が大きいときには、ソト・下や、ウチ・親であってもより丁寧な「ごめんなさい」を多く用いており、ソト・上の相手に対しては、「すみません」系の使用が中心であると説明している。しかし、50代は20代と比べ、一ランク丁寧度の高い詫び表現を用いる傾向があり、すなわち、ウチ・親／ソト・下では、「ごめんなさい」、ウチ・同等（友人）には「すみません」、ソト・上には「申し訳ありません」の使用が多く認められたと述べている。

次に、山本(2004)は、話し手が聞き手との人間関係によってどのような謝罪表現を選択するかに焦点を当て、社会言語学的観点から日本人の言語行動を分析した。その結果、ウチ・ソト・ヨソによる分類から見ると、ソトの関係にある聞き手に謝罪する場面が一番多く、ウチの関係では「ごめんなさい」系、ソトの関係では「ごめんなさい」系に、次いで「すみません」系、ヨソの関係では「すみません」系の使用が一番多いことが明らかとなった。この結果から、ウチ・ソト・ヨソの関係だけでは、どんな謝罪表現を選択するかという決定はできないと説明している。

陶琳(2005)は、中日の謝罪表現は単に謝罪を表すだけでなく、人間関係を良好に保つ機能を持ち、会話を円滑に進める潤滑油の役割も持っていることから、「注意喚起」、「社交辞令」、「儀礼」など挨拶として謝罪表現が用いられる点は共通していると述べている。しかし、中国語の謝罪表現は、「申し訳ない」という強い感情・後悔の念の表明と見ることができ、が、「感謝」としての「すみません」が使用されることはなく、これは日本語の謝罪表現の特徴であると結論付けている。

2.2.1.3 謝罪場面における具体的な謝罪行動の記述・分析

以下では、謝罪する側のみ焦点をおいて研究されたものと、謝罪される側及び相互作用の観点から研究されたものを分類し概観する。

1) 謝罪する側のみ焦点をおいた研究

池田(1993)は、日本人の謝罪は、人間関係の潤滑油として相手との調和を保つことを基本

¹³ 調査した心理項目は、謝罪の要因になると考えられる「聞き手に対する迷惑さ」、「話し手の責任」、「話し手の後悔」、「聞き手に対する負い目」、「聞き手に対する気の毒」の5項目である。

的機能として想定できる人間関係重視型であり、アメリカ人の謝罪は、論理的に修復のための交渉をすすめ、問題となっている状況を解決していくことを重視する問題解決重視型であると述べている。一方、堀江・インカピロム・プリヤ(1993)は、タイ留学生は日本の謝ることばの機能について知識としては知っていると言えるが、実際のコミュニケーション上では、誤解や摩擦が起こっていると指摘されている。

次に、杉本(1997)は、謝り方に関する先行研究における問題点を整理し、これを踏まえて日本人とアメリカ人を対象に実証的研究を行った。まず、被害者の心情(「謝る」前・「謝らない」場合・「謝った」後)に関しては、多くの状況において、日本人のほうがアメリカ人より、被害者の「立腹度」を高めて予測していた。加害者が謝る前の状況においては、被害に対してではなく加害者に対してのみ、日本人の方が米国人より高く被害者の「立腹度」を予測しており、加害者が謝らなかった場合は、日本人の方がより一層事態を深刻に受け止め、さらに加害者が謝った場合でも、日本人は米国人ほど加害者の怒りがおさまるとは予測しなかったと述べられている。次に、加害者の反応の文化差の面から見ると、日本人は予想に反して「状況説明」を含んだ謝り方を好んで使用しており、「申しわけなさの連続表明」「申しわけなさの連続強調」などの表現を用いる傾向が強いことが観察された。

また、横溝環(2000)は、日本人の方が中国人よりも「お礼(謝罪)を言うべきだ」と考える度合いが高く、相手にお礼(謝罪)を期待したり、また、自らもお礼(謝罪)を言わなければならないと考える傾向が強いのにに対し、中国人は親密な関係であればあるほど「お礼(謝罪)」を言わない傾向があると報告している。松原(2001)は、えひめ丸事故¹⁴とタイヤ破裂事故¹⁵を題材にして、日米の謝罪行動を比較した結果、英語の *Apology* は主観的過失認定を前提とした謝罪行為と考えられ、事故責任の存在が明確ではなかったり、あるいは、たとえ自分側に責任があろうともそれを認めたくない場合には *Apology* は行われませんが、日本語の「謝罪」は、単に協調的人間関係構築を目的とした行為であり、事故責任の問題とは無関係に行われることが多いと説明している。

そして、近藤(2002)は、アメリカ人は抽象的事象には主に「説明」で、物理的事象には主に「修復」で対処していることがわかったと報告している。更に、理想的な謝罪のあり方は、アメリカ人においては誠意を持って相手との関係回復を願い、真実に基づいて説明を行うことにあり、日本人においては *Offence* を素直に認めることにあると説明している。大谷(2003)は、話し手が聞き手より恩恵を受けた場面で、日本語と英語とでは発話行為の選択がどのように異なり、また、その違いが話し手のどのような場面認識や心理に起因しているのか調べた。謝罪場面で日本語母語話者が聞き手に対する「負い目」を強く感じていることを考えると、日本語では聞き手からの「恩恵」よりも、聞き手に対して「迷惑」をかけたと感じることが「負い目」になり、その結果、たとえ実際には恩恵を受けていても感

¹⁴ アメリカ海軍の原子力潜水艦と日本の水産高校の実習船えひめ丸が激突、えひめ丸が沈没した事故。

¹⁵ タイヤ破裂事故をめぐるアメリカ企業であるフォード社と日系企業であるブリジストン・ファイアストーン社との事件。

謝よりも謝罪が好んで選択されると述べている。一方、英語では、聞き手の「迷惑 (Offensiveness)」に対する意識は低く、「恩恵(Benefit)」、「嬉しさ(Happiness)」の値が高く現われたと報告している。

김연희(2004)は、日本人の感謝と謝罪の言語行動を性別・年齢・親疎・上下・強度という変数を設けてアンケート調査を行い、分析結果を報告しているが、特に、感謝と謝罪の共通点を7つ挙げている。また、佐竹(2005)は、中国語母語話者の「謝罪」は IFID に始まり、理由へと続き、さらに問題解決として「ごちそうします」という埋め合わせの提案や「怒らないで」というなだめなど、関係修復のために積極的に働きかけることが好ましく、印象もよいが、日本語母語話者の「謝罪」で、一番大切なのは IFID であり、態度がきちんとしていれば IFID だけでも相手の怒りを鎮めることができるため、かえって理由を言うと言い訳に聞こえたり、「埋め合わせをする」と言ったりすると、不快な思いをさせることもあると考察している。クモハマトナビル(2006)は、日本とマレーシアで謝罪がどのようになされ、どのような点で違いがあるのかを探り、そうした違いをもたらす文化的背景を検討した。また、鄭加偵(2006)は、中国語話者は、関係を修復するとき、侵害の理由が求められるが、日本語話者は、謝罪言葉がなく理由だけと言うことは好まれない傾向にあるので、日本語話者は中国語話者の理由説明に対して、否定的なイメージを持ちやすいだろうと考察している。

2) 謝罪される側及び相互作用の観点から研究

大谷(1998)は、日本語における謝罪に対する返答を、攻撃的返答(被謝罪者が謝罪を受け入れず、逆に謝罪者の Face を脅かしたり、攻撃したりする返答)、中立的返答(被謝罪者が、謝罪することで謝罪者が自ら脅かした Positive face を修復してやる必要がないと考えた場合に見られる返答)、緩和的返答(被謝罪者が、謝罪による謝罪者自身の Face loss をできるだけ回復、緩和しようとする返答)の3つに分類し考察を行った。

ボイクマン・宇佐美(2005)は、友人に対する謝罪場面における、日本語母語話者と中国語母語話者のロールプレイ・データを基に、謝罪をする側の方策と謝罪を受ける側の方策について分析を試みた。分析の結果、中国語母語話者、日本語母語話者が友人間で謝罪という言語行動を行う際、話の進め方には以下のような傾向が見られたと説明している。

中国語母語話者： 謝罪を受ける側は、相手の face をそれほど考慮することなく、直接的な非難を行ない、相手の責任を追及する。追求を受けたと感じる謝罪者側は、その非難を自己弁護などによってかわしながら問題解決交渉を進める。

日本語母語話者： 謝罪を受ける側は、相手の face を尊重しつつ間接的な方法で非難を行なう。それを受けて謝罪する側は自分で自分の責任を認め、その上で問題解決交渉を行なう。

以上の考察から、謝罪する側が取る方策と、謝罪を受ける側の方策とは互いに密接な関

係を持っていると指摘している。

大谷(2008)は、物質的に被害(友人のパソコンを壊し、友人の課題提出に問題が起こる場面)を与えたロールプレイ場面を設定し、その中で行われる英語母語話者 1 組の謝罪談話を分析し、相互作用の観点から考察を行った。その結果、談話レベルで見れば、謝罪者は自分が相手に与えたダメージに対して責任を果たすことで謝罪を遂行し、定型的な謝罪発話が多用されなくても謝罪が受け入れられ得ることが明らかとなったと報告している。さらに、大谷(2013)は、同様のデータを用いて「謝罪談話」をより詳細に分類し、「パニックの下位談話」、「反省の下位談話」、「子供の頃のエピソードの下位談話」、「問題解決の下位談話」、「明示的な謝罪の下位談話」、「慰めの下位談話」、「ジョークの下位談話」の 8 つの下位談話を設けた。この分類に従って、定性的な分析を行い、「英語の謝罪は責任に基づく問題解決を重視した行為であり、問題解決が、謝罪者、被謝罪者の相互行為により重層的に遂行されてゆくことである」と結論付けているが、1 つの会話データからの結論であるため、一般化することには問題があると指摘している。

また、郭碧蘭(2012)は、台湾人と日本人の接触場面で、上記の大谷が設定した同様のロールプレイ場面を用いて研究を行った。謝り表現が現れる位置により「開始部」、「余中部」、「終了部」に分類し分析した結果、謝り表現は、男性より女性のほうが開始部で多く用いる傾向が強く、被謝罪者(日本人)への誠意を最大限に表すのは、再度の謝り表現を用いることであると報告している。さらに、郭碧蘭(2013)は、同様の場面を用いて日本語学生を対象に研究を行った。分析する際には、熊取谷(1993)の「自己先導型(Self-initiation : 修復作業の動作主が自ら先導する)」、「他者先導型(Other-initiation : 受け手が先導する)」の概念や、大谷(1998)の「攻撃型返答」、「中立型返答」、「緩和的返答」の概念を用いて分析を行った。その結果、日本語学生の謝罪者は補償することを自主的に切り出すより、受動的に被謝罪者の指示に従い、責任を取ろうとする傾向が強く、被謝罪者はネガティブ・フェイスが侵害されたため、その報酬手段として、相手を攻撃したり罵倒したりで、できるだけ相手のポジティブ・フェイスを攻撃しようとする傾向が見られたと述べている。

以下では韓国語における謝罪研究を概観する。

2.2.2 韓国語における謝罪研究

韓国語においては、「謝罪」を示す言葉として「사죄(サジェ : 謝罪)」と「사과(サクア : 謝過)」がある。사죄(サジェ : 謝罪)は、「지은 죄나 잘못에 대하여 용서를 빌¹⁶ : 犯した罪やあやまちについて許しを乞う」、사과(サクア : 謝過)は、「자기의 잘못을 인정하고 용서를 빌 : 自分のあやまちを認めて許しを乞う」と定義されているが、「謝過 사과(サクア : 謝過)」という用語が最も幅広く用いられ、研究されている。

韓国語の謝罪研究は、多様な分野からの研究があまり行われず、主に DCT、ドラマの脚本、教材を用いて分析を行い、社会的変数(上下関係、親疎関係、謝罪内容の深刻さ等)によ

¹⁶ 国立国語院から引用(<http://www.korean.go.kr>)

る特徴を探ろうとする研究が多く行われていた。

韓国語の謝罪研究で一番多く研究されているのは、社会的な変数を設定し、DCT 等の質問紙調査方法を用いて、韓国語と英語の謝罪行為を研究したもの(박선호박ク ソンホ(1993)、 김혜련김ク ヘリョン(1997)、 김윤미김ク ユミ(2000)、 박은영박ク ウンヨン(2000)、 에린에린(2013)等)である。一方、多くはないが、韓国語と中国語の謝罪行為を研究したもの(박지나박ク ジナ(2009)、 구영신구ク ヨンシン(2013) 等)、他の言語との対照研究(박진숙박ク ジンシュク・이상도이ク サンド(2014)等)も研究されている。これらの謝罪研究は、具体的な謝罪行為の記述より、社会的変数による類似点や相違点等を調べたものが殆どである。以下で簡単に概観する。

まず、韓国語と英語の謝罪行為の対照研究から見ると、박선호박ク ソンホ (1993)は、15の謝罪状況を設定し分析した結果、社会的要因よりは状況的要因が謝罪行為に影響を与えており、韓国語母語話者・英語母語話者・韓国人英語学習者共に、明示的な謝罪が一番多く用いられているが、「補償の申し出」は、英語母語話者で多く現れていたと報告している。 김혜련김ク 헤리ョン(1997)は、韓国語母語話者と韓国人英語学習者よりは英語母語話者の方が「謝罪定型表現」を多く用いており、特に、負担度が低い状況で英語母語話者の方で「謝罪定型表現」が多く用いられていたと述べている。 김윤미김ク ユミ(2000) は、韓国語母語話者・英語母語話者・韓国人英語学習者は、発語内効力指示装置(IFID)と責任認めの方略が一番多く用いているが、英語母語話者の方は「補償の申し出」を、韓国語母語話者と韓国人英語学習者の方は、「説明」の方略を多く用いており、特に、韓国語母語話者は、深刻度が低いと判断される状況では謝罪をあまり用いていない傾向が見られたという。 박은영박ク ウンヨン(2000)は、韓国語母語話者・英語母語話者・英語圏韓国語学習者と在米韓国人を調べた結果、韓国語母語話者は社会的地位と年齢に多くの影響を受けているが、英語母語話者と在米韓国人は、親密度を重視する文化の影響により、親密度に多くの影響を受けていると述べている。 에린에린(2013)は、韓国語とオーストラリア英語の謝罪行為を調べた結果、韓国語は、違反の深刻度が高い場合には、「補償提示」、「相手心配」、「自己卑下」、「合理化または説明」、「許し求め」が多く用いられており、オーストラリア英語は、「補償提示」、「合理化または説明」、「告白または責任認め」を多く用いていたと報告している。韓国語と英語の謝罪行為の対照研究は、主に、英語教育の観点からの研究が多く行われており、 에린에린(2013)以外は、謝罪する側のみ焦点をおいて研究されていた。

次は、他の言語との対照研究であるが、박지나박ク ジナ(2009)は、地位・親密度・違反の深刻性を考慮した 18つの状況を設定し、韓国人と中国人に DCT を実施した結果、3つ要因中、違反の深刻性が謝罪義務感に一番多くの影響を与えており、特に、韓国人は違反の深刻度が低い状況で中国人に比べ、低い謝罪義務感を持っていたと報告している。 구영신구ク ヨンシン(2013) は、韓国語母語話者と中国人韓国語学習者の謝罪応答行為の実現傾向を、私的・公的による主題類型別・変数別・方略別に分類し、17つの状況を設定し調べた。박진숙

パク ジンシュク・이상도イ サンド(2014)は、フィリピン人英語学習者と韓国人英語学習者を10つの状況を設定したDCTを用いて分析した結果、IFID方略以外に、韓国人英語学習者は「説明・解明方略」を、フィリピン英語学習者は「責任認めの方略」を多く用いていたと述べている。

これらの研究以外には、ドラマの脚本を用いて韓国語と中国語の謝罪行為を研究したもの(홍주희ホン ジュヒ(2009)、왕양ワンヤン(2013)等)や韓国語教材と中国語教材を用いて謝罪表現を研究したもの(손세모들ソンセモドル(2012)等)がある。次に、韓国語のみ焦点をおいた研究も行われていたが、DCTやドラマの脚本や韓国語教材を用いて謝罪行為を研究したもの(홍선수ホン センス(2003)、이유미イ ユミ(2008)、임리라이ム リラ(2008)等)、謝罪行為の認識と評価を研究したもの(유경애ユ キョンエ(2013)等)がある。

まず、홍주희ホン ジュヒ(2009)は、謝罪する側と謝罪される側がやりとりされる韓国語と中国語のドラマを3編ずつ用いて、謝罪行為の類似点や相違点等を調べた結果、両言語共に、謝罪される側に問題にならない程度の謝罪内容では、謝罪の受け入れが多く現れていたが、謝罪される側に深刻な影響を及ぼす謝罪内容では、謝罪を受け入れない場合も現れ、さらに、謝罪を要求する発話も現れていたと述べている。왕양ワンヤン(2013)は、11編の韓国ドラマの脚本を用いて謝罪する側の謝罪行為を調べた結果、中国人より韓国人の方が、地位や親密度より違反の深刻性に敏感に反応していたと報告している。손세모들ソンセモドル(2012)は、中国語では、事態が深刻な場合、謝罪表現を用いてはいるが、明示的な表現を若干避ける傾向が見られ、韓国語では、丁寧な謝罪表現を用いる傾向が見られたという。

次に、韓国語のみ焦点をおいた研究であるが、홍선수ホン センス(2003)は、韓国語教育の観点で、DCTを用いて、韓国人会社員と大学生の謝罪行為を分析した結果、両者共に、主に、「謝罪」、「責任認め」、「補償提示」、「説明」の方略を用いていた、しかし、地位関係・親疎関係・公的私的場面・性別の社会的要因による相違点は若干現れていたが、特に、謝罪者と受容者の地位関係の変数が方略の使用に多くの影響を与えていたと報告している。이유미イ ユミ(2008)は、韓国語の謝罪行為においては、物質的・身体的な被害を与えた状況より、精神的な被害を与えた際に、申し訳なさを一番強く感じていたと述べている。임리라이ム リラ(2008)は、韓国語の謝罪行為の隣接ペアで、一番多く用いられている方略は、「理解を示すこと」であり、互いのフェイスを守ろうとする傾向が見られたと報告している。유경애ユ キョンエ(2013)は、韓国語は、違反の深刻性を一番代表的な状況的要因として認識しており、より深刻な状況で謝罪義務感が高くなると評価してはいるが、謝罪義務感が高いほど深刻性が高いとは言えないと指摘している。

以下では、日韓対照の観点からの謝罪研究を概観する。

2.2.3 「謝罪」に関する日韓対照研究

「謝罪」に関する日韓対照研究では、主に、韓国語母語話者を中心に、2)謝罪に用いられ

る言語形式（定型表現）の研究(生越(1993)、^{ホンミンビョ}홍민표(1996、2006)、^{アンヒョンジョン}안현정 (2000)、朴福德(2001、2002)、三木(2002)、秦秀美(2004、2013)、金恵援(2006)等)と、3)謝罪場面における具体的謝罪行動の記述・分析の研究(^{リンヨンチョル}임영철・^{キムスンミ}김순미(1997)、関陽子(2001)、^{キンインギョ}김인규(2002)、^{インギョ}インギョ(2002)、沈貞美(2004)、^{アサミ}嚴美鈴(2004)、^{クワイ}崔信淑(2006)、^{シヤ}守屋(2007)、^{パクウンジ}박은지(2005)等)が多く行われてきた。

2.2.3.1 謝罪に用いられる言語形式（定型表現）の研究

韓国語は、「呼びかけ」、「挨拶」、「感謝」を遂行する際、「謝罪定型表現」を用いる傾向は現れていない(木内(1998)、秦秀美(2013)等)。従って、以下では、日韓における謝罪に用いられる言語形式を中心に概観していく。

生越(1993)は、日本語の謝罪の決まり文句には「すみません、ごめんなさい、申し訳ございません」などの表現があり、韓国語の謝罪の決まり文句には「미안합니다(ミアンナムニダ)、죄송합니다(チェソンナムニダ)」などの表現があり、互いが対照している、しかし、文法構造、表現などにおいて、様々な類似点を持つ日朝両言語であるが、人間関係の把握のしかたにおける差異（敬語、授受動詞など）が、「謝罪」の表現にも表われていると説明している。

一方、^{ホンミンビョ}홍민표(1996)は、韓国語と日本語の感謝と謝罪表現の使用実態についてアンケートで調べた結果、謝罪表現においては、日本語の場合、男女共に「(どうも)すみません」が一番多く用いており、韓国語は「죄송합니다(チェソンナムニダ)」が一番多く用いていると述べ、また、韓国語の謝罪表現の「죄송합니다(チェソンナムニダ)」は、「(どうも)すみません」に、「미안합니다(ミアンナムニダ)」は、「ごめんなさい」と其々対応していると報告している。また、^{ホンミンビョ}洪珉杓(2006)は、韓国語の謝罪表現には「죄송합니다(チェソンナムニダ)」と「미안합니다(ミアンナムニダ)」がよく用いられる、通常、「죄송합니다(チェソンナムニダ)」は社会性が高く、公的な性格が強い改まった言い方であると知られているが、実際には身内の人にも謝罪表現としてよく用いられる、「미안합니다(ミアンナムニダ)」もくだけた言い方であると知られているが、実際には公的な場面で用いられていることも多い、すなわち、この二つの表現は場面の制約よりは、むしろ謝罪の度合いの差で使い分ける場合が多いと述べている。

^{アンヒョンジョン}안현정(2000)は、他者とぶつかる場合、つまり、謝罪が期待される場面を設定し、その時、どんな謝罪表現を使用するか、謝罪表現を選択する時、どのようなことを一番意識するのかについてアンケート調査を行った結果、韓国人は誰とぶつかったか、日本人はどのようにぶつかったかを基準にしていると考察している。

次に、朴福德(2001)は、韓国語が使われている韓国社会で日本語が母国語である日本人の「感謝、詫び、詫びと感謝」の表現を調べた結果、詫びの場合、両言語は上下関係によって多様な詫びの表現が使用されており、韓国人の「미안하다(ミアンナムニダ)」系は、比較的軽い詫びの表現として、「죄송하다(チェソンナムニダ)」系は、やや堅苦しい感じであり、

目上の人に対して礼儀正しい表現だという認識を持って用いていると説明している。また、日本語の場合は、目上の人には「申し訳ない」系の表現、同年輩と目下の人には「すみません」系の表現より「ごめん」系の表現が多く使われていたと報告している。更に、朴福德(2002)では、韓日の文化や社会の規範、価値観が反映されている言語行動、特に、「感謝、詫び、詫びと感謝」の表現の実態とその実態の背景にある要因を明らかにするため、性別・年齢別・学歴別・職業別・地域別という変数を設けて、韓国人 465 名、日本人 371 名、在韓日本人 32 名を対象に質問紙調査を行い、その分析結果を報告している。

三木(2002)は、日韓テレビドラマ各 4 本の映像資料から用例を抽出し、日韓謝罪表現の定型表現とその付加表現¹⁷の相違点について分析を行なった。その結果、ストラテジー数や組み合わせについては、日本語・韓国語ともに定型表現を中心として 1 つないしは 2 つ程度のストラテジーを使って謝罪していたが、日本語の方がより多くの定型表現を使う傾向があり、韓国語は付加表現のみで謝罪する場合は日本語に比べて多く、その表現の種類も豊かであることが明らかになった。

そして、泰秀美(2004)は、「日本ではお詫びを言いそうな場面で韓国では言わない場面」とは具体的にどのような場面であるのかを日本と韓国のテレビドラマを資料にし、分析した結果、韓国語では、親しい関係において、謝罪定型表現の代わりに、その場面に最も適切な他の表現が存在し、実際、その表現が使われていることが明らかになった。そして、その表現は、謝罪の表現と分類されないようなそれぞれの場面に適した専用表現であり、慣用的に使われる傾向があると説明している。しかし、そのほとんどが日本語では謝罪定型表現に訳されていることから、日本語の方が親しい関係の人にも謝罪定型表現を使うべき周辺的な謝罪場面の幅が広く、日本語では謝罪の周辺的な場面においても謝罪定型表現が好まれる傾向があるが、韓国語では謝罪の場面として捉えない場合もあったと考察している。

金恵援(2006)は、感謝と謝罪に関する日本人の言語行動について、映像物をサンプルとして考察を行った結果、女性が男性より「ごめん」系を多く用いており、「すみません」系は男性の方から多く現われ、また「すみません」系は「目下⇒目上」に、「ごめん」系は「同等」と「目上⇒目下」に主に使われていて、「悪い」系は「目下⇒目上」には現われないと報告している。

2.2.3.2 謝罪場面における具体的な謝罪行動の記述・分析

임영철^{リンヨンチョル}・김순미^{キムスンミ}(1997)は、韓国は相手の年齢と社会的地位での上下関係が非調査者の反応に調節的に影響を及んでいるのに対し、日本は上下関係よりは親疎関係に大きな影響を受けている、韓国は男性の方が女性より丁寧な言語行為を多くしているが、日本は反対の結果が現れたと報告している。

¹⁷ この研究は、「謝罪定型表現」以外の「責任承認」、「事実の容認」、「相手への配慮」、「心情を表明」等を付加表現とし、分析を行った。

一方、関(2001)は、韓国語の場合、相手との力関係に左右され、自分より上の場合に、謝罪方略使用頻度が高くなり、相手の立場が低くなるにつれて謝罪方略使用が少なくなるが、日本語の場合、相手との関係が同等であるときに謝罪表現が多用され、相手が上でも下でも使用頻度が減少するということが、ドラマの調査結果、及び PRT においてともに確認されたと報告している。また、ドラマにおける調査結果、韓国語に多様な慣用的謝罪表現の使用が見られ、韓国語の方が、自己攻撃に近い自己非難表現が使われ、韓国語が日本語に比べ責任の所在を明確化する傾向があるが、日本語の場合、韓国語よりも口ごもりなど、不明瞭な表現が多用されていたと述べている。

次に、沈貞美(2004)は、自己と他人の謝罪行為に関する意識調査では、両国ともに「他人」より「自分自身」の謝罪行為をプラス的に評価しているのに対し、相手に損害を与えた場合の謝罪戦略としては、韓国人は「口ぶり」が、日本人は「定型表現」の使用がより多かったという差が見られたと報告されている。また、「笑い」「弁明」「表情・身ぶり」は韓国の方が、「ハンカチ」「補償」の戦略は日本の方がやや高い割合を占めていた。また、3つの謝罪の戦略のうち、一つが欠けている場合の印象について、親疎関係を中心に調べた結果、韓国は「表情や身ぶり」の戦略が欠けている場合、日本は「定型表現」の戦略が欠けている場合に相手の謝罪行為を否定的に評価していることがわかった。

巖美鈴(2004)は、日韓若年層の謝罪のやりとりを Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論」¹⁸と関連づけ、対人間の相互作用というコミュニケーションの観点から分析した。その結果、日本語母語話者は、多くの戦略を使うのではなく、低姿勢で謝る形を取り、責任追求、説明・弁明の戦略はあまり好まず、相手に負担にならないよう配慮しており、適切な距離を保ちたいということで間接表現を用いることが多かったと報告し、相手を不快にさせないように謙遜することによってネガティブ・フェイスを尊重していることが分かったと述べている。一方、韓国語母語話者は、同じ親しい友達の間では、謙遜、あるいは相手を配慮するやり取りより、相手のフェイスを脅かす恐れのある表現を冗談としてしようしたり、もしくは相手を責めたり、傷つけたりする表現のやり取りを多用し、会話を進めており、これは、若い世代の韓国語母語話者特有のポジティブ・ポライトネス・戦略と言えるであろうと推測している。

そして、崔信淑(2006)は、新聞記事を分析し、謝罪を社会的相互作用のプロセスを通じて実現されるものとして捉え、日中韓の謝罪行為を比較した。その結果、日本人の謝罪行為は、謝罪するという行為自体に重点がおかれ、丁寧な姿勢と明確な謝罪表明によって、誠意を示すことを評価し、中国人の謝罪行為は、常に法的処分等を含む実質的対処に関係し、加害者側自ら積極的な対処を取ることで誠意を示すことを評価し、韓国人の謝罪行為も法的処分に多く関係し、加害者側自ら積極的な対処を取ることで誠意を示すことを評価していることがわかった。このように、謝罪の表明の仕方は異なっているものの、

¹⁸ 以下の 2.4.4 を参照

日中韓とも謝罪行為自体を重視しているという点においては共通しているとも考察を加えている。

守屋(2007)は、韓国語も日本語も、目上、目下、ウチ、ソトに限らず、どの場面においても直接謝罪表現に依存する度合いが高いという点で共通していると述べている。また、日本語では直接謝罪表現、責任への言及、代償の提案が主で、その他のストラテジーの出現率は大変低いのに対し、韓国語では原因説明や配慮、反復しない旨の約束のストラテジーの出現率が日本語に比べて高く、謝罪の際に多様なストラテジーのパターンを幅広く利用していると報告している。さらに、박은지(2005)は、販売職で携わっている人を対象に、8つの場面を設定し、過失の程度・感謝の程度という条件を設けて質問紙調査を行い、韓国語と日本語で行われる謝罪行動と感謝行動の特徴の比較を行っている。

2.2.4 謝罪の先行研究からの考察

上記で概観したように、謝罪という言語行動は、日本語、韓国語、英語、中国語、マレーシア語等、様々な言語で多く研究され、多様な観点からの研究がなされている。特に、「謝罪に用いられる言語形式（定型表現）の研究」と「謝罪場面における具体的な謝罪行動の記述・分析」の研究が、各々の言語のみならず、異言語間の対照研究でも多く行われており、その研究成果が報告されているが、いくつかの点でさらなる研究が必要であると考えられる。

まず、これらの謝罪の先行研究には、謝罪する側と謝罪される側の相互作用の特徴などを研究したもの(Owen(1983)、嚴美鈴(2004)、ボイクマン・宇佐美(2005)、大谷(2008、2013)、홍주희ホン ジュヒ(2009)、郭碧蘭(2012、2013)、에린エリン(2013)等)はあるが、多様かつ膨大な謝罪研究から考えると、謝罪する側のみ焦点を置き研究されたものが圧倒的に多いことを指摘できる。そのため、研究方法としても、アンケート調査法や、映画・ドラマの脚本や映像等が利用されていることが多く、実際に行われた発話のやりとりを分析したものは数少ないのが現状である。それは、ほとんどの謝罪研究が、謝罪のやりとりを分析対象として捉えていないため、つまり、謝罪する側による言語行動と謝罪される側による言語行動のやりとりを対等な観点で研究していないためであろう。アンケート調査法で謝罪される側の反応を調査しようとした研究(Blum-Kulka and Olshtain(1984)、Blum-Kulka and House and Kaser,eds.(1989)等)はあるが、これらの研究も単なる一発話文レベルの反応に留まっている。Thomas(1995)は、その発話行為が「成功」するためには、聞き手の共同行為が必要であり、実際、ほとんどすべての発話行為は、少なくともある程度は共同的であると指摘している。また、ボイクマン・宇佐美(2005)も指摘しているように、謝罪とは、謝罪する側と受ける側とが相互に交渉しつつ共同で作り上げていく行為である。

次に、多くの研究が「謝罪定型表現」や一発話レベルの分析に留まっており、より長い「談話」レベルでの分析を行った研究(大谷(2008、2013)等)は若干あるが、謝罪内容に関するやりとりが終了した後の謝罪する側と謝罪される側の相互作用を研究したものは見当た

らない。言語行動の全体像を明らかにするためには、一発話レベルの分析に留まらず、談話レベルの分析も行うべきであろう。例えば、最初の謝罪のやりとりでは、謝罪される側が受け入れられないことを示しているが、互いにやりとりを続けていった後、最後の段階で謝罪される側が受け入れられることを示す反応を見せるかもしれない。もし、一発話レベルで解釈すると、謝罪される側の反応は「拒絶」であるが、談話レベルで解釈すると、謝罪される側の反応は「受諾」となる。これらの解釈は、一発話レベルと談話レベルとで正反対の結果を表しうる。このように、一発話レベルと談話レベルを双方で分析し、謝罪行動の全体像をより明確で正確に捉えることが必要であろう。しかし、今までの謝罪研究においては、談話レベルから発話文レベルまで視野に入れて、謝罪という言語行動を総合的に解明しようとした試みは、管見の限り見当たらない。

続いて、謝罪の先行研究において、上下関係・親疎関係等に関する研究はあるが、男性と女性の傾向を明らかにした研究は数少なく、負担度の軽重による謝罪行動のやりとりの影響あるいは変化に焦点をおいた研究は行われていないと言っても過言ではない。言語行動を比較する際には、条件を統制し、まず各々の言語の男性と女性の類似点と相違点を分析した上で、次に、異言語間の対照を行うのが、妥当性があると考えられる。言語主体である人間には、男性と女性があり、両者は異なる言語行動を行うと言えよう。従って、男性と女性の言語行動の結果が、研究しようする言語行動の結果であり、それらを異言語間で対照するので、より正確な結果を生み出すことができると考えられる。また、異言語間の類似点や相違点等の特徴を取り上げる際にも、客観的な研究結果を表すことができると考えられる。

最後に、謝罪研究の調査方法であるが、謝罪という言語行動を自然談話で収集したい要望はあるが(巖美鈴(2004)、ボイクマン・宇佐美(2005)、大谷(2008、2013)、鄭賢児(2009、2011a、2011b)等)、謝罪という言語行動の性質¹⁹により、謝罪の自然談話を収集することは困難である。従って、その代案として、インタラクションが見られるロールプレイ調査方法が用いられている。さらに、謝罪研究におけるロールプレイ調査方法²⁰の研究で、相手に物質的な被害を与えた状況を設定し研究したもの(ボイクマン・宇佐美(2005)、宮内(2007)、大谷(2008、2013)、郭碧蘭(2012、2013)等)はあるが、精神的被害を与えた場合のロールプレイ調査方法の研究は管見の限り見当たらない。また、本研究において負担度が軽い場面として設定した「遅刻の謝罪場面」のロールプレイ方法の研究はあるが(巖美鈴、2004)、謝罪される側にも過失がある場合の遅刻場面のロールプレイを扱った研究は行われていない。杉本(1997)は、「謝罪」に関する先行研究における状況設定の問題点として、今までの先行研究では、相手に物質的な被害を与えた状況での謝り方を問うものが圧倒的に多いが、この偏りも是正されなければならないと指摘し、現実の場面で相手に謝らなければならない

¹⁹ 大谷(2013:57)は、謝罪はいつ生じるかが予測しにくい行為であり、謝罪者の面子にかかわる行為であると述べている。

²⁰ ロールプレイ調査方法に関する先行研究は 2.6.2 を参照。

いのは、何も物質的被害を与えた場合だけに限らないし、相手に迷惑をかけたり、感情を害したりといった精神的被害を与えた場合の謝り方も含めて研究の対象にする必要があると述べている。

本研究では、謝罪の先行研究の成果や問題点を踏まえた上で、謝罪という言語行動を談話レベルから発話文レベルまで総合的に分析し、ポライトネス理論の観点から考察を行い、日韓における謝罪という言語行動の特徴を探る。

2.3 本研究における謝罪に対する応答と関わりがある言語行動の先行研究

本研究は、謝罪という言語行動を、謝罪する側と謝罪される側の相互作用の観点から解明することが主な目的である。従って、否定的な言語行動(断り、不満表明等)や否定的ではない言語行動(交渉、気配り等)の先行研究を概観し、謝罪される側の反応をより正確で詳細に分析するための参考資料として用いることとする。

2.3.1 否定的な言語行動に関する先行研究

本節では、謝罪される側の否定的な言語行動を分析するため、主に、不満表明(初鹿・熊取谷・藤森(1996)、미즈시마(mizusima,2002)、李善姬(2004・2006)等)や、断り(森山(1990)、生駒・志村(1993)、熊井(1992・1993)、藤森(1994・1995)、カノックワン(1995・1997)、呉俊雅(1996)、任炫樹(2004)、高木(2009)等)、その他の否定的な言語行動(猪崎(1997)、李善雅(2001)、末田(2000)、郭碧蘭(2007)、金光泰(2005)等)の先行研究を概観する。

2.3.1.1 不満表明に関する先行研究

初鹿・熊取谷・藤森 (1996)は、不満表現ストラテジーとして、改善要求(直接改善要求、改善された結果についての言及、社会的規範に言及するなど)、命題内容の表出(相手によって引き起こされた好ましくない行為、状況を同定する、相手が行ったもしくは行っている好ましくない行為または状況により引き起こされた結果を同定する、直接的に命題内容について述べるのではなく、他の状況、行為に言及することで好ましくない影響を与えている状況、行為を暗示する)、好ましくない状況が生起した原因・理由、またはその状況が生じた過程を問う、好ましくない状況が生起したことの確認、条件提示(警告、脅かし、非難など)、代償要求(好ましくない状況を引き起こした相手に代償を要求する)、不満感情表出(慣用表現になっているもの)の7つの項目を立て分析を行った。

また、미즈시마(mizusima,2002)は、日本社会が他人に迷惑をかけることについて寛大でなく厳しく反応する反面、韓国社会は迷惑をかける人にも寛大で、他人の過ちを叱る人をむしろよくないと考える雰囲気があると報告している。次に、李善姬(2004)は、日本語母語話者と韓国語母語話者の不満表明ストラテジーの使用を比較した結果、韓国語母語話者の方が「良心」、「礼儀」、「公共秩序」、「公衆道徳」といった韓国社会で通用する価値規範を取り上げ、相手に対する不満の意を伝える言語表現が多く見られたという。更に、韓国では

不満を表明し、相手にその不満の状況を改善してもらうために、話し手と聞き手の両方が知っている、あるいは、共感できる規範に言及する表現が多く使われるが、日本社会において、これらの表現が韓国で使われた場合と同じ意味合いを持つとは限らないと説明している。さらに、李善姫(2006)は、韓国人と日本人とのコミュニケーションの際に予想される摩擦や誤解の仕組みを「不満表明」のような、人間関係に対立を生み出しかねない言語行動から考察した。日本人の場合は韓国人に比べ、間接的な不満表明にとどまる傾向があるのに対して、韓国人の場合は不満な状況が相手によって引き起こされたことを相手にはっきりと伝えたり、不満な状況の改善や代償を要求したり、相手を脅かしたりする傾向が強いと述べている。

2.3.1.2 断りに関する先行研究

森山(1990)は、親しい同級生の場合、積極的な関係保全とは言いにくいですが、断りたい意向を率直に言う傾向があり、親しくない同級生の場合、自分の利益よりも相手の利益を優先するように振る舞う傾向があると述べている。特に、断わり表現において「考えておく」型の特徴は、依頼の受け入れを専ら自分の判断領域内のこととしてとらえるということであり、これは、自分の意向を優先させることを前提とし、すでに相手利益優先の原則を守らないことになってしまうのであると説明している。生駒・志村(1992)は、地位が自分と比べて同等か高い相手からの要請に対する断りにおいて、日本語母語話者は、日本語学習者と英語母語話者よりも、代案をより多く指示したことを指摘し、日本語学習者や英語母語話者のように理由を言って断るだけでは、言葉が足りない、あるいは、誠意を感じられないと取られかねないということを指摘している。

また、熊井(1992)は、日本人学生に特徴的なのは、相手が教師の場合、一度依頼を断られたとき、その否定的な情報を「そうですか」と言って受けとめ、相手の状況を認めた上で、その次に新しい情報の提供や限定をつけた要求表現によって条件を絞りみながら、引き続き依頼行動を行っているという点であると指摘している。一方、留学生は「そうですか」を用いておらず、断られた後にすぐ「ちょっとでもだめですか」、「しかし、レポートがありますよ」のように、行為要求を繰り返したり、「情報提供」を言って借りることの必然性を協調したりする発話をしていたと述べている。さらに、熊井(1993)は、教師の依頼を断る断り行動を日本人学生と留学生で比較し、分析を行った。そして、日本人学生には「延期」という消極的な方略が、留学生には「代案提示」という積極的な方略が何件か観察され、日本人学生は「理由説明」や「延期」によって、相手にわかってもらおうとすることに重点を置き、留学生の場合には「理由説明」だけでなく、Positive politeness を駆使し、「情報要求」や「代案提示」によって相手に共感を表明しつつ、積極的に会話をリードして熱意を示すことに重点が置かれる傾向があることを示した。

次に、藤森(1994)は、「断り」行為で用いられる「詫び」は修復作業の主なる要素の一つであると同時に、相手の領域を侵さないという Negative politeness の表明で、「共感」は、共

存意識の表明でもあり、「断り」行為を軽減する効果があると説明し、更に、「関係維持」「代案」は、相手との関係修復後も関係維持を望んでいることの表明と考えられるが、「関係維持」は共存意識の表明で、「代案」は対人関係の不均衡を自分が起こしたことの補償もしくは訂正行為として機能していると報告している。また、藤森(1995)は、「断り」発話行為を構成する意味公式のうち、最も使用頻度の高い「弁明」発話の節末及び文末形式の使用状況を学習者と母語話者について比較した。その結果、学習者は理由を二重に述べる傾向があり、「～から～たくない」というような直接的な命題表出を行うと、日本語の規範では相手との対立を生じかねないと指摘している。

続いて、カノックワン(1995)は、日本語の基本的な「断りの構造」は、理由だけ述べて断りを省略するか、理由を先に言ってから断るといった構造であるとし、「目上」または「同等」に対しては「理由のみ」あるいは「理由+不可」の構造が、「目下」に対しては「不可+理由」または「不可のみ」の構造が取られるという傾向が見られたと報告している。更に、カノックワン(1997)は、日本語学習者の「断り」の特徴とその問題点を検討し、「断り」の中心構造は「できない、だめ、難しい」等のような「不可」を表明する部分と、断る「理由」を表明する部分の二つの部分から成るということを示している。

また、呉俊雅(1996)は、断りの理由として「考えてみる」という応答を聞いた際、思い浮かずことについて日韓の被験者に質問した。その結果、韓国と日本共に、相手が親しい関係ならばある程度受け入れてくれるという応答が多かったが、親しくない場合には、韓国は受け入れるか受け入れないかが半々であるのに対し、日本は受け入れることをあまり期待しないと答え、日本の方が更に否定的に考えていると述べている。

任炫樹(2004)は、断り表明のように相手のポジティブ・フェイスを満足させることができない断り場面でのウチ言葉・仲間意識の表明・冗談は、話し手が聞き手に相当な親密感を感じない限り、現れにくいと考えられるが、韓国語にはウチ・ソト・ヨソ関係なく代案提示・ウチ言葉・共通話題の提示・冗談が見られること、共通話題の提示がウチ・ソトで幅広く現れることは日本語には見られない韓国語の特色であると考察している。

高木(2009)は、一般的に日本人がよく使用されると言われている、語尾を曖昧にする表現が、韓国人の親しくない関係にも見られ、韓国人は親しくない先輩に対して、語尾を曖昧にするという言語行動で、年上に対する礼儀や、他人という線をつくっているのではないかと分析している。また、日本人は相手が親しい場合であったら、相手が「先輩」と分かっている場合でも同世代の友達のような感覚で断わりを言うが、韓国人は、相手とたとえ親しい場合であっても「先輩」に対しては尊重する断わりを言うという違いが指摘された。

2.3.1.3 その他の否定的な言語行動に関する先行研究

猪崎(1997)は、外国人と日本人のコミュニケーションにおいて双方がどのようなルール違反をし、その結果どのようなトラブルが生じ、双方がいかにかこれを認識し、解決するかを観察、調査した。その結果、双方ともコミュニケーションの目標を達成しようと、「修正要

求」「修正」を繰り返し、日本人は外国人の発話意図を理解しようとし、意味理解を中心に聞き返しをしていることが明らかになった。李善雅(2001)は、日韓の大学院生に意見が食い違う場面を設定し、ロールプレイを行なった結果、日本語母語話者は、自分の意見をストレートに表現する自己主張優先型より、相手配慮に重点を置く相手配慮型を好む傾向が見られた。一方、韓国人学習者は、相手配慮型より自己主張優先型を好むと断定はできないが、相手配慮型を用いるときも日本語母語話者とは違って、相手の意見への同意や自分の意見のマイナス面を言うときの内容が具体的ではなく、発話の長さも短い傾向が見られたと考察している。また、末田(2000)は、「不同意表明」と「調整」のストラテジーの実現形態に焦点を当て、会話資料の中に観察された現象を詳細に分析を行った。「直接的なストラテジー」は、相手の推測を必要とせず、相手の **Positive face** に配慮せずにあからさまに不同意表明を行うものであり、単位方略としては「注目表示(否定)」、「情報の提供」等が観察され、「間接的なストラテジー」は、相手の **Positive face** を侵す危険性に配慮し、相手に自分の不同意表明を推測させようとするものであり、単位方略としては「事情の説明」「情報の叙述」等が観察されたと報告している。次に、郭碧蘭(2007)は、アメリカ人は能動的な表現 (**active-aggressive forms**) を使って相手を批判する傾向があるのに対して、日本人は相手に直接批判をするが、その表現のしかたが、控えめ (**passive-withdrawing forms**) であると説明している。日本人は、怒りを感じたり、立腹したようなときでも、できるだけそれを言葉に表さないようにし、沈黙するか、後で第 3 者に不満を述べるか、あるいは、自分の怒りを冗談めかして相手に言うといった形をとるのに対し、アメリカ人は同様な状況では、その場で率直に批判するか、怒りを言葉にしてぶつける、あるいは強烈な皮肉を言ったり、侮辱したりして相手に立ち向かう傾向があると報告している。金光泰(2005)は、日本人は話者の快・不快の心を外的に表出することが苦手で、相手を考える心から露骨的に音声や行動で表すことを避ける傾向があるが、韓国人は自分あるいは他人の感情表現を音声や行動を通じて直接的かつ積極的に訴えようとする傾向が強いと指摘している。

2.3.2 否定的ではない言語行動に関する先行研究

謝罪に対する応答では、否定的な言語行動のみならず、交渉したり、譲歩したり、気配り表現を用いたりするなど否定的ではない言語行動も行われている。本節では、これらの否定的ではない言語行動に関する先行研究を概観する。

彭飛(1996)は、人間が言語でコミュニケーション活動を遂行する際、相手の心を傷つけたり、相手に負担をかけたりせぬよう、自分が相手にとって喜ばしい存在であるように配慮する対人的な表現を「気配り表現」とした。「感謝表現」「お詫び表現」「賞賛表現」「祝福表現」「同情表現」など相手の心情、利益、立場などを配慮する表現を「気配り表現における直接的な表現」、表現形式の変更、用語の変更、語句の添加・省略などといった「間接的な方法」によって相手との対立を避け、間接的に相手への配慮を示すものを「気配り表現における間接的な表現」、「聞き手に対する発話」の場合、露骨、断定的、単刀直入的な表

現をそれとあからさまに示さず、遠回しに唆したり、使用回避をしたりなど、種々の「和らげる」手法をとって、判断、評価、拒絶、否定など話者の叙述内容や意思や感情が相手に柔らかく伝わるように工夫する表現を「緩和表現」と分類し、考察を行った。

吉岡(1993)は、説得を、相手の意向や行動に変化を与えようとするコミュニケーション行動であるとし、命令や指図と違って、相手が納得して受け入れなければ成功しないもの、つまり、コミュニケーションの相互作用によって目的が遂行されるものであると述べている。また、説得を成功させるには、相手の動機や置かれた状況を理解し、それに気配りしたコミュニケーションを心がけることが重要であると報告している。最後に、説得にあたっては、相手がこれまで持ってきた欲求、関心、価値観、習慣などに近づくことによって、接点を提示し、相手の興味、関心を引き出さなければならないと言っている。

次は、交渉に関する先行研究であるが、中嶋(2005)は、交渉、説得、お願いは「相手の規範、態度を変え、取り決めを行い、利益を実現する話し合い」であるが、相手を取り決めを実行しない限り利益が実現しない意味では、交渉、説得、お願いは相手の行動が変わる行為であると述べている。一般に「交渉」には「交渉の準備(交流、交換のコミュニケーション)→交渉→説得→意思決定→交渉の終結」のプロセスが見られるが、実際の交渉では「交流」が「交渉→説得」や「説得→意思決定」の間に繰り返し現れ、プロセスのなかの「交渉」の場に「交流」が現れると説明している。また、麻殖生(2009)は、アメリカ人が日本人と交渉する場合、コミュニケーションの最大の障害となっているのは日本人の沈黙であり、アメリカの社会では、会話の際の沈黙は単なる空白であり、音声途切れたと言う以上の意味はないと説明し、従ってコミュニケーションの空白はできるだけ埋めようと努力するため、アメリカ文化は沈黙を満たすところから発展してきたと報告している。続いて、碓氷尊(2010)は、「交渉」は、共有された特定の問題ごとに、会話と対話を重ねて、問題の認知、因果分析、解決オプションの創造、行動計画の選択とコミットメントという一連の(時として終わりのない)過程を通じて、政治的目標と知識の共有をはかるコミュニケーションを意味すると定義している。いわゆる「察する文化」で知られる日本社会では、思うことのすべてをあからさまに詳しく述べるのではなく、状況にあった対応、すなわち「空気を読む」ことを要求する、いわゆる「高テクスト」コミュニケーションをよしとする傾向があると説明している。

田中(1991)は、くり返しの発話は、会話の進行上どのような機能や効果を持っているのかを考察し、相手のことばをくり返せば、情報を受信したことを伝え、同時に自分の了解が正しいかどうか確認することができるという、こうしたくり返しは、情報伝達を円滑かつ確実にするものであり、場面によっては、相手のことばをいちいちくり返すことが、与えられた情報を大切に扱っている様子やかしこまりの態度の表現となって、待遇的効果が出ることもあると述べている。이상옥(2010)は、「甘え」という言語行動は、相手が何かをしてくれることを期待し、要請する際に現れる行動であるが、相手と意見の食い違いが現れる場合、相手を説得する過程で現れる傾向があると報告している。更に、不利な状況で「甘

え」の言語行動を用いることにより、困難な状況を免れたり、堅い雰囲気や和らげる目的で使用する場面が現れ、また、相手との親しみや友情等の特別な感情を「甘え」の言語行動で表出する場面も現れたと報告している。

以下では理論的枠組みとなるポライトネス理論と本研究で捉える「談話」に関する研究、そして研究方法について述べる。

2.4 理論的枠組み—ポライトネス (Politeness)に関する研究

本研究は、ポライトネス理論を枠組みとし、分析結果を解釈することを主な研究目的とする。ポライトネス理論に関連し多くの研究がなされてきたが、生田(1997)と宇佐美(1993b, 2001)は、*Politeness*の日本語訳の代りにカタカナ語である「ポライトネス」を用いている。この理由は、従来日本で研究されてきた「敬意」、「尊敬」、「改まり度」、「丁寧さ」等の用語と「ポライトネス」を明確に区別するためである。そこで、本研究も、宇佐美(1993b, 2001)にならい、英語の*Politeness*の日本語訳がもたらす様々誤解を排除するため、カタカナの「ポライトネス」を用いることとする。更に、宇佐美(2001: 10)の「円滑な人間関係の確立・維持のために機能した言語行動」が「ポライトネス」であるという概念に従うこととする。

ポライトネス理論が本格的に研究されることになったのは、Lakoff(1975)と Grice(1975)の研究からである。Grice(1975)の「協調の原理」は、ポライトネス理論のみならず、語用論研究等にも重大な影響を与えており、Lakoff(1975)の「言語と性」という研究は、ジェンダー研究の始まりであると言っても過言ではないぐらい、多くの研究が行われるきっかけを与えた。その後、Grice(1975)の「協調の原理」の問題点を指摘し、更に、補完する原理として研究されたのが Leech(1983)の「ポライトネスの原理」である。しかし、Grice(1975)の「協調の原理」や Leech(1983)の「ポライトネスの原理」に比べ、より根本的で普遍的な「ポライトネス理論」を提唱したのは、Brown and Levinson(1987)である。彼らが提唱した「ポライトネス理論」の普遍理論の概念等は誤解を招き、Matsumoto(1988)、Ide(1989)等の研究者らには批判されたが、Fukada and Asato(2004)、宇佐美(1998, 2001, 2002, 2003b, 2008)と Usami(2002)等の研究者らには支持され、特に、宇佐美(1998, 2001, 2002, 2003b, 2008)と Usami(2002)は、Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論」の問題点などを指摘した上で、言語形式や表現レベルの研究のみならず、談話レベルをポライトネス理論に取り込んだ「ディスコース・ポライトネス理論」を提唱している。また、Culpeper(1996)は、Brown and Levinson(1987)のポライトネス理論を踏まえ、フェイスの概念を用いて、インポライトネス(impoliteness)の導入を提案し、Spencer-Oatey(2000)は、「ラポールマネジメント(rapport management)²¹」という用語を用いてポライトネスの説明を試みている。更に、Watts(2003)は、日常的な概念としてのポライトネスを「ポライトネス 1 (First-order politeness)」、科学的概念化を経た専門的概念としてのポライトネスを「ポライトネス 2 (Second-order

²¹ Spencer-Oatey (2000 / 田中他訳 2004 : 11) は、「ラポールマネジメント」という用語を使うことについて、「フェイス」という用語は自己への関心を強調するのに対して、「ラポールマネジメント」という用語は、自己と他者間のバランスの方により強い関心があることを示唆していると説明する。

politeness)」として区別し研究を行っている。

以下では、上記のポライトネスに関連する理論を概観するが、その中でも、本研究の理論的枠組みとなる Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論」と宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008)、Usami(2002)の「ディスコース・ポライトネス理論」をより詳細に説明する。更に、ポライトネスに関連する理論の比較を行った上で、「謝罪」と「ポライトネス理論」の関連性について考察を行う。

2.4.1 Lakoff の「ポライトネスの原理」

カリフォルニア大学バークレー校言語学科のロビン・レイコフ教授は、1973年に「言語と女性の地位」という論文を出し、それが後に続く女性と言葉のほぼすべての研究の導火線となり、この論文は75年に同じタイトルの著書になったものだが、そこで説かれた仮説は、現在に至るまで女性語の研究が行われ続ける原動力となっている(井出、2006:162)。

Lakoff(1975/ かつえ・あきば・れいのるず訳 1990)は、女の使うことば、女に関することばは、ポライトネス²²と密接な関係を持ち、社会が男よりも女のほうに遙かに大きな精神的負担をかけているのではないかと考えた。更に、女は男よりも「ポライト」だとされている理由、男は女の前では「よりポライト」である理由、女にしかかわりのないポライトネスの形がある理由等を取り上げて、男女による社会的、精神的負担に関する疑問点を説明している。

また、Lakoff(1975)は、ポライトネスの原理として、次の3つがあるという。

- I. 礼法 (Formality) : 距離を保て(Keep aloof)
- II. 敬意(Deference) : 選択の自由を与えよ(Give options)
- III. 親愛(Camaraderie) : 共感を示せ(Show sympathy)

一つ目の「礼法：距離を保て」は、礼儀作法の本やポライトネスに関するその他の諸主義に最も顕著にあらわれているものであるが、相手との距離を保つことが目的であり、話し手とその相手の間に心理的な距離をつくる効果がある。これは、話し手の社会的地位が聞き手のそれよりも高い場合に多い。例えば、医者が患者に対し専門用語を用いたり、また学術論文などでIではなく、Weを用いたり、受動態を用いたりする場合に見られるものである。

二つ目の「敬意：選択の自由を与えよ」は、聞き手の地位のほうが高いということを伝える機能がある。一般的にことばや行為を控えめにすることで実現される。例えば、実際に話し手が自分の主張していることの真実性に確信がないために使われた場合の疑問形のイントネーションや、付加疑問がここに則している。

²² Lakoff(1975/ かつえ・あきば・れいのるず訳 1990)では、「丁寧さ」と訳されていたが、本研究では、誤解を防ぎ、統一するため「ポライトネス」と訳することとする。

三つ目の「親愛：共感を示せ」は、話し手が相手に好意を持っていること、親しくしたいこと、興味をもっていることなどを感じさせることが目的である。例えば、アメリカ社会では、冗談を言ったり、ニックネームやファースト・ネームだけで呼んだり、姓だけで呼んだりするのもこの方式である。

これら 3 つのポライトネスの原理は各言語・文化に普遍的なものであるが、各言語・文化によってその比重は異なり、したがって、ある特定の行為がどの原理に則してポライトだと考えられるのか、あるいは、どのルールに従って無礼だと考えられるのかは、その行為の種類によって決定することができるという説明している。更に、Lakoff(1975)は、女のポライトネスは、原則的には、ルールⅠ型にルールⅡ型をプラスしたもので、心理的距離を築き、強化するものであり、婉曲表現および最高敬体と結びついた敬意礼法であるとし、男同士では、ルールⅢが適用されて結束が助長されるが、女同士または男女間では、ルールⅢは利用されず、したがって結束を阻止されると主張している。

2.4.2 Grice の「会話の含意」と「協調の原理」

発話により表意(explicate)される(明示的に(explicitly)伝達される)仮定と推意(implicate)される(暗黙裏に(implicitly)伝達される)仮定とを区別する理由は、発話の理解は、単に発話された語の意味を知り、それらの結合方法を知るだけの問題ではなく、話し手が伝達のある種の一般的基準を満たそうとしているとの仮定と非言語的情報との両方に基づく推論活動も関与しているからである(Blakemore 1992 / 武内・山崎訳 1994 : 85)。

初めて含意(implicature)²³という用語を導入した Grice (1989[1975] / 清塚・飯田訳 1998) の理論は、Thomas (1995 : 63) が指摘するように、「話し手が言ったことを聞いた人が、その伝えようとしたことをどうやって受け取るか、つまり、実際に表現された意味のレベルから含意された意味のレベルへどうやって移行するかを説明」しようとした試みである。

Grice (1989[1975] / 清塚・飯田訳 1998 : 34-43) は、含意を、「慣習的(あるいは、言語規約による)含意 (conventional implicature)」と「会話による含意 (conversational implicature)」という 2 つの種類に分類した。慣習的含意は、言われた事柄を決定する助けになると共に含みとされている事柄をも決定するが、会話による含意(conversational implicature)は、談話の持つある一般的な特徴と本質的なつながりを持つものであると説明している。「会話による含意」の一般的な特徴を「協調の原理 (cooperative principle)」と呼んでいるが、次のように説明される。

会話の中で発言をするときには、それがどの段階で行われるものであるかを踏まえ、また自分の携わっている言葉のやりとりにおいて受け入れられている目的あるいは方

²³ Implicature(含意)を explicature(表意)と対比させて「推意」と訳す場合もある。また、Thomas(1995:65)は、「含意」と「推論」の解釈の混乱が原因となって Grice(1989)の理論が誤解されることを指摘し、「含意する」というのは、示唆する、ほのめかす、あるいは、言語を使ってある意味を間接的に伝えるということであり、「推論」というのは、根拠から何かを推理によって導き出すことである、つまり、推論は聞き手が作り出すものであるという。

向性を踏まえた上で、当を得た発言を行うようにすべきである。

Grice (1989[1975] / 清塚・飯田訳 1998 : 37)

「協調の原理」は「量、質、関係、様態」の4つの格率に従うことによって実現され、これらの格率は会話による含意を確定するときの助けとなるという。4つの格率は以下の通りである。

【量の格率】：提供されるべき情報の量に関係する

1. (言葉のやりとりの当面の目的のための) 要求に見合うだけの情報を与えるような発言を行いなさい。
2. 要求されている以上の情報を与えるような発言を行ってはならない。

【質の格率】：真なる発言を行うようにしなさい

1. 偽だと思ふことを言ってはならない。
2. 十分な証拠のないことを言ってはならない。

【関係の格率】：関連性のあることをいいなさい

【様態の格率】：わかりやすい言い方をしなさい

1. 曖昧な言い方はしてはならない。
2. 多義的な言い方をしてはならない。
3. 簡潔な言い方をしなさい (余計な言葉を使ってはならない)。
4. 整然とした言い方をしなさい。

「量・関係・様態の格率」は、「質の格率」の「1. 偽だと思ふことを言ってはならない」が充たされているという仮定の下で初めて機能するし、「量・質・関係の格率」は、表現される事柄に関係するが、「様態の格率」は、表現の仕方に関係する性質のものであると説明している。

また、ある特定の含みが存在していることを割り出すために聞き手が依拠するものには、(1) 使用された語の慣習的意味と、語の使用に指示が伴っているときにはその指示対象の確認、(2) 協調の原理と格率、(3) 発話の言語的その他のコンテキスト、(4) その他の背景的知識、(5) 会話の参加者はどちらも、上記の項目に収まるすべての関連事項を手に入れることができ、しかもそうであることを双方が知っている(あるいは仮定している)、という事実(またはそれが事実だという推定)、の5つがあると述べている(Grice1989[1975] / 清塚・飯田訳 1998 : 45)。

2.4.3 Leechの「ポライトネスの原理」

Leech(1983 / 池上・河上訳 1987 : 114)は、Grice (1975) の「協調の原理」というものは、われわれが何を言うかについて調節を行い、それによって何らかの想定されている発話内行為的、ないしは、談話に関してのゴールに貢献するという機能は有しているが、「ポライ

トネスの原理」²⁴の方がこれよりも高次の調節的機能を有しており、社会的な均衡と友好的な関係を維持するという機能を持っているという。

また、Leech は、「ポライトネス」とは、「礼儀正しく振舞う」という表面的な問題ではなく、「協調の原理」と、意義を発話の効力にどう関連づけるかという問題との間にある重要なミッシング・リンク (missing link) であると説明し、「ポライトネスの原理」に属する 6 つの原則 (maxims) は、次のように対をなして機能する傾向があるという。

- (I) 気配りの原則 (行為賦課型と行為拘束型において)
 - (a) 他者に対する負担を最小限にせよ
 - (b) 他者に対する利益を最大限にせよ
 - (II) 寛大性の原則 (行為賦課型と行為拘束型において)
 - (a) 自己に対する利益を最小限にせよ
 - (b) 自己に対する負担を最大限にせよ
 - (III) 是認の原則 (表出型と断定型において)
 - (a) 他者の非難を最小限にせよ
 - (b) 他者の賞賛を最大限にせよ
 - (IV) 謙遜の原則 (表出型と断定型において)
 - (a) 自己の賞賛を最小限にせよ
 - (b) 自己の非難を最大限にせよ
 - (V) 含意の原則 (断定型において)
 - (a) 自己と他者との意見の相違を最小限にせよ
 - (b) 自己と他者との合意を最大限にせよ
 - (VI) 共感の原則 (断定型において)
 - (a) 自己と他者との反感を最小限にせよ
 - (b) 自己と他者との共感を最大限にせよ
- Leech (1983 / 池上・河上訳 1987 : 190)

(I) と (II) がそれぞれ他者と自己に対する未来の行動の負担と利益に関係するのに対して、(III) と (IV) はそれぞれ、話し手の発言が他者と自己についての何らかの善し悪しの評価を伝えるその度合いに関係し、例えば、「是認の原則」が祝賀という本質的に丁寧な言動で例証されうるし、また、「謙遜の原則」は、謝罪という本質的に丁寧な言動で例証されると説明している。更に、これらの原則や副原則のすべてが同等に重要であるわけではなく、対をなす原則 (I) から (IV) までのうち、(I) の方が (II) よりも、(III) の方が (IV) よりも、会話行動に対してより強力な制約であり、各々の原則の中では、副原則 (b) の方が副原則 (a) よりも重要度が低いという。また、これらの原則は、消極的なポライトネス (不一致を避けること) が、積極的なポライトネス (一致を求めること) より重要であるという一般的な原理を例証していると説明している。

また、Leech は、「ポリアナの原理」を提示し、「アイロニーの原理」と「冷やかしの原理」を副次的な原理として説明している。「アイロニーの原理」は、一見して丁寧のようには見えるが、実際は話し手を失礼にせしめる「二次的原理」であり、表面的には「協調の原理」

²⁴ Leech (1983 / 池上・河上訳、1987) では、„politeness“が「丁寧さ」と訳されているが、本稿では「ポライトネス」と記し、用語を統一する。

を破りながら、最終的にはそれを支持することによって、その機能を果たすので「アイロニーの原理」は機能障害的であるという。アイロニーが外見上、好意的な方法で不快な振舞いをする事(みせかけのポライトネス)であるのに対し、「冷やかし」として知られるタイプの言語行動は、外見上、不快な方法で好意的な振舞いをする事(みせかけの失礼)であると説明している。

更に、Leech は、過度のポライトネスは、優越性あるいはアイロニー的距離を示す効果を持ちうるので、ポライトネスの不足はその反対の効果、すなわち親密な関係を打ちたて維持する効果を持ちうるという。つまり、関係が親密になればなるほど、ポライトに振舞うことの必要性がなくなり、ポライトネスの不足は本質的に親密性のしるしとなりうるものであり、それゆえ、冗談で人に失礼に振舞うことができるということは、そうした親密な関係を打ちたて維持するのに役立つことになるからであると説明している。

Thomas (1995 / 田中他訳 1998 : 183) は、Leech のアプローチの最大の弱点として、行動指針²⁵の数を制限するための動機づけられた方向がないように見えることであり、理論上は、言語が用いられる際に見られるほんの小さな規則性を説明するために、そのつど新しい行動指針をこしらえることは可能であるが、そうすると、その理論は、事実上、反証のしようがないものになってしまうと述べている。しかし、Leech のアプローチは、異文化比較をしたり、ポライトネスというものの理解とそのストラテジーの使用における文化的相違を説明したりする際には有効であると評価している。

2.4.4 Brown and Levinson の「ポライトネス理論」

社会学者である Goffman(1967 / 浅野訳 1986:5)は、フェイス²⁶を、ある特定の出会いの際、ある人が打ち出した方針、その人が打ち出したものと他人たちが想定する方針にそって、その人が自分自身に要求する積極的な社会的価値であり、認知されているいろいろな社会的属性を尺度にして記述できるような、自分をめぐる心象(イメージ)であると説明している。Goffman のフェイスの概念を導入した Brown and Levinson(1987)は、ポライトネスを相手のフェイスの侵害を最小限にし、相手との対立や葛藤をなくし、円滑な人間関係を保つための言語的なストラテジーとして誰にも適応できる普遍的な概念であると捉え、社会・文化的な相違によってポライトネスの言語的な表現方式は変わってくると説明している。更に、人間には「ポジティブ・フェイス (Positive Face)」と「ネガティブ・フェイス (Negative Face)」の2つの基本的な欲求があると想定している。

以下では、宇佐美(2001、2002)を参考にしながら、彼らの鍵概念となる 1) 人間の基本的な欲求であるフェイス、2) フェイス侵害行為とストラテジーの選択、3) ポジティブ・ポライトネスとそのストラテジー、4) ネガティブ・ポライトネスとそのストラテジー、5)

²⁵ Thomas (1995 / 田中他訳 1998) では、maxim を「行動指針」と訳しているが、これは、主に「原則」や「公理」と訳されている。しかし、本稿では、訳者に従い「行動指針」と記す。

²⁶ Goffman (1967 / 浅野訳 1986) では、face を「面目」と訳されているが、本稿では「フェイス」と記す。

ほのめかしのストラテジー、を中心に説明していく。

1) 人間の基本的な欲求であるフェイス

Brown and Levinson は「ポライトネス理論」を説明するためにモデルパーソン (Model Person) を立てている。モデルパーソンは、一つの自然言語を流暢に話すという資質を備えており、「合理性 (rationality)」と「フェイス (face)」を賦与されているという。「合理性」とは、ある目的(ends)を達成するための手段(means)を導き出す推論の厳密に定義可能な方式(mode)を利用することができる能力を指す。フェイスは、「他人にじゃまされたくないという欲求」の「ネガティブ・フェイス (negative face)」と「他人に認められたいという欲求」の「ポジティブ・フェイス (positive face)」の2種類があるが、フェイスは人間の持つ基本的な欲求という普遍性を持つものであり、その中身は文化によって異なると述べている。ポジティブ・フェイス (positive Face) は、他者に理解されたい、好かれたい、賞賛されたい、他人に近づきたいというプラス方向 (外向) への欲求であり、ネガティブ・フェイス (negative Face) は、賞賛されないまでも、少なくとも、他者に邪魔されたり、立ち入られたくないという、マイナス方向 (内向) に関わる欲求である。

2) フェイス侵害行為とストラテジーの選択

Brown and Levinson (1987)、相手のフェイスを脅かす行為である「フェイス侵害行為 (FTA : Face Threatening Acts)」をせざるを得ないときに、「相手のフェイス侵害[FT(Face Threat)]度」を軽減するためにとる言語ストラテジーをポライトネスとして捉えている(宇佐美、2001)。FTA が持つフェイス侵害の度合いは「 $W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$ 」のような公式によって見積もられ、 FTA_x の重さ (W_x) は、話し手 (S) と聞き手 (H) の社会的距離の見積もり (D)、H が S に対して持っている力の見積もり (P)、その文化における FTA_x の負担の度合いの見積もり (R_x) を合わせて測定するという。D は対称的な社会的要素であり、P は非対称的な社会的側面である相対的力関係を意味する。 R_x は、行為者の自己決定への欲求と是認されたいという欲求(つまり、NF 欲求と PF 欲求)がどの程度侵害されることになると考えられるかによる、文化的かつ状況的に規定される負担の序列のことである (Brown and Levinson 1987 / 田中他訳 2011 : 99-100)。Brown and Levinson は、フェイス侵害度を見積もる基準を以下のような公式で表している。

$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$		
W_x :	フェイス侵害度 (FT 度)	S : 話し手 H : 聞き手
D :	話し手 (Speaker) と聞き手 (Hearer) の「社会的な距離 (Social Distance)」	
P :	聞き手 (Hearer) の話し手 (Speaker) に対する「力 (Power)」	
R_x :	特定の文化において、ある行為 (x) が聞き手にかける負担の度合い (absolute ranking of imposition in the particular culture)	

図 2-1 フェイス侵害度の見積もり公式 (Brown and Levinson 1987)

同一の話し手が場面や状況、相手によって違う言語行動をとるのは、その場その場における話し手の見積もりの結果が違うからであり、ある言語行動が文化によって違う評価を得るのは、文化によって重要に扱うものが違うからであると説明している。

フェイス侵害の度合いが見積もられたら、話し手はその度合いによって、まずその行為を行うか (Do the FTA) 行わないか (Don't do the FTA) を決定し、FTA を行う場合はフェイス侵害度によって、明示的に表現するか (on record)、ほのめかすか (off record) を決める。そして、前者の場合は、軽減行為を行わずに明さまに表現するか (baldly)、軽減行為を行うか (positive politeness または negative politeness) を選択する。ある行為を効果的に、または緊急に伝えたいという欲求が強い状況で、話し手は「軽減行為を行わず、あからさまに言う」といったストラテジーを使用するが、それ以外の状況では、聞き手に対して何らかの軽減行為を行う。これらのストラテジーの番号が大きくなるにつれ、フェイス侵害度は低くなる。図 2-2 で、こういうプロセスをまとめた。

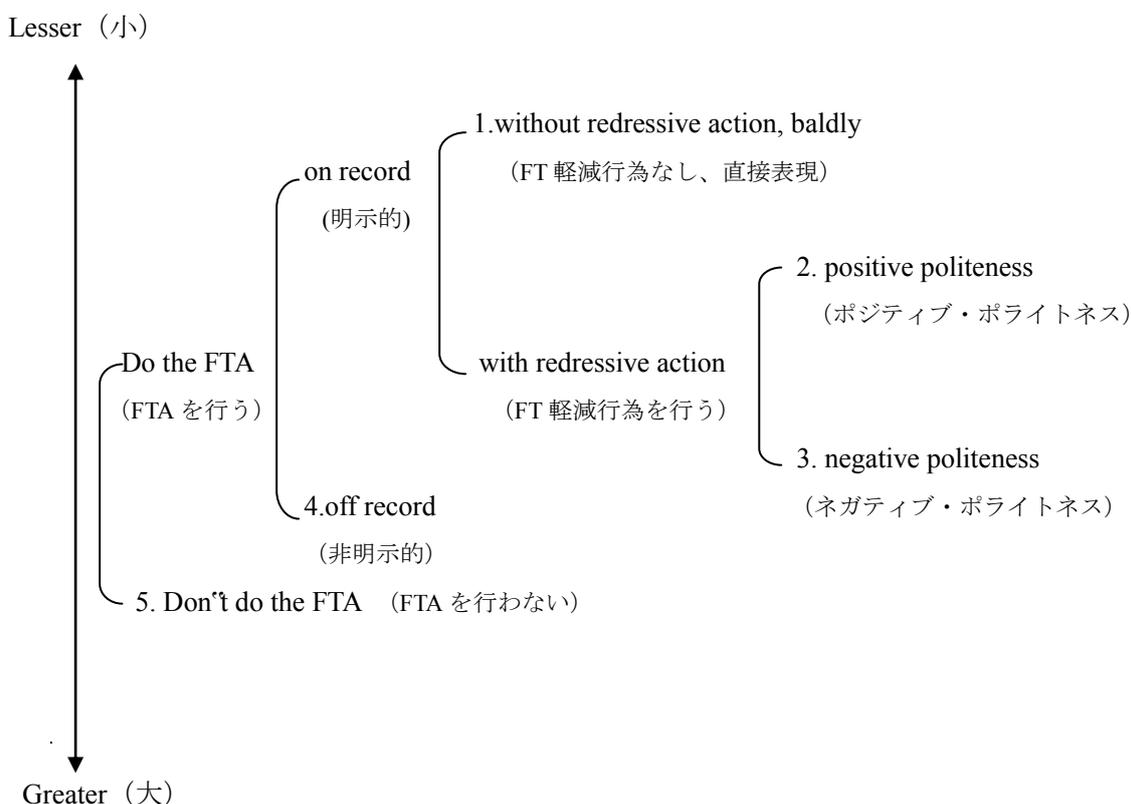


図 2-2 ストラテジーの選択を決定する状況 (Brown and Levinson1987 : 60、宇佐美 2001 から再引用)

3) ポジティブ・ポライトネスとそのストラテジー

ポジティブ・ポライトネス (positive politeness) とは、相手のポジティブ・フェイス (positive face) に向けられた補償行為を指し、聞き手の永続的な欲求(欲求から出た行為、その結果

に入れた物や評価)が常に望ましいものであると認められたい、という願望に沿うものである。同様の欲求(またはその一部)がこちらにもあることを伝えることにより、相手のそうした願望を満たす、といった行為などがそれに当たる。FTA により侵害されるフェイス欲求の補償であるというわけではなく、ポジティブ・ポライトネスにおける補償には、一般的に他者の欲求を認めたり、自・他の欲求の類似性を言及したり、といった行為も含まれる。ポジティブ・ポライトネスのストラテジー (positive politeness strategies : PPS) は 15 種類で、各ストラテジーをまとめると以下のようである。

話し手が聞き手との共通の基盤を主張せよ

- ・ストラテジー1 (PPS1) : 聞き手(の興味、欲求、ニーズ、持ち物)に気づき、注意を向けよ
- ・ストラテジー2 (PPS2) : (聞き手への興味、賛意、共感を)誇張せよ
- ・ストラテジー3 (PPS3) : 聞き手への関心を強調せよ
- ・ストラテジー4 (PPS4) : 仲間ウチであることを示す標識を用いよ
- ・ストラテジー5 (PPS5) : 一致を求めよ
- ・ストラテジー6 (PPS6) : 不一致を避けよ
- ・ストラテジー7 (PPS7) : 共通基盤を想定・喚起・主張せよ
- ・ストラテジー8 (PPS8) : 冗談を言え

話し手と聞き手は協力者であることを伝えよ

- ・ストラテジー9 (PPS9) : 話し手は聞き手の欲求を承知し気づかっていると主張せよ、もしくは、それを前提せよ
- ・ストラテジー10 (PPS10) : 申し出よ、約束せよ
- ・ストラテジー11 (PPS11) : 楽観的であれ
- ・ストラテジー12 (PPS12) : 話し手と聞き手両者を行動に含めよ
- ・ストラテジー13 (PPS13) : 理由を述べよ(もしくは尋ねよ)
- ・ストラテジー14 (PPS14) : 相互性を想定せよ、もしくは主張せよ

聞き手の何らかの X に対する欲求を満たせ

- ・ストラテジー15 (PPS15) : 聞き手に贈り物をせよ(品物、共感、理解、協力)

このようなポジティブ・ポライトネスのストラテジーがポライトネスの理論に取り込まれていることは、Brown and Levinson の「ポライトネス理論」の最も斬新な点として評価されている (宇佐美 1998、2001、2002、Usami2002)。

4) ネガティブ・ポライトネスとそのストラテジー

ネガティブ・ポライトネス (negative politeness) は、相手のネガティブ・フェイス (negative face)、つまり、自由な行動や興味を妨げられたり邪魔されたくないという欲求に向けられる補償的行為である。ポジティブ・ポライトネスは広範囲に用いられるが、ネガティブ・

ポライトネスの使用は特定範囲に限られ、FTA が相手に与えるに違いないと見られる負担を軽減する働きをする。ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー (negative politeness strategy) は本質的に回避するのが基本となるもので 10 種類のストラテジーが提示されている。

- ・ストラテジー1 (NPS1) : 慣習的に基づき間接的であれ
- ・ストラテジー2 (NPS2) : 質問せよ、ヘッジを用いよ
- ・ストラテジー3 (NPS3) : 悲観的であれ
- ・ストラテジー4 (NPS4) : 負担 Rx を最小化せよ
- ・ストラテジー5 (NPS5) : 敬意を示せ
- ・ストラテジー6 (NPS6) : 謝罪せよ
- ・ストラテジー7 (NPS7) : 話し手と聞き手を非人称化せよ
- ・ストラテジー8 (NPS8) : FTA を一般的規則として述べよ
- ・ストラテジー9 (NPS9) : 名詞化せよ
- ・ストラテジー10(NPS10) : 自分が借りを負うこと、相手に借りを負わせないことを、オン・レコードで表せ

5) オフ・レコードとそのストラテジー

オフ・レコード (off record) にも 15 種類のストラテジーが挙げられており、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーよりもっと聞き手のネガティブ・フェイスを満たすことができ、このストラテジーを使うことによって、話し手は行為に対する責任を避けることができる」と説明している。オフ・レコードは、「会話による含意を促せ」と「曖昧にまたは多義的に言え—様式の行動指針に違反せよ」という2つがあるが、ストラテジー1~10は前者に、11~15は後者に属する。

- ・ストラテジー1 : ヒントを与えよ
- ・ストラテジー2 : 連想のための手掛かりを与えよ
- ・ストラテジー3 : 前提に語らせよ
- ・ストラテジー4 : 控えめに言え
- ・ストラテジー5 : 大げさに言え
- ・ストラテジー6 : 同語反復を使え
- ・ストラテジー7 : 矛盾したことを言え
- ・ストラテジー8 : アイロニーを使え
- ・ストラテジー9 : メタファーを使え
- ・ストラテジー10 : 修辭疑問を使え
- ・ストラテジー11 : 多義的に言え
- ・ストラテジー12 : 曖昧に言え

- ・ ストラテジー13：過度に一般化せよ
- ・ ストラテジー14：相手(H)を置き換えよ
- ・ ストラテジー15：最後まで言うな、省略せよ

2.4.5 宇佐美の「ディスコース・ポライトネス理論」

宇佐美 (1998、2002) は、Brown and Levinson (1987) の「ポライトネス理論」は、言語形式の意味や機能という観点だけではなく、人間関係、社会・心理的距離、相手にかかる負担の度合い等、複雑に絡み合う社会的諸要因を考慮に入れ、それらが総合的に反映された「ポライトネス行動」を、人間の「フェイス処理行動」、すなわち、「対人コミュニケーション行動」として、より包括的、かつ、ダイナミックに捉えたと評価している。しかし、英語などの敬語を有さない言語と日本語などの敬語を有する言語のポライトネスを、個別言語の特徴に左右されない、真に公平な同一の枠組みで比較・検討できるものにするためには、以下のような問題点があると指摘している。

- (1) 発話行為レベル、多くて幾つかの発話行為の連鎖(sequences)レベルの分析に留まっており、より長い談話におけるポライトネスをうまく説明できない。
- (2) 方略的言語使用としてのポライトネスに重きをおいているにもかかわらず、基本的に、ポライトネスを文レベル、発話行為レベルで捉えているために、日本語などのように語用論的に制約力をもつ複雑な敬語体系を有する言語における「文レベル、発話行為レベルのポライトネス」をうまく説明できないものになっている。つまり、逆に言えば、そのことが、敬語を有する言語においては、特に、方略的言語使用は、文レベル、発話行為レベルには現れにくいという事実を明確にしている。
- (3) (1)及び(2)の事実が、文レベル、発話行為レベルでポライトネスを捉えることの問題点を露呈している。つまり、文レベル、発話行為レベルでポライトネスを捉えると、諸言語における文法構造の違いや、敬語を有する言語における敬語使用の原則の制約などが強く影響するため、諸言語のポライトネスを公平に比較・検討し、統一的に説明することが困難になる。
- (4) 英語などの敬語のない言語においても、厳然としてある、「社会言語学的規範」(sociolinguistic norms)が「話者の方略的な言語使用」に与える影響が、ほとんど考慮されていない。
- (5) ポライトネスを発話行為レベルにおけるフェイス保持のストラテジー(face-saving strategy)として捉えているため、一見、「フェイス侵害行為」(face Threatening Acts:FTA)がないように見られる「日常会話」(ordinary conversation)などにおける「無標ポライトネス」(unmarked politeness)、すなわち、「ある言語行動があつて当たり前で、それが欠如して初めてポライトでないと感じられる」ようなポライトネスが、うまく説明できない。
- (6) (5)で述べた、「特にポライトでもないが、失礼でもない」言語行動や、「ポライトでない」言語行動、つまり、「インポライトネス」をポライトネス理論の中で、どのように位置づけ、扱うのが提示されていない。

(7) フェイス侵害度(FT 度)の見積りの公式を導入した点は評価できるが、この理論は、どちらかという、話し手に焦点を当てたものになっている。例えば、フェイス侵害度(FT 度)の見積りに際しても、現実には、話し手の見積りと、聞き手の見積りが異なる場合もままある。そのずれの度合いによっては、話し手の意図に反して、聞き手が話し手の言語行動を、失礼だと受け取る場合もあるだろう。このような聞き手の側からの観点や話し手と聞き手の相互作用の観点、この理論には十分に組み込まれていない。

宇佐美(2001 : 24-25)より

宇佐美 (1998、2001、2002、2003b、2008) と Usami (2002) は、Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論のこのような問題点を解決し、より普遍的なポライトネスの理論を築くためには、諸言語に存在する「円滑なコミュニケーションのための言語行動」の原則を諸言語において公平に同じ枠組みで論じられるようにしなければならないと指摘している。そのためには、「社会言語学的規範や慣習に則った言語使用」と「話者個人の方略的な言語使用」、また両者の相互作用を考慮して、語用論的観点からポライトネスを捉える必要があるとし、談話そのものをポライトネス研究の対象としなければならないと主張している。また、ポライトネス理論の普遍性を求めるためには、談話レベルでの考察が必須であると、ポライトネスを対人コミュニケーション行動の一つと捉え、「相互作用」、「ダイナミクス」、「相対性」という観点を中心に体系化していくポライトネス研究へのアプローチとして、「ディスコース・ポライトネス理論 (Discourse Politeness theory)」を提唱している。

ディスコース・ポライトネス理論には、7つの鍵概念がある。1)「ディスコース・ポライトネス」、2)「基本状態」、3)「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」、4)「有標行動」と「無標行動」、5)ポライトネス効果、6)見積り差 (De 値) と、ポライトネス行動の量的適切性、ポライトネス効果の関係、7)「相対的ポライトネス」と「絶対的ポライトネス」である。以下、宇佐美 (2008) に基づき「ディスコース・ポライトネス理論」について概観する。

1) ディスコース・ポライトネス (discourse politeness)

「ディスコース・ポライトネス」とは、一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体である (宇佐美 2001、2002、2003b ; Usami 2002) と定義される。また、特定の「活動の型」²⁷の「失礼のない状態にあ

²⁷ 「活動の型」について、宇佐美 (2008a) は、トマス著、浅羽監修 (1998 : 205) より以下の部分を2次引用している。

「...レヴィンソン (1979 : 368) は、活動の型を次のように定義している。
... [活動の型] とは、境界のはっきりしないカテゴリーであり、その主たる構成要素は活動の目的によって定義され、社会的に構成され、制約されている。言いかえれば参加者や状況など、とりわけ許されている寄与の種類について、制約を持つ事象のことである。典型的な例としては、教育現場、就職のための面接、法廷尋問、フットボールの試合、ワークショップの活動、ディナー・パーティーなど。」

る談話の総体の典型」も指す（宇佐美 2008: 158-159）。

2) 基本状態 (default)

「基本状態」は、「ディスコース・ポライトネス理論」の最も重要な点の一つである。特定の談話の「基本状態」は、ポライトネス効果を相対的に捉えるために同定する必要があるものである。宇佐美は、この「基本状態」を「媒介変数 (parameter)」として扱うことによって、「ポライトネス効果を相対的に捉える」ということが、より具体化して理論に組み込まれたと述べている（宇佐美 2008: 160）。「基本状態」には、「特定の『活動の型』における談話の『失礼のない典型的な状態』と「その談話の基本状態を構成する要素としての『特定の言語行動や言語項目それぞれの典型的な状態』」の2種類がある。そして、「基本状態」として捉えるものとして、数多くの同じ活動の型の「失礼のない状態の談話」における「主要な言語行動の平均的な構成比率（分布）」、「各々の要素の平均的な生起率」、「典型的な談話展開パターン」といったものが挙げられている。

より具体的に言うと、「ある活動の型の談話における重要要素の構成比率の基本状態」とは、例えば、成人の初対面二者間会話では、スピーチレベルの構成比率が、敬体 6 : 常体 1 : スピーチレベルのマーカークなし 3、であるのが基本状態であるというような捉え方(宇佐美、2001b)を言い、「談話内の『特定の要素』の基本状態」とは、スピーチレベルという要素を例にとると、成人の初対面二者間会話においては「敬体使用率が約 6 割」であるのが基本状態であるというような捉え方(宇佐美、2001a)であり、「談話の展開パターンの基本状態」とは、依頼会話において、注意喚起→見込みの確認→補助ストラテジー→依頼発話という展開になるのが基本状態であるという捉え方(宇佐美 2001a)を言う。

当該の言語行動の「基本状態からの離脱度」を「有標性」と呼び、その「ポライトネス効果」は、有標性の度合いについての話し手と聞き手の見積もりによって、相対的に引き起こされるものであると捉える。

3) 有標ポライトネス (marked politeness) と無標ポライトネス (unmarked politeness)

「ディスコース・ポライトネス理論」では、ポライトネスを「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」の2種類に分けている。前者は Brown & Levinson (1987) の「ポライトネス理論」における「フェイス侵害度の軽減行為」としてのポライトネスを指し、後者は特定の状況で「あって当たり前で、それが現れないときに初めてそれがないことが意識され、ポライトではないと捉えられる」というようなタイプのポライトネスを指すという。「基本状態」は、「ポライトネス」の観点からは、「無標ポライトネス（相手のフェイスを侵害しない状態）」として捉えることができると述べている。

4) 有標行動 (marked behavior) と無標行動 (unmarked behavior)

「無標行動」とは、談話の「基本状態」を構成する要素としての言語行動であり、「有標

行動」とは、各々の要素の「基本状態」から離脱する言語行動、或いは、「基本状態」とは異なる談話レベルから見た一連の行動を指すという。「ディスコース・ポライトネス理論」では、各々の談話とそれを構成する諸要素の「基本状態」を基にして、そこからの有標行動の「動き」や「有標性（基本状態からの離脱度）」に着目して、「相対的ポライトネス」の体系化を試みると説明している。

5) ポライトネス効果 (politeness effect)

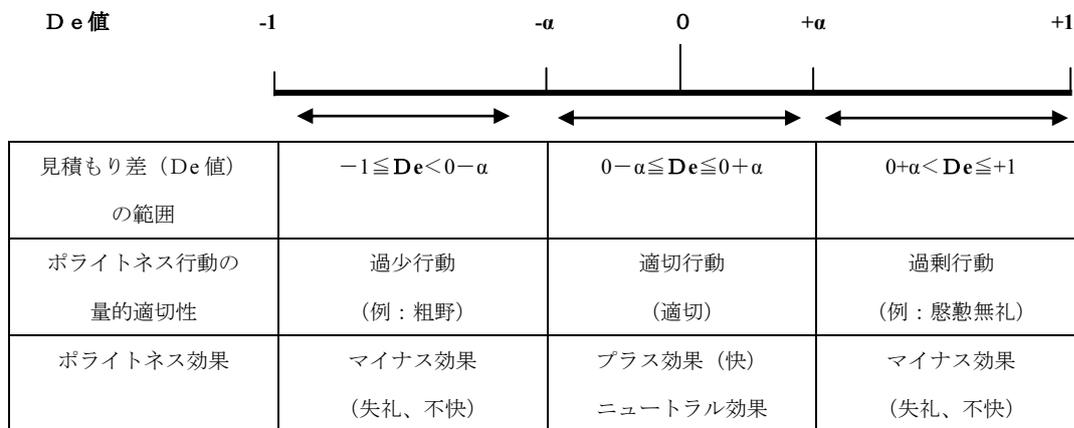
「ディスコース・ポライトネス理論」で説明されている「ポライトネス効果」とは、「談話の基本状態や話し手の言語行動、選択されたストラテジーに対する話し手と聞き手の『見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値)』によって引き起こされる聞き手側からの認知」を表わしている。「ポライトネス効果」には、心地よいまたは丁寧だと感じる「プラス効果」、特に丁寧でも不愉快でもない効果である「ニュートラル効果」、不愉快で失礼だと感じる「マイナス効果」の3つがあると説明している。

6) 「見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値)」と「行為の適切性 (appropriateness of behavior)」、「ポライトネス効果 (politeness effect)」の関係

「ポライトネス効果」を引き起こす話し手と聞き手の「見積もり差」は、①「ある有標行動のフェイス侵害度」についての話し手と聞き手の見積もり差、②「談話の基本状態」が何であるかについての話し手と聞き手の見積もり差、③「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」についての話し手と聞き手の見積もり差、の3種類があると述べている。

話し手と聞き手の見積もり差がないか、「許容できるずれ幅 ($\pm\alpha$)」の範囲内に収まる行動は、「ポライトネス行動の量的適切性」の観点からは「適切行動」とみなされ、「ポライトネス効果」の観点からは「プラス効果」、または「ニュートラル効果」を生むと説明している。しかし、話し手の見積もりが聞き手の見積もりよりも「許容できるずれ幅 (α)」を超えて少ない場合は、ポライトネス行動の量的適切性の観点からは「過少行動」となり、ポライトネス効果の観点からはマイナス効果（失礼、不快）を生むと言う。逆に、話し手の見積もりが聞き手の見積もりよりも「許容できるずれ幅 (α)」を超えて多い場合は、ポライトネス行動の量的適切性の観点からは「過剰行動」となり、ポライトネス効果の観点からはマイナス効果（慇懃無礼、失礼、不快など）を生むと述べている。

「見積もり差 (De 値)」と「ポライトネス行動の量的適切性」、「ポライトネス効果」の関係を、宇佐美 (2008: 162) より引用する (図 2-3)。



見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値) : $De = Se - He$

Se : 話し手 (Speaker) の「見積もり (estimation)」(以下の*参照)。仮に、0 から 1 の間の数値で表すものとする。

He : 聞き手 (Hearer) の「見積もり (estimation)」。仮に、0 から 1 の間の数値で表すものとする。

α : 許容できるずれ幅

* 「見積もり (estimation)」には、以下の3種がある。

- ① 「ある有標行動のフェイス侵害度」の見積もり
- ② 「談話の基本状態」が何であるかについての見積もり
- ③ 「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」についての見積もり

図 2-3 「見積もり差 (De 値)」、「行動の適切性」、「ポライトネス効果」(宇佐美 2008: 162)

例えば「慇懃無礼」という行為は、ディスコース・ポライトネス理論で解釈すると、「相手が、こちらが当該の状況で適切であると考えた言語行動よりも、『許容できるずれ幅 α 』を超えて、『丁寧な表現』を使用した」場合であると解釈できる。これは、通常ならば丁寧に振る舞わない場面でそのように振る舞ったということが考えられるため、「談話の基本状態」が何であるかについての見積もり差が『許容できるずれ幅 α 』を超えた、ということになる。

7) 相対的ポライトネス (relative politeness) と絶対的ポライトネス (absolute politeness)

「相対的ポライトネス」は、状況によって変わりうるポライトネスであり、「絶対的ポライトネス」は、敬語のように言語形式によってポライトネスの度合いが決められているものである。「ディスコース・ポライトネス理論」において、相対的ポライトネスを引き起こす状況は、ある特定の「談話」の「基本状態」からの離脱や回帰という言語行動の「動き」、特定の場面においてどのような言語行動が適切であると考えているかという「基本状態」、

「当該の言語行動や談話行動の有標性の度合い」及び「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」の話し手と聞き手の「見積もり差（ずれ）」によって説明できるという。

2.4.6 その他のポライトネスに関する先行研究

本節では、その他の「ポライトネス理論」を取り扱うが、主に、「インポライトネス (Impoliteness)」を主張した Culpeper(1996)、「ラポールマネジメント (rapport management)²⁸」を提唱した Spencer-Oatey (2000 / 田中他訳 2004)、ポライトネスの区別を提案した Watts(2003)を概観する。

Culpeper(1996)は、Brown and Levison(1987)の「ポライトネス理論」を踏まえ、フェイスの概念を用いて、インポライトネス(Impoliteness)の方法を以下の 5 つに分類した。1) 直接的に、明確に、相手のフェイスを脅かす「あからさまなインポライトネス(Bald-on-record impoliteness)」、2) ポジティブ・フェイスを脅かす言語行動の「ポジティブ・インポライトネス(Positive impoliteness)」、3) ネガティブ・フェイスを脅かす言語行動の「ネガティブ・インポライトネス(Negative impoliteness)」、4) ポライトネスの調和を乱す「皮肉・偽ポライトネス(Sarcasm or mock politeness)」、5) ポライトネスを避ける(Withhold the FTA)であるが、これらは相手のフェイスを攻撃する手段になると説明している。いままでの「ポライトネス」は、「円滑な人間関係の確立・維持のために機能した言語行動(宇佐美(2001:10))」として捉われ、研究されてきたが、Culpeper(1996)は、相手を攻撃し調和を乱す「インポライトネス (Impoliteness)」を研究対象とし、その正反対の概念を立てるため、Brown and Levison(1987)の「ポライトネス理論」を資料として用いている。

次に、Spencer-Oatey (2000 / 田中他訳 2004) は、文化とは、ある集団が共有し、その構成員あるいは他者による行動の「意味」の解釈に影響を与えるような姿勢、信念、行動的慣習、および基本的な前提・価値基準などの境界のはっきりしない(fuzzy)集合体であると定義し、「ラポールマネジメント(Rapport management)」および「文化」(culture)を議論の中心に据え、両者の相互関係を明らかにしようとする試みを行った。「ラポールマネジメント (Rapport management)」とは、対人関係の管理、つまり、調和の取れた社会関係を促進し、維持するため機能していることを指す。更に、「フェイス」という用語は、自己への関心を強調するのに対して、ラポールマネジメントという用語は、自己と他者間のバランスの方により強い関心を持ち、フェイスのみならず社会的権利(sociality rights)の維持・管理の問題も含まれると主張している。また、人々のストラテジーの使用に影響を与える重要な要因の一つは、ラポールへの方向性 (Rapport orientation) であるが、これは、「自分のフェイス欲求および社会的権利をサポートしようとする方向性」と、「相手のフェイス欲求および社会的権利をサポートしようとする方向性」の 2 つの基本的方向性があると説明している。

²⁸ Spencer-Oatey (2000 / 田中他訳 2004 : 11) は、「ラポールマネジメント」という用語を使うことについて、「フェイス」という用語は自己への関心を強調するのに対して、「ラポールマネジメント」という用語は、自己と他者間のバランスの方により強い関心があることを示唆していると説明する。

Spencer-Oatey は、自身が提唱する枠組みは、Brown and Levinson(1987)のモデルと、主として 2 つの点で異なっているとした。第 1 に、フェイスを主として個人的なものとして概念化する彼らのモデルと異なり、諸関係の維持・管理に関して社会的もしくは相互作用的な視点を導入しており、第 2 に、フェイスに対する欲求(ここでは、個人的/社会的価値の意識が問題となる)と社会的権利(ここでは、個人的/社会的権利の意識が問題となる)を区別しているため、「ラポールマネジメント(Rapport management)」では、Brown and Levinson(1987)のネガティブ・フェイスという概念は、フェイスに対する欲求としてではなく、社会的権利として扱われると主張している。

また、Watts(2003)は、politeness という一般的な用語をより広い意味で使用する点が混同されやすいという点を指摘し、伝統的に社会において行われてきた社会的規範による礼儀やエチケットなどを扱うもので、つまり、日常的な概念としてのポライトネスを「ポライトネス 1 (First-order politeness)」、言語使用のルールの一般化を目指す、つまり、科学的概念化を経た専門的概念としてのポライトネスを「ポライトネス 2 (Second-order politeness)」として区別することを提案している。更に、Watts(2003)は、社会实践の相互行為の中で相互のフェイス保持のためのフェイスワークが行われ、平衡を維持している無標の状態の行為を Politic behavior(ポライトネス 2 に相当)と呼び、また、これまで扱われてこなかった「失礼(im-politeness)」という概念を研究しているが、「失礼」という問題は、ポライトネスに関して社会的に期待されている規準や規範に違反していることによって起こる現象である。

また、Fraser(1990)は、ポライトネスに、対話者の権利と義務の相互作用を強調する「会話の規約(conversational contract:CC)」をいれることを主張しているが、Thomas (1995 / 田中他訳 1998 : 193) は、Fraser (1990)のポライトネス・モデルは、Leech(1983)や Brown & Levinson(1987)のモデルに比べ非常に大きざっぱであるが、ポライトネスに権利と義務という次元を入れたことは評価している。

2.4.7 ポライトネス理論のまとめ及び比較

Lakoff(1975)は、女の使うことば、女に関することばとポライトネスと結び付け、女の使うことば、女に関することばを決定する要因は、性ではなく現実社会における力であり、学問分野で女ことばを使う傾向が一番少ない理由は、男女の役割、理想像に関して他の一般社会よりは平等主義があるからであると主張している。このような現実社会での暗黙のルールが、男よりも女のほうに遙かに大きな精神的負担をかけており、女は男よりも「ポライト」であることを強要していると説明し、礼法(距離を保て)、敬意(選択の自由を与えよ)、親愛(共感を示せ)をポライトネスのルールとして立てている。一方、Grice(1975)は、人々はやりとりの際しておおむね一定の規則性に行動しており、会話による含意がどのように生み出され、どのように解釈されるかを説明している(Thomas 1995)。また、Leech(1983)は、Grice(1975)の「協調の原理」を補うものとして「ポライトネスの原理」を捉えている。「ポライトネスの原理」として、「気配りの原則」、「寛大性の原則」、「是認の原則」、「謙遜の原

則]、「含意の原則」、「共感の原則」を設けた。更に、対をなす下位分類を設けて説明し、「ポリアンナの原理」と、その副次的な原理である「アイロニー原理」や「冷やしの原理」も提案している。しかし、Leech(1983)の「ポライトネスの原理」は、Thomas(1995)が指摘するように、原理の数を制限するための動機づけられた方向がないという弱点がある。Grice(1975)とLeech(1983)の「ポライトネス理論」に比べ、Brown and Levinson(1987)のポライトネス理論は、「ポライトネス」という概念を一番包括的に捉えた理論であると考えられる。

Brown and Levinson(1987 / 田中他訳 2011 : 5)は、Grice(1975)の「協調の原理」が、ポライトネスの諸原理を本質的に対等なものとして設定しようすることは誤りであり、大きく異なる位置づけを持つ原則であると主張し、「協調の原理」の本質的に重要な仮定は、「理由なしには、合理的効率性(Rational efficiency)から逸脱することはない」ということであるが、ポライトネスの諸原則は、原理づけられた逸脱のための理由となるにすぎないという。彼らは、Goffman(1967)のフェイスの概念を導入し、人間には相手に認めてもらいたいというポジティブ・フェイスと、自らの行為を妨げられたくないというネガティブ・フェイスの基本的な欲求があり、フェイスを侵害する行為を行なう際、軽減するためにとる言語ストラテジーをポライトネスとして捉えている。フェイスを侵害する行為が持つフェイス侵害の度合いは「 $W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$ 」のような公式によって見積もられ、フェイスを侵害する行為の重さは、話し手と聞き手の社会的距離、聞き手が話し手に対して持っている力関係、その文化におけるフェイスを侵害する行為の負担の度合いを合わせて測定するという。また、フェイス侵害行為の侵害の度合いによって、1. FT 軽減行為なし、直接表現、2. ポジティブ・ポライトネス、3. ネガティブ・ポライトネス、4. 非明示的、5. FTAを行わない、のストラテジーが用いられていると説明している。

彼らが提唱する「ポライトネス理論」は普遍理論であるが、Ide(1989)は、欧米の言語と文化を背景にしてつくられたポライトネスに関する普遍的といわれる言語使用の理論は、日本など東アジアの言語などに存在する敬語を歪めずに扱うにはふさわしくないと批判し、更に、日本は「わきまえ(volition)」の社会であり、これは場によって決められていて義務的なことが多い習慣的決まりであると主張している。これらの主張に反論し、日本のような敬語使用の原則がある縦社会だとしてもBrown and Levinson(1987)のポライトネス理論が適用されると主張した研究もある(Fukuda and Asato 2004、Pizziconi 2003等)。

Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論」によって、批判と支持の研究が多く行われてきたが、その理由は、宇佐美(1998、2002)が評価するように、彼らの理論が、複雑に絡み合う社会的諸要因を考慮に入れ、それらが総合的に反映された「ポライトネス行動」を、人間の「フェイス処理行動」、すなわち、「対人コミュニケーション行動」として、より包括的、かつ、ダイナミックに捉えていたからであろう。

その後、宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008)とUsami(2002)の「ディスコース・ポライトネス理論」、Culpeper(1996)の「インポライトネス(Impoliteness)」、Spencer-Oatey(2000)

の「ラポールマネジメント(Rapport management)」、Watts(2003)は、Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論」の問題点を踏まえた上で、斬新な、あるいは、より進歩された「ポライトネス理論」を提案している。

Culpeper(1996)は、相手を攻撃し調和を乱す「インポライトネス(Impoliteness)」を提唱しており、Spencer-Oatey(2000)は、フェイスを守る欲求および社会的権利の維持・管理を含むことを「ラポールマネジメント(Rapport management)」と呼び、ラポールを維持・管理するためのストラテジー、ストラテジーの使用に影響を与える要因(ラポールへの方向性、状況的変数、語用論的慣例)、ラポールマネジメントの文化的差異等について説明している。また、Watts(2003)は、ポライトネスを日常的な概念と専門的な概念に分けて研究する必要があると主張している。

一方、宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008)と Usami(2002)は、Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論」は、発話行為レベルの分析に留まっており、更に、話し手中心の分析である等の問題点を指摘した上で、より長い談話レベルにおける要素も取り入れる必要があるとし、「ディスコース・ポライトネス理論」を提案している。「ディスコース・ポライトネス理論」には、1)「ディスコース・ポライトネス」、2)「基本状態」、3)「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」、4)「有標行動」と「無標行動」、5)ポライトネス効果、6)見積もり差(De 値)と、ポライトネス行動の量的適切性、ポライトネス効果の関係、7)「相対的ポライトネス」と「絶対的ポライトネス」の7つの鍵概念があり、「基本状態」を中核に、相対的な観点からポライトネスを捉えている。「ディスコース・ポライトネス理論」の枠組みでは、「フェイス侵害行為」がないように見られる「日常会話」(ordinary conversation)などにおける「無標ポライトネス」(unmarked politeness)、すなわち、「ある言語行動があつて当たり前で、それが欠如して初めてポライトでないと感じられる」ようなポライトネスを説明することが可能であり、更に、「特にポライトでもないが、失礼でもない」言語行動や、「ポライトでない」言語行動、つまり、「インポライトネス」も「見積もり差」と「ポライトネス効果」により説明できる等、特に、聞き手側の観点を「ポライトネス理論」に取り入れたことは、Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論」を進歩させた理論であると考えられる。また、異文化間の「基本状態」を想定し、話し手と聞き手の両側の観点を取り入れ、相対的にポライトネスを捉え、解釈すると、より正確かつ明瞭な異文化間の特徴及びメカニズムを解明することができると考えられる。

Fraser and Nolan(1981:96)は、どんな文もそれ自体ではポライトでもインポライト(無礼)でもなく、私たちがあつた表現を無礼だと判断することはよくあつたが、礼儀正しいかどうかを決めるのは、表現そのものではなく、その表現が使われる状況なのであつたと述べている。Brown and Levinson(1987)「ポライトネス理論」と宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008)と Usami(2002)の「ディスコース・ポライトネス理論」は、「ポライトネス理論」の中でも、対人配慮行動を、総合的かつ包括的に用いているため、本研究は、これらの「ポライトネス理論」を枠組みにして、考察を行うこととする。

2.4.8 「謝罪」と「ポライトネス理論」の関係

Brown and Levinson(1987/ 田中他訳 2011 : 263-267)によると、謝罪は、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー6に属し、FTAを行うことに対して謝罪をすることによって話し手は聞き手のネガティブ・フェイスを侵害することを望んでいないことを伝え、それによって、その侵害を部分的に埋め合わせることができる行為であると述べている。また、話し手は自分が聞き手のフェイスを侵害しているということを率直に認める場合があるが、文化によっては、「謝罪定型表現」を用いず、侵害行為をあからさまなオン・レコードで認めることが、謝罪の通常の方法となる場合もあると報告している。更に、話し手は、聞き手のネガティブ・フェイスを侵害することが本意ではないことを示したり、自分にはFTAを行うやむを得ない理由(例えば、自分自身の能力上の問題)があると主張したりして、それによって、ふつうの状況であれば、話し手が聞き手のネガティブ・フェイスを侵害することを考えもしないはずであるということを示すことができるという。最後の段階では、話し手は聞き手の許しを請うかもしれないし、あるいは、そこまではしないにしても、責任解除、すなわち、当該のFTAにおいて生じる借りを「帳消し(acquittal)」にしてくれるよう求めるかもしれないと説明している。

また、滝浦(2008 : 117)は、日本語の詫び表現を、Brown and Levinson(1987)のフェイス侵害度の見積もり公式を用いて解釈を試みている。「すまない」類が「社会的な距離 (Social Distance)」に関する「遠」という特徴をマークし、「申し訳ない」類が「力 (Power)」に関する「上」という特徴をマークすることを示し、それらを有標と見るならば、「ごめん」類が無標の形式として、「社会的な距離 (Social Distance)」に関する「近」と「力 (Power)」に関する「下」をともにマークしていることを見ることができると説明し、こうした知見は、D・P・Rの要因分析によってはじめて得ることができるという。

一方、大谷(1998)は、謝罪を、謝罪者が被謝罪者の Negative Face を脅かしたことを認識し、それが謝罪者にとって不本意であり、何らかの方法でそのFTAを軽減したいという気持ちを伝える行為であるため、被謝罪者の Negative Face を守ろうとする Negative Politeness strategy となるが、同時に謝罪者が自らの非を認めるわけであるので、謝罪者にとっては、良く思われたいと思う Positive Face を自ら脅かす行為でもあると述べている。

謝罪は、自分と相手のフェイスを守りたいという欲求と自分と相手のフェイスを侵害したくないという欲求が同時に現れる複雑で微妙な言語行動であるため、単なる、謝罪は、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーだと定義付けるのは問題があると考えられる。ここで、ポライトネス理論の観点からの「謝罪」という言語行動を捉えるため有効な理論は、宇佐美(2008:18-19)が提唱している「ディスコース・ポライトネス理論」の概念の一つである「フェイス均衡原理(Face-balance principle)」であると考えられる。この原理は、「フェイス侵害行為」だけでなく「フェイス充足行為」を加えて捉え、更に、「人間関係の中・長期的な維持の必要性、希望、見通しの有無」という、よりマクロなレベルから話者を捉えている。これは、ある会話におけるフェイス侵害度の不均衡を、次の

会話で解消することも可能であるという捉え方である。

本研究では、「フェイス侵害行為」や「フェイス充足行為」の相反している性質が同時に行われていると考えられる「謝罪」という言語行動を、謝罪する側と謝罪される側の相互作用の観点から捉え、考察していくこととする。

2.5 談話における先行研究

本章では、談話レベルで「謝罪行動」を分析するため、談話に関する先行研究を概観した上で、本研究で捉える談話について説明していく。

文よりも大きな単位を扱う分野は、ヨーロッパでは「テキスト言語学」、アメリカでは「談話分析」という呼称がよく用いられている。これはヨーロッパの言語学が古典文献を扱う中で生まれ、アメリカの言語学が、ネイティブ・アメリカンの話し言葉を記録、解析することから生まれたことを考えると自然なことだと考えられる。

南(1972)は、「談話」と呼ぶ一つの仮定的な文章論上の単位をたて、テキスト全体の文章をその談話にあたるいくつかの小部分に切り、A.その部分の前またはあとのはっきりしたポーズ。B.その部分自身内部の連続性²⁹。C.その談話(にあたる部分)に現われる各センテンス(にあたる発話)の話し手および聞き手が一定していること。D.その談話(にあたる部分)のコミュニケーション上の Function が一定していること³⁰。E.その談話(にあたる部分)の、ことばの調子が一定していること³¹。F.その談話(にあたる部分)の話題の性格が一定していること³²を作業基準として設定し、説明している。中田(1990)は、談話をことばによるはたらきかけ(機能)のやりとり、たとえば何かを伝える(伝達)、何かをしてくれるよう頼む(依頼)、あるいはそれに対してこたえる(応答)、といったはたらきかけのやりとりとしてとらえる立場から、談話を定義付けている。橋内(2004)は、形式上も意味上も全体としてまとまりのある言語表現がテキストであると捉えているが、その構成要素として、同じ主題で貫かれている統一性(unity)や、文と文の間に文法上・語彙上の結びつきがある結束性(cohesion)を挙げている。

一方、「談話」と「テキスト」を区別する Stubbs(1983 / 南出・内田 1989:11)は、「書記言語によるテキスト(written text)」対「音声言語による談話(spoken discourse)」とし、換言すれば、「談話」は「相互作用的談話(interactive discourse)」を、「テキスト」は声に出して話すように意図されていようが「非相互作用的独自(Non-interactive monologue)」を示すと説明している。박영준(2004)は、大きさにより区別しているが、テキストを談話より大きい単位として捉え、談話を「話し手と聞き手が、一つの話題、事件、テーマについて交換する言語単位、または、2 つ以上の文で構成され、凝集性 (semantic coherence)、結束構造

²⁹ 一つの談話にあたると思われる、会話の文章のある部分それ自体の中に、相当長い、はっきりしたポーズ—話の中断—がないこと。

³⁰ たとえば、あいさつ、用談、雑談、感情の直接表現といったようなこと。

³¹ たとえば、ふつうの調子、あらたまり、くだけなど、もちろん、多少の変化はありうる。

³² たとえば、日常生活に関することがら、世間話、他人のうわさなど、もちろん、多少の変化はありうる。

(bindingness, cohesion)、意味性 (meaningness) を持つ言語単位である」と定義し、一つの談話は一つの単一の意味を表し、基本的に話し言葉の比重が大きいと述べている。一方、テキストとは、「凝集性、結束構造、意味性に、さらに完結性(completeness)と正体制(identityness)を持つもので、談話より大きい言語単位である」と定義し、書き言葉により多く用いられていると説明している³³。

また、談話を「話し言葉」か「書き言葉」か区別せず、広い意味で使われるものとして捉える立場がある。メイナード(1997)は、談話を構造主義の観点から捉える Stubbs(1983)の定義³⁴を挙げて、構造主義の観点からみた「談話」とは、あるべき構造によって支えられ、首尾一貫性を伴った言語行動の(記録の)断片であると説明し、談話を機能論の観点から捉える Brown and Yule(1983)の定義³⁵を挙げて、機能論からみた「談話」とは、ある構造に支えられた言語表現の断片というより、使用される言語行動の「実際」の断片ということになると説明している。そして、談話を「実際に使われる言語表現で、原則としてその単位を問わない。単語一語でも談話と言えるが実際には複数の文からなっていることが多く、何らかのまとまりのある意味を伝える言語行動の断片である(メイナード、2004 : 12-13)」と定義している。更に、メイナード(2004)は、「話し言葉」と「書き言葉」を含めて「談話」として捉え、談話現象が、コミュニケーションの出来事として成り立つためには、当事者が、一貫性がある、つまり、ひとまとまりであるという意識を持つ必要があると述べている。一貫性(coherence)とは、いわゆる首尾一貫性のことで、談話全体のまとまりを意味し、談話の前後に出てくる要素を結び付けることで、特に言語表現の機能の一種を意味することが多いと説明している。更に、談話を、進行中の主体と相手との相互行為として理解するなら、そのプロセスを重視し、構造は構成という行為の結果であるとも見ることができるといふ。

更に、テキストを文法・形式上の単位ではなく、意味・機能の単位として捉え、定義しているものがある。まず、Halliday and Hasan(1976 / 安藤他訳 1997 : 9-11)は、テキストという語は、話しことばや書きことばに関係なく、運用されている言語の単位であるが、文法の単位及び長さで定義されるものでもなく、形式ではない、意味的(semantic)な単位である

³³ 박영순 (パクヨンスン 2004) のいう結束構造は、二つ以上の文が結合して談話を構成し、二つ以上の談話が集まってテキストをなす際に、文と文、談話と談話を互いにつなげて一つの談話やテキストとして結束してくれるもので、談話やテキストの内容、または意味の一貫性と連関性を維持する性質を指すという。凝集性は主題や意味が一つとして集まる性質のことで、談話及びテキストが一つの大きな主題や意味で統一されることを表すとす。意味性は、一つの談話やテキストが全体的に何らかの意味を成さなければならないことを指すと述べている。完結性と正体性は、テキストのみの構成要素で、完結性とは一つの言語的表現が完結することを指し、正体性は、テキストがどのようなジャンルであり、どのような主題を持ち、どのように構成されているかを表すものであると説明する。

³⁴ Stubbs(1983 / 南出・内田 1989:2)は、Discourse Analysis(1983:1)で、discourse は自然に起きる現象(naturally occurring)で、文や節より上のレベルの言語(language above the sentence or above the clause)であると定義している。

³⁵ Brown and Yule (1983)は、文を超えた単位としての談話ではなく、人間生活に於いて役割や機能を果たす行為としての談話の重要性を指摘し、言語の機能的分析なくしては有効な談話分析はないという。(メイナード(1997)再引用)

と説明している。また、テキスト内の結束性、つまり、テキスト性は、構造以外のものに依存し、結束性(cohesion)という用語は、非構造的な、テキスト形成的な関係のことを指すが、この関係は、意味的な関係であると述べている。そして、テキスト性を理解するために、一番重要な概念である結束性(cohesion)は、ある要素を先行要素と結びつけるために存在する可能性の領域であり、意味関係の集合、意味的な手段、更に、関係概念であるという。次に、Halliday and Hasan (1985 / 筧壽雄訳 1991 : 83)は、テキストとは機能的な言語であると定義し、機能的とは、あるコンテキストにおいて、なんらかの仕事をしている言語を意味するといひ、特に、テキストとコンテキストは非常に密接に関連していると強調している。また、結束性(coherence)への重要な貢献は、結束作用(cohesion)によってなされるが、テキストのある部分を他に結びつけるために、(テキスト形成的メタ機能の一部として)すべての言語に備わっている一組の言語的手段が結束作用であると定義している。また、Weinrich(1976 / 脇阪他訳 1984:4) も、あるテキスト中の語のテキストの意味あるいは意義が生まれてくるのは、それぞれのコード的意味をもっている語が互いに文脈(kontext)を形成し、それぞれの協調性と非協調性とを互いに制限しあっているからであると説明し、テキストとコンテキストの関連性を述べている。

一方、「談話」と「文章」の下位単位を設けて分析を行っている研究もある。ザトラウスキー(1993 : 71-75)は、「会話」と「談話」という単位に加えて、「談話」内部の展開の仕方をより詳細に捉えるために、「話段」という単位を導入するという。「話段³⁶」は、2つの発話からなる「応答ペア」を発話の発話集合に当てはめようとしたものであり、それぞれの発話集合を、例えば、「勧誘の話段」、「勧誘応答の話段」とすることによって、発話がどのように関係づけられているかを捉えることができるようにしたと説明している。つまり、「話段」は、一人の話者の「実質的な発話」によって作られるものではなく、二人の参加者の複数の「相づち的な発話」と「実質的な発話」がまとまることによって作られるものであると述べている。佐久間他(1997)は、文字によるものは「文章」、音声によるものは「談話」と区別し、文・単語は、抽象形態の小さな単位で、文章・談話は実現形態の最も大きな単位であり、文章・談話は、ことばを現実のコミュニケーションの中に位置づけて捉えることによって成り立つ単位であると述べている。更に、佐久間(2006)は、「文章」と「談話」は、それぞれ、文字と音声を主な伝達媒体とする最大かつ最も具体的な言語単位であるとし、「文章・談話論」を日本語学の中に位置づけるには、言語行動をより包括的に分析・記述する有効な単位について、発話された瞬間に参加者の記憶へと移行する「談話」と、文字列として定着する「文章」の単位との異同の検討こそが、不可避の重要課題であると主張している。また、文章・談話の分析単位について、コミュニケーションの具体的な実現形態という側面から考えると、「文を超える単位」である「段」という話題のまとまりの統括機能を有する単位の重要性が浮上し、「段」とは「言語情報の伝達単位」とであると説明している。

³⁶佐久間(1987a、1992a)の「文段」・「話段」という概念を「話し言葉」の分析に発展させたものである。

以上で概観したように、「談話」や「テキスト」の用語の定義や捉え方は、研究観点により異なっているが、「文より大きい単位」として捉えることは共通しており、その単位を認定し、更に、談話の構成要素などを解明しようとしている。

本研究は、「謝罪行動」を「謝罪定型表現」や一発話、一文レベルの分析に留まらず、より長いレベルである「談話」レベルの分析を行う。上記で概観したように、文より大きい言語単位を表す言葉には、書き言葉は「テキスト」という用語が、話し言葉は「談話」という用語が多く用いられており、本研究の分析対象は、話し言葉で、実際の会話のやりとりを分析しているため、「談話」という用語を用いる。また、Halliday and Hasan(1976、1985)に従い、「談話」を、形式ではない、意味的(semantic)な単位で、結束性(cohesion)と結束構造を持つ意味的なまとまりであると捉える。

2.6 本研究で用いられる研究方法に関する先行研究

Sapir(1921 / 泉井訳 1957:2-6)は、ことばは、長い年月の間持続した社会慣習の所産として、社会集団の純粋に歴史的な遺産であるから、一社会集団から他の社会集団へ移るにつれて、当然、無限に変異する人間活動であるとし、言語とは、任意に造られた記号の体系によって、観念、情緒、または欲望を伝達するための、純粋に人間的で、非本能的な方法であると定義付けている。また、Russell (1940 / 毛利訳 1973:391)は、人間の言語活動もわれわれの経験する事実であるから、コトバの説明に心理的側面を重視すべきであると述べている。言語、コトバは、人間を人間らしくする最も大事な手段であるため、これらを解明する様々な研究活動が行なわれ、形式的な側面、意味的な側面、心理的な側面等で活発に研究されてきた。更に、話し手中心の研究から聞き手の反応を視野に入れて研究しようとする流れが起こり、相互行為・相互作用という観点が言語学の重要な研究分野になってきた。Herriot(1970 / 管野訳 1975:87)は、スピーチ、あるいは言語行動は、2つの方法で取り扱われることができるとし、第1に、他人による、さまざまな行動に対する手がかりとして作用する顕在的行動として、第2に、その言語行動を規制しているプロセスに対する行動的証拠としてであると主張している。また、スピーチが手がかりとして考慮されるならば、それによって結果するところの聞き手の行動が、定義によって、まさに研究されるべき事柄であると指摘し、その手がかりに対して、聞き手の反応を規制していることに含まれているプロセスが、明らかに関心の的となるという。

このように話し手と聞き手の言語行動の相互作用の根本的な問題を研究したのが、Sperber and Wilson(1986)の「関連性(relevance)³⁷理論」であると考えられる。人間の認知は関連性が最大になるようにできていると主張したが、その意味するところは、認知資源(cognitive resource)が、その出所が内在的なものであれ外在的なものであれ、利用しうる最も関連性のある入力処理に割り当てられる傾向があるということである。言い換えれば、

³⁷ ある想定がある文脈中で何らかの文脈効果をもつとき、そしてそのときに限りその想定はその文脈中で関連性をもつ(Sperber and Wilson 1986 / 内田他訳 1999:147)。

人間の認知は、それが処理する入力 of 累積関連性(cumulative relevance)が最大になるようにできているということである(Sperber and Wilson 1986 / 内田他訳 1999:319)。

本研究は、会話³⁸の研究におけるアプローチを採用しており、実際にやりとりされた会話を研究対象とし分析を行っている。以下では、本研究の研究手法である会話の研究におけるアプローチを概観した上で、本研究の調査方法であるロールプレイに関する先行研究を説明し、最後に、日本と韓国の文字化システムについて概観する。

2.6.1 会話の研究におけるアプローチ

会話の研究は、研究目的に応じて多様な分野から研究されてきたが、本章では会話の研究における研究方法を、エスノメソドロジーストによる「会話分析」、語用論的な立場からの「談話分析」のアプローチを概観した後、本研究で用いる宇佐美の「総合的会話分析(会話分析への言語社会心理学的アプローチ)」を詳細に説明する。また、これらのアプローチを比較し、本研究で「総合的会話分析(会話分析への言語社会心理学的アプローチ)」を用いる理由について述べる。

更に、本研究は日本と韓国の対照研究であり、相互作用の観点で分析を行うため、民族誌的な基盤を見出した「コミュニケーションの民族誌」や会話の相互行為や解釈を強調する「認知と相互行為の社会言語学」を概観して、考察の範囲を広げたい。

2.6.1.1 コミュニケーションの民族誌

Hymes(1974 / 唐須訳 1979:15)は、「コミュニケーションの民族誌(ethnography of communication)」という用語は、その基盤が民族誌的であり、その範囲とそれが扱う対象が一定の形式を持った複雑さを持っているという点で伝統的(communicative)であるような研究が必要とする研究領域を示し、その実行を奨励することを意図していると説明している。

更に、Hymes (1974)は、研究領域に関して、言語活動に固有の型を見分けるために現場のコンテキストの中で直接に言語の使用を研究することが必要であると主張し、言語活動に固有の型は、文法、パースナリティ、社会構造、宗教などの個々の研究では扱えられないものであると述べている。また、基盤に関しては、文化と社会の中における言語の位置が評価されるべき説明の枠組みを与えるのは、言語学ではなく民族誌であり、言語ではなくコミュニケーションであるとし、文化的価値、社会制度や社会形態、役割やパースナリティ、それにある地域社会の歴史や生態形などの諸側面は、伝達事象(communicative event)やその型との関連で検討されるべきであると指摘している。

このアプローチは、言語を抽象化された形、あるいは、地域社会の抽象的対応物とも考えず、伝達事象の流れと型の中にあるものとして捉え、「コミュニケーションの民族誌」は、

³⁸ Levinson(1983 / 安井・奥田訳 1990:356)は、会話を「二人ないしそれ以上の参加者が自由に代わる代わる交代して発言をする、日常どこでも広く行なわれている種類の話である」と定義している。

経験的、比較的方法で、本来の言語学理論の基礎をなす多くの概念を扱っている。

また、Hymes(1974)は、言語と社会生活の相互作用のモデルや理論を開発するためには、相互作用の十分な記述を強調し、そのような記述は、新しい問題に答え、馴染み深い問題に新しい焦点をあてるために、その両学問の通常の実践を、一部では結びつけるが、部分的には両方にわたり、また、部分的にはその両方の間で独自に築き上げるようなアプローチが必要とされると主張し、そのような研究が、コミュニケーションの民族誌と呼ばれているものの基本的要素であると説明している。

「コミュニケーションの民族誌(ethnography of communication)」の基本的概念は、話し方、流暢な話し手、発話状況、発話事象、発話行為、発話事象及び発話行為の要素、ことばの規則(関係)、発話の機能であり、これらの基本的概念が「SPEAKING」というモデルで具体化している。「SPEAKING」は、言語の分析に關与するものとみなされる言語事象(Speech Event)の8つの主要構成因子を表す単語の頭字語で、①状況(Situation)、②参加者(Participants)、③目的(Ends)、④行為連鎖(Act Sequence)、⑤基調(Key)、⑥媒体(Instrumentalities)、⑦規範(Norm)、⑧ジャンル(Genre)という構成になっている。これらの構成因子は、言語使用と直結しており、各々の文化や下位文化ごとに異なる様相を見せることによって、結果的に談話の生成と理解に決定的な役割を果たせることになる(Hymes 1974 / 唐須訳 1979 : 67-95)。

次に、Hymes (1974 / 唐須訳 1979 : 128)は、妥当なアプローチというのは、能力の4つの側面を区別し探求しなければならないと指摘している。以下に示すのがその4つの側面である。

- (a) 体系的可能性(systemic potential)－あるものがまだ実現されていないかどうか、また、ある意味で、まだ知られていないかどうか、また、どの程度までそうなのかということ。
- (b) 適切さ(appropriateness)－あるものがある背景で適しているか、効果的か、また、どの程度までそうなのかといったこと。
- (c) 生起(occurrence)－あるものがなされるかどうか、またどの程度までなされるかということ。
- (d) 実現可能性(feasibility)－あるものが、利用できる実行手段を考えると、可能かどうか、また、どの程度まで可能かということ。

「コミュニケーションの民族誌」は、研究対象になっている地域社会の人々の知識と知識の使用に関する技量(言語能力)についての、民族誌的な基盤を見出した言語学であり、言語学的な内容を見出した民族誌であるだろう(Hymes 1974 / 唐須訳 1979 : 153)。

2.6.1.2 認知と相互行為の社会言語学

言語人類学者である Gumperz(1982 / 井上他訳 2004)は、人間のコミュニケーションは、習得され、無意識に生み出され、また細かく調整された言語的、非言語的シグナルの多様なレベルの体系によって伝えられ、また、制限されているものであると述べている。

Gumperz(1982 / 井上他訳 2004:5-6)は、会話の参加者の解釈の継続的なプロセスがどのよ

うなものであるか、他者に反応しコミュニケーション上の目的を遂行する際に、ある特定の合図の配列(constellation)を知覚し、解釈することを可能にするものは何であるかという問いを投げかけている。更に、会話例で示されているものの特性として、(A)解釈は、話し手と聞き手とによって協同的に交渉され、判断はそれによって喚起される反応によって確認され変更されるもの—すなわち単一の発話から推論されるものであること、(b)会話は、それ自体しばしば結果が何であるか—つまり参与者同士が解釈の慣習を共有しているか、コミュニケーションの目的を達成しえているか—の内的な証拠を含んでいるということという2つを挙げている。また、これらの問いを解明するためには、綿密で帰納的な仮説を、インフォーマントを使って検証するという伝統的な言語学の方法を、参与者たちが解釈を生み出す相互行為のプロセスの分析に拡張することで、会話の協調の経験的証拠にもとづいた、ふつう社会現象と呼ばれるものの処理方法を見つけることが重要だと指摘している。

このような考えの基に、「コンテキスト化の合図(contextualization cues)」と「ディスコース・ストラテジー(discourse strategy)」という概念を挙げている。「コンテキスト化の合図」とは、メッセージ形式の表面的特徴の配列が、その活動が何であるのか、どのように意味内容が理解されるのか、各文が先行あるいは後続する文とどのように関連付けられるのかを、話し手がシグナルし、聞き手は解釈する手段となるあらゆる特徴を指す。更に、(Gumperz(1982 / 井上他訳 2004:216)は、「言語活動(speech activity)」という概念も用いているが、「言語活動」とは、何らかの伝達上の目標との関連で、一組のスキーマに沿って演じられる一連の社会関係の組み合わせのことであるという。

Gumperz(1982 / 井上他訳 2004:222-223)は、会話の推論のプロセスは、複数の要素を含んでいるが、まずは、コンテキスト化の合図の知覚であり、もう一つは、それらを他のシグナルのチャンネルに関連づける作業であるという。そして、解釈に至るには、まずそれがどの程度予測されているものかについての判断、その次に過去の経験からわれわれが知っていること、およびわれわれが知覚していることから意味をなす解釈の探索が必要であると説明し、コンテキスト化の合図の言語的特性は、それらが具体的な状況なしには解釈不可能である点を強調している。

また、会話者が反応するシグナルのメカニズムを注意深く考察することによって、対人的な距離が維持され、解釈の枠組みが作り出される合図と象徴の慣習を特定することができ、この目的を達成する程度において、会話の推論の研究は、現在の社会言語学の理論だけではなく、社会的な相互行為と社会的な進化に関する一般的な理論にも貢献できると主張している(Gumperz 1982 / 井上他訳 2004:8)。

2.6.1.3 エスノメソドロロジーによる「会話分析」

串田(2006:10)は、エスノメソドロロジーの創始者ともいわれる Garfinkel と会話分析の創始者ともいわれる Sacks を引用し、言葉は、指標的特性(言葉が文脈ごとに意味を変えざるを得ないという性質)を帯びつつ通用しているという人間社会の基本的リアリティの成り立ち

を記述することが探究目標であると述べている。

Psathas(1995 / 北澤・小松訳 1998 : 9-11)は、会話分析が取り上げる問題は、社会生活をそのままの姿で、最もありふれた設定のなかで研究することであり、平凡な日常のありのままに生じる活動をその具体的な細部にわたって調査することであると述べている。更に、基本的な立場は、社会的行為はそれらの行為を生み出した人々にとって意味があり、それらの行為は自然な組織編成を有しており、綿密に調査すればその組織を発見し分析することができるというものであると説明している。研究対象は、日常の相互行為、ディスコースの実践、つまり社会の成員が言ったり・話したり・行なったりすることのなかに位置づけられた社会的行為の秩序・組織・規則性であるという。

「会話分析」のデータ収集と分析は、以下のような手順で行われる(串田 2006:188-189)。

1. 自然に生じた言語的やりとりを録音ないし録画したものを集める。
2. 録音・録画テープをできるだけ無心に繰り返し観察し、必要な部分のトランスクリプトを作成し、これらの作業の途中で気づいたことをメモしていく。
3. 注目するふるまいに関して最初の記述を与えるとともに、それがトランスクリプトの集積の中に繰り返し現れる規則的なものかどうか調べる。
4. 規則的に現れるふるまいが、何らかの共通の相互行為上の問題を参与者たちが同じように解いた結果として記述できるかどうかを考える。
5. パターンからはずれる変則ケースについて、同じ問題をそのケースに固有の文脈の詳細に感応しつつ解いた結果として記述できるかどうかを考える。

会話分析の重要な発見である「話者交代(turu-taking)」は、その場に規則をあてはめていくやり方でなく、合図(signals)によって規制され、交代は本来選択に基づいた機構であるが、その選択性は表層構造上の単位にあるのではなく、言語行為、発話の運び、意味伝達上の単位といった機能的単位である。次に、会話有機体の基本的単位の「隣接ペア」があるが、「隣接ペア」の認識の重要性は「優先応答体系(preference organization)」の概念からも議論される。優先応答は、言語学上の有標性(markedness)の概念と密接に呼応した構造上の概念であり、本質的に、構造上より単純な話者交代として起こるもので、好ましい第二部分は無標(unmarked)であり、対照的に好ましくない第二部分とは、種々の構造上の複雑な種々相によって有標化(marked)されたものであると説明される(Levison 1983 / 安井・奥田訳 1990:369-381)。

Psathas(1995 / 北澤・小松訳 1998 : 151)は、エスノメソドロジーと呼ばれる社会学の内部での広範な動向の一部としての会話分析は、成員が現在進行的に社会秩序を生み出す仕方を研究することで、エスノメソドロジーの公約の多くを果たしており、この秩序産出の指標的で反映的な特徴ならびに説明の実用的な性格に焦点を合わせると同時に、他方では、分析結果と定式化を大げさな理論的用語や抽象的用語で表すことを拒絶してきたと記して

いる。

2.6.1.4 語用論的な立場からの「談話分析」

「談話分析」は、テキスト文法学者による研究と語用論的な立場からの研究に分かれるが、本研究は語用論的な立場から「談話分析」を行っており、ここでは Lavison(1983)を概観しながら説明していく。

Stubbs(1983 / 南出・内田 1989:2)は、「談話分析(discourse analysis)」を「自然に生じた、連続体をなす音声言語及び書記言語による談話の分析」と定義し、単に陳述が真か偽かを扱うだけでなく、情報の性質、情報の取捨選択をも扱うものであると説明している。また、Yule(1996 / 高司訳 2000:132)は、談話を語用論的に考察するためには、相互行為と会話分析がかかわる基本的に社会的な問題の枠を超え、テキストの形式と構造を見直し、背景的知識、信念、期待(予測)といった心的概念に大きな関心を寄せなければならないと指摘している。

Levison(1983 / 安井・奥田訳 1990:358)によると、「談話分析」は、本質的には、言語学における実りある技法を文という単位を超えて応用しようとするものであるとし、その手順は、まず、基礎的範ちゅうの組あるいは談話単位を取り出し、次に、これらの範ちゅうについて、範ちゅうの適格連鎖(一貫性のある談話)と、不適格連鎖(一貫性のない談話)を区別するような一連の規則を定式化すると述べている。この手順の特徴は、一貫性のある・なし、あるいは、適格、不適格の判断は直観に訴えるといい、分析においては、一つまたはいくつかのテキストを取り上げて、その限られた範囲内のあらゆる興味ある特徴を分析しようとする傾向があると説明している。

また、Levison(1983 / 安井・奥田訳 1990 : 360-361)は、「文の切れ目をつなぐ文(sentential connectives)としてみなすことによって、独立した一つの文として取り扱われる」という立場で「談話」を捉えていたテキスト文法学者を批判し、会話を談話の特別のタイプとして扱っている研究に興味を持っているといい、更に、会話における一貫性や秩序が見出されるレベルは、言語表現のレベルではなく、言語行為表現の発話によって生み出される言語行為ないし相互作用的やりとり(moves)のレベルであると説明している。会話について DA理論家(言語行為(相互作用的)理論家)が記述するモデル全体に備わっている一般的性質をまとめると次のようになる。

- (i) 話をしている時に演じられる単位行為一言語行為(speech acts)ないしやりとり(moves)があり、それが一つの、明示的な制限されたセットを作っていること。
- (ii) 発話が単位の部分一発話単位一に細分され、その一つ一つが少なくとも一つの発話行為単位と呼応すること。
- (iii) 発話単位を言語行為へ、言語行為を発話単位へ重ね合わせる、明示的機能(specifiable function)および願わくは手続き(procedure)があること。

(iv) 会話の連続が言語行為(またはやりとり)のタイプに応じて述べられる、一連の順序立った規則(sequential rules)によって、おおむね統制されていること。

しかし、Levison(1983 / 安井・奥田訳 1990 : 363-365)は、このようなモデルの問題点を指摘している。まず、一文発話が時として一つの言語行為以上のものを演じることがあるということである。更に、会話の応答は、発話によって演じられる発語内的行為(Illocutions)にのみ向けられるのではなく、発語媒介行為(perlocutions)にも向けられ、発語媒介行為は種類においても数においても制限がなく、したがって、その返答は必然的にそのようなモデルの範囲外にあることを指摘している。また、どんな行動単位が主たる相互行為をもつかを、前もって指定することは不可能であり、行為と発話単位の重ね合わせがうまくいくためには、(a)適切な行為と、(b)適切な発話単位の組とが十分に定義されたものでなければならないが、十分に明示的な組というものはないことも問題点として指摘している。そして、一般的な連続規則を設定する根拠、不適格連鎖の存在と予測を仮定する根拠は極めて疑わしいと述べている。

2.6.1.5 総合的会話分析（会話分析への言語社会心理学的アプローチ）

「総合的会話分析」とは、会話の分析を通して人間の社会行動のメカニズムを探ることを目的にし、宇佐美(2006b、2008)によって提唱された会話の研究方法で、言語社会心理学的アプローチ(宇佐美 1997b、1999)に、ローカルな観点（ローカル分析）とグローバルな観点（グローバル分析）という考え方をより明確に組み込んだものである(宇佐美 2008a)。ここでは、総合的会話分析の中核をなす「会話分析への言語社会心理学的アプローチ」(宇佐美 1999)を概観した上で、宇佐美(2006b、2008)の「ローカル分析」と「グローバル分析」の観点について述べる。

会話分析への言語社会心理学的アプローチについて、宇佐美(1999b:52)は「伝統的心理学における定量的分析に基づく実証的方法論をベースに、親子関係以外の社会的要因（話者の年齢、社会的地位、性等）の分析も方法論に組み入れて、大人同士の会話の分析にもより適するように筆者が発展させた」ものであると述べている。

基本的な枠組みは次のようである。

- (1) 目的に応じて(男女差を見るのか文化差を見るのか等)、条件を統制してデータを収集する。
- (2) フェイス・シート、フォローアップ・アンケート（インタビュー）などで、必ずインフォーマントの背景的情報や、会話自体に関する感想などを収集し、五段階評価法を用いるなどして、なんらかの定量的処理ができるようにする。また、自由記述なども参考にする。
- (3) 定量的分析がしやすい形で文字化資料を作成する。
- (4) 分析項目をコーディングして、定量的処理ができるようにする。

- (5) コーディング（分類など）の「信頼性」は、二人のコーダー間の判定の一致率（単純一致率に、偶然一致率を考慮した修正を加えたもの—Cohen's Kappa）にて判定する。
- (6) コーディングの過程で記号化し得なかった特徴などを、必ず、定性的な分析で確認・検討する。

（宇佐美 1999b : 53）

(1) の「目的に応じた条件統制」というのは、研究目的に合わせて被験者やデータ収録の場面を調節することである。被験者間の親疎関係、被験者の年齢、性別、言語、国籍、学習者の場合は学習レベルや学習歴などを統制する。条件統制した項目は(2)のフェイス・シート、フォローアップ・アンケート（インタビュー）などで確認できるようにする。(1)及び(2)のプロセスは、社会的要因（話者の年齢、社会的地位、性等）の分析を方法論へ組み入れるようにしたものであるが、宇佐美(1999b : 52)は、「言語社会心理学」では、会話自体の分析のみならず、データの収集法、インフォーマントの属性調査、会話に関するインフォーマントの感想の評定、実験計画の検証のための調査など、「録音された会話」以外の部分の分析も、人間の相互作用としての「会話分析」のために、極めて重要だと捉える。そのため、方法論も、これら会話以外の要因の分析を「会話の分析」に含むべきものとして捉えている。(3)の文字化資料の作成については、「基本的な文字化の原則：Basic Transcription System for Japanese : BTSJ」（3.2.3.1で詳述）を用いる。BTSJは表計算ソフト(Microsoft office Excel)を利用したもので、分析対象を数量化しやすくするための工夫が施されている。(4)のコーディングというのは、会話の中で現れる質的な要素を記号化し、数量化できるように操作することを指すが、現象を定性的に分析するばかりではなく、その結果をコーディングすることによって数値を出し、定量的な処理ができるようにするというプロセスである。そのコーディングが信頼できるものであるかどうかを確認するのは(5)の段階であるが、具体的には、ひとつの分析項目につき、その全体量の10%程度を第二評定者がコーディングし、「評定者間信頼性係数」(Cohen's Kappa)を求める。評定者間信頼性係数は、二者間の評定の単純な一致から偶然の一致を差し引いた数値である。(6)は、数量化し、集計できた結果が意味するもの（定量的分析の結果）と数量化できなかった要素が意味するもの（定性的分析の結果）を合わせて、最終的な考察を行うことを表している。まとめると、「会話分析への言語社会心理学的アプローチ」には、エスノメソドロジーや社会言語学の流れをくむ会話分析において主に行われていた定性的な分析の手法と、心理学のような実証的な科学分野における研究方法論に基づいた定量的な分析の手法の両方が組み込まれている。

しかし、ここで注意すべき点は「定量的分析」が意味するものである。宇佐美(1999b)は、「言語社会心理学的アプローチ」における会話の「定量的分析」とは、大量のデータや単に頻度や割合の算出を指すものではなく、コーディングしていくプロセスにおいて、既に、定性的分析を含んでいると述べている。従って、相互作用としての会話の分析においては、

「定量的分析」と「定性的分析」は決して対立するものではないという。会話の定量的分析は、相互作用の機能の分類の主観性を最小限にとどめるためのものであり、限られた数のデータにおいて見られるある種の傾向を、研究者の洞察のみに基づいて一般化することを極力避け、結果の客観性・信頼性を、統計的検定処理に基づいて判断するために有効となると説明している。つまり、定量的分析（統計的検定処理を含むもの）は、2つ以上のグループ間の比較検証などを目的とする仮説検証型の研究に適しており、定性的分析(エスノメソドロジー、記述統計のみのももの等)は、ある「現実」、すなわち、特定の状況の中で実際に行われている現象や相互作用を詳細に、あるいは、記述統計を用いて記述することによって、人間の行動や社会的秩序の一面を発見することを目的とする研究に適して、両者は同等の価値を持つが、区別して考える必要があると述べている。

続いて、宇佐美(2008)は、「言語社会心理学的アプローチ」に、「ローカル分析」「グローバル分析」という考え方を組み込むことが示されている。「ローカル分析」とは、会話というやりとりの中における「個々の発話の機能」を、当該の発話の前後の文脈程度のローカルな要因を考慮に入れながら、質的に分析、解釈することを言う。それに対して、「グローバル分析」には、定量的分析、定性的分析の2つの側面があり、会話全体の流れや結末を把握した上で、その会話内の2、3の短い発話のやりとりの真意や機能を解釈するような談話レベルの分析や、発話のやりとりに影響する当該の会話外の要因(話者の年齢・社会的地位・性差等)を考慮に入れて収集したデータを元に、談話全体の特徴を量的に捉えて、それらの要因の影響の比較を行うような分析などを指す。

宇佐美(2008a:152)は、「総合的会話分析には、1つの研究に、このローカル分析・グローバル分析の双方が、なんらかの形で含まれている必要がある」と述べている。

2.6.1.6 「会話分析」、「談話分析」、「総合的会話分析」のアプローチの比較

Levison(1983 / 安井・奥田訳 1990)は、「会話分析(Conversation analysis, CA)」は、早まった理論構築を避けようとする、徹頭徹尾経験的アプローチで、その方法は本質的に帰納的(Inductive)であるという。CAでは、自然に交わされる数多くの会話の記録を対象に、繰り返し起こる形(Pattern)を考察し、二者択一の発話の間での一方の選択が、どういった相互作用的、推論的成行きをもたらすのかということを強調して分析をし、直観による判断に訴えることをできるだけ排除すると説明している。これに対し、「談話分析」は、会話の構造の分析には重点を置かず、一つないし二、三のテキストを取り上げて、その限られた範囲内のあらゆる興味ある特徴を深く分析しようとするが、直観による判断に訴えており、一連の規則を定式化するという。更に、Levison(1983 / 安井・奥田訳 1990:360)は、DA法の強みは、文内構造についての成果を、談話構造に結合させ得ると考えている点であり、CA家の強みは、登用した手立てが、会話の組み立ての中に取り込まれた、最も実質的洞察を明らかにすることができることを示している点であると述べている。しかし、CA実践家は、理論や概念上の範ちゅうは明確さに欠けており、DA理論家は、定式化を急ぐあまりデータ

の本質に注意を全く払わないことを指摘している。一方、「総合的会話分析」は、会話の分析を通して人間の社会行動のメカニズムを探ることを目的にしており、記述においては、ローカルな観点とグローバルな観点の双方からの分析を行い、更に、複数の資料を定量的分析と定性的分析を行い、そこで現れる特徴から最終的な判断をする。

また、「会話分析」や「談話分析」のアプローチは、主に談話における一貫性と時間的構成がいかに生み出され、理解されるかということの説明するものであるが、両者とも独自の分析方法をもち、互いに相容れないのである。「会話分析」は、自然会話のみを分析対象としているが、会話の機能や内容を把握するより、話者交代や発話順序等の外的な構造を分析し記述することに留まっており、「談話分析」は、限られたデータを分析対象としているが、研究者の先行知識や直観による判断は信頼性や妥当性の問題があり、それを定式化することに対する問題点も指摘されている。一方、「総合的会話分析」は、一定の条件を統制した上で複数のデータを収集し信頼性や妥当性を確認する作業を行い、更に、会話内容や被験者に関する調査の結果も考慮に入れ、総合的な分析を行っている。

次に、異文化間対照研究の観点から考えると、「会話分析」は、自然会話のみを分析対象としているため、異なる言語社会において、同様の条件で自然会話を収集することはほぼ不可能であると考えられるが、「総合的会話分析」は、一定の条件を統制した上でデータを収集しているため、異なる言語社会においても、同等の条件を当てはめることができる。更に、会話分析に欠かせないトランスクリプトの作成法も、「会話分析」では英語中心文字化システムであるのに対し、「総合的会話分析」では、独自に考案した「基本的な文字化の原則：Basic Transcription System for Japanese：BTSJ」という文字化システムがあり、「韓国語版」と「中国語版」³⁹も考案しているため、異なる言語社会の対照分析も可能であろう。

本研究は、「総合的会話分析」のアプローチを用いることとする。それは、「総合的会話分析」が、「ローカルな観点」と「グローバルな観点」を取り入れて会話を分析するという点、定量的分析や定性的分析を通じてより総合的な観点からの分析が行われている点、更に、文字化システムも異言語間対照研究が可能な形で開発されており、そして、分析結果における信頼性の確認ができる装置を備えている点等、このアプローチが本研究に最も適したものであると考えられるからである。

2.6.2 ロールプレイ調査方法に関する先行研究

謝罪研究において一番多く用いられていた調査方法は、「談話完成テスト(DCT：discourse completion test)」と「質問紙法」である。日本語教育学会・水谷(編)(2005)は、これらの研究方法は、作成した「質問紙」を回答者に配り、それに記入してもらったものを、研究資料とする研究法で、比較的短い期間に、多数の回答を得ることができ、統計学的推測を行う

³⁹ 試作版の段階ではあるが、「韓国語版」の詳細は3.2.3.2を参照。「中国語版」は、宇佐美まゆみ監修(2007d)『談話研究と日本語教育の有機的総合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度 科学研究費補助金基盤研究B(2) 研究成果報告書を参照。

ことができるという。更に、仮説検証や理論的・実践的発展につなげていきやすい、回答者に与える情報の一貫性がかなりの程度保証されるという長所がある。これに対し、得られたデータが、回答者が自分で考えた結果であり、必ずしも現実とは限らないし、回答者はとくに意見がない場合、社会的に望ましいと思われる回答をしがちであり、また、回答者の大部分が回答できる質問が中心となるため、深くつっこんだ内容を尋ねられない、得られた回答から見いだされた疑問や問題を追求するために新たに質問項目を加えることができないという短所もあると指摘している。

本研究の研究目的は、「謝罪談話」、「謝罪行動」を相互作用の観点から解明することであるため、「談話完成テスト(DCT : discourse completion test)」と「質問紙法」を採用せず、インタラクションが行われる調査方法を採用している。Kaspar(2000 / 田中他訳 2004:136)によると、口頭によるインタラクションの調査方法として、「自然会話(authentic discourse)⁴⁰」、「誘出会話(elicited conversation)⁴¹」、「ロールプレイ(role-play)⁴²」があるが、どれもデータが口頭によるインタラクションを伴う言語産出であるという共通点があり、広範囲にわたる談話の特性を調べることができるという。例えば、やりとりの全体構造、話者交替(Turn)の分布、会話への貢献の流れ、話者・聴者間の調整、参与者共同による情報伝達(Transactional)と対人関係維持(Interpersonal)という目的の達成状況等があると説明し、これらの談話特性は、参与者のコミュニケーション活動や、対話者の発話等に対する理解や誤解を明らかにすることであると述べている。また、これら 3 つのタイプの口頭によるインタラクションの明らかな違いは、「自然談話」が研究者の目的ではなく参与者の目的によって動機づけられ構造化されるのに対し、「誘出会話」と「ロールプレイ」は、研究目的のために生み出されるという点であると説明している。しかし、一般に考えられているように「自然でない」ものは「有効でない」とは言えず、賢明な使い方をすれば、研究目的のために用意されたインタラクションも非常に有効なデータ収集法になり得ると評価している。

本研究は設定した状況の中で、2人の話者がロールプレイによって実際に発話したデータを分析対象とするが、Kaspar(2000 / 田中他訳 2004:136)は、ロールプレイからだけでは、それが自然な文脈における会話の習慣を正当に表しているかどうかの問題や妥当性の問題があると指摘したが、会話のインタラクションと話者交替に関連するコミュニケーション行為の順序が研究の焦点である時は、ロールプレイのようなインタラクションの性質を持つ手法を取る必要があると述べている。

以下では、ロールプレイ調査方法の先行研究である Rintell and Mitchell(1989)、Kaspar(2000

⁴⁰ フィールドノートを取ることと、録音またはビデオ撮影することがある(Kaspar (2000 / 田中他訳 2004 : 137)。

⁴¹ 「誘出会話」(Elicited conversation)は、データ収集のために計画的に実施されるあらゆる会話を指す用語である。ロールプレイと異なり、参与者は自分自身と違う社会的役割を担うことはないが、研究者によって割り当てられた談話上の役割を演じる。

⁴² 「前もって定義された社会的枠組みや状況の『シナリオ』のなかで、参与者が特定の『役割』を『引き受け』、『演じる』社会的あるいは人間的活動である」と定義することができる(Crookall and Saunders 1989: 15-16(Kaspar,G.(2000 / 田中他訳 2004 : 142 から再引用)。

/田中他訳 2004:136)、山内(1994、1999、2000)、山本(2005)、高崎・古川(2000)等を概観する。

Rintell and Mitchell(1989)は、謝罪研究でよく行われる DCT の短所と長所を指摘し、ロールプレイによる発話行為のデータ収集を提案しているが、ロールプレイは、口頭の調査方法なので被験者が言いたいことを自由に言うことができる上、DCT と比較することで、より自然なデータ収集ができる長所があると述べている。しかし、被験者は与えられた役割を演じるにすぎず、実際にその状況に遭遇した際、現れるのかどうかには疑問があると指摘している。Kaspar(2000 / 田中他訳 2004 : 143)は、Kasper and Dahl (1991)を引用し、Rintell and Mitchell(1989)のロールプレイ調査方法を、中間言語語用論では、クローズド・ロールプレイ⁴³に分類されると指摘し、オープン・ロールグレイ⁴⁴を説明している。

また、オープン・ロールプレイは、多くの話者交替と談話のさまざまな側面を引き出すであろうと評価し、オープン・ロールプレイでは、特定の文脈や目的にあまり関係のない会話の側面を観察することができるし、特定の発話イベントや、コミュニケーション活動を引き出しやすい文脈や役割を設定することも可能であると説明している。

次に、ロールプレイ調査方法を教室活動に活用する研究を行っている山内(1994、1999、2000)であるが、山内(1994)は、ロールプレイとは、「場面と状況、会話の目的、登場人物を設定し、学習者に登場人物になったつもりで会話をさせる練習方法である」と定義し、他人ではなく、自分自身を「演じる」ようなロールプレイが望ましいと指摘している。また、山内(1999、2000)は、中上級学習者向けの具体的な学習活動として「タスク先行型ロールプレイ」の学習を提案し、現実のコミュニケーションにより近い状況での会話練習の必要性を挙げている。「タスク先行型ロールプレイ」は、まずロールプレイを行ない、そして、そこに現れた言語的挫折に対処するような形で、文型や語を導入するという授業方法であると説明し、できる限り現実に近づける努力が必要であり、学習者の属性にロールを近づけることが大切で、実際に起こりそうな事柄の選別が重要であると説明している。

山本(2005)は、「半構造化ロールプレイ」を提案している。これは、設定上の人間関係や状況などは、あらかじめ大まかに決めておくものの、談話の展開方法については、参加者に話の流れを委ねるタイプのもので、ここでは参加者それぞれに与えられた役割をあくまでも参加者自身の場合と想定させた上で、「自分ならそのときどう対処するか」、「この状況で相手のどのようにやりとりを行うか」などを考えながら臨んでもらう方法であるという。また、この方法では、やりとりの先の展開がよく見えないため、参加者は臨機応変に動かなくてはならなくなるが、ロールプレイを取り入れた教室活動にありがちな「あらかじめ考えておいたセリフをただ読み上げるように発話してその場を処する」というケースを避けることにあり、擬似的とは言え、現実に近いコミュニケーションを学習者が体験できるという。

43 ある状況が描写されており、その状況や研究対象となっているコミュニケーション行為に応じて、演者は対話者の最初の発話に回答するが、その発話は標準化しているため、単一の発話行為として構成される。

44 はじめの状況と演者の役割及びゴールは、個々の役割カードによって指定されるが、やりとりの成り行きや結果について前もって決定されていない(Kaspar(2000 / 田中他訳 2004 : 143)。

そして、高崎・古川(2000)は、「ロールプレイ」は、創造的に考え、やりとりを作り出していく学習活動として有効であると評価し、更に、Ladousse(1987)を引用して、「ロールプレイ」の効果として、①学習者は流暢さの練習をしながらコミュニケーション技術の全体的習慣ができる、②教室内の相互行為が促進される、③学習動機も高まる、④学習者同士で学ぶことの重要性が分かる、⑤教師と学習者間で学習過程に対し責任を分かち合うことができる点を挙げている。

本研究のロールプレイ調査方法は、Kasper and Dahl(1991)、Kaspar(2000 / 田中他訳 2004:143) の分類では、オープン・ロールプレイに属し、山本(2005) の「半構造化ロールプレイ」の設定方法と同様の設定方法を用いている⁴⁵。

2.6.3 文字化システムに関する先行研究

話しことばは、書きことばと異なり、動的で瞬間的なものなので、それを研究するためには、必ず録画あるいは録音する作業が必要であるが、それを分析するためには、音声や話しことばを「可視化」する文字化の作業が不可欠である(杉戸、1994)。そのため、音声を文字に書き起こした資料、すなわち、トランスクリプト作成は、話しことば研究において共通かつ基本的な作業である。トランスクリプトは、研究目的や分析の観点などに応じて異なり、録画あるいは録音した資料から、そこで現れる様々な現象などをどの程度まで精密に分析するかは、研究者の判断による。以下では日本語と韓国語における文字化システムを概観し、その特徴などを検討する。

2.6.3.1 日本語の文字化システムに関する先行研究

本節では、木山他(2003)と金庚芬(2006)、李恩美(2008)、鄭榮美(2011)を参考にしながら、文字化システムとコーパスの構築を前提とした文字化システム(前川他 2000、前川 2002、市川他 2000、小磯他 2001)、「談話研究」の観点からの文字化の方法の沖(2001)、「会話分析」に基づいた文字化の方法の西阪(2008)、そして、会話における相互作用を目的とした宇佐美(1997a、2003a、2006、2011)の「基本的な文字化の原則: Basic Transcription System for Japanese: BTSJ」を概観する。

1) コーパスの構築を前提とした文字化システム

日本語においては、「話し言葉コーパス」の構築が、データの公開を目指して進んでいる。それらの中から、言語のみならず工学的研究への応用にも活用するため、研究されたものとして、「日本語話し言葉コーパス(Corpus of Spontaneous Japanese:以下 CSJ)」(前川他 2000、前川 2002、小磯他 2001)と「日本語地図課題対話コーパス」(市川他 2000)がある。

まず、CSJは、国立国語研究所、通信総合研究所、東京工業大学の3機関が中心となって構築したプロジェクトで、音声認識などの工学的研究の要請と言語学的研究の要請に同時

⁴⁵ 詳細な説明は、3章を参考されたい。

に依じるために作られたものである。データは、学会講演、模擬講演、一般の講演会や大学の講義という3種類から成る。CSJの特徴は、対象とする発話が自発音声⁴⁶で、モノローグのコーパスであり、格納される発話は日本語の「全国共通語」であることが挙げられる。また、CSJには700万語(形態素)の日本語を格納するが、時間に換算すると700から800時間に相当すると予想される。文字化における転記基本単位は200ミリ秒以上のポーズという指標を用いているが、1行目、7行目、16行目には、各転記単位の情報(発話ID、発話単位の開始、終了時刻、話者ID)が記されている。音声の記録は、仮名文字によるテキストと漢字仮名交じりのテキストの両方を作成している。トランスクリプトは、「発音形」と「基本形」という2種類に区別されるが、これは、音響モデルと言語モデルを構築するためである。「発音形」は、音声をできる限り忠実に、カタカナを利用して表記し、「基本形」は、漢字仮名交じりで表記されるが、これは表記の揺れをなくすためであるという。さらに、談話において生じる、発話以外の様々現象を体系的に記すために、フィラーや笑い、咳などを表す記号がタグ付けられている。

一方、「日本語地図課題対話コーパス」(市川他 2000)は、可能な限り自然で自発的かつ音声品質の高い対話コーパス実現を目指して、千葉大学および外部組織から自発的に参加した研究者らが構築しているコーパスである。これは、言語学、心理学、文化人類学などの基礎研究的側面と音声処理、インタフェイス設計、言語処理などの工学的側面の研究関心に応じることが目的である。作成においては、句読点、漢字、長音記号の使用を禁止しているが、その理由は、漢字の場合、読みが一意に定まらず、何の漢字を用いるかは作業者の主観に依存し、送り仮名も一定しないためである。代わりに、各発話単位内で100ミリ秒以上の無音区間にはそのミリ秒単位の時間を記入しているが、句読点の代わりに無音区間を用いる理由は、客観的に発話単位内の分割を行なうためであると説明している。また、漢字の代わりに平仮名ですべてを表記している。また、従来の書き起こしでは、「文」や「発話」という単位が設けられていたが、「文」は自由会話では途中で発話が中断される例があり、「発話」は、具体的かつ客観的な基準が確立されていないことを指摘し、400ミリ秒以上の無音区間によって区切られた音声的連続である発話単位(Utterance Unit: UU)を設定している。また、二人の話者の同期関係が表現可能な方法として、その話者の関係と時間的關係から発話単位間の関係を[継続]、[交替]、[準重複]、[重複]の4種類に分類し、[継続]、[交替]、[準重複]については、各発話単位が独立していると考え、先行発話を一行に記述し、空行を一行挿入してから後続発話を記述する。[重複]については、空行をあげずに先行発話の次の行に後続発話を記述する。

以上で説明した「日本語話し言葉コーパス (Corpus of Spontaneous Japanese:以下 CSJ)」と「日本語地図課題対話コーパス」におけるトランスクリプトは、大量のトランスクリプト資料の蓄積や処理し、言語学的研究のみならず工学的研究にも利用されることを試みて開発された。また、文字化作業にあたっては、複数の作業者による揺れを最小限にとどめる

⁴⁶ 自発音声とは、発話内容が発話に先立って成形されていない発話を意味する。

ことができ、客観的な基準が設けられている点は役立つと思われる。しかし、客観性に重きを置きすぎて、時間を区切りの単位として設定している。これは、文字化されたトランスクリプトの発話内容と話の流れ等があまり考慮されていないのではないかと考えられる。

2) 「談話研究」の観点からの文字化の方法

沖(2001)は、談話の文字化には、「私⁴⁷」と「私」の交替が明示されることと実時間に添った展開を示しうる表記であることが必要条件であると主張している。つまり、両者の交替によって対話が進行していくので、その姿が明示されるような表記でなければならないし、実時間に添って、時には間があき、時には発話が重なりながらやりとりされていくのでそうした実時間の実相が明示的に表記されることが望ましいと指摘している。また、談話の単位は、文ではなく「句」であると主張し、「句」を、「その途中で切れ目を感じさせない長さ不定のことばで、句頭に上昇音調を持つイントネーション単位」と定義付け、更に、話し手の考えのまとまりや感情を表すことができると説明している。談話は、異質な他者どうしが実時間に添って不可逆的に、言語音以外の情報を同時並行的に活用しながら推進、展開させるものであるという。文字化の記述においては、できるだけ音声を観察できるような表記をし、第一次文字化は音の上がり下がりや強みのみを記し、音声記号程度の抽象をかけた表記を行い、簡単音声表記を用いている。また、上昇する位置、下降する位置、句末、文末の上昇などを表す記号を付しており、楽譜方式で表している。

以上で説明した文字化方法は、「楽譜方式」であるため、どの時点で発話されたか等を把握しやすい利点はあるが、簡単音声表記⁴⁸を用いているため、発話内容が理解しにくい欠点があると考えられる。

3) 「会話分析」に基づいた文字化の方法

西阪(2008)は、Jefferson によっておもにヨーロッパ語の会話分析のために開発された文字化システムを、日本語に合わせて整理している。音を聞こえたままに正確に書き取るというのがトランスクリプションの基本であるという考えで、母音が省略されて言葉が発せられるとき⁴⁹など、日本式による混乱な理由から、日本式よりもヘボン式ローマ字表記を推奨している。ローマ字表記をすると、かな漢字に比べて可読性が劣る欠点はあるが、ローマ字でなければ拾えない区別のなかに、相互行為的に重要なものがあることを利点として挙げている。また、文字化作業においては、推薦フォントの設定、行番号の付け方、推薦レイアウトの設定など、コンピュータの操作に関する説明が詳細に説明されている。また、

47 「この世界を構成する唯一の視点のこと」とであると説明し、それぞれの談話が意味するところは、当事者以外には伺いしれない側面があり、当事者はそれぞれが歴史を背負った世界を認める唯一の視点をもった「私」と「私」であって、それぞれに相容されない異質な他者の関係にたつという。

48 周辺情報以外は漢字仮名まじりを使用せず、カタカナと記号で表記している。

49 たとえば、「でし-」と途切れた音は、しばしば「desh-」と聞こえるが、日本式だと「des-」になってしまうなどの現象。

重なり、密着、聞き取り困難、沈黙・間合い、音声の引き延ばし、言葉の途切れ、呼気音・吸気音・笑い、音の強さ・大きさ、音調（イントネーション）、スピード、声の質、注記の必要最低限の記号をまとめて説明している。特に、音の記述においては、音の有標化と無標化を区別し、有標化されたものをマークするようにしている。例えば、たとえば、「そう」や「ええ」は、「soo」や「ee」が「普通の(無標化)」発音を表現しているのだから、「so:」とか「e:」などは有標化されたものとしてマークする。また、音調の極端な上がり下がり、それぞれ上向き矢印（↑）と下向き矢印（↓）で示されるが、矢印が用いられるのは、あくまでも「有標化された」、通常ならざるものとして聞こえる音の上がり下がりであり、たとえば質問の際によくある語尾の上がりは、通常の音の上がりであるかぎり、そこに矢印が用いられることはない。

以上の点から、西阪の文字化システムは音の正確な記述を求めているが、音の正確な記述のために呼気音と吸気音の区別や音の強さ・大きさをそれぞれ記号付けてはいるものの、これらを正確に区別することができるのかは疑問である。

4) 会話における相互作用を目的とした文字化システム

宇佐美(1997a、2003a、2006、2011)は会話における相互作用の研究を目的とし、「基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）⁵⁰」を提唱している。BTSJは主に、以下の点に注意して考案されている。

- 1) 研究の視点を得るために、読みやすいものであること。
- 2) 定量的分析と定性的な分析共に適するものであること。
- 3) よって、データベース化がしやすく、記号等によって検索がしやすいものであること。
- 4) コーディングが「発話文」単位でできること。
- 5) 対人関係に重要な役割を果たすと考えられる周辺言語情報は、ト書き的にして、なるべく多くを記しておくこと。

(宇佐美 1997a:15)

BTSJではトランスクリプトの作成に表計算ソフト（Microsoft office Excel）を利用し、会話参加者間の相互作用を定量的・定性的分析ができるようにしている。BTSJでは、実際の会話の中で「発話された文」という意味で「発話文」という基本的な分析単位を設けているが、「発話文」は、「会話という相互作用の中における文」と定義付けられる。「発話文」の認定には、「話者交替」、「間」という2つの要素が重要になる。表記は基本的に漢字仮名交じりを勧めており、音の長短・高低、沈黙、間、笑い、直接引用部、周辺言語情報、プライバシー保護など、発話にかかわる様々な情報の表記法についても詳細に説明している。

トランスクリプトにはライン番号、発話文番号、発話文終了、話者、発話内容のセルを設

⁵⁰ 詳細な説明は、3.2.3.1を参照。

けており、文字と記号のフォントやトラスクリプトのレイアウトなどに関する規定も行っている。宇佐美(1997a)は、文字化資料作成の過程を、1) 第1段階(第一文字化作業者がドラフトを作成)、2) 第2段階(第二文字化作業者による追加・訂正など)、3) 第3段階(その研究の研究者自身による最終確認)という段階に分けて説明している。更に、最近では、文字化資料作成の容易さや分析項目の自動集計が可能になり、定量的な分析がより効率的で正確に作業できる「BTSJ 入力支援システム(仮称)」の開発の研究を進めている。

BTSJ の特徴として考えられるのは、まず、表記は基本的に漢字仮名交じりを用いているため発話内容が読みやすいという点である。次に、「発話文」の認定に「話者交替」や「間」の要素をいれることにより「省略」や「中途終了型発話」など構造的に「文」が完結していない発話に対しても分析可能であるという点である。そして、表計算ソフト (Microsoft office Excel) を利用し、定量的な分析を行い、現れる現象を数量化できるという点が挙げられる。最後に、様々な記号を用いて「発話内容」以外の周辺的情報も分析できるように表記しているため、より正確かつ精密な分析が可能であるという利点がある。

2.6.3.2 韓国語の文字化システムに関する先行研究

안의 정 (2002:184-185)によると、韓国語の話し言葉コーパスの構築は 1990 年代に入ってから活発に行われ、その代表的なものとして、「延世コーパス 4」、「高麗コーパス 1」、「21 世紀世宗計画話し言葉コーパス(以下、世宗コーパス)」を挙げている。「延世コーパス 4」は、延世大学が 1995 年から構築しはじめ、2001 年の時点で計 759,092 語節が構築され、主に、講義、講演、討論、会議等を用いたトランスクリプトの資料であるが、辞書編纂と話し言葉の文法研究を目的に開発されている。「高麗コーパス 1」は、会話、座談、講演、ニュースなどから構成されているが、264,669 語節である。「世宗コーパス」は、2001 年の時点まで 205 万語節の資料が構築されている。

本節では、金庚芬(2006)、李恩美(2008)、鄭榮美(2011)を参考にしながら、大規模な「世宗コーパス」のトランスクリプト作成における文字化システム(전영옥 2002)と金ジナ(2006)の「複線的な文字化システム」、宇佐美他(2007)の「基本的な文字化の原則：韓国語版 (Basic Transcription System for Korean: BTKS)」を検討する。

1) 「21 世紀世宗計画話し言葉コーパス」における文字化システム

大規模になされている「21 世紀世宗計画話し言葉コーパス」は、国家事業として行われてきた韓国語の文字化システムである。서상규・구현정 (2002)によると、収録された談話の種類は、会話、独自+会話、その他に分けてあり、その中で日常会話は 30%を占めており、資料の量は、話された時間ではなく、文節であるが、約 180 万文節であるという。

世宗コーパスでは、イントネーション・ユニット (intonation unit) を一行における発話単位として設けている。전영옥(2002:87)によると、イントネーション・ユニット (intonation unit) は、一つの統一されたイントネーション・ユニット (intonation unit) の枠組みの中で

現れる発話の長さであり、情報の流れの単位であるという。また、情報の流れの単位を見せているトランスクリプトは、対話の展開状況に関する理解度を高め、資料の解釈をより正確にできるようにすると述べている。

文字化における記号は、「単語」、「韻律」、「発話進行状況」、「準音声とその他の音」、「引用とテキストの種類」、「不明確な部分」、「作業者の説明」といった7つのカテゴリーに分けられている。「単語」には、つづり方の原則、分かち書き、縮約形、方言形、途切れた部分、談話表示、「韻律」には、イントネーション⁵¹、ポーズ、長音、アクセントが分類され、明記されている。また、「発話進行状況」には、話者の明示、匿名、発話の開始、発話の重複、イントネーション単位の連続性、「準音声とその他の音」には、人の喉から出る音、人の体から出る音、事物の音、笑いながら話す部分、拍手しながら話す部分、「引用とテキストの種類」には、引用、資料を読む部分、字幕で処理される部分、そして「不明確な部分」は、よく聞こえない音節、よく聞こえない部分、まったく聞こえない部分に分けられ、各説明がなされている⁵²。「つづり法」は、基本的に正書法を従うが、方言や個人の発音の特徴、話し言葉の特徴が反映された発音に対しては、そのまま記すことを原則としている。「分かち書き」は、基本的に正書法に従うが、「分かち書き」の一貫性を保つことに対する大変さを述べながら、文字化において一貫性を保つことが重要であることを指摘している。

「世宗コーパス」の文字化システムは、韓国語の特徴を生かしつつ、発話状況で起こりうる様々な現象をできるだけ再現しようとしている。しかし、発話単位として設けている「イントネーション・ユニット (intonation unit)」の認定基準が曖昧ではないかと考えられる。^{チョンヨンオク} 전영옥(2002: 87)は、一つの統一されたイントネーション・ユニット (intonation unit) の枠組みの中で現れる発話の長さであり、情報の流れの単位である説明し、イントネーションの前後に来るポーズや始めの部分では早く、終りの部分では長く発音されるという特徴をあわせて判断することによって、認定することができる^{チョンヨンオク}と説明している(전영옥、2002: 89)。しかし、ポーズや発話のスピード、音の長短等は、研究者の判断によるものであり、直観に影響されやすいものなので、客観的な認定基準であると言にくいのではないかと考えられる。

2) 複線的文字化システム

金ジナ(2006)は、発話順に上から下へ文字化していく従来の文字化システムは単線的であり、文の範囲を超えられず、音声言語独特の在り方の特徴を十分に表すことができないと指摘した上で、独自の「複線的文字化システム」を提案している。話者の数ごとに複数の次元をもうけて表示する方法である複線的文字化システムの中で「複線的展開方式」という文字例の展開方式を説明している。「複線的文字化システム」は、動的でありながら、生

⁵¹ イントネーションを、更に、下がるイントネーション、上がるイントネーション、続けるイントネーション、活気が溢れ生き生きした語調、途切れたイントネーションに下位分類している。

⁵² トランスクリプトの記号は전영옥 (2002: 109) を参照。

動感に溢れた話されたことばを、文字の形でより精緻に照らし出し、話されたことばのあり方を可能な限り可視化することを目指すものである。「複線的文字化システム」においては、発話の区切りはターンを基準としているため、文字化の際、発話の区切りの判断が容易である。また、話者ごとに行を設けているため、話者間の発話の重なりや割り込み発話などを明確に示すことができるとしている。李恩美(2008)は、会話参加者の発話をそれぞれ並行して表記することによって、あいづちや発話の重複などを明確に示すことができるという点を評価している。しかし、金ジナが「複線的文字化システム」の特徴として挙げている「複線的システム」は、上記の日本語文字化システムの先行研究 2)の沖(2001)の「楽譜方式文字化方法」とその表記法が変わらないと考えられる。「楽譜方式文字化方法」も会話参加者の発話をそれぞれ並行して表記している。無論、沖(2001)の「楽譜方式文字化方法」は、簡単音声表記を用いており、金ジナ(2006)は、正書法、標準語規定、外来語表記に従って表記しているという差はある。「複線的文字化システム」も「楽譜方式文字化方法」も、共通的に、話者ごとに行を設けて動的な会話をより正確に表すことを試みていると考えられるが、現れる現象の定量的分析が可能であるかは疑問であり、文字化作業も研究者の判断による作業なので、割り込みや重複を表す箇所の正確さにも疑問が残る。

3) 基本的な文字化の原則：韓国語版 (Basic Transcription System for Korean: BTKS) ⁵³

BTKS は、宇佐美他(2007)が BTSJ の観点に基づいて、韓国語の特徴と文字化の際に考慮すべき点を検討した上で考案した「基本的な文字化の原則韓国語版の試作版 (第 1 版)」である。

BTKS では、BTSJ に従い、「発話文」を基本的な分析の単位とする。また、「発話文の認定の仕方」、「改行の原則」、「発話文番号とライン番号」の説明は、BTSJ における記述をそのまま翻訳・転載している。ただし、「発話文終了に関する記号」、「記号凡例」、「入力書式」に関しては、韓国語の表記で使われる記号や入力書式を採択し、一部変更している。

トランスクリプトの作成における使用文字は原則としてハングルであり、基本的に韓国語表記の慣習にしたがって「ハングルつづり法」で表記しているが、アルファベットや算用数字、記号、外国語の文字も必要に応じて使用している。また、話しことばの特徴を反映させるために、「外来語・外国語」、「各発音現象」、「方言」、「数字」、「長音」などの表記法についても詳細に説明されており、ハングルつづり法に従って分かち書きをすることも明記されている。トランスクリプトの作成にハングルを使用し、表記と分かち書きをハングルつづり法に従うというのは、トランスクリプトの読みやすさを考慮したものであると考えられる。

⁵³ 詳細な説明は、3.2.3.2 を参照。

第3章 本研究における研究課題と研究方法

前章では、謝罪に関する先行研究、理論的な枠組みになるポライトネスに関する先行研究、本研究と関連がある会話の研究に関する先行研究等を総合的に概観し検討した。本章では、これらの先行研究を踏まえた上で、本研究における研究課題と研究設問について説明する。また、2.6では、会話の研究における先行研究を概観した上で、本研究で用いる宇佐美(2006b、2008)の「総合的会話分析」の詳細を述べた。本章では、この「総合的会話分析」に従い、本研究の会話データの収集方法と文字化資料作成法について説明する。最後に、文字化の信頼性を確認する方法について述べる。

3.1 本研究における研究課題と研究設問

本研究は、日本語母語話者と韓国語母語話者における謝罪という言語行動の特徴を明らかにすることを主な目的とする。それを解明するために、グローバルな観点から「謝罪談話」の構造を分析した後、ローカルな観点から「謝罪行動」のプロセスの分析や「謝罪発話文と応答発話文」のやりとりの分析を行う。つまり、談話レベルから発話文レベルまで、総合的かつ段階的に取り上げ、全てのレベルを相互作用の観点から分析し、実際の会話の中で、どのように行われているのかを探る。

更に、その特徴をより詳細に探るため、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面を設定し、その中で現れる日本語母語話者と韓国語母語話者の「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」の類似点や相違点を明らかにする。また、両言語の母語話者を男女別に分析し、性差による特徴も見る。

最後に、日本語母語話者と韓国語母語話者の「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」に見られる相互作用における対人配慮行動のメカニズムを Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論」と宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008)と Usami(2002)の「ディスコース・ポライトネス理論 (Discourse Politeness theory : 以下 DP 理論)」と結び付け、考察を行う。これらの研究課題をより詳細に解明するため、以下の5つの研究設問を立てる。

- 1) 日本語母語話者と韓国語母語話者は、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面で、どのような「謝罪談話」の構造を持っているのか。さらに、どのような展開を見せながら、謝罪し反応するのか。また、如何なる点が類似しており、如何なる点が相違しているのか。更に、その特徴は何か。
- 2) 日本語母語話者と韓国語母語話者は、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面

で、どのような「謝罪行動」のプロセスを経て、謝罪し反応するのか、また、如何なる点が類似しており、如何なる点が相違しているのか。更に、その特徴は何か。

- 3) 日本語母語話者と韓国語母語話者は、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面で、どのような「謝罪発話文と応答発話文」を用いて、謝罪し反応するのか、また、如何なる点が類似しており、如何なる点が相違しているのか。更に、その特徴は何か。
- 4) 1)、2)、3)で明らかになった日本語母語話者と韓国語母語話者の「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」における類似点と相違点を、宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008)の「ディスコース・ポライトネス理論」から考察することにより、明らかになることは何か。
- 5) 日韓母語話者の「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用における対人配慮行動のメカニズムの特徴が両言語社会に示唆できる点は何か。

3.2 本研究における研究方法

本節では、まず、本研究で用いる研究方法である宇佐美(2006b、2008)の「総合的会話分析」に従った会話データの収集方法を説明する。次に、本研究におけるロールプレイ場面の設定の概要や、負担度の差を調査するために行ったアンケート調査結果について述べる。最後に、本研究で用いる文字化システムについて詳細に説明する。

3.2.1 会話データの収集

本節では、宇佐美(2006b、2008)の「総合的会話分析」に従った本研究の会話データの収集方法とその手順について説明する。

3.2.1.1 会話データ収集における条件統制

Brown and Levinson(1987)のポライトネス理論において、会話参加者間の「力関係(power)」、「社会的距離(distance)」、「ある行為が相手にかかる負荷度(rank of imposition)」が話し手のポライトネス・ストラテジーの選択に影響を与えるとされている。本研究ではこれらの3つの要因を中心に条件統制を行う。以下の表3-1に、協力者の条件統制を示す。

表3-1 会話データ収集における条件統制

言語(Language)	日本語	韓国語
力(Power)	大学の同級生	
距離(Distance)	同性の友人	
負担の度合い((Rank of Imposition)	負担度が軽い場合と重い場合	

協力者の使用言語は日韓の各協力者の母語とする。協力者間の力(power)関係の要素として考えられる社会的地位、年齢などは、大学生同士に統制する。距離(distance)を決める主な

要素として考えられる性別、親疎関係などは、同性で普段気楽に話せる友人に統制する。ある行為が相手にかかる負荷度(rank of imposition)は、同様の協力者が、設定された「負担度が軽い謝罪場面」と「負担度が重い謝罪場面」の2つの場面を行う。つまり、「力関係(power)」、「社会的距離(distance)」は統制するが、特に、「社会的距離(distance)」は、異性間の会話ではなく、同性間の会話に統制し、「ある行為が相手にかかる負荷度(rank of imposition)」は、負担度の差による2つの謝罪場面を設定している。

3.2.1.2 会話データ収録の手順

会話収録にあたっては、研究者が上記の条件に適している協力者に一人一人依頼する形で協力を得た。収録場所は、大学の教室、図書館、院生室などである。収録の際には、協力者は2回会話収録に参加するが、まず、協力者に同意書にサインをしてもらい、フェイス・シート⁵⁴（年齢・出身地などの被験者の周辺情報）を記入するよう指示し、協力者の条件が適しているかを確認した後、録音における注意事項⁵⁵を見せた。その後、負担度が重い謝罪場面のルールカードを見せ、内容は互いに相談せずに各自理解するよう指示した後、研究者が退室してからロールプレイを行ってもらった。ロールプレイの時間は設定していない。ロールプレイ終了後に会話に関する5段階評定のフォローアップ・アンケート⁵⁶調査を行い、データの妥当性を検討した。2回目の負担度が軽い場面の録音は、一回目の録音からの影響を少なくするために一週間後に行った。収録の手順は1回目と同様である。最後に、「申し訳なさ」の認識度を調べるため、作成したアンケート調査紙を配り記入してもらった。

3.2.2 ロールプレイ場面の設定

本研究におけるロールプレイ場面の設定に関する概要と「申し訳なさ」の認識度を調べるため作成したアンケート調査結果について述べる。

3.2.2.1 ロールプレイ場面の設定の概要

本研究では、「謝罪する側」と「謝罪される側」との相互作用を分析するために、ロールプレイで発話されたすべての発話を分析対象とする。

謝罪行動における相互作用を分析するためには自然会話を分析対象とするのが理想的であるが、謝罪行動を自然な場面で収録するというのは不可能に近い。それは、従来の先行研究が、談話完成テストや質問紙調査法によって行われたことから類推であるであろう。以下ロールプレイの利点について述べた先行研究を簡潔に述べる。

⁵⁴ フェイス・シートに関する詳しい内容は、参考資料を参照。

⁵⁵ 注意事項の内容は、「①出来るだけ普段通りに話してください。②話が始まる前から録音機をスタートしてください。③会話が終わったら録音機を止めてください。④会話が終わったら実験者を呼んでください。」である。

⁵⁶ フォローアップ・アンケートに関する詳しい内容は、参考資料を参照。

Kaspar(2000 / 田中他訳 2004:136)は、ロールプレイからだけでは、それが自然な文脈における会話の習慣を正当に表しているかどうかの問題や妥当性の問題があると指摘したが、会話のインタラクションと話者交替に関連するコミュニケーション行為の順序が研究の焦点である時は、ロールプレイのようなインタラクションの性質を持つ手法を取る必要があると言及している。また、杉本(1997)は、「謝罪」に関する先行研究における状況設定の問題点として、今までの先行研究では、相手に物質的な被害を与えた状況での謝り方を問うものが圧倒的に多いが、この偏りも是正されなければならないと指摘している。また、現実の場面で相手に謝らなければならないのは、何も物質的被害を与えた場合だけに限らないし、相手に迷惑をかけたり、感情を害したりといった精神的被害を与えた場合の謝り方も含めて研究の対象にする必要があると述べている。

上記の先行研究を参考にし、本研究の謝罪のロールプレイ場面は、「相手に迷惑をかけたり、感情を害したりといった精神的被害を与えた場合の謝罪場面」で、負担度が軽い場面と重い場面を設定した。

以下は、本研究における負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面のロールカードの内容であるが、ロールカードの内容に前提という項目を立てた理由は、ロールプレイ場面のみ設定すると、謝罪する側と謝罪される側の間に認識のズレが起こる可能性があるため、最小限の共通的な情報を与えるのが、よりスムーズな会話ができると判断したからである。

表 3-2 負担度が軽い謝罪場面のロールカードの内容(日本語、韓国語)

「謝罪する側」のロールカード	
<p>【前提】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 関係 : 大学の友だち ・ 約束場所 : 喫茶店 <p>【内容】</p> <p>友だちと昼食の約束をしました。約束の時間に合わせて家から出ました。しかし、途中で電車が止まってしまい、動きません。この事情を友達に話そうと思って、電話をしましたが、何回しても繋がりません。20分ぐらい遅れて約束場所である喫茶店に着きました。</p>	<p>【전제】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 관계 : 대학교 친구 ・ 약속장소 : 찻집 <p>【내용】</p> <p>친구와 점심약속을 했습니다. 약속시간에 맞추어서 집에서 나왔습니다 하지만 도중에 전철이 멈춰버려서 움직이지 않습니다. 이 사정을 친구에게 말하려고 전화하는데 몇번이나 해도 받지 않습니다. 20분 정도 늦어서 약속장소에 도착했습니다.</p>
「謝罪される側」のロールカード	
<p>【前提】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 関係 : 大学の友だち 	<p>【전제】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 关系 : 대학교 친구

<p>・約束場所 : 喫茶店</p> <p>【内容】</p> <p>友達と昼食の約束をしたので、約束場所である喫茶店へ行きましたが、友達はいませんでした。待ちましたが、友達は来ませんでした。よりによって、携帯電話を持ってくるのを忘れてしまいました。20分ぐらい経つと、友達の姿が見えます。</p>	<p>・ 약속장소 : 찻집</p> <p>【내용】</p> <p>친구와 점심약속을 해서 약속장소에 갔습니다만, 친구는 없습니다. 기다렸지만 친구는 오지 않고 있습니다. 하필이면 핸드폰을 가지고 오는 것을 잊어버렸습니다. 20분 정도 지나자 친구의 모습이 보입니다.</p>
---	--

表 3-3 負担度が重い謝罪場面のロールカードの内容(日本語、韓国語)

「謝罪する側」のロールカード	
<p>【前提】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関係 : 大学の友だち ・約束場所 : 喫茶店 ・紹介してもらったバイト: 飲食店 ・バイト期間: 2ヶ月 <p>【内容】</p> <p>今友達から紹介してもらったアルバイトをしています。今のバイトは、自分から友だちにお願いして、友だちの知り合いの人に無理に雇ってもらっている仕事です。しかし、今日の新聞(あるいはネット等)で、もっと時給が高くて、更に、家からも近い位置にあるバイトを見付けました。あまりにも条件がよいので、そのバイト先に履歴書を送ろうと思います。その前に、今のバイトをやめようと思っていることを、紹介してくれた友達に相談します。</p>	<p>【전제】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・관계 : 대학교 친구 ・약속장소 : 찻집 ・소개받은 아르바이트: 음식점 ・아르바이트 기간 : 2 개월 <p>【내용】</p> <p>지금 친구에게 소개받은 아르바이트를 하고 있습니다. 지금 하는 아르바이트는 자신이 친구에게 부탁해서, 친구 아는 사람에게 무리하게 고용되어 있는 아르바이트입니다. 하지만 오늘 신문(또는 인터넷 등)에서 좀더 시급이 높고, 게다가 집에서도 가까운 위치에 있는 아르바이트를 찾았습니다. 너무 조건이 좋아서 그 아르바이트에 이력서를 보내려고 합니다. 그 전에 지금 아르바이트를 그만두고 싶다는 것을 소개해준 친구에게 상담합니다.</p>
「謝罪される側」のロールカード	
<p>【前提】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関係 : 大学の友だち ・約束場所 : 喫茶店 	<p>【전제】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・관계 : 대학교 친구 ・약속장소 : 찻집

<ul style="list-style-type: none"> ・紹介してもらったバイト: 飲食店 ・バイト期間: 2ヶ月 <p>【内容】</p> <p>友達がアルバイトを変えたいと言っています。しかし、今の友達の仕事は、知り合いの人にかなり無理を言って頼んだものなので、簡単に辞められては困ります。その知り合いの人には、あなたもいろいろ世話になっています。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・소개받은 아르바이트: 음식점 ・아르바이트 기간: 2개월 <p>【내용】</p> <p>친구가 아르바이트를 바꾸고 싶다고 말합니다. 하지만 지금의 친구의 일은, 아는 분에게 무리하게 부탁한 것으로 간단하게 그만둬 버리면 곤란합니다. 그 아는 사람에게는 당신도 여러 가지로 도움을 받고 있습니다.</p>
---	--

3.2.2.2 룰플레이場面における負担度の差の認定結果

上記の負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面は、先行研究等を参考にして設定したが、実際に、協力者もそのように考えるかどうかを調べるために、実験最後の段階で、「申し訳なさ」の認識度に関するアンケート調査を行った。「申し訳なさ」の認識度に関するアンケート調査を行った理由は、本研究で負担度が軽いと設定した謝罪場面と重いと設定した謝罪場面を、協力者も同様に捉えているかを調べ、場面設定の妥当性を確認するためである。

日韓の男性母語話者と女性母語話者のアンケート調査内容は同様であるが、その方式が異なっているので、男女別に見ることとする。以下の表3-4は、日韓の女性母語話者の「申し訳なさ」の認識度に対する調査内容である。協力者には同じ番号を2回つけないようにし、場面別に一つの番号をつけるよう指示した。以下のアンケートを実験に協力してくれた有効会話データの日本語女性母語話者32名、韓国語女性母語話者32名から記入してもらった。

表3-4 日韓の女性母語話者の「申し訳なさ」の認識度の調査内容(日本語、韓国語)

<p>以下のAからEまでの状況を読んでください。</p> <p>この状況の中で<u>友達</u>にもっとも「申し訳ない」と感じる順に1から5まで番号をつけてください。</p> <p>아래의 A 에서 E 까지의 상황을 읽어주세요. 이 상황 속에서 친구에게 가장 「미안함」을 느끼는 순으로 1 부터 5 까지 번호를 붙여주세요.</p> <p>例: 一番「申し訳なさ」を感じる(가장 「미안함」을 느낀다) ⇒1 かなり「申し訳なさ」を感じる(상당히 「미안함」을 느낀다) ⇒2 普通の「申し訳なさ」を感じる(보통의 「미안함」을 느낀다) ⇒3 少し「申し訳なさ」を感じる(약간 「미안함」을 느낀다) ⇒4</p>
--

あまり「申し訳なさ」を感じない(별로「미안함」을 느끼지 않는다)⇒5

場面 記号	場面内容 장면내용	「申し訳なさ」 の程度
A	<p>友達から紹介してもらったバイトをしているが、条件がいい他のバイト先が見付かったので、紹介してもらったバイト先を辞めたいと友達に言う時。</p> <p>친구에게 소개받은 일을 하고 있는데, 조건이 더 좋은 다른 일자리를 찾았기 때문에, 소개받은 일자리를 그만두고 싶다고 친구에게 말할때.</p> <p>(本研究で負担度が重いと設定した場面)</p>	
	<p>満員の電車で、友達が横に立っていたが、人々から押されて、友達の足を強く踏んでしまった。</p> <p>만원의 지하철에서, 친구가 옆에 서있었는데, 사람들에게 밀려서 친구의 발을 세게 밟았을때.</p>	
C	<p>友達から小説を借りたが、電車でカバンをなくしてしまい、そのカバンの中にあった借りた小説も無くしてしまった。</p> <p>친구에게 소설책을 빌렸는데, 지하철에서 가방을 잃어버려서, 그 가방 안에 있던 빌린 소설책도 잃어버리고 말았을때.</p>	
D	<p>友達と食事をしてから、支払おうとカバンを見たが、財布を持ってくるのを忘れたので、代わりに友達が食事代を払ってくれた。</p> <p>친구와 점심을 하고 나서, 돈을 지불하려고 가방을 봤는데, 지갑가지고 오는 것을 잊어버려서, 대신에 친구가 식사비를 내주었을때.</p>	
E	<p>友だちと約束があったので、約束場所へ行ったが、途中で電車が止まってしまい、20分ぐらい遅れて到着した。</p> <p>친구와 약속이 있었기 때문에, 약속장소로 가던 중에 지하철이 멈춰버려서, 20분 정도 늦게 도착했을때.</p> <p>(本研究で負担度が軽いと設定した場面)</p>	

表 3-4 の場面 A は、本研究において負担度が重いと設定した謝罪場面であり、場面 E は負担度が軽いと設定した謝罪場面であるが、両方とも相手に精神的な被害を与えた場合の謝罪場面である。また、場面 C と場面 D は相手に物質的な被害を与えた場合の謝罪場面、場面 B は相手に身体的に被害を与えた場合の謝罪場面である。以下の表 3-5 は、アンケートの調査結果である。

表 3-5 日本語女性と韓国語女性の「申し訳なさ」の認識度の調査結果(平均と標準偏差)

	A 場面	B 場面	C 場面	D 場面	E 場面
日本語女性	4.19(1.00)	1.72(1.05)	4.06(1.13)	2.75(0.98)	2.38(1.04)
韓国語女性	4.22(0.91)	1.63 (0.83)	3.78 (1.07)	2.69(1.20)	2.63(1.43)

表 3-5 の「申し訳なさ」の認識度の調査結果を見ると、本研究で負担度が軽いと設定した謝罪場面である E 場面より、負担度が重いと設定した謝罪場面である A 場面の平均値が日韓女性母語話者共に高いことがわかる。つまり、E 場面を A 場面より軽い謝罪場面であると協力者も認識しているのではないかと考えられる。

次は、日韓の男性母語話者の「申し訳なさ」の認識度の調査結果⁵⁷であるが、日韓の女性母語話者と同様に、アンケートを実験に協力してくれた有効会話データの日本語男性母語話者 32 名、韓国語男性母語話者 32 名から記入してもらった。日韓の男性母語話者の「申し訳なさ」の認識度の調査資料は、上記の表 3-4 の A 場面から E 場面までの謝罪場面とその並び方は同様であるが、直接に番号を付ける方法ではなく、各々場面を 5 段階に評価してもらった。つまり、①一番「申し訳なさ」を感じる、②かなり「申し訳なさ」を感じる、③普通の「申し訳なさ」を感じる、④少し「申し訳なさ」を感じる、⑤あまり「申し訳なさ」を感じない、の 5 段階にチェックする方式で調査を行った。

表 3-6 日本語男性と韓国語男性の「申し訳なさ」の認識度の調査結果(平均と標準偏差)

	A 場面	B 場面	C 場面	D 場面	E 場面
日本語男性	4.19(0.74)	2.59(0.84)	4.25(0.57)	3.13(0.98)	2.84(0.92)
韓国語男性	4.00(0.62)	2.97(0.78)	4.16(0.77)	3.25(0.88)	3.34(0.87)

表 3-6 の「申し訳なさ」の認識度の調査結果を見ると、日韓男性母語話者も日韓女性母語話者と同様に、E 場面より A 場面の平均値が高いことがわかるが、韓国語男性母語話者では、他の研究対象に比べ大きな差は見られない。

しかし、このアンケート調査内容には、負担度が重い謝罪場面の「紹介してくれた友達とその知り合いの関係の大事さ」に関する内容が提示されておらず、負担度が軽い謝罪場面の「連絡したが、友達が携帯を忘れてきた」という内容も提示されていないので、アンケート調査内容より、実際のロールカードの内容が負担度の差がより明確に出てくると考えられる。

本研究では、一番「申し訳なさ」を感じることは、相手にかかる負担を一番重く感じることだと思われるので、負担度が重い謝罪場面であると解釈した。反対に、あまり「申し訳なさ」を感じないことは、相手にかかる負担をあまり感じないことだと思われるので、負担度が軽い謝罪場面であると解釈した。つまり、本研究で設定した負担度が軽い謝罪場

⁵⁷ 「申し訳なさ」の認識度のアンケート調査内容は、参考資料を参照。

面と重い謝罪場面に関する負担度の差による場面設定には妥当性があることが確認された。

しかし、「申し訳なさ」と「負担度」の関連性が、本研究においては明確ではないので、今後、これらの関連性に関して研究すべきであると考えられる。

3.2.3 本研究の会話データの文字化

本研究は、「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」を、グローバルな観点とローカルな観点という二つの観点から総合的に分析し、相互作用を明らかにすることが主な目的である。この目的を明らかにするためには、会話の相互作用を分析する際に、定量的分析における分析項目の数量化が容易であることと、定性的分析における発話内容の意味把握と話者交替の区別が容易である文字化システムが必要であろう。従って、会話の相互作用の観点からの分析や定量的分析、定性的分析に適している BTSJ と BTKS を、本研究に最も適した文字化システムであると捉える。

会話の文字化は、日本語と韓国語共に 3 次チェックまで行い、その際、日本語母語話者大学院生と韓国語母語話者大学院生の協力を得た。また、韓国語の日本語訳は、日本語を専攻している韓国語母語話者大学院生や日本語の通訳や翻訳の仕事をしている韓国語母語話者社員の協力を得たものである。韓国語の日本語訳をするにあたり、なるべく意識を避け、直訳にしたが、発話内容によって、日本語で直訳するとその意味が伝わらなくなってしまう場合は意識を行った。以下では、本研究の会話データのトランスクリプトの作成に用いた BTSJ と BTKS の詳細を述べる。

3.2.3.1 基本的な文字化の原則（Basic Transcription System for Japanese: BTSJ）について

BTSJ は「総合的会話分析」に適した文字化システムとして考案されたもので、「発話文」を基本的な分析の単位とする。「発話文」は、以下のように定義されている。

「発話文」の定義は、会話という相互作用の中における「文」とする。そして以下のように認定する。基本的に、ひとりの話者による「文」を成していると捉えられるものを「1 発話文」とする。しかし、自然会話では、いわゆる「1 語文」や、述部が省略されているもの、あるいは、最後まで言い切られない「中途終了方発話」など、構造的に「文」が完結していない発話もある。そのような場合は、話者交替や間などを考慮した上で「1 発話文」であるか否かを判断する。つまり、「発話文」の認定には、「話者交替」、「間」という 2 つの要素が重要になる。

(宇佐美 2011 : 2)

「発話文」は文字化における改行と密接に関わっているので、その認定の仕方を述べる⁵⁸。

⁵⁸ 会話例は宇佐美(2011)から抜き出して、簡略化している。

1) 「発話文」の認定の仕方

① 1 語の発話文

2B 丙午‘ひのえうま’?。

② 文末が省略された形で言い切られた発話文

1A えっ、タイはどうしてそういうふうに。

③ 話者が自分で発話の最後まで言い切らず言い淀んだ発話文

1A あの一なんも面白いことがない<笑い>っていう…。

④ 第1話者の発話文が完結する前に、途中で挿入される形で、第2話者の発話が始まり、結果的に終了した発話文(7A の発話により 6B の発話が最後まで言い切れなかったことが 8B 以降の発話で分かる)

6B おれねー、中学んとき、<恋の><【>。

7A >><早く><)>付き合いたいねー。

8B あ、まじで。

9B ほんとに?。

10B 付き合いたいと思ってんの?、おまえ。

⑤ 前後に間があり、1 発話文とみなされるあいづちや笑い

6A あ、あの一会社自体はあの一食品を製造しているということで、ところで。

7B へー。

⑥ 構造的には文になっているが、独立した1発話文とはみなさず、その先行部・後続部とまとめて1発話文とするもの:フィラーの場合(以下の波線部)

3A 《沈黙 4 秒》あの、あれですよね、なんか社会人が、1年目っていうのはかなり厳しいもんがありませんでした?。

⑦ 構造的には文になっているが、独立した1発話文とはみなさず、その先行部・後続部とまとめて1発話文とするもの:直接引用を含む発話文の場合(以下の波線部)

1A であと一字を見ると“「姓 1」さんですか”って、さい、大体最初(はい)聞かれて、で、“「姓 1」さんですか”、(はい)“「姓 2」さんですか”、(はい)で、中には“「姓 3」さんですか”、《少し間》[息を吸い込んで]“どれも違うんだけど” (うんうんうんうん)とかって思い。

⑧ 1発話文になりうる発話が間を入れずに繰り返されているために、それらをまとめて1発話文とみなすもの

4A そうなんです、そうなんです、そうなんです。

⑨ 発話が一息に続いているため、1発話文と認められ、結果的に倒置の形になっているもの(以下の波線部)

1A わたしは、あの、給与関係してるので、計算ばかりなんです、よ、事務が。

⑩ 話者が一旦交替しても、同一話者によって発せられた「1 発話文」とみなすもの(2-1 と 2-2 とで 1 つの発話文とみなす。(以下の波線部)

2-1B 北浦とか、もっと、それよりもっと、

3A そうそうそうそう。

2-2B 駅前。

次は、BTSJ の内容を「改行の原則」、「発話文認定と分析に関わる記号」、「表記方法」に分けてまとめる。

2) 改行の原則

基本的には、話者が交替するたびに改行する。同一話者が複数の「発話文」を続けて発するとき、「発話文」ごとに改行する。また、笑いは、通常、<笑い>のように、< >の中に入れて示すが、相手の発話に重なる短い小声の笑いやあいづち「うん」等は、()に入れて、相手の発話の中の最も近いと思われる場所に挿入する。

3) 発話文認定と分析に関わる記号

「改行の原則」により、1発話文が1ラインで終わる場合と複数のラインにわたる場合がある。そのため、各ラインの末尾に、発話文が終了しているか否を区別する記号をつける。

1発話文が終了したところには、その最後に必ず句点「。」をつける。しかし、1 発話文の途中で相手の発話が入った場合には、その途中の句末に英語式コンマ 2 つ「,,」をつけ、その発話文が終わっていないことをマークする。つまり、1ラインの終わりには、必ず、句点「。」か、英語式コンマ 2 つ「,,」のどちらかの記号がつくことになる。

BTSJ において、「発話文数」と「ライン数」は、会話に関する情報を異なった視点から捉えている。「発話文数」は、1発話文を1と数えるが、1発話文は、1ラインで終る場合と、1 発話文の途中で話者交替があつて改行され複数のラインにわたる場合がある。しかし、「ライン数」は、発話文数と関係なく、1ラインを1と数える。「ライン番号」には、1ラインにつき1つの番号が割り当てられ、番号の若い発話が必ず先に発せられていることを示す。「発話文番号」は、「発話文」の数が分かるように、1つの発話文につき1つの番号を割り当てる。ただし、1発話文が数ラインにわたって記される場合は、その1 発話文内における各ラインの順番が分かるように、通し番号(例:44-1、44-2、44-3)をつける。

記入漏れ等のミスを防ぐため、BTSJ では、「発話文番号」とは別に「発話文終了」の列には、発話文が終了している列には、句点「。」とは別に「*」、発話文が終了していない列には「,,」とは別に「/」

を記入する。つまり、発話文番号と「。」と「*」の数、及び「,,」と「/」の数は必ず一致する。こうして、発話文を認定した結果は、「発話内容」の中の句点「。」と「,,」、及び「発話文終了」の列の「*」と「/」という2つの列で二重に確認し、記載漏れを防ぐようにする。

4) 表記方法

BTSJ における表記は、読みやすさを考慮し、基本的には、日本語表記として一般的な漢字仮名まじりの形とする。文字(漢字・仮名)および付属記号(読点「、」句点「。」)は全角で入力する。しかし、英数字および記号の表記は半角とする(ただし、BTSJ で用いる記号の中には、全角でしか表せないものもある)。

1発話文が終了したところには、その最後に必ず句点「。」をつける。その発話文が叙述なら句点「。」のみをつける。質問、確認等なら、「?」とそれに続けて句点「。」をつけ、「?。」という形にする。なお、疑問の終助詞(「か」等)がなくとも、イントネーションや文脈により、明らかに質問、確認等をしていると判断できるものには、「?。」をつける(「お名前は?。」等)。「?」の後に、「。」をつけるのは、「。」の数が発話文の数を表すようにするためである。

会話の音声的情報をできる限り正確に記述するため、複数の読み方があるもの(なんか、なにか、わたし、わたくし等)や、強調された発音(おっきな、ぜーんぜん等)、また、音が脱落したり、通常の発音からの逸脱が大きかったりするもの(せんせ(先生)、ふいんき(雰囲気)等)は、平仮名表記にする。また、通常とは異なる発音がなされた場合など、音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は、「,,」の中に正式な表記を記入しておく(例:ども どうも、こんにちは。)

長音の表記の原則は、「副詞—こう、そう、ああ、どう、 助動詞—よう、そう、 応答詞—ええ、はあ、 終助詞—ねー、よー、 あいづち—えーえー、はー」である。

読み方が複数ある言葉(例 A:明日 あしたのご予定は?。//明日 あすのご予定は?)や視覚的に漢字で表したほうが分かりやすい言葉(例 A:あのちょうど丙午 ひのえうまの世代なんですよ。)、読み方を入れたほうが分かりやすい地名(例 A:酒々井 しすいに行っただす。)などは、漢字で記した後、その読み方を平仮名で「,,」に入れて示す。

視覚上、区別した方が分かりやすいと思われるものには、本や映画の題名(例 A: あの、『ノルウェーの森』ってありますよね。))のような固有名詞や、発話者がその発話の中で漢字の読み方を説明した部分等(A: 宇宙の『う』です。)があるが、それらは、『 』で括る。

数字の含まれる言葉の表記は、実質的に数量・順序を表す言葉に関しては、算用数字を用い、漢字熟語の構成要素として用いる場合や概数を示す場合には、漢数字を用いることを基本とする。その他に、直接引用部、音声的情報、周辺言語情報、プライバシー保護といった、発話にかかわる様々な情報を記号化し、表記することになっている(詳細は後術の表 3-7 の「記号凡例」を参照)。

3.2.3.2 基本的な文字化の原則の韓国語版 (Basic Transcription System for Korean: BTISK) について

BTSK は、宇佐美他(2007)が BTSJ の観点に基づいて、韓国語の特徴と文字化の際に考慮すべき点を検討した上で考案した「基本的な文字化の原則韓国語版」である。以下では、李恩美(2008)と鄭榮美(2011)を参考にしながら BTSJ と重なる「発話文の認定の仕方」、「改行の原則」、「発話文認定と分析に関わる記号」の説明は省略し、韓国語の特徴に関して述べているところを中心に説明していく。

1) 韓国語の特徴

韓国語ではハングル文字を使用し、基本的に한글맞춤법(以下「ハングルつづり法」と記する)に従って表記する。

「ハングルつづり法」(1988 改訂)の総論を以下に示す。

1. 한글맞춤법은 표준어를 소리대로 적되, 어법에 맞도록 함을 원칙으로 한다.

(ハングルつづり法は標準語を発音どおり記すが、語法に合うようにすることを原則とする。)

2. 문장의 각 단어는 띄어쓰기를 원칙으로 한다.

(文の各単語は分かち書きを原則とする。)

3. 외래어는 ‘외래어 표기법’에 따라 적는다.

(外来語は‘外来語表記法’に従い、書く。)

(『韓国語文規定集』1995 : 10 引用者訳)

上記の「1. ハングルつづり法は標準語を発音どおり記すが、語法に合うようにすることを原則とする。」という説明には、韓国語の特徴からくる二つの原理が含まれていると考えられる。つまり、表音文字であるハングルで表記するときは「発音どおり書く」ことが原則となる。それと同時に、연규동(ヨン・キュドン 1998:233)でも言及されているように、韓国語は形態音素的交替が多い言語であるため、同一の形態が前後の要素によって発音が変わる場合が多く、それゆえ「語法に合う」ように書くのも原則になるわけである。これについて이희승・안병희(イヒスン・アンビョンヒ 1996)は[語法に合うように]、つまり文法に合うように記録することも大事であり、もし標準語を実際使用している発音のみで表記すると意味の把握が難しくなると説明している。

BTSK では「ハングルつづり法」にしたがって記すことが原則であるが、話し言葉の特徴を反映させるために、場合によっては BTSK 独自のルールを設けている。以下では、BTSK における表記方法を説明する⁵⁹。

⁵⁹ BTSK では、表記方法の中の「各発音現象」の下位項目として「方言」、「数字」、「長音」、「正しい語法ではないが、幅広く使用されている表現」を設けているが、「各発音現象」と「方言」、「数字」などの現象は異なると判断し、本稿では別の項目として立てることとする。会話例は宇佐美他(2007)から抜き出して、簡略化している。

2) 表記方法

① 「外来語・外国語」

ハングルつづり法では、外来語の表記は、外来語表記法に従うことになっているが、BTSKでは発話された通りにハングルで表記することを原則とする。ただし、発話通りの表記だけでは意味が分からない場合は、周辺言語情報として該当する単語の原語を書いておく。

(例) A : 근까 저희가 인제 외부에 있는 주로 루이비통 계열사인데, (음) 그거를 인제 프랑스에서 (음) 수입을 저희가 하는 건 아니고 (응), 저희는 디에프에스 'DFS' (음) , 듀티프리 'Duty Free' (음음음) 쪽을 해요=. (だからうちの会社は外部にある Louis Vuitton の系列社だけど、(うん) それを、フランスから (うん) 輸入をうちの会社がするのではなくて (うん) 、うちは DFS (うん) 、Duty Free のほうをやっています=。)

② 「各発音現象」

前述の通り、韓国語では同一の形態素の発音が前後に位置する要素によって大きく変わる。これらの現象は規則性を持っており、終声の初声化、有声音化、濃音化、激音化、口蓋音化、「ㄴ」挿入などが挙げられる。発話の中で以上のような発音現象が起こる場合はハングルつづり法に従って記す。しかし、実際の会話では発音のゆれ、縮約、添加、語彙の非文法的な使用などが起こる。このような話し言葉ならではの特徴はハングルつづり法だけでは十分に映し出すことができない。そこで、読みやすさと意味の把握に支障がないものは基本的に発音通りに書く。音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は「,, “」の中に正式な表記を記入しておく。

・母音の交替

以下のように、ある母音が他の母音に交替され、発話される場合、発話された通りに表記する。

(例) 「ㄴ[o]」→「ㄷ[wu]」 (例) 나이트 근무료→나이트 근무료

・語の縮約

縮約形からその語彙が持っている意味を読み取りにくい場合は、例のように該当することばの横に正式な表記を「,, “」の中に記入しておく。

(例) A : 종합병원이라, 일케, [이렇게의 줄임말] 쓰리 시프트루, 일케, 데이 이브닝 나이트 근무루 막 일케 계속 돌아가거든요. (総合病院なので、こう、[일케[ilkhey]→이렇게[ilehkey]の短縮]3交代で、こう、昼、夕方、夜の勤務で、こう、連続に回りますので。)

次は二重母音の縮約現象について述べる。韓国語の会話の中で二重母音/ㅟ/[wi]、/ㅟ/[oy]が単母音/ㅟ/[e]、/ㅟ/[a]と結合された場合は縮約されて発話される場合が多い。しかし、

現在の韓国語表記法ではこれらの現象を表記することができない。この問題に関しては、「21世紀世宗計画話し言葉コーパス（以下世宗コーパス）」でも指摘されている。「世宗コーパス」では、縮約されていない発音との区別をすべく、「ㄹ」の記号を用いて表記している。例えば、「쉬다[swita]」が丁寧さを表す終結語尾「요[yo]」と結合する場合、縮約されていない場合は「쉬어요[swieyo]」と、縮約された場合は「쉬어요[swi'eyo]」のように表記している。それに対して、金珍娥(2006)は文字化における記号の多用を避けるという意味で「쑤어요[swuss-ye-eyo]」のように、母音を別表記している。しかし、韓国語には母音のみでは表記しないという規則（母音のみの場合は、子音「ㅇ」を挿入する）があり、結果的には母音の別表記という一つの記号化されたものとなる。それゆえ、入力ミスとして扱われる恐れがある。BTSK では、基本的に「世宗コーパス」に従うが、「ㄹ」の記号はすでに他の機能を持つものとして使われているため、量的な処理の便利さを測り、「^」の記号を用いる。表記方法は以下ようになる。

- ・ 「世宗コーパス」 ⇒ 「쉬어요[swi'eyo]」
- ・ BTSK ⇒ 「쉬^어요[swi^eyo]」

・ 音の添加現象

会話のやり取りの中では、ハングルつづり法に規定された音の添加現象⁶⁰以外にも音の添加現象が多々起こる。김형정（キムヒョンジョン 2002:154）は、簡潔性が優先しされる話し言葉で音の添加現象が起こる理由として、流音, ㄹ[l]や鼻音, ㄴ[n]、ㄹ[m]、ㅇ[ng]が添加されることによって発音がしやすくなることを挙げている。BTSK ではこのような音の添加現象を話し言葉の特徴の一つと見なし、発話された音をそのまま表記する。

(例-1) A: 근데, 그래 가지구서 인데 [,,이제'에 ,,ㄴ'음 첨가] 내가 요번주 집에 갔잖아. (ところで、私、今 [,,이제[ice]'에 ,,ㄴ[n]'音添加] 週家に帰ったでしょう。)

(例-2) A: 근데 몰르겠어 [,,모르겠어'에 ,,ㄹ'음 첨가] , 『홍반장』 은 되게. (だけど、どうかな [,,모르겠어[molukeysse]'에 ,,ㄹ[l]'音添加]、『ホンバンジャン』はとても。)

・ 子音の濃音化

子音の濃音化の規則⁶¹以外に起こるものは、発話された通りに記す。更に濃音化の現象

⁶⁰ 韓国語には合成語と派生語で前の単語や接頭辞の最後の音が子音で、後ろに続く単語や接尾辞の初めての音節が‘이[i]、야[ya]、여[ye]、요[yo]、유[yu]’の場合は、‘ㄴ[n]’音を添加して [니[ni]、냐[nyal]、녀[nyel]、뇨[nyo]、뉴[nyul]] で発音する。また、パッチム‘ㄹ[l]’の後ろに添加する‘ㄴ[n]’音は‘ㄹ[l]’で発音する。そして、二つの単語をつなげて発音する場合も同様である。

(例) 솜-이불[som-ipwul]→[솜니불] [sompipwul]、한-여름[han-yeul]→[한너름] [hannyeul]
 영업-용[yengep-yong]→[영업농] [yengemnyong]、틀-일[tul-il]→[틀릴] [tullil]
 서른 여섯[selun yeses]→[서른너섯] [selunyeses]

⁶¹ 詳細は이희승・안병희（イヒスン・アンビョンヒ）（1996:223-225）を参照。

が何らかの機能を持つと考えられる場合は、音声的な特徴も詳しく書いておく。

- ・語頭で濃音化が起こる場合

(例) A: 정말 [강조하듯이] 예뻐졌다.

(ほんとうに (정말[cengmal]→정말[ccengmal]) [強調するように] かわい
くなったね。)

- ・語中に起こる場合

(例) A: 효과 보겠네. (효과[hyokwa]→효파[hyokkwa]あるでしょう。)

③ 「方言」

方言の特徴としてみなされるものは発話された通りに書く。ただし、韻律的な情報までは書かない。

(例) A: 뭐 니도 열심히 한다아이가. (なんかお前も頑張ってるじゃん。)

④ 「数字」

算用数字で表記した場合、二通りの読み方の可能性を持っている数字に関してはハンダ
ルで表記するが、「%」「cm」のような単位記号と一緒に使う場合など、一つの読み方しか
持っていない数字の表記に関しては読みやすさのため、算用数字を用いて表記する。

(例) 일 번, 한 번, 1 퍼센트, 2 센치など

⑤ 「長音」

同じ音がはっきりと発話された場合は発話されたとおりに表記するが、最後を伸ばす感
じで発話された場合は伸ばされた拍数に相当する数の「-」を入れる⁶²。

(例-1) A: /침묵 3 초/지금 일, 일어 전공하셨어요?

(沈黙 3 秒/今、日、日本語専攻されたんすか?)

B: 예예. (はいはい。)

(例-2) A: 아- 백화점 가고 싶다-. (あ、デパート行きたい。)

⑥ 「正しい語法ではないが、幅広く使用されている表現」

語形混乱によることばの間違った使い方が起こる場合、発話された通りに表記する。

(例) 「가리키다」と「가르치다」の語形混乱の場合

1 A: 예-, 저 그냥 학교에서, 일본어 가리키고 있습니다.

(はい一、あのただ学校で、日本語教えて[kalikhiko:本来の意味は、指す“]いま
す。)

2 A: 그쪽은-, 어떤 일-하십<니까?>{<}.
(そちらは一、どんな仕事一されてくるんですか?> {<}。)

3 B: <저두>{>} 일본어 가르치거든요.

(<私も> {>} 日本語教えてるんですよ[kaluchiketunyo:正しい使い方]。)

4 A: 예?, 어유-일본어요?<둘이 웃음>.

(はい?、あー日本語ですか?<二人で笑い>。)

⁶² 本稿では눈(目)と눈(雪)のような単語の意味の区別の働きをする長音は取り扱っていない。

5A : 아이－일본어 가리치시니까 어떠세요? 가리치시기.

(あー、日本語教えられて[kalichisinikka: 가르치다と가리키다の混合形]いかがですか?、教えること[kalichisiki: 가르치다と가리키다の混合形].)

3) 分かち書き

ハングルつづり法では、文の単語は分かち書きを原則とするとなっている。ここでは、ハングルつづり法における分かち書きの内容を연구동 (ヨンキュドン 1998:205) から引用し、まとめて示す。

①必ず分かち書きをしないもの：助詞

例) 꽃이 (花が)、멀리는 (遠くは)

②分かち書きしないことが原則であるが、特定な場合には分かち書きを許容するもの：姓と名前

例) 채영신 (チェヨンシン)、독고 준 (トッコジュン)

③必ず分かち書きするもの：依存名詞、単位名詞、列挙することば、呼称語、官職語
例) 아는 것이 힘이다. (知こそ力なり)

④分かち書きが原則であるが、分かち書きしないことも許容されるもの：順序を表したり、数字と一緒に書く単位名詞、数を書くとき、単音節の単語がつながって現れるとき、補助用言、姓名以外の固有名詞、専門用語

例) 불이 꺼져 간다. 불이 꺼져간다. (火が消えていく)

ところが、ハングルつづり法における分かち書きの原則には例外がいくつかある。それらを補うため、김선희・오승진 (キムソニ・オスンシン 2002:54-55) では、分かち書きについて、次のように述べている。

①分かち書きは、標準語法⁶³に従うが、標準語法で明確に決まることのできない場合は分かち書きをする。

②本用言と補助用言は分かち書きをする。ただし、両用言が密接に結合して一つの用言として辞書に載っている場合はつなげて書く。

(例) 살아 보자 (生きてみよう)、가보자 (行ってみよう)

넘나들다 (出入りする)、먹어 보다 (食べてみる)

③複合語の場合は、各々の単語に分離して書くが、この際単音節が生じる場合⁶⁴は、分かち書きをしないでつなげて書く。

(例) 아침 조깅 (朝のジョギング)、아침밥 (朝ご飯)

⁶³ 「標準語法」は「ハングルつづり法」を指していると考えられる。

⁶⁴ 「この際、単音節が生じる場合」というのは、「片方の単語が単音節である場合」だと考える。

④韓国人の人名である場合は姓と名前をつなげて書くが、外国の人名の場合は、姓と名前を分ち書きする。

(例) 이순신 (イ・スンシン)、 빌 클린턴 (ビル・クリントン)

BTSK ではハングルつづり法の原則と 김선희·오승진 (キムソニ・オスンシン 2002) を併用することになっている。

以下では、BTSJ と BTSK で用いる記号とその説明を示す。BTSJ と BTSK が異なる記号を用いる場合は、セルを分けてそれぞれ記す。

表 3-7 BTSJ と BTSK の記号凡例

発話文の認定に関する記号

BTSJ	BTSK	説明
。	.	[全角] 1 発話文の終わりにつける。
„		発話文の途中で相手の発話が入った場合、前の発話文が終わっていないことをマークするためにつけ、改行して相手の発話を入力する。 なお、入力の誤りを防ぐために、発話文が終了したラインには「*」、発話文が終了してないラインには「/」を、「発話文終了」の列に入れる。従って、「。」と「*」、「„」と「/」の対応関係をチェックすることができるようにしてある。
*		発話文が終了するごとに、「*」を「発話文終了」セルに記入する。つまり、発話文番号と発話内容中の句点「。」と「*」の数は必ず一致する。このように、「発話文終了」と「発話内容」と2つのセルで二重に確認する。
/		発話文が終了していないラインの「発話文終了」セルに記入する。発話内容中の「„」と「/」の数は必ず一致する。

発話内容の記述に関する記号

BTSJ	BTSK	説明
、	’	①[全角]1 発話文および 1 ライン中で、日本語(韓国語)表記の慣例の通りに読点をつける。 ②発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。 ⁶⁵

⁶⁵ 宇佐美(2011)の「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」では、日本語の「、」は「1 発話文および 1 ライン中で、日本語表記の慣例の通りに読点をつける。なお、慣例として表記する箇所短い間がある場合には、「、」をつける。」と説明され、「’」は「発話と発話のあいだに短い間がある場合につける。」と区別して説明している。しかし、本研究は、日本語と韓国語と対照研究であり、便宜上、日本語は「、」を、韓国語は「’」で表記することとする。

” “	①[全角]複数読み方があるものを漢字で表す場合、最も一般的な読み方ではなく、特別な読み方で発せられたことを示すために、その読み方を平仮名で,, “に入れて示す。 ②[全角]通常とは異なる発音がなされた場合など、音の表記だけでは意味が分かりにくい発話は、,, “の中に正式な表記をする。
『 』	[全角]視覚上、区別した方が分かりやすいと思われるもの、例えば、本や映画の題名のような固有名詞や、発話者がその発話の中で漢字の読み方を説明したような部分等は、『 』でくる。
“ ”	[全角]発話中に、話者及び話者以外の者の発話・思考・判断・知覚などの内容が引用された場合、その部分を“ ”でくる。
?	疑問文につける。疑問の終助詞がついた質問形式になっていなくても、語尾を上げるなどして、疑問の機能を持つ発話には、その部分が文末(発話文末)なら「?。」をつける。倒置疑問の機能を持つものには、発話中に「?。」をつける。
??	確認などのために語尾を上げる、いわゆる「半疑問文」につける。
[↑][→][↓]	イントネーションは、特記する必要があるものを、上昇、平板、下降の略号として、[↑][→][↓]を用いて表す。
《少し間》	話のテンポの流れの中で、少し「間」が感じられた際につける。
《沈黙 秒数》	1 秒以上の「間」は、沈黙として、その秒数を左記のように記す。沈黙自体が何かの返答になっているような場合は1 発話文として扱い1 ライン取るが、基本的には、沈黙後に誰が発話したのかを同定できるように、沈黙を破る発話のラインの冒頭に記す。
= =	改行される発話と発話の間(ま)が、当該の会話の平均的な間(ま)の長さより相対的に短いか、まったくないことを示すためにつける。これは、2 つの発話(文)について、改行していても音声的につながっていることを示すためである。その場合、最初のラインの発話の終わりに「=」をつけてから、句点「。」または英語式コンマ2 つ「,,」をつける。そして、続くラインの冒頭に「=」をつける。
...	文中、文末に関係なく、音声的に言いよどんだように聞こえるものにつける。
< >{<} < >{>}	同時発話されたものは、重なった部分双方を< >でくくり、重ねられた発話には、< >の後に、{<}をつけ、そのラインの最後に句点「。」または英語式コンマ2 つ「,,」をつける。また重ねた方の発話には、< >の後に、{>}をつける。
【 【 】】	[全角]第 1 話者の発話文が完結する前に、途中に挿入される形で、第 2 話者の発話が始まり、結果的に第 1 話者の発話が終了した場合は、「【 【 】】」をつける。結果的に終了した第 1 話者の発話文の終わりには、句点「。」の前に【 【 】 をつけ、第 2 話者の発話文の冒頭には【 【 】 をつける。
[]	文脈情報。その発話がなされた状況ができるだけわかりやすくなるように、音声上の特徴(アクセント、声の高さ、大小、速さ等)のうち、特記の必要があるものなどを[]に入れて記しておく。
()	短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に、()にくくって入れる。
< >	笑いながら発話したものや笑い等は、< >の中に、<笑いながら>、<2 人で笑い>などのように説

	明を記す。笑い自体が何かの返答になっているような場合は1発話文となるが、基本的には、笑いを含む発話中か、その発話文の最後に記し、その後に句点「。」または英語式コンマ 2 つ「,,」をつける。
(< >)	相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、(<笑い>)とする。
#	聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて、#マークをつける。
「 」	[全角]トランスクリプトを公開する際、固有名詞等、被験者のプライバシーの保護のために明記できない単語を表すときに用いる。

3.2.4 分析の信頼性(Cohen の Kappa (κ))

文字化資料の発話文の認定と、コーディング項目に基づいた会話データの分析が単に筆者の主観的判断によるものではなく、信頼性のあるものであることを確認するために、セカンドコーダー(第2認定者)を立てて筆者との「評定者間信頼性係数(Cohen's Kappa (κ))」を測定した。文字化した会話の資料の約 10%を、筆者とセカンドコーダーがそれぞれ発話文を認定し、または、コーディングを行い、その発話文の認定やコーディングの一致率を「評定者間信頼性係数(Cohen's Kappa (κ))」を用いて確認し算出を行う。

算出する公式は以下の通りである。

$$\kappa = \frac{Po - Pc}{1 - Pc}$$

Po:実際に観察された比率 Pc:偶然による比率

「評定者間信頼性係数(Cohen's Kappa (κ))」は、単純一致率から起こり得る偶然の一致を差し引いたもので、一致度が安定しているかという明確な基準はないが、比較的機械的な作業の要素が強い分類では κ=0.8 以上であれば、信頼性があると判断され、研究者の主観的な判断が強く作用する分類では κ=0.7 以上であれば、信頼性があると判断される。

第 4 章では、発話文の認定に関する筆者とセカンドコーダーとの「評定者間信頼性係数(Cohen's Kappa (κ))」の結果を、第 5 章から 7 章までは、分析項目のコーディングに対する筆者とセカンドコーダーとの「評定者間信頼性係数(Cohen's Kappa (κ))」の結果を説明するので、該当の章を参照されたい。

第4章 本研究の会話データに関する調査結果

本章では、宇佐美(2006b、2008)の「総合的会話分析」のアプローチにしたがって、一定の条件を統制した上で収集した会話データの基本情報とフォローアップ・アンケートの調査結果について述べる。

4.1 会話データに関する基本情報

本節では、実際使用された会話データの妥当性を確認した後、協力者に関する基本情報と会話時間、トランスクリプトにおける発話文数についての会話データに関する基本情報について述べる。

4.1.1 本研究の会話データの妥当性の確認

本研究で用いた会話データは、実際に録音された会話データの約半分しか使用していない。その理由は、まず、フォローアップ・アンケートで、「会話の流れが不自然だった」と答えたものと、「普段通りに話せなかった」と答えたものは、使わないことにしたからである。また、本研究は、同じ協力者が、負担度が重い場合と軽い場合の2回会話を行うので、フォローアップ・アンケートで2回全て妥当性が確認されたもの、そして、謝罪する側と謝罪される側の両側において妥当性が確認されたもののみを使うことにした。

本研究のデータ収集法は、ロールプレイであるため、自然会話と比べ、協力者が「不自然」と感じる傾向が多く、実際に「不自然さ」を強く感じた協力者の会話データは、途中で会話が途切れたり、沈黙が長く続いたり、やりとりが続かない等の現象が見られ、使用することができなかった。従って、上記の条件を満たした会話データのみ使用することとした。

日本語男性母語話者(以下、日本語男性)の会話において、録音した会話は、負担度が重い場面31会話、負担度が軽い場面31会話、計62会話を収録したが、妥当性が確認された会話データ数は、負担度が重い場面16会話、軽い場面16会話、計32会話である。韓国語男性母語話者(以下、韓国語男性)の会話において、録音した会話は、負担度が重い場面29会話、負担度が軽い場面29会話、計58会話であるが、妥当性が確認された会話データ数は、負担度が重い場面16会話、軽い場面16会話、計32会話である。日本語・韓国語男性母語話者の全ての会話データ数は、計120会話を収録したが、妥当性が確認された会話データ数は、計64会話である。

日本語女性母語話者(以下、日本語女性)の会話において、録音した会話は、負担度が重い場面29会話、負担度が軽い場面29会話、計58会話を収録したが、妥当性が確認された会

話データ数は、負担度が重い場面 16 会話、軽い場面 16 会話、計 32 会話である。韓国語女性母語話者(以下、韓国語女性)の会話において、録音した会話は、負担度が重い場面 30 会話、負担度が軽い場面 30 会話、計 60 会話であるが、妥当性が確認された会話データ数は、負担度が重い場面 16 会話、軽い場面 16 会話、計 32 会話である。日本語・韓国語女性母語話者の全ての会話データ数は、計 118 会話を収録したが、妥当性が確認された会話データ数は、計 64 会話である。

4.1.2 協力者に関する基本情報

協力者の基本情報である年齢、職業、最も長く滞在した地域、海外滞在経験等をフェイス・シートに記入してもらった。

便宜上、日本語は J(Japanese)、日本語男性母語話者は JM(Japanese Male)、日本語女性母語話者は JF(Japanese Female)と記し、韓国語は K(Korean)、韓国語男性母語話者は KM(Korean Male)、韓国語女性母語話者は KF(Korean Female)と記す。

日本語母語話者と韓国語母語話者の会話データ収集は、協力者を親しい友人関係に条件を統制した。ここでの「親しい」というのは、①非常に親しい、②だいぶ親しい、③どちらとも言えない、④あまり親しくない、⑤全然親しくないと 5 段階評価で評定してもらい、最も高い評価の①または②にチェックしたものを指す。

日本語男性の会話データは、2011 年 10 月～12 月に、日本語女性の会話データは、2008 年 4 月～5 月に収録した。日本語母語話者の場合、日本で住む日本人で、1 年以上の韓国留学をしたことがない日本人を研究対象とした⁶⁶。

日本語男性は、負担度が重い場面の会話 16 会話、負担度が軽い場面の会話 16 会話、計 32 会話で、会話収録当時は 18 歳～23 歳の男子大学生と大学院生である。日本語男性は、計 32 名で、関東地域の出身が 23 名、関東地域以外の出身が 9 名である。関東地域以外の出身の場合は、関東地域滞在歴 2 年以上の者で、最も話しやすい言葉として共通語を挙げている。詳細を表 4-1 に示す。

表 4-1 日本語男性母語話者の会話データの協力者に関する基本情報

会話番号	協力者			年齢	職業	最も長く住んでいた地域	海外滞在
	役割	関係	記号				
会話 1	謝る側	友人関係	JM01	1990(21)	大学生	茨城県	無
	謝られる側	友人関係	JM02	1990(21)	大学生	奈良県	無
会話 2	謝る側	友人関係	JM03	1991(20)	大学生	茨城県	有

⁶⁶ 本研究は、日韓対照研究を通して、日本と韓国の類似点と相違点などの特徴を明らかにすることが研究目的の一つである。したがって、韓国に 1 年以上滞在した経験がある日本語母語話者は、韓国社会や文化などに影響を受けている恐れがあると判断できるので、より明確な研究結果のため条件を統制した。

	謝られる側	友人関係	JM04	1991(20)	大学生	愛知県	無
会話 3	謝る側	友人関係	JM05	1989(22)	大学院生	静岡県	無
	謝られる側	友人関係	JM06	1988(23)	大学院生	千葉県	無
会話 4	謝る側	友人関係	JM07	1992(19)	大学生	神奈川県	無
	謝られる側	友人関係	JM08	1993(18)	大学生	静岡県	有
会話 5	謝る側	友人関係	JM09	1991(20)	大学生	千葉県	有
	謝られる側	友人関係	JM10	1992(19)	大学生	東京都	無
会話 6	謝る側	友人関係	JM11	1991(20)	大学生	栃木県	無
	謝られる側	友人関係	JM12	1991(20)	大学生	神奈川県	有
会話 7	謝る側	友人関係	JM13	1990(21)	大学生	福島県	無
	謝られる側	友人関係	JM14	1992(19)	大学生	静岡県	無
会話 8	謝る側	友人関係	JM15	1989(22)	大学生	長野県	無
	謝られる側	友人関係	JM16	1990(21)	大学生	埼玉県	無
会話 9	謝る側	友人関係	JM17	1992(19)	大学生	和歌山県	無
	謝られる側	友人関係	JM18	1991(20)	大学生	神奈川県	無
会話 10	謝る側	友人関係	JM19	1989(22)	大学生	埼玉県	無
	謝られる側	友人関係	JM20	1991(20)	大学生	東京都	無
会話 11	謝る側	友人関係	JM21	1991(20)	大学生	東京都	有
	謝られる側	友人関係	JM22	1992(19)	大学生	愛知県	無
会話 12	謝る側	友人関係	JM23	1992(19)	大学生	東京都	有
	謝られる側	友人関係	JM24	1992(19)	大学生	栃木県	無
会話 13	謝る側	友人関係	JM25	1992(19)	大学生	東京都	無
	謝られる側	友人関係	JM26	1992(19)	大学生	東京都	無
会話 14	謝る側	友人関係	JM27	1988(23)	大学生	埼玉県	無
	謝られる側	友人関係	JM28	1990(21)	大学生	東京都	無
会話 15	謝る側	友人関係	JM29	1991(20)	大学生	東京都	有
	謝られる側	友人関係	JM30	1990(21)	大学生	千葉県	無
会話 16	謝る側	友人関係	JM31	1991(20)	大学生	埼玉県	無
	謝られる側	友人関係	JM32	1991(20)	大学生	東京都	無

*JM03 は 1 年間イタリアで語学研修、JM08 は 1 年間オーストラリアで語学研修、JM09 は 6 歳から 8 歳までベルギーに滞在、JM12 は 1 年間韓国で語学研修、JM21 は 2 年間スウェーデンで語学研修、JM23 は 13 歳から 16 歳までアメリカに滞在、JM29 は 11 歳から 14 歳までシンガポールに滞在の経験がある。

日本語女性は、負担度が重い場面の会話 16 会話、負担度が軽い場面の会話 16 会話、計 32 会話で、会話収録当時は 18 歳～22 歳の女子大学生と大学院生である。日本語女性は、

計 32 名で、関東地域の出身が 23 名、関東地域以外の出身が 9 名である。関東地域以外の出身の場合は、関東地域滞在歴 2 年以上の者で、最も話しやすい言葉として共通語を挙げている。詳細を表 4-2 に示す。

表 4-2 日本語女性母語話者の会話データの協力者に関する基本情報

会話番号	協力者			年齢	職業	最も長く住んでいた地域	海外滞在
	役割	関係	記号				
会話 1	謝る側	友人関係	JF01	1988(19)	大学生	東京都	無
	謝られる側	友人関係	JF02	1988(19)	大学生	東京都	無
会話 2	謝る側	友人関係	JF03	1987(20)	大学生	埼玉県	無
	謝られる側	友人関係	JF04	1987(20)	大学生	香川県	無
会話 3	謝る側	友人関係	JF05	1989(18)	大学生	群馬県	無
	謝られる側	友人関係	JF06	1989(18)	大学生	静岡県	無
会話 4	謝る側	友人関係	JF07	1988(19)	大学生	東京都	無
	謝られる側	友人関係	JF08	1989(18)	大学生	栃木県	無
会話 5	謝る側	友人関係	JF09	1988(19)	大学生	神奈川県	無
	謝られる側	友人関係	JF10	1988(19)	大学生	千葉県	無
会話 6	謝る側	友人関係	JF11	1986(21)	大学生	岐阜県	有
	謝られる側	友人関係	JF12	1986(21)	大学生	神奈川県	無
会話 7	謝る側	友人関係	JF13	1990(17)	大学生	栃木県	無
	謝られる側	友人関係	JF14	1989(18)	大学生	埼玉県	無
会話 8	謝る側	友人関係	JF15	1989(18)	大学生	長野県	無
	謝られる側	友人関係	JF16	1988(19)	大学生	山形県	無
会話 9	謝る側	友人関係	JF17	1986(21)	大学生	福岡県	無
	謝られる側	友人関係	JF18	1987(20)	大学生	東京都	有
会話 10	謝る側	友人関係	JF19	1988(19)	大学生	埼玉県	有
	謝られる側	友人関係	JF20	1988(19)	大学生	千葉県	有
会話 11	謝る側	友人関係	JF21	1985(22)	大学院生	埼玉県	無
	謝られる側	友人関係	JF22	1985(22)	大学院生	埼玉県	無
会話 12	謝る側	友人関係	JF23	1988(19)	大学生	東京都	無
	謝られる側	友人関係	JF24	1989(18)	大学生	宮城県	無
会話 13	謝る側	友人関係	JF25	1988(19)	大学生	愛知県	無
	謝られる側	友人関係	JF26	1987(20)	大学生	千葉県	無
会話 14	謝る側	友人関係	JF27	1986(21)	大学生	東京都	無
	謝られる側	友人関係	JF28	1987(20)	大学生	東京都	無

会話 15	謝る側	友人関係	JF29	1986(21)	大学生	東京都	有
	謝られる側	友人関係	JF30	1987(20)	大学生	埼玉県	無
会話 16	謝る側	友人関係	JF31	1989(18)	大学生	東京都	無
	謝られる側	友人関係	JF32	1989(18)	大学生	静岡県	無

*JF11 は一年間ドイツで語学研修、JF18 は 5 歳から 11 歳までアメリカに滞在、JF19 は 6 歳から 8 歳までチリに滞在し、1 年間アメリカで語学研修、JF20 は 4 歳から 8 歳までアメリカに滞在、JF29 は 4 歳から 7 歳までアメリカに滞在の経験がある。

韓国語男性の会話データは、2011 年 8 月～9 月に、韓国語女性の会話データは、2008 年 3 月に収録した。韓国語母語話者の場合、韓国で住む韓国人で、1 年以上の日本留学をしたことがない韓国人を研究対象とした⁶⁷。

韓国語男性は、負担度が重い場面の会話 16 会話、負担度が軽い場面の会話 16 会話、計 32 会話で、会話収録当時は 18 歳～27 歳⁶⁸の男子大学生である。韓国語男性は、計 32 名で、京畿道(キョンギド)地域⁶⁹の出身が 32 名である。詳細を表 4-3 に示す。

表 4-3 韓国語男性母語話者の会話データの協力者に関する基本情報

会話番号	協力者			年齢	職業	最も長く住んでいた地域	海外滞在
	役割	関係	記号				
会話 1	謝る側	友人関係	KM01	1992(19)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KM02	1993(18)	大学生	ソウル市	有
会話 2	謝る側	友人関係	KM03	1987(24)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KM04	1988(23)	大学生	京畿道始興市	有
会話 3	謝る側	友人関係	KM05	1992(19)	大学生	京畿道仁川市	無
	謝られる側	友人関係	KM06	1992(19)	大学生	京畿道安養市	無
会話 4	謝る側	友人関係	KM07	1988(23)	大学生	京畿道城南市	無
	謝られる側	友人関係	KM08	1990(21)	大学生	ソウル市	無
会話 5	謝る側	友人関係	KM09	1986(25)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KM10	1986(25)	大学生	ソウル市	無
会話 6	謝る側	友人関係	KM11	1985(26)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KM12	1987(24)	大学生	ソウル市	有
会話 7	謝る側	友人関係	KM13	1986(25)	大学生	ソウル市	無

67 本研究は、日韓対照研究を通して、日本と韓国の類似点と相違点などの特徴を明らかにすることが研究目的の一つである。したがって、日本に 1 年以上長く滞在した経験がある韓国語母語話者は、日本社会や文化などに影響を受けている恐れがあると判断できるので、より明確な研究結果のため条件を統制した。

68 韓国語男性の協力者の中には、在学中に入隊してから復学した学生(24 歳～27 歳)もいたので、他の研究対象に比べ年齢が高い。

69 ソウル市を中心とする近辺の地域、首都圏地域を指す。

	謝られる側	友人関係	KM14	1984(27)	大学生	ソウル市	有
会話 8	謝る側	友人関係	KM15	1989(22)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KM16	1989(22)	大学生	ソウル市	無
会話 9	謝る側	友人関係	KM17	1993(18)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KM18	1992(19)	大学生	京畿道仁川市	無
会話 10	謝る側	友人関係	KM19	1989(22)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KM20	1989(22)	大学生	ソウル市	無
会話 11	謝る側	友人関係	KM21	1993(18)	大学生	京畿道金浦市	無
	謝られる側	友人関係	KM22	1992(19)	大学生	京畿道驪州郡	無
会話 12	謝る側	友人関係	KM23	1990(21)	大学生	京畿道坡州市	無
	謝られる側	友人関係	KM24	1988(23)	大学生	ソウル市	無
会話 13	謝る側	友人関係	KM25	1987(24)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KM26	1987(24)	大学生	ソウル市	無
会話 14	謝る側	友人関係	KM27	1993(18)	大学生	京畿道仁川市	無
	謝られる側	友人関係	KM28	1991(20)	大学生	ソウル市	有
会話 15	謝る側	友人関係	KM29	1987(24)	大学生	京畿道仁川市	無
	謝られる側	友人関係	KM30	1988(23)	大学生	ソウル市	無
会話 16	謝る側	友人関係	KM31	1987(24)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KM32	1986(25)	大学生	ソウル市	無

*KM02 は 1 年間アメリカで語学研修、KM04 は 1 年間フィリピンで語学研修、KM12 は 1 年間日本で語学研修、KM14 は 1 年間日本で語学研修、KM28 は 15 歳から 20 歳まで中国に滞在の経験がある。

韓国語女性は、負担度が重い場面の会話 16 会話、負担度が軽い場面の会話 16 会話、計 32 会話で、会話収録当時は 18 歳～23 歳の女子大学生である。韓国語女性は、計 32 名で、京畿道(キョンギド)地域の出身が 30 名、京畿道地域以外の出身が 2 名である。京畿道地域以外の出身の場合は、京畿道地域滞在歴 2 年以上の者で、最も話しやすい言葉として共通語を挙げている。詳細を表 4-4 に示す。

表 4-4 韓国語女性母語話者の会話データの協力者に関する基本情報

会話番号	協力者			年齢	職業	最も長く住んでいた地域	海外滞在
	役割	関係	記号				
会話 1	謝る側	友人関係	KF01	1989(18)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KF02	1989(18)	大学生	ソウル市	無
会話 2	謝る側	友人関係	KF03	1984(23)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KF04	1985(22)	大学生	ソウル市	無

会話 3	謝る側	友人関係	KF05	1989(18)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KF06	1989(18)	大学生	京畿道仁川市	無
会話 4	謝る側	友人関係	KF07	1986(21)	大学生	京畿道仁川市	無
	謝られる側	友人関係	KF08	1986(21)	大学生	京畿道仁川市	無
会話 5	謝る側	友人関係	KF09	1987(20)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KF10	1986(21)	大学生	ソウル市	無
会話 6	謝る側	友人関係	KF11	1986(21)	大学生	全羅北道群山市	無
	謝られる側	友人関係	KF12	1985(22)	大学生	京畿道天安市	無
会話 7	謝る側	友人関係	KF13	1988(19)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KF14	1988(19)	大学生	ソウル市	無
会話 8	謝る側	友人関係	KF15	1988(19)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KF16	1988(19)	大学生	ソウル市	無
会話 9	謝る側	友人関係	KF17	1986(21)	大学生	ソウル市	有
	謝られる側	友人関係	KF18	1987(20)	大学生	ソウル市	有
会話 10	謝る側	友人関係	KF19	1987(20)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KF20	1986(21)	大学生	ソウル市	有
会話 11	謝る側	友人関係	KF21	1987(20)	大学生	慶尚南道居昌郡	無
	謝られる側	友人関係	KF22	1988(19)	大学生	京畿道河南市	無
会話 12	謝る側	友人関係	KF23	1986(21)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KF24	1988(19)	大学生	ソウル市	無
会話 13	謝る側	友人関係	KF25	1989(18)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KF26	1989(18)	大学生	ソウル市	無
会話 14	謝る側	友人関係	KF27	1988(19)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KF28	1988(19)	大学生	ソウル市	無
会話 15	謝る側	友人関係	KF29	1986(21)	大学生	ソウル市	有
	謝られる側	友人関係	KF30	1986(21)	大学生	ソウル市	無
会話 16	謝る側	友人関係	KF31	1986(21)	大学生	ソウル市	無
	謝られる側	友人関係	KF32	1986(21)	大学生	ソウル市	無

*KF17 は 1 年間日本で語学研修、KF18 は 1 年間日本で語学研修、KF20 は 1 年間日本で語学研修、KF29 は 10 カ月間日本で語学研修の経験がある。

4.1.3 会話時間と発話文に関する基本情報

会話時間に関する基本情報では、会話の開始から終了までの所要時間と 1 会話当たりの平均所要時間、標準偏差(SD)を、以下の表 4-5 に示す。

表 4-5 日本語母語話者と韓国語母語話者の会話時間

言語(性別)	会話数	負担度	会話時間		
			総時間	1 会話当たりの平均所要時間	SD
日本語 (男性)	16	負担度重	1 時間 14 分 08 秒	5 分 3 秒	169.73
	16	負担度軽	19 分 42 秒	1 分 22 秒	30.82
日本語 (女性)	16	負担度重	57 分 37 秒	3 分 58 秒	96.53
	16	負担度軽	20 分 27 秒	1 分 27 秒	46.21
韓国語 (男性)	16	負担度重	1 時間 22 分 37 秒	5 分 12 秒	157.54
	16	負担度軽	36 分 33 秒	2 分 25 秒	78.44
韓国語 (女性)	16	負担度重	1 時間 3 分 35 秒	4 分 36 秒	103.66
	16	負担度軽	23 分 05 秒	1 分 44 秒	37.89

負担度が重い場合の日本語男性の会話データの総時間は 1 時間 14 分 08 秒であり、1 会話当たりの平均所要時間は 5 分 3 秒、標準偏差は 169.73 で、最長の会話は 13 分 37 秒(<日本語男性会話 6>)、最短の会話は 1 分 57 秒(<日本語男性会話 8>)である。日本語女性の会話データの総時間は 57 分 37 秒であり、1 会話当たりの平均所要時間は 3 分 58 秒、標準偏差は 96.53 で、最長の会話は 6 分 52 秒(<日本語女性会話 16>)、最短の会話は 1 分 25 秒(<日本語女性会話 11>)である。韓国語男性の会話データの総時間は 1 時間 22 分 37 秒であり、1 会話当たりの平均所要時間は 5 分 12 秒、標準偏差は 157.54 で、最長の会話は 10 分 59 秒(<韓国語男性会話 10>)、最短の会話は 1 分 47 秒(<韓国語男性会話 4>)である。韓国語女性の会話データの総時間は 1 時間 3 分 35 秒であり、1 会話当たりの平均所要時間は 4 分 36 秒、標準偏差は 103.66 で、最長の会話は 8 分 21 秒(<韓国語女性会話 15>)、最短の会話は 1 分 06 秒(<韓国語女性会話 16>)である。会話データの総時間は、男性の方が女性より長く、日本語母語話者より韓国語母語話者の方が長いことが分かる。

負担度が軽い場合の日本語男性の会話データの総時間は 19 分 42 秒であり、1 会話当たりの平均所要時間は 1 分 22 秒、標準偏差は 30.82 で、最長の会話は 2 分 13 秒(<日本語男性会話 5>)、最短の会話は 40 秒(<日本語男性会話 8>)である。日本語女性の会話データの総時間は 20 分 27 秒であり、1 会話当たりの平均所要時間は 1 分 27 秒、標準偏差は 46.21 で、最長の会話は 3 分 29 秒(<日本語女性会話 3>)、最短の会話は 30 秒(<日本語女性会話 2、6>)である。韓国語男性の会話データの総時間は 36 分 33 秒であり、1 会話当たりの平均所要時間は 2 分 25 秒、標準偏差は 78.44 で、最長の会話は 5 分 56 秒(<韓国語男性会話 7>)、最短の会話は 52 秒(<韓国語男性会話 14>)である。韓国語女性の会話データの総時間は 23 分 05 秒であり、1 会話当たりの平均所要時間は 1 分 44 秒、標準偏差は 37.89 で、最長の会話は 3 分 (<韓国語女性会話 15>)、最短の会話は 25 秒(<韓国語女性会話 16>)である。

会話データの総時間は、日本語母語話者より韓国語母語話者の方が長く、特に、韓国語男性の会話時間が長いことが分かる。次は、発話文数に関する基本情報である。

表 4-6 日本語母語話者と韓国語母語話者の発話文数

言語(性別)	会話数	負担度	発話文		
			総発話文数	1 会話当たりの 平均発話文数	SD
日本語 (男性)	16	負担度重	998	62.38	32.17
	16	負担度軽	398	24.88	12.52
日本語 (女性)	16	負担度重	810	50.63	21.01
	16	負担度軽	486	30.38	19.65
韓国語 (男性)	16	負担度重	1352	84.50	51.94
	16	負担度軽	871	54.44	36.84
韓国語 (女性)	16	負担度重	921	57.56	32.08
	16	負担度軽	612	38.25	16.63

負担度が重い場合の日本語男性の会話データの総発話文数は 998 文であり、1 会話当たりの平均発話文数は 62.38 文、標準偏差は 32.17 で、＜日本語男性会話 12＞の発話文数が 122 で最も多く、＜日本語男性会話 15＞の発話文数が 20 で最も少ない。日本語女性の会話データの総発話文数は 810 文であり、1 会話当たりの平均発話文数は 50.63 文、標準偏差は 21.01 で、＜日本語女性会話 16＞の発話文数が 88 で最も多く、＜日本語女性会話 11＞の発話文数が 21 で最も少ない。韓国語男性の会話データの総発話文数は 1352 文であり、1 会話当たりの平均発話文数は 84.50 文、標準偏差は 51.94 で、＜韓国語男性会話 10＞の発話文数が 195 で最も多く、＜韓国語男性会話 11＞の発話文数が 26 で最も少ない。韓国語女性の会話データの総発話文数は 921 文であり、1 会話当たりの平均発話文数は 57.56 文、標準偏差は 32.08 で、＜韓国語女性会話 7＞の発話文数が 134 で最も多く、＜韓国語女性会話 16＞の発話文数が 18 で最も少ない。会話データの総発話文数は、女性よりは男性の方が、日本語母語話者よりは韓国語母語話者の方が多いことが分かる。

負担度が軽い場合の日本語男性の会話データの総発話文数は 398 文であり、1 会話当たりの平均発話文数は 24.88 文、標準偏差は 12.52 で、＜日本語男性会話 7、12＞の発話文数が 46 で最も多く、＜日本語男性会話 13＞の発話文数が 10 で最も少ない。日本語女性の会話データの総発話文数は 486 文であり、1 会話当たりの平均発話文数は 30.38 文、標準偏差は 19.65 で、＜日本語女性会話 3＞の発話文数が 85 で最も多く、＜日本語女性会話 6＞の発話文数が 11 で最も少ない。韓国語男性の会話データの総発話文数は 871 文であり、1 会話当たりの平均発話文数は 54.44 文、標準偏差は 36.84 で、＜韓国語男性会話 7＞の発話文数が 154 で最も多く、＜韓国語男性会話 3＞の発話文数が 11 で最も少ない。韓国語女性の会話デ

一々の総発話文数は612文であり、1会話当たりの平均発話文数は38.25文、標準偏差は16.63で、＜韓国語女性会話 15＞の発話文数が81で最も多く、＜韓国語女性会話 10＞の発話文数が12で最も少ない。会話データの総発話文数は、日本語母語話者より韓国語母語話者の方が多く分かる。

本研究では総発話文数の約10%に当たる発話文を抽出し、評定者間信頼性係数(CohenのKappa)測定を行った。その結果、日本語では $\kappa=0.86$ 、韓国語では $\kappa=0.86$ の測定値が得られ、日本語も韓国語も $\kappa > 0.85$ で、発話文の認定は信頼性があると判断された⁷⁰。

4.2 フォローアップ・アンケート調査の結果

本研究は、「総合的会話分析」のアプローチに従い、会話収録後には会話データの妥当性を確認するため、フォローアップ・アンケートを実施し、分析を行っている。以下では、その調査結果を説明する。フォローアップ・アンケートは、負担度が重い場合と軽い場合の各々を収集したので、同じ協力者が2回行っている。また、質問項目は大きくまとめて、①会話の流れの自然さ、②話し方の自然さ、③録音の意識度の3つがあり、それぞれ5段階で評定してもらった。以下の表4-7に、その回答の平均と標準偏差(SD)をまとめて示す。

表 4-7 負担度が重い場合の日韓母語話者のフォローアップ・アンケート調査結果

言語(性別)	会話の流れの自然さ		話し方の自然さ		録音の意識度	
	①自然 ⇄ ⑤不自然		①自然 ⇄ ⑤不自然		①意識⇄⑤意識しない	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
日本語(男性)	2.31	0.69	2.22	0.66	3.00	0.92
日本語(女性)	2.16	0.63	1.81	0.69	2.97	0.82
韓国語(男性)	1.81	0.74	1.91	0.53	3.56	0.62
韓国語(女性)	2.22	0.79	1.81	0.64	3.50	0.67

表4-7を見ながら説明すると、負担度が重い場合、まず、「会話の流れの自然さ」においては、日本語男性の平均は2.31(SD=0.69)、日本語女性の平均は2.16(SD=0.63)、韓国語男性の平均は1.81(SD=0.74)、韓国語女性の平均は2.22(SD=0.79)で、ほぼ同様の評価が得られたが、その中でも特に、韓国語男性が「会話の流れ」が「不自然ではない」と評価していた。次に、「話し方の自然さ」においては、日本語男性の平均は2.22(SD=0.66)、日本語女性の平均は1.81(SD=0.69)、韓国語男性の平均は1.91(SD=0.53)、韓国語女性の平均は1.81(SD=0.64)であり、ほぼ同様の評価が得られたが、その中でも特に、日本語男性が「話し方」が若干「不自然」と評価していた。最後に、「録音の意識度」は、「意識度」を調査した後、「それが話し方に与えた影響」についても調べた。「録音の意識度」の日本語男性の平均は3.00(SD=0.92)、日本語女性の平均は2.97(SD=0.82)、韓国語男性の平均は3.56(SD=0.62)、韓

⁷⁰ 評定者間信頼係数の測定プロセスは、参考資料を参照。

国語女性の平均は 3.50(SD=0.67)であり、多くの協力者が録音を意識していたが、特に、韓国語母語話者より日本語母語話者が録音を意識していたと考えられる。また、「録音の意識度が話し方に与えた影響(①影響あり⇔⑤影響なし)」について調べた結果、日本語男性の平均は 3.09(SD=0.73)、日本語女性の平均は 3.39(SD=0.63)、韓国語男性の平均は 3.71(SD=0.72)、韓国語女性の平均は 3.83(SD=0.58)であり、日本語・韓国語母語話者ともに、録音は意識していたものの、それが話し方には特に影響を与えていなかったと評価していた。

次は、負担度が軽い場合である。

表 4-8 負担度が軽い場合の日韓母語話者のフォローアップ・アンケート調査結果

言語(性別)	会話の流れの自然さ		話し方の自然さ		録音の意識度	
	①自然 ⇔ ⑤不自然		①自然 ⇔ ⑤不自然		①意識⇔⑤意識しない	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD
日本語(男性)	2.31	0.59	2.06	0.56	3.13	0.79
日本語(女性)	1.94	0.67	1.81	0.59	3.56	0.80
韓国語(男性)	2.16	0.57	1.94	0.62	3.78	0.71
韓国語(女性)	1.88	0.61	1.69	0.47	3.69	0.64

表 4-8 を見ながら説明すると、負担度が軽い場合、まず、「会話の流れの自然さ」においては、日本語男性の平均は 2.31(SD=0.59)、日本語女性の平均は 1.94(SD=0.67)、韓国語男性の平均は 2.16(SD=0.57)、韓国語女性の平均は 1.88(SD=0.61)であり、日韓共に男性よりは女性の方が「会話の流れが自然」であると評価していた。次に、「話し方の自然さ」においては、日本語男性の平均は 2.06(SD=0.56)、日本語女性の平均は 1.81(SD=0.59)、韓国語男性の平均は 1.94(SD=0.62)、韓国語女性の平均は 1.69(SD=0.47)であり、ほぼ同様の評価が得られたが、特に、日本語男性が「話し方」が若干「不自然」であると評価していた。「録音の意識度」においては、日本語男性の平均は 3.13(SD=0.79)、日本語女性の平均は 3.56(SD=0.80)、韓国語男性の平均は 3.78(SD=0.71)、韓国語女性の平均は 3.69(SD=0.64)であり、ほぼ同様の評価が得られた。また、「録音の意識度が話し方に与えた影響(①影響あり⇔⑤影響なし)」について調べた結果、日本語男性の平均は 3.48(SD=0.67)、日本語女性の平均は 3.58(SD=0.77)、韓国語男性の平均は 3.76(SD=0.70)、韓国語女性の平均は 4.08(SD=0.64)であり、日本語・韓国語母語話者ともに、録音は意識していたものの、それが話し方には特に影響を与えていなかったと評価していた。

以上の結果から、負担度が重い場合と軽い場合ともに、多くの協力者が「会話の流れ」と「話し方」が「自然」であると評価しており、「録音」においては多少意識しているものの、それが話し方には特に影響を与えていなかったと評価していた。

4.3 会話データに関するまとめ

本章では会話データの基本情報と会話収録後に行ったフォローアップ・アンケートの調査結果を述べた。日本語男性の会話データは、2011年10月～12月に、日本語女性の会話データは、2008年4月～5月に収録した。韓国語男性の会話データは、2011年8月～9月に、韓国語女性の会話データは、2008年3月に収録した。各会話は、負担度が重い謝罪場面の会話16会話、負担度が軽い謝罪場面の会話16会話、計32会話である。

負担度が重い場合の会話データの総時間を見てみると、日本語男性で1時間14分08秒、日本語女性で57分37秒、韓国語男性で1時間22分37秒、韓国語女性で1時間3分35秒であった。負担度が軽い場合の会話データの総時間を見てみると、日本語男性で19分42秒、日本語女性で20分27秒、韓国語男性で36分33秒、韓国語女性で23分05秒であった。

続いて、負担度が重い場合の会話データの総発話文数について見てみると、日本語男性で998文、日本語女性で810文、韓国語男性で1352文、韓国語女性で921文であった。負担度が軽い場合の会話データの総発話文数について見てみると、日本語男性で398文、日本語女性で486文、韓国語男性で871文、韓国語女性で612文であった。また、発話文の改行における信頼性を確認するために評定者間信頼係数を測定した結果、信頼性があることを確認した。

フォローアップ・アンケートの調査結果では、負担度の差により若干異なっていたが、「会話の自然さ」と「話し方の自然さ」に関しては日韓ともに不自然ではなかったと評価し、「録音の意識度」においては日韓ともにある程度意識はしていたものの、それが特に話し方には影響を与えていなかったと評価していた。

以上の結果から、本研究の分析対象となる会話データの妥当性と信頼性が確認できたとと言えるであろう。

第5章 謝罪談話の構造分析

本章では、「謝罪談話」を、「謝罪行動」のやりとりを含むより大きなレベルであると捉え、その全体像を解明することを試みる。ロールプレイを行った「謝罪会話」全体は、「謝罪行動とそれに対する反応」のやりとりを含む複数の「謝罪談話」から構成されると捉え、単位として設定する。

先述したように、「謝罪」という言語行動を談話レベルで分析を行った研究は数少なく、謝罪する側の謝罪行動のみに焦点をおいた研究がほとんどである(詳細は2.2を参照)。しかし、「謝罪-受け入れる」、「謝罪-受け入れない」のような隣接ペアの構造のみならず、謝罪内容と直接に関連がない話しのやりとりや謝罪内容に関する本題に入る前に現れる前置きのやりとり、更に、謝罪内容を受け入れる、あるいは、受け入れないことで収束された後のやりとりを談話レベルで分析すると、「謝罪」という言語行動の構造がより明らかになると考えられる。

更に、杉本(1997)が指摘するように、「謝り方の効果」を確認するためには、謝らなかつた場合の被害者の反応と謝った場合の被害者の反応を比較する必要があるため、談話レベルの分析によってより明らかになる特徴があると考えられる。「謝罪」は、「すまない、ごめん、申し訳ない、悪い等」の「謝罪定型表現」が含まれている行動が核となると思われるが、この核となる「謝罪定型表現」の有無に敏感に反応する言語行動であり、対人コミュニケーションに深刻な影響まで与える言語行動であると考えられる。

そこで本研究では、謝罪談話を、<具体的な謝罪内容が言及される直前までのやりとり>、<明確な「謝罪定型表現」を含まず、謝罪内容を具体的に言及するやりとり>、<明確な「謝罪定型表現」を含むやりとり>、<謝罪内容が収束された後、謝罪内容と関連性のある話題についてのやりとり>、<謝罪内容と直接関係のないやりとり>の5つの部分に大きく分けて談話レベルでその構造を分析する。

分析においては、まず、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面の日韓男女母話者における謝罪談話を構成する各談話を抽出し、謝罪談話の構造の類似点と相違点を全体的に比較しながら、考察を行う。次に、各談話がどのような展開を見せているのかを分析した後、会話例を見ながら具体的な特徴を探る。特に、「謝罪定型表現」の有無による謝罪談話の展開の特徴や謝罪内容と関係のない話題の挿入が謝罪談話に及ぼす特徴などの「謝り方の効果」を視野に入れて考察を行う。

以上の分析により、性別による日韓の謝罪談話の全体的な構造、謝罪談話を構成する各談話の展開様子、そこに現れる謝罪する側と謝罪される側の相互作用の特徴が明らかになると考えられる。

5.1 謝罪談話における分析方法

メイナード(1997: 12-13)は、談話を「実際に使われる言語表現で、原則としてその単位を問わない。単語一語でも談話と言えるが実際には複数の文からなっていることが多く、何らかのまとまりのある意味を伝える言語行動の断片」とであると定義している。また、2.5で概観したように、談話を構成する重要な要素は「結束性(cohesion)」である。本研究では、メイナード(1997)や Halliday and Hasan(1976、1985)を参考にし、談話を「結束構造と結束性を持つ意味的なまとまりがある言語行動の断片」と捉えているが、ここで談話を捉える重要な概念は、「結束構造や結束性」と「意味的なまとまりがある言語行動の断片」である⁷¹。

本研究の謝罪談話の分析においては、「謝罪—受け入れる」のやりとりで、謝罪する側の発話に対し、謝罪される側が「大丈夫、しょうがない、いいよ等の言葉を用いて受け入れることを示す応答(負担度が軽い場合)」や「謝罪する側が引き起こした謝罪内容を受け入れることを示す応答(負担度が重い場合)」を、明示的かつ直接的に受け入れる意を示している応答と捉え、「これらの応答は現れないが受け入れる意を示す応答」を非明示的かつ間接的な応答と捉え、区別して考えることとする。同様に、「謝罪—受け入れない」のやりとりにおいても、謝罪する側の発話に対し、謝罪される側が「無責任、立場、面子、困る、勝手等の否定的な言葉を用いて自分の不満な気持ちを表しながら受け入れない意を示す応答(負担度が重い場合)」を明示的かつ直接的に受け入れない応答と捉え、「これらの応答は現れないが、遠まわしに受け入れない意を示す応答(負担度が重い場合)」を非明示的かつ間接的な応答と捉え、区別して考えることとする。本研究は、これらの観点も視野に入れ、分析を行うこととする。

以下では、謝罪談話とその下位分類の定義を行い、会話例を挙げながら説明する。

- ・ 謝罪談話：話し手のあやまちや相手への被害などへの責任を認め、許しを乞い、それによって相手との人間関係における均衡を回復する行為が含まれている意味的なまとまり。謝罪談話を構成する各談話を、「前置き談話」、「交渉談話」、「核談話」、「後続関連談話」、「挿入談話」と下位分類する。
- ① 前置き談話：具体的な謝罪内容を示す前の前置きの働きをしていると判断されるやりとりが行われている発話文の意味的なまとまり。
- ② 交渉談話：「核談話」の前後に現れ、明確な「謝罪定型表現」は含まれていないが、謝罪内容と関係がある話題についてのやりとりが行われていると判断される発話文の意味的なまとまり。ここでいう「交渉」は「特定の問題について相手と話し合うこと、掛け合うこと」を意味する。この談話には、謝罪内容が謝罪される側に直接的あるいは間接的に受け入れるか、または、直接的あるいは間接的に受け入れないかの意が示される。

⁷¹ 鄭栄美(2011: 84)でも同様の捉え方をしている。

- ④ 核談話：明確な「謝罪定型表現」を含む発話文が用いられており、謝罪内容と関係がある話題についてのやりとりが行われていると判断される発話文の意味的なまとまり。この談話には、謝罪内容が謝罪される側に直接的あるいは間接的に受け入れるか、または、直接的あるいは間接的に受け入れないかの意が示される。
- ⑤ 後続関連談話：謝罪内容を受け入れるか、受け入れないかで収束されたが、会話が終了せずに、継続し、謝罪内容と直接関係のある話題に関するやりとりが行われていると判断される発話文の意味的なまとまり。この談話には、謝罪内容が謝罪される側に直接的あるいは間接的に受け入れるか、または、直接的あるいは間接的に受け入れないかの意が示されるやりとりも含まれる。
- ⑥ 挿入談話：謝罪内容と直接関係のない話題についてのやりとりが行われていると判断される発話文の意味的なまとまり。

以下では、実際の会話例を見ながら、コーディングの仕方について説明する。まず、負担度が軽い場合のコーディング例である。

<会話例 5-1> 「核談話」、「後続関連談話」、「挿入談話」のコーディングの例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
1	JM09	あー、ごめん、&,	核談話 (直接的に受け入れる)
2	JM09	遅れちゃった。	
3	JM10	お前、何分遅れてんだよ、お前。	
4	JM09	やー、ごめん、やー、申し訳ないっす。	
5	JM09	<笑い>やー、途中で(うん)、一応、間に合うように出ただけど、電車が(うん)止まっちゃって(うん)。	
6	JM09	《沈黙 2 秒》で一、電話したんだけど(うん)。	
7	JM09	《沈黙 2 秒》なんか、地下だったから、分かんないんだけど(うん)、繋がなくて(うん)。	
8	JM09	《少し間》連絡できなくて、&,	
9	JM09	ごめん。	
10	JM10	なるほどね、やあー<笑い>、実はさ(うん)、俺今日ちょっと携帯を家に忘れちゃってさ(うん)。	
ライン番号 11~20 省略			
21	JM09	<やあー>{>、遅れる気はなかったっていう(うん)ことで、ちょっと免じてほしいんだけど<笑い>。	
22	JM10	なるほど<2 人で笑い>。	
23	JM10	やあー、まあー[↑]。	

24	JM10	《少し間》やあー、まあ、そうだね、電車止まったのはしょうがないよね、うん。 ←直接的に受け入れる	
25	JM09	東京、電車、ち、止まんの多いじゃん。	後続関連 談話 (直接的に 受け入れる)
26	JM10	そうだね、「線名」(やー)止まりまくるからね(うん)〈笑い〉。	
27	JM09	いいわけするわけじゃないけど。	
28	JM10	うん。	
ライン番号 29～34 省略			
35	JM10	うん、お前が寝坊して遅れてたらね。	核談話 (直接的に 受け入れる)
36	JM09	まあまあ確かに><。	
37	JM10	<まあ><、20分も、寝坊して遅れたら、まあ、怒るけど、電車止まったんなら なあ、しょうがないな。 ←直接的に受け入れる	
38	JM09	やあ、俺もどうしてもないっ[↑]、どうしてもなかった正直、&,、	
39	JM09	ごめん。	
40	JM10	うん、まあー。	挿入談話
41	JM10	《少し間》そこは、しょうがない。 ←直接的に受け入れる	
42	JM10	取りあえず、お腹減ったから、ご飯食べに行こうぜ。	
43	JM09	お、そうだね。	

負担度が軽い謝罪場面は、「電車が止まり、約束時間に 20 分位遅れる」という設定である。＜会話例 5-1＞は、日本語男性の会話例であるが、「ごめん」という「謝罪定型表現」を用いて謝罪する発話からスタートする「核談話」のやりとりが行われている。ライン番号 2～23 にかけて、謝罪する側は、状況説明や責任関連などの発話文を用いて謝罪しながら会話を進めており、謝罪される側は、携帯を持ってくるのを忘れた自分の過失を言及し、更に、遅れた理由に関する事態確認をする発話文を用いて応答する意味的なまとまりが現れている。これらのやりとりが行われてから、ライン番号 24 で、「《少し間》やあー、まあ、そうだね、電車止まったのはしょうがないよね、うん。」と、「しょうがない」と明示的に受け入れる意を示す言葉を用いて謝罪する側の謝罪を受け入れることを示し、会話は収束される。しかし、ここで会話は終了せず、ライン番号 25～36 で、再度、謝罪内容と関係のある話題のやりとりが行われる「後続関連談話」が現れ、ライン番号 37 で、「<まあ><、20分も、寝坊して遅れたら、まあ、怒るけど、電車止まったんならなあ、しょうがないな。」と、再度、明示的かつ直接的に受け入れることを示す意味的なまとまりが現れる。更に、ライン番号 38～41 で、再度、謝罪し受け入れる「核談話」が現れてから、ライン番号 42 と 43 で謝罪内容と関係のないやりとりが行われる「挿入談話」で、＜会話例 5-1＞は終了される。

このように、負担度が軽い場合には、「核談話」は、「大丈夫、しょうがない、いいよ等の言葉を用いて直接的に受け入れることを示す応答」と「これらの言葉は用いていないが間接的に受け入れることを示す応答」が現れるまでの意味的なまとまりであると捉える。

次は、負担度が重い場合のコーディング例である。

<会話例 5-2> 「前置き談話」、「交渉談話」、「核談話」のコーディングの例

ライン番号	話者	発話内容	
			謝罪談話
1	JF23	あの、あのね。	前置き談話
2	JF24	うん。	
3	JF23	バイトを、あの一、紹介してくれたじゃん。	
4	JF24	うん。	
5	JF23	《沈黙 3 秒》でも、あの、この前新聞見たらね,,	交渉談話 (直接的に受け入れない)
6	JF24	うん。	
7	JF23	あの、紹介してくれたバイトよりもいいバイト<笑い>、いい、なんか時給が高いのがあって(うん)、&,、	
8	JF23	だからあの、あの、無理に雇ってって言ったんだけど&,、	
9	JF23	[段々躊躇するような声で]ちょっと辞めようかなって思ってるんだけど=。	
10	JF24	=ちょっと待って、だってまだ 2 ヶ月でしょう?。	
11	JF24	あっ、ていうか、もう 2 ヶ月もやったんだし、慣れてるから多分また新しいやるの無理だと思うよ。	
12	JF23	うんー、でも今の時給はちょっとなって思ってた、だから、うんその新しいバイト先に履歴書送ろうかなくて思っ<く>【】。	
13	JF24	【】<く>ちょっと<く>待って、てか、「JF23 名」が(うん)勝手に申し込んだバイトならまだ私も(うん)。	
14	JF24	私が頼んだやつじゃん、今やってるバイトって(うん)。	
15	JF24	なんか、そういうことされるの、こっちとしてもなんかその、面子が立たないっていうかなんか。 ←直接的に受け入れない	
16	JF23	ううんー、それはそっちでちょっとお願いしてあって、&,、	核談話 (直接的に受け入れない)
17	JF23	本当悪いんだけど、&,、	
18	JF23	でも、こう、なんていうの、バイト選ぶのも私が自分で選んでいいわけだし、&,、	
19	JF23	本当悪いんだけど、&,、	
20	JF23	うんー、そう言おうと思ったんだけど…。	
21	JF24	えー、なんかそれちょっと無責任じゃない?。 ←直接的に受け入れない	
22	JF23	うんー。	
23	JF24	え、何のバイト?。	
24	JF23	えとね、うんとね、家からね近いバイトなんだけれどね、うん、喫茶店、うん、あの今紹介されてるのが飲食店じゃん。	

25	JF24	うん=。	
26	JF23	=飲食店よりもこっちのバイトの方がいいな一って思ってるのね。	
27	JF23	《沈黙 4 秒》だから…。	
28	JF23	《沈黙 4 秒》飲食、うん、飲食店はちょっと、ちょっと私は合わない感じがして、だから、うん一、&,、	核談話 (間接的に 受け入れる)
29	JF23	ごめんなさいなんだけれど…。	
30	JF24	じゃあ「JF23 名」がちゃんと、その店長さんに話'はんし'付けるんだったら、私に迷惑とかかかんないんだたら<別に><【。←間接的に受け入れる	
31	JF23	】<うん><}>それはそのつもり。	

負担度が重い謝罪場面は、「友達から紹介してもらったバイトを辞める」という設定であり、過去の過失ではなく、これから相手に迷惑をかけることになる謝罪場面である。〈会話例 5-2〉は、日本語女性の会話例であるが、ライン番号 1~4 にかけて、具体的な謝罪内容を示す前の前置きの働きをする「前置き談話」から会話が始まり、《沈黙 3 秒》の後、本格的な謝罪内容に入る。ライン番号 5~15 で、謝罪する側は、紹介してもらったバイト先を辞めたい自分の意向を説明し、理解を求めているが、謝罪される側は、事態を確認してから、ライン番号 13、14、15 で、「勝手」、「私が頼んだやつ」、特に、ライン番号 15 で「なんか、そういうことされるの、こっちとしてもなんかその、面子が立たないっていうかなんか。」と、謝罪する側の意向を受け入れることができない意を不愉快な気持ちを込めて直接的に表す「交渉談話」のやりとりが行われている意味的なまとまりであると判断される。すると、ライン番号 16~27 で、謝罪する側は「本当に悪いんだけど」と謝罪しながら、再度、自分の意向を述べているが、ライン番号 18 で、「でも、こう、なんていうの、バイト選ぶのも私が自分で選んでいいわけだし、&,、」と若干無礼そうな発話をし、これを受け、謝罪される側は、「えー、なんかそれちょっと無責任じゃない?。」(ライン番号 21)と、非難しながら受け入れることは示さず、継続し、事態を確認している。ここでの「核談話」は受け入れないことで意味的なまとまりを成している。その後、ライン番号 28~31 で、再度、「核談話」のやりとりが行われているが、謝罪する側は、自分の意向は変更せず謝罪しながら再度理解を求めており、すると、ライン番号 30 で、「じゃあ「JF23 名」がちゃんと、その店長さんに話'はんし'付けるんだったら、私に迷惑とかかかんないんだたら<別に><【。』と、不満な気持ちはあるけど、謝罪する側の意向を受け入れることを間接的に示し、ここで会話は、収束に入ることができる。このように、負担度が重い場合の「交渉談話」と「核談話」は、「謝罪する側が引き起こした謝罪内容を直接的に受け入れることを示す応答と、間接的に受け入れることを示す応答」、さらに、「謝罪する側が引き起こした謝罪内容を直接的に受け入れないことを示す応答と、間接的に受け入れないことを示す応答」が現れる意味的なまとまりであると捉える。

5.1.1 謝罪談話の評定者間信頼性係数

「謝罪談話」のコーディング項目の信頼性を確認するために、第二評定者を立て、Cohen's Kappa を用いて確認した。以下の表 5-1 に、「謝罪談話」におけるコーディングの評定者間信頼性係数を示す。

表 5-1 日韓母語話者の「謝罪談話」における評定者間信頼性係数

	日本語母語話者	韓国語母語話者
負担度が軽い謝罪場面	$\kappa=0.923$ ($\kappa>0.70$)	$\kappa=0.860$ ($\kappa>0.70$)
負担度が重い謝罪場面	$\kappa=0.836$ ($\kappa>0.70$)	$\kappa=0.884$ ($\kappa>0.70$)

表 5-1 を見ると、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面における日韓母語話者の「謝罪談話」のコーディングの評定者間信頼性係数は、全て $\kappa>0.70$ で、信頼性があると判断された。

5.2 謝罪談話に関する日韓対照の分析結果及び考察

本節では、負担度が軽い場合と負担度が重い場合の日韓男女母語話者における謝罪談話を構成する各談話を抽出し、更に、謝罪談話を構成する各談話の展開や構造の特徴を日韓対照の観点で全体的に分析し考察を行う。

5.2.1 負担度が軽い場合の日韓母語話者の謝罪談話の分析結果及び考察

負担度が軽い謝罪場面として設定された「遅刻場面」は、自分の過ちではなく、不可避な状況により不本意的に遅刻してしまったという設定である。日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪談話の特徴を、まず、日韓の謝罪談話を構成する各談話の抽出結果を示し、次に、日韓における謝罪談話の展開や構造の特徴を述べる。以下の表 5-2 や図 5-1 で日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪談話を構成する各談話の抽出結果を示す。

表 5-2 日韓母語話者における負担度が軽い場合の謝罪談話を構成する各談話の抽出結果

	前置き談話	交渉談話	核談話	後続関連談話	挿入談話	合計
日本男性	0 (0.00)	*0 (0.00)	25 (67.57)	8 (21.62)	4 (10.81)	37 (100.00)
日本女性	0 (0.00)	*0 (0.00)	31 (60.78)	7 (13.73)	13 (25.49)	51 (100.00)
韓国男性	0 (0.00)	*8 (14.29)	21 (37.50)	11 (19.64)	16 (28.57)	56 (100.00)
韓国女性	0 (0.00)	*0 (0.00)	21 (48.84)	11 (25.58)	11 (25.58)	43 (100.00)

()は割合 * $p<.05$

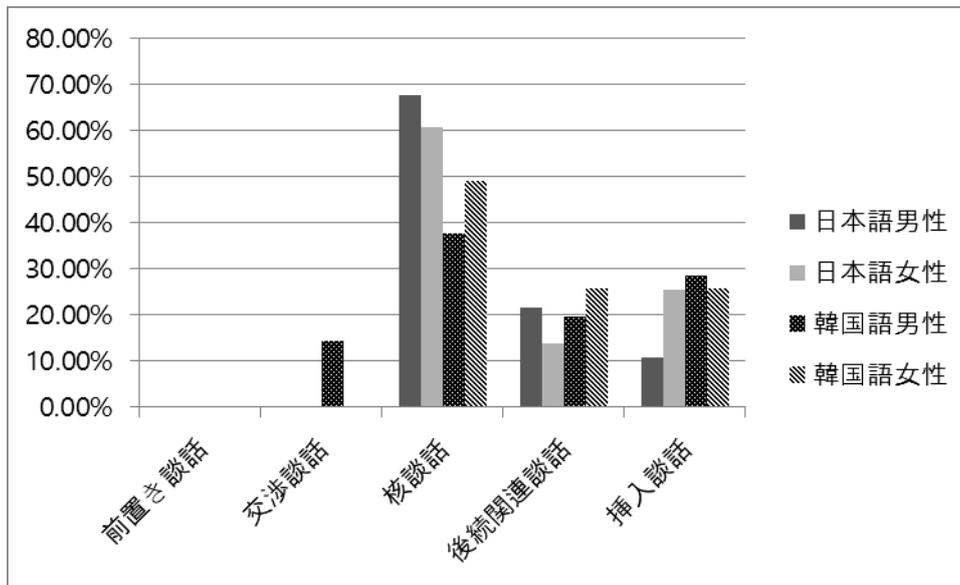


図 5-1 日韓母語話者における負担度が軽い場合の謝罪談話を構成する各談話の割合

日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪談話を構成する各談話の抽出結果は、「前置き談話」は、「遅刻場面」という場面設定により現れず、「交渉談話」は韓国語男性でしか現れなかった。「核談話」は、①日本語男性>②日本語女性>③韓国語女性>④韓国語男性の順であり、韓国語母語話者より日本語母語話者の方で多く現れていた。「後続関連談話」は、①韓国語女性>②日本語男性>③韓国語男性>④日本語女性の順であり、日本語母語話者より韓国語母語話者の方で若干多く出現していた。「挿入談話」は、①韓国語男性>②韓国語女性=日本語女性>③日本語男性の順であり、日本語母語話者より韓国語母語話者の方で若干多く現れていたが、特に、日本語男性では、あまり現れていない傾向が見られた。特に、韓国語男性は、「交渉談話」が現れたり、「核談話」が他の研究対象に比べあまり現れていない等、独特な傾向が見られた。

日韓母語話者の謝罪談話を構成する各談話の数をカイ二乗検定で比較した結果、「交渉談話($\chi^2(3)=27.000, p=0.000$)」では有意な差が認められたが、「核談話($\chi^2(3)=4.543, p=0.208, n.s$)」、「後続関連談話($\chi^2(3)=2.214, p=0.529, n.s$)」、「挿入談話($\chi^2(3)=6.100, p=0.107, n.s$)」では有意な差が認められなかった⁷²。

以下の表 5-3 や図 5-2 で日韓の謝罪談話を構成する各談話の展開の類型を示す。

表 5-3 負担度が軽い場合の日韓母語話者における謝罪談話の展開の類型

A 核談話(○)
(日本語男性 31%、日本語女性 19%、韓国語男性 19%、韓国語女性 31%)
<日男会話 6>、<日男会話 8>、<日男会話 9>、<日男会話 14>、<日男会話 16>

⁷² 統計処理方法として用いられた Kruskal Wallis 検定の結果確認表は、参考資料を参照

<p><日女会話 2>、<日女会話 6>、<日女会話 15> <韓男会話 2>、<韓男会話 3>、<韓男会話 16> <韓女会話 3>、<韓女会話 5>、<韓女会話 7>、<韓女会話 10>、<韓女会話 16></p>
<p>B 核談話(○)⇒「挿入」/「後続」⇒核談話(○)⇒「挿入」/「後続」⇒核談話(○)⇒「挿入」/「後続」 (日本語男性 19%、日本語女性 31%、韓国語男性 13%、韓国語女性 25%)</p>
<p><日男会話 5>、<日男会話 7>、<日男会話 12> <日女会話 3>、<日女会話 5>、<日女会話 8>、<日女会話 11>、<日女会話 16> <韓男会話 7>、<韓男会話 11> <韓女会話 2>、<韓女会話 6>、<韓女会話 11>、<韓女会話 15></p>
<p>C 核談話(○)⇒「挿入」/「後続」 (日本語男性 19%、日本語女性 25%、韓国語男性 13%、韓国語女性 25%)</p>
<p><日男会話 2>、<日男会話 3>、<日男会話 11> <日女会話 4>、<日女会話 7>、<日女会話 12>、<日女会話 13> <韓男会話 1>、<韓男会話 6> <韓女会話 4>、<韓女会話 8>、<韓女会話 9>、<韓女会話 13></p>
<p>D 核談話(○)⇒核談話(○)⇒(核談話(○)⇒核談話(○))⇒「挿入」/「後続」 (日本語男性 6%、日本語女性 13%、韓国語男性 0%、韓国語女性 6%)</p>
<p><日男会話 1> <日女会話 1>、<日女会話 14> <韓女会話 1></p>
<p>E 「交渉談話(X)」⇒核談話(○)⇒核談話(○)⇒「挿入」/「後続」⇒(「挿入」/「後続」) (日本語男性 0%、日本語女性 0%、韓国語男性 50%、韓国語女性 0%)</p>
<p><韓男会話 4>、<韓男会話 5>、<韓男会話 8>、<韓男会話 9> <韓男会話 10>、<韓男会話 12>、<韓男会話 13>、<韓男会話 15></p>
<p>F 核談話(○)⇒核談話(○) (日本語男性 25%、日本語女性 13%、韓国語男性 0%、韓国語女性 0%)</p>
<p><日男会話 4>、<日男会話 10>、<日男会話 13>、<日男会話 15> <日女会話 9>、<日女会話 10></p>
<p>G 核談話(○)⇒「挿入」/「後続」⇒「挿入」/「後続」 (日本語男性 0%、日本語女性 0%、韓国語男性 6%、韓国語女性 13%)</p>
<p><韓男会話 14> <韓女会話 12>、<韓女会話 14></p>

*謝罪談話を構成する各談話の横の(○)は受け入れること、(X)は受け入れないことを示す。

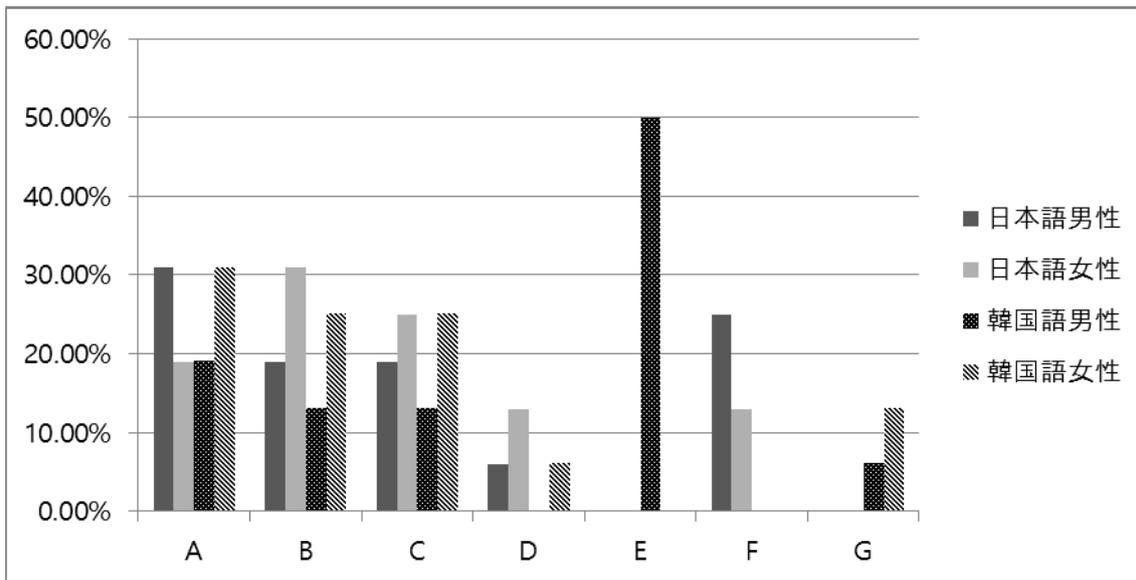


図 5-2 負担度が軽い場合の日韓母語話者における「謝罪談話」展開の種類の割合

負担度が軽い謝罪場面として設定した「遅刻場面」では、日本語母語話者と韓国語母語話者の会話が、直接的に受け入れるか、間接的に受け入れるかの差はあるが、受け入れることで会話が終了する。表 5-3 を説明する際、まず、日韓母語話者共に多く現れた展開を説明した後、日本語母語話者と韓国語母語話者のみ現れた展開を説明し、その中で見られる特徴を考察していく。

日韓母語話者で一番多く現れた展開は、「核談話」のみ現れる構造である。「核談話」のみの構造は、日本語母語話者は男性の方で、韓国語母語話者は女性の方で多く現れており、現れた会話の数も同様であるが、日韓母語話者共に「核談話」のみの簡単なやりとりで会話を収束させる傾向が見られた。

2 番目に多く現れた展開は、「核談話」のやりとりで会話を収束した後「挿入談話」あるいは「後続関連談話」のやりとりが行われ、再度、「核談話」のやりとりが行われ、再度、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れる構造であるが、男性よりは女性の方で多く現れるという共通性が見られた。これらの謝罪談話の展開は、最初に現れる「核談話」のやりとりで会話が収束するので、謝罪内容は簡単に受け入れることで収束している。しかし、ここで会話は終了せず、謝罪内容と関係のない「挿入談話」や謝罪内容が収束された後、謝罪内容と関係のある「後続関連談話」が、「核談話」と「核談話」の間で現れる現象が日韓母語話者で多く見られた。

3 番目に多く現れた展開は、「核談話」のやりとりで会話を収束した後、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れる構造であるが、日韓共に女性の方で若干多く現れるという共通性を見せている。これらの謝罪談話の展開も、最初に現れる「核談話」のやりとりで会話が収束されるため、謝罪内容は簡単に受け入れることで収束している。

4 番目に多く現れた展開は、「核談話」が 2 回連続あるいはそれ以上現れてから「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れた構造であるが、韓国語男性では現れなかった。

負担度が軽い謝罪場面として設定した「遅刻場面」で、日韓母語話者共に多く現れた謝罪談話を構成する各談話の展開は、「核談話」のみのやりとりで会話が終了する構造が多く現れていたが、その他の構造も共通的に、最初に現れる「核談話」のやりとりで受け入れることで会話は簡単に収束している。その後、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が 1 回現れる構造、「核談話」が連続してから「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れる構造、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が「核談話」と「核談話」の間に現れる構造が観察された。これらの現象は、フェイス侵害度が高い謝罪場面にも関わらず、謝罪する側や謝罪される側が謝罪内容に関して負担を強く感じていないために現れた現象ではないかと考えられる。謝罪内容が簡単であるため、謝罪場面にも関わらず、謝罪内容と関係のない「挿入談話」も多く出現される傾向や最初の「核談話」のやりとりで受け入れる意を示す構造が日韓共に見られた。

次は、日本語母語話者あるいは韓国語母語話者にのみ現れた類型を見ると、まず、「交渉談話」のやりとりが行われるがここでは受け入れず、「核談話」が現れた段階で受け入れることで収束し、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」のやりとりが行われる構造は、韓国語男性のみ 8 会話現れ、日本語母語話者と韓国語女性では現れなかった。本研究で設定した負担度が軽い謝罪場面は、謝罪される側にも過失がある謝罪場面なので、韓国語男性でこれらの現象が現れたと考えられる。謝罪する側は謝罪される側の過失について、謝罪される側は謝罪する側の遅刻について、激しい言葉でやりとりが行われた後、「核談話」が現れてから、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れる構造であるが、韓国語男性は親しい同姓友人間の会話では、乱暴な言葉を多く用いる傾向があるが、謝罪場面でもこれらの現象が伺われた。

続いて、日本語母語話者のみ現れた展開であるが、「核談話」が 2 回連続現れる会話であるが、日本語母語話者は「核談話」を連続する傾向があり、これらの傾向は、韓国語母語話者ではあまり現れない現象である。

最後に、韓国語母語話者のみ現れた展開であるが、「核談話」のやりとりで会話が収束された後「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が 2 回連続現れた構造である。韓国語母語話者では、「挿入談話」が多く現れる傾向があり、更に、その内容は、「注文の話」、「携帯に関する話」、「遅刻の経験話」以外にも、「学校生活」、「彼女の話」、「店に関する具体的な話」等、個人的な話のやりとりも行われる。つまり、本研究の負担度が軽い謝罪場面の謝罪内容に関して、韓国語母語話者は、日本語母語話者よりあまり負担を感じていないのではないかと考えられる。

5.2.2 負担度が重い場合の日韓母語話者の 謝罪談話の分析結果及び考察

負担度が重い謝罪場面として設定された「バイト場面」は、「謝罪される側から紹介して

もらったバイト先を辞めたい謝罪する側と、そうすると困る立場に置かれる謝罪される側の関係」である。従って、謝罪される側が、謝罪する側の要望に応じるか応じないか、つまり、受け入れるか受け入れないかが現れる。本節では、日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪談話の特徴を、まず、日韓男女母語話者の謝罪談話を構成する各談話の抽出結果を示し、次に、日韓における謝罪談話の展開や構造の特徴を述べる。

以下の表 5-4 や図 5-3 で日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪談話を構成する各談話の抽出結果を示す。

表 5-4 日韓母語話者における負担度が重い場合の謝罪談話を構成する各談話の抽出結果

	前置き談話	交渉談話	核談話	後続関連談話	挿入談話	合計
日本男性	9 (12.50)	26 (36.11)	29 (40.27)	2 (2.78)	6 (8.34)	72(100.00)
日本女性	10 (16.39)	18 (29.51)	25 (40.98)	1 (1.64)	7 (11.48)	61(100.00)
韓国男性	11 (13.58)	24 (29.63)	26 (32.10)	4 (4.94)	16 (19.75)	81(100.00)
韓国女性	11 (16.42)	21 (31.34)	21 (31.34)	2 (2.99)	12 (17.91)	67(100.00)

()は割合

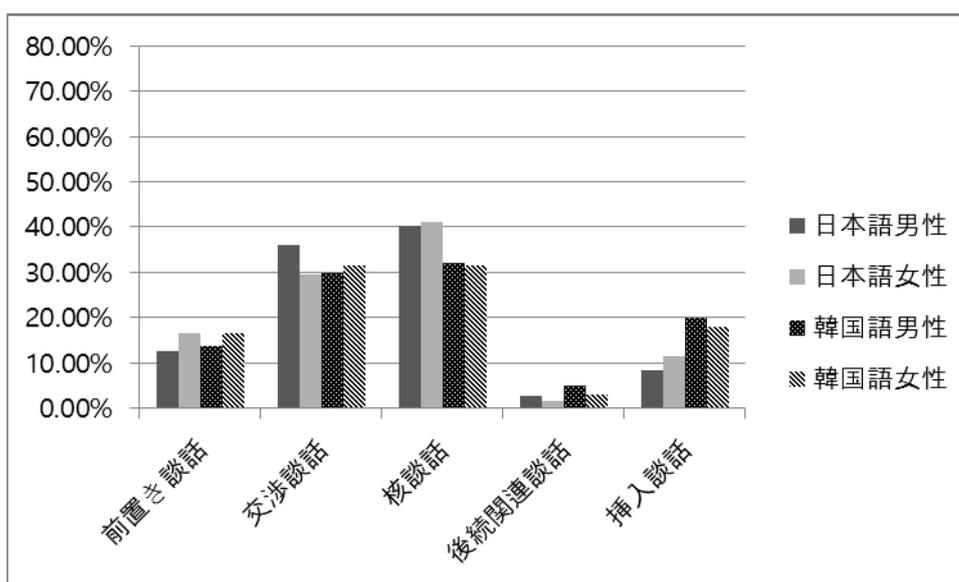


図 5-3 日韓母語話者における負担度が重い場合の謝罪談話を構成する各談話の割合

日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪談話を構成する各談話の抽出結果は、「前置き談話」は、①韓国語女性>②日本語女性>③韓国語男性>④日本語男性の順であり、差は大きくないが男性より女性の方で若干多く現れる傾向が見られた。「交渉談話」は、①日本語男性>②韓国語女性>③韓国語男性=日本語女性の順であり、日韓共に約 3 割程度現れていた。「核談話」は、①日本語女性=日本語男性>②韓国語男性=韓国語女性の順であり、日本語母語話者は約 4 割程度、韓国語母語話者は約 3 割程度現れていた。「後続関連談話」

は、①韓国語男性>②韓国語女性=日本語男性>③日本語女性の順ではあるが、場面設定により、負担度が重い謝罪場面では日韓母語話者共に殆ど現れなかった。「挿入談話」は、①韓国語男性>②韓国語女性>③日本語女性>④日本語男性の順であり、日本語母語話者より韓国語母語話者の方で多く現れていた。

日韓母語話者の謝罪談話を構成する各談話の数をカイ二乗検定で比較した結果、有意な差が認められなかった(「前置き談話($\chi^2(3)=0.475, p=0.924, n.s$)」、「交渉談話($\chi^2(3)=6.024, p=0.110, n.s$)」、「核談話($\chi^2(3)=3.738, p=0.291, n.s$)」、「後続関連談話($\chi^2(3)=2.418, p=0.490, n.s$)」、「挿入談話($\chi^2(3)=3.612, p=0.306, n.s$)」)。

負担度が重い場合は、負担度が軽い場合と異なり、展開や構造が複雑かつ多様であり、さらに、謝罪される側が謝罪する側の謝罪内容を受け入れたり、受け入れなかったりする現象が現れるので、以下では、受け入れる場合と受け入れない場合を分けて説明する。また、「前置き談話」、「交渉談話」、「核談話」、「後続関連談話」、「挿入談話」の存在有無の観点からは謝罪談話の全体的な類型が分かりにくく、「交渉談話」や「核談話」のやりとりに重点をおいて分析する。「交渉談話」のやりとりは、問題になっている事柄を解決するために、謝罪される側に自分の意向を説明しようとする謝罪内容が多く見られると考えられるが、「謝罪定型表現」を含む「核談話」のやりとりは、謝罪する側が、謝罪される側に対して申し訳ない気持ちを直接的に表している談話であると考えられる。また、謝罪を受け入れる、または、受け入れない相手の態度は、謝罪する側のフェイス保持とも強く関係すると考え、これらの観点も視野に入れて分析する。

謝罪される側が謝罪内容を受け入れる会話は、日本語男性は 69%(16 会話中 11 会話)、日本語女性は 50%(16 会話中 8 会話)、韓国語男性は 63%(16 会話中 10 会話)、韓国語女性は 88%(16 会話中 14 会話)である。以下の表 5-5 や図 5-4 は日韓母語話者の謝罪される側が謝罪内容を受け入れる場合の談話展開の類型である。

表 5-5 負担度が重い場合の日韓母語話者における謝罪談話の展開の類型(受け入れる場合)

A 1 回目の「交渉談話」で受け入れる場合の展開 (日本語男性 6%、日本語女性 13%、韓国語男性 6%、韓国語女性 31%)		
交渉談話(O)	交渉談話(O)⇒核談話(O)	交渉談話(O)⇒核談話(O)⇒核談話(O)
<韓女会話 9> <前置き 韓女会話 16>	<前置き 日男会話 11> <日女会話 8 挿入> <韓男会話 12 挿入 後続> <前置き 韓女会話 3 挿入> <韓女会話 10> <前置き 韓女会話 14>	<前置き 日女会話 15 挿入>
B 2 回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れる場合の展開 (日本語男性 6%、日本語女性 6%、韓国語男性 13%、韓国語女性 38%)		

核談話(X)⇒ 交渉談話(O) ⇒核談話(O)	核談話(X)⇒ 交渉談話(O)	核談話(X)⇒ 核談話(O)	
<前置き 韓男会話 2> <前置き 韓女会話 13 挿入>	<韓女会話 5>	<日男会話 15>	
交渉談話(X)⇒ 核談話(O) ⇒交渉談話(O)	交渉談話(X)⇒ 核談話(O)		
<前置き 韓女会話 2 挿入>	<前置き 日女会話 7 挿入> <前置き 韓男会話 9 挿入> <前置き 韓女会話 4>、<前置き 韓女会話 8 挿入>、<前置き 韓女会話 12 挿入 後続>		
C 3回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れる場合の展開 (日本語男性 19%、日本語女性 19%、韓国語男性 38%、韓国語女性 6%)			
交渉談話(X)⇒核談話(X) ⇒ 交渉談話(O) ⇒核談話(O) ⇒核談話(O) ⇒核談話(O)	交渉談話(X)⇒核談話(X) ⇒ 交渉談話(O) ⇒核談話(O)	交渉談話(X)⇒核談話(X) ⇒ 交渉談話(O)	
<前置き 韓男会話 7 挿入 後続>、 <韓男会話 13 挿入>	<前置き 日男会話 8 挿入> <前置き 韓男会話 15> <韓女会話 1>	<前置き 韓男会話 14 挿入>	
交渉談話(X)⇒核談話(X) ⇒ 核談話(O)	交渉談話(X)⇒交渉談話(X) (X)⇒ 交渉談話(O)	核談話(X)⇒交渉談話(X) (X)⇒ 核談話(O)	核談話(X)⇒交渉談話(X)⇒ 核談話(O) ⇒核談話(O)
<前置き 日女会話 12>	<前置き 韓男会話 10 挿入 後続>	<日男会話 9 後続> <日女会話 11> <前置き 日女会話 14> <韓男会話 4 挿入>	<前置き 日男会話 14 挿入 後続>
D 4回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れる場合の展開 (日本語男性 25%、日本語女性 0%、韓国語男性 6%、韓国語女性 0%)			
交渉談話(X)⇒核談話(X) ⇒交渉談話(X)⇒ 核談話(O)	交渉談話(X)⇒核談話(X)⇒交渉談話(X) ⇒ 核談話(O) ⇒核談話(O)	核談話(X)⇒交渉談話(X) ⇒核談話(X)⇒ 交渉談話(O)	
<前置き 日男会話 1> <日男会話 3> <前置き 日男会話 7 挿入>	<前置き 韓男会話 3 後続>	<日男会話 13>	
E 5回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れる場合の展開 (日本語男性 6%、日本語女性 13%、韓国語男性 0%、韓国語女性 13%)			
交渉談話(X)⇒核談話(X)⇒交渉談話(X) ⇒核談話(X)⇒ 交渉談話(O) ⇒核談話(O)	核談話(X)⇒核談話(X)⇒核談話(X) ⇒交渉談話(X)⇒ 核談話(O) ⇒核談話(O)		
<韓女会話 7 挿入 後続>	<前置き 韓女会話 15 挿入>		
核談話(X)⇒交渉談話(X)⇒核談話(X) ⇒交渉談話(X)⇒ 核談話(O)	核談話(X)⇒交渉談話(X)⇒核談話(X) ⇒交渉談話(X)⇒ 核談話(O) ⇒核談話(O)		

<日男会話 5>、 <前置き 日女会話 1>	<前置き 日女会話 4 挿入 後続>
F 7回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れる場合の展開 (日本語男性 6%、 日本語女性 0%、 韓国語男性 0%、 韓国語女性 0%)	
交渉談話(X)⇒核談話(X)⇒交渉談話(X)⇒核談話(X)⇒交渉談話(X)⇒核談話(X)⇒ 交渉談話(O)	
<前置き 日男会話 12 挿入>	

*謝罪談話を構成する各談話の横の(O)は受け入れること、(X)は受け入れないことを示す。□に囲まれている談話は、受け入れる段階を表す。

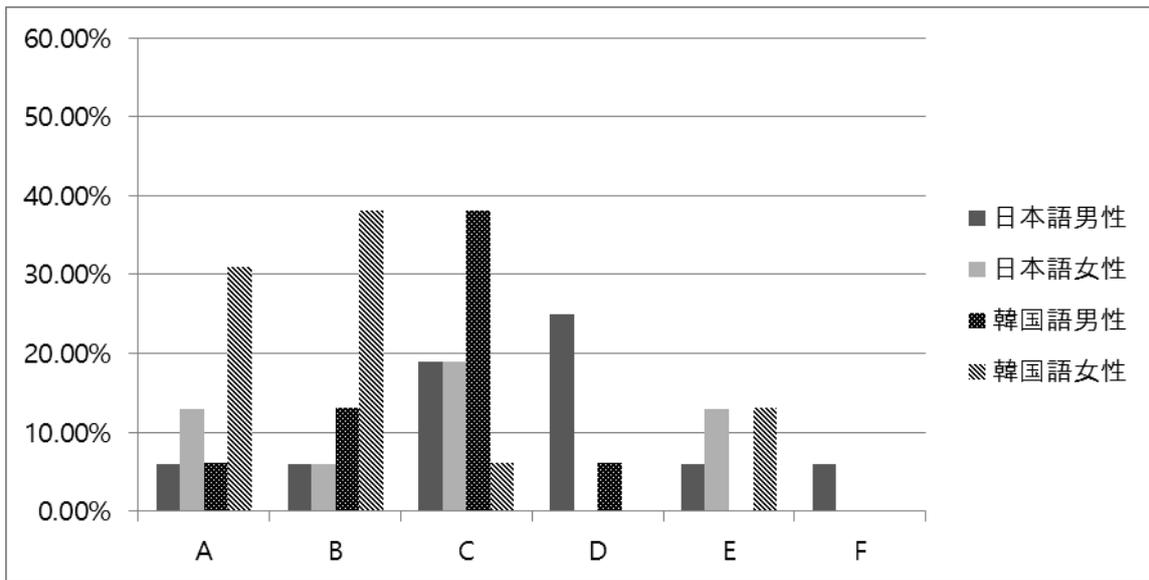


図 5-4 負担度が重い場合の日韓母語話者における「謝罪談話」展開の種類の割合 (受け入れる場合)

表 5-5 は、謝罪される側が受け入れる意を示す段階を分類し、1 回目で受け入れる意を示す段階から 7 回目で受け入れる意を示す段階まで表している。以下では、その段階別に類型を示しながら説明していく。

1 回目の「交渉談話」で受け入れる場合の展開は、2 つの類型があると考えられるが、最初に現れる「交渉談話」で受け入れられ、その後の「核談話」で再度受け入れる意を示す構造と、「核談話」は現れず、「交渉談話」のみで受け入れられた構造である。この展開は、日本語母語話者で 3 会話、韓国語母語話者で 6 会話であり、その中で、男性の方で 2 会話、女性の方で 7 会話現れ、日本語母語話者より韓国語母語話者の方で、男性よりは女性の方で多く現れていた。

2 回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れる場合の展開は、3 つの類型があると考えられるが、①最初に現れる「核談話」では受け入れず、次の「交渉談話」で受け入れられ、その後、「核談話」で再度受け入れる意が示される構造もある。②最初に現れる「核談話」では受け入れず、次の「核談話」で受け入れる意が示される構造である。③最初に

現れる「交渉談話」では受け入れず、次の「核談話」で受け入れられ、その後、「交渉談話」で再度受け入れる意が示される構造もある。この展開は、日本語母語話者で 2 会話、韓国語母語話者で 8 会話であり、その中で、男性の方で 3 会話、女性の方で 7 会話現れ、日本語母語話者より韓国語母語話者の方で、男性よりは女性の方で多く現れていた。

3 回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れる場合の展開は、4 つの類型があると考えられるが、①最初に現れる「交渉談話」では受け入れず、次の「核談話」でも受け入れず、その後、現れる「交渉談話」で受け入れる意が示されるが、再度、「核談話」で受け入れる意を示す構造もある。②最初に現れる「交渉談話」では受け入れず、次の「核談話」でも受け入れず、その後、現れる「核談話」で受け入れる意が示される構造である。③「核談話」は現れず、「交渉談話」が行われ、3 回目に現れる「交渉談話」で受け入れる意が示される構造である。④最初に現れる「核談話」では受け入れず、次の「交渉談話」でも受け入れず、その後、現れる「核談話」で受け入れる意が示されるが、再度、「核談話」で受け入れる意を示す構造もある。この展開は、日本語母語話者で 6 会話、韓国語母語話者で 7 会話であり、その中で、男性の方で 9 会話、女性の方で 4 会話現れ、女性よりは男性の方で多く現れていた。

4 回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れる場合の展開は、2 つの類型があると考えられるが、①最初に現れる「交渉談話」で受け入れず、次の「核談話」のやりとりと「交渉談話」でも受け入れず、その後、現れる「交渉談話」で受け入れる意が示される構造であるが、再度、「核談話」で受け入れる意を示す構造もある。②最初に現れる「核談話」で受け入れず、次の「交渉談話」と「核談話」でも受け入れず、その後、現れる「交渉談話」で受け入れる意が示される構造である。この展開は、日本語母語話者で 4 会話、韓国語母語話者で 1 会話であり、女性の方では現れず、男性の方のみで 5 会話現れていた。

5 回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れる場合の展開は、3 つの類型があると考えられるが、①最初に現れる「交渉談話」で受け入れず、次の「核談話」と「交渉談話」と「核談話」でも受け入れず、その後、現れる「交渉談話」で受け入れる意が示される構造であるが、再度、「核談話」で受け入れる意を示す構造である。②3 回連続現れる「核談話」では受け入れず、次の「交渉談話」でも受け入れず、その後、現れる「核談話」で受け入れる意が示される構造であるが、再度、「核談話」で受け入れる意を示す構造である。③最初に現れる「核談話」で受け入れず、次の「交渉談話」と「核談話」と「交渉談話」でも受け入れず、その後、現れる「核談話」で受け入れる意が示される構造であるが、再度、「核談話」で受け入れる意を示す構造もある。この展開は、日本語母語話者で 3 会話、韓国語母語話者で 2 会話であり、その中で、男性の方で 1 会話、女性の方で 4 会話現れ、男性よりは女性の方で多く現れていた。

7 回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れる場合は、日本語男性で 1 会話しか現れていないが、「交渉談話」が 3 回、「核談話」が 3 回、行われていたが、受け入れる意は示されず、最後に現れる「交渉談話」で受け入れる意を示す構造である。

表 5-5 と図 5-4 をみると、1 回目と 2 回目の段階で受け入れる展開は、韓国語母語話者の方で、また、女性の方で多く現れる傾向があり、3 回目と 4 回目の段階で受け入れる展開は、男性の方で多く現れる傾向があると考えられる。しかし、5 回目の段階で受け入れる会話は、日韓による差はあまり見られないが、女性の方で多く現れている傾向が伺われる。さらに、韓国語母語話者では、謝罪場面にも関わらず「核談話」が現れていない構造が韓国語女性で 2 会話、韓国語男性で 1 会話現れていた。

1 回目と 2 回目の段階で受け入れる謝罪談話の展開は、①1 回目の「交渉談話」で受け入れる意を示している構造や、②1 回目「交渉談話」あるいは「核談話」では受け入れない意を示しているが、次の「交渉談話」あるいは「核談話」では受け入れる意を示している構造であるため、謝罪内容が割りと簡単に謝罪される側に受け入れられている構造であると考えられる。特に、韓国語女性の方で多く現れており、謝罪内容が受け入れられた 14 会話中 11 会話がこの類型に属しており、このような結果は、他の研究対象に比べ、代案提示を多く用いているためではないかと推測されるが、詳細なやりとりの内容は、第 6 章を参照されたい。

これに対し、3 回目と 4 回目の段階で受け入れる謝罪談話の展開は、上記の展開よりは謝罪される側が受け入れられない意を示しても、自分の意向を貫徹するためより積極的に働きかけている展開であると考えられるが、女性よりは男性の方で、このような傾向があるのではないかと考えられる。自分が引き起こした不愉快な状況を説明し、更に、相手が受け入れないことを示しているにも関わらず、繰り返し、受け入れるよう働きかけている構造なので、フェイス侵害度が高い展開であると考えられる。

しかし、5 回目と 7 回目の段階で受け入れる会話は、韓国語女性で 2 会話、日本語女性で 2 会話、日本語男性で 2 会話であり、上記の展開(1 回目から 4 回目)と比べ、現れた会話の数が 1 割にも至らないほど少ないが、女性の方でより多く現れている。

本格的な話題に入ったり、会話を収束する際に「交渉談話」が現れる傾向は、日本語母語話者より韓国語母語話者の方で若干多く見られるが、大きな違いは見られない。また、負担度が軽い場合には、「核談話」が多く現れる傾向が日本語母語話者で見られたが、負担度が重い場合には、これらの現象はあまり見られない。つまり、負担度が軽い場合より負担度が重い場合に、日韓による差があまり見られない傾向があるのではないかと考えられる。

次は、謝罪内容が謝罪される側に受け入れられない会話であるが、日本語男性は 31%(16 会話中 5 会話)、日本語女性は 50%(16 会話中 8 会話)、韓国語男性は 37%(16 会話中 6 会話)、韓国語女性は 12%(16 会話中 2 会話)である。

表 5-6 負担度が重い場合の日韓母語話者における謝罪談話の展開の類型(受け入れない場合)

<p>A 1 回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れない場合の展開 (日本語男性 6%、日本語女性 25%、韓国語男性 6%、韓国語女性 6%)</p>

交渉談話 (X)	核談話 (X)
<前置き 日男会話 6> (*謝罪発話文) <前置き 日女会話 3>、<前置き 日女会話 5> <日女会話 9>、<日女会話 13 挿入> <韓女会話 11 挿入>	<前置き 韓男会話 11>
B 1回目と2回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れない場合の展開 (日本語男性 13%、日本語女性 6%、韓国語男性 19%、韓国語女性 6%)	
交渉談話 (X)⇒核談話 (X)	核談話 (X)⇒交渉談話 (X)
<前置き 日男会話 2 挿入>、<前置き 日男会話 10> <韓男会話 1>、<前置き 韓男会話 6 挿入> <韓男会話 16>	<前置き 日女会話 10> <韓女会話 6>
C 1回目と2回目と3回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れない場合の展開 (日本語男性 6%、日本語女性 13%、韓国語男性 13%、韓国語女性 0%)	
交渉談話 (X)⇒核談話 (X)⇒交渉談話 (X)	核談話 (X)⇒交渉談話 (X)⇒核談話 (X)
<日男会話 16>、<前置き 韓男会話 5 挿入> <前置き 韓男会話 8>	<日女会話 2 挿入>、<日女会話 6>
D 1回目と2回目と3回目と4回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れない場合の展開 (日本語男性 6%、日本語女性 6%、韓国語男性 0%、韓国語女性 0%)	
交渉談話 (X)⇒核談話 (X)⇒交渉談話 (X)⇒核談話 (X)	交渉談話 (X)⇒核談話 (X)⇒核談話 (X)⇒核談話 (X)
<日男会話 4>	<前置き 日女会話 16 挿入>

*謝罪談話を構成する各談話の横の(○)は受け入れること、(X)は受け入れないことを示す。

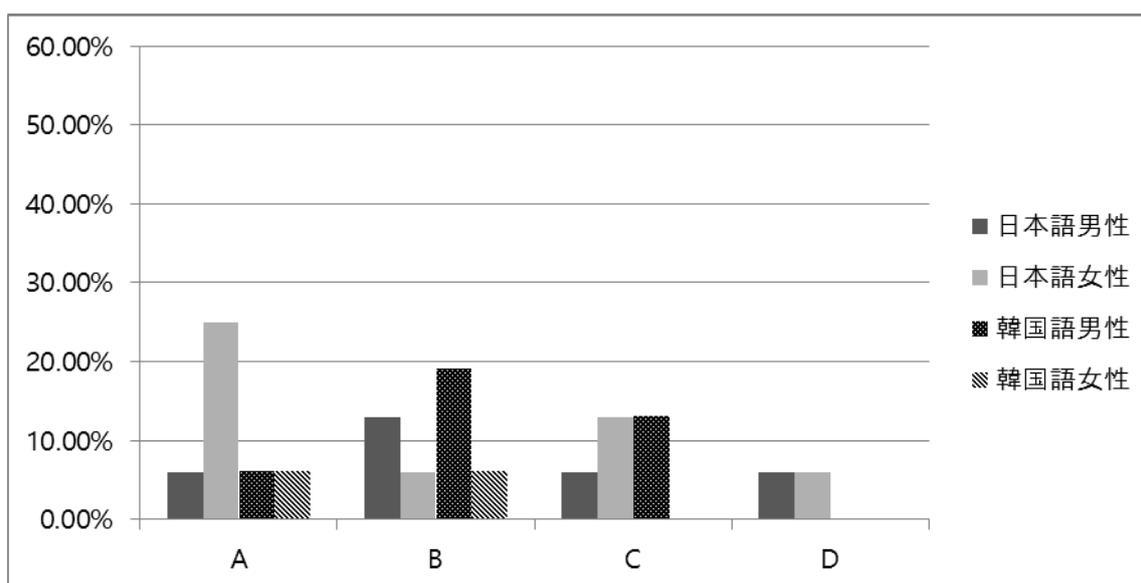


図 5-5 負担度が重い場合の日韓母語話者における「謝罪談話」展開の種類の割合(受け入れない場合)

表 5-6 や図 5-5 は、受け入れない場合の展開の類型であるが、まず、1 回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れない場合の展開には、2 つの類型があると考えられるが、①「核談話」は現れず、「交渉談話」のみ現れた構造と、②「交渉談話」は現れず、「核談話」のみ現れた構造である。この展開は、日本語母語話者で 5 会話、韓国語母語話者で 2 会話であり、その中で、男性の方で 2 会話、女性の方で 5 会話現れ、韓国語母語話者より日本語母語話者の方で、男性よりは女性の方で多く現れていた。

次に、1 回目と 2 回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れない場合の展開には、2 つの類型があると考えられるが、①最初に現れる「交渉談話」と次に現れる「核談話」で受け入れる意が示されない構造と、②最初に現れる「核談話」と次に現れる「交渉談話」で受け入れる意が示されない会話の構造である。この展開は、日本語母語話者で 3 会話、韓国語母語話者で 4 会話であり、その中で、男性の方で 5 会話、女性の方で 2 会話現れ、日韓による差はあまり見られず、女性よりは男性の方で多く現れていた。

そして、1 回目と 2 回目と 3 回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れない場合の展開には、2 つの類型があると考えられるが、①最初に現れる「交渉談話」と次に現れる「核談話」、最後に現れる「交渉談話」で受け入れる意が示されない構造と、②最初に現れる「核談話」と次に現れる「交渉談話」、最後に現れる「核談話」で受け入れる意が示されない構造である。この展開は、日本語母語話者で 3 会話、韓国語母語話者で 2 会話であり、その中で、男性の方で 3 会話、女性の方で 2 会話現れ、日韓による差や男女による差はあまり見られなかった。

最後に、1 回目と 2 回目と 3 回目と 4 回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れない場合は、2 つの類型があると考えられるが、①最初に現れる「交渉談話」と 3 回連続現れる「核談話」でも受け入れる意が示されない構造と、②最初に現れる「交渉談話」と次に現れる「核談話」と「交渉談話」、最後に現れる「核談話」で受け入れる意が示されない構造である。この展開は日本語男女母語話者で 1 会話ずつ現れていた。

受け入れない謝罪談話の展開の特徴は、受け入れる謝罪談話の展開に比べ「核談話」があまり現れていない傾向があり、「交渉談話」のやりとりが行われている会話が多く、更に、「交渉談話」のみ続く会話も多く見られた。つまり、問題になっている事柄について、解決策などは示さず、自分の立場を理解させようと働きかけることで、謝罪される側に否定的な反応を引き起こしているのではないかと考えられる。また、謝罪場面にも関わらず「核談話」が現れていない構造が見られたが、日本語女性で 4 会話、日本語男性で 1 会話、韓国語女性で 1 会話である。

5.2.3 負担度が軽い場合と重い場合の日韓母語話者の謝罪談話のまとめ

本節では、負担度が軽い場合と負担度が重い場合の日本語母語話者と韓国語母語話者における謝罪談話の基本情報を示し、謝罪談話を構成する各談話の展開や構造の特徴を日韓対照の観点で分析し考察を行った。

負担度が軽い場合には、日韓母語話者共に「核談話」、「後続関連談話」、「挿入談話」で構成される謝罪談話が現れていたが、韓国語男性では、「核談話」が現れる前に、「交渉談話」のやりとりが行われる会話が半分を占めている特徴が見られた。また、「核談話」は日本語母語話者で多く現れており、日本語男性では「挿入談話」が、他の研究対象に比べあまり現れていない傾向が見られた。さらに、韓国語男性は、「交渉談話」が出現したり、「核談話」が他の研究対象に比べあまり現れていない等、独特な傾向を見せていた。負担度が軽い場合の謝罪談話を構成する各談話の展開を見ると、一番多く現れた構造は、日韓母語話者共に、「核談話」のみの構造、「核談話」と「核談話」の間に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れる構造、「核談話」の後に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れる構造であった。その反面、「核談話」が連続し現れる構造は日本語母語話者の方で多く現れ、「核談話」の後に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が連続し現れる構造は韓国語母語話者の方で若干多く現れていた。負担度が軽い場合には、謝罪内容が重くないため、謝罪される側に簡単に受け入れられる傾向や「挿入談話」も多用する傾向が日韓母語話者で共通的に見られたが、個人的な内容を「挿入談話」のやりとりで表す傾向は、韓国語母語話者の方で、特に、韓国語男性の方で多く現れていた。

負担度が重い場合には、日韓母語話者共に「前置き談話」、「交渉談話」、「核談話」、「後続関連談話」、「挿入談話」で構成される謝罪談話が現れており、謝罪内容が謝罪される側に受け入れられる場合と受け入れられない場合があることや「核談話」が現れない現象が起こる等、複雑かつ多様な展開や構造を見せていた。

負担度が重い場合は、謝罪される側が謝罪する側の謝罪内容を受け入れたり、受け入れなかったりする現象が現れた。受け入れる場合の謝罪談話を構成する各談話の展開は、「交渉談話(o)」、「交渉談話/核談話(X)⇒交渉談話/核談話(o)」、のように、最初の段階で受け入れる構造や最初に現れる談話では受け入れない意を示しているが次の談話では受け入れる意を示している構造等、謝罪内容が割りとは簡単に謝罪される側に受け入れている構造は、韓国語母語話者、特に、女性の方で多く現れていた。その反面、「交渉談話/核談話(X)⇒交渉談話/核談話(X)⇒交渉談話/核談話(o)」、「交渉談話/核談話(X)⇒交渉談話/核談話(X)⇒交渉談話/核談話(X)⇒交渉談話/核談話(o)」のように、謝罪する側が謝罪される側が受け入れない意を示しても、諦めずに自分の意向を貫徹するため働きかけを積極的に行っている展開が多く見られたが、特に、女性より男性の方で多く現れていた。受け入れない場合の謝罪談話を構成する各談話の展開を見ると、受け入れる謝罪談話に比べ「核談話」が多く現れていない傾向があり、「前置き談話」後に、「交渉談話」のやりとりが行われている会話が多く、更に、「交渉談話」が長く続く会話も多く見られた。つまり、問題になっている事柄について、解決策などは示さず、自分の立場を理解させようと働きかけることで、謝罪される側に否定的な反応を引き起こしているのではないかと考えられた。

負担度が軽い場合には、明確な「謝罪定型表現」を含む「核談話」が多く現れる傾向や、繰り返し「核談話」が現れる傾向が日本語母語話者の方で多く見られたり、「核談話」の前

に「交渉談話」が現れる傾向は、韓国語男性で現れる等、日韓による相違点が伺われたが、負担度が重い場合には、このような現象があまり見られないと考えられた。つまり、負担度が軽い場合より負担度が重い場合に、日韓による差があまり見られない傾向があるのではないかと考えられた。

本節では、日韓母語話者における謝罪談話の展開や構造を全体的に分析し、グローバルな観点で全体像をみることを試みたが、以下の節では、負担度が軽い場合と重い場合の日韓母語話者の謝罪談話の展開や構造の特徴をよりローカルな観点で分析し考察を行う。

5.3 日韓母語話者における謝罪談話の分析結果及び考察(負担度が軽い場合)

本節では、負担度が軽い場合の日韓母語話者における謝罪談話を、男女差を中心に各談話レベルで示し、謝罪談話を構成する各談話の展開や構造、更に、相互作用の特徴を分析し考察を行う。

5.3.1 負担度が軽い場合の日本語母語話者における謝罪談話の分析結果及び考察

日本語母語話者の謝罪談話の展開の類似点や相違点等を分析しその構造の特徴を述べる。次に、これらの特徴を、相互作用の観点で会話例を見ながら考察していく。

5.3.1.1 負担度が軽い場合の日本語母語話者における謝罪談話の展開とその構造の特徴

本節では、謝罪談話を構成する各談話がどのように展開しているかを明らかにするため、日本語母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開とその構造の特徴を述べる。その後、日本語男性と日本語女性の謝罪談話の展開とその構造の特徴の類似点や相違点を検討し、考察を行う。

以下では、日本語男性における謝罪談話を構成する各談話の展開を表 5-7 に示す。

表 5-7 負担度が軽い場合の日本語男性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開⁷³

会話番号	謝罪談話を構成する各談話の展開
日男会話 1	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話
日男会話 2	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
日男会話 3	*挿入談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ)

⁷³会話番号は、例えば「日本語男性母語話者の会話データ 1」を縮約して「日男会話 1」のように示し、謝罪談話を成す各談話の展開の中に、謝罪談話の核となる「核談話」は、見やすくするため、□で表している。また、直接的対間接的で、有標行動になる「間接的」は、太字で表している。更に、「*」を付けて示している箇所は、会話データの中で現れた例外的な発話である。

日男会話 4	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
日男会話 5	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
日男会話 6	核談話(直接的に受け入れ)
日男会話 7	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話 ⇒ 核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 後続関連談話
日男会話 8	核談話(直接的に受け入れ)
日男会話 9	核談話(直接的に受け入れ)
日男会話 10	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
日男会話 11	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(間接的に受け入れ)
日男会話 12	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話 ⇒ 核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(間接的に受け入れ)
日男会話 13	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(間接的に受け入れ)
日男会話 14	核談話(直接的に受け入れ)
日男会話 15	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
日男会話 16	核談話(間接的に受け入れ)

表 5-7 の日本語男性の謝罪談話を構成する各談話の展開を見ると、「挿入談話」から始まる<会話 3>以外の会話は、「核談話」からスタートしているが、<会話 3>の「挿入談話」は、謝罪する側が、約束場所を勘違いし若干戸惑うやりとりなので、実際には、「核談話」からスタートしており、負担度が軽い謝罪場面は、「遅刻した」という設定なので、全ての会話が謝罪する側の謝罪から始まっている。また、「核談話」で会話が収束したにも関わらず、継続し、「後続関連談話」や「挿入談話」が現れたのは、<会話 1、2、3、5、7、11、12>であり、「核談話」のみで終了される会話の数とほぼ半々である。

負担度が軽い謝罪場面において、日本語男性の謝罪談話を構成する各談話の展開は、4つのタイプがあると考えられる。まず、<会話 6、8、9、14、16>のように、1回の「核談話」のみで会話が終了する構造である。次に、<会話 4、10、13、15>のように、「核談話」で会話が収束された後、再度、「核談話」が行われてから会話が終了する構造である。そして、<会話 2、3、11>のように、「核談話」で会話が収束したにも関わらず終了せず、「後続関連談話」や「挿入談話」が現れる構造である。最後に、一番複雑な展開であるが、<会話 5、7、12>のように、「核談話」で会話が収束した後、「後続関連談話」が行われてから、再度、「核談話」が現れ、その後、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れてから会話が終了する構造である。また、<会話 1>は、この4つのタイプには属していないが、「核談話」が3回連続行われてから「後続関連談話」で会話が終了している。これらの展開を見ると、一番複雑な展開以外には、「核談話」が1-2回現れてから会話が終了したり、1回の「核談話」後に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れてから会話が終了するやりとりが

16 会話中 12 会話で、約 8 割程度であることがわかる。つまり、日本語男性は、負担度が軽い謝罪場面においては、「核談話」のみで簡単に会話を終了する傾向があると考えられる。

次に、「直接的あるいは間接的に受け入れる」という観点から考えると、「間接的に受け入れ」のみの応答が現れた会話は、〈会話 16〉であり、他の会話は、受け入れる意を明示的かつ直接的に表しており、〈会話 1、7、12、13〉は、謝罪する側の謝罪に対して、最初は、明示的かつ直接的に受け入れる意を示した後、再度、現れる謝罪に対して非明示的かつ間接的に受け入れる意を示している。つまり、負担度が軽い謝罪場面において、日本語男性は、謝罪する側の謝罪に対して、「しょうがない、大丈夫、いいよ、いやいや」等の明示的かつ直接的に受け入れることを表すことが、謝罪される側の無標行動であり、これらの意を示さないことは、有標行動として捉われる可能性があると考えられる⁷⁴。

続いて、日本語女性の謝罪談話を構成する各談話の展開を表 5-8 に示す。

表 5-8 負担度が軽い場合の日本語女性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開

会話番号	謝罪談話を構成する各談話の展開
日女会話 1	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
日女会話 2	核談話(直接的に受け入れ)
日女会話 3	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 後続関連談話(間接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
日女会話 4	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
日女会話 5	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(間接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
日女会話 6	核談話(直接的に受け入れ)
日女会話 7	核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
日女会話 8	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(間接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
日女会話 9	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(間接的に受け入れ)
日女会話 10	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
日女会話 11	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
日女会話 12	核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
日女会話 13	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話

⁷⁴ このような解釈の概念は、第 2 章(2.4.5)と第 8 章に説明されている宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008)の「ディスコース・ポライトネス理論」を参照されたい。

日女会話 14	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
日女会話 15	核談話(直接的に受け入れ)
日女会話 16	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)

表 5-8 を見ると、日本語女性の謝罪談話を構成する各談話の展開は、「核談話」からスタートしている。また、「核談話」で会話が収束したにも関わらず、継続し、「後続関連談話」や「挿入談話」が現れたのは、〈会話 1、3、4、5、7、8、11、12、13、14、16〉であり、「核談話」のみで終了される会話の数のほぼ 3 倍に至る。

負担度が軽い謝罪場面において、日本語女性の謝罪談話を構成する各談話の展開は、5 つのタイプがあると考えられる。まず、〈会話 2、6、15〉のように、1 回の「核談話」のみで会話が終了する構造である。次に、〈会話 9、10〉のように、「核談話」で会話が収束した後、再度、「核談話」が行われてから会話が終了する構造である。そして、〈会話 4、7、12、13〉のように、「核談話」で会話が収束したにも関わらず終了せず、「挿入談話」が現れる構造である。また、〈会話 1、14〉のように、「核談話」が 2 回以上連続行われてから「挿入談話」で会話が終了する構造がある。最後に、〈会話 3、5、8、11、16〉のように、一番多く現れた展開であるが、「核談話」で会話が収束した後、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」のやりとりが行われてから、再度、「核談話」が現れて終了したり、その後、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れてから会話が終了する構造である。これらの展開を見ると、「核談話」が 1-2 回現れてから会話が終了したり、1 回の「核談話」後に「挿入談話」が現れてから会話が終了するやりとりが 16 会話中 9 会話で、約 6 割程度であることがわかる。つまり、日本語女性も、負担度が軽い謝罪場面においては、「核談話」のやりとりのみで簡単に会話を終了する傾向はあるが、一方、「核談話」が現れてから「後続関連談話」、「挿入談話」が現れ、再度、「核談話」が繰り返し現れる傾向は男性より多く見られていると考えられる。

次に、「直接的あるいは間接的に受け入れる」という観点から考えると、「間接的に受け入れ」のみの応答が現れてから「挿入談話」が現れた会話は、〈会話 7、12〉であり、他の会話は、受け入れる意を明示的かつ直接的に表しており、〈会話 3、9〉は、謝罪する側の謝罪に対して、最初は、明示的かつ直接的に受け入れる意を示した後、再度、現れる謝罪に対して非明示的かつ間接的に受け入れる意を示している。つまり、負担度が軽い謝罪場面において、日本語女性は、日本語男性と同様に、謝罪する側の謝罪に対して、「しょうがない、大丈夫、いいよ、いやいや」等の明示的かつ直接的に受け入れることを表すことが、謝罪される側の無標行動であり、これらの意を示さないことは、有標行動として捉えられる可能性があると考えられる。

ここで、負担度が軽い謝罪場面における日本語男性と日本語女性の謝罪談話の展開とそ

の構造の特徴を比較すると、まず、男女共に謝罪する側が「謝罪定型表現」を用いて謝罪する「核談話」のやりとりから会話が始まるという共通性が見られる。遅刻に関する謝罪場面なので、「核談話」からはじまる傾向があるが、本研究は自分の過ちではなく、不可避な状況により不本意的に遅刻してしまったという設定であり、謝罪される側にも過失がある謝罪場面である。しかし、謝罪される側の過失を確認するやりとりや遅刻の状況を先に説明するやりとりから始まる会話は、日本語母語話者では現れない特徴が見られた。

次に、謝罪談話を構成する各談話の展開には5つの類型が共通的に見られたが、①1回の「核談話」のみで会話が終了される構造、②「核談話」で会話が収束した後、再度、「核談話」のやりとりが行われてから会話が終了する構造、③「核談話」で会話が収束したにも関わらず終了せず、「後続関連談話」あるいは「挿入談話」が現れる構造、④「核談話」のやりとりで会話が収束した後、「後続関連談話」のやりとりが行われてから、再度、「核談話」が現れ、その後、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れてから会話が終了する構造、⑤「核談話」のやりとりが2回以上連続で行われてから「挿入談話」あるいは「後続関連談話」で会話が終了する構造である。

しかし、多く現れる展開の類型には、男女により差が見られた。男性は女性より「核談話」のみで会話を終了させる傾向が強い、女性は男性より「核談話」と「核談話」の間に、話題と直接に関係がない「挿入談話」が現れたり、「核談話」が連続して現れたりする傾向が強いと考えられる。「挿入談話」は、謝罪内容と直接関係のない話題に関するやりとりであるが、互いのフェイスを特に配慮しなければならない「謝罪場面」で現れることにより、硬い雰囲気のを和らげることができると考えられる。つまり、「挿入談話」が男性より2倍以上多く現れていた女性の方が、侵害された相手のネガティブ・フェイスを軽減するための働きをより積極的に行っているのではないかと考えられる。また、「核談話」の抽出結果は男女差があまり見られなかったが、「核談話」が繰り返し現れる傾向は女性の方で若干多く見られた。「核談話」は、謝罪談話で一番重要な働きをしており、相手に向けた被害に対する負担を多く感じていることにより表出される言語行動であると考えられる。従って、「核談話」が繰り返し現れることは、相手のネガティブ・フェイスを侵害してしまったことに対する負担を男性より女性の方が重く感じているのではないかと考えられる。

最後に、負担度が軽い謝罪場面では、謝罪する側の謝罪に対して、謝罪される側が明示的かつ直接的に受け入れる意を示すことが、男女共に無標行動であるという共通性が見られた。また、非明示的かつ間接的に受け入れる意を表す応答も、男性は16会話中5会話、女性は16会話中4会話現れ、特に、非明示的かつ間接的に受け入れる意を表す応答のみは、男性は5会話中1会話、女性は4会話中2会話であった。謝罪する側の謝罪に対して、明示的かつ直接的に受け入れることを示すのが優先される応答であるが、非明示的かつ間接的に受け入れることを示すのも日本語男女母語話者の会話で共通的に現れていた。

次の節では、日本語母語話者における謝罪談話の相互作用の特徴を実際の会話例を通してより詳細に検討してみる。

5.3.1.2 負担度が軽い場合の日本語母語話者における謝罪談話の相互作用の特徴

本節では、上記の結果を踏まえて、謝罪談話を構成する各談話の展開において、「核談話」のみ現れた会話例と「核談話」と共に「挿入談話」が現れた会話例を通して日本語男性と日本語女性の相互作用の特徴を述べる。まず、以下の〈会話例 5-3〉は「核談話」のみ現れた場合であるが、女性より男性の方で多く現れた構造である。

〈会話例 5-3〉負担度が軽い場合の日本語男性母語話者の謝罪談話の相互作用の特徴

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
1	JM19	あつ、ごめん。	核談話 (直接的に受け入れる)
2	JM20	遅せーよ、ちょっと。	
3	JM19	やあ、ごめん、ごめん、ごめん、申し訳ない、ほんと。	
4	JM19	いやつ。	
5	JM19	《少し間》違う、ちゃんとあのう、約束、の時間に、あのう、合わせてちゃんと出ただけど(うん)、電車止まっちゃってさ(うん)、しかも、お前[↑],,	
6	JM20	〈あつ、そうね〉〈〉。	
7	JM19	〈電話繋がらない〉〈〉じゃん。	
8	JM20	今日、携帯忘れちゃってさ。	
9	JM19	そう、なんか、めつ、そう、何回も掛けたんだけど、繋がらないからさあ、どうしようかなと思って…。	
10	JM19	まあ、うーん、それで、まあ、電車止まっちゃったからさ、まあ、ちょ、どうしようも動き、なん、身動き取れなくてさ、&,,	
11	JM19	やあ、ごめんね。	
12	JM20	あーあー、まあまあ、確かにね、俺も、そうだね、携一帯、携帯持って来てないからなーあ。	
13	JM20	《少し間》20分[↑]位だからなー。	
14	JM19	まあまあさ、そんなに、ね、あのう、まあ、遅れちゃった、まあ、俺が一番悪いんだけど、まあ、それぐらいね。	
15	JM20	《少し間》まあまあ、しよ、しょうがね[↑]な。 ← 直接的に受け入れる	
16	JM19	まあ、ごめん、ごめん、ごめん、ごめん、〈まあまあ〉〈〉。	核談話 (直接的に受け入れる)
17	JM20	〈いいよ〉〈〉、いいよ、いいよ、いいよ。 ← 直接的に受け入れる	
18	JM19	=もう気にせずにね。	

この会話をみると、JM19が、「ごめん」と謝罪しており、JM20は、JM19が遅れたことに対して非難する発話をしている「核談話」のやりとりから会話はスタートしている。ライン番号3でJM19は、「やあ、ごめん、ごめん、ごめん、申し訳ない、ほんと。」と連続して謝罪

し、ライン番号 4-5 で遅れた理由について述べている。その後、ライン番号 6 から 14 にかけて、JM19 による状況説明や謝罪、責任関連発話と JM20 による自分の過失に関する発話等のやりとりが行われてから、ライン番号 15 で、JM20 は、「《少し間》まあまあ、しょ、しょうがね[↑]な。」と「しょうがね」という言葉を用いて明示的に受け入れることを示し、「核談話」は収束する。しかし、ここで会話は終了せず、JM19 は、再度、連続して「謝罪定型表現」を用いて謝罪しており、これに合わせて、JM20 は「いいよ」という言葉を連続して用いながら、再度、受け入れることを示している。

日本語男性は、「核談話」と「核談話」の間に「後続関連談話」が現れる会話はあるが(日男会話 5、7、12)、「挿入談話」が現れる会話は無い。日本語男性は、負担度が軽い謝罪場面だとしても、「謝罪内容」と関係のない話題について触れる傾向があまり見られないと考えられる。つまり、相手のネガティブ・フェイスを侵害してしまった状況を回復させるため、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーである「謝罪」を用いた談話を多用する傾向が日本語女性より強いと考えられる。

次の〈会話例 5-4〉は「核談話」と共に「挿入談話」が用いられた場合である。

〈会話例 5-4〉負担度が軽い場合の日本語女性母語話者の謝罪談話の相互作用の特徴

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
1	JF21	ごめんね、&,	核談話 (直接的に受け入れる)
2	JF21	「JF22 名」お待たせしちゃって。	
3	JF22	あー、<え、うん>{<}	
4	JF21	<えーとね>{<}、実は電車が止まっちゃって(あー)、&,	
5	JF21	申し訳ない、&,	
6	JF21	それで、あのう電話したんだけど(うん)なかなか繋がらなくて(あー)&,	
7	JF21	ごめんね&,	
8	JF21	待たせちゃって=。	
ライン番号 9~16 省略			
17	JF22	<いやいやこちらこそ>{<}なんかもう=。 ← 直接的に受け入れる	挿入談話
18	JF21	=いやいや本当申し訳ない。	
19	JF22	えー、そうだよ(うん)、えー、なんで、なんでだろうね、普段は持ってくるのにね、携帯=。	
20	JF21	=こういう時に限って携帯忘れてたりするよね。	
21	JF22	そう、本当使えないよね<2 人笑い>。	
22	JF21	私もこの前なんか待ち合わせした時に(うん)限ってなんか遅れそうな時にメール、携帯家に忘れてるのに気付いて、あー、後さ(うん)よくあるのが充電切れ。	

23	JF22	<充電切れある>{<}	
24	JF21	<笑いながら><そうそう>{<}	
ライン番号 25～33 省略			
34	JF21	<ねー>{<}そうだね、私もなんかじゃ頼むのでよかったらなんかケーキとかなんか食べませんか?。	
35	JF22	食べる。	
36	JF22	<笑いながら>ね、ここに美味しいという噂の【【。	
37	JF21	】あ一本当なんか今日遅れた詫びに私が<###>{<}	核談話 (直接的に受け入れる)
38	JF22	<<笑いながら>いやいや>{<}そんなそんな電車のせいだから、電車の。 ←直接的に受け入れる	
39	JF21	ごめんね<本当に>{<}	
40	JF22	<あー>{<}これメニューだからどうぞ=。	挿入談話
41	JF21	=どうもどうも、じゃ私はじゃあ(うん)、じゃあカフェオレと(うん)ショートケーキにします。	

この会話をみると、JF21 が、責任を認めながら「ごめん」と謝罪しており、JF22 は、「あー、<え、うん>{<}。」と反応する「核談話」のやりとりから会話はスタートしている。ライン番号 4-8 で、JF21 は、状況説明や責任を認める発話をしながら謝罪しており、ライン番号 17 で、JF22 は「<いやいやこちらこそ>{<}なんかもう=。」と「いやいや」という言葉を用いて直接的に受け入れることを示し、その後、自分の過失について言及している。これらの「核談話」のやりとりで会話は終了せず、ライン番号 20 から 36 にかけて携帯に関する話や注文に関する話等、「謝罪内容」と関係のないやりとりが行われている。続いて、ライン番号 37-39 で、JF21 は、遅れた詫びに代償することを述べながら謝罪し、JF22 は、「<<笑いながら>いやいや>{<}そんなそんな電車のせいだから、電車の。」と、再度、謝罪を受け入れることを示し、注文の話のやりとりで<会話例 5-4>は終了する。日本語女性は、「核談話」と「核談話」の間に「挿入談話」が現れる会話(日女会話 3、11)や「挿入談話」が現れてから会話が終了する会話(日女会話 1、3、4、5、7、8、11、12、13、14)が日本語男性より多く見られる。「挿入談話」の内容は、「謝罪内容」と関係のない携帯の話、注文の話、挨拶などであるが、これらの「挿入談話」は、フェイス侵害度が高い「謝罪場面」において場を和らげる働きをしていると考えられる。つまり、ネガティブ・ポライトネスの状況の中で、相手に近づきたい欲求が働くポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであると判断される「挿入談話」が現れ、互いに対人配慮行動を行う傾向が日本語男性より強いと考えられる。

続いて、負担度が軽い場合の韓国語母語話者の謝罪談話の分析結果について考察する。

5.3.2 負担度が軽い場合の韓国語母語話者における謝罪談話の分析結果及び考察

韓国語母語話者の謝罪談話の展開の類似点や相違点等を分析しその構造の特徴を述べる。

次に、これらの特徴を、相互作用の観点で会話例を通して検討してみる。

5.3.2.1 負担度が軽い場合の韓国語母語話者における謝罪談話の展開とその構造の特徴

本節では、韓国語母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開とその構造の特徴を述べる。その後、韓国語男性と韓国語女性の謝罪談話の展開とその構造の特徴の類似点や相違点を検討し、考察を行う。

以下では、韓国語男性における謝罪談話を構成する各談話の展開を表 5-9 に示す。

表 5-9 負担度が軽い場合の韓国語男性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開

会話番号	謝罪談話を構成する各談話の展開
韓男会話 1	核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話
韓男会話 2	核談話(間接的に受け入れ)
韓男会話 3	核談話(直接的に受け入れ)
韓男会話 4	交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ)
韓男会話 5	交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(間接的に受け入れ)
韓男会話 6	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話
韓男会話 7	核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 後続関連談話 ⇒ 挿入談話 ⇒ 後続関連談話 ⇒ 挿入談話 ⇒ 核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
韓男会話 8	交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(間接的に受け入れ)
韓男会話 9	交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
韓男会話 10	交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話-1 ⇒ 挿入談話 ⇒ 核談話-2(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 後続関連談話 ⇒ 挿入談話
韓男会話 11	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
韓男会話 12	交渉談話(間接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
韓男会話 13	挿入談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話 ⇒ *謝罪発話文 ⇒ 挿入談話
韓男会話 14	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話 ⇒ 挿入談話
韓男会話 15	交渉談話(間接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話

表 5-9 を見ると、〈会話 1、2、3、6、7、11、14、16〉は、「核談話」から始まり、〈会話 4、5、8、9、10、12、15〉は、「交渉談話」から始まるが、「交渉談話」は「受け入れない」という共通性が見られ、〈会話 13〉は、「挿入談話」からスタートしているが、継続し、「交渉談話」が現れる。韓国語男性は、「遅刻した」という設定にも関わらず、謝罪する側の謝罪から始まる会話が 8 会話であり、謝罪する側の状況説明あるいは相手の過失に関する言及、これに対する謝罪される側の非難や自分の過失に関する言及のやりとりが行なわれる「交渉談話」から始まる会話が 7 会話であり、ほぼ、半々を占めている。また、「核談話」で会話が収束したにも関わらず、継続し、「後続関連談話」や「挿入談話」が現れたのは、〈会話 1、4、5、6、7、9、10、11、12、13、14、15〉の 12 会話であり、「核談話」のみで終了した会話より 3 倍も多く現れていた。

負担度が軽い謝罪場面において、韓国語男性の謝罪談話を構成する各談話の展開は、4 つのタイプがあると考えられる。まず、〈会話 2、3、16〉のように、1 回の「核談話」のみで会話が終了する構造である。次に、〈会話 1、6〉のように、「核談話」のやりとりで会話が収束したにも関わらず終了せず、「後続関連談話」や「挿入談話」が現れる構造である。そして、〈会話 7、11〉のように、「核談話」で会話が収束した後、「後続関連談話」あるいは「挿入談話」のやりとりが行われてから、再度、「核談話」が現れ、その後、「挿入談話」が現れてから会話が終了する構造である。最後は、一番多く現れた展開であるが〈会話 4、5、8、9、10、12、(13)、15〉のように、〈会話 13〉は「挿入談話」からスタートしてから受け入れない「交渉談話」に入るが、その他は、受け入れない「交渉談話」から始まり、「核談話」で一旦収束したが、ここで会話が終了せず、「後続関連談話」、「挿入談話」が現れたり、再度、「核談話」が現れたりする複雑な展開を見せる構造である。また、〈会話 14〉は、タイプはないが、「核談話」のやりとりで会話が収束したにも関わらず終了せず、連続して「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れる構造である。

これらの展開を見ると、「核談話」が 1 回現れてから会話が終了したり、1 回の「核談話」後に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れてから会話が終了するやりとりが 16 会話中 6 会話で、約 4 割程度であった。これに対し、「核談話」が現れる前に「交渉談話」が現れたり、「核談話」が現れたにもかかわらず複数の「後続関連談話」あるいは「挿入談話」が続いて現れてから、再度、「核談話」が現れたり、「核談話」と「核談話」の間に複数の「後続関連談話」や「挿入談話」が現れたりしてから会話が終了するやりとりが 16 会話中 10 会話で、約 6 割程度を占めている。つまり、韓国語男性は、負担度が軽い謝罪場面だとしても、「謝罪定型表現」を用いた「核談話」のやりとりのみで簡単に会話を終了させず、「挿入談話」が多く現れたり、「後続関連談話」が現れて、会話を続けようとする働きかけを行っていることが明らかになった。更に、互いに過失がある謝罪場面では、謝罪する側は「謝罪定型表現」を用いて謝罪する傾向もあるが、相手の過失や不可避な状況による過

失であることを謝罪される側に伝達しようとしている働きも積極的に行っているのではないかと考えられる。

次に、「直接的あるいは間接的に受け入れる」という観点から考えると、「間接的な受け入れ」のみの応答が現れた会話は、〈会話 1、2、7、13〉であり、他の会話は、受け入れる意を明示的かつ直接的に表しており、〈会話 8、15〉は、謝罪する側の謝罪に対して、最初は、明示的かつ直接的に受け入れる意を示した後、再度、現れる謝罪に対して非明示的かつ間接的に受け入れる意を示している。つまり、負担度が軽い謝罪場面において、韓国語男性は、謝罪する側の謝罪に対して、明示的かつ直接的に受け入れることを示す傾向があるが、約 3 割程度は、非明示的かつ間接的に受け入れることを示しており、直接的に受け入れることを示さない応答も有標行動として捉えられない可能性もあると考えられる。

続いて、韓国語女性の謝罪談話を構成する各談話の展開を表 5-10 に示す。

表 5-10 負担度が軽い場合の韓国語女性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開

会話番号	謝罪談話を構成する各談話の展開
韓女会話 1	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(間接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
韓女会話 2	核談話 ⇒ 挿入談話 ⇒ 直接的に受け入れ ⇒ 後続関連談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(間接的に受け入れ)
韓女会話 3	核談話(間接的に受け入れ)
韓女会話 4	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
韓女会話 5	核談話(直接的に受け入れ)
韓女会話 6	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
韓女会話 7	核談話(間接的に受け入れ)
韓女会話 8	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
韓女会話 9	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
韓女会話 10	核談話(直接的に受け入れ)
韓女会話 11	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 後続関連談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
韓女会話 12	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 後続関連談話(間接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 後続関連談話(間接的に受け入れ)
韓女会話 13	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話
韓女会話 14	核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話 ⇒ 挿入談話
韓女会話 15	核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(間接的に受け入れ)
韓女会話 16	核談話(間接的に受け入れ)

表 5-10 を見ると、韓国語女性の謝罪談話を構成する各談話の展開は、謝罪する側が「謝罪定型表現」を用いて謝罪する「核談話」からスタートしている。また、「核談話」のやりとりで会話が収束したにも関わらず、継続し、「後続関連談話」や「挿入談話」が現れたのは、＜会話 1、2、4、6、8、9、11、12、13、14、15＞であり、「核談話」のみで終了した会話の数のほぼ 3 倍に至る。

負担度が軽い謝罪場面において、韓国語女性の謝罪談話を構成する各談話の展開は、4 つのタイプがあると考えられる。まず、＜会話 3、5、7、10、16＞のように、1 回の「核談話」のみで会話が終了する構造である。次に、＜会話 4、8、9、13＞のように、1 回の「核談話」で会話が収束したにも関わらず終了せず、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れる構造である。そして、＜会話 12、14＞のように、「核談話」のやりとりが行われてから、「後続関連談話」と「挿入談話」が 1 回以上連続行われ、会話が終了する構造である。最後に、＜会話 2、6、11、15＞のように、「核談話」で会話が収束した後、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」のやりとりが行われてから、再度、「核談話」が現れ、終了したり、その後、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れてから会話が終了する構造である。＜会話 2＞は、「核談話」のやりとりが行われていたが、途中で謝罪する側である KF03 が急にロールプレイの前提条件を勘違いしているような発話をし、これに関するやりとりが暫く行われた後、謝罪される側である KF04 が明示的かつ直接的に受け入れる意を示す発話をしていた。＜会話 1＞は、タイプはないが、「核談話」が 2 回現れてから、「後続関連談話」や「挿入談話」が現れる構造である。

これらの展開を見ると、「核談話」が 1 回現れてから会話が終了したり、1 回の「核談話」後に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れてから会話が終了するやりとりが 16 会話中 9 会話で、約 6 割程度である。つまり、韓国語女性は、負担度が軽い謝罪場面においては、「核談話」のみで簡単に会話を終了する傾向があると考えられる。韓国語男性と異なり、受け入れない「交渉談話」からスタートし「核談話」に展開する傾向は見られなかった。

次に、「直接的あるいは間接的に受け入れる」という観点から考えると、「間接的な受け入れ」のみの応答が現れた会話は＜会話 3、7、16＞であり、「間接的な受け入れ」の応答が現れてから「後続関連談話」、「挿入談話」が現れた会話は＜会話 14＞で、他の会話は、受け入れる意を明示的かつ直接的に表している。＜会話 1＞は、謝罪する側の謝罪に対して、最初は、明示的かつ直接的に受け入れる意を示した後、再度、現れる謝罪に対して非明示的かつ間接的に受け入れる意を示している。つまり、負担度が軽い謝罪場面において、韓国語女性は、謝罪する側の謝罪に対して、明示的かつ直接的に受け入れることを示す傾向があるが、韓国語男性と同様に約 3 割程度は、非明示的かつ間接的に受け入れることを示しており、直接的に受け入れることを示さない応答も有標行動として捉えられない可能性もあると考えられる。

ここで、負担度が軽い謝罪場面における韓国語男性と韓国語女性の謝罪談話の展開とその構造の特徴を比較すると、まず、韓国語男性は、「核談話」のやりとりと「交渉談話」のやりとりからの始まりが半々を占めていたが、韓国語女性は、「核談話」のやりとりからスタートしていた。本研究は自分の過ちではなく、不可避な状況により不本意的に遅刻してしまったという設定であり、謝罪される側にも過失がある謝罪場面なので、謝罪される側の過失を確認するやりとりや遅刻の状況を先に説明するやりとりから始まる会話が、韓国語男性では現れた。

次に、謝罪談話を構成する各談話の展開には3つの類型が共通的に見られたが、それは、①1回の「核談話」のみで会話が終了する構造、②「核談話」のやりとりで会話が収束したにも関わらず終了せず、「後続関連談話」あるいは「挿入談話」が現れる構造、③「核談話」で会話が収束した後、「後続関連談話」のやりとりが行われてから、再度、「核談話」が現れ、その後、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れてから会話が終了する構造である。しかし、韓国語男性では、受け入れない「交渉談話」から始まり、「核談話」で収束したが、会話は終了せず、「後続関連談話」、「挿入談話」が現れたり、再度、「核談話」が現れたりする構造を見せる会話が半分ぐらい現れ、韓国語女性では、「核談話」のやりとりが1回あるいは2回行われてから、「後続関連談話」と「挿入談話」が1回以上連続行われてから会話が終了する構造が約2割程度現れた。韓国語母語話者では、女性が男性より「核談話」のみで会話を終了させる傾向が強く、男性は女性より「交渉談話」を展開してから、「核談話」が現れる傾向が強いと考えられる。韓国語男性のみ現れた「交渉談話」は、謝罪される側が明示的かつ直接的に受け入れない意を示すやりとりが多く現れたが、互いのフェイスを配慮しないやりとりが最初の段階で現れるので、謝罪場面の雰囲気は硬くなる。つまり、韓国語男性は、親しい友人関係では侵害された相手のネガティブ・フェイスを軽減するための働きをあまり行っていない傾向があるのではないかと考えられる。一方、「核談話」を男性より多く用いる女性は、侵害された相手のネガティブ・フェイスを軽減するための働きかけをより積極的に行っているのではないかと考えられる。

最後に、負担度が軽い謝罪場面では、謝罪する側の謝罪に対して、謝罪される側が明示的かつ直接的に受け入れる意を示すことが、男女共に無標行動として捉えられると思われる。しかし、非明示的かつ間接的に受け入れる意を表す応答も、男性は16会話中7会話、女性は16会話中5会話現れ、特に、非明示的かつ間接的に受け入れる意を表す応答のみは、男性は7会話中4会話、女性は5会話中4会話であり、謝罪談話で、これらの応答が必ずしも有標行動として捉えられる恐れはないと考えられる。謝罪する側の謝罪に対して、明示的かつ直接的に受け入れることを示すのが優先される応答であるが、非明示的かつ間接的に受け入れることを示すのも韓国語母語話者の会話では約3割を占めており、共通的に現れていた。

次の節では、韓国語母語話者における謝罪談話の相互作用の特徴を実際の会話例を通して考察していく。

この会話をみると、KF15 が、「ごめん」と謝罪しており、KF16 は、相手に遅れた理由を求める発話をする「核談話」のやりとりから会話はスタートしている。ライン番号 12 から 18 では、KF15 の状況説明や相手の過失に対する発話と KF16 の自分の過失に対する発話のやりとりが行なわれている。その後、KF15 は状況説明をしながら謝罪しており、KF16 は、「야 괜찮아, 뭐 그럴 수도 있지, 그러면서<<웃음>>. (まあ、大丈夫、そういうこともあるし、なんてね<<笑い>>。))(ライン番号 39)と「괜찮아(大丈夫)」という言葉を用いて明示的に受け入れることを示し、「核談話」は収束され、注文の話で<会話例 5-5>は終了している。

韓国語女性は、韓国語男性より、「核談話」のみ、あるいは、「核談話」の後、「挿入談話」や「後続関連談話」が現れてから会話が終了する傾向が強く現れていた。相手のネガティブ・フェイスを侵害してしまった状況を回復させるため、男性より「謝罪」を多く用いているが、相手に過失がある場合には、直接的に不満な気持ちも表す傾向がある。

次の<会話例 5-6>は、韓国語男性のみ現れた「交渉談話」が現れてから「核談話」が現れる展開である。

<会話例 5-6>負担度が軽い場合の韓国語男性母語話者の謝罪談話の相互作用の特徴

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
2	KM09	아-, 「KM10 이름」아, <안녕>{<}.(あ-, 「KM10 の名前」 あ、<ハイ>{<}.)	交渉談話
3	KM10	<아-이>{<}, 미친 새끼야 지금, 시간이 몇 신데 이제 왜[↑] [추궁하듯이 목소리를 높이며]{<<야-이-}>{<}, てめえ、今、時間が何時かよ、今くるの[↑][攻めるように声を高めて。]<←直接的に受け入れない	(直接的に受け入れない)
4	KM09	아-니, 《잠시간격》내가,《잠시간격》제시간에 맞춰서 나왔거든, 집에서. (いやー、《少し間》俺が、《少し間》ちゃんと時間通りに出たけど、家から。)	
5	KM09	근데 지하철이 끊겨 가지고, 아니 지하철이 갑자기 멈춰갖고,,(だけど地下鉄が切れちゃって、いや、地下鉄が急に止まっちゃって,,)	
6	KM10	<웃으면서>엠행할.<<笑いながら>>ふざけるな。)<←直接的に受け入れない	
라인번호 7~10 省略			
11	KM09	<약간 웃음>아-, 무슨 전화기를 집에, 아무튼&,, (<少し笑い>あー、何で電話を家に、とにかく&,)	
12	KM09	《잠시간격》아 미안. 《少し間》あー、ごめん。)	核談話
13	KM10	아-, 이 새끼, 그래도 20 분, 20 분이나 늦었는데, &,, (あー、このやろう、だけど 20 分、20 分も遅れたから、&,)	(直接的に受け入れる)
14	KM10	이 새끼 밥이나 사라 그냥.(てめえ、ご飯でもおごれ。)	
15	KM09	어??<웃음>.(うん??<笑い>。)	
16	KM10	니가 밥 사, 대신에.(おまえがご飯奢って、代わりに。)	

17	KM09	《잠시간격》아 뭐 그냥 내가 늦은 거는&,, (《少し間》あ、まあ、俺が遅れたのは&,、)
18	KM09	미안하다.(ごめん。)
19	KM09	알았어, 내가 살게.(わかった、私が奢る。)
20	KM10	아-, 근데 지하철이 멈췄다고?.(あー、けど地下鉄が止まっちゃった?。)
21	KM09	어.(うん。)
ライン番号 22~39 省略		
40	KM10	《침묵 2 초》그래도 지하철 때문이라면 어쩔 수가 없겠지만, &,、(《沈黙 2 秒》だけど地下鉄のせいだったら仕方ないけど、&,、) ↑ 直接的に受け入れる
41	KM10	《잠시간격》진짜 다음부터 늦지마라. (《少し間》本当に次回から遅れるな。)
42	KM09	알았어.(わかった。)

この会話をみると、KM10 は、KM09 の挨拶に対して、「<아-이>{>}, 미친 새끼야 지금, 시간이 몇 신데 이제 와[↑][추궁하듯이 목소리를 높이며].(<やーいー>{>}, てめえ、今、時間が何時かよ、今くるの[↑][攻めるように声を高めて。])」(ライン番号 3)、「<웃으면서>엠병할.<笑いながら>ふざけるな。」(ライン番号 6)と乱暴な言葉を用いて直接的に受け入れない意を示している。ライン番号 12 で、KM09 は「謝罪定型表現」を用いて謝罪し、これを受けて、KM10 は、受け入れる意は直接的に示さず、代償を要求しており、KM09 は、再度謝罪しながらその要求を受け入れている。その後、状況説明や謝罪される側の過失に関するやりとりが行われてから、ライン番号 40 で、「《침묵 2 초》그래도 지하철 때문이라면 어쩔 수가 없겠지만,&,、(《沈黙 2 秒》だけど地下鉄のせいだったら仕方ないけど、&,、)」と、ようやく明示的に受け入れる意を示しく会話例 5-6>は終了している。

韓国語男性は、韓国語女性より、「核談話」と共に「挿入談話」が多く現れており、特に、受け入れない「交渉談話」後に、「核談話」が現れる展開は、韓国語男性にのみ見られた現象である。韓国語男性は、「謝罪」を女性よりはあまり用いない傾向が見られ、互いの過失に対して、乱暴な言葉で直接的に不満な気持ちを表す傾向が強い。

5.4 負担度が軽い場合の日韓母語話者における謝罪談話のまとめ

本節では、負担度が軽い場合の日韓母語話者の謝罪談話の構造の分析を行ったが、それを明らかにするため、日韓母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開や構造、相互作用の特徴を談話レベルで示し考察を行った。負担度が軽い謝罪場面として設定された「遅刻場面」は、自分の過ちではなく、不可避な状況により不本意的に遅刻してしまったという設定であった。

日本語母語話者と韓国語女性は、明確な「謝罪定型表現」を含む「核談話」から始まり、

受け入れることで会話が終了していたが、韓国語男性は、「核談話」や「交渉談話」から始まるのが半々を占めているものの、受け入れることで会話が終了していた。また、日韓母語話者共に、明確な謝罪表現を含まない「挿入談話」と「後続関連談話」が多く現れる傾向が見られた。「挿入談話」の内容は、携帯の話、注文の話、挨拶などであるが、これらの「挿入談話」は、フェイス侵害度が高い「謝罪場面」において場を和らげる働きをしていると考えられる。つまり、ネガティブ・ポライトネスの状況の中で、相手に近づきたい欲求が働くポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであると判断される「挿入談話」を用いて、互いに対人配慮行動を行う傾向が日韓母語話者で共通的に見られたが、日本語母語話者では女性の方で、韓国語母語話者では男性の方で多く現れていた。一方、日本語女性は「核談話」を繰り返す傾向が多く現れており、日本語母語話者より韓国語母語話者が、特に、韓国語男性は、「彼女の話」等個人的な話題のやりとりが行われる「挿入談話」が多く現れる傾向が見られた。また、日本語母語話者より韓国語母語話者の方で、謝罪場面にも関わらず、相手にも過失がある場合には、直接的に不満な気持ちも表す傾向があるが、特に、韓国語男性の方で互いの過失に対して、乱暴な言葉で直接的に不満な気持ちを表す傾向が強いと考えられた。

続いて、「直接的あるいは間接的に受け入れる、受け入れない」の観点から考えると、日本語母語話者は、謝罪する側の謝罪に対して、「しょうがない、大丈夫、いいよ、いやいや」等の明示的かつ直接的に受け入れることを表すことが、謝罪される側の無標行動であり、これらの意を示さないことは、有標行動として捉えられる可能性があると考えられた。しかし、間接的に受け入れる会話は、韓国語母語話者では、約 3 割程度現れるという特徴が見受けられ、直接的に受け入れることを示さない応答も有標行動として捉えられない可能性もあると考えられた。

負担度が軽い謝罪場面では、日韓による、男女による類似点はあるが、相違点も多く見られていた。特に、他の研究対象に比べ、韓国語男性で独特な特徴が現れていたが、「遅刻」という謝罪場面にも関わらず、受け入れない「交渉談話」から始まる会話が半分を占めており、雑談ではない「謝罪場面」にも関わらず、個人的な話の「挿入談話」が現れており、更に、親しい友人関係の会話ではあるが、乱暴な言葉使いを多用する等の特徴が見られた。

続いて、負担度が重い場合の日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪談話の分析結果について考察する。

5.5 日韓母語話者における謝罪談話の分析結果及び考察(負担度が重い場合)

本節では、負担度が重い場合の日韓母語話者における謝罪談話を、男女差を中心に各談話レベルで示し、謝罪談話を構成する各談話の展開や構造、更に、相互作用の特徴を分析し考察を行う。

5.5.1 負担度が重い場合の日本語母語話者における謝罪談話の分析結果及び考察

日本語母語話者の謝罪談話の展開の類似点や相違点等を分析しその構造の特徴を述べる。次に、これらの特徴を、相互作用の観点で会話例を見ながら考察していく。

5.5.1.1 負担度が重い場合の日本語母語話者における謝罪談話の展開とその構造の特徴

本節では、謝罪談話を構成する各談話がどのように展開しているかを検討するが、日本語母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開とその構造の特徴について述べる。その後、日本語男性と日本語女性の謝罪談話の展開とその構造の特徴の類似点や相違点を検討し、考察を行う。

以下では、日本語男性の謝罪談話を構成する各談話の展開を表 5-11 に示す。

表 5-11 負担度が重い場合の日本語男性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開⁷⁵

会話番号	謝罪談話を構成する各談話の展開
日男会話 1	前置き談話 ⇒ 交渉談話(間接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れ)
★日男会話 2	前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 挿入談話
日男会話 3	交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
★日男会話 4	交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れない)
日男会話 5	核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(間接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
★日男会話 6	前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ *謝罪発話文
日男会話 7	前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(間接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
日男会話 8	挿入談話 ⇒ 前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(間接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
日男会話 9	核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話 ⇒ *謝罪発話文
★日男会話 10	前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない)
日男会話 11	前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
日男会話 12	挿入談話 ⇒ 前置き談話 ⇒ 交渉談話(間接的に受け入れない)

⁷⁵ 示し方は、負担度が軽い場合と同様であるが、会話番号の前にある★印は、受け入れない会話を表す。

	⇒ <u>核談話(直接的に受け入れない)</u> ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ <u>核談話(直接的に受け入れない)</u> ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ <u>核談話(直接的に受け入れない)</u> ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
日男会話 13	<u>核談話(直接的に受け入れない)</u> ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ <u>核談話(直接的に受け入れない)</u> ⇒ <u>交渉談話(間接的に受け入れ)</u>
日男会話 14	挿入談話 ⇒ 前置き談話 ⇒ <u>核談話(直接的に受け入れない)</u> ⇒ <u>交渉談話(間接的に受け入れない)</u> ⇒ <u>核談話(間接的に受け入れ)</u> ⇒ <u>後続関連談話(間接的に受け入れ)</u> ⇒ <u>核談話(直接的に受け入れ)</u>
日男会話 15	<u>核談話(直接的に受け入れない)</u> ⇒ <u>核談話(間接的に受け入れ)</u>
★日男会話 16	交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ <u>核談話(直接的に受け入れない)</u> ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない)

表 5-11 を見ると、日本語男性の会話は、＜会話 1、2、6、7、10、11＞の 6 会話は「前置き談話」、＜会話 3、4、16＞の 3 会話は「交渉談話」、＜会話 5、9、13、15＞の 4 会話は「核談話」、＜会話 8、12、14＞の 3 会話は「挿入談話」からスタートしており、「前置き談話」からの始まりが多いものの、バラツキがあると考えられる。

負担度が重い場合は、謝罪される側が謝罪する側の謝罪内容を受け入れたり、受け入れなかったりする現象が現れる。表 5-11 を見ると分かるように、＜会話 1、3、5、7、8、9、11、12、13、14、15＞は、謝罪する側が持ち出した謝罪内容が謝罪される側に受け入れられる会話で、16 会話中 11 会話(69%)であるが、＜会話 2、4、6、10、16＞は、謝罪する側が持ち出した謝罪内容が謝罪される側に受け入れられない会話で、16 会話中 5 会話(31%)である。

負担度が重い謝罪場面において、謝罪談話を構成する各談話の展開の類型を考えるためには、謝罪内容が謝罪される側に「受け入れられるのか、受け入れられないのか」を考えた上で、分類する必要があると考えられる。また、謝罪談話の各談話の展開の類型を分類する際、重要なこととして、「前置き談話」と「挿入談話」、「後続関連談話」が現れるかどうかという差もあるが、負担度が重い謝罪場面は、「核談話」のやりとりや「交渉談話」のやりとりに敏感に反応する傾向があると考えられるため、「核談話」や「交渉談話」のやりとりを中心に分析することが重要であると考えられる。

謝罪内容が受け入れられた謝罪談話を構成する各談話の展開は 2 つの類型があると考えられる。まず、＜会話 1、3、7＞のように、「交渉談話」では受け入れず、その後、「核談話」や「交渉談話」のやりとりが現れるがやはり受け入れず、再度、現れる「核談話」で謝罪される側が受け入れる意を示し会話が収束する構造である。次は、＜会話 9、14＞のように、「核談話」では受け入れず、その後、現れる「交渉談話」でも受け入れず、再度、現れる「核談話」で受け入れる意が示され会話が収束する構造であり、＜会話 14＞は、継続して、「後続関連談話」が現れてから、再度、現れる「核談話」で受け入れる意を示している。

しかし、これら5つの会話以外には、類型が見られないと思われるが、<会話 11>は、「交渉談話」で受け入れる意を示し、「核談話」で、再度、受け入れる意を示す構造であり、<会話 15>は、最初の「核談話」では受け入れなかったが、2回目の「核談話」では受け入れる意を示す構造である。<会話 8>は、「交渉談話」と「核談話」のやりとりが行われるが受け入れず、最後に現れる「交渉談話」で受け入れる意を示す構造であるが、継続して現れる「核談話」でも受け入れる意を示している。<会話 13>は、「核談話」では受け入れず、その後、現れる「交渉談話」でも受け入れず、再度、現れる「核談話」でも受け入れず、最後に現れる「交渉談話」で受け入れる意が示され会話が収束する構造である。<会話 5>は、「核談話」や「交渉談話」のやりとりでは受け入れず、その後の「核談話」と「交渉談話」のやりとりでも受け入れず、最後に現れる「核談話」で受け入れる意を示している構造である。<会話 12>は、日本語男性の謝罪談話の展開で一番複雑な展開であるが、3回の「交渉談話」のやりとりと3回の「核談話」のやりとりが繰り返し行われても、謝罪される側が受け入れる意を示していないが、最後に現れる「交渉談話」でようやく受け入れることで会話が収束される。謝罪内容が受け入れられた謝罪談話を構成する各談話の展開は、<会話 11>以外の会話は、簡単に受け入れることができず、謝罪される側は、受け入れない意を示し、謝罪する側も理解を求める発話をしている様子が窺える。

謝罪内容が受け入れられなかった謝罪談話を構成する各談話の展開は1つの類型があると考えられる。<会話 2、10>のように、「交渉談話」では受け入れず、その後、「核談話」が現れても最後まで受け入れないことで会話が収束する構造である。しかし、これらの会話以外には、類型が見られないと思われるが、<会話 6>は、「交渉談話」のやりとりが行われるが、最後まで受け入れることを示さず会話が収束されるが、この会話は「核談話」が会話途中では現れず、最後に、謝罪する側が「謝罪定型表現」を用いて謝罪を表明し、会話が終了している。<会話 16>は、「交渉談話」や「核談話」では受け入れず、最後に現れる「交渉談話」でも受け入れないことで会話が収束され、<会話 4>はその後にも「核談話」が現れるが、受け入れる意が示されない。受け入れられなかった会話は、最初の段階では「核談話」は現れず、「交渉談話」のやりとりを行う会話が多い傾向が見られた。受け入れる謝罪談話を構成する各談話の平均展開の数は約5回であり、受け入れない謝罪談話を構成する各談話の平均展開の数は約3回であった。受け入れる謝罪談話は、受け入れない謝罪談話より「核談話」が多く現れ、更に、各談話の展開も多く現れている。一方、受け入れない謝罪談話は、受け入れる謝罪談話より「核談話」の出現が少なく、継続し「交渉談話」のみのやりとりが行われており、このようなやりとりが「受け入れないという結果」を引き起こしているのではないかと考えられる。

次に、「直接的あるいは間接的に受け入れる、受け入れない」の観点から考えると、受け入れる、受け入れないという意を直接的にのみ表す会話は<会話 2、4、6、11、16>であり、この中で、<会話 2、4、6、16>は受け入れられなかった会話であり、<会話 11>のみ受け入れられた会話である。つまり、謝罪される側が自分の不満な気持ちを直接的に表したり、

積極的に問題を解決するための働きかけをしたりする会話で受け入れられなかった会話が
多く現れる傾向があるのではないかと考えられる。また、受け入れられた会話中で、〈会
話 5、7、8〉は、最初は直接的に受け入れない意を示していたが、間接的に受け入れない意
を示す段階を経て、受け入れることで収束する会話であり、〈会話 14、15〉は、最初は直
接的に受け入れない意を示していたが、次は、間接的に受け入れる意を示す会話である。
つまり、最初は、謝罪される側が自分の不満な気持ちを直接的に表し受け入れない意を示
していたにもかかわらず、謝罪する側が謝罪し続けながら交渉する姿勢を見せているため、
最初の意向を覆したのではないかと考えられる。負担度が重い謝罪場面においては、簡単
に明示的かつ直接的に受け入れることはあまり示さず、一つの会話の中で、直接的あるい
は間接的な反応が現れたり、受け入れることと受け入れないことを表したりする等、複雑
なやりとりの展開を見せていた。

続いて、日本語女性の謝罪談話を構成する各談話の展開を表 5-12 に示す。

表 5-12 負担度が重い場合の日本語女性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開

会話番号	謝罪談話を構成する各談話の展開
日女会話 1	前置き談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れ)
★日女会話 2	核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない)
★日女会話 3	前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない)
日女会話 4	挿入談話 ⇒ 前置き談話 ⇒ 核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(間接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(間接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(間接的に受け入れ)
★日女会話 5	前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない)
★日女会話 6	核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない)
日女会話 7	挿入談話 ⇒ 前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
日女会話 8	交渉談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
★日女会話 9	交渉談話(直接的に受け入れない)
★日女会話 10	前置き談話 ⇒ 核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない)
日女会話 11	核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(間接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
日女会話 12	前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れない)

	⇒ 核談話(間接的に受け入れ)
★日女会話 13	交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 挿入談話
日女会話 14	前置き談話 ⇒ 核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
日女会話 15	挿入談話 ⇒ 前置き談話 ⇒ 交渉談話(間接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
★日女会話 16	挿入談話 ⇒ 前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない)

表 5-12 を見ると、日本語女性の会話においては、＜会話 1、3、5、10、12、14＞の 6 会話は「前置き談話」、＜会話 8、9、13＞の 3 会話は「交渉談話」、＜会話 2、6、11＞の 3 会話は「核談話」、＜会話 4、7、15、16＞の 4 会話は「挿入談話」からスタートしており、負担度が重い謝罪場面では、「前置き談話」からの始まりが多いものの、男性と同様に、バラツキがあると考えられる。この中で、受け入れられたのは、＜会話 1、4、7、8、11、12、14、15＞で、16 会話中 8 会話(50%)である。受け入れられなかったのは、＜会話 2、3、5、6、9、10、13、16＞であり、16 会話中 8 会話(50%)で、半々を占めている。

負担度が重い謝罪場面において、謝罪内容が受け入れられた謝罪談話を構成する各談話の展開は 3 つの類型に分類できる。まず、＜会話 8、15＞のように、最初の「交渉談話」で受け入れる意を示し会話が収束し、「核談話」で再度受け入れる意を示す構造であるが、＜会話 15＞は、その後、再度、「核談話」で受け入れることを繰り返し示している。次に、＜会話 11、14＞のように、「核談話」では受け入れず、その後、現れる「交渉談話」でも受け入れず、再度、現れる「核談話」のやりとりが行われてから、謝罪される側が受け入れる意を示し、会話が収束される構造である。また、＜会話 1、4＞のように、「核談話」では受け入れず、その後、現れる「交渉談話」でも受け入れず、再度、現れる「核談話」や「交渉談話」のやりとりが行われても受け入れる意は示されず、最後に現れる「核談話」のやりとりが行われてから、受け入れる意を示し、会話が収束される構造である。＜会話 4＞は、その後にも「後続関連談話」が現れてから、再度、「核談話」で受け入れることを繰り返し示している。＜会話 7＞と＜会話 12＞は、類型は見られないが、＜会話 7＞は、「交渉談話」のやりとりが行われるが受け入れず、次の「核談話」で受け入れる意を示し、会話が収束する構造であり、＜会話 12＞は、「核談話」では受け入れられず、次の「核談話」で受け入れられる意が示される構造である。日本語女性も日本語男性と同様に、簡単に受け入れることができず、謝罪される側は、受け入れない意を示し、謝罪する側も理解を求める発話をしている様子が窺える。

謝罪内容が受け入れられなかった謝罪談話を構成する各談話の展開は 2 つの類型があると考えられる。まず、＜会話 3、5、9、13＞のように、「核談話」が現れていない展開であ

るが、謝罪する側とされる側の交渉のやりとりのみが行われてから、謝罪される側が受け入れないことを示し、結局、謝罪する側は自分の意向を変更したり、曖昧に会話が終了する構造である。次に、＜会話 2、6＞のように、「核談話」や「交渉談話」のやりとりが行われるが受け入れず、再度、「核談話」でも受け入れる意を示さず会話が終了する構造である。＜会話 10＞と＜会話 16＞は、類型は見られないが、＜会話 10＞は、「核談話」で受け入れられず、次の「交渉談話」でも受け入れる意は示されない構造であり、＜会話 16＞は、最初に現れる「交渉談話」では受け入れられず、次に、3回連続「核談話」のやりとりが行われるが最後まで受け入れる意が示されない構造である。日本語女性は、日本語男性と同様に、受け入れる謝罪談話を構成する各談話の平均展開の数は約 5 回であり、受け入れない謝罪談話を構成する各談話の平均展開の数は約 3 回であり、受け入れる謝罪談話は、受け入れない謝罪談話より「核談話」が多く現れ、更に、各談話の展開も多く現れている。一方、受け入れない謝罪談話は、「核談話」が現れない「謝罪談話」も 4 会話ある等、受け入れる謝罪談話より「核談話」の出現が少なく、「交渉談話」のみを続けるやりとりが行われており、このようなやりとりが「受け入れないという結果」を引き起こしているのではないかと考えられる。

次に、「直接的あるいは間接的に受け入れる、受け入れない」の観点から考えると、受け入れる、受け入れない意を直接的のみ表す会話は＜会話 3、5、7、8、9、13＞であり、この中で、＜会話 3、5、9、13＞は受け入れられなかった会話であり、＜会話 7、8＞は受け入れられた会話である。つまり、日本語男性と同様に、謝罪される側が自分の不満な気持ちを直接的に表したり、積極的に問題を解決するための働きかけをしたりする会話で受け入れない会話が多く現れる傾向があるのではないかと考えられる。また、受け入れる会話の中で、＜会話 1＞は、最初は直接的に受け入れない意を示していたが、間接的に受け入れない意を示す段階を経て、受け入れることで収束する会話であり、＜会話 12＞は、最初は直接的に受け入れない意を示していたが、次は、間接的に受け入れる意を示す会話である。つまり、最初は、謝罪される側が自分の不満な気持ちを直接的に表し受け入れない意を示していたにもかかわらず、謝罪する側が継続して謝罪しながら交渉する姿勢を見せているため、最初の意向を覆したのではないかと考えられる。＜会話 4、11、14＞は、最初は間接的に受け入れない意を示していたが、次は、直接的に受け入れる意を示す会話であり、これらの展開は、日本語男性では現れなかった展開である。つまり、日本語女性は問題になっている事柄を間接的に受け入れない反応を見せながら問題内容を把握し、その後、受け入れるか受け入れないかを判断する傾向があるのではないかと考えられる。

ここで、負担度が重い謝罪場面における日本語男性と日本語女性の謝罪談話の展開とその構造の特徴を比較すると、まず、男女により多く現れる談話には若干の差があるものの、「前置き談話」、「交渉談話」、「核談話」、「挿入談話」の何れかで会話がスタートしており、「核談話」、「交渉談話」の展開がより頻繁に現れるのが受け入れる可能性を高める効果があるのではないかと考えられる。一方、「核談話」なしで、直ちに、「交渉談話」から始ま

り、「交渉談話」が長く続くのは、男女差はあるものの、「受け入れない謝罪談話」を高めることになるのではないかと考えられる。しかし、男性より女性の方が、受け入れられた謝罪談話と受け入れられなかった謝罪談話を構成する各談話の展開の数が明確に分かれる傾向が強いのではないかと考えられる。

次に、謝罪談話を構成する各談話の展開の類型から考えると、受け入れる謝罪談話の共通的な構造は、男女共に、①最初の「交渉談話」で受け入れる構造が1会話ずつ、②「核談話」から「交渉談話」を経て「核談話」で受け入れる構造が2会話ずつ、③「核談話」から「交渉談話」、「核談話」、「交渉談話」を経て、「核談話」で受け入れる構造が1会話ずつ現れていた。特に、「核談話」から本題に入り「核談話」で収束される構造は、日本語男女母語話者で共通的に見られた。受け入れない謝罪談話の共通的な構造は、①「核談話」が現れず「交渉談話」のみで受け入れない構造が、日本語男性1会話、日本語女性4会話であり、男性より女性の方で多く現れる特徴が見られた。謝罪に関する先行研究の結果では、日本語男性より日本語女性の方が「謝罪定型表現」を多く用いて謝罪する傾向が強いことを共通的に報告されているが、上記の負担度が軽い場合は、これらの報告と同様の結果であったが、負担度が重い場合は、「核談話」が現れない会話が、日本語女性で約3割程度現れ、むしろ、反対の結果が現れた。

最後に、負担度が重い謝罪場面では、謝罪する側の謝罪に対して、謝罪される側が明示的かつ直接的に受け入れる、あるいは、受け入れない意を示すことが、男女共に多く現れていたが、非明示的かつ間接的に受け入れる、あるいは、受け入れない意を表す応答も直接的に受け入れる会話と共に多く用いられる傾向が見られた。特に、明示的かつ直接的に受け入れない意を強く示している会話は、謝罪内容が受け入れない傾向が日本語母語話者で共通的に現れていた。更に、日本語男性と日本語女性と共に、謝罪内容が受け入れられる会話では、「核談話」と「交渉談話」が多く現れる傾向が見られた。しかし、受け入れられない会話では受け入れられる会話より「核談話」の出現が少なく、「交渉談話」のみを続ける会話が多く観察された。

次の節では、日本語母語話者における謝罪談話の相互作用の特徴を実際の会話例を通して検討してみる。

5.5.1.2 負担度が重い場合の日本語母語話者における謝罪談話の相互作用の特徴

本節では、上記の結果を踏まえて、謝罪談話を構成する各談話の展開において、「受け入れる謝罪談話」と「受け入れない謝罪談話」という観点をを用いて日本語男性と日本語女性の相互作用の特徴を述べる。

1) 「受け入れる謝罪談話」の日本語母語話者の相互作用の特徴

以下の〈会話例5-7〉は、日本語男性の「受け入れる謝罪談話」の会話例である。

<会話例 5-7> 負担度が重い場合の日本語男性母語話者の謝罪談話の相互作用の特徴

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
1	JM01	実は、話があるんだけどさ。	前置き談話
2	JM02	=何?。	
3	JM01	実はさ(うん)、あの一、ドトール‘Doutor’でバイトしてるじゃん。	
4	JM02	してる、してる。	
5	JM01	この間、入ったばっかなんだけどさ、ちっと辞めたいん、だよな[声が段々小さくなる]。	
6	JM02	<笑い>えっ、まじで[↑]?。	交渉談話 (間接的に受け入れない)
7	JM01	うん。	
8	JM02	まだ2ヶ月だよな。	
9	JM01	うん、やあ、まあ確かに2ヶ月しかやってないんだけどさ。	
ライン番号 10~16 省略			
17	JM01	やあ一、結構お願いしたからさ(うん)、&,、	核談話 (間接的に受け入れない)
18	JM01	すげー[↑]申し訳ないんだけどさ…。	
19	JM02	えっ、だってさ、俺「人名」にすごい頼んだ…。	
20	JM01	あーそうか、<さすが変えたらな>[<[独り言で呟くように]。]	交渉談話 (直接的に受け入れない)
21	JM02	<かなり無理言って>[<]たん、だから、2ヶ月でやめるのはきつ(うん)、さすがにな、きついな。 ← 直接的に受け入れない	
22	JM01	=やばいかな。	
23	JM02	だって、俺「人名」にすごい世話なってんもん(あ一)、なんか。	
24	JM02	麻雀連れてってもらったり、パチンコ連れてってもらったり、色々してもらってるから、なんか(そうだな一)、さすがに、これは[↑]難しいな。 ↑ 直接的に受け入れない	
ライン番号 25~41 省略			
42	JM01	研修もなかなか上がれないのがさ…。	交渉談話 (直接的に受け入れない)
43	JM02	ああ一。	
44	JM01	そう、今時給800円でさ、スポーツジム1500円なんだよね(<笑い>)。	
45	JM02	それは絶対そっちの方が<確かに>[<]。	
46	JM01	<そーう一>[<]、ほぼ倍じゃん。	
47	JM02	うん一。	
ライン番号 48~53 省略			
54	JM02	取りあえず、そのスポーツジムに応募してみても(うんうん)受かつ、受かったって決まってから、	

55	JM01	<そうだね>{<}.	
56	JM02	<辞めたら>{<}, それ、それでいいじゃない[↓].	
57	JM01	辞めてから、もし落ちたら,,	
58	JM02	そう<そう>{<}.	
59	JM01	<また>{<}ぷー太郎になっちゃうんだよな>{<}.	
60	JM02	<うん>{<}, もったいないよ(うん).	
61	JM02	だから、もうほんのしばらく続けるということに(うん)したら??.	
62	JM01	まあ一、そうだね、じゃ後、まあ多分今、今週中には(うん)履歴書送、送るから (<笑い>)[携帯ベルが鳴く].	
63	JM01	だからさ、どうしようかなーという。	
64	JM01	どうしようかな。	
ライン番号 65～76 省略			
77	JM01	2ヶ月だからなー。	
78	JM02	やあー、でもそうになったら、俺「人名」に顔合わせにくいな、くすごい{<}. ↑ <u>直接的に受け入れない</u>	
79	JM01	<そうだよな>{<}俺もすげ(そうだね)申し訳ないな, &,,	
80	JM01	「人名」に迷惑かけちゃうからな。	
81	JM01	《少し間》何かいい辞め方ないかな。	
82	JM02	あー、何か理由をつける[↑]=。	
83	JM01	=そう。	
ライン番号 84～88 省略			
89	JM02	実家に帰らなきゃいけないことになった(ああ)、今回地震で実家に帰らなきゃ いけないことになった>{<}.	
90	JM01	<確かに>{<}被災したっていう感じでね。	
91	JM02	おばあちゃんが足を挫いた。	
92	JM01	ああー。	

核談話
(間接的に
受け入れる)

この会話を見ると、「前置き談話」のやりとりから会話が始まり、「交渉談話」のやりとりで、JM01 は、より具体的に辞めたい意向を説明しているが、JM02 は、短いバイト期間を挙げて相手の意向を受け入れることができないことを間接的に述べている。すると、ライン番号 17-19 で、JM01 は、責任を認めながら「申し訳ない」と謝罪をしているが、JM02 は、自分の苦労を挙げて受け入れない意向を伝える「核談話」のやりとりが行われる。しかし、JM01 は、紹介してもらったバイトを辞めたい意向を変更せず、続いて JM02 に理解を求めながら説明し、JM02 もライン番号 42-47 では、譲歩する姿勢は見せているが、ライン番号 54-64 では、バイトを続けることを求めている。JM01 が譲る姿勢を見せていないの

で、JM02 は、「やあー、でもそうなったら、俺「人名」に顔合わせにくいな、くすごい」(ライン番号 78)と、自分の立場の問題を挙げながら受け入れる姿勢は見せていない。ここまでのやりとりでは問題になっている事柄が解決できず、JM01 と JM02 は互いに自分の意向を伝達するための働きを積極的に行っている。しかし、ライン番号 79 で、JM01 は、「くそうだよな」俺もすげ(そうだね)申し訳ないな、&,」と謝罪し、JM02 は、「あー、何か理由をつける[↑]=。」(ライン番号 82)と、ここで譲歩する発話をし、更に、「実家に帰らなきゃいけないことになった(ああ)、今回地震で実家に帰らなきゃいけないことになった」(ライン番号 89)と、具体的な辞め方まで言及し、間接的に受け入れることを示しており、その後も、いい辞め方についての意見を交換する発話を行っている。

次は、日本語女性の「受け入れる謝罪談話」の会話例である。

<会話例 5-8> 負担度が重い場合の日本語女性母語話者の謝罪談話の相互作用の特徴

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
10	JF07	今日ちょっとね、新聞読んでたら、もっと、うん、いいバイトをちょっと見付かっちゃって、で、私的'わたしてき'にはそっちにお願いしたいなと思って、&,	核談話 (間接的に受け入れない)
11	JF07	本当悪いんだけど、&,	
12	JF07	で、まあ一応「JF08 愛称」に「人名 1」さん紹介してもらったじゃない??。	
13	JF07	だから、ちょっと「JF08 愛称」にまあとりあえず相談してみようかなと思って。	
14	JF08	えー、「人名 1」とこは何か不満?。	
15	JF07	えー、全然そういうん、じゃないんだけど、でも何かほら、私やっぱ一人暮らしだから、[声が段々小さくなる]まあお金高い方が(ああー)、いいなと思って&,	
16	JF07	本当悪いんだけど…。	交渉談話 (間接的に受け入れない)
17	JF08	うーん、そっか、え、新しいとこいくら位上がるの?。	
18	JF07	うーん、今「人名 1」とこ 850 円じゃん。	
19	JF07	で、今日見つけたのは、一応研修期間は抜いて、普通に働き出したら、950 円位くれるから、100 円って大きいかなと思って」。	
20	JF08	くそうか」。	
21	JF07	で、家からも近いんだ。	
22	JF08	うん。	
23	JF07	だから、まあちょっと親もやっぱり自分の家から近いとこの方が、まあ離れてるし、ちょっと安心かなみたいな感じで言われちゃったから…。	
24	JF08	うーん…。	核談話 (直接的に受け入れない)
25	JF07	うーん…、本当ごめんなんだけど…。	
26	JF08	えー[↑]、何か結構[強調するように]く笑い「人名 1」さんに、[泣き声みたいな感じで]うーん、頼んだんだよねー。 ← 直接的に受け入れない	

27	JF07	ね、うん、私、うん、「人名 1」さん実際会ってないの><。	受け入れない
28	JF08	<<笑いながら>嘘>>、超<いい人なの><。	
29	JF07	<バイト、バイトは>>2ヶ月やってるんだけど(うん、うん)、「人名 1」さん結構上の人じゃない(うんうん)、だから、実際会ってなくて(うん)、だから、&,、	
30	JF07	本当に、うん、申し訳ないんだけど、&,、	
31	JF07	「JF08 愛称」から言ってもらえたらなと思って。	
32	JF08	えー、でもさ、まだやって2ヶ月じゃん。	
33	JF07	うん。	
ライン番号 34~44 省略			
45	JF08	え、もしさ、何か、じゃあ“一人今急に足りなくなったら困るんだけど”とか(うん)言われたらさ(うんうん)、誰かバイト探してる子とかいそう?。	
46	JF07	あーじゃ、ちょっと、じゃ、そういう子見付けるわ。	
47	JF08	うん。	
48	JF07	同じクラスの子とかに聞いてみる。	
49	JF07	何か、うんバイト探している子結構何人もいたから(うん)、私より出来のいい子いっぱいいるし、[声が段々小さくなる]そういう子紹介したら大丈夫かな…。	
50	JF08	うん、「人名 1」とこの店が悪いわけではないんだよね><。	
51	JF07	<うんうん>>、「人名 1」とこの店はすごいいい、雰囲気いいし(うん)、いやな客とかも来ないから、すごい好きなんだけど、&,、	核談話 (直接的に受け入れる)
52	JF07	やっぱり家から近いし(うん)、時給もいいから(うん)、&,、	
53	JF07	うんー、ごめんね。	
54	JF08	じゃ、ま、時給のことは言わないで(うん)、その「JF07 名」のお母さんが家から遠いと夜遅いと不安だからみたい(うんうん)感じで辞められたみたい(うん)感じ(うん)一応話してみる。 ← 直接的に受け入れる	
55	JF07	ごめんね(うん)、&,、	
56	JF07	何かちょっと(うん)嘘とか付かせちゃって><。	

<会話例 5-8>を見ると、「前置き談話」のやりとりから会話をスタートし、ライン番号 10 から「本当悪いんだけど」(ライン番号 11 と 16)と謝罪しながら状況を説明している JF07 の発話と事態を確認している JF08 の発話のやりとりが行われる「核談話」が現れる。その後、具体的な情報を求めている JF08 と新しく見付けたバイト先に関する具体的な情報を説明している JF07 の「交渉談話」のやりとりが行われるが、JF08 は、「うーん…。」(ライン番号 24)と戸惑う様子を見せながら間接的に受け入れない意を示している。しかし、JF07 は、「ごめん」、「申し訳ない」という「謝罪定型表現」を用いて謝罪はしているが、JF08 の協力まで求めながら辞めたい意向を伝達しており、ここまでは、特に、明示的に受け入れない発話は控えていた JF08 もライン番号 26 で、「えー[↑]、何か結構[強調するように]><笑い>

「人名 1」さんに、[泣き声みたいな感じで]うーん、頼んだんだよねー。」と自分の苦勞を強調しながら受け入れることはできない意を述べている。その後、「交渉談話」のやりとりが行われてから、ライン番号 45 で、JF08 は代案を提示し問題を解決しようとする働きを行い、JF07 も積極的に問題を解決するため協力することを示しながら、再度、理解を求めている。すると、JF08 は、「じゃ、ま、時給のことは言わないで(うん)、その「JF07 名」のお母さんが家から遠いと夜遅いと不安だからみたいな(うんうん)感じで辞められたみたいな感じで(うん)一応話してみる。」(ライン番号 54)と、直接的に受け入れることを示し、JF07 は、不愉快な状況を引き起こしてしまったことに対する責任を認めながら「ごめん」と謝罪している。

「受け入れる謝罪談話」は、日本語母語話者男女共に、謝罪される側が、謝罪する側の立場を少しでも理解しようとする、つまり、聞き手のポジティブ・フェイスに向けられた配慮行動であるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが、謝罪場面にも関わらず、用いられる傾向があるのではないかと考えられる。ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー1 である聞き手(の関心、欲求、必要、所有物)に注意・注目するストラテジーが働き、紹介してもらったバイトを辞めて他のバイト先に行きたがる謝罪する側の欲求に注目しているため、互いのやりとりで、直接的に受け入れない応答と間接的に受け入れない応答を共に用いながら、段々受け入れる方向で働きかけているのではないかと考えられる。しかし、ここで重要なことは、謝罪する側が、謝罪される側のネガティブ・フェイスを侵害してしまったことに対する、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーである「謝罪」を用いることが前提であるという点であろう。「受け入れる謝罪談話」は、「謝罪定型表現」を用いる「核談話」が多く現れるという特徴が、日本語男女母語話者で共通的に見られ、「核談話」が現れることを前提に、友人関係というポジティブ・フェイスが働きやすい利点を利用し、自分の意向を詳細に説明する姿勢が受け入れるという結果を引き起こしていたのではないかと推測される。

以下では「受け入れない謝罪談話」のやりとりを日本語男女母語話者の会話例を用いて説明する。

2) 「受け入れない謝罪談話」の日本語母語話者の相互作用の特徴

以下の〈会話例 5-9〉は、日本語男性の「受け入れない謝罪談話」の会話例である。

〈会話例 5-9〉負担度が重い場合の日本語男性母語話者の謝罪談話の相互作用の特徴

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
1	JM07	あのうさ、この前、紹介してもらったバイトなんだけどさ(お)、&,、	交渉談話 (直接的に受
2	JM07	ちょっとなんか、あんまり好きじゃない<2 人で笑い>。	
3	JM07	なんか、ちょっと状況が###うんー。	
4	JM08	何が、何が[↑]。	

5	JM07	なんか、先輩があんまり好きじゃない人いてさ、人間関係が、ちょっと…。	け入れない)	
6	JM08	人間関係。		
7	JM07	ね、なんか、その割に給料低く、いいよね、あのう、うんー。		
8	JM08	やっぱ、あれだよ、社会にはね、いやな人いっぱいいるからね。		
9	JM07	そうなんだけどさ、ちょ><【。		
10	JM08	】<皆が><いい人ついうバイトはないんじゃない[↑]。		
11	JM07	そうなんだけど、うん、まあ、紹介してもらって、そうなんだけどさ(く笑い)。		
12	JM07	でも、ちょっと《少し間》この前、今日《少し間》ちょっと、ネット見てたら、(うん)、ちょっと、もっと高級なバイトを見付けてしまって…(く笑い)。		
13	JM08	それ無責任だろう。 ← 直接的に受け入れない		
ライン番号 14~25 省略				
26	JM07	本当紹介してもらって&,,		核談話 (直接的に受け入れない)
27	JM07	申し訳ないけど…。		
28	JM08	まだ2ヶ月だからさ、もうちょっとやってみたら?? ← 直接的に受け入れない		
29	JM07	いやだく2人で笑い。		
30	JM07	早くもってお金がほしい。		
31	JM07	だって、ねえ、なんかさ、本当申し訳ないけど…。		
32	JM07	《沈黙 2 秒》うんー。		
33	JM08	《少し間》でも、そんな簡単に…。	交渉談話 (直接的に受け入れない)	
34	JM08	店側もね、<“いいよ、辞めていいよ”><,,		
35	JM07	<まあ、そうなんだけどね><{}		
36	JM08	になるっかどうかは[↑]、(まあ)分かんないからね。		
37	JM07	確かにそうなんだけど。		
38	JM07	まあやっぱりちょ<く笑い>, あんまりちょつといやな、続けなくから。		
39	JM08	A さんもー、めっちゃ期待してたよ。		
40	JM07	《少し間》うんー(く笑い)。		
41	JM07	給料ーが一ね…。		
42	JM07	《少し間》条、条件面にはかなわない。		
43	JM08	学生だからさ《少し間》本業が不要で(うん)、バイトはあくまでもおまけなんだからさ,,		
44	JM07	うん。		
45	JM08	金、金、しちやだめでしょう。 ← 直接的に受け入れない		
ライン番号 46~58 省略				
59	JM07	ちょっと本当申し訳ないけど、ちょっと。		
60	JM07	うん、まあ、そこらへん、そっちの人間関係がごたごたしちゃうかもしれないけ		

		ど、バイトが【】。	核談話 (直接的に受け入れない)
61	JM08	【】えっ、具体的に、どういう人がいいの。	
62	JM07	わかんないけど、ちょっと…。	
63	JM08	ただ自分に合わないって。	
64	JM07	うん。	
65	JM07	《沈黙2秒》まあ、申し訳ないけどく笑い。	
66	JM08	2ヶ月で辞めたら、他の所も持たないよ。 ←直接的に受け入れない	
67	JM07	やあ、これやっぱり条件面の問題だから(く笑い)。	
68	JM07	うーん、ちょっと申し訳ない。	
69	JM08	多分これで辞めたら、次もすぐ辞めると思うな。 ←直接的に受け入れない	
70	JM07	まあ、そしたら、それはそれでしょうがない。	
71	JM07	あー本当。	

この会話をみると、「前置き談話」なしで、直ちに、「交渉談話」のやりとりから会話がスタートしているが、JM07 は、紹介してもらったバイト先を辞めたい意向を伝達する際、人間関係や時給の問題など否定的な理由を挙げており、これを受けて、JM08 は、「それ無責任だろう。」(ライン番号 13)と、直接的に受け入れない意を示している。そのようなやりとりが行われてから、ライン番号 26 から 32 にかけて、JM07 は、「申し訳ない」と謝罪はしているが、受け入れる意は示さず継続することを求めている JM08 の発話に対して、「いやだ。」(ライン番号 29)と若干無礼そうで、冗談交じりの発話をしている。その後、再度、「交渉談話」のやりとりが行われているが、JM08 は、JM07 の意向を変更させるための働きを積極的に行っており、JM07 は、JM08 の発話に対して共感しているような発話はしているが、自分の意向は変更せず、継続し、理解を求めている。ライン番号 59 から「ちょっと本当申し訳ないけど、ちょっと。」と「核談話」のやりとりが行われ、JM08 は、「2ヶ月で辞めたら、他の所も持たないよ。」(ライン番号 66)と「多分これで辞めたら、次もすぐ辞めると思うな。」(ライン番号 69)と明示的に受け入れない意を示しているが、JM07 は、「まあ、そしたら、それはそれでしょうがない。」(ライン番号 70)と最後までバイトを変更したい自分の意向を諦めていない。

次は、日本語女性の「受け入れない謝罪談話」の会話例である。

<会話例 5-10> 負担度が重い場合の日本語女性母語話者の謝罪談話の相互作用の特徴

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
1	JF09	あのさ、バイト紹介してもらったじゃん。	前置き談話
2	JF10	うんうんうん。	
3	JF09	《少し間》だけど、あのせっかく紹介してもらったんだけどさ(うん)、&,、	

4	JF09	その2ヶ月やって(うん)、で新聞見たらさ(うん)、あのちょっと時給がいい<笑い> >バイトがあって,,	交渉談話 (直接的に受け入れない)
5	JF10	まじで<笑い>。	
6	JF09	そっちのほうがいいかなと思ってさ、変えたいんだけど、&,,	
7	JF09	どうだ?、<いいかな><{>。	
8	JF10	<んー、え、でも、まだ>>(うん)、2ヶ月しかやってないし(うんうん)、&,,	
9	JF10	もうちょっと続けたらなんかもっとこう良いことってうかあるんじゃないかな ><{>。	
10	JF09	<あるかね>>{>、でもね、2ヶ月続けてみて(うん)、やっぱ時給低いと結構ほら (<笑い>)、お金がね、入らなくて。	
ライン番号 11~28 省略			
29	JF09	】<でも>>{>、週2、でもこっちな、こっちな(うん)、週2でもうちよ、100円ぐらい 時給が違うんだよね=。	
30	JF10	=100円でしょ<笑い>【。	
31	JF09	】100円、100円大きいよでも<笑い>、5時間働けば500円よ。	
32	JF10	500円、えーでも週2回で500円と500円で1000円でしょう。	
33	JF09	うん。	
34	JF10	うん、1000円は、ほら、月に2回雑誌を我慢すればなんとかなるよ<2人笑い> >。	
35	JF09	<笑いながら>雑誌買っちゃうから、雑誌買っちゃうから。	
ライン番号 36~52 省略			
53	JF10	そうかな、「JF09名」ちゃん接客業やられたら萌えなんだけどなく<2人笑い>。	
54	JF09	<笑いながら>萌えかよ、それはまた分からない要素が来たね<笑い>、萌 え、萌えは要らないよ私は。	
55	JF10	えー、「JF09名」ちゃんに”ご注文何しますか”とか言われたら<笑い>、なん かこうキュンと来る感じだけだな。	
56	JF09	うんうん、じゃあちょっと考える、考える、考える?。 ← 意向変更	
57	JF10	絶対考えた方がいいって。	
58	JF09	うん、分かった、ちょっと考える。 ← 意向変更	
59	JF10	うん。	

<会話例 5-10>は、「前置き談話」のやりとりから会話がスタートし、ライン番号 3 から本格的な「交渉談話」のやりとりが行われている。JF09 は、より良い条件の新しいバイトが見付かったので、紹介してもらったバイトを辞めたい意向を伝達し、JF10 は、JF09 の意向を変えさせようとバイト先についての肯定的な考え方を述べている。しかし、JF09 は、

明確な「謝罪定型表現」を用いず、継続し、状況を説明しながら、自分の意向のみを伝達し、これを受けて、JF10は、「500円、えーでも週2回で500円と500円で1000円でしょう。」(ライン番号32)、「うん、1000円は、ほら、月に2回雑誌を我慢すればなんとかなるよく2人笑い。」(ライン番号34)と、親しい友達関係の利点である相手に対する詳細な情報を利用し、JF09の気持ちをあまり損なわず、問題を解決しようとしている。更に、「そうかな、「JF09名」ちゃん接客業やられたら萌えなんだけどなく2人笑い。」(ライン番号53)、「えー、「JF09名」ちゃんに“ご注文何しますか”とか言われたら(く笑い)、なんかこうキュンと来る感じだけだな。」(ライン番号55)と、少し冗談交じりの発話で、直接に相手を非難せず、親しげに相手を説得する様子で問題を解決しようとする。すると、結局、JF09は「うんうん、じゃあちよつと考える、考える、考える?。」(ライン番号56)と、自分の意向を変更する発話をし、会話が収束に入ることになる。

「受け入れない謝罪談話」は、「受け入れる謝罪談話」より日本語母語話者男女共に、オフ・レコード・ストラテジーが多用される傾向があるのではないかと考えられる。「オフ・レコード・ストラテジー4の控えめに言う」、「オフ・レコード・ストラテジー8の皮肉を言う」、「オフ・レコード・ストラテジー11の曖昧に表現する」が用いられていると考えられる。謝罪される側が、謝罪する側の立場を理解していることはあまり示さず、これらのストラテジーを多用しているため、結局、謝罪する側が自分の意向を変更してしまう結果を引き起こしているのではないかと考えられる。しかし、ここで重要なことは、謝罪する側が、謝罪される側のネガティブ・フェイスを侵害してしまったことに対する、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーである「謝罪」を用いることが前提である。「受け入れない謝罪談話」は、明確な「謝罪定型表現」を含む「核談話」が、「受け入れる謝罪談話」よりは、あまり現れない特徴が見られ、特に、「交渉談話」から会話がスタートし、そのやりとりが長く続けられる傾向も見られた。更に、友人関係という立場を利用しすぎず、若干無礼そうな印象を与えるやりとりも、「受け入れる謝罪談話」より多く現れる傾向もあると考えられた。また、ここで、注目したいのは、日本語女性の「受け入れない謝罪談話」のやりとりであるが、8会話中4会話には、「核談話」は一回も現れておらず、謝罪される側も問題解決のための働きを積極的に行っている共通性がある。また、残りの4会話には、「核談話」もかなり現れ、更に、謝罪される側が間接的に受け入れないことを示している共通性があるにも関わらず、受け入れないことで会話は終了される。これらの現象から考えると、日本語女性は、日本語男性より、より深刻な謝罪場面では、寧ろ、「核談話」が現れない傾向があるのではないかと推測される。

続いて、負担度が重い場合の韓国語母語話者の謝罪談話の分析結果について考察する。

5.5.2 負担度が重い場合の韓国語母語話者における謝罪談話の分析結果及び考察

本節では、韓国語母語話者の謝罪談話の展開の類似点や相違点等を分析し、その構造の特徴を述べる。最後に、これらの特徴を、会話例を通して考察していく。

5.5.2.1 負担度が重い場合の韓国語母語話者における謝罪談話の展開とその構造の特徴

本節では、韓国語母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開とその構造の特徴を述べる。その後、韓国語男性と韓国語女性の謝罪談話の展開とその構造の特徴の類似点や相違点を検討し、考察を行う。

以下では、韓国語男性の謝罪談話を構成する各談話の展開を表 5-13 に示す。

表 5-13 負担度が重い場合の韓国語男性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開

会話番号	謝罪談話を構成する各談話の展開
★韓男会話 1	交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れない)
韓男会話 2	前置き談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
韓男会話 3	前置き談話 ⇒ <u>交渉談話(間接的に受け入れない)</u> ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
韓男会話 4	挿入談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
★韓男会話 5	前置き談話 ⇒ <u>交渉談話(間接的に受け入れない)</u> ⇒ 核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 挿入談話
★韓男会話 6	挿入談話 ⇒ 前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない)
韓男会話 7	前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ <u>交渉談話(間接的に受け入れ)</u> ⇒ 核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
★韓男会話 8	前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない)
韓男会話 9	前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
韓男会話 10	前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 挿入談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 挿入談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 後続関連談話 ⇒ 挿入談話
★韓男会話 11	前置き談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れない)
韓男会話 12	交渉談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ)
韓男会話 13	交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ <u>交渉談話(間接的に受け入れ)</u> ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)

	⇒ 挿入談話 ⇒ 核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
韓男会話 14	挿入談話 ⇒ 前置き談話 ⇒ 交渉談話(間接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れ)
韓男会話 15	前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
★韓男会話 16	交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない)

表 5-13 を見ると、〈会話 2、3、5、7、8、9、10、11、15〉の 9 会話は「前置き談話」、〈会話 1、12、13、16〉の 4 会話は「交渉談話」、〈会話 4、6、14〉の 3 会話は「挿入談話」からスタートし、「核談話」からの始まりは現れず、主に「前置き談話」を用いて会話をスタートしている。謝罪内容が受け入れられたのは、〈会話 2、3、4、7、9、10、12、13、14、15〉で、16 会話中 10 会話(63%)であるが、受け入れられなかったのは、〈会話 1、5、6、8、11、16〉であり、16 会話中 6 会話(37%)である。

負担度が重い謝罪場面において、謝罪内容が受け入れられた謝罪談話の展開は 1 つの類型しか現れていない。〈会話 7、13、14、15〉のように、「交渉談話」のやりとりが行われても受け入れず、「核談話」が現れてもやはり受け入れず、再度、現れる「交渉談話」のやりとりで結局受け入れられ、会話が収束する構造である。〈会話 15〉は、その後、「核談話」で再度受け入れる意を示し、〈会話 7、13〉は、その後にも、「核談話」が 3 回も繰り返されながら受け入れる意を示されてから会話が終了している。これらの 4 会話以外は、類型が見られなかった。〈会話 12〉は、最初に現れる「交渉談話」で受け入れる意を示し会話が収束され、その後、「核談話」で再度受け入れることを示す構造である。〈会話 2〉は、「核談話」のやりとりが行われるが受け入れず、次の「交渉談話」で受け入れることで収束し、再度、現れる「核談話」のやりとりが行われてから会話は終了している。〈会話 9〉は、「交渉談話」のやりとりが行われるが受け入れず、次の「核談話」で受け入れる意を示す構造である。〈会話 10〉は、「核談話」のやりとりは現れず、「交渉談話」や「挿入談話」や「後続関連談話」のやりとりで会話が収束する構造であり、〈会話 4〉は、「核談話」と「交渉談話」のやりとりが行われるが受け入れず、2 番目に現れる「核談話」で受け入れる意を示し、会話が収束される構造である。〈会話 3〉は、「交渉談話」のやりとりが行われるが受け入れず、「核談話」のやりとりが行われるがやはり受け入れず、再度、現れた「交渉談話」でも受け入れず、2 番目に現れる「核談話」のやりとりで謝罪される側が受け入れる意を示して会話は収束するが、その後にも、「核談話」のやりとりが現れてから会話は終了する。〈会話 12〉以外の会話は、簡単に受け入れることができず、謝罪される側は受け入れない意を示し、謝罪する側も理解を求める働きを行っていた。

謝罪内容が受け入れられなかった謝罪談話の展開は 2 つの類型があると考えられる。まず、〈会話 1、6、16〉のように、「交渉談話」のやりとりが行われるが、受け入れず、その

後、「核談話」のやりとりが行われても最後まで受け入れないことで会話が収束する構造である。次に、＜会話 5、8＞のように、「交渉談話」のやりとりが行われるが受け入れず、その後、「核談話」や「交渉談話」のやりとりが行われても最後まで受け入れないことで会話が収束する構造である。＜会話 11＞は、「核談話」のやりとりが行われるが受け入れる意を最後まで示していないので、結局謝罪する側が自分の意向を変更してしまうことで会話が終了する構造である。韓国語男性の受け入れる謝罪談話の各談話の平均展開の数は、約 6 回であり、受け入れない謝罪談話の各談話の平均展開の数は約 3 回であり、受け入れる謝罪談話は、受け入れない謝罪談話より「核談話」が多く現れ、更に、各談話の展開も多く現れている。その反面、受け入れない謝罪談話は、受け入れる謝罪談話より「核談話」の出現が少なく、さらに、継続し「交渉談話」のみのやりとりが行われており、このようなやりとりが「受け入れないという結果」を引き起こしているのではないかと推測される。

次に、「直接的あるいは間接的に受け入れる、受け入れない」の観点から考えると、受け入れる、受け入れない意を直接的のみ表す会話は＜会話 1、2、4、8、9、10、11、12、15＞であり、この中で、＜会話 1、8、11＞は受け入れられなかった会話であるが、＜会話 2、4、9、10、12、15＞は、受け入れられた会話である。つまり、謝罪される側が自分の不満な気持ちを直接的に表したり、積極的に問題を解決するための働きかけをしても、受け入れるか、受け入れないかには大きな影響を与えていないと言えるだろう。また、受け入れられた会話中で、＜会話 3、7、13＞は、最初は直接的に受け入れない意を示していたが、次は、間接的に受け入れる意を示す会話であり、受け入れられなかった会話中で、＜会話 6、16＞は、最初は直接的に受け入れない意を示していたが、次は、間接的に受け入れない意を示す会話である。韓国語男性の特徴は、「核談話」の有無と、「直接的あるいは間接的な反応」の有無が、さほど影響を与えていないのではないかと考えられる。無論、受け入れない謝罪談話で、「核談話」の出現が少なかったが、受け入れる謝罪談話に比べ大きな差は現れていなかった。韓国語男性の謝罪する側は、自分の意向を変更する傾向はあまり見られず、繰り返される「交渉談話」のやりとりで貫徹させようとする働きかけを積極的に行っており、謝罪される側も最初は直接的に受け入れない意を示していたが、仲間意識の作用により、相手の意向を受け入れてしまう傾向があるのではないかと考えられる。続いて、韓国語女性の謝罪談話を成す各談話の展開を表 5-14 に示す。

表 5-14 負担度が重い場合の韓国語女性母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開

会話番号	謝罪談話を構成する各談話の展開
韓女会話 1	交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話 (直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
韓女会話 2	前置き談話 ⇒ 挿入談話 ⇒ 前置き談話 ⇒ 交渉談話(間接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れ) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れ)
韓女会話 3	挿入談話 ⇒ 前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れ)

	⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
韓女会話 4	前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
韓女会話 5	核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話 (直接的に受け入れ)
★韓女会話 6	核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話 (直接的に受け入れない)
韓女会話 7	挿入談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話 (直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(間接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
韓女会話 8	前置き談話 ⇒ 挿入談話 ⇒ 前置き談話 ⇒ 交渉談話 (直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
韓女会話 9	交渉談話(直接的に受け入れ)
韓女会話 10	交渉談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
★韓女会話 11	挿入談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない)
韓女会話 12	前置き談話 ⇒ 交渉談話 (間接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話 ⇒ 後続関連談話(直接的に受け入れ)
韓女会話 13	前置き談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話-1 ⇒ 挿入談話 ⇒ 交渉談話-2(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
韓女会話 14	前置き談話 ⇒ 交渉談話 (間接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ)
韓女会話 15	挿入談話 ⇒ 前置き談話 ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れない) ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れない) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 核談話(直接的に受け入れ) ⇒ 挿入談話
韓女会話 16	前置き談話 ⇒ 交渉談話(直接的に受け入れ)

表 5-14 を見ると、韓国語女性の会話は、〈会話 2、4、8、12、13、14、16〉の 7 会話は「前置き談話」、〈会話 1、9、10〉の 3 会話は「交渉談話」、〈会話 5、6〉の 2 会話は「核談話」、〈会話 3、7、11、15〉の 4 会話は「挿入談話」からスタートしており、「前置き談話」からの始まりが多いものの、バラツキがあると考えられる。この中で、受け入れられたのは、〈会話 1、2、3、4、5、7、8、9、10、12、13、14、15、16〉で、16 会話中 14 会話(88%)である。これに対し、受け入れられなかったのは、〈会話 6、11〉であり、16 会話中 2 会話(12%)で、受け入れられた会話が圧倒的に多いのがわかる。

負担度が重い謝罪場面において、謝罪内容が受け入れられた謝罪談話の展開は 3 つの類型があると考えられる。まず、〈会話 9、16〉は、最初の「交渉談話」のやりとりで謝罪される側が受け入れる意を示し会話が収束する構造であるが、この構造は「核談話」が現れていない特徴が見られる。〈会話 3、10、14〉は、最初の「交渉談話」のやりとりで謝罪されるが受け入れる意を示し会話が収束し、「核談話」で再度受け入れる意を示す構造である。

これらの類型は、受け入れる「交渉談話」が現れる前に「核談話」が現れていないにも関わらず、簡単に、謝罪される側が受け入れる意を示しているが、第 6 章で詳細に説明するが、これらの類型は、謝罪する側が代案を提示したりする等、積極的に自分の過失を修復しようとする働きかけを行っているものが多い。次は、＜会話 2、4、8、12＞のように、「交渉談話」のやりとりが行われるが受け入れず、次の「核談話」のやりとりで受け入れる意を示し会話が収束される構造であるが、＜会話 2＞は、再度、「交渉談話」で受け入れる意を示している。最後に、＜会話 5、13＞は、「核談話」では受け入れず、その後の「交渉談話」で受け入れる意を示し、会話は収束するが、＜会話 13＞は、再度、「核談話」で受け入れる意を示している。

これらの会話以外は類型が見られないが、＜会話 1＞は、「交渉談話」と「核談話」のやりとりが行われるが受け入れず、次の「交渉談話」で受け入れる意を示し会話が収束されるが、その後、再度、「核談話」で受け入れる意を繰り返し示している。＜会話 7＞と＜会話 15＞は、韓国語女性の謝罪談話で複雑な展開を見せているが、＜会話 7＞は、「交渉談話」のやりとりが 2 回、「核談話」のやりとりが 2 回繰り返し行われても、受け入れる意が示されず、最後に、現れる「交渉談話」でようやく受け入れる意が示される展開であるが、その後、再度、「核談話」で受け入れる意を繰り返し示している。＜会話 15＞は、3 回連続現れる「核談話」でも受け入れる意を示さず、次の「交渉談話」でも受け入れる意を示しておらず、その後、現れる「核談話」で受け入れる展開であるが、その後、再度、「核談話」のやりとりで受け入れる意を繰り返し示している。

謝罪内容が受け入れられなかった謝罪談話は 2 会話しか現れていなかった。＜会話 11＞は、会話が終了するまで、「核談話」は一回も現れないまま、継続される「交渉談話」のやりとりのみ現れ、謝罪する側も自分の意向を変更せず、謝罪される側も受け入れず非難ばかり続ける状態で会話が結果なしで曖昧に終了してしまう。＜会話 6＞は、「核談話」のやりとりが行われるが受け入れず、その後、「交渉談話」のやりとりでも受け入れる意を示さないまま会話は終了している。韓国語女性は、受け入れる謝罪談話の各談話の平均展開の数は約 4.5 回であり、受け入れない謝罪談話の各談話の平均展開の数は約 2 回であり、受け入れる謝罪談話は、男性と同様に、受け入れない謝罪談話より「核談話」が多く現れ、更に、各談話の展開も多く現れている。その反面、受け入れない謝罪談話は、「核談話」も 1 回しか現れず、継続し「交渉談話」のみのやりとりが行われている。

次に、「直接的あるいは間接的に受け入れる、受け入れない」の観点から考えると、受け入れる、受け入れない意を直接的にのみ表す会話は＜会話 3、4、6、8、9、10、11、13、15、16＞であり、この中で、＜会話 6、11＞は受け入れられなかった会話であり、＜会話 3、4、8、9、10、13、15、16＞は、受け入れられた会話である。つまり、韓国語女性は、上記で説明したように、謝罪される側が自分の不満な気持ちを直接的に表したり、積極的に問題を解決するための働きかけをしても、謝罪する側が、代案を提示したりする働きかけをすることにより互いの交渉が成立する会話が多く現れていると考えられる。更に、受け入れ

られた会話の中で、〈会話 1、7〉は、最初は直接的に受け入れない意を示していたが、次は、間接的に受け入れない段階を経て、直接的に受け入れる意を示す会話であり、〈会話 2、5、12、14〉は、最初は間接的に受け入れない意を示していたが、直接的に受け入れることで会話が終了する会話である。韓国語女性の特徴は、韓国語男性と同様に、「核談話」の有無と「直接的あるいは間接的な反応」の有無が、さほど影響を与えていないのではないかと考えられるが、謝罪する側が代案を積極的に提示したりする等の働きかけを多くしていることから、そのプロセスは異なっていると考えられる。韓国語女性の謝罪する側は、自分が引き起こした不愉快な状況を自ら解決するための働きを積極的に行ない、更に、友人関係という利点を最大に利用しながら、自分の意向を貫徹する傾向がある。謝罪される側も、解決の見通しが見えると、受け入れることで会話を収束する傾向が強いと考えられる。

ここで、負担度が重い謝罪場面における韓国語男性と韓国語女性の謝罪談話の展開とその構造の特徴を比較すると、まず、男女により差は若干あるものの、「前置き談話」、「交渉談話」、「挿入談話」の何れかで会話がスタートしており、女性は「核談話」からのスタートも現れていた。また、「核談話」、「交渉談話」がより頻繁に現れるのが受け入れる可能性を高める効果があるのではないかと考えられる。一方、「核談話」なしで、直ちに、「交渉談話」から始まり、「交渉談話」が長く続けるのは、男女差はあるものの、「受け入れない謝罪談話」を高めることになるのではないかと推測される。

次に、謝罪談話を構成する各談話の展開の類型から考えると、受け入れる謝罪談話の共通的な構造は、男女共に、①最初の「交渉談話」で受け入れる構造が、韓国語男性 1 会話、韓国語女性 3 会話、②「核談話」を経て「交渉談話」で受け入れる構造が、2 会話ずつ、③「交渉談話」を経て「核談話」で受け入れる構造が、韓国語男性 1 会話、韓国語女性 3 会話、④「交渉談話」から「核談話」を経て、「交渉談話」で受け入れる構造が、1 会話ずつ現れていた。受け入れない謝罪談話の展開では、共通的な構造が見られなかった。

最後に、負担度が重い謝罪場面では、謝罪する側の謝罪に対して、謝罪される側が明示的かつ直接的に受け入れる、あるいは、受け入れない意を示すことが、男女共に多く現れていた。一方、非明示的かつ間接的に受け入れる、あるいは、受け入れない意を表す応答も直接的に受け入れる会話と共に多く現れていた。しかし、直接的あるいは間接的に受け入れるか、受け入れないかには大きな影響は与えていないと考えられる。

次の節では、韓国語母語話者における謝罪談話の相互作用の特徴を実際の会話例を通して検討してみる。

5.5.2.2 負担度が重い場合の韓国語母語話者における謝罪談話の相互作用の特徴

本節では、上記の結果を踏まえて、謝罪談話を構成する各談話の展開において、「受け入れる謝罪談話」と「受け入れない謝罪談話」という観点をを用いて韓国語男性と韓国語女性の相互作用の特徴について述べる。

1) 「受け入れる謝罪談話」の韓国語母語話者の相互作用の特徴

以下の〈会話例 5-11〉は、韓国語男性の「受け入れる謝罪談話」の会話例である。

〈会話例 5-11〉負担度が重い場合の韓国語男性母語話者の謝罪談話の相互作用の特徴

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話	
3	KM27	어, 근데 너한테 얘기할 게 있는데…. (あ、俺、おまえに言いたいことがあってさ…。)	前置き談話	
4	KM28	무리한 부탁하지 말아라, 나한테.(無理なお願いは言わないで、俺に。)		
5	KM27	아, 무리한 부탁은 아니고.(あ、無理なお願いじゃなくて。)		
6	KM28	어.(うん。)		
7	KM27	《잠시간격》근데 어제 뭐지??, 요즘에 좀 일하다가 지금 너가 소개시켜준 데가 시-[↑] 시급도 좀 적고(응) 일하는 여건도 좀 안 좋은 것 같애=. (《少しの間》なんか昨日何だっけ??、最近働いていて、今おまえが紹介してくれたところが[↑]時給も少ないし(うん)仕事の条件もあまりよくなってさ=。)		交渉談話 (間接的に受け入れない)
8	KM27	=내가 이력, 뭐야, 알바몬 한번 들어가 봤거든. (=俺が、履歴、なんか、バイトモンを見てみたら。)		
9	KM28	어<웃음>.(うん<笑い>。)		
10	KM27	좀더 괜찮은 데가 있는거야[↑]. (結構いいところがあってさ[↑]。)		
11	KM28	어딘데?.(どこ?)		
12	KM27	아니, 지금 하는 거랑 비슷한데-, 시급도 훨씬 좋고-, 일하는 환경도 괜찮더라고.(いや、今やっているとことそんな変わらないけど-, 時給も高いし、仕事の環境も良くてさ。)		
13	KM28	음-.(うん-。)		
14	KM27	거기서 할려고 하는데 &, (そこでやろうとするけど &,)	核談話 (直接的に受け入れない)	
15	KM27	너한테 좀 미안하지, &, (おまえには申し訳なくて, &,)		
16	KM27	아마 니가 소개시켜줬으니까…. (たぶんおまえが紹介してくれたからさ…。)		
17	KM28	<끝부분 약간 웃으면서>미안하면 안하면 되-지-이[->]=. (《語尾は少し笑いながら》申し訳ないならやんなければいい-い[->]=。) ↑ 直接的に受け入れない		
18	KM27	=아, 근데 너가 생각해도 확실히 괜찮아[↑], 한번 볼래, 진짜 시급도 400 원이나 높고,, (=あ、だけどおまえが考えるより確実に良くてさ、[↑]、一回見てみる、マジで時給も 400 ウォンも高いし,,)		交渉談話 (直接的に受け入れる)
19	KM28	봐봐, 봐봐.(見せて、見せて。)		

20	KM27	어, 시급도 400 원이나 높고<웃음> 시간도 일하는 시간도 한시간이나 적다니까.(あ、時給も 400 ウォンも高いし<笑い>時間も働く時間も一時間も少ないからさ。)
21	KM28	<웃으면서>야-, 여기 사장님 조폭이야 근데. (<笑いながら>おまえー、あそこの社長、やくざだよ。)
22	KM27	사장님 조폭이라고?.(社長がやくざ?。)
23	KM28	어, 조심해야 돼.(うん、気をつけて。)
라인번호 24~34 省略		
35	KM28	그래??. 그럼 내가 한번 말은 하는데, 니가 그렇게 살면안되지<웃음>. (そう??. そしたら俺が一度言ってみるけど、おまえそれはいかんよ<笑い>。)
36	KM27	내가 그렇게 살면 안되는 건 나도 알아【】. (俺もいけないってことは俺も分かってる【】。)
37	KM28	【】장난, 장난이고, 니가 그렇게 좋은, 내가 봐도 좋네, 거기 조건이=. (【】冗談、冗談だよ、おまえがあんなにいい、俺が見てもいいね、あそこの条件。)
38	KM28	그러니까 거기 가는 걸로 하면 되겠네. (=だから、あそこに移ればいいと思う。) ← 直接的に受け入れる

この会話は、挨拶の「挿入談話」を経て、「前置き談話」のやりとりが行われ、少し間をおいてから、本格的な「交渉談話」のやりとりが行われる。「交渉談話」のやりとりで、KM27はバイトを辞めたい理由を説明し、新しいバイト先を見付けたことを述べており、KM28は事態を確認しているが、間接的に受け入れることができない意を示している。その後、ライン番号 14 から 17 にかけて、「核談話」のやりとりが行われるが、KM28は、「<끝부분 약간 웃으면서>미안하면 안하면 되-지-이[→]=.<語尾は少し笑いながら>申し訳ないならやんなければいー[→]=。)(ライン番号 17)と、受け入れないことを明示的に述べている。しかし、KM27は、自分の意向は変更せず、時給やバイト時間に関することを言及し、KM28に理解を求めている。しかし、KM28は、その意向を変更させるため、若干冗談交じりで「社長がやくざである」と言及し、KM27を驚かしている。これらのやりとり後に、KM28は、「**【】장난, 장난이고, 니가 그렇게 좋은, 내가 봐도 좋네, 거기 조건이=.**(**【】冗談、冗談だよ、おまえがあんなにいい、俺が見てもいいね、あそこの条件。)**그러니까 거기 가는 걸로 하면 되겠네.(=だから、あそこに移ればいいと思う。)(ライン番号 37 と 38)と、結局、明示的に受け入れることを示し、会話は収束している。次は、韓国語女性の「受け入れる謝罪談話」の会話例である。

<会話例 5-12> 負担度が重い場合の韓国語女性母語話者の謝罪談話の相互作用の特徴

라인 번호	話者	発話内容	謝罪談話
----------	----	------	------

1	KF27	나 지금 고민하고 있는게 있는데, 내가 그 소개를 받았잖아 아르바이트를. (あのさ、こないだ紹介してもらったバイトのことで悩んでるんだけど。)	前置き談話
2	KF28	응.(うん。)	
3	KF27	근데 언니한테 무리하게 부탁해서 했는데, &,, (今しているバイト無理言って紹介してもらったんだけど、&,,)	交渉談話 (間接的に受け入れる)
4	KF27	집에서 가깝기도 하고 (응) 시급도 더 좋고 그래서 거기로 옮기고 싶은데 &,,(近所に時給もいいバイトがあって、そっちに変えようかなと思ってるんだ、&,,)	
5	KF27	내가 좀 언니에게 힘들게 부탁해서 한건 아는데 &,, (でね、もし無礼にならないいんだったら、&,,)	
6	KF27	집에서 가까우니깐 차비도 덜 들고 그래서 옮겼으면 하는데…[목소리가 작아짐].(家から近いし交通費もかからないこっちにしたいなと思って…[声が段々小さくなる].)	
7	KF28	음-, 지금 하는데는 어떤데?(うむー、今働いているところはどのなの?。)	
8	KF28	많이 힘들거나 그런가?(結構きつかったりするの?。)	
ライン番号 9~21 省略			
22	KF28	《침묵 2 초》아-그럼 너 말고 아니면 다른 사람 소개시켜줄 수는 있어?.(《沈黙 2 秒》じゃ、他に代わりの人紹介することはできるの?。)	
23	KF27	나말고?=(私以外に?=。)	
24	KF28	=어, 너가 그만두면 자리가 비니깐 사람이 필요할 것 아니야. (=そう、あなたがやめたら代わりに働いてくれる人が必要になるじゃん。)	
25	KF27	음-그러면 내가 뭐 인터넷에서 올리던지 (응)주위사람한테 한번 물어보던지 그렇게 하면 될까?.(だったら、私がネットの掲示板に書き込むか、(うん)周りの人に聞いてみるよ、そうしたら大丈夫かな?。)	
26	KF27	그렇게 하면 내가(음-).(そうしたら私が(うん-).)	
27	KF28	그러면….(そうだね…。)	
28	KF27	그사람이 일 익을 때까지 내가 있어야 되려나? (新しい人が仕事に慣れるまで私がいた方がいいかな?。)	
29	KF28	음-그때동안만 너가 해주면 좋을 것 같은데… (うん、その間だけでも働いてくれたらありがたいかも…。)	
30	KF27	그럼 그 기간이 어느정도 돼지?(どれくらいいいたらいいの?。)	
31	KF28	근데 한 구하다가 못구하면 어쩔 수 없고, 내가 잘 말하는 수밖에 없는데, &,,(だけど、代わりの人が見つからなかったらそれはそれで仕方ないから、了解してくれるようお願いするしかないけど&,,)	

32	KF28	그래두 너가 다른 사람 구해지면 그러니깐 아는 사람 해서 《침묵 2초》그럼 좋을 것 같은데….(ただどあなたが他の人を探して、知り合いの《沈黙2秒》できれば代わりの人を見つけてくれたほうが…。) ↑ <u>間接的に受け入れる</u>	
33	KF27	음-그사람 구해주면(응) 그사람 일이 손에 익을 때까지 한 한 일주일 정도면 되려나?(そっか、人が見つかったらその人が慣れるまで1週間くらい手伝ったら大丈夫かな?)	
34	KF28	응 한 그정도?(うん、そのくらい?)	
35	KF27	그러면 내가 사람 최대한 빨리 구해보고 그 사람 일이 익을 때까지 한 일주일 그정도까지만 같이 일하고 그럼 나는 다른데로 옮기는 걸<로>< . (だったら私になるべく早く探してみるよ、そしてその人が慣れるまで1週間くらい引継ぎして私は他の所へ移ることに<して>< .)	
36	KF28	<아니면>< >나도 한번 주위사람 봐서…. (<なら>< >私も周りの人に聞いてみるわ…。)	
37	KF27	<웃으면서>고마워&,(<笑いながら>ありがとう&,)	核談話
38	KF27	<u>미안해 막.</u> (度々ごめんね。)	(直接的に
39	KF28	<u>아니야.</u> (いいよ。) ← <u>直接的に受け入れる</u>	受け入れる)

<会話例 5-12>をみると、「前置き談話」のやりとりから始まり、「交渉談話」に入るが、KF27は、KF28の恩恵を言及しながらバイト先を変えたい意向を伝達しており、KF28は、事態を確認している。これらのやりとりが行われてから、ライン番号 22 で、KF28は、「《침묵 2초》아-그럼 너 말고 아니면 다른 사람 소개시켜줄 수는 있어?.(《沈黙2秒》じゃ、他に代わりの人紹介することはできるの?)」と、問題になっている事柄を解決するための働きをしており、これを受け、KF27も、自分が引き起こしてしまった問題になっている事柄の解決のため、働くことを言及している。その後、KF28は、ライン番号 31 で、「근데 한 구하다가 못구하면 어쩔 수 없고, 내가 잘 말하는 수밖에 없는데, &, (ただど、代わりの人が見つからなかったらそれはそれで仕方ないから、了解してくれるようお願いするしかないけど &,)」と、KF27がバイトを辞められるため自分が協力することを言及し、間接的に受け入れることを示しており、KF27も、これから自分がどのように対応するかを言及し、会話は収束する。ここまでのやりとりでは、「核談話」が現れていなかったが、会話が全部収束した後、最後に、「核談話」が現れ、会話は終了している。

「受け入れる謝罪談話」は、韓国語男女母語話者共に、謝罪される側が、謝罪する側の立場を理解しようとする、つまり、聞き手のポジティブ・フェイスに向けられた配慮行動であるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが働いていると考えられる。特に、韓国語男性で、「友人関係」であることを強調する発話が多く現れている。つまり、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー4である集団内アイデンティティマーカ―を使用する傾向があ

り、韓国語女性では、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー10 である提案、約束を多用する傾向が見られる。更に、謝罪される側もポジティブ・ポライトネス・ストラテジー1 である聞き手(の関心、欲求、必要、所有物)に注意・注目するストラテジーを使用しており、謝罪する側と謝罪される側の両方が謝罪場面にも関わらず、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いる傾向があるのではないかと考えられる。更に、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーである「謝罪」をあまり用いていない段階でも、謝罪内容が成立される会話が現れることから考えると、負担度が重い謝罪場面においては、「核談話」の有無より、問題になっている事柄を解決するための働きかけに集中する傾向が、男女共に、あるのではないかと考えられる。

以下では「受け入れない謝罪談話」のやりとりを韓国語男女母語話者の会話例を用いて説明する。

2) 「受け入れない謝罪談話」の韓国語母語話者の相互作用の特徴

以下の〈会話例 5-13〉は、韓国語男性の「受け入れない謝罪談話」の会話例である。

〈会話例 5-13〉負担度が重い場合の韓国語男性母語話者の謝罪談話の相互作用の特徴

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
3	KM11	어-난, 좀, 니가 소개해준 아르바이트(응) 계속, 지금 계속하고 있는데(어) 지금, 너한테 할 얘기가 있는데 <지금>< .(<えー俺、ちょっと、おまえが紹介してくれたバイト(うん)ずっと、今続けてやってるけど(うん) 今、おまえに話したいことがあって <今>< .)>	前置き談話
4	KM12	<뭔데?>< .(<なに?>< .)>。	
5	KM11	내가 아르바이트 계속 이제 돈도 필요하고 해서(응) 아르바이트를 지금 계속 하고 있었는데,,(俺がバイトやってお金も必要だし(うん)バイト続けているけど,,)	交渉談話 (直接的に受け入れない)
6	KM12	응.(うん。)	
7	KM11	지금 알아보니까, 인터넷-에 알아보니까 좀더 좀 시급이랑 좀 일하는 조건이 괜찮은 데를 찾아서(어) 그쪽 아르바이트를 해야 될 것 같은데(응) 그것 때문에 너한테 얘기를 할려고 왔거든. (今調べてみたら、ネットで調べてみたら今よりいい時給で仕事の条件もいとこ見つけてさ(えっと) あっちのほうをやるうとして(えっと) それでおまえに言おうと思ってさ。)	
8	KM12	어-, 그거 좀 곤란한 얘긴데 그거.(あー、それはちょっと困るねそれ。) ↑ 直接的に受け入れない	
ライン番号 9~25 省略			

26	KM12	<너>{ } 지금 갑자기 그만둔다고 그러면 새로운 사람 구하기도 힘들고(응) 그래서…[목소리가 점점 작아짐]. (<おまえ>{ } 今急に辞めるっていても新人を見つけるのも大変だし(えっと) だから…[声がだんだん小さくなる].)	
27	KM11	아 좀 많이 이렇게 그 소개시켜준 그 가게가 좀 중요한??= (あ、ちょっと、結構、こう、紹介してくれた店が、ちょっと大事な??=。)	
28	KM12	=응-, 좀 약간 그런 느낌<이라서>{ }. (=まお、ちょっとそんな感じだから{ }。)	
29	KM11	<어->{ }그러면,, (<あー>{ }そしたら,,)	
30	KM12	좀 여유시간을 주면 모르겠는데 갑자기 그만둔다고 그러면(어) 이분도 곤란하고 소개시켜 준 나는 또 입장이 대개 난처해지니깐(어-)….(少し猶予があればいいけど急に辞めるつつつても(え) あの人も困るだろうし、紹介した俺の立場も困るからさ(え-)…。) ← 直接的に受け入れない	
31	KM12	《잠시간격》어떻게 해야 될지 모르겠네. (《少しの間》どうしたらいいか分からない。)	
32	KM11	그러면, 《잠시간격》그러면[↑] 내가 다시 그러면 알아보고서(응) 그러면 다시 한번 생각하는 쪽으로 해서 어- 좀-, 다시 한번 알아볼게, 내가.(そしたら, 《少しの間》そしたら[↑]俺がもう一度、そしたら調べてみて(うん) そしたらもう一度考え直す方向で えっと- ちょっと-, もう一度調べてみる,俺が。) ← 意向変更	
33	KM11	너한테 미안하다<웃음>, 「KM12 이름」아. (おまえにはすまない<笑い>, 「KM12 名前」=。)	
34	KM12	=아니 뭐-, 난, 난, 뭐 나한테 미안할 건 없는데,, (=いや、別に-,俺は、俺は、別に俺には誤らなくてもいいけど,,)	核談話 (間接的に 受け入れ ない)
35	KM11	어.(うん。)	
36	KM12	여러가지로 좀 복잡한 상황이 되니깐 이렇게 되면은,, (色々と複雑な状況になっちゃって、こうなると,,)	
37	KM11	어.(うん。)	
38	KM12	《잠시간격》그러면거지 뭐.(《少しの間》そういうことでさ。)	

この会話をみると、「前置き談話」のやりとりが行われてから、「交渉談話」に入るが、KM11は、条件がいい他のバイト先を見つけたことについて説明し、これを受け、KM12は、ライン番号8で、「어-, 그거 좀 곤란한 애긴데 그거.(あー、それはちょっと困るねそれ。)」と、「困る」という言葉を用いて明示的に受け入れない意を示している。すると、KM11は、より詳細に状況説明はしていたが、第3者との関係を確認するなど、若干戸惑っている様子を見せている。更に、KM12が、ライン番号30で、「좀 여유시간을 주면 모르겠는데

갑자기 그만둔다고 그러면(어) 이분도 곤란하고 소개시켜 준 나는 또 입장이 대개 난처해지니깐(어-)... (少し猶予があればいいけど急に辞めるつつつても(え)あの人も困るだろうし、紹介した俺の立場も困るからさ(え-)...)と、再度、「困る」、「立場」などの言葉を用いて、受け入れることができない意を言及しており、これを受け、結局、KM11は、「もう一度調べてみる」、「もう一度考え直す」と自分の意向を変更し、会話は収束する。ここまでのやりとりでは、「核談話」が現れていなかったが、会話が収束した後、最後に「核談話」が現れ、KM12は、間接的に受け入れることはできない意を示している。

次は、韓国語女性の「受け入れない謝罪談話」の会話例である。

<会話例 5-14> 負担度が重い場合の韓国語女性母語話者の謝罪談話の相互作用の特徴

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
4	KF21	어, 내가 알아봤는데, 영화관의 아르바이트는 시급이 훨씬 세단 말이야.(うん、私が調べてみたけど、映画館のバイトは時給がもっと高いんだよ。)	交渉談話 (直接的に受け入れない)
5	KF21	근데 (아-, 어), 여기보다 일도 좀 덜 힘들고, 조건도 진짜 좋단 말이야.(そして(あ-, うん)ここより仕事もちょっと楽そうだし、条件も本当いいんだから。)	
6	KF21	=영화도 공짜로 볼 수 있잖아, 아휴.(=映画もタダで見れるじゃない、ふう。)	
7	KF22	아-어.(あ-うん。)	
8	KF21	그래서 내가 아 이 알바 그냥 그만두고- 그냥 영화관으로 갈까? (それで私、あ、このバイトやめて映画館でバイトしちやおうかしら?)	
라인번호 9~32 省略			
33	KF21	<아 나【 >{<.(<あ、私【>{<。)	
34	KF22	】<그건 또>{> 어떻게 알았대 아 정말<둘이서 웃음>.]<それはまた>{> どうやって見つけたの、本当に<2人で笑い。)	
35	KF21	그니깐<웃음>,,(だから<笑い>,,)	
36	KF22	저번에 일 열심히 한다며, <웃음>> 계속 할거라며, 근데 왜-에? (前に仕事一所懸命にやるって言ってたじゃん、<笑う>)続けるって言ってたのに、どうして?) ← 直接的に受け入れない	
라인번호 37~58 省略			
59	KF22	아 모르겠다, 아휴- 진짜 어찌지?(あ、複雑、はあ、本当どうしよう?)	
60	KF21	그니깐 복잡하긴 한데...(だから複雑ではなるけど...)	
61	KF21	아, 근데, 만약에 너가 생각을 해봐(응). (あ、でも、もしもさ、あなたが考えてみて(うん)。)	
62	KF21	너가 알바를 열심히 하고 있어.(あなたが一所懸命にバイトをしている。)	
63	KF21	근데 여기는 좀 힘들고 돈이 안돼.(でもここは少し大変で時給が少ない。)	

ライン番号 64~66 省略		
67	KF22	또 그런데, 좀 내 생각도 좀 해주지...(それもそうだけど、私の事も考えてもらわないと…。) ← 直接的に受け入れない
69	KF21	<같은 입장에서 ### 해>{>}.(<同じ立場で###して>{>}。)
70	KF22	이거 언니(응) 하게 해 줄려고, 내가 되게 부탁 힘들게 했던 말이야, <정말>{>}.(<これお姉さん(うん)に紹介しようと思ってすっごくお願いしてやってもらったんだから<本当>{>}。)
71	KF21	<그지>{>}고 생했지?(<だよね>{>}苦労したよね?)
72	KF21	아-<고민이다>{>}.(<あ<迷っちゃう>{>}。)
73	KF22	<그만두면>{>}(응) 언니가 그만두면 아 나도 잘 모르겠어.<やめると>{>}(うん)お姉さんがやめると私もよくわからない。 ← 直接的に受け入れない
74	KF22	나도 아휴, 그 사람이랑 어떻게 될지도 모르겠고...(私も、あ、その人とうなるかもわからないし…。) ← 直接的に受け入れない
75	KF21	애매해?=(曖昧かしら?。)
76	KF22	=신용이 떨어지고 좀 그러잖아.(=信用が落ちたりするじゃない。) ↑ 直接的に受け入れない
77	KF21	맞아, 그럴 것 같긴 해.(そうね、そうだろうね。)
78	KF21	<아-어떻게하지>{>}...(<あ-、どうしよう>{>}...)
79	KF22	<잘 모르겠다>{>}.(<良く分からない>{>}。)

<会話例 5-14>は、「挿入談話」から会話がスタートし、「交渉談話」のやりとりが行われているが、KF21は、直ちに、自分が見付けた新しいバイト先に行くことを一方的に述べている。これを受け、KF22は、「저번에 일 열심히 한다며, (<웃음>)계속 할거라며, 근데 왜-에?.(前に仕事一所懸命にやるって言ってたじゃん、(<笑う>)続けるって言ってたのに、どうして?)」(ライン番号 36)と、直接的に受け入れることはできない意を示し、KF22の意向を変えさせようと非難をしたり問題解決のための働きをしたりする働きを積極的に行っている。しかし、KF21は、意向は変更せずに、辞めるべき理由を KF21の立場で考えて見ることを要求し、このような考え方は問題ではないことを強調しながら言及している。KF22は、KF21が辞めることになると自分の立場が大変なることを言及し、反対に、KF22の立場で考えて見ることを要求し、互いに自分の立場を理解してほしいと求めている。このような会話が終了するまで続いて、KF21は「<아-어떻게하지>{>}...(<あ-、どうしよう>{>}...)」(ライン番号 78)と、戸惑う様子で会話を終了し、KF22も「<잘 모르겠다>{>}.(<良く分からない>{>}。)」(ライン番号 79)と、自分も分からないと曖昧に言及し、辞められるのか、辞められないのかの結果なしで会話は終了してしまう。

「受け入れない謝罪談話」は、「受け入れる謝罪談話」より韓国語男女母語話者共に、より積極的に問題になっている事柄を解決するための働きかけが行われたり、謝罪される側

が最後まで一方的に受け入れないことのみ続けて示したりする会話で多く見られた。特に、韓国語男性では、謝罪する側が、謝罪される側のネガティブ・フェイスを侵害してしまったことに対する、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーである「謝罪」を用いても、謝罪される側の理解を求めることはできず、会話が終了する。更に、友人関係という立場を利用しすぎず、若干無礼そうな印象を与えるやりとりも、「受け入れる謝罪談話」より多く現れる傾向もあると考えられる。

5.6 負担度が重い場合の日韓母語話者における謝罪談話のまとめ

本節では、負担度が重い場合の日韓母語話者の謝罪談話の構造の分析を行ったが、それを明らかにするため、日韓母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開や構造、相互作用の特徴を談話レベルで考察を行った。負担度が重い謝罪場面として設定された「バイト場面」は、「謝罪される側から紹介してもらったアルバイト先を辞めたい謝罪する側と、そうすると困る立場に置かれる謝罪される側の関係」である。従って、謝罪される側が、謝罪する側の要望に応じるか応じないか、つまり、受け入れるか受け入れないかが謝罪談話の展開に現れる。

まず、負担度が重い謝罪場面では、日本語母語話者と韓国語女性は、「前置き談話」、「交渉談話」、「核談話」、「挿入談話」の何れかで始まっているが、韓国語男性の場合、「核談話」からの始まりは見られなかった。また、日韓母語話者共に、「核談話」のみならず「交渉談話」のやりとりが重要であり、「核談話」と「交渉談話」のやりとりによって、謝罪される側が謝罪内容を受け入れるか、受け入れないかが決定する傾向が見られた。負担度が重い場合には、「前置き談話」、「交渉談話」、「核談話」、「後続関連談話」、「挿入談話」の謝罪談話を構成する各談話全てが現れており、問題になっている事柄に集中しているため、日韓母語話者共に、「交渉談話」や「核談話」のやりとりが繰り返し現れるなど複雑なプロセスを経て会話が収束していた。また、日本語母語話者は、「後続関連談話」や「挿入談話」はあまり用いないという傾向が見られたが、韓国語母語話者は「挿入談話」もかなり用いていた。

次に、韓国語母語話者が日本語母語話者より、「前置き談話」を経て、最初に現れる談話は「交渉談話」の方が多く、会話が収束する際用いられる談話も「交渉談話」の方が多い特徴が見られた。つまり、韓国語母語話者の方が日本語母語話者より謝罪内容に焦点を置き、解決するための働きかけをより積極的に行っていると考えられた。一方、日本語母語話者の方は、謝罪場面で、「謝罪定型表現」を含む「核談話」が現れることに対し、肯定的な反応をしていると思われるような働きかけを見せていたが、「核談話」が現れず「交渉談話」のみ続いている会話は、受け入れられない場合が多かった。韓国語母語話者では、「核談話」の有無と謝罪される側の直接的あるいは間接的な反応がさほど大きな影響を与えていないと考えられるが、日本語母語話者では、「核談話」の有無と謝罪される側の直接的あるいは間接的な反応が多くの影響を与えていると考えられた。つまり、韓国語母語話者は、

「核談話」が現れなくても「交渉談話」のやりとりで解決できる見通しが見えると、受け入れる意を示す傾向がかなり現れていた。これに対し、日本語母語話者は、「核談話」が現れることを前提に「交渉談話」のやりとりで互いに解決のため働きかけているが、日本語女性は日本語男性より、直接的に受け入れないことを示す謝罪される側の応答に責められると自分の意向を変更する傾向が見られた。「核談話」は日本語母語話者でより多く用いられ、「交渉談話」も日本語母語話者で若干多く用いられているが、謝罪内容が受け入れる会話は、韓国語女性で一番多く現れ、2番目は日本語男性、3番目は韓国語男性、4番目は日本語女性の順であった。つまり、負担度が重い謝罪場面では、「核談話」や「交渉談話」を多く用いることのみならず、どのように「核談話」と「交渉談話」を用いているか、更に、謝罪する側や謝罪される側の姿勢、謝罪内容に関する負担の度合い、日韓社会におけるコミュニケーションのスタイル等、総合的に分析する必要があると考えられた。

続いて、負担度が重い場合には、「直接的あるいは間接的に受け入れる」、「直接的あるいは間接的に受け入れない」というより多様な現象が現れていた。謝罪する側が引き起こした不愉快な状況に対して「直接的に受け入れるか、受け入れないか」または、「間接的に受け入れるか、受け入れないか」を表す多様な応答を用いて反応しており、謝罪に対する応答の決まり文句的な表現はあまり用いていなかった。

最後に、負担度が重い謝罪場面では、日韓母語話者共に謝罪場面にも関わらず、「核談話」が現れない現象が起こり、「交渉談話」のやりとりのみで受け入れられた会話が、韓国母語話者の方では見られた。しかし、韓国語女性は、問題になっている事柄を解決するため、代案を提示するなどの働きかけをしていたが、韓国語男性の謝罪する側は、謝罪される側が責める段階で、「挿入談話」を入れて会話の流れを切り、最後まで自分の意向を説明する働きかけを積極的に行っており、結局、謝罪される側が受け入れることで会話が収束する展開であるため、受け入れるまでのプロセスは異なっていた。また、「交渉談話」のやりとりのみで受け入れられなかった会話は、日本語女性の会話で多く見られた。更に、韓国語母語話者より日本語母語話者の方が、受け入れる前までの「核談話」と「交渉談話」のやりとりが複雑であるが、韓国語母語話者の方が最後まで自分の意向を変更せず、貫徹させようとする働きを積極的に行っていた。

5.7 謝罪談話の構造に関するまとめ

本章では、「総合的会話分析」のアプローチに従い、日韓母語話者の謝罪談話を構成する各談話の展開や構造、相互作用の特徴を談話レベルで分析し考察を行った。分析においては、「謝罪談話」を「前置き談話」、「交渉談話」、「核談話」、「後続関連談話」、「挿入談話」に下位分類し、まず、グローバルな観点で負担度が軽い場合と負担度が重い場合の日韓男女母語話者における謝罪談話を構成する各談話を抽出し、更に、謝罪談話を構成する各談話の展開や構造の特徴を日韓対照の観点で全体的に分析し考察を行った。次に、よりローカルな観点で謝罪談話の展開や構造の分析した後、会話例を見ながら具体的な特徴を考

察した。

日韓母語話者における謝罪談話を比較すると、負担度が軽い場合には、日韓母語話者共に、「核談話」のやりとりで謝罪内容が割と簡単に受け入れられており、「後続関連談話」や「挿入談話」を多く用いるという類似性が見られたが、韓国語男性では、「核談話」が現れる前に、「交渉談話」のやりとりが行われる会話が半分を占めている特徴が見られた。謝罪談話を構成する各談話の展開で一番多く現れた構造は、日韓母語話者共に、「核談話」のみの構造、「核談話」と「核談話」の間に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れる構造、「核談話」の後に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れる構造であった。その反面、「核談話」が連続し現れる構造は日本語母語話者の方で多く現れ、「核談話」の後に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が連続し現れる構造は韓国語母語話者の方で若干多く現れていた。韓国語母語話者で、特に、男性で「挿入談話」で個人的な話をする傾向が伺われた。

負担度が軽い場合の日韓母語話者男女の特徴を見ると、日本語女性は、「核談話」を繰り返し用いる傾向が日本語男性より多く、「挿入談話」も日本語男性より多く用いるという特徴が窺え、日本語男性は、「核談話」のみで会話を終了する傾向が強かった。日本語男性は、相手のネガティブ・フェイスを侵害してしまった状況を回復させるため、「謝罪」を用いた談話を多用する傾向が日本語女性より強いが、日本語女性は、ネガティブ・ポライトネスの状況の中で、相手に近づきたい欲求が働くポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであると判断される「挿入談話」を用いて、互いに対人配慮行動を行う傾向が日本語男性より強いと考えられた。また、韓国語男性は、「核談話」が現れる前に、受け入れない「交渉談話」のやりとりが行われる傾向もあり、親しい友人関係では侵害された相手のネガティブ・フェイスを軽減するための働きかけをあまり行っていない傾向があるのではないかと考えられた。韓国語女性は、韓国語男性に比べ、「核談話」が多く用いられているものの、相手に過失がある場合には、直接的に不満な気持ちを表す傾向が強く、これらの傾向は韓国語男性でも多く見られた。

次に、負担度が重い場合には、日韓母語話者共に「前置き談話」、「交渉談話」、「核談話」、「後続関連談話」、「挿入談話」で構成される謝罪談話を用いており、謝罪内容が謝罪される側に受け入れられる場合と受け入れられない場合があることや「核談話」が現れない現象が起こる等、複雑で多様な展開や構造を見せていた。受け入れる場合の謝罪談話を構成する各談話の展開は、最初の段階で受け入れる構造や最初に現れる談話では受け入れない意を示しているが次の談話では受け入れる意を示している構造等、謝罪内容が割りと簡単に謝罪される側に受け入れている構造は、韓国語母語話者、特に、女性の方で多く現れていた。その反面、謝罪される側が受け入れない意を示しても、諦めずに自分の意向を貫徹するため働きかけを積極的に行っている展開が多く見られたが、特に、女性より男性の方で多く現れていた。受け入れない場合の謝罪談話を構成する各談話の展開は、受け入れる謝罪談話に比べ「核談話」を多く用いていない傾向があり、「前置き談話」後に、「交渉談話」

話」のやりとりが行われている会話が多く、更に、「交渉談話」が長く続く会話も多く見られた。

負担度が重い場合の日韓母語話者男女の特徴を見ると、日本語男性は、会話が受け入れられるまで、「核談話」や「交渉談話」を用いて繰り返し積極的に働きかける傾向があるが、日本語女性は直接的に受け入れないことを示す謝罪される側の応答に責められると自分の意向を変更する傾向が見られた。更に、日本語母語話者共に、謝罪する側が、謝罪される側のネガティブ・フェイスを侵害してしまったことに対して、「謝罪」を用いることが重要であり、「受け入れない謝罪談話」は、「受け入れる謝罪談話」よりオフ・レコード・ストラテジーが多用される傾向が強く現れた。また、韓国語男性は、会話が受け入れられるまで、「核談話」や「交渉談話」を用いて繰り返し積極的に働きかける傾向があるが、韓国語女性は、自分が引き起こした不愉快な状況を解決するため代案を提示するなどの解決策を積極的に行う傾向があった。「受け入れない謝罪談話」は、「受け入れる謝罪談話」より韓国語男女母語話者共に、より積極的に問題になっている事柄を解決するための働きかけが行われたり、謝罪される側が最後まで一方的に受け入れないことのみ続けて示したりする会話が多く見られた。

負担度が軽い場合には、「核談話」を多く用いる傾向や、繰り返し「核談話」を用いる傾向が日本語母語話者の方で多く見られたり、「交渉談話」を用いる傾向が韓国語男性で現れる等、日韓による相違点が伺われたが、負担度が重い場合には、このような現象があまり見られないと考えられた。つまり、負担度が軽い場合より負担度が重い場合に、日韓による差があまり見られない傾向があるのではないかと考えられた。

Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論」は、ポライトネス理論を発話文レベルで捉えているため、本研究の謝罪談話の構造分析の結果を解釈するには限界があると考えられる。例えば、負担度が重い謝罪場面では、「核談話」が現れても最初の段階では殆どの会話で受け入れない意を示していたが、繰り返される「核談話」と「交渉談話」のやりとりにより最終的には受け入れることで会話が収束する現象が多く現れており、発話文レベルでは、これらの現象を説明することが難しい。しかし、ポライトネスの研究を談話レベルで捉えることを提案する「ディスコース・ポライトネス理論」の観点からは、これらの現象もより正確かつ明確に説明することができると考えられる。本研究は、発話文レベルと談話レベル双方を分析することを強調している「ディスコース・ポライトネス理論」からの分析の妥当性かつ有効性を実証的に示している。

第5章の結果から分かるように、談話レベルで分析すると、謝罪行動の全体像を解明する試みが可能であると考えられる。また、次の第6章の発話文レベルの観点からの分析結果を加えることで、より正確かつ詳細な謝罪行動の解明が可能であろう。

第6章 謝罪行動のプロセスの分析

本研究では、「総合的な会話分析」のアプローチに従い、グローバルな観点からローカルな観点へと分析を行い、「謝罪」という言語行動を総合的に分析している。前章では謝罪談話をグローバルな観点から分析し、謝罪談話を構成する各談話の展開や構造の特徴を明らかにした。本章では、謝罪行動をローカルな観点から発話文レベルで行われるプロセスを分析し考察を行う。

熊谷(1993)は、相互作用の形で謝罪を研究することは、謝罪という特定の言語行動についての知見だけでなく、言語コミュニケーションを用いた対人関係維持や摩擦回避など、すなわち広義のポライトネスのありようについて有益な示唆を与えてくれると述べている。また、謝罪の談話においては「談話の収束」が極めて重要であり、一般に談話を収束させる決定権は優位の側が持つので、謝罪の場合は、相手方が謝罪を受け入れる意志を表示してくれなければ、収束に入ることは出来ないのが原則である(中道・土井、1993)。これらの指摘のように、謝罪という言語行動は、謝罪される側の反応が重要であり、される側がどのような反応を見せるかにより、謝罪する側もそれに合わせて自分の行動を変える可能性があるため、能動的且つ相対的な観点から謝罪という言語行動を捉える必要があると考えられる。

分析においては、まず、日韓母語話者における謝罪行動のプロセスの類似点や相違点等の特徴を全体的に比較しながら分析し考察を行い、分析結果から見られる日本社会と韓国社会の対人コミュニケーションの特徴を相互作用の観点から考察を試みる。次に、負担度が軽い場合と重い場合の日韓母語話者における謝罪行動のプロセスの特徴を分析するが、分析する際には、謝罪行動の類似点や相違点などを全体的に分析し検討した後、実際の会話例を通して謝罪する側と謝罪される側がどういう相互作用を行っているかを分析し考察を行う。

以上のように、グローバルな観点からの謝罪談話の相互作用の分析と、ローカルな観点からの謝罪行動の相互作用の特徴を合わせて分析し考察を行うと、謝罪という言語行動のプロセスがより明確に見えると考えられる。

6.1 謝罪行動における分析方法

本節では、まず、謝罪行動や関連用語の定義を行い、発話例を見ながら説明していく。次に、謝罪行動のコーディングの仕方について説明した後、謝罪行動に関する評定者間信頼性係数を示す。

本研究で捉えている「謝罪行動」とは、「謝罪」を行うための先行するやりとり、「謝罪」

が行われているやりとり、「謝罪」が行なわれた後のやりとりなど、「謝罪内容」と関連した話し手と聞き手のすべての相互作用を指す。

謝罪行動の相互作用を明らかにするため、謝罪する側が行う行動を「謝罪発話文」や「謝罪関連発話文」の連鎖であると捉え、下位分類し、謝罪される側が行う行動を「応答関連発話文」の連鎖であると捉え、下位分類する。つまり、「謝罪発話文」や「謝罪関連発話文」の連鎖と「応答関連発話文」の連鎖のやりとりが「謝罪行動」であると捉える。

- ・ 謝罪関連発話文：相手との人間関係に不均衡が生じそうな場合、あるいは生じた場合に対処する謝罪する側の発話文。
- ・ 応答関連発話文：謝罪する側の発話に反応する謝罪される側の応答に関連した発話文。

本章では、「謝罪発話文」、「謝罪関連発話文」、「応答関連発話文」が行われるやりとり、つまり、謝罪行動と明らかに関連がある発話文のみ分析対象とするが、前章の謝罪談話の下位分類である「挿入談話」、つまり、注文の話、彼氏の話、録音の話等、謝罪内容と関係がない話題についてやりとりをする談話は分析対象としないこととする。

以下では、「謝罪発話文」、「謝罪関連発話文」、「応答関連発話文」の分析項目を発話例を見ながら定義し説明していく。

6.1.1 謝罪発話文

「謝罪定型表現」というのは、日本語における「すみません」、「ごめんなさい」、「申し訳ございません」等、韓国語における「미안합니다(ミアンナムニダ)」、「죄송합니다(チェソンナムニダ)」等のような謝罪の決まり文句のことである。中道・土井(1993)は、日本語における謝罪の中核をなすのは、この部分であると指摘した。本研究での「謝罪発話文」は「「すまない系」、「ごめん系」、「申し訳ない系」のような謝罪定型表現を用いた謝罪表現と「悪いんだけど」「申し訳ないんだけど」のような「謝罪定型表現+接続詞」を用いた謝罪表現、また、「本当にすみません」のような「副詞+謝罪定型表現」を用いた謝罪表現等、「謝罪定型表現」が用いられたと判断される前後の発話文」と定義し、分析を行うこととする。

<発話例 6-1> 謝罪発話文

言語	発話例
日本語	JM07: あーごめん、あのう、本当に申し訳ないんだけど、&,、
韓国語	KM11: 너한테 미안하다<웃음>, 「KM12 이름」아= (おまえにはすまない<笑い>、「KM12 名前」=。)

6.1.2 謝罪関連発話文の分類

謝罪についての先行研究では、謝罪ストラテジーという概念から分析を行ったものが多い。謝罪ストラテジーを分析するための研究方法は、アンケート調査法(池田 1993、小野 2003、クモハマドナビル 2006 等)が一番多く用いられているが、ロールプレイ調査法(巖美鈴 2004、ボイクマン・宇佐美 2005 等)も若干用いられている。アンケート調査法とロールプレイ調査法においては、分析項目の数にばらつきはあるが、少ないものは5項目(小野 2003、クモハマドナビル 2006 等)程度、多いものは12項目(杉本 1997、ボイクマン・宇佐美 2005 等)程度であるが、これらは更に細かく下位分類されている。謝罪ストラテジーの分析項目の中で「説明・弁明」、「謝罪定型表現」、「責任の承認」、「埋め合わせの申し出」、「繰り返しをしない約束」、「相手への配慮」は研究者らにより用語の差はあるが、ほぼ共通的に取り扱われている(池田 1993、杉本 1997、小野 2003、巖美鈴 2004、ボイクマン・宇佐美 2005、クモハマドナビル 2006 等)。特に、杉本(1997)とボイクマン・宇佐美(2005)は「前触れ」や「前置き」、「感謝」も謝罪ストラテジーとして分類している。更に、近藤(2002)は、「ユーモアの使用」、「責任の否定」も謝罪ストラテジーとして分類し分析を行った。

本研究では、先行研究のように「ストラテジー」という用語は用いず、「発話文」という用語を用いる。その理由は、「ストラテジー」という用語が、日本語では「方略」と訳され、「手段」や「方法」の意味として用いられているためである。以下で詳細に説明するが、本研究の「発話文」の分析項目には、謝罪行動のやりとりにより、収束と関連する発話が現れたと判断される発話文までも分析対象としているため、単なる「ストラテジー」と異なり、「実際に行なわれた発話」という意味で「発話文」という用語を用いることとする。

これらの先行研究を参考にし、本研究の会話データを基に「謝罪関連発話文」の分析項目として「話題の前触れ発話文」、「状況説明発話文」、「責任関連発話文」、「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」、「協力要求発話文」、「保留発話文」、「意向変更発話文」、「その他の発話文」の9項目を立てて分析を行う。

「話題の前触れ発話文」は、先行研究において「前置き」、「前触れ」等の用語で用いられ、一番最初に現れるものとして分析が行われている。「状況説明発話文」、「責任関連発話文」、「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」は、上記で言及したように、研究者らにより用語の差はあるが、ほぼ共通して挙げられており、本研究の会話データにおいてもこれらの発話が現れたため、本研究の分析項目として立てることとした。「協力要求発話文」は、本研究で設定した謝罪場面により現れた発話であるが、本研究で負担度が重いと設定した謝罪場面は、第3者と関わりがある謝罪場面であるため、これらの発話が現れたと考えられる。これまでロールプレイ研究方法を用いた謝罪研究において、第3者と関わりがある謝罪場面を設けて分析した研究はないため、分析項目として扱われたことはないが、本研究ではこれらの発話に対しても分析を行うこととする。また、「保留発話文」と「意向変更発話文」は、上記にも簡単に説明したように、他の発話文と異なって、謝罪行動のやりとりによる結果的な発話文である。

以下では、「謝罪関連発話文」の分析項目として立てられた9項目の発話文の定義を、発話例を見ながら説明する。

1) 話題の前触れ発話文

ボイクマン・宇佐美(2005)では、「話題の前触れ」というカテゴリに「話を始めることの前触れ」、「話の目的を暗示する前触れ」、「話題についての前触れ」、「謝罪慣用表現を用いた前触れ」の4つの方策を分けて分析を行った。また、杉本(1997)は、「前置き」を「これから話す内容が相手にショックを与えるかも知れないと予告する」ものであると定義し、分類に加え、自由記述回答の分析に使用した。本研究ではボイクマン・宇佐美(2005)を参考にし、本研究データを基に「話題の前触れ発話文」を「会話の目的や内容を暗示するような言及をしたと判断される発話文」と定義し、分析を行うこととする。

<発話例 6-2> 話題の前触れ発話文

言語	発話例
日本語	JM15:《少し間》でさー、あのうー、話しというのがですね。
韓国語	KF05: 아, 근데 내가 오늘 너한테 할말이 있어가지고-, 왔는데. (あー、だけど私が今日あなたに話したいことがあって、来たけど。)

2) 状況説明発話文

池田(1993)は、「謝罪のストラテジー」の「説明・弁明」の下位項目として「説明・言い訳、知識・能力の欠如陳述、故意ではなかった旨陳述、責任転嫁、聞き手を非難」を挙げている。また、中道・土井(1993)は、「謝罪」の方略の基本構造の中で「やむをえない結果であること、故意でなかったこと等を述べたりすること」を「理解を求める」方略として説明している。その他、杉本(1997)、守屋(2001)、近藤(2002)、ボイクマン・宇佐美(2005)等の研究者らによって、「事情説明」、「責任、Offenceの度合いの軽減」、「言い訳」、「過失の生じた原因についての説明」等の項目として分類されている。本研究ではこれらの先行研究を参考にし、本研究の会話データを基に「状況説明発話文」を「事柄に及ぶまでの背景・事情を説明したり、知識・能力の欠如陳述、やむをえない結果であること、故意ではなかった旨陳述する等、理由・弁明したり、後悔・当惑・恐縮・混乱といった気持ちの表明、自分の意思を表明するような言及をしたと判断される発話文」と定義し、分析を行うこととする。

<発話例 6-3> 状況説明発話文

言語	発話例
日本語	JF05: 大変で(うん)、で、今日新聞見たら(うん)、もっとなんか時給高いし(うん)家から近くて、なん

	か夜とかも危なくない所で新しいバイトがあるー、の。 JM23: やあ、あのさ、ね、ちょ、俺も時間超余裕を持ってね、出ようと思ったんだけど、ちょっとね、あのう、まあ、ね、電車がね。
韓国語	KF17: 그 있잖아, 오늘 신문에서(응)시 시급도 좋고 우리집 (응)에서 가까운 위치에 있는 아르바이트 찾은거야. (あのね、今日新聞で(うん)じ、時給もよくて家(うん)から近いところにあるアルバイトを見つけたの。) KM11: 아니, 지금 오다가 지하철이 모- 고장이 났는지, 뭐 사고가 났는지 그래가지고=(いや、今来る途中地下鉄が故障して、何か事故が起こったかな、それで=。)

3) 責任関連発話文

ボイクマン・宇佐美(2005)は、責任の承認の方策を暗示的と明示的に分けて分類した。中道・土井(1993)は、責任関係については、不可抗力によるもの、自分以外の他者の責任、自分自身の責任など、さまざまな説明がありうるが、いずれも正当化ととられやすく、この部分のみを強調する謝罪は日本文化においては好まれないと述べている。また、守屋(2001)は、「過失の責任の所在についての言及がある」という謝罪ストラテジーの下位項目として「責任の表明、故意の否定、相手の正当化、事実の容認、責任の否認」を設け、説明している。「責任関連発話文」は、謝罪研究でほぼ共通的に挙げているストラテジーである(池田1993、杉本1997、関2001、近藤2002等)。明示的に自分の過失によって起こった不愉快な状況に対しては「責任を承認」するケースが多いが、不可抗力によるものや自分以外の他者によるものに対しては「責任を否定」したり、更に「不満な気持ち」を表す場合もある(中道・土井1993、杉本1997等)。本研究ではこれらの先行研究を参考にし、本研究データを基に「責任関連発話文」を「自らの非を認める姿勢を見せながら明示的に責任を認める言及をする発話文と、明示的に自分の行為の責任を否定するものと、相手にも過失があることに対して不満の気持ちを表明するもの、また、状況に対する不満の気持ちを表明する発話文がこれに属する。このように肯定的であれ、否定的であれ自分の責任に関して言及したと判断される発話文」と定義し、分析を行うこととする。

<発話例 6-4> 責任関連発話文

言語	発話例
日本語	JF03: うん、自分勝手なことをすごい言ってるのも分かるんだけど…。 JM31: まあ 20 分位だから、どうってことじゃないんじゃない??。 JF03: かなり遅くなっちゃった、着くの。
韓国語	KF23: 그러면, 내가 그만두게 되면은(응) 그쪽도 곤란하게 되는 거고, 한명이 빠져나가면은 (아-)어떻게든 사람을 채워야 되잖아(어어)=(私が辞めることになったら人手が足りなくなっちゃうから、もう一人必要になるじゃん(うん)どうにかして人を探して置かないと(うんうん)=。) KM17: 억울해 그래서, 니 전화 내가 몇 번했어, 니는 왜 안 받았어?, 니는 그럼[↑].(悔

	いい、だから、俺が何回もおまえに電話して、おまえ何で電話に出なかった?、おまえは[↑]。) KF17: 그래서 어 20 분이나 늦었네。(だから、あー20分も遅れたね。)
--	---

4) 対人配慮発話文

ボイクマン・宇佐美(2005)では、「なだめ」と「人間関係への言及」を別のカテゴリとして分類し、「相手の気持ちを推測・怒りを静め」と「楽観的な見込みを表明」という方策を「なだめ」のカテゴリに、「相手からの恩恵に言及」と「互いの親しさに言及」という方策を「人間関係への言及」のカテゴリに入れて分析を行った。杉本(1997)は、「埋め合わせ」のカテゴリに「被害者の意向を伺う」という下位項目を設けて分析した。池田(1993)は、謝罪関連発話文に「相手への配慮」という項目はあるが、調査のために設定した場面において比較的使用が少ないので、詳細な分析はしなかった。近藤(2002)は、このようなストラテジーと類似しているものに「言葉による慰撫」というカテゴリを立て、「相手に対する思いやり」、「相手を賞賛」、「相手に感謝を表わす」等の下位項目に分類した。このように、「人間関係への言及」、「相手への配慮」、「相手に対する思いやり」等のストラテジーは、研究者らにより、研究目的や調査内容、設定した場面等により異なるカテゴリに入れて分析が行われている。本研究ではこれらの先行研究を参考にし、更に、調査のために設定した場面中で現れたこれらと類似したものを「対人配慮発話文」とし、「相手からもらった恩恵について言及する、相手の怒りの気持ちを推測しその気持ちを静める、自分によって生じる不愉快な状況に対して相手の考えや意向を問う、相手の人間関係を確認する、冗談を言うことにより相手の怒りをおさめようと試みる、感謝の意を表明する、今後気をつけることを約束する等、相手への配慮に関わったと判断される発話文」と定義し、分析を行うこととする。

<発話例 6-5> 対人配慮発話文

言語	発話例
日本語	JM21: でも、なんか、せっかく紹介してもらって&, JF25: 今の所も別にそんな悪くないとかむしろすごくいい(うーん)ふうにはしてもらってるんだけど(うん)。
韓国語	KM11: 아니, 좀 상황이<웃음> 아-, 이거 어떻게 해야 되지[↑]<음-><↓>.(いや、ちょっと状況が<笑い> あー、これをどうしたらいいんだろう[↑]<うん-><↓>.) KF01: 너한테 부탁해서(어), 얻었고, 그리고 너가 정말 어떻게 어떻게 해서 얻어준 거라서(어)-。(あなたに紹介してもらって、そしてあなたが本当に無理言って雇ってもらったから。)

5) 過失修復発話文

借りた物を無くした場合の物質的な謝罪場面では、それを弁償することにより謝罪が成立する場合が多く(池田 1993、ボイクマン・宇佐美 2005、近藤 2002 等)、約束時間に遅れた

場合の抽象的な謝罪場面では、代わりにご飯・お茶を奢ることにより謝罪が成立する場合がある(池田 1993、杉本 1997、近藤 2002、巖美鈴 2004 等)。また、更に深刻な謝罪場面、例えば、交通事故や他人を傷つけてしまった場合は、法律的・経済的・精神的な様々な問題を解決しなければならないことも私たちの日常生活ではある。しかし、この解決策は文化によって共通点もあるが相違点も多い(中田 1989、堀江 1993 等)。このように、「謝罪定型表現」のみで謝罪が成立する場合も無論あるが、何かを弁償、補償、埋め合わせ等を行うことによって謝罪が成立する場合も多い。謝罪する事柄が深刻になればなるほど、その必要性が高くなると考えられる。本研究ではこれらの先行研究を参考にし、本研究のデータを基に「過失修復発話文」を「問題になっている事柄に対して、他のことによる解決策を提案したり、自分の過失によって生起する不愉快な状況を解決するために埋め合わせを言及したと判断される発話文」と定義し、分析を行うこととする。

<発話例 6-6> 過失修復発話文

言語	発話例
日本語	JF07:何か、うんバイト探している子結構何人もいたから(うん)、私より出来のいい子いっぱいいるし、[声が段々小さくなる]そういう子紹介したら大丈夫かな…。 JM29:で(うん)、で今日何か奢るからよっしょ。
韓国語	KF03:그러면 (응) 그냥 그 누구지 [친구 01 이름](응응)?? [친구 01 이름]이 개도(응응) 요세 알바를 구하거든(응응)、개한테 한번 말을 해볼까?.(なら(うん)あの人、あのう[友達 01 名](うんうん)[友達 01 名]も最近バイト探しているけど(うんうん)、[友達 01 名]に一度聞いてみようか?。) KM27:오늘은 차는 내가 쓸게.(今日、お茶は俺がおごる。)

6) 協力要求発話文

調査のために設定した負担度が重い謝罪場面は、単なる相手との人間関係のみならず、相手と第 3 者の人間関係まで関わりがある場面なので、謝罪する側が、自分と相手、第 3 者の人間関係まで念頭に入れなければならない状況である。多少複雑な謝罪場面とも思われるが、このような謝罪場を設定した理由は、日常生活では、2 者間の謝罪のやりとり場面も多いが、第 3 者あるいは複数の人々とも関わりがある謝罪のやりとり場面が生じたりもする。更に、これまでのロールプレイ研究方法の先行研究には、このように第 3 者と関わりがある場面を研究したものはない。本研究のデータを基に「協力要求発話文」を、「第 3 者とも関わりがある不愉快な状況を解決するために、謝罪される側に協力を求める言及をしたと判断される発話文」と定義し、分析を行うこととする。この発話文は、本研究で設定した謝罪場面により現れた発話文であるが、本研究ではこれらの発話も分析することとする。

<発話例 6-7> 協力要求発話文

言語	発話例
----	-----

日本語	JM23: まあ、ちょっと、まあ、今回、ちょっと、まあ、頼み、頼みます、頼みます、<お願いします>{<}</>。
韓国語	KF03: 알았어, 그래도(음) 사장님한테 니가 잘 (<웃음>)말씀, 어떻게 만나면 말씀 좀 잘해줘 죄송 <너도###>{<}</>.(わかった、だけど(うん)社長にあなたがよく<笑い>)伝えて、会 ったら申し訳ないと伝えてね<あなたも###>{<}</>.)

7) 意向変更発話文

本研究では、謝罪内容による結果的な発話文であると判断されるものも研究対象とする。本研究のデータを基に「意向変更発話文」を、「自分が引き起こした不愉快な状況に対して、自ら自分の意向を変更する決断をしたと判断される発話文」と定義し、分析を行なうこととする。

<発話例 6-8> 意向変更発話文

言語	発話例
日本語	JF05: じゃ、また、もう少し頑張ってみて(うんうん)なんかもっとやりがいかが見付けられるように(うんうん)頑張ってみて、それでも、駄目だったら(うん)、もう1回考えようかな。
韓国語	KM09: 일단, 한달 더 해보고(어) 다른 데를 구할 수 있을지 아닐지 한번 생각을 해볼<께>{<}</>.(とりあえず、もう1ヵ月やってみて(うん)他のどこを探すかどうかはまた考えてみる<}</>.)

8) 保留発話文

「保留発話文」も、謝罪内容による結果的な発話文であるが、本研究のデータを基に「第3者とも関わりがある謝罪場面において、第3者も呼んで話し合いをすることを言及したり、意向変更の言及なしに曖昧な発話をしたと判断される発話文」と定義し、分析を行なうこととする。

<発話例 6-9> 保留発話文

言語	発話例
日本語	JM09: また、ちょっとまた後で話すん、うん。
韓国語	KF11: 그러면 나는 일단 그때까지 미룰께.(では、私が一応その時まで伸ばすよ。)

9) その他の発話文

この発話文は、上記の8つの「謝罪関連発話文」に属さない発話文と「相づち、感動詞、共感、確認、推測、挨拶、呼称、相手の質問に対する応答、相手の発話の繰り返し等」を用いて相手の発話に注目していることを表す発話文、「言い間違いの発話、相手の発話により中断して意味的なまとまりがない発話、一発話文が接続詞で終わった発話等」、分析ができない不明な発話文をまとめたカテゴリである。このカテゴリに属する発話文は本章では定量的な分析では、分析対象としないが、定性的な分析は行うこととする。

<発話例 6-10> その他の発話文

言語	発話例
日本語	①うん<笑い>。②あー。③確かにそうだね。④そうだよね。 ⑤お疲れ様、⑥<中央線かー>{}。[→]⑦久しぶり。⑧[JF07 名]ちゃん⑥だから<>{}【】。⑦けっ 【】。⑧<もう>{}すごいもう【】。⑨<携帯は>{}{}。⑩なん…。
韓国語	①<그러니깐>{}<.>.<そうだね>{}<.>。②그래<야짚지>{}<[↑].>.<そうしなきゃ>{}<[↑].>。 ③<웃으면서>그래 알았어.<笑いながら>そう、わかった。④아 그래?.あーそう?。 ⑤여기 있었네<웃음>.<ここにいったね>笑い。⑥아 그게 뭐지??あれ何だったっけ?? ⑦ <그러면>【】<.>.<それなら>【】<.>。⑧<아 거기가>【】<.>.<あーそこが>【】<.>。

以上の「謝罪関連発話文」の分析項目を以下の表 6-1 でまとめた。

表 6-1 謝罪関連発話文の分類と定義

発話文	定義
話題の前触れ発話文	会話の目的や内容を暗示するような言及をしたと判断される発話文
状況説明発話文	事柄に及ぶまでの背景・事情を説明したり、知識・能力の欠如陳述、やむをえない結果であること、故意ではなかった旨陳述する等、理由・弁明したり、後悔・当惑・恐縮・混乱といった気持ちの表明、自分の意思を表明するような言及をしたと判断される発話文
責任関連発話文	自らの非を認める姿勢を見せながら明示的に責任を認める言及をする発話文と明示的に自分の行為の責任を否定するものと、相手にも過失があることに対して不満の気持ちを表明するもの、また、状況に対する不満の気持ちを表明する発話文がこれに属する。このように肯定的であれ、否定的であれ自分の責任に関して言及したと判断される発話文
対人配慮発話文	相手からもらった恩恵について言及する、相手の怒りの気持ちを推測しその気持ちを静める、自分によって生じる不愉快な状況に対して相手の考えや意向を問う、相手の人間関係を確認する、冗談を言うことにより相手の怒りをおさめようと試みる、感謝の意を表明する、今後気をつけることの約束を言及するのを約束する等、相手への配慮に関わったと判断される発話文
過失修復発話文	問題になっている事柄について他のことによる解決策を提案したり、自分の過失によって生起する不愉快な状況を解決するために埋め合わせについて言及したと判断される発話文
協力要求発話文	第三者とも関わりがある不愉快な状況を解決するために、謝罪される側に協力を求める言及をしたと判断される発話文
意向変更発話文	自分が引き起こした不愉快な状況に対して、自ら自分の意向を変更する決断をしたと判断される発話文

保留発話文	第3者とも関わりがある謝罪場面において、第三者も呼んで話し合いをすることについて言及したり、意向変更の言及なしに曖昧な発話をしたと判断される発話文
その他の発話文	上記の8つの発話文に属さない発話文、一単語で相槌的に共感、確認、推測、応答等の発話、感動詞、挨拶、相手の発話の繰り返し、言い間違いの発話、相手の発話により言い切られた意味的なまとまりがない発話、一発話文が接続詞で終わった発話等

6.1.3 応答関連発話文の分類

これまでの謝罪研究は、謝罪する側の発話に注目したものが主流で、謝罪される側の発話を分析対象とした研究は数少ない。しかし、ボイクマン・宇佐美(2005)が指摘しているように、謝罪とは、謝罪する側とされる側とが相互に交渉しつつ共同で作り上げていく行為であると考えられるため、謝罪される側の発話も分析対象とする必要があると考えられる。

本研究は、謝罪に関する先行研究と「不満表明ストラテジー(初鹿・熊取谷・藤森 1996、李善姫 2004・2006 等)」、「断わり(生駒・志村 1993、熊井 1992・1993、藤森 1994・1995 等)」等の否定的な言語行動や否定的ではない言語行動の先行研究(彭飛 1996、吉岡 1993、中嶋 2005 等)を参考にして、「応答関連発話文」の分析項目を立てた。

「応答関連発話文」は、「前触れに対する応答発話文」、「事態確認発話文」、「非難発話文」、「譲歩発話文」、「問題解決発話文」、「代償要求発話文」、「過失言及発話文」、「受諾発話文」、「保留発話文」、「その他の発話文」の10項目である。

「前触れに対する応答発話文」は、「話題の前触れの発話文」に対する反応なので一番最初に現れている。「事態確認発話文」、「非難発話文」、「譲歩発話文」、「問題解決発話文」、「代償要求発話文」は、現れる順序の差はあるものの、ボイクマン・宇佐美(2005)を参考にし、本研究の会話データでもこれらの発話が現れたので、分析項目として立てて分析を行うこととする。「過失言及発話文」は、本研究で負担度が軽いと設定した謝罪場面により現れた発話であるが、本研究ではこれらの発話に対しても分析を行うこととする。また、「受諾発話文」と「保留発話文」は、他の発話文と異なって、謝罪行動のやりとりによる結果的な発話文である。

以下では、「応答関連発話文」の分析項目として立てられた10項目の発話文の定義を、発話例を見ながら説明する。

1) 前触れに対する応答発話文

ボイクマン・宇佐美(2005)では、「前触れに対する応答発話文」というカテゴリに「相手の様子伺い」、「不安を表明」、「相手の持ち出した話題を発展」の3つの方策を分けて分析を行った。本研究では、ボイクマン・宇佐美(2005)を参考にし、本研究データを基に「相手が持ち出した話題に対する直後の応答であるが、相手の様子を伺ったり、話題を発展させるような質問をしたりする等の言及をしたと判断される発話文」と定義し、分析を行なう

こととする。

<発話例 6-11> 前触れに対する応答発話文

言語	発話例
日本語	JM04:あーあれ[↑]、ねー、うん。 JF14:うん、なにになに?。
韓国語	KM06: 왜?(どうした?。) KF02: 왜, 무슨 일 있어?. (何、何かあった?。)

2) 事態確認発話文

「事態確認発話文」は、ボイクマン・宇佐美(2005)を参考にし、本研究データを基に「相手が持ち出した事態に対して確認することと、さらなる情報を要求する言及をしたと判断される発話文」と定義し、分析を行なうこととする。

<発話例 6-12> 事態確認発話文

言語	発話例
日本語	JM06:《沈黙 2 秒》ちょっと待って、わ、分かんないだよ、辞めるかどうか。 JF08: えー、「人名 1」さんとは何か不満?。 JF06: 何で、止まった?〈笑い〉。
韓国語	KF10: 뭐 이렇게 뭐 돈이 적다거나, 아니면 뭐 그냥 시간이나 뭐 그렇게 힘든거야? 몸이 힘든거야?(まあ一何かお金が少ないとか、それともただ時間とかが何か辛いとか?体が辛いなの?。) KM10: 뭐-, 몇 호선 타고 왔는데?(まあ一、何号線乗って来たの?。)

3) 非難発話文

「非難発話文」は、李善姫(2006)とボイクマン・宇佐美(2005)を参考にし、本研究データを基に「不愉快な状況を引き起こした相手の行動に対して、軽蔑や罵りの言葉、怒りの言葉を含意して相手を直接的に攻撃したり、相手が引き起こした不愉快な状況や相手の行動について直接的に述べるのではなく、驚き・心外の念・困惑・混乱を表明、否定的な見込み、皮肉、自分の努力の強調、自分の立場の大変さについて言及したり、今後気をつけることを要求する等、それと関連した発言をすることによって相手の行動を間接的に非難する言及をしたと判断される発話文」と定義し、分析を行なうこととする。

<発話例 6-13> 非難発話文

言語	発話例
日本語	JM20:〈2ヶ〉月じゃん、まだ、全然さ、始めたばかりよ。 JF24: えー、なんかそれちょっと無責任じゃない?。 JM04: あー、ちょっとさすがに遅すぎ《少し間》〈20 分で〉〈〉。
韓国語	KM14: 【】아니, 왜 번번히 이렇게 책임감 없이 나오는 거야. (【】いや、どうしていつもこんなに無責任なわけ。) KF02: 아 그럼 진짜 이걸 말그대로 은혜를 원수로 갚은 격이야〈마지막 약간 웃음〉. (あーこれは本当に恩を仇(あだ)で返すってことだよ〈最後ちょっと笑い〉。)

	KM02:=그걸 변명이라고 하는 거야[↑].(=それが言い訳になるの[↑].)
--	---

4) 讓歩發話文

ボイクマン・宇佐美(2005)を参考にし、本研究データを基に「讓歩發話文」は、「相手の過失や不愉快な状況、または、相手の立場に対して理解していると言及する、相手を励ます、相手に協力することについて言及する、不愉快な状況が解決されることを肯定的な見込みで表す、冗談を言う、相手の代償・謝罪に対して感謝したりする等、相手への配慮に関して言及をしたと判断される發話文」と定義し、分析を行なうこととする。

<發話例 6-14> 讓歩發話文

言語	發話例
日本語	JM16:《少し間》そっ—か—、それちよつときついね。 JF30:いや、でもなんか、ちゃんとそういうの、ちゃんとした理由を(うん)言えば、大丈夫だと思うけど、うん—…。 JF16:=《笑いながら》いや、でも、うち怒るキャラじゃ(《笑い》)ないでしょう。
韓国語	KM13:<나야[↑] 무슨>{> 상관은 없는데…>{<}.(<俺は[↑] 別に>{> 관계ないけど…>{<}. KM20:=그래, 니가 또 집이 어렵고 한 것 아니까. (=そう、おまえんちの事情もちょっと厳しいの知ってるから。) KF20:<기다릴만 해>{><둘이서 약간 웃음>.<《待つてられるよ》>{><2人で少し笑い。>{<}

5) 問題解決發話文

「問題解決發話文」は、初鹿野(1991)を参考にし、本研究データを基に「問題になっている事柄について他のことによる解決策を提示したり、相手に好ましくない状況を変える行為を行うよう要求する言及をしたと判断される發話文」と定義し、分析を行なうこととする。

<發話例 6-15> 問題解決發話文

言語	發話例
日本語	JM22:《沈黙 2 秒》うん、辞めるんだったら、まあ、なるべく、辞めてほしくないけど。 JF08:え、もしさ、何か、じゃあ”一人今急に足りなくなったら困るんだけど”とか(うん)言われたらさ(うんうん)、誰かバイト探してる子とかいそう?。
韓国語	KM10:《침묵 4 초》나는 그냥 안 바꿨으면 좋겠는데….(《沈黙 4 秒》俺は辞めないでほしい…。) KF28:《침묵 2 초》아-그럼 너 말고 아니면 다른 사람 소개시켜줄 수는 있어? (《沈黙 2 秒》じゃ、他に代わりの人紹介することはできるの?。)

6) 代償要求發話文

「代償要求發話文」は、本研究データを基に「不愉快な状況を引き起こした相手に代償を要求する言及をしたと判断される發話文」と定義し、分析を行なうこととする。

<発話例 6-16> 代償要求発話文

言語	発話例
日本語	JF10:じゃ、今日はケーキを奢ってください。
韓国語	KF30:<웃으면서>아 그래 그럼 차 쓰는 걸로 하고, 그래. (<笑いながら>あー、ではお茶奢ることにしてね。)

7) 過失言及発話文

「過失言及発話文」は、本研究データを基に「自分の過失に対して謝罪定型表現を用いて謝罪したり、自分にも過失があることを認めるような言及をしたと判断される発話文」と定義し、分析を行なうこととする。この発話文は、本研究において負担度が軽い場合で設定した謝罪場面により現れた応答であり、これまでの謝罪研究において謝罪に対する応答として扱われたことはなかった。しかし、本研究では、これらの発話も謝罪に対する応答として扱うこととする。

<発話例 6-17> 過失言及発話文

言語	発話例
日本語	JM10:なるほどね、やあー<笑い>、実はさ(うん)、俺今日ちょっと携帯を家に忘れちゃってさ(うん)。 JF04:ごめん、携帯忘れた<笑い>、家に。
韓国語	KM30:아니, 나 오늘 핸드폰을 안 가지고 와 가지고.(いや、俺、今日、携帯持ってきてなくて。)

8) 受諾発話文

「受諾発話文」は、本研究データを基に「謝罪する側が持ち出した不愉快な状況に対して、「仕方ない」、「しょうがない」、「いいよ」、「わかった」、「いえいえ」、「大丈夫」等の言葉を用いて肯定的かつ直接的に受け入れることを示す発話文や、これらの言葉は用いていないが、謝罪する側が持ち出した不愉快な状況に対して、決断したような言葉(例えば、「じゃ、とりあえず」等)を用いて、肯定的に受け入れることについて言及したと判断される発話文」と定義し、分析を行なうこととする。

<発話例 6-18> 受諾発話文

言語	発話例
日本語	JF08:じゃ、ま、時給のことは言わないで(うん)、その「JF07 名」のお母さんが家から遠いと夜遅いと不安だからみたいな(うんうん)感じで辞められたみたいな感じで(うん)一応話してみる。 JM10:<まあ>{、20 分も、寝坊して遅れたら、まあ、怒るけど、電車止まったんならなあ、しょうがないなー。
韓国語	KF08:또, 너가 안 맞는다니깐(응)그건 어쩔 수 없는 것 같고(응) 일단 내가 그쪽에 잘 말해 볼게.(また、あなたが合わないので(うん)それは仕方ないようで(うん)一端私がそちらにはよく話して見る。) KM08:<웃으면서><괜찮아>{。(<笑いながら><大丈夫>{)。

9) 保留発話文

「保留発話文」は、本研究データを基に「第3者とも関わりがある謝罪場面において、第3者も呼んで話し合いをすることについて言及したり、受諾せず曖昧な発話をしたと判断される発話文」と定義し、分析を行なうこととする。

<発話例 6-19> 保留発話文

言語	発話例
日本語	JF12 : <<沈黙 8秒>>えー、じゃ、まず知り合いの人と呼んで(うん)、3人で話そうか?。
韓国語	KM16:《잠시간격》일단 나한테 뭐라 그렇게 아니라 일단 그 사장, 그러니깐 우리 삼촌한테 동의를 얻어.《(少し間)まず、俺に言うことではなくて、まずは社長、だからうちのおじさんの同意を求めろ。》

10) その他の発話文

その他の発話文とは、上記の9つの応答関連発話文に属さない発話文、「相づち、感動詞、共感、確認、推測、挨拶、呼称、相手の質問に対する応答、相手の発話の繰り返し等」を用いて相手の発話に注目していることを表す発話文、「言い間違いの発話、相手の発話により中断して意味的なまとまりがない発話、一発話文が接続詞で終わった発話等」分析ができない不明な発話文をまとめたカテゴリである。このカテゴリに属する発話文は本章では定量的な分析では、分析対象としないが、定性的な分析は行うこととする。

<発話例 6-20> その他の発話文

言語	発話例
日本語	①うん<笑い>。②あー。③確かにそうだね。④そうだよね。⑤久しぶり。⑥[JF07名]ちゃん⑦だくから><【。⑧けっー【。⑨<もう><【>すごいもう【。】
韓国語	①그래, 그래.(そうそう。)②오랜만이야.(久しぶり)③<정말><【.(本当に。)④너 가만히 생각해 보니깐 지금 음식점 얘기하는 거지?<둘이서 웃음>.(あなた考えてみると、今飲食店の話だよね?<2人で笑い。)>⑤<너 이거><【。<あなたこれ><【。)>⑥그러면【。(それなら【。)

以上の謝罪の「応答関連発話文」の分析項目を表 6-2 でまとめた。

表 6-2 応答関連発話文の分類と定義

発話文	定義
前触れに対する 応答発話文	相手が持ち出した話題に対する直後の応答であるが、相手の様子を伺ったり、話題を発展させるような質問をしたりする等の言及をしたと判断される発話文
事態確認発話文	相手が持ち出した事態に対して確認することと、さらなる情報を要求する言及をしたと判断される発話文
非難発話文	不愉快な状況を引き起こした相手の行動に対して、軽蔑や罵りの言葉、怒りの言葉を含意して相手を直接的に攻撃したり、相手が引き起こした不愉快な状況や相手の

	行動について直接的に述べるのではなく、驚き・心外の念・困惑・混乱を表明、否定的な見込み、皮肉、自分の努力の強調、自分の立場の大変さについて言及したり、今後気をつけることを要求する等、それと関連した発言をすることによって相手の行動を 間接的 に非難する言及をしたと判断される発話文
譲歩発話文	相手の過失や不愉快な状況、または、相手の立場に対して理解していると言及する、相手を励ます、相手に協力することについて言及する、不愉快な状況が解決されることを肯定的な見込みで表す、冗談を言う、相手の代償・謝罪に対して感謝する等、相手への配慮に関わる言及をしたと判断される発話文
問題解決発話文	問題になっている事柄について他のことによる解決策を提示したり、相手に好ましくない状況を変える行為を行うよう要求する言及をしたと判断される発話文
代償要求発話文	不愉快な状況を引き起こした相手に代償を要求する言及をしたと判断される発話文
過失言及発話文	自分の過失に対して謝罪定型表現を用いて謝罪したり、自分にも過失があることを認めるような言及をしたと判断される発話文
受諾発話文	謝罪する側が持ち出した不愉快な状況に対して、「仕方ない」、「しょうがない」、「いいよ」、「わかった」、「いえいえ」、「大丈夫」等の言葉を用いて肯定的かつ直接的に受け入れることを示す発話文や、これらの言葉は用いていないが、謝罪する側が持ち出した不愉快な状況に対して、決断したような言葉（例えば、「じゃ、とりあえず」等）を用いて、肯定的に受け入れることについて言及したと判断される発話文
保留発話文	第3者とも関わりがある謝罪場面において、第3者も呼んで話し合いをすることについて言及したり、受諾せず曖昧な発話をしたと判断される発話文
その他の発話文	上記の9つの発話文に属さない発話文、一単語で相槌的に共感、確認、推測、応答等の発話、感動詞、挨拶、相手の発話の繰り返し、言い間違いの発話、相手の発話により言い切られた意味的なまとまりがない発話、一発話文が接続詞で終わった発話等

6.1.4 謝罪行動のコーディングの仕方

以下では、会話例を見ながら謝罪行動のコーディングの仕方について説明するが、コーディングする際、「謝罪関連発話文」と「応答関連発話文」のセルを設けて、見やすくするため、各々の分析項目を直接に入力する仕方でコーディングを行った。

<会話例 6-1> 負担度が軽い謝罪場面におけるコーディングの例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
-------	----	------	---------	---------

1	JM03	ごめん、&, ⁷⁶	謝罪	na ⁷⁷
2	JM03	ちょっと遅くなっちゃった。	責任	na
3	JM04	あー、ちょっとさすがに遅すぎ《少し間》<20 分で>{<}	na	非難
4	JM03	<あー>{>}, そう。	その他	na
5	JM03	途中、電車止まっちゃってさ(おおー)、何回も電話したんだけど、繋がらなくて…。	状況説明	na
6	JM04	うん<笑い>すご、俺携帯忘れたよ、持って来るの忘れくっちゃったから>{<}。	na	過失言及
ライン番号 7～11 省略				
12	JM04	ごめん、そういうもん、携帯なかったから確認(おお)できん、そっか。	na	過失言及
13	JM03	まさか、もうちょっと早く家で出ればよかったんだけどね=。	責任	na
14	JM04	=うーん、まあ、私、20 分、20 分はね。	na	譲歩
ライン番号 15～20 省略				
21	JM04	まあ(じゃ)、しょうがない、20 分はね。	na	受諾

負担度が軽い謝罪場面のコーディングの例をみると、JM03 の謝罪からスタートし、遅くなったことに対する責任を認めているが、ライン番号 1 と 2 は、一つの発話文であったが、BTSJ のコーディング仕方に従い、複数の要素であるため、便宜上改行されている。これを受けて、JM04 は、遅いことに対し非難する発話をし、その後、JM03 による状況説明や JM04 による携帯を持って来なかったことについての過失言及の発話のやりとりが行われている。ライン番号 12-14 で、JM04 は、再度、自分の過失について言及し、JM03 も再度、責任を認める発話をしており、これを受け、JM04 は、譲歩しているような発話をしている。その後、ライン番号 21 で、「まあ(じゃ)、しょうがない、20 分はね。」と、「しょうがない」という言葉を用いて明示的に受け入れる意を示して会話は収束する。

次は、負担度が重い謝罪場面のコーディング例である。

⁷⁶ BTSJ のコーディング仕方によると、研究者が扱う分析対象とする要素が、場合によっては、1 発話文中、あるいは通常の 1 ライン中に複数現れることがある。複数の要素をコーディングするのに 1 つのセルしか用意されていないと、コーディングができない。このような場合には、個々にコーディングができるように、各当該項目の後ろに「&」をつけて改行し、1 つの要素につき 1 つのコーディングセルを割り当てる。つまり、「&」は、BTSJ における本来のルールでは改行されないが、コーディングの便宜上改行されているものであることを示すものである。改行した際には、その発話文がまだ終了していないことを明示するために、ラインの末尾には「,」を付ける。本来は 1 発話文であるため、発話文番号は同じであるが、「&」をつけて改行された発話の順番が分かるように、発話文番号に記号を付け加える。この際、複数ラインにわたる発話文番号の通し番号と区別するために、アルファベットなどを用いる(例：1-a, 1-b, 1-c)。
⁷⁷Non applicable の略語で、発話文の中に分析項目に該当するものがないことを示す。つまり、「謝罪関連発話文」のセルには「応答関連発話文」が該当するものがなく、「応答関連発話文」のセルには「謝罪関連発話文」が該当するものがないという意味である。

<会話例 6-2>負担度が重い謝罪場面におけるコーディングの例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連 発話文	応答関連 発話文
1	JF19	あ、あのさ(うん)、あのう…。	前触れ	na
2	JF20	どうしたの?。	na	前触れの 応答
ライン番号 3~4 省略				
8	JF19	今日の新聞でもっと時給が高くて(うん)、しかも家から近い所のバイト見付けたから(うん)、そっちがいいかなーって&,、	状況説明	na
9	JF19	なんか紹介してもらったのに<笑い>&,、	対人配慮	na
10	JF19	<笑いながら>悪いんだけど。	謝罪	na
ライン番号 11~24 省略				
25	JF20	《少し間》そうか、うん、私としてはやっぱりずっと結構強くお願いしたから(うん)、&,、	na	非難
26	JF20	もうちょっと頑張ってもらいたいなって(うん)、思うけど(うん)、えーなんか両方とかやっぱうんー<笑い>できない?。	na	問題解決
ライン番号 27~40 省略				
41	JF20	《少し間》なんかもうちょっと[↑](うん)、頑張ってみてそれで(うん)もう辛かったら(うん)、正直に(うん)知り合いの人に(うん)話してみればきっと分かってくれると思う。	na	問題解決
42	JF19	うん。	その他	na
43	JF20	けど、やっぱまだ2ヶ月だから(うん)、もうちょっと慣れてからでも(うん)、いい気がするけど<笑いながら>、どうかな。	na	問題解決
44	JF19	あー、うーん<2人笑い>。	その他	na
45	JF19	そうだよね<笑い>。	その他	na
46	JF19	じゃ、うん、考えてみます。	意思変更	na

この会話のやりとりをみると、JF19 と JF20 の前触れの発話と応答が行われてから、ライン番号 8-10 にかけて、JF19 が状況説明や対人配慮、謝罪発話文を用いて自分の意向を説明しているが、この発話文は、複数の要素が含まれていた 1 つの発話文なので改行されている。その後、JF20 は、間接的に非難しながら問題になっている事柄を解決するため働きかけている。更に、ライン番号 41 と 43 をみればわかるように、受け入れる意は示さず、継続して JF19 が紹介してくれたバイトを続けるよう積極的に言及している。これを受けて、JF19 は、「じゃ、うん、考えてみます。」(ライン番号 46)と、最初の自分の意向を変更し、会話は収束に入ることができる。

以上のコーディング例をみると、負担度が軽い謝罪場面では、謝罪する側と謝罪される

側が簡単なやりとりで収束し、受け入れることで会話は終了しているが、負担度が重い謝罪場面では、謝罪する側が持ち出した不愉快な状況に対し、謝罪される側が非難したり問題解決のため積極的に働きかけており、その結果、謝罪する側が最初の自分の意向を変更することで会話は収束する。このように、負担度の差がある謝罪場面では、謝罪する側と謝罪される側が異なる働きかけをしており、それにより多様な結果が現れている。第 6 章の謝罪行動のプロセスは、謝罪する側と謝罪される側のやりとりを発話文レベルで分析を行い、そこで現れる日本語母語話者と韓国語母語話者の特徴を分析し考察する。

6.1.5 謝罪行動の評定者間信頼性係数

「謝罪発話文」、「謝罪関連発話文」と「応答関連発話文」のコーディング項目の信頼性を確認するために、第二評定者を立て、Cohen's Kappa を用いて確認した。以下の表 6-3 に、「謝罪発話文」、「謝罪関連発話文」におけるコーディングの評定者間信頼性係数を示す。

表 6-3 日韓母語話者の「謝罪発話文」と「謝罪関連発話文」における評定者間信頼性係数

	日本語母語話者	韓国語母語話者
負担度が軽い謝罪場面	$\kappa=0.907$ ($\kappa>0.70$)	$\kappa=0.810$ ($\kappa>0.70$)
負担度が重い謝罪場面	$\kappa=0.818$ ($\kappa>0.70$)	$\kappa=0.742$ ($\kappa>0.70$)

表 6-3 をみると、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面における日韓母語話者の「謝罪発話文」、「謝罪関連発話文」のコーディングの評定者間信頼性係数は、全て $\kappa>0.70$ で、信頼性があると判断された。次の表 6-4 に、「応答関連発話文」のコーディングにおける評定者間信頼性係数を示す。

表 6-4 日韓母語話者の「応答関連発話文」における評定者間信頼性係数

	日本語母語話者	韓国語母語話者
負担度が軽い謝罪場面	$\kappa=0.834$ ($\kappa>0.70$)	$\kappa=0.908$ ($\kappa>0.70$)
負担度が重い謝罪場面	$\kappa=0.782$ ($\kappa>0.70$)	$\kappa=0.799$ ($\kappa>0.70$)

表 6-4 をみると、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面における日韓母語話者の「応答関連発話文」のコーディングの評定者間信頼性係数は、全て $\kappa>0.70$ で、信頼性があると判断された。

6.2 謝罪行動における日韓対照の分析結果及び考察

本節では負担度が軽い場合と負担度が重い場合の日韓母語話者の謝罪行動の特徴を全体的に比較分析するが、主に、類似点を中心にポライトネス観点から考察を行う。次に、負担度が軽い場合と重い場合の日韓母語話者の謝罪行動の特徴を見るが、主に、相違点の観点から考察し、相互作用の特徴を説明する。以下の図 6-1 と図 6-2 は、負担度が軽い場合と

重い場合の日韓母語話者における謝罪行動を構成する発話文の総計に占める割合である。

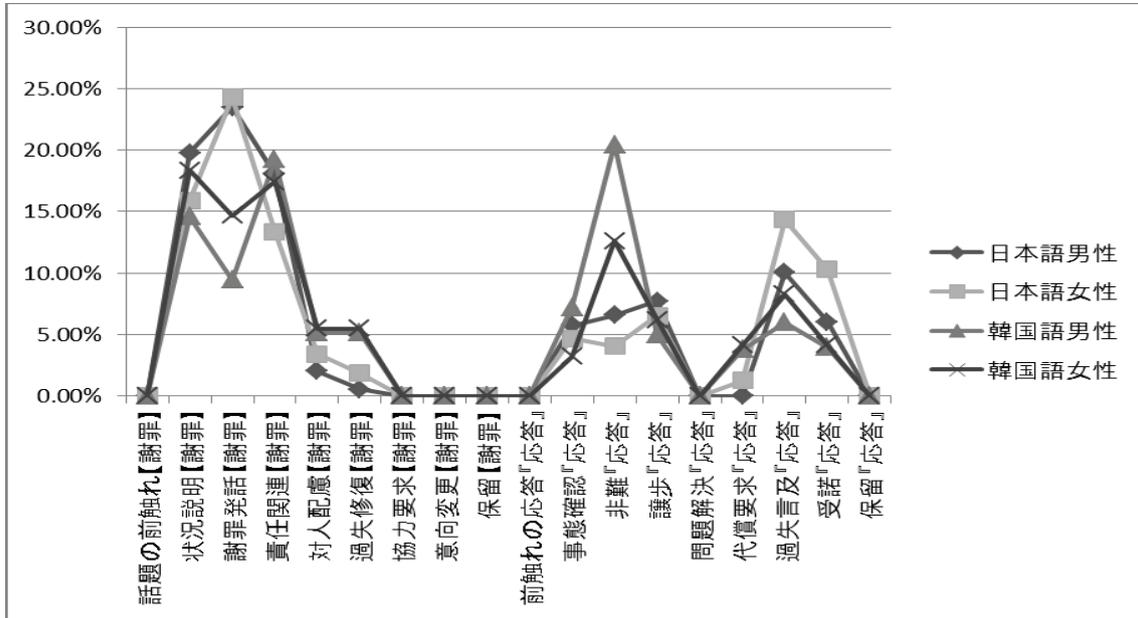


図 6-1 謝罪行動を構成する発話文の割合の比較(負担度が軽い場合)

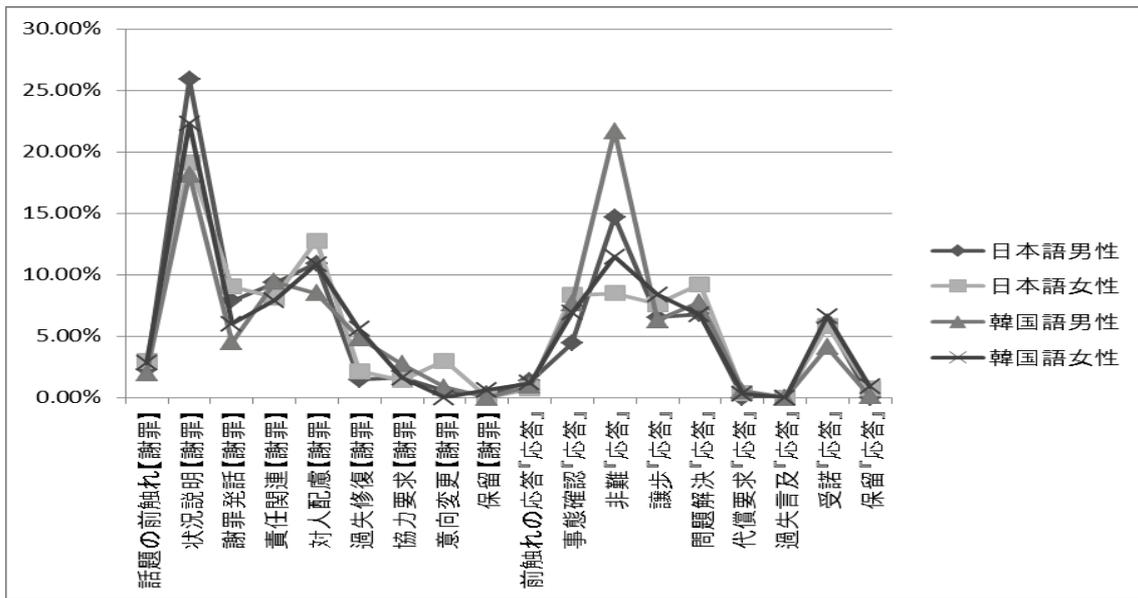


図 6-2 謝罪行動を構成する発話文の割合の比較(負担度が重い場合)

発話文の表し順は、実際の発話文が現れた順序であるが、「話題の前触れ発話文」は一番最初に現れる発話文であり、「状況説明」、「責任関連」、「対人配慮」は現れる順には差があるものの、「謝罪発話文」と共に現れる場合が多く、「過失修復発話文」は、これら4種の発話文よりは後に現れる場合が多く、結果的な発話文である「意向変更発話文」と「保留発話文」は、これら4種の発話文よりは後に現れる場合が多く、結果的な発話文である。

話文」は会話の収束段階で現れる場合が多かった。同様に、「応答関連発話文」は、「前触れの応答」が一番最初に現れる発話文であり、「事態確認」、「非難」、「譲歩」は現れる順には差があるものの、「問題解決発話文」と「代償要求発話文」の前に現れる場合が多く、結果的な発話文である「受諾発話文」と「保留発話文」は会話の収束段階で現れる場合が多かった。更に、負担度が重い場合の謝罪する側の「協力要求発話文」は会話の後半に、負担度が軽い場合の謝罪される側の「過失言及発話文」は会話の前半に現れる場合が多かったが、これらの発話文は、本研究の謝罪場面設定により現れた発話文である。また、謝罪場面設定より、負担度が軽い場合には、謝罪する側の「話題の前触れ発話文」、「協力要求発話文」、「意向変更発話文」「保留発話文」は現れず、謝罪される側の「前触れの応答発話文」、「問題解決発話文」、「保留発話文」が現れなかった。また、負担度が重い場合には、謝罪される側の「過失言及発話文」が現れなかった。

以下では、図 6-1 と図 6-2 を比較しながら、負担度が軽い場合と負担度が重い場合の日韓母語話者の謝罪行動の特徴を考察していく。

まず、負担度が軽い謝罪場面では、日韓母語話者共に、謝罪する側は「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」の 3 種の発話文を主に用いており、謝罪される側は「過失言及」、「事態確認」、「非難」、「譲歩」の 4 種の発話文を主に用いて反応している。しかし、韓国語母語話者は、謝罪する側の「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」や謝罪される側の「代償要求発話文」を日本語母語話者よりは多く用いている。一方、負担度が重い謝罪場面では、これらの発話文に加えて、日韓母語話者共に、謝罪する側は「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」も多く用いており、謝罪される側は「問題解決発話文」も多く用いている。橋元(1992)は、相手が負担しなければならないと予想されるコストが大きいほど、また相手に強いる将来の行動変容の程度が大きいほど、方略は多彩に、また複雑になると述べているが、本研究においても、負担度が重くなると、より複雑かつ多様な発話文が用いられ、そのやりとりも長くなり、謝罪内容を受け入れるか、受け入れないかという現象も現れていた。

次に、負担度が重い場合には、「状況説明」、「対人配慮」、「問題解決」の 3 種の発話文が、負担度が軽い場合より、日韓母語話者共に共通的に多く用いられている特徴が見られているが、「過失修復発話文」は、韓国語母語話者で若干多く用いられていた。負担度が重い場合には、謝罪する側が、不愉快な状況に関する詳細な説明や相手のフェイスに配慮し怒りを納めるための発話、更に、自分の過失をできるだけ修復するための発話が求められるのではないかと考えられる。特に、「対人配慮発話文」の負担度による差は、韓国語母語話者より日本語母語話者で明確に現れているが、侵害された相手のフェイスに配慮し、その怒りを納めるための働きかけをより積極的に行っていると思われる。更に、負担度が軽い場合には、問題になっている事柄が簡単であるため、謝罪される側は簡単に反応しているが、負担度が重くなると、問題になっている事柄を解決しようとする働きかけをより積極的に行わなければならないであろう。謝罪状況を大きく分類すると、物質的、精神的、身

体的な状況があるが、簡単な謝罪状況に比べ、深刻な謝罪状況になると、これらの状況に合わせて適切な行動を取ることが期待される。従って、本研究の負担度が重い場合に「問題解決発話文」が多く見られたと考えられる。

一方、負担度が軽い場合には、「謝罪」、「責任関連」の2種の発話文が、負担度が重い場合より、日韓母語話者共に共通的に多く用いられている特徴が見られた。特に、負担度が軽い謝罪場面で、日韓母語話者共に「謝罪発話文」が多く用いられる傾向が現れていた。三宅(1993)は、詫び表現が選択される決定要素として、相手の負担の軽重、自分の利益の大小、借りの有無を挙げており、高田(1996)は、日本人は相手から受けた恩恵が大きく、相手の負担が大きい時、詫び表現が増える傾向があると述べている。無論、謝罪内容によりこのような傾向が現れる場合もあると思われるが、本研究においては、反対の結果が現れている。負担度が軽い場合には、謝罪内容も単純であり、責任に関する度合いも低くなるため、簡単に「謝罪定型表現」を用いて謝罪することができるが、負担度が重い場合には、謝罪内容も複雑で、責任に関する度合いにも敏感になり、更に、将来のことやフェイスに関すること、自分の利益の大小等、様々決定要素が関わるため、むしろ、「謝罪定型表現」を用いて謝罪することに対し慎重になる傾向があるのではないかと考えられる。日韓母語話者の謝罪行動の全体的な使用傾向は、負担度が軽い謝罪場面より負担度が重い謝罪場面で類似している傾向が見られた。

Brown and Levinson(1987/田中他訳 2011:17-18, 71)は、普遍的フェイスという概念は、いかなる社会においても、その文化に特有の精緻化を伴うものと考えられるが、豊かな文化的精緻化にもかかわらず、中核となる認識には驚くべき類似性があると主張している。例えば、多くの言語で、軽い要求をする場合は、仲間であることや社会的類似性を強調するような言語使用する傾向があることが観察できるが、一方、やや大きな要求の場合は、人は改まったポライトな言語使用をする(習慣的な間接発話行為、ヘッジ(Hedges)、侵害行為についての謝罪など)。

上記の分析結果を Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス普遍理論」から考えると、友人間の関係で、軽い謝罪をする場合には、「謝罪発話文」を多用しているが、重い謝罪をする場合には、「謝罪発話文」は減り、「状況説明発話文」、「対人配慮発話文」は増える傾向があるのではないかと考えられる。また、反応する側は、重い謝罪をする場合には、「問題解決発話文」を多用する傾向があるのではないかと考えられる。

上記で説明した謝罪行動の類似点を、負担度が軽い場合と重い場合の日本語男性、日本語女性、韓国語男性、韓国語女性の各々の発話文の割合を図で示すと、その特徴がより明確に見られると考えられる。図 6-3 から図 6-6 は、負担度が重い場合を基準に、日韓母語話者における謝罪行動を構成する発話文が多く現れた順序に沿って示した。

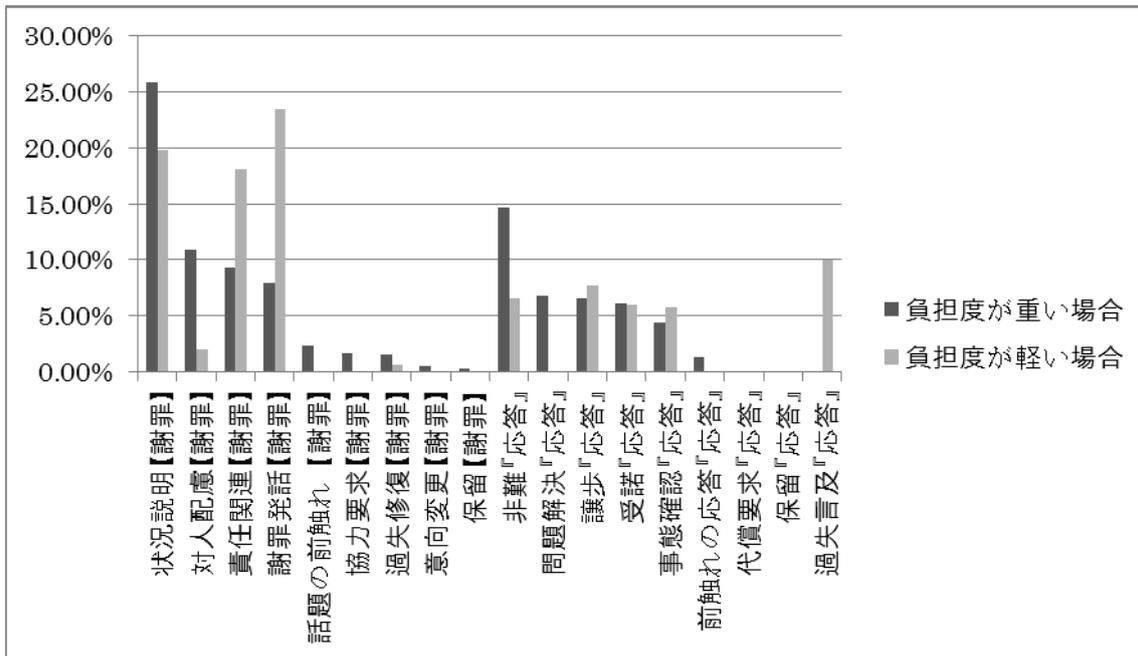


図 6-3 日本語男性における謝罪行動を構成する発話文の割合の比較

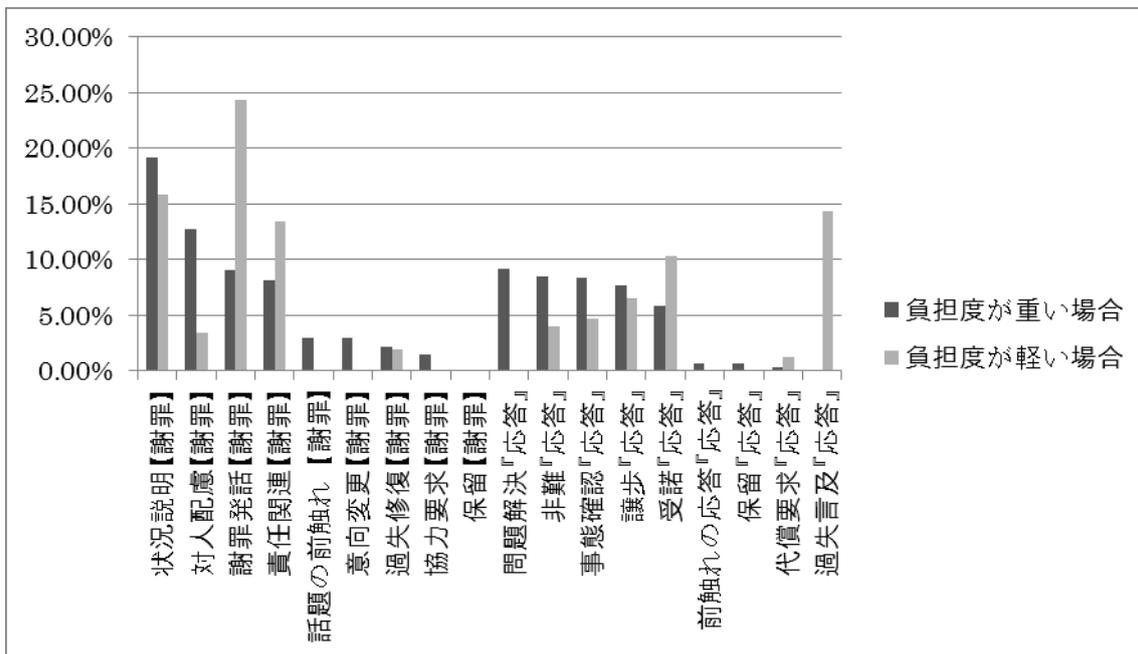


図 6-4 日本語女性における謝罪行動を構成する発話文の割合の比較

図 6-3 と図 6-4 を見ると、日本語男女母語話者は、負担度が重い場合には、「状況説明」、「対人配慮」、「問題解決」の 3 種の発話文が共通的に多く現れ、負担度が軽い場合には、「責任関連」、「謝罪」の 2 種の発話文が共通的に多く現れていることがわかる。

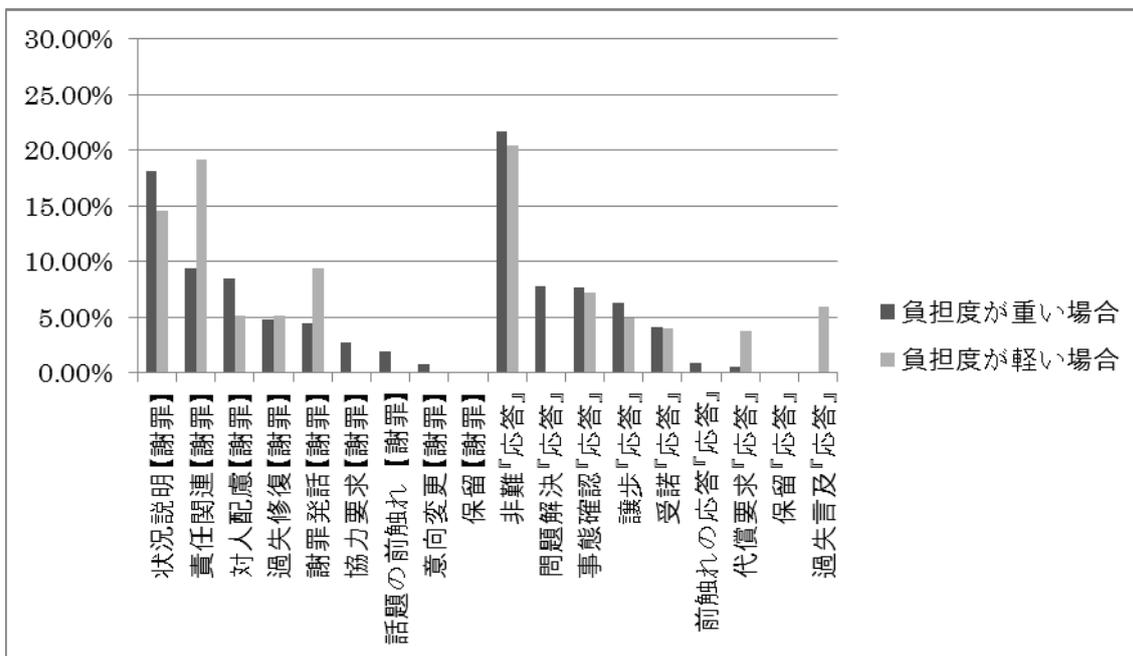


図 6-5 韓国語男性における謝罪行動を構成する発話文の割合の比較

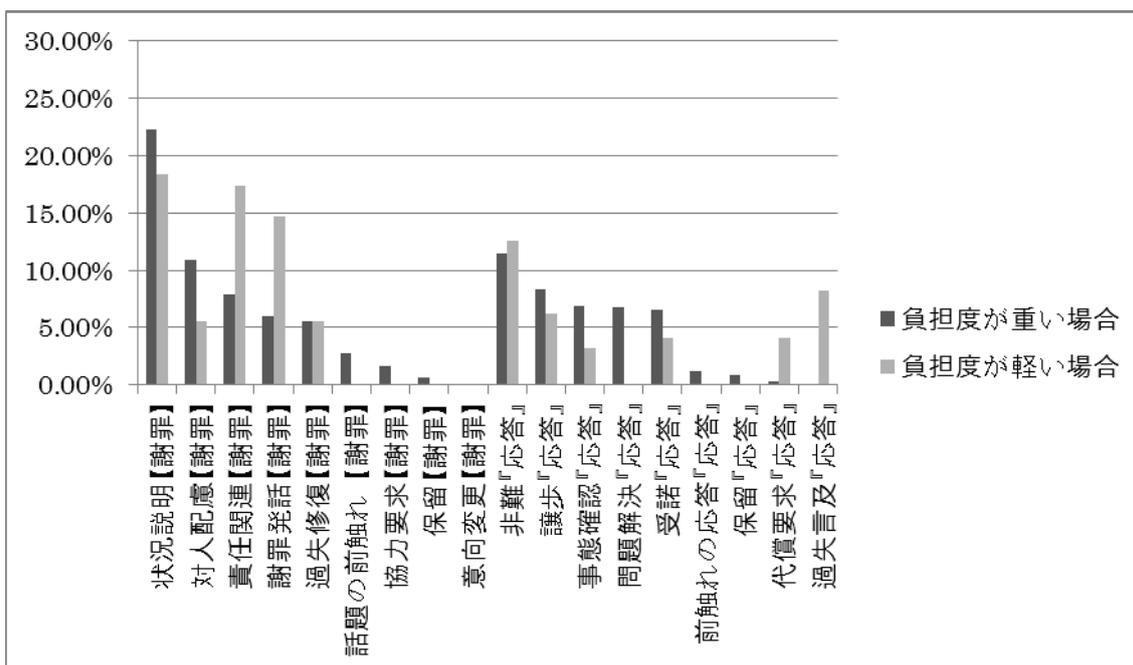


図 6-6 韓国語女性における謝罪行動を構成する発話文の割合の比較

図 6-5 と図 6-6 を見ると、韓国語男女母語話者も、負担度が重い場合には、「状況説明」、「対人配慮」、「問題解決」の 3 種の発話文が共通的に多く現れ、負担度が軽い場合には、「責任関連」、「謝罪」の 2 種の発話文が共通的に多く現れていることがわかる。

宇佐美(2008:18-19)は、「ディスコース・ポライトネス理論」の概念の一つである「フェイ

ス均衡原理(Face-balance principle)」を提唱している。この原理は、「フェイス侵害行為」だけでなく「フェイス充足行為」を加えて捉え、更に、「人間関係の中・長期的な維持の必要性、希望、見通しの有無」という、よりマクロなレベルから話者を捉えている。

軽い謝罪場面では、謝罪内容が軽くて深刻ではないため、謝罪する側は、自分のフェイスを守りたいという欲求よりは、相手のフェイスを侵害したくないという欲求が優先され、「謝罪発話文」が多用されているが、重い謝罪場面では、謝罪内容が重くて深刻であるため、自分のフェイスを守りたいという欲求と相手のフェイスを侵害したくないという欲求が同時に優先され、「謝罪発話文」は減り、代わりに、「状況説明発話文」や「対人配慮発話文」が増えているのではないかと考えられる。また、謝罪される側は、軽い謝罪場面では、相手のフェイスを配慮し、相手のフェイスを侵害したくないという欲求を優先し、謝罪内容を受け入れているが、重い謝罪場面では、自分のフェイスや相手のフェイスを考慮し、「問題解決発話文」も多用しているのではないかと考えられる。つまり、謝罪する事柄が重くなればなるほど、謝罪する側と謝罪される側は、複雑な「フェイス侵害行為」や「フェイス充足行為」を行いながら、「フェイス均衡」のため、互いに働きかけていると考えられる。また、Brown and Levinson(1987/田中他訳 2011: 71)が指摘するように、やや大きな場合は、人は改まったポライトな言語使用をする傾向があり、謝罪の場合は、謝罪する事柄が大きい場合は、「謝罪定型表現」が多く現れる頻度ではなくて、より改まったポライトな言語使用、つまり、日本語の場合、「ごめん系」、「すまない系」よりは「申し訳ない系」、「お詫びする系」等を、韓国語の場合は、「미안하다(ミアンハダ系)」よりは「죄송하다(チェソンハダ系)」等を用いて謝罪する傾向があると考えられる。しかし、本研究は、友人間の会話なので、このような傾向が明確には見られなかった。

更に、負担度が軽い謝罪場面と重い謝罪場面では、日韓母語話者共に、男性より女性の方で、「謝罪発話文」が多く用いられていたが、特に、日本語母語話者より韓国語母語話者で、その傾向が強く現れていた。「謝罪」は、相手のネガティブ・フェイスを配慮するネガティブ・ポライトネス・ストラテジーであるが、岡本(2007)が指摘するように、話し手自身の認められたいというポジティブ・フェイスを傷つける行為でもある。つまり、相手のフェイスと自分のフェイスを同時に考えなければならない言語行動である。言い換えれば、女性は男性に比べ、相手のフェイスを配慮する言語行動を行おうとする傾向があり、男性は女性に比べ、自分のフェイスを傷つけない傾向が強いのではないかと考えられる。次に、負担度が軽い謝罪場面と重い謝罪場面では、日韓母語話者共に、女性より男性の方で、「責任関連発話文」が多く用いられていたが、次の節でより詳細に説明するが、「否定的な責任関連発話文」は、日韓母語話者共に、負担度が軽い場合は、男性の方で多く用いられていた。しかし、負担度が重い場合は、日本語母語話者は女性の方で、韓国語母語話者は男性の方で多く用いられていた。また、「非難発話文」も日韓母語話者共に女性より男性の方で多く用いられていた。「否定的な責任関連発話文」と「非難発話文」は、本研究で設定した謝罪場面において、一番相手のフェイス侵害度が高い発話文であろう。

Lakoff(1975)は、女は人間中心で、自分自身およびお互い同士の心理状態、それぞれの立場に興味を寄せるのに対し、男は事物中心で、外界のものごとに興味をもつと述べている。この指摘のように、謝罪場面においては、男性は、問題になっている事柄を中心に考えているので、互いを責める発話を多く用いていると思われる。しかし、女性は、問題になっている事柄と互いの心理状態、それぞれの立場までも考えているので、互いを責める発話は男性よりは少なく用いているのではないかと考えられる。

以上の分析結果及び考察から考えると、謝罪行動において、日本と韓国という異なる文化、特有の特徴はあるが、中核となる行動には類似性があるのではないかと考えられる。

6.2.1 負担度が軽い場合の日韓母語話者の謝罪行動の分析結果及び考察

本節では、負担度が軽い場合の日韓母語話者の謝罪行動の特徴を見るが、主に、相違点の観点から考察していく。以下の表 6-5 では、日韓母語話者の謝罪行動を構成する発話文の頻度と割合を全体的に示し、どの発話文を多く用いているかを比較した。全体的な使用頻度は、韓国語男性で 582 例、韓国語女性で 436 例、日本語男性で 349 例、日本語女性で 321 例の順であり、日本語母語話者より韓国語母語話者の方で多く用いられており、また、日韓共に女性より男性の方で多く使用されていることがわかる。

表 6-5 負担度が軽い場合の謝罪行動を構成する発話文の頻度と割合

		日本語男性	日本語女性	韓国語男性	韓国語女性
謝罪発話文		82 (23.50)	78 (24.30)	55 (9.45)	64 (14.68)
謝罪関連発話文	前触れ発話文	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
	状況説明発話文	69 (19.77)	51 (15.89)	85 (14.61)	80 (18.35)
	責任関連発話文	<u>*63 (18.05)</u> 肯定 37 (58.73) 否定 26 (41.27)	<u>*43 (13.39)</u> 肯定 37 (86.05) 否定 6 (13.95)	<u>*112 (19.24)</u> 肯定 33 (29.46) 否定 79 (70.54)	<u>*76 (17.43)</u> 肯定 33 (43.42) 否定 43 (56.58)
	対人配慮発話文	7 (2.01)	11 (3.43)	30 (5.15)	24 (5.50)
	過失修復発話文	<u>*2 (0.56)</u>	<u>*6 (1.87)</u>	<u>*30 (5.15)</u>	<u>*24 (5.50)</u>
	協力要求発話文	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
	意向変更発話文	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
	保留発話文	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
	応答関連発	前触れの応答	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
過失言及発話文		35 (10.03)	46 (14.33)	35 (6.01)	36 (8.26)
事態確認発話文		20 (5.73)	15 (4.67)	42 (7.22)	14 (3.21)
非難発話文		<u>*23 (6.59)</u>	<u>*13 (4.05)</u>	<u>*119 (20.46)</u>	<u>*55 (12.62)</u>
譲歩発話文		27 (7.74)	21 (6.54)	29 (4.98)	27 (6.19)
問題解決発話文		0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)

話 文	代償要求発話文	0 (0.00)	4 (1.25)	22 (3.78)	18 (4.13)
	受諾発話文	21 (6.02)	33 (10.28)	23 (3.95)	18 (4.13)
	保留発話文	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
合 計		349 (100.00)	321 (100.00)	582 (100.00)	436 (100.00)

()は割合 * $p < .05$

表 6-5 を見ると、「謝罪発話文」は、日本語母語話者で多く用いられており、「状況説明発話文」も、日本語母語話者で若干多く用いられている。一方、「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」は、韓国語母語話者で多く用いられており、「責任関連発話文」は、韓国語母語話者で若干多く用いられており、特に、「否定的な責任関連発話文」は、日本語女性があまり用いない傾向があると考えられる。また、「謝罪発話文」は、日本語母語話者では大きな差が見られないが、韓国語母語話者では、男性より女性の方で多く用いられ、「責任関連発話文」の中の「否定や回避等の不満の発話文」は、女性より男性の方で多く用いられていた。カイ二乗検定で比較した結果、「責任関連発話文($\chi^2(3)=16.065, p=0.001$)」、「過失修復発話文($\chi^2(3)=15.274, p=0.002$)」では、有意な差が認められたが、「状況説明発話文($\chi^2(3)=6.492, p=0.090, n.s$)」、「謝罪発話文($\chi^2(3)=7.487, p=0.058, n.s$)」、「対人配慮発話文($\chi^2(3)=7.418, p=0.060, n.s$)」では、有意な差が認められなかった⁷⁸。

「応答関連発話文」を検討してみると、「過失言及発話文」は、日本語母語話者で多く用いられており、「非難発話文」や「代償要求発話文」は、韓国語母語話者で多く用いられているが、「事態確認発話文」、「譲歩発話文」は、日韓による明確な差は見られなかった。また、日韓共に「過失言及発話文」や「代償要求発話文」は、男性より女性の方で若干多く用いられ、「事態確認発話文」や「非難発話文」は、女性より男性の方で多く用いられていた。カイ二乗検定で比較した結果、「非難発話文($\chi^2(3)=14.462, p=0.002$)」では、有意な差が認められ、「過失言及発話文($\chi^2(3)=1.853, p=0.603, n.s$)」、「事態確認発話文($\chi^2(3)=4.841, p=0.184, n.s$)」、「譲歩発話文($\chi^2(3)=1.316, p=0.725, n.s$)」、「代償要求発話文($\chi^2(3)=7.603, p=0.055, n.s$)」では、有意な差が認められなかった。

最後に、結果的な発話文である「受諾発話文」の場合、韓国語母語話者より日本語母語話者で多く用いられていたが、カイ二乗検定で比較した結果、有意な差は認められなかった($\chi^2(3)=3.251, p=0.355, n.s$)。

韓国語母語話者は、日本語母語話者より多様な発話文を用いて謝罪行動のやりとりを行っている傾向が見られる。守屋(2007)は、謝罪ストラテジーにおいて、日本語では「直接謝罪表現」、「責任への言及」、「代償の提案」が主で、その他のストラテジーの出現率は大変低いのに反し、韓国語では「原因説明」や「配慮」、「反復しない旨の約束」のストラテジーの出現率が日本語に比べて高く、謝罪の際に多様なストラテジーのパターンを幅広く利用していると述べている。この指摘のように、負担度が軽い謝罪場面においても、多様な

⁷⁸ 統計処理方法として用いられた Kruskal Wallis 検定の結果確認表は、参考資料を参照

ストラテジーのパターンを見せながら謝罪行動のやりとりを行う傾向が韓国語母語話者で多く見られた。

日韓母語話者の謝罪行動で相違点が多く見られたのは、「謝罪発話文」、否定的な「責任関連発話文」、「過失修復発話文」と「過失言及発話文」、「非難発話文」であると考えられる。まず、「謝罪発話文」は、日本語では謝罪を繰り返す傾向がある(池田 1993、ボイクマン・宇佐美 2005、クモハマドナビル 2006 等)と先行研究でも報告されているように、日本語母語話者では多く用いられているが、韓国語男性においては半分にも満たないほどである。しかし、親しい間柄に対して、一々「謝罪定型表現を用いて謝罪」をすると、異文化においては誤解を招く恐れがあると考えられる。韓国語母語話者においては家族や友達のような親しい間柄にはお礼の言葉をあまり使わない傾向がある(尾崎、2005)という指摘があるように、相手がお礼の言葉を多用すると、礼儀正しいという印象より、自分に対して距離を感じているかもしれないという印象を受ける恐れがあるのではないかと考えられる。

次に、謝罪する側の「否定的な責任関連発話文」であるが、自分の過失ではなく、不可避な状況による過失であり、更に、相手にも過失がある場合には、責任を感じる度合いが異なると考えられる。つまり、これらの状況による不満な気持ちを表す「否定的な責任関連発話文」を多く用いる順序は、韓国語男性>韓国語女性>日本語男性>日本語女性の順であった。任・井出(2004 : 92)は、韓国人は相手が親しい同級生や後輩には、自分の素直な不満や迷惑感を口にする傾向が日本人より強いと指摘しているが、本研究においてもこのような傾向が現れたと考えられる。

そして、謝罪する側の「過失修復発話文」であるが、負担度が軽い場合は、主に、「代わりに何かを奢る」という発話を多く用いていた。韓国語母語話者の親しい友人間では、自分の過失を修復するため、埋め合わせの旨を述べる傾向が、日本語母語話者より多く、更に、過失修復発話に関する評価が肯定的ではないかと考えられる。詳細な内容は、以下の節で説明することとする。

続いて、謝罪される側の「過失言及発話文」の使用傾向であるが、韓国語母語話者より日本語母語話者で多く用いられており、謝罪される側が「携帯を忘れてきた」という自分の過失を「謝罪定型表現」を用いて表す傾向は、日本語母語話者で多く現れた。その反面、韓国語母語話者では自分の過失にのみ言及する傾向が多く現れていた。日本語母語話者の「過失言及発話文」を見ると、謝罪する側が遅刻したことに対し謝罪し、謝罪される側は携帯を忘れてきたことに対し謝罪しているやりとりが行われており、特に、日本語女性で多く見られた。

最後に、謝罪される側の「非難発話文」の使用傾向であるが、李善姫(2006)は、日本語母語話者の場合は韓国語母語話者に比べ、間接的な不満表明にとどまる傾向があるのに対し、韓国語母語話者の場合は不満な状況が相手によって引き起こされたことを相手にはっきりと伝えたり、不満な状況の改善や代償を要求したり、相手を脅かしたりする傾向が強いと述べているが、本研究においてもこのような傾向が現れたと考えられる。特に、韓

国語男性がこのような傾向が一番強く、日本語女性がこのような傾向が一番弱いと思われる。親しい友人間の会話なので、相手のフェイスを侵害することに対し、多くの負担を感じていないので、このような傾向が現れたと考えられる。

謝罪行動を相互作用の観点から考えると、日本語男性は、謝罪する側が「状況説明発話文」を多く用いており、「謝罪発話文」も日本語女性と同様に多く用いているが、謝罪される側が自分の「過失を言及する発話文」を使用すると、「責任を否定あるいは回避する」ような発話で不満の気持ちを直接に表わす傾向があり、この3種の発話文を主に用いている。謝罪される側は、「過失言及発話文」を用いながら、女性より「事態確認発話文」、「非難発話文」、「譲歩発話文」を若干多く用いてやりとりし、「受諾発話文」を使用し会話が収束される。

日本語女性は、謝罪する側が「謝罪発話文」を多用しているが、「状況説明発話文」は男性よりあまり用いていない傾向があり、「責任関連発話文」も主に責任を認める発話を用いており、この3つの発話文を主に用いている。謝罪される側は、「過失言及発話文」は多用しているが、「非難発話文」はあまり使用せず、直ちに、相手の謝罪を受け入れる「受諾発話文」を用いる傾向が男性より高いと考えられる。

韓国語男性は、謝罪する側が「責任関連発話文」を多用しているが、不可避な状況に対する不満と相手側にも過失があることに対する不満等を表す、責任を否定あるいは回避する発話を多く用いる傾向があり、「謝罪発話文」は他の研究対象に比べ、あまり用いていなかった。謝罪される側は、自分の過失はあまり言及せずに、直ちに受け入れる「受諾発話文」もあまり使用せず、「非難発話文」を多用し、不満な気持ちを直接に表わす傾向があると考えられる。

韓国語女性は、謝罪する側が、男性より「状況説明発話文」、「謝罪発話文」を多く用いて謝罪し、責任を否定したり回避する発話は用いているが、男性よりあまり使用されていなかった。謝罪される側は、男性より「過失言及発話文」を多く用いているが、「非難発話文」は男性よりあまり用いておらず、「譲歩発話文」と「受諾発話文」のように肯定的な応答を男性より若干多く用いる傾向があると言えよう。

6.2.2 負担度が重い場合の日韓母語話者の謝罪行動の分析結果及び考察

本節では、負担度が重い場合の日韓母語話者の謝罪行動の特徴を見るが、主に、相違点の観点から考察していく。以下の表 6-6 では、日韓母語話者の謝罪行動の頻度と割合を全体的に示し、どの発話文を多く用いているかを比較した。「謝罪発話文」、「謝罪関連発話文」と「応答関連発話文」の全体的な使用頻度は、韓国語男性で 954 例、日本語男性で 750 例、韓国語女性で 682 例、日本語女性で 564 例の順であり、日韓共に女性より男性の方で多く使用されているのがわかる。

表 6-6 負担度が重い場合の謝罪行動を構成する発話文の頻度と割合

	日本語男性	日本語女性	韓国語男性	韓国語女性	
謝罪発話文	59 (7.87)	51 (9.04)	43 (4.51)	41 (6.01)	
謝罪関連発話文	前触れ発話文	17 (2.27)	17 (3.01)	19 (1.99)	19 (2.79)
	状況説明発話文	*194 (25.87)	*108 (19.15)	*173 (18.14)	*152 (22.29)
	責任関連発話文	70 (9.33)	46 (8.16)	90 (9.43)	54 (7.92)
	肯定 70 (100)	肯定 39 (84.78)	肯定 51 (56.67)	肯定 51 (94.44)	
	否定 0 (0.00)	否定 7 (15.22)	否定 39 (43.33)	否定 3 (5.56)	
	対人配慮発話文	82 (10.93)	72 (12.77)	81 (8.49)	74 (10.85)
	過失修復発話文	*11 (1.47)	*12 (2.13)	*46 (4.82)	*38 (5.57)
	協力要求発話文	12 (1.60)	8 (1.42)	26 (2.73)	11 (1.61)
	意向変更発話文	*4 (0.53)	*17 (3.01)	*8 (0.84)	*0 (0.00)
保留発話文	2 (0.27)	0 (0.00)	0 (0.00)	4 (0.59)	
応答関連発話文	前触れの応答	10 (1.33)	4 (0.71)	9 (0.94)	8 (1.17)
	過失言及発話文	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
	事態確認発話文	33 (4.40)	47 (8.33)	73 (7.65)	47 (6.89)
	非難発話文	*110 (14.67)	*48 (8.51)	*207 (21.70)	*78 (11.44)
	譲歩発話文	49 (6.53)	43 (7.62)	60 (6.29)	57 (8.36)
	問題解決発話文	51 (6.80)	52 (9.22)	74 (7.76)	46 (6.74)
	代償要求発話文	0 (0.00)	2 (0.36)	5 (0.52)	2 (0.29)
	受諾発話文	46 (6.13)	33 (5.85)	39 (4.09)	45 (6.60)
	保留発話文	0 (0.00)	4 (0.71)	1 (0.10)	6 (0.88)
合計	750 (100.00)	564 (100.00)	954 (100.00)	682 (100.00)	

()は割合 *p<.05

表 6-6 を見ると、「状況説明発話文」や「謝罪発話文」は、日本語母語話者で若干多く用いられており、「過失修復発話文」は、韓国語母語話者で多く用いられているが、「話題の前触れ発話文」、「責任関連発話文」、「対人配慮発話文」、「協力要求発話文」は、日韓による差はあまり現れなかった。また、「話題の前触れ発話文」、「謝罪発話文」、「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」は、男性より女性の方で多く用いられ、「責任関連発話文」、「協力要求発話文」は、女性より男性の方で若干多く用いられていた。カイ二乗検定で比較した結果、「状況説明発話文($\chi^2(3)=7.982, p=0.046$)」、「過失修復発話文($\chi^2(3)=11.686, p=0.009$)」では、有意な差が認められたが、「話題の前触れ発話文($\chi^2(3)=0.365, p=0.947, n.s$)」、「謝罪発話文($\chi^2(3)=2.337, p=0.505, n.s$)」、「責任関連発話文($\chi^2(3)=3.035, p=0.386, n.s$)」、「対人配慮発話文($\chi^2(3)=0.468, p=0.926, n.s$)」、「協力要求発話文($\chi^2(3)=3.221, p=0.359, n.s$)」では、有意な差が認められなかった。

「応答関連発話文」を検討してみると、日韓による差や男女による差が明確に現れていないという傾向が窺えたが、「非難発話文」は、韓国語母語話者で、特に、男性の方で多用される傾向があり、「譲歩発話文」は男性より女性の方で多く用いられる傾向が見られた。カイ二乗検定で比較した結果、「非難発話文($\chi^2(3)=15.819, p=0.001$)」では、有意な差が認められたが、「前触れの応答($\chi^2(3)=1.651, p=0.648, n.s.$)」、「事態確認発話文($\chi^2(3)=2.944, p=0.400, n.s.$)」、「譲歩発話文($\chi^2(3)=1.141, p=0.767, n.s.$)」、「問題解決発話文($\chi^2(3)=1.028, p=0.794, n.s.$)」、「代償要求発話文($\chi^2(3)=4.635, p=0.201, n.s.$)」では、有意な差が認められなかった。

最後に、結果的な発話文である「意向変更発話文」、「受諾発話文」、「保留発話文」をカイ二乗検定で比較した結果、「意向変更発話文($\chi^2(3)=9.699, p=0.021$)」では、有意な差が認められたが、「謝罪する側の保留($\chi^2(3)=2.033, p=0.566, n.s.$)」、「受諾発話文($\chi^2(3)=1.796, p=0.616, n.s.$)」、「謝罪される側の保留($\chi^2(3)=2.134, p=0.545, n.s.$)」では、有意な差が認められなかった。

日韓母語話者の謝罪行動の相違点として考えられるのは、日本語母語話者の「謝罪発話文」、韓国語男性の「非難発話文」、韓国語母語話者の「過失修復発話文」、日本語女性の「問題解決発話文」と「意向変更発話文」のやりとりであると考えられる。まず、「謝罪発話文」は、負担度が軽い場合と同様に日本語母語話者で多く現れている発話文であるが、佐竹(2005)は、日本語母語話者の「謝罪」は IFID⁷⁹がメインとなって、一番大切なのは IFID だと考えられており、そこに焦点が当てられ、態度がきちんとしていれば IFID だけでも相手の怒りを鎮めることができると報告している。つまり、韓国語母語話者より日本語母語話者の方が、謝罪場面で「謝罪定型表現」が現れることを重要に捉えているため、謝罪場面で「謝罪定型表現」が用いられていないと、より敏感に反応する可能性が窺える。従って、謝罪内容が受け入れない傾向が多かった日本語女性の会話で、「謝罪定型表現」が使用されなかった4会話は、全て受け入れないことで収束していたのではないかと考えられる。

次に、韓国語男性の「非難発話文」の使用傾向であるが、韓国語男性は、日本語母語話者と韓国語女性より直接的な「非難発話文」を非常に多く用いる傾向がある。この傾向は、上記の「否定的な責任関連発話文」と関係があり、韓国語男性のみならず、他の研究対象にも当てはまる共通的なことであると思われる。ボイクマン・宇佐美(2005)は、中国語母語話者は「謝罪を受ける側は、相手の face をそれほど考慮することなく、直接的な非難を行ない、相手の責任を追及する。追求を受けたと感じる謝罪者側は、その非難を自己弁護などによってかわしながら問題解決交渉を進める。」と報告している。これに対し、日本語母語話者は「謝罪を受ける側は、相手の face を尊重しつつ間接的な方法で非難を行なう。それを受けて謝罪する側は自分で自分の責任を認め、その上で問題解決交渉を行なう。」と報告しながら、謝罪する側が取る方策と、謝罪を受ける側の方策とは互いに密接な関係を持

⁷⁹ 発話内効力指示装置(IFID: Illocutionary Force Indicating Device)は、謝罪するときに「謝罪します」や「すみません」と言うなど、「その発話によってどのような行為がなされているかを明らかにする定型的で慣例化した表現」(Blum-Kulka and House and Kaser, eds. (1989: 290)である。

っていると指摘している。無論、男女による相違点は指摘していないが、この報告のように、謝罪行動を含む言語行動は、する側がどのように行動するかによりされる側の行動が変わり、反対に、される側がどのように行動するかによりする側の行動が変わる。

続いて、韓国語母語話者の「過失修復発話文」の使用傾向であるが、負担度の軽重に関わらず、日本語母語話者よりは韓国語母語話者で多く用いられている発話文である。負担度が重い謝罪場面では「紹介してもらったバイト先を辞めるため、代わりに、友達(あるいは他の人)を紹介し、引き続きができるようにする」という内容であるが、特に、韓国語女性で多く用いられている。しかし、「過失修復発話文」に関する評価は、日本社会と韓国社会で異なると考えられる。日本語母語話者の「謝罪」では、「埋め合わせをする」と言ったりすると、かえって不快な思いをさせることもある(佐竹、2005)という指摘や、大谷(2002)は、日本人は全体的に聞き手への「迷惑」と聞き手への「負い目」をアメリカ人より高く評価する傾向があり、日本人には「迷惑」への強い意識が存在することがわかったと報告している。これらの指摘のように、自分が引き起こした不愉快な状況、つまり、相手に「迷惑」をかける不愉快な状況を、自ら解決できず、代案を提示し解決しようとする姿勢が日本社会ではマイナス行動として捉えられる恐れがあり、一方、韓国社会では、積極的に問題になっている事柄を解決するため働きかけているプラス行動として捉えられる可能性があるのではないかと考えられる。「過失修復発話文」は、親しい友人関係という利点を生かし、解決策を提示し、理解を求めている発話文であるため、謝罪される側に肯定的に受け入れられる可能性があると考えられるが、韓国語女性でこれらの働きかけが多く見られた。

最後に、日本語女性の「問題解決発話文」と「意向変更発話文」のやりとりの使用傾向であるが、これらの発話文は日本語女性で一番多く用いられていた。近藤(2002)は、アメリカ人は自分が現況にどう対処するかをはっきり述べるのに対して、日本人は、自分に主体性を持たせるのではなく、You=「相手」の意向あるいは、気持ちを優先して謝罪行為を行っているとして述べている。つまり、謝罪する側は、相手側から問題解決のため責められると、自分に主体性を持たせるのではなく、You=「相手」の意向あるいは、気持ちを優先して、自分の意思をあきらめる傾向が日本語女性にはあるのではないかと考えられる。一方、謝罪される側は、自分のフェイスや第三者のフェイスなどの複雑な問題が絡んでいる謝罪場面では、相手のフェイスを侵害しても、問題になっている事柄を優先し解決しようとする傾向が日本語女性にはあるのではないかと考えられる。

負担度が重い謝罪場面では、全体的な使用傾向は日韓で類似しているが、各々の発話文には相違している点も多く現れていると考えられる。

謝罪行動を相互作用の観点から考えると、日本語男性は、謝罪する側が「状況説明発話文」を多用しており、責任を認める「責任関連発話文」は女性より多く用いられているが、これらの発話文以外は女性よりあまり用いておらず、これを受け、謝罪される側は、「非難発話文」を多用してはいるが、「受諾発話文」は女性よりは若干多く用いている。

日本語女性は、謝罪する側による「謝罪発話文」、「対人配発話文」、「過失修復発話文」

を男性よりは多用しているが、「責任を否定あるいは回避」し、不満な気持ちを表明する発話も若干用いている。これを受け、謝罪される側は、「事態確認発話文」、「譲歩発話文」、「問題解決発話文」を男性よりは多く用いて問題になっている状況を解決するための働きかけをより積極的に行っており、その結果、謝罪される側が自分の意向を変更する発話文が男性より多く現れている。

韓国語男性は、謝罪する側による「責任関連発話文」を多用しているが、責任を否定あるいは回避する発話を女性より多く用いる傾向があり、「協力要求発話文」も女性よりは多く用いており、これらの発話文以外の「状況説明発話文」、「謝罪発話文」、「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」は女性ほど用いず、若干無礼そうな姿勢を見せていると思われる。これを受け謝罪される側は「非難発話文」を女性より 2 倍程度多く用いて積極的に相手を責める姿勢を見せ、その結果、「受諾発話文」が女性よりはあまり現れない傾向があり、謝罪する側が自ら意向を変更する発話文が女性より多く現れている。

韓国語女性は、謝罪する側は、男性より「状況説明発話文」、「謝罪発話文」を多く用いて謝罪し、「責任を認める発話文」、「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」を男性よりは多く用いて、自分の意向を相手に理解させるための働きかけを男性よりは積極的に行っていると思われる。これを受け、謝罪される側も「譲歩発話文」を男性より多く用いており、その結果、謝罪する側が自ら意向を変更する発話文は現れず、「受諾発話文」も男性より多く現れる傾向が見られる。

6.2.3 負担度が軽い場合と重い場合の日韓母語話者の謝罪行動のまとめ

本節では負担度が軽い場合と負担度が重い場合の日韓母語話者の謝罪行動の特徴を全体的に分析し、まず、類似点を中心にポライトネス観点から考察を行った。次に、負担度が軽い場合と重い場合の日韓母語話者の謝罪行動の特徴を相違点の観点から考察し、相互作用の特徴を説明した。

日韓母語話者の謝罪行動の類似点は、まず、負担度が軽い謝罪場面では、日韓母語話者共に、謝罪する側は「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」の 3 種の発話文を主に用いており、謝罪される側は「過失言及」、「事態確認」、「非難」、「譲歩」の 4 種の発話文を主に用いて反応していた。負担度が重い謝罪場面では、これらの発話文に加えて、日韓母語話者共に、謝罪する側は「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」も多く用いており、謝罪される側は「問題解決発話文」も多く用いていた。次に、負担度が重い場合には、「状況説明」、「対人配慮」、「問題解決」の 3 種の発話文が、負担度が軽い場合より、日韓母語話者共に共通的に多く用いられている特徴が見られた。一方、負担度が軽い場合には、「謝罪」、「責任関連」の 2 種の発話文が、負担度が重い場合より、日韓母語話者共に共通的に多く用いられている特徴が見られた。軽い謝罪場面では、謝罪内容が軽くて深刻ではないため、謝罪する側は、自分のフェイスを守りたいという欲求よりは、相手のフェイスを侵害したくないという欲求が優先され、「謝罪発話文」が多用されているが、重い謝罪場面では、謝罪内

容が重くて深刻であるため、自分のフェイスを守りたいという欲求と相手のフェイスを侵害したくないという欲求が同時に優先され、「謝罪発話文」は減り、代わりに、「状況説明発話文」や「対人配慮発話文」が増えているのではないかと解釈した。また、謝罪される側は、軽い謝罪場面では、相手のフェイスを配慮し、相手のフェイスを侵害したくないという欲求を優先し、謝罪内容を受け入れているが、重い謝罪場面では、自分のフェイスや相手のフェイスを考慮し、「問題解決発話文」も多用しているのではないかと解釈した。

しかし、負担度が軽い場合には、「謝罪発話文」、「否定的な責任関連発話文」、「過失修復発話文」と「過失言及発話文」、「非難発話文」で日韓母語話者の謝罪行動で相違点が見られた。まず、「謝罪発話文」は、日本語母語話者で多く用いられていたが、特に、韓国語男性はあまり用いていない傾向が見られ、「否定的な責任関連発話文」を多く用いる順序は、韓国語男性>韓国語女性>日本語男性>日本語女性の順ではないかと考えられた。次に、韓国語母語話者の親しい友人間では、自分の過失を修復するため、埋め合わせの旨を述べる傾向が、日本語母語話者より多く、更に、過失修復発話に関する評価が肯定的ではないかと考えられた。続いて、謝罪される側の「過失言及発話文」は、韓国語母語話者より日本語母語話者で多く用いられており、謝罪される側が「携帯を忘れてきた」という自分の過失を「謝罪定型表現」を用いて表す傾向は、日本語母語話者で多く現れたが、韓国語母語話者では自分の過失にのみ言及する傾向が多く現れていた。最後に、謝罪される側の「非難発話文」は、韓国語男性で一番多く現れ、日本語女性ではあまり現れなかった。

一方、負担度が重い場合には、日本語母語話者の「謝罪発話文」、韓国語男性の「非難発話文」、韓国語母語話者の「過失修復発話文」、日本語女性の「問題解決発話文」と「意向変更発話文」のやりとりで日韓母語話者の謝罪行動で相違点が見られた。まず、韓国語母語話者より日本語母語話者の方が、謝罪場面で「謝罪定型表現」が現れることを重要に捉えているため、謝罪場面で「謝罪定型表現」が用いられていないと、より敏感に反応する可能性が窺える傾向が見られた。次に、韓国語男性は、日本語母語話者と韓国語女性より直接的な「非難発話文」を非常に多く用いる傾向があり、「過失修復発話文」は、韓国語女性で多く見られたが、親しい友人関係という利点を生かし、解決策を提示し、理解を求めている発話文であるため、謝罪される側に肯定的に受け入れられる可能性があると解釈した。最後に、日本語女性の「問題解決発話文」と「意向変更発話文」のやりとりの使用傾向であるが、これらの発話文は日本語女性で一番多く用いられていたが、謝罪される側は、自分のフェイスや第三者のフェイスなどの複雑な問題が絡んでいる謝罪場面では、相手のフェイスを侵害しても、問題になっている事柄を優先し解決しようとする傾向があるが、特に、日本語女性で多く見られており、相手の意向あるいは、気持ちを優先して、自分の意思をあきらめる傾向も日本語女性で多く見られた。

以下では、負担度が軽い場合と負担度が重い場合の日韓母語話者における謝罪行動の特徴をより詳細に説明し、会話例を見ながら、相互作用の特徴を記述していく。

6.3 日韓母語話者における謝罪行動の分析結果及び考察(負担度が軽い場合)

本節では、負担度が軽い場合の日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪行動の類似点と相違点等を明らかにし、相互作用の観点から見られる特徴について述べる。さらに、日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪行動のプロセスを考察した上で、そこから現れる謝罪行動の特徴と対人配慮行動と関連付けて考察する。

6.3.1 負担度が軽い場合の日本語母語話者の謝罪行動の分析結果及び考察

負担度が軽い場合の日本語母語話者の謝罪行動の類似点と相違点を明らかにし、その特徴を考察するが、分析する際に、まず、謝罪行動を抽出分析しそこから見られる現象を考察した後、会話例を通してより詳細に記述していく。

6.3.1.1 負担度が軽い場合の日本語母語話者における謝罪行動の抽出結果及び考察

表 6-7 では、負担度が軽い場合の日本語母語話者の「謝罪発話文」、「謝罪関連発話文」と「応答関連発話文」の頻度と割合を全体的に示し、どの発話文を多く使用しているかを比較した。分類された発話文の全体的な使用頻度は、日本語男性は 349 例であり、日本語女性は 321 例で、女性より男性の方で多く用いられているのがわかる。

表 6-7 日本語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の頻度と割合(負担度が軽い場合)

発話文	日本語男性	日本語女性
状況説明【謝罪】	69 (19.77)	51 (15.89)
謝罪発話【謝罪】	82 (23.50)	78 (24.30)
責任関連【謝罪】	63 (18.05)	43 (13.39)
	<u>*肯定 37 (58.73)</u>	<u>*肯定 37 (86.05)</u>
	<u>*否定 26 (41.27)</u>	<u>*否定 6 (13.95)</u>
対人配慮【謝罪】	7 (2.01)	11 (3.43)
過失修復【謝罪】	2 (0.56)	6 (1.87)
過失言及『応答』	35 (10.03)	46 (14.33)
事態確認『応答』	20 (5.73)	15 (4.67)
非難『応答』	23 (6.59)	13 (4.05)
譲歩『応答』	27 (7.74)	21 (6.54)
代償要求『応答』	0 (0.00)	4 (1.25)
受諾『応答』	<u>*21 (6.02)</u>	<u>*33 (10.28)</u>
合計	349 (100.00)	321(100.00)

()は割合 *p<.05

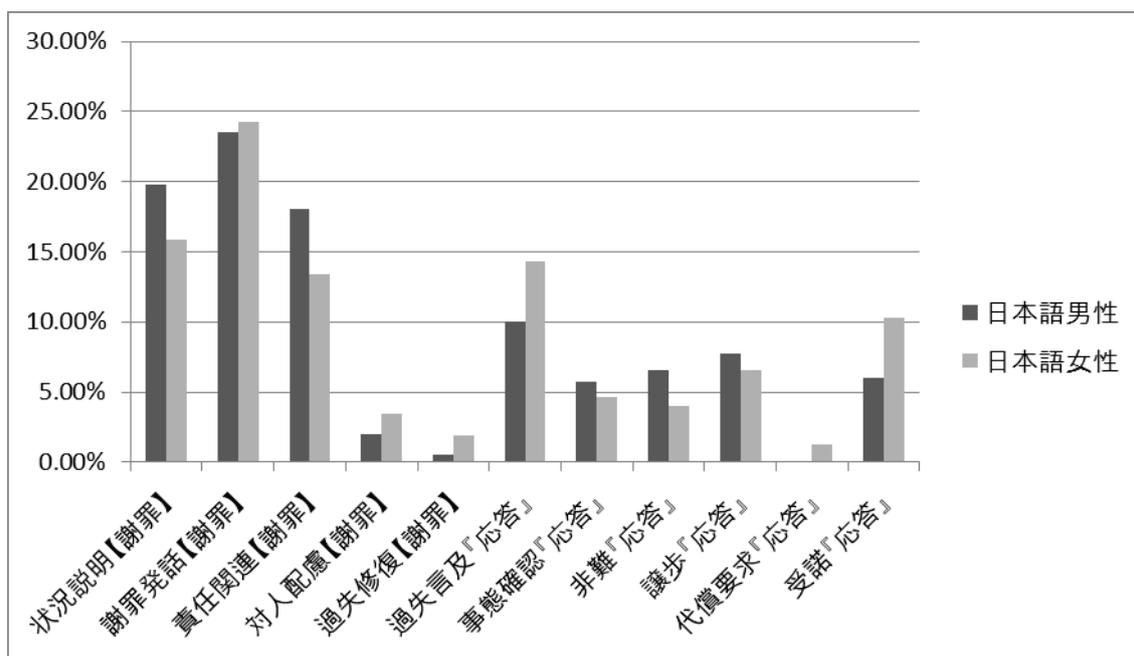


図 6-7 日本語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の総計に占める割合の比較 (負担軽)

表 6-7 を見ると、「謝罪発話文」、「謝罪関連発話文」の日本語男女母語話者は、①謝罪>②状況説明>③責任関連>④対人配慮>⑤過失修復発話文の順に用いられていることがわかる。特に、「謝罪」、「状況説明」、「責任関連」の3種の発話文が、主な発話文であるのが明らかになった。「状況説明発話文」、「責任関連発話文」は、女性より男性の方で多く現れており、「謝罪発話文」、「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」は、男性より女性の方で若干多く現れている。日本語男性と日本語女性の「謝罪発話文」と「謝罪関連発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、有意な差が認められなかった(「状況説明発話文($\chi^2(1)=1.7147, p=0.1904, n.s.$)」、「謝罪発話文($\chi^2(1)=0.0594, p=0.8075, n.s.$)」、「責任関連発話文($\chi^2(1)=2.7217, p=0.0989, n.s.$)」、「対人配慮発話文($\chi^2(1)=1.2915, p=0.2558, n.s.$)」、「過失修復発話文($\chi^2(1)=2.9112, p=0.0880, n.s.$)」)。

また、本研究で設定した負担度が軽い謝罪場面は、「電車が止まってしまい遅刻し、更に、謝罪される側も携帯を忘れて来た」という状況なので、謝罪する側が不満の気持ちを表す「責任否定や回避」等の発話も現れている。表 6-7 の「責任関連発話文」を見ると、日本語男性は、自分の責任を肯定する発話は 63 例中 37 例であり、自分の責任を否定する発話は 26 例表われた。これに対し、日本語女性は、責任を肯定する発話が 43 例中 37 例であり、責任を否定する発話は 6 例しか表われなかった。つまり、女性に比べ男性の方が、不可避な状況により生じた謝罪場面で、更に、相手にも過失がある状況では自分の不満な気持ちを直接的に表す等、相手のフェイスを侵害する行為を多く行っているのではないかと考えられる。「責任を肯定する発話文」と「責任を否定する発話文」をカイ二乗検定で比較した結果、日本語男性と日本語女性の間で有意な差が認められた($\chi^2(1)=9.0485, p=0.0026$)。

次に、「応答関連発話文」の日本語男性の場合、①過失言及>②譲歩>③非難>④事態確認発話文の順に用いられ「代償要求発話文」は使用されなかった。日本語女性の場合、①過失言及>②譲歩>③事態確認>④非難>⑤代償要求発話文の順に用いられた。多く用いられる順序には若干の差があるが、特に、「過失言及」、「譲歩」、「非難」、「事態確認」の4種の発話文が、主な「応答関連発話文」であるのが明らかになった。「応答関連発話文」では、「事態確認発話文」、「非難発話文」、「譲歩発話文」は、女性より男性の方で若干多く現れており、「過失言及発話文」と「代償要求発話文」は、男性より女性の方で多く現れている。日本語男性と日本語女性の「応答関連発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、有意な差が認められなかった(「過失言及発話文($\chi^2(1)=2.3808, p=0.1228, n.s$)」、「事態確認発話文($\chi^2(1)=0.3779, p=0.5387, n.s$)」、「非難発話文($\chi^2(1)=2.1224, p=0.1452, n.s$)」、「譲歩発話文($\chi^2(1)=0.3586, p=0.5493, n.s$)」、「代償要求発話文($\chi^2(1)=3.3750, p=0.05218, n.s$)」)。

また、謝罪行動のやりとりにより表われる結果的な発話文である「受諾発話文」は、女性の方で多く使用されていたが、カイ二乗検定で比較した結果、有意な差が認められた($\chi^2(1)=4.1010, p=0.0428$)。

最後に、謝罪行動を相互作用の観点から考えると、負担度が軽い場合の日本語母語話者は、「応答関連発話文」には若干異なる使用傾向が見られるが、全体的に類似した謝罪行動のやりとりが行われていると考えられる。つまり、用いられる発話文には差があるものの、謝罪する側においては、「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」の3種の発話文が全発話文に占める割合が、男性で61.32%、女性で53.58%と、半分以上の高い割合で用いられていることが分かる。これに対し、謝罪される側においては「過失言及」、「事態確認」、「非難」、「譲歩」の4種の発話文が全発話文に占める割合が、男性で30.09%、女性で29.59%と、謝罪する側の発話に比べあまり用いていないことが分かる。更に、「応答関連発話文」の中で「過失言及発話文」が一番多く用いられているが、「過失言及発話文」は、本研究で設定された謝罪場面により現れた発話文であるため、この発話文を除いて考えると男性で20.06%、女性で15.26%と、日本語母語話者の謝罪される側は、負担度が軽い謝罪場面においては、謝罪する側の謝罪を簡単に受け入れる傾向があるのではないかと考えられる。

しかし、全体的には男女による相違点あまり見られないが、「否定的な責任関連発話文」と「非難発話文」のやりとり、及び「譲歩発話文」と「受諾発話文」の使用傾向には男女による相違点が見られると考えられる。まず、「否定的な責任関連発話文」と「非難発話文」のやりとりにおいては、「自分の過失ではなく不可避な状況による不満や謝罪される側にもある程度過失があることに対する不満」等を否定的に言及する「責任関連発話文」は、男性の謝罪する側が多く用いており、これを受け、男性の謝罪される側も同様に「非難発話文」を女性よりは若干多く用いている傾向がある。つまり、謝罪行動のやりとりにおいて相手のフェイスをあまり配慮しない言語行動は一方の働きではなく、両方の働きにより生じることであるのが分かる。次に、「譲歩発話文」と「受諾発話文」においては、「譲歩発話文」は男性の方で若干多く用いられ、「受諾発話文」は女性の方で多く用いられていた。

このことから、男性の謝罪される側は、謝罪する側の謝罪を直ちに受け入れずに「譲歩発話文」を使用してから「受諾発話文」を使用する傾向が女性より強く、女性の謝罪される側は、謝罪する側の謝罪を直ちに受け入れる「受諾発話文」を使用する傾向が男性より強いのではないかと考えられる。

以上の結果から考えられる負担度が軽い場合の日本語母語話者の謝罪行動のやりとりは、以下の通りである。まず、日本語男性の場合、謝罪する側は「謝罪」、「状況説明」、「責任関連」の発話文を多く用いて謝罪行動を行うが、謝罪される側が自分の「過失を言及する発話文」を使用すると、女性より高い割合で状況に対する不満の気持ちを直接的に表し、責任を否定する発話も使用する傾向があり、謝罪される側は、「非難」と「譲歩」の発話文を女性より若干多く使用してから「受諾発話文」を使用する傾向があるのではないかと考えられる。これに対し、女性の場合、謝罪する側は、男性と同様に「謝罪」、「状況説明」、「責任関連」の発話文を用いて謝罪行動を行うが、状況に対する不満の気持ちはあまり言及しない傾向が見られる。謝罪される側は、「過失言及」、「譲歩」、「非難」、「事実確認」の発話文を用いて応答し、相手の謝罪を受け入れる「受諾発話文」は、男性より高い割合で、若干繰り返し受諾し、更に、直ちに受け入れる傾向があるのではないかと考えられる。

以下では、日本語母語話者の謝罪行動のプロセスが実際にどのようにやりとりされているのかを会話例を通して分析し考察を行う。

6.3.1.2 負担度が軽い場合の日本語母語話者における謝罪行動の相互作用の特徴

ここでは、負担度が軽い謝罪場面の日本語母語話者の謝罪行動のやりとりをより詳細に説明するが、「直接的に受け入れる謝罪行動のやりとり」と「間接的に受け入れる謝罪行動のやりとり」という観点を用いて記述することとする。負担度が軽い場合は、謝罪行動のやりとりの結果全て受け入れることで収束するが、受け入れる謝罪行動の中でも「大丈夫、しょうがない、いや全然等」の言葉を用いて明示的かつ直接的に謝罪を受諾する会話と、これらの言葉は用いていないが結果的に受諾される会話がある。前者を「直接的に受け入れる謝罪行動のやりとり」、後者を「間接的に受け入れる謝罪行動のやりとり」と見なし、分析を行なう。

1) 直接的に受け入れる謝罪行動の日本語母語話者の特徴

直接的に受け入れる謝罪行動のやりとりは、日本語男性は 16 会話中 15 会話現れた。以下では実際の会話例を見ながら詳細に述べる。

<会話例 6-3> 負担度が軽い場合の日本語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
1	JM15	やあ、ごめん、&,	謝罪	na

2	JM15	遅れちゃって。	責任	na
3	JM16	何やってた?(く笑い)。	na	事態確認
4	JM15	すみません、&,	謝罪	na
5	JM15	あのう、電車がさ、あのう、なんか、「線名」が止まってさ。	状況説明	na
6	JM15	で、本当に、あの、電、電話したんだけど、出なくて=。	状況説明	na
7	JM16	=あー、やあー、携帯持って、あ、くるの忘れちゃったから、こっちも連絡取れなかったんだけど、&,	na	過失言及
8	JM16	でも、まあ、あの、前の電車に乗るとか、できたでしょ。	na	非難
9	JM15	うん、ごめん、&,	謝罪	na
10	JM15	あのう、そうなんだよね、ちょっと、今日は寒くてさく笑い)。	責任	na
11	JM16	そっか。	na	その他
12	JM15	家から、違、布団から出られなくて、ちょっとぎり、ぎりぎりだったのは悪かったんだけど…。	責任	na
13	JM16	うん。	na	その他
14	JM15	いや、&,	その他	na
15	JM15	でもごめん。	謝罪	na
16	JM16	うん。	na	その他
17	JM16	《少し間》わかった。← <u>受諾</u>	na	受諾

<会話例 6-3>において、ライン番号 1~6 のやりとりは、JM15 が責任を認めながら謝罪し、JM16 が「何やってた?。」と事態を確認してから、再び JM15 が謝罪して自分が遅れた理由を説明している。その後、JM16 は携帯を忘れて来たという自分の過失について言及しているが、他の方法でより早く来るべきであることを述べて相手を非難している。これを受けて JM15 は、JM16 の過失や不可避な状況による遅刻であることに対する不満等は一切言及せず、ライン番号 9 から 12 にかけて、天気の影響で家からぎりぎり出た自分の責任を素直に認めている。更に、最後に再び「謝罪定型表現」を用いて謝罪し、JM16 は「《少し間》わかった。」(ライン番号 17)と明示的かつ直接的な受諾発話を使用し謝罪を受け入れている。この謝罪行動のやりとりは、JM15 が最初から最後まで自分の責任を認め、4 回も謝罪しながら、謝罪に関する誠実な姿勢を見せているので、JM16 も最初は若干非難発話を用いていたが、簡単に受け入れている。日本語男性は、不満な気持ちは表しているが、感情の衝突は表れず、互いに相手を配慮しながら、謝罪が受け入れられ、収束する会話は、16 会話中 12 会話で 75%程度現れた。また、日本語男性の謝罪行動のやりとりには日本語女性では現れない感情の衝突が表れている会話もある。以下はその例である。

<会話例 6-4> 負担度が軽い場合の日本語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
5	JM17	ごめんね。	謝罪	na
6	JM18	20分も待ったんだよね。	na	非難
7	JM17	やあ、20分位いいじゃないかも、そんなケチケチしないでさ、まあ、どこか早く、行きましようよ。	責任 (不満)	na
8	JM18	寒かったし…。	na	非難
ライン番号 9~16 省略				
17	JM18	<遅れる>{ }ってというのは、どうなのかね=。	na	非難
18	JM17	=だって[↑]。	その他	na
19	JM17	《沈黙 2 秒》だって、電話しても繋がらなかったよ、もう[↓]。	責任(不満)	na
20	JM17	あー、忘れてたんか。	その他	na
21	JM18	うん…。	na	その他
22	JM17	まあ、いや、だから、電車が遅れるのは、不可抗力やから、だから、どうしようもないよ、もう[↓]。	責任 (不満)	na
23	JM17	遅延書持って来ようか、じゃ<笑い>。	対人配慮	na
24	JM18	うーんー、まあ、いいか。 ← <u>受諾</u>	na	受諾

<会話例 6-4>を見ると、JM17 の謝罪に対し、JM18 は「20分も待ったんだよね。」(ライン番号 6)と非難している。すると、謝罪しながら相手を配慮しているような姿勢を見せていた JM17 は「そんなケチケチしないで」と不満な気持ちを表し、JM18 も間接的に再び不満の気持ちを表している。その後、JM18 は JM17 の遅刻に対しての非難をし、これを受けて JM17 は「《沈黙 2 秒》だって、電話しても繋がらなかったよ、もう[↓]。」(ライン番号 19)と、「だって」、「もう」等の言葉を強調しながら不満の気持ちを表している。しかし、JM18 から明示的かつ直接的な受諾発話は表われていないので、再び、この遅刻は自分の過失ではなく、「不可抗力」、「遅延書」等の言葉を用いて不可避な状況によるものであることを強調し不満の気持ちを表し、ライン番号 24 でやっと「うーんー、まあ、いいか。」と JM18 は受諾し謝罪を受け入れている。この謝罪行動のやりとりは、日本語母語話者の男性のみ現れた会話の流れであるが、謝罪する側による不満と謝罪される側による非難のやりとりが行なわれ、一応、JM18 は、受諾はしているが、心地良い受諾ではないような印象が残る。また、日本語男性は日本語女性に比べ自分の不満の感情を直接に相手に伝える傾向があると考えられる。このようなやりとりは、日本語男性の 16 会話中 4 会話で 25%程度現れた。

以下は、日本語女性の場合であるが、「直接的に受け入れる謝罪行動のやりとり」は、女性は 16 会話中 14 会話現れた。以下では実際の会話例を見ながら詳細に述べる。

<会話例 6-5>負担度が軽い場合の日本語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
1	JF03	ごめんね、&,	謝罪	na
2	JF03	かなり遅くなっちゃった、着くの。	責任	na
3	JF04	え、ど、どうしたん？。	na	事態確認
4	JF03	あ、なんか、電車が止まっちゃってさ、最近よく止まるんだよね。	状況説明	na
5	JF03	え、[JF04 名]に電話したんだけど、全然繋がらなくてさ。	状況説明	na
6	JF04	ごめん、携帯忘れたく笑い、家に。	na	過失言及
7	JF03	<2 人笑い>あーそうか、<そうか>{<}.	その他	na
8	JF04	<<笑いながら>ごめん>{>}[↑].	na	過失言及
9	JF03	そうか、そうか、いや全然。	対人配慮	na
10	JF03	うん、忘れたのはしょうがない、っていうか私が悪いんだ。	責任	na
11	JF03	ごめんね本当に=。	謝罪	na
12	JF04	=いや、[JF03 名]は悪くないでしょう、電車だし。	na	受諾
13	JF04	<20分>{>}ぐらいなら全然大丈夫。 ← 受諾	na	受諾

<会話例 6-5>を見ると、JF03 は「かなり」、「遅くなる」、「着く」という言葉を用いて自分の責任を認める発話と「謝罪定型表現」を用いて謝罪し、JF04 はその理由を尋ね、その後、ライン番号 4 と 5 にわたって JF03 は状況を説明し、JF04 は「ごめん、携帯忘れたく笑い」、家に。」(ライン番号 6)と「謝罪定型表現」を用いて謝罪しながら自分の過失に言及している。すると、JF03 は、「<2 人笑い>あーそうか、<そうか>{<}.」(ライン番号 7)のみで、不満の気持ちを表してはいない。日本語男性の会話では、携帯を忘れてきた謝罪される側に対する不満の発話をしている会話が相当見受けられたが、日本語女性は「直接的に受け入れる謝罪行動」では、不満を述べずに「そうか」、「そうなんだ」、「そっか」、「そう」、「へえー」、「本当?」、「えー」、「あー、なかった」等の言葉のみを用いて反応している。このようなやりとりが行なわれてから、JF03 はもう一回謝罪、JF04 は「=いや、[JF03 名]は悪くないでしょう、電車だし。」(ライン番号 12)、「<20分>{>}ぐらいなら全然大丈夫。」(ライン番号 13)と、JF03 に対して、「悪くない」「全然大丈夫」等の言葉を用いて気軽い感じで受諾しているのが分かる。この謝罪行動のやりとりは、両方共謝罪される側の非難は現れず、謝罪する側の謝罪、責任認め、状況説明、対人配慮の発話と謝罪される側の事態確認、過失言及の発話のやりとりのみで謝罪が受け入れられ収束している。日本語女性は、感情の衝突が全然表れず、互いに相手を配慮しながら、謝罪が受け入れられ、収束する会話が多く現れていた。

しかし、以下の<会話例 6-6>のように日本語女性の会話にも遅れたことに対する「非難発話文」は若干表われている。

<会話例 6-6> 負担度が軽い場合の日本語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
1	JF31	ごめん、&,	謝罪	na
2	JF31	遅くなっちゃってすごく。	責任	na
3	JF32	すごい待ったよ。	na	非難
4	JF31	うん、なんか電車が止まっちゃって(うん)、なんか、一応それを知らせようと思って、電話はしたんだけど、<全然繋がらなくて>{<}	状況説明	na
5	JF32	<今日電話持ってくるの忘れちゃったし>{<}	na	過失言及
6	JF31	そう。	その他	na
7	JF32	うん、すごい待ったよ。	na	非難

<会話例 6-6>を見ると、JF31 は遅れたことに対して謝罪し、JF32 は「すごい待ったよ。」(ライン番号 3)と相手によって自分が待たされたことに対して不満の気持ちを表す非難をしている。その後、JF31 は状況を説明し、JF32 は「<今日電話持ってくるの忘れちゃったし>{<}。」(ライン番号 5)と自分の過失を言及し、JF31 は「そう」のみ発話し、更に、JF32 は再び「うん、すごい待ったよ。」(ライン番号 7)と繰り返し非難している。この<会話例 6-6>のやりとりも受諾発話文が表われ収束する。

以下では、「間接的に受け入れる謝罪行動のやりとり」を検討する。

2) 間接的に受け入れる謝罪行動の日本語母語話者の特徴

間接的に受諾されるまでの謝罪行動のやりとりは、男性は 16 会話中 1 会話、女性は 16 会話中 2 会話現れた。以下では実際の会話例を見ながら説明する。

<会話例 6-7> 負担度が軽い場合の日本語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
1	JM31	ごめん、&,	謝罪	na
2	JM31	20分遅れちゃった。	責任	na
3	JM32	え、何で遅れたの?。	na	事態確認
4	JM31	やあ、でもさ、時間に合わせる、電車に乗ろうと思ってたんだけど(うん)、駅に行ってから電車が止まっちゃって、動かなくて=。	状況説明	na
ライン番号 5~21 省略				
22	JM31	僕はちゃんと時間にいつも、時間通り動く人だから、時間通り出たんだけど、電車が止まっちゃったから事故で。	状況説明	na
23	JM32	うんうん。	na	その他

24	JM31	だから、でも電話くれたんだよね(うん)、で僕も電話しようと思ったんだけど(うんうん)、電話、が繋がらなかったから、く何でかわからないけど>{<}。	状況説明	na
25	JM32	<あー、ごめんごめんごめん>{>}俺ね、電、携帯電話持ってくるの忘れてて。	na	過失言及
26	JM31	なに、それ[↑]。	責任(不満)	na
ライン番号 27~37 省略				
38	JM31	うん、遅れちゃったんだけど(うん)、&,,	責任	na
39	JM31	電車動いて、乗って、降りて、&,,	状況説明	na
40	JM31	今、20分遅れちゃった、&,,	責任	na
41	JM31	ごめん。	謝罪	na
42	JM32	あー。	na	その他
43	JM31	まあ20分位だから、どうってことじゃないんじゃない??。	責任(不満)	na
44	JM32	うーん、うんうん。	na	その他
45	JM31	そう、そう思わない?<笑い>。	責任(不満)	na

<会話例6-7>を見ると、JM31は、20分位遅れたことを認めながら謝罪し(ライン番号1、2)、これを受け、JM32は遅れた理由を尋ねている(ライン番号3)。JM31は「電車が止まっちゃった」という理由を何回も言及し、自分が遅れた理由が電車のせいであることを強調しているような発話をし、更に、電車が遅れていることを伝えるために電話したが電話が繋がらなかったため、おかしいと思っていたことを謝罪される側に述べている(ライン番号4と22~24)。その後、JM32は「ごめんごめんごめん、俺ね、電、携帯電話持ってくるの忘れてて。」と、3回も「謝罪定型表現」を用いて謝りながら自分の過失に言及し(ライン番号25)、これを受けて、JM31は「なに、それ[↑]。」と不満そうに述べている。この謝罪行動のやりとりは、最初はJM32が携帯を持ってくるのを忘れたという事実を謝罪する側であるJM31に述べず、公衆電話でJM31に連絡したけど繋がらなかったと若干相手を攻めるような発話をしていたが、やっとライン番号25で持ってくるのを忘れた事実をJM31に伝えたので、JM31は今更これを述べるJM32に対し不満な気持ちを直接に表していると考えられる。しかし、実際の日常会話を考えると、自分にマイナスとして影響するかもしれない事実をわざと述べない場合もままあると考えられる。従って、約束があるのに携帯を持ってくるのを忘れたという事実は確かに自分にとってマイナスなので、最初から自分の過失に言及しない言語行動が現れたのかもしれない。そして、JM31は遅れた責任を認め、状況をもう一度説明し、「謝罪定型表現」を述べて謝罪しているが(ライン番号38~41)、JM32は「あー。」(ライン番号42)、「うーん、うんうん。」(ライン番号44)と直接的に受諾していないため、JM31は何度も自分なりに誠意を持って謝っているのに、相手側の反応が冷たいので、それに対する不満を述べながら会話が終了してしまう。この謝罪行動のやりとりでは、謝罪される側

が最後まで、明示的かつ直接的な受け入れる意を示す言葉を用いず、遠まわしな感嘆詞のみを用いている。負担度が軽い謝罪場面では、明示的かつ直接的に受け入れる意を示すことを謝罪する側は期待しているため、これらの言葉が現れないと、相手のフェイスを侵害する度合いが高くなる恐れがあると考えられる。しかし、明示的かつ直接的な受け入れる意を示す言葉が現れなくても、会話が肯定的な方向で終了する場合もある。これを、以下の日本語女性のやりとりで説明する。

<会話例 6-8> 負担度が軽い場合の日本語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
14	JF13	<ごめ>{>}んね、本当に。	謝罪	na
15	JF14	こっちも携帯忘れてごめんね。	na	過失言及
16	JF13	<笑い>まあ、しょうがないよ。	その他	na
17	JF14	うん、じゃ(ね)注文しようか。	na	その他

<会話例 6-9> 負担度が軽い場合の日本語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
18	JF23	ごめん。	謝罪	na
19	JF24	すみません、家帰ったら携帯見ます(はい)<2人笑い>。	na	過失言及
20	JF24	ごめんなさい。	na	過失言及
21	JF24	えー《少し間》じゃなんか頼もつか。	na	その他

<会話例 6-8>と<会話例 6-9>の謝罪行動のやりとりは、謝罪する側による直接的な受諾発話は最後まで現れていないが、「うん、じゃ(ね)注文しようか。」(ライン番号 17)と「えー《少し間》じゃなんか頼もつか。」(ライン番号 21)と会話の流れが肯定的な雰囲気収束していることから、謝罪が受け入れられたと推測することができよう。謝罪される側による注文の話で会話の雰囲気が肯定な方向に流れていくことが予測され、総合的に見ると、このような謝罪行動のやりとりも結局は受け入れの会話として判断できると考えられる。女性は男性より、たとえ直接的な受諾発話文は用いていなくても、互いに感情の衝突を抑え、相手側を配慮しようとするやりとりを行なう傾向が強いのではないかと判断できる。

以上の結果から、考えられる謝罪行動のやりとりの特徴は、日本語男性の場合、謝罪する側は、相手のフェイスを配慮する言語行動と相手のフェイスを侵害する言語行動を用いて自分の気持ちを直接表しており、謝罪される側も、相手のフェイスを配慮し受け入れることで会話を収束しているが、フェイス侵害度が高い「非難発話文」も用いて自分の気持ちを直接表している。一方、日本語女性の場合、謝罪する側や謝罪される側共に、「否定

的な責任関連発話文」や「非難発話文」は、男性よりあまり用いず、主に、相手のフェイ
スを配慮する言語行動を用いてやりとりし、簡単に謝罪を受け入れる傾向がある。岡本
(2008)は、日本の長い歴史の中で、「優しい」、「控えめ」、「丁寧」、「慎ましい」、「上品」と
いった話し方を「女らしい」とみる見方は支配的であったと指摘していたが、負担度が軽
い謝罪場面では、日本語女性のやりとりでは、このような傾向が見られると考えられる。

6.3.2 負担度が軽い場合の韓国語母語話者の謝罪行動の分析結果及び考察

負担度が軽い場合の韓国語母語話者の謝罪行動の類似点と相違点を明らかにし、その特
徴を考察するが、分析する際に、まず、謝罪行動を抽出分析しそこから見られる現象を考
察した後、会話例を通してより詳細に記述していく。

6.3.2.1 負担度が軽い場合の韓国語母語話者における謝罪行動の抽出結果及び考察

表 6-8 では、負担度が軽い場合の韓国語母語話者の「謝罪発話文」、「謝罪関連発話文」と
「応答関連発話文」の頻度と割合を全体的に示し、どの発話文を多く使用しているかを比
較した。分類された発話文の全体的な使用頻度は、韓国語男性で 582 例であり、韓国語女
性は 436 例で、女性より男性の方で多く用いられているのがわかる。

表 6-8 韓国語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の頻度と割合(負担度が軽い場合)

発話文	韓国語男性	韓国語女性
状況説明【謝罪】	85 (14.61)	80 (18.35)
謝罪発話【謝罪】	*55 (9.45)	*64 (14.68)
責任関連【謝罪】	112 (19.24)	76 (17.43)
	*肯定 33 (29.46)	*肯定 33 (43.42)
	*否定 79 (70.54)	*否定 43 (56.58)
対人配慮【謝罪】	30 (5.15)	24 (5.50)
過失修復【謝罪】	30 (5.15)	24 (5.50)
過失言及『応答』	35 (6.01)	36 (8.26)
事態確認『応答』	*42 (7.22)	*14 (3.21)
非難『応答』	*119 (20.46)	*55 (12.62)
譲歩『応答』	29 (4.98)	27 (6.19)
代償要求『応答』	22 (3.78)	18 (4.13)
受諾『応答』	23 (3.95)	18 (4.13)
合計	582 (100.00)	436 (100.00)

()は割合 *p<.05

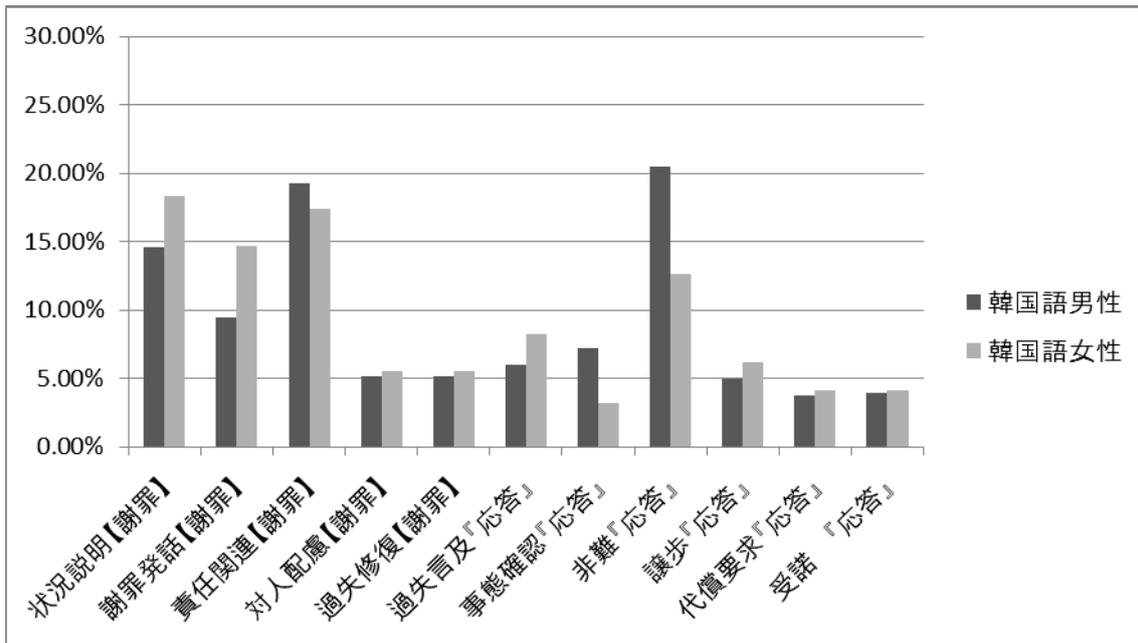


図 6-8 韓国語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の総計に占める割合の比較(負担軽)

表 6-8 見ると、「謝罪発話文」と「謝罪関連発話文」の韓国語母語話の使用傾向は若干異なっていた。男性の場合、①責任関連>②状況説明>③謝罪>④対人配慮＝過失修復発話文の順に用いられ、女性の場合、①状況説明>②責任関連>③謝罪>④対人配慮＝過失修復発話文の順に用いられた。特に、「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」の 3 種の発話文が、主な「謝罪関連発話文」であるが、「対人配慮」と「過失修復」もかなり使用されていた。「状況説明発話文」、「謝罪発話文」は、男性より女性の方で多く現れており、「責任関連発話文」は女性より男性の方で多く用いられたが、「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」は、男女による差が殆ど見られなかった。韓国語男性と韓国語女性をカイ二乗検定で比較した結果、「謝罪発話文($\chi^2(1)=6.6015, p=0.0102$)」では有意な差が認められたが、その他の発話文では、有意な差が認められなかった(「状況説明発話文($\chi^2(1)=2.5724, p=0.1088, n.s$)」、「責任関連発話文($\chi^2(1)=0.5440, p=0.4608, n.s$)」、「対人配慮発話文($\chi^2(1)=0.0608, p=0.8053, n.s$)」、「過失修復発話文($\chi^2(1)=1.9331, p=0.1644, n.s$)」)。

「責任関連発話文」を見ると、韓国語男性は、自分の責任を認める肯定する発話は 112 例中 33 例、自分の責任を認めない否定する発話は 79 例表われ、責任を否定あるいは回避する発話を多く用いていた。これに対し、韓国語女性は、責任を肯定する発話が 76 例中 33 例、責任を否定する発話は 43 例表われ、男性と同様に否定する発話も多く用いられていたが、男性の方が相手のフェイスを侵害する行為を多く行なっているのではないかと考えられる。「責任を肯定する発話文」と「責任を否定する発話文」をカイ二乗検定で比較した結果、韓国語男性と韓国語女性の間で有意な差が認められた($\chi^2(1)=3.8712, p=0.0491$)。

続いて、「対人配慮発話文」と「過失修復発話文」の頻度と割合は、男女により差があまり

り見られないが、使用率は、女性より男性の方で多く現れていた(「対人配慮発話文」は、男性で 75%(16 会話中 12 会話)、女性で 44%(16 会話中 7 会話)、「過失修復発話文」は、男性で 69%(16 会話中 11 会話)、女性で 44%(16 会話中 7 会話)の使用率)。韓国語男性は、「謝罪定型表現」を用いる「謝罪発話文」は、女性ほど用いていなかったが、その代わりに、「対人配慮発話文」や「過失修復発話文」を用いる会話が、女性より多く現れる特徴が見られた。韓国語男性は、直接的な謝罪表現はしていないが、申し訳ない気持ちを他の発話文を用いて表す傾向があるのではないかと考えられる。

次に、「応答関連発話文」の韓国語母語話者の使用傾向は異なっていた。韓国語男性の場合、①非難>②事態確認>③過失言及>④譲歩>⑤代償要求発話文の順に用いられ、「非難発話文」を多用しているが、韓国語女性の場合、①非難>②過失言及>③譲歩>④代償要求>⑤事態確認発話文の順に用いられた。多く用いられた順序には差があるが、男女共に「非難発話文」を多用する傾向があるが、その他の「応答関連発話文」もかなり用いていることがわかる。特に、「過失言及発話文」に、「ごめん、悪い、すまない、申し訳ない」等の「謝罪定型表現」を用いたのは、男性で 16 会話中 2 会話、女性で 16 会話中 1 会話しか表われていなかった⁸⁰。「応答関連発話文」では、「事態確認発話文」、「非難発話文」は、女性より男性の方で多く現れており、「過失言及発話文」、「譲歩発話文」、「代償要求発話文」は、男性より女性の方で多く現れている。カイ二乗検定で比較した結果、「事態確認発話文($\chi^2(1)=7.6932, p=0.0056$)」、「非難発話文($\chi^2(1)=10.7899, p=0.0010$)」では、韓国語男性と韓国語女性の間で有意な差が認められたが、「過失言及発話文($\chi^2(1)=1.9331, p=0.1644, n.s$)」、「譲歩発話文($\chi^2(1)=0.7018, p=0.4022, n.s$)」、「代償要求発話文($\chi^2(1)=0.0801, p=0.7771, n.s$)」では、有意な差が認められなかった。

また、謝罪行動のやりとりにより表われる結果的な発話である「受諾発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、有意な差が認められなかった($\chi^2(1)=0.0201, p=0.8872, n.s$)。

最後に、「謝罪関連発話文」と「応答関連発話文」を用いた謝罪行動を相互作用の観点から考えると、類似点としては、謝罪する側は「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」の 3 種の発話文を男性で 43.3%、女性で 50.46%と、高い割合で使用しているが、他の「対人配慮発話文」や「過失修復発話文」も 5%程度使用し多様な謝罪行動を見せている。謝罪される側は「過失言及」、「事態確認」、「非難」、「譲歩」、「代償要求」の 5 種の発話文を、男性は 42.45%、女性は 34.41%使用しながら相手側に反応している。特に、「過失言及発話文」は、本研究で設定された謝罪場面により現れた特殊な発話文であるため、この発話文を除いて考えると男性は 36.44%、女性は 26.15%であり、韓国語母語話者の謝罪行動のやりとりは多様な発話文を用いて謝罪し、謝罪される側も簡単に受け入れず「非難発話文」等を用いて相手側に不満な気持ちを直接に見せながら、多様な発話文を用いて反応する傾向があるのではないかと思われる。

⁸⁰ 韓国語男性会話:9と16 韓国語女性会話:10

特に、「否定的な責任関連発話文」と「非難発話文」のやりとりと「謝罪発話文」は、男女による相違点が多く見られると考えられる。まず、「否定的な責任関連発話文」と「非難発話文」のやりとりにおいては、「自分の過失ではなく不可避な状況による不満や謝罪される側にもある程度過失があることに対する不満」等を否定的に言及する「責任関連発話文」は、男性が多く用いており、これを受け、男性の謝罪される側も同様に「非難発話文」を女性より多く用いている。特に、他の「応答関連発話文」に比べ、「非難発話文」が圧倒的に多く用いられており、若干乱暴な言葉も多く用いている。本研究が親しい友人間の会話であるため、このようなやりとりが多く現れたと考えられるが、男性はその傾向が強い。次に、「謝罪発話文」は、男性より女性の方で特に多く用いられていたが、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーである「謝罪」を用いて対人配慮行動を行い円滑なコミュニケーション維持のため働きかける傾向は女性の方が強いと考えられる。

以上の結果から考えられる負担度が軽い場合の韓国語母語話者の謝罪行動のやりとりは、男性の場合、謝罪する側は「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」の発話文を用いて謝罪行動を行っているが、「謝罪発話文」は2種の発話文よりあまり用いず、更に、不可避な状況と相手側にも過ちがあることに対する不満な気持ちから、責任を回避したり否定する発話を多用する傾向が見られ、謝罪される側は、「事態確認発話文」や「譲歩発話文」を用いて反応はしているが、「非難発話文」を特に多く用いており、謝罪する側に不満な気持ちを表す傾向があるのではないかと考えられる。これに対し、女性の場合、男性と同様に、謝罪する側は「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」の発話文を用いて謝罪行動を行っているが、「謝罪発話文」は男性より多く用いており、責任を回避したり否定する発話の使用は男性よりは低い割合であった。謝罪される側は、「非難発話文」や「譲歩発話文」を用いて反応しているが、「非難発話文」の使用は男性より少なく、全体的に男性よりは丁寧な謝罪行動のやりとりを行っているのではないかと考えられる。

以下では、韓国語母語話者の謝罪行動のプロセスが実際にどのように進められているのかを会話例を通して分析し考察を行う。

6.3.2.2 負担度が軽い場合の韓国語母語話者における謝罪行動の相互作用の特徴

ここでは、負担度が軽い謝罪場面での韓国語母語話者の謝罪行動のやりとりをより詳細に述べることとする。

1) 直接的に受け入れる謝罪行動の韓国語母語話者の特徴

直接的に受け入れる謝罪行動のやりとりは、韓国語男性で16会話中12会話現れた。以下では実際の会話例を見ながら説明する。

<会話例 6-10> 負担度が軽い場合の韓国語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン	話者	発話内容	謝罪関連	応答関連
-----	----	------	------	------

番号			発話文	発話文
1	KM16	야-, 너 왜 이제와[→].(お前、何で今来るの[→].)	na	非難
2	KM15	어우 야, 그게 좀,《잠시간격》그게 오다가 지하철이 멈춰서.(あう、それがちょっと、《少し間》それが来る途中地下鉄がとまっちゃって。)	状況説明	na
3	KM16	뭐?[↑], 뭐가 멈춰?[↑].(何?[↑]、何が止まった?[↑].)	na	事態確認
4	KM15	=지하철.(=地下鉄。)	状況説明	na
라인번호 5~19 省略				
20	KM15	근데 너무 안 가니깐 일단은 좀 늦은 것 같아가지고 일단은 전화를 할려고 했는데(어) 전화를[↑] 안 받았어, 니가.=.(だけどあまりにも行かないので、ちょっと遅れそうで、一応連絡しようとしたけど(うん) 電話を[↑]受けなかった、お前が=。)	状況説明	na
21	KM16	=야-, 전화가 안 왔-다-고-[강조하는 듯한 목소리로]. (=お前、電話が来な-かった-の-[強調するような声で].)	na	非難
22	KM16	이, 그, 너 지난 번에도 그러더라, 야.=.(お前、前にもそうだったじゃん=。)	na	非難
23	KM16	=전화가 안 왔어, 전화가-.(=電話が来なかったのよ、電話が。)	na	非難
24	KM15	야, 내 핸드폰 봐봐, 전화했지 여기 봐봐, 응, 전화했-다-고-=(.お前、私の携帯見て見、電話したでしょ、これ見て、うん、電話したのよ=。)	責任 (不満)	na
25	KM16	=야 난 안 왔다고, 니 니 핸드폰에 문제가 있는,, (=私には来なかったよ、お前の携帯に問題があつて,,)	-	-
26	KM15	<근데[↑] 아니><【.(<だけど[↑] いや><【。)	その他	na
27	KM16	】<그리고> 너 지금 20 분이나 늦어가지고 전화했는데 나 안 받았다고 늦은 니가 나한테 이러는 거야[↑], 나 전화 안 받았다고[↑]<웃음>[홍분한 듯한 목소리로]. (【<そして>) お前今 20 分も遅れて、電話したけど、私が受けなかったの、遅れた君が私にこうなの[↑]、私が電話受けなかったと[↑]<笑い>[興奮したような声で].)	na	非難
라인번호 28~29 省略				
30	KM16	=아-, 그래[↑], 근데.(=あー、そう[↑]、だけど。)	na	その他
31	KM15	《침묵 2 초》아이씨, 알았어, 내 미안한데, 야-.(《沈黙 2 秒》あーゆ、分かった、私が悪いけど、お前。)	謝罪	na
32	KM15	《잠시간격》그래 씨-, 오늘 저녁은 내가 살게, 그럼 돼?.(《少し間》そう、ちっしょ、今日の夕食は私が奢る、ならいい?。)	過失修復	na

33	KM16	《잠시간격》야, 저녁이 문제가 아니라, 니 기본자세가 야-사람이 <아무리 친구고><[[.]] (《少し間》お前、夕食の問題じゃないでしょ、お前の基本姿勢が お前、人がたとえ友だちだとし)<[[.]]。)	na	非難
34	KM15]]<아-, 진짜><{}>그래가지고[↑] 내가 전화를 했는데, 전화를 니가 안 받더라니깐, 계속… (]]<아-,本当><{}>だから[↑]私が電話したけど、君が電話を受け なかったの、ずっと…。)	責任 (不満)	na
35	KM15	내가 미안해가지고 전[[. (私が悪いから電[[.))	謝罪	na
36	KM16]]전화가 안 왔다고 전-화-가-아[흥분한 듯이 큰목소리로]. (]]電話来なかったのよ、電一話一がー[興奮したよ うな大声で。)	na	非難
ライン番号 37~47 省略				
48	KM16	아[↑] 그래 알았다 뭐-, 우리가 뭐 시발 데이트하러 온 것도 아니고 술 한잔 하러 온건데= (아-[↑]そう分かった、まあ、私たちがもうー、ちっしょ、デートし に来たのじゃなくて、一杯飲みに着てるじゃん。 ←受諾	na	受諾

<会話例 6-10>を見ると、KM16의 非難から 회話が 시작된다. 그 후, KM15의 状況説明과 KM16의 事態確認가 行나와れる. 그리고, KM15는, KM16가 電話를 受け나かつたことに対して若干不满を込めてより具体的に 状況를 説明しているが, KM16는, 「=야-, 電話가 안 왔-다-고-[강조하는 듯한 목소리로]. (=お前、電話가 来な-かつた-の-[強調する ような 声で。)]」(라인番号 21)と、謝罪する側である KM15から 電話가 来なかつたことを 強調しながら 非難している. 非難を受けた KM15「야, 내 핸드폰 봐봐, 電話했지 여기 봐봐, 응, 電話했-다-고-=(お前、私の携帯見て見、電話したでしょ、これ見て、うん、電話したのよ-。)」(라인番号 24)と、自分は本当に 電話したという 事实를 述べて、라인番号 20から 30にかけて、電話に対する 不满と 非難の やりとり가 行な와れている. この やりとり가 行なわれた後、KM15는, 「《침묵 2 초》아이씨, 알았어, 내 미안한데, 야-.(《沈黙 2 秒》あーゆ、分かった、私が悪いけど、お前。)」(라인番号 31)、「《잠시간격》그래 씨-, 오늘 저녁은 내가 살게, 그럼 돼?.(《少し間》そう、ちっしょ、今日の夕食は私が奢る、ならいい?)」(라인番号 32)と、謝罪し 過失修復の 発話를 しているが、誠実な意味の 謝りという 印象は 全然なく、更に、過失修復の 発話も 相手に対する 不满の 気持ち가 直接に 感じられる ぐらい 無礼であると思われる. この 発話を受けた KM16は 更に 興奮して KM15를 責めている. 라인番号 20~36は、KM15と KM16の 感情の 激しい 衝突가 あり、会話收束の 糸口가 見えない ぐらいである. この ような やりとり가 行なわれた 理由の 一つは KM16가 素直に 「携帯를 家に 忘れてきた」という ことを 最後まで KM15に 伝えず、寧ろ、「自分には 携帯가 あつたが、相手からの 連絡は なか

った」ということを強調しているからであろう。しかし、結局ライン番号 48 で、KM16 が、「아[↑] 그래 알았다 뭐-(あ-[↑]そう分かった、)」と謝罪を受け入れる受諾発話をしているので、会話の収束に入ることができる。この謝罪行動は、親しい友人関係だからこそ現れたやりとりであると考えられる。興味深いのは、韓国語男性は、このような激しい感情の衝突がある会話が 16 会話中 8 会話で 50%程度現れた。一般的な常識で考えると非常に無礼に聞こえる会話であるが、友人という特殊な関係の中では、互いにある程度の失礼な行動は理解してくれるだろうという考え方が、親しい友人関係の韓国語男性、特に、若者にはあるのではないかと考えられる。厳美鈴(2004)は、韓国語母語話者は、同じ親しい友達の間では、謙遜、あるいは相手を配慮するやりとりより、相手のフェイスを脅かす恐れのある表現を冗談や、もしくは相手を責めたり、傷つけたりする表現のやりとりを多用し、会話を進めていく傾向があると報告している。

以下の〈会話例 6-11〉のように謝罪される側の非難が一切現れていない会話もある。

〈会話例 6-11〉負担度が軽い場合の韓国語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
16	KM12	20 분 정도면###(웃음). (20 分ぐらいなら###(笑い).)	na	譲歩
17	KM12	그러면 뭐 다친 곳, 다친 데는 없고?= (なら何か怪我した所、怪我したのはない?=.)	na	譲歩
18	KM11	=아니 그러니깐 어-, 내가 다친 건 아니고(음-), 다른 뭐 사고가 있어서 <늦은 거라서>(}. (=いやだからうんー、私に怪我はなくて(うんー)、他の何か事故があって<遅れたので>(}.))	状況説明	na
19	KM12	<아- 연락이 된 거구나>(}. (<あー延着になったのね>(}.))	na	事態確認
20	KM11	어-, 나는 뭐 상관없었지, 근데 너무 근데 오랜만에 만난 건데 너무 네가 힘들게 없는 시간 내 <가지고>(}.,, (うんー、私はまあ関係なくて、だけど本当に久しぶりにあったのに、君が時間もないのに来たけど>(}.,,)	-	-
21	KM12	<<웃음>아니야>(}. (<<笑い>いやいや>(}.))←受諾	na	受諾
22	KM11	온건데 시간이 늦게 돼서.(時間が遅れちゃって。)	対人配慮	na
23	KM12	늦고 싶어 늦은 것도 아니고(아어), 어쩔 수 없는 거지 뭐.= (遅れたがったから遅れたのもないし(あうん)、仕方ないのよまあ=.))←受諾	na	受諾

〈会話例 6-11〉は途中からであるが、KM11 の謝罪、状況説明、責任関連の発話と、KM12 の事態確認、過失言及、譲歩が淡々と行なわれ、ライン番号 17 で「그러면 뭐 다친 곳, 다친 데는 없고?=. (なら何か怪我した所、怪我したのはない?=.)」と、KM12 は、謝罪する側の遅れ

に対して非難せず、心配そうに尋ねている。その後、状況説明と事態確認のやりとりが行われた後、KM11は、「어-, 나는 뭐 상관없었지, 근데 너무 근데 오랜만에 만난 건데 너무 네가 힘들게 없는 시간 내 <가지고><온건데 시간이 늦게 돼서. (うんー、私はまあ関係なくて、だけど本当に久しぶりにあったのに、君が時間もないのに来たけど)<時間が遅れちゃって。)>」(ライン番号 20 と 22)と、このような状況になってしまったことに対して配慮発話をし、これを受け、KM12は、「仕方ない」と、KM11の謝罪を受け入れている。このような謝罪行動のやりとり、つまり、感情の衝突が全然表れず、互いに相手を配慮しながら、謝罪が受け入れられ、収束する会話は、韓国語男性においては 16 会話中 4 会話で 25%程度現れた。

以下は、韓国語女性の場合であるが、「直接的に受け入れる謝罪行動のやりとり」は、女性で 16 会話中 12 会話現れ、男性と同様である。以下では実際の会話例を見ながら説明する。

<会話例 6-12> 負担度が軽い場合の韓国語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連 発話文	応答関連 発話文
1	KF09	아 언니 늦어서 &, (あー姉ちゃん遅れて&,)	責任	na
2	KF09	미안해요<웃음>=. (ごめんなさい<笑い>=.)	謝罪	na
3	KF10	=<약간 웃으면서>야 장난쳐. (=<少し笑いながら>ぶざけるな。)	na	非難
라인번호 4~12 省略				
13	KF10	<전철이><}> 멈추기 쉽지 않은데… (<電車が><}>止まるのめったにないと思うけど…。)	na	非難
14	KF09	그, 그래서 언니한테 계속 전화했는데 안 받는 거예요, <언니 전화【】><}>.(それ、それで姉ちゃんにずっと電話したけど繋がらなかったのよ<ねえちゃん電話【】><}>。)	状況説明	na
15	KF10	【】<나 오늘><}> 따라 핸드폰을 놓고 와갔고. (【】<私今日><}>よりによって携帯置いて着たから。)	na	過失言及
16	KF09	[흥분하면서] 왜 핸드폰을 놓고 와 아아--[무엇인가 두드리는 소리][↑]. (興奮しながら)なぜ携帯を置いてくるのあー[何かを叩く音][↑]。)	責任 (不満)	na
17	KF10	야 늦은게 잘못아니야?. (お前、遅れたのが酷くない?。)	na	非難
18	KF10	장난쳐 와 진짜 어-. (ぶざけるな、わ本当にあー。)	na	非難
19	KF09	아 아무튼 늦어서&, (あーとりあえず遅れて&,)	責任	na
20	KF09	미안해요. (ごめんなさい。)	謝罪	na

21	KF09	내가 근데, 하지만 내탓이 아니야, 난 나름대로 일찍 왔다고=. (私がだけど、でも私のせいじゃない、私は私なりに早く出たのよ=。)	責任 (否定)	na
라인번호 22~25 省略				
26	KF10	오늘 쓰는 거야, 그럼 후식?.(今日奢るの、では後食?。)	na	代償要求
27	KF09	어 그래 알았어(오) 오늘 내가 밥살게. (うん、そうわかった(おー)今日私がお飯買う。)	過失修復	na
라인번호 28~32 省略				
33	KF10	아씨 알았어&, (あゆーわかった&,) ← 受諾	na	受諾
34	KF10	다음부턴 늦지마.(これからは遅れるな。)	na	非難
35	KF09	알았어, 미안해. (わかった、ごめん。)	謝罪	na

<会話例 6-12>を見ると、KF09 が責任を認めながら謝罪し、KF10 が「장난쳐(ぶざけるな)」と事態確認等なしで直ちに激しい言葉を用いて相手を非難している。その後、KF09 の状況説明と KF10 の非難を込めた事態確認が行なわれて、電車が止まって遅刻してしまったと説明している KF09 に対して、若干信じない姿勢を見せている。KF10 の非難に対し、謝罪し状況説明を繰り返していた KF09 は、その状況を伝えようと電話したけど繋がらなかった理由を知り、急に、雰囲気が変わり、「[흥분하면서] 왜 핸드폰을 놓고 와 아아--[무엇인가 두드리는 소리][↑].([興奮しながら]なぜ携帯を置いてくるのあー[何かを叩く音][↑])」(ライン番号 16)と、相手の過失について激しく不満の気持ちを表している。これを受け、KF10 は遅刻したことに対して再び KF09 を非難し、KF09 はもう一回謝罪はしているが、「내가 근데, 하지만 내탓이 아니야, 난 나름대로 일찍 왔다고=. (私がだけど、でも私のせいじゃない、私は私なりに早く出たのよ=。)」(ライン番号 21)と、この遅刻は自分の責任ではないことを明確に言及している。その後、KF10 は非難をしていたが、代償を要求して、会話の収束に向けて働きかけ、KF09 も過失を修復する意志を見せている。そして、結局、KF10 は「아씨 알았어&, (あゆーわかった&,)」と、「아씨(あゆー)」という言葉を用いて、仕方ないので受け入れてあげるような感じの受諾発話をし、今後気を付けることを言及しながら最後にもう一回非難している。巖美鈴(2004)は、相手を攻めたりしつつも、傷つける恐れのある会話を好み、楽しむことは若い韓国語話者の言語使用の特徴であると述べている。この謝罪行動のやりとりは、過失がある相手への謝罪する側の不満と遅刻した相手に対する謝罪される側の非難発話が衝突してはいるが、互いに摩擦を抑えながら、会話収束のために働きかけている。このようなやりとりは、韓国語女性において 16 会話中 4 会話で 25%程度現れた。また、韓国語男性と同様に、謝罪される側の非難が一切現れていない会話もあるが、以下はその<会話例>である。

<会話例 6-13> 負担度が軽い場合の韓国語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連 発話文	応答関連 発話文
1	KF25	야, 미안해 &, (ごめん &,)	謝罪	na
2	KF25	아- 내내내가 너무 늦었지 &,, (あー私が私がかかなり遅れちゃったよね &,)	責任	na
3	KF25	미안해.(ごめん。)	謝罪	na
4	KF26	아- 뭐하다 늦었어?. (何でこんな遅れたの?)	na	事態確認
ライン番号 4~13 省略				
14	KF25	그래갖고 빨리 가야되는데, 시간이 지나가지고 계속 계속 뭐 “잠시 기다리세요 기다리세요” 계속<이러다가>{<,&,, (早く行かなきゃいけないのに“もうしばらくお待ちください”というアナウンスだけずっと<して>{<,&,)	-	-
15	KF26	<나도 그런>{< 적 있어.<(私もそんな>{<ことあった。)	na	譲歩
16	KF25	그러니깐 <계속 뭐>{<,,(だから<ずっと何か>{<,&,)	-	-
17	KF26	<얼나>{< 짜증나.<(イライラ)>{<するよね。)	na	譲歩
18	KF25	기다리라고만 하고 계속 막 그래서 사람들 그 안에서 다 갖혀있었잖아= (ずっと待たされて人々はみんな電車の中に閉じ込められたよ=。)	状況説明	na
19	KF25	=그래갖고 아-미안해, &, (=ってわけで、ごめん&,)	謝罪	na
20	KF25	계속 그래서 갖혀 있었어.(ずっと閉じ込められたの。)	状況説明	na
21	KF26	뭐 난 괜찮아<(웃음)>. (いや、私は大丈夫<(笑い)>。) ← <u>受諾</u>	na	受諾

<会話例 6-13>を見ると、ライン番号 1~4 では、KF25 が責任を認め 2 回謝罪し、これを受け、KF26 が遅れた理由を尋ねている。その後、KF26 は、相手の状況に対しての理解等を示す「譲歩発話文」を用いて反応しており、「뭐 난 괜찮아<(웃음)>. (いや、私は大丈夫<(笑い)>。)」(ライン番号 21)と受け入れる意を示している。

以下では、「間接的に受け入れる謝罪行動のやりとり」を検討する。

2) 間接的に受け入れる謝罪行動の韓国語母語話者の特徴

「間接的に受け入れる謝罪行動のやりとり」は、男女共に、16 会話中 4 会話が現れた。以下では実際の会話例を見ながら説明する。

<会話例 6-14> 負担度が軽い場合の韓国語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連 発話文	応答関連 発話文
-------	----	------	-------------	-------------

21	KM04	아 그건 그래도, 늦는 건 아니지, 예의상 약속시간은 제때 와야지.(まあ、それはそうだけど、遅れるのはどうか、礼儀上約束時間にはちゃんと来なくちゃ。)	na	非難
22	KM03	<웃으면서>아니, 새끼야, 전화를 했는데 안 받았잖아.<笑うながら>いや、このやろう、電話したけど受けなかったじゃん。)	責任 (不満)	na
23	KM04	아니, 늦은 건 늦은 건데[↑][흥분한듯이].(いや、遅れたのは事実でしょ[↑][興奮したように].)	na	非難
24	KM04	일단 먼저 사과를 해야쥐=[↑][흥분한듯이].(とりあえずまず謝るべきじゃん=[↑][興奮したように].)	na	非難
25	KM03	=야- 그래서 미안하다고 오면서 그랬잖아, "아 미안 미안 미안" 이했는데 갑자기 전화 안 받았냐고 그러니깐 벌써 한숨부터 그리고 뭐 세상이 무너진 듯이 한숨부터 쉬고.(=お前、だからごめんとやったでしょ、"あー、ごめんごめんごめん" したのに、急に何で電話受けなかったかと聞くから、すぐひと息して、そして世間が終わったようにひと息からして。)	責任 (不満)	na
26	KM03	친구 걱정도 안되냐?[흥분한듯이]. (友達の心配はしないの?[興奮したように].)	責任 (不満)	na
27	KM03	내가 너가 만약 20 분 정도 늦으면, '아이 애 사고라도 난 게 아닌가?', 이 생각부터 먼저 드는게 인륜아니야??, 그런게[흥분한듯이].(私が君が 20 分ぐらい遅れたら、'何か事故でも起こったかな?', さきこの考えをするのは人倫じゃない??、なのい[興奮したように].)	責任 (不満)	na
28	KM04	아니, 거기서 또 인륜이 왜 나와-[↑]. (何でここでまた人倫何かが出るの-[↑].)	na	非難
29	KM04	<<웃음>><약간 웃으면서>일단 니가 20 분이나 늦었잖아, 씨.<笑い><少し笑いながら>とりあえずお前が 20 分も遅れたじゃん, もう。)	na	非難
30	KM03	《잠시간격》그건 미안해, 사과할게. 《《少し間》それはごめん、謝る。)	謝罪 2	na
ライン番号 31~33 省略				
34	KM04	나도 이번에 핸드폰 안 가지고 온 것도 내 실수니깐&, (私も今回携帯を持って来なかったのは私の 誤りだから&,)	na	過失言及
35	KM04	우리 빨리 밥이나 먹으러 가자. (私たち早くご飯でも食べに行こう。)	na	その他
36	KM03	아- 그래.(そうしよう。)	その他	na

<会話例 6-14>は、途中からであるが、KM03 が謝罪し状況を説明したが、KM04 はなかなか謝罪を受け入れず非難を続けていた。更に、KM04 がライン番号 21 で「礼儀上」等の言葉を用いて非難をしているので、KM03 も携帯を持って来なかったのに電話を受けられなかった KM04 に対し「새끼야(このやろう)」と激しい言葉を用いて不満を表している。これを受け、KM04 は「일단 먼저 사과를 해야쥐=[↑][흥분한듯이].(とりあえずまず謝るべきじゃん=[↑][興奮したように].)」(ライン番号 24)と非難し、KM03 はライン番号 25 から 27 にかけて、「友達」、「事故」、「心配」、「人倫」等の言葉を用いて、友達が遅刻したら事故ではないかと心配するのが人倫ではないかと興奮しながら大げさに言いながら KM04 に対する残念な気持ちを表している。その後、KM04 は「아니, 거기서 또 인륜이 왜 나와-[↑].(何でここでまた人倫何かが出るの-[↑].)」(ライン番号 28)と、KM03 の不満に対して非難し再び相手が遅刻したことを確認する。そして、KM03 は 2 回連続謝罪し、KM04 もようやく自分の過失を言及し、「우리 빨리 밥이나 먹으러 가자.(私たち早くご飯でも食べに行こう。)」(ライン番号 35)と、深刻であった雰囲気のを穏やかにして会話を終了している。この謝罪行動のやりとりでは、直接的な受諾発話文は現れていないが、親しさが感じられる肯定的な発話で、KM04 が謝罪を受け入れていると予測することができる。謝罪行動のやりとりにおいては直接的な受諾発話文の使用が重要であるが、謝罪される側がこれらの発話をしなくても、雰囲気転換されたり、穏やかになったりすることを察して反応することも重要であると考えられる。

また、会話 7(KM13 と KM14 の会話)にも、受諾発話文は現れていないが、KM14 の「이따 밥 먹으면서 술이나 한 잔하지 뭐.(後でご飯食べながら一杯飲もう。)」(ライン番号 48)という発話は、謝罪する側に対する怒りが静まったような発話であると判断される。このように韓国語男性の「間接的に受け入れる謝罪行動のやりとり」には、受諾発話文は現れていないが、謝罪する側に対する怒りが静まったような発話が現れる時点で会話が収束していると判断することも可能であろう。

次は、韓国語女性の「間接的に受け入れる謝罪行動のやりとり」であるが、類似した点が見られる。

<会話例 6-15> 負担度が軽い場合の韓国語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
27	KF06	다음부터 늦지마.(これから遅れるな。)	na	非難
28	KF05	예-.(はいー。)	その他	na
29	KF06	네.(はい。)	na	その他

<会話例 6-15>を見ると、直接的な受諾発話文は用いていないが、「다음부터 늦지마.(これから遅れるな。)」と非難の言葉ではあるが、「これから」という未来の関係維持を表す言葉

を用いて会話を収束させている。また、韓国語女性の会話では、男性と同様に、過失修復や代償要求のやりとりで収束する会話も現れた。以下はその会話例である。

<会話例 6-16> 負担度が軽い場合の韓国語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連 発話文	応答関連 発話文
51	KF14	아싸 맛있는 것(응). (やった、おいしいの(うん。))	na	代償要求
52	KF13	알았어, 오케이.(分かった、オッケー。)	過失修復	na
53	KF14	응, 그러자. (うん、そうしよう。)	na	その他
54	KF14	그래 그럼 좀 먹고 (응) 좀 있다 나가자. (そうね、少し食べて(うん)ちょっと後で出よう。)	na	その他
55	KF13	알았어, 알았어.(分かった、分かった。)	その他	na
56	KF13	시켜 지켜 지켜 지켜 지켜.(注文注文注文注文。)	過失修復	na
57	KF14	응-. (うん。)	na	その他

<会話例 6-17> 負担度が軽い場合の韓国語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連 発話文	応答関連 発話文
14	KF31	내가 맛있는 거 사줄게.(美味しいものおごるよ。)	過失修復	na
15	KF32	그럴까<웃음>[↑]. (そうする<笑い>[↑]。)	na	譲歩
16	KF31	얼른 먹으러 가자.(早く食べに行こう。)	その他	na
17	KF32	그래, 그래.(そうしよう。)	na	その他

<会話例 6-16>と<会話例 6-17>は、謝罪行動のやりとりの収束部分であるが、ここまですべて「受諾発話文」は現れず、過失修復で会話が収束している。<会話例 6-16>は、KF14がおいしいものを奢ってくれることを要求し、KF13が受け入れている。更に、KF13が注文することを4回も連発しながら心地良く奢っている。また、<会話例 6-17>でも、謝罪する側であるKF31が、「내가 맛있는 거 사줄게.(美味しいものおごるよ。)」と過失修復の意志を述べ、謝罪される側であるKF32は受け入れている。これらの会話では、「受諾発話文」は使用されていないが、会話が肯定的な雰囲気収束しているため、結局、謝罪される側が謝罪を受け入れていると判断できると考えられる。

以上の結果から、考えられる謝罪行動のやりとりの特徴は、韓国語男性の場合、謝罪する側は、相手のフェイスを配慮する言語行動と相手のフェイスを侵害する言語行動を用いて自分の気持ちを直接的に表しているが、特に、親しい友人間のやりとりでは、若干無礼そうに不満の気持ちを述べて、相手のフェイスを侵害する傾向が強いと考えられる。また、謝罪される側も、受け入れることで会話を収束させているが、フェイス侵害度が高い「非

難発話文」も多く用いて自分の気持ちを直接的に表しており、謝罪する側と同様に、無礼そうで激しい言葉を用いて相手を責めるような発話を多用している。一方、韓国語女性の場合、謝罪する側は、相手のフェイスを配慮する言語行動と相手のフェイスを侵害する言語行動を用いて自分の気持ちを直接的に表しているが、無礼そうで激しい言葉はあまり用いずに、不満な気持ちを述べている。謝罪される側も「非難発話文」は多用しているが、謝罪する側と同様に、無礼そうで激しい言葉はあまり用いていない。つまり、韓国語男性より韓国語女性の方が、親しい友人間の会話で、相手のフェイスを配慮する言語行動を行っており、会話の雰囲気をもよおかしながら、互いに会話を進行させる傾向が強いと考えられる。

6.4 負担度が軽い場合の日韓母語話者における謝罪行動のまとめ

本節では、負担度が軽い場合の日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪行動の類似点と相違点等を明らかにし、相互作用の観点から見られる特徴を考察した。さらに、日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪行動のプロセスを考察した上で、そこから現れる謝罪行動の特徴と対人配慮行動と関連付けて考察を行った。

日本語母語話者は、男女共に、謝罪する側は、主に「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」の3種の発話文を用いて謝罪行動を行っており、謝罪される側は、「過失言及」、「事態確認」、「非難」、「譲歩」の4種の発話文を用いて謝罪行動を行い、そのやりとりは簡単に受け入れることで収束した。しかし、「状況説明」、「責任関連」は、女性より男性の方で多く現れており、「謝罪」、「対人配慮」、「過失修復」は、男性より女性の方で若干多く現れていた。また、「事態確認」、「非難」、「譲歩」は、女性より男性の方で若干多く現れており、「過失言及」、「代償要求」は、男性より女性の方で多く現れていた。

日本語男性は日本語女性より、謝罪する側は、不可避な状況による不満や相手にも過失があることに対する不満等を直接的に表す「責任否定や回避」などの発話文を多用する傾向があり、これを受け、謝罪される側は、フェイス侵害度が高い「非難発話文」を多用する傾向が見られた。つまり、謝罪する側は、相手のフェイスを配慮する言語行動と相手のフェイスを侵害する言語行動を用いて自分の気持ちを直接表しており、謝罪される側も、相手のフェイスを配慮し受け入れることで会話を収束しているが、フェイス侵害度が高い発話文も用いて自分の気持ちを直接表していた。一方、日本語女性は日本語男性より、謝罪する側は、「謝罪発話文」を繰り返し多用する傾向があり、謝罪される側は、「受諾発話文」を多く用いて受け入れることを簡単に示していた。つまり、謝罪する側や謝罪される側共に、「否定的な責任関連発話文」や「非難発話文」は、あまり用いず、主に、相手のフェイスを配慮する言語行動を用いてやりとりし、簡単に謝罪を受け入れる傾向があった。

次に、韓国語母語話者は、男女共に、謝罪する側は、主に「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」の3種の発話文を用いて謝罪行動を行っているが、日本語母語話者よりは「対人配

慮発話文」や「過失修復発話文」もかなり用いていた。謝罪される側は、「非難発話文」を多く用いていたが、「過失言及」、「事態確認」、「譲歩」、「代償要求」の発話文もかなり用いながら、受け入れることで収束させていた。しかし、「状況説明」、「謝罪」は、男性より女性の方で多く現れており、「責任関連発話文」は女性より男性の方で多く用いられたが、「対人配慮」、「過失修復」は、男女による差が殆ど見られなかった。また、「事態確認」、「非難」は、女性より男性の方で多く現れており、「過失言及」、「譲歩」、「代償要求」は、男性より女性の方で多く現れていた。

韓国語男性は韓国語女性より、謝罪する側は、不可避な状況による不満や相手にも過失があることに対する不満等を乱暴な言葉を用いて直接的に表す「責任否定や回避」などの発話文を多用する傾向があり、これを受け、謝罪される側は、フェイス侵害度が高い「非難発話文」を多用しているが、同様に、乱暴で激しい言葉を用いる傾向があった。つまり、謝罪する側は、相手のフェイスを配慮する言語行動と相手のフェイスを侵害する言語行動を用いて自分の気持ちを直接的に表しているが、特に、親しい友人間のやりとりでは、若干無礼そうに不満の気持ちを述べて、相手のフェイスを侵害する傾向が強いと考えられた。謝罪される側も、受け入れることで会話を収束させているが、フェイス侵害度が高い「非難発話文」も多く用いて自分の気持ちを直接的に表しており、謝罪する側と同様に、無礼そうに激しい言葉を用いて相手を責めるような発話を多用していた。一方、韓国語女性は韓国語男性より、謝罪する側は、「謝罪発話文」や「状況説明発話文」を多用する傾向があり、謝罪される側は、フェイスを配慮する「過失言及発話文」や「譲歩発話文」を男性よりは多く用いて受け入れることを示していた。つまり、謝罪する側は、無礼そうに激しい言葉はあまり用いずに、不満な気持ちを述べており、謝罪される側も「非難発話文」は多用しているが、謝罪する側と同様に、無礼そうに激しい言葉はあまり用いていない等、相手のフェイスを配慮する言語行動を行っていた。

以下では、負担度が重い場合の日韓母語話者における謝罪行動の特徴をより詳細に説明し、会話例を見ながら、相互作用の特徴を記述していく。

6.5 日韓母語話者における謝罪行動の分析結果及び考察(負担度が重い場合)

本節では、負担度が重い場合の日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪行動の類似点と相違点等を明らかにし、相互作用の観点から見られる特徴について述べる。さらに、日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪行動のプロセスを考察した上で、そこから現れる謝罪行動の特徴を対人配慮行動と関連付けて考察する。

6.5.1 負担度が重い場合の日本語母語話者の謝罪行動の分析結果及び考察

負担度が重い場合の日本語母語話者の謝罪行動の類似点と相違点を明らかにし、その特徴を考察するが、分析する際に、まず、謝罪行動を抽出分析しそこから見られる現象を考察した後、会話例を通してより詳細に記述していく。

6.5.1.1 負担度が重い場合の日本語母語話者における謝罪行動の抽出結果及び考察

表 6-9 では、負担度が重い場合の日本語母語話者の「謝罪発話文」、「謝罪関連発話文」と「応答関連発話文」の頻度と割合を全体的に示し、どの発話文を多く使用しているかを比較した。分類された発話文の全体的な使用頻度は、日本語男性で 750 例、日本語女性で 564 例と、女性より男性の方で多く用いられているのがわかる。

表 6-9 日本語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の頻度と割合(負担度が重い場合)

発話文	日本語男性	日本語女性
話題の前触れ発話【謝罪】	17 (2.27)	17 (3.01)
状況説明【謝罪】	*194 (25.87)	*108 (19.15)
謝罪発話【謝罪】	59 (7.87)	51 (9.04)
責任関連【謝罪】	70 (9.33)	46 (8.16)
	肯定 70 (100.00)	肯定 39 (84.78)
	否定 0 (0.00)	否定 7 (15.22)
対人配慮【謝罪】	82 (10.93)	72 (12.77)
過失修復【謝罪】	11 (1.47)	12 (2.13)
協力要求【謝罪】	12 (1.60)	8 (1.42)
意向変更【謝罪】	*4 (0.53)	*17 (3.01)
保留【謝罪】	2 (0.27)	0 (0.00)
前触れの応答『応答』	10 (1.33)	4 (0.71)
事態確認『応答』	*33 (4.40)	*47 (8.33)
非難『応答』	*110 (14.67)	*48 (8.51)
譲歩『応答』	49 (6.53)	43 (7.62)
問題解決『応答』	51 (6.80)	52 (9.22)
代償要求『応答』	0 (0.00)	2 (0.36)
受諾『応答』	46 (6.13)	33 (5.85)
保留『応答』	*0 (0.00)	*4 (0.71)
合計	750 (100.00)	564 (100.00)

()は割合 *p<.05

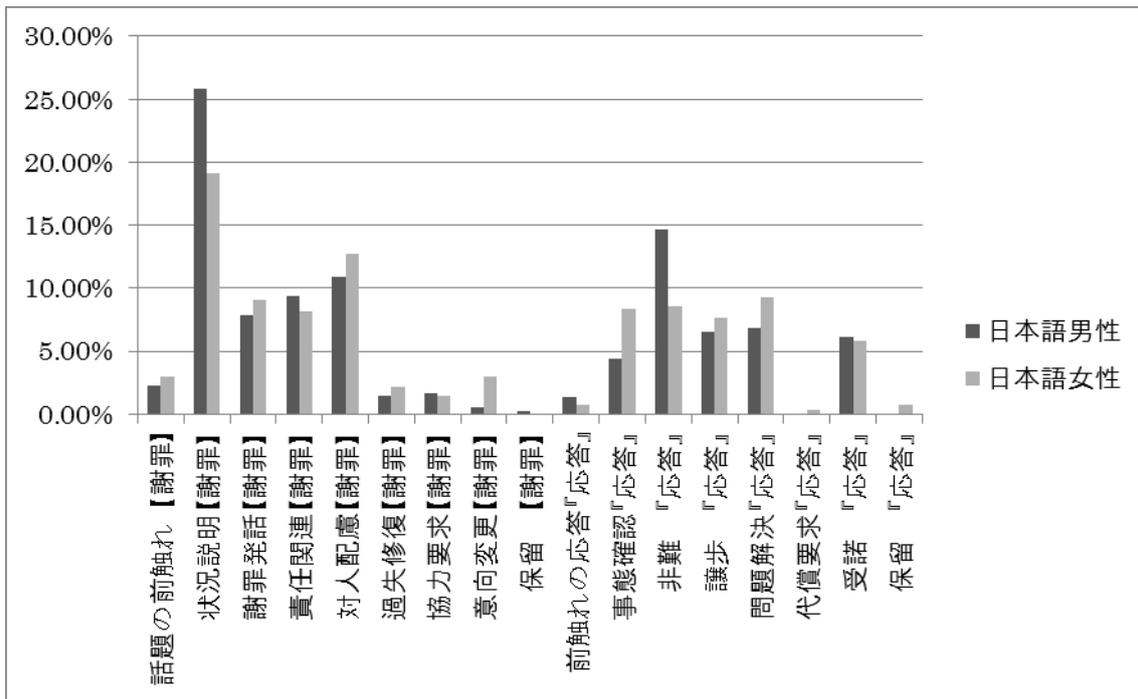


図 6-9 日本語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の総計に占める割合の比較 (負担重)

表 6-9 を見ると、「謝罪発話文」、「謝罪関連発話文」においては、男性の場合、①状況説明>②対人配慮>③責任関連>④謝罪>⑤話題の前触れ>⑥協力要求>⑦過失修復発話文の順に用いられている。一方、女性の場合は、①状況説明>②対人配慮>③謝罪>④責任関連>⑤話題の前触れ>⑥過失修復>⑦協力要求発話文の順に用いられている。使用傾向に若干の差は見られるものの、男女共に、「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」、「対人配慮」の4種の発話文が、主な「謝罪関連発話文」であり、全体的に類似していると考えられる。「状況説明発話文」、「責任関連発話文」は、女性より男性の方で多く現れ、「話題の前触れ発話文」、「謝罪発話文」、「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」は、男性より女性の方で多く現れており、「協力要求発話文」は男女による差があまり見られなかった。日本語男性と日本語女性の「謝罪発話文」と「謝罪関連発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、「状況説明発話文($\chi^2(1)=8.2072, p=0.0042$)」では有意な差が認められたが、「話題の前触れ発話文($\chi^2(1)=0.7137, p=0.3982, n.s$)」、「謝罪発話文($\chi^2(1)=0.5803, p=0.4462, n.s$)」、「責任関連発話文($\chi^2(1)=0.5544, p=0.4565, n.s$)」、「対人配慮発話文($\chi^2(1)=1.0449, p=0.3067, n.s$)」、「過失修復発話文($\chi^2(1)=0.8179, p=0.3658, n.s$)」、「協力要求発話文($\chi^2(1)=0.0708, p=0.7902, n.s$)」では有意な差が認められなかった。

また、本研究で設定した負担度が重い謝罪場面においても、謝罪する側から責任を回避するような発話が現れたが、これは日本語男性には表われず、日本語女性で、46例中7例表われていた。「責任を肯定する発話文」と「責任を否定する発話文」をカイ二乗検定で比較した結果、日本語男性と日本語女性の間で有意な差が認められた($\chi^2(1)=11.3363, p=$

0.0007)。

次に、「応答関連発話文」の日本語男女母語話者の使用傾向は異なっていた。日本語男性の場合、①非難>②問題解決>③譲歩>④事態確認>⑤前触れに対する応答発話文の順に用いられ、「代償要求発話文」は使用されていなかった。日本語女性の場合、①問題解決>②非難>③事態確認>④譲歩>⑤前触れに対する応答>⑥代償要求発話文の順に用いられていた。男女による順序の差はあるものの、「事態確認」、「非難」、「譲歩」、「問題解決」の4種の発話文が主な「応答関連発話文」であることが明らかになった。「応答関連発話文」では、「前触れに対する応答発話文」、「非難発話文」は、女性より男性の方で多く現れており、「事態確認発話文」、「譲歩発話文」、「問題解決発話文」、「代償要求発話文」は、男性より女性の方で多く現れ、日本語男性と日本語女性の「応答関連発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、「事態確認発話文($\chi^2(1)=8.7107, p=0.0032$)」と「非難発話文($\chi^2(1)=11.5325, p=0.00068$)」では有意な差が認められたが、「前触れに対する応答($\chi^2(1)=1.1896, p=0.2754, n.s$)」、「譲歩発話文($\chi^2(1)=0.5882, p=0.4431, n.s$)」、「問題解決発話文($\chi^2(1)=2.6094, p=0.1062, n.s$)」、「代償要求発話文($\chi^2(1)=2.6636, p=0.1840, n.s$)」では有意な差が認められなかった。

負担度が重い謝罪場面において日本語母語話者の使用傾向は全体的には若干相違していると思われるが、問題になっている事柄を解決するための働きかけを積極的かつ多様に行っているのは、日本語女性ではないかと考えられる。無論、「非難発話文」を多く用いて、謝罪する側の意向を変更させることも解決策であるが、「事態確認」、「非難」、「譲歩」、「問題解決」の発話文を多様に用いて、相手のフェイスを侵害したり配慮したりしながら、自分の意向を伝達する働きかけにより、謝罪する側が自ら自分の意向を変更するという結果を高めているのではないかと考えられる。

表 6-9 で示す謝罪行動のやりとりによる結果的な発話文を見ると、謝罪する側による「意向変更発話文」は、女性の方で多く用いられ、「保留発話文」は、女性の方では現れず、男性の方のみ現れた。また、謝罪される側による「受諾発話文」の場合、男性の方で多く使用されており、「保留発話文」は、男性の方では現れず、女性の方のみ現れた。特に、日本語男性には、上記の結果的な発話文には属しない特殊なやりとりが1会話現れたが、これについては下記の相互作用の特徴で詳細に述べる。カイ二乗検定で比較した結果、日本語男性と日本語女性の「意向変更発話文 ($\chi^2(1)=12.5985, p=0.0003$)」と、「謝罪される側の保留発話文($\chi^2(1)=5.3353, p=0.0337$)」では有意な差が認められたが、「謝罪する側の保留発話文($\chi^2(1)=1.5062, p=0.5096, n.s$)」、「受諾発話文($\chi^2(1)=0.0454, p=0.8313, n.s$)」では有意な差が認められなかった。

謝罪行動を相互作用の観点から考えると、日本語母語話者は、負担度が重い場合、謝罪される側の「応答関連発話文」には男女で異なる使用傾向が見られたのに対し、「謝罪関連発話文」においては「状況説明発話文」には差はあるものの、全体的には類似した謝罪行動のやりとりを行っていると言えよう。用いられる発話文には差があるものの、一番最初に現れる「話題の前触れ発話文」と「前触れに対する応答発話文」は、男性で3.60%、女性

で3.72%と、両方共3%程度使用されており、謝罪する側の「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」、「対人配慮」の4種の発話文は、男性で54.00%、女性で49.12%と、ほぼ半数程度が使用していることが窺える。これに対し、謝罪される側は「事態確認」、「非難」、「譲歩」、「問題解決」の4種の発話文を、男性は32.40%、女性は33.68%と、約3割程度が使用していたことがわかった。また、「過失修復」、「代償要求」、「協力要求」の3種の発話文は殆ど使用されていないという共通性が見られた。負担度が重い謝罪場面では、謝罪する側と謝罪される側が問題になっている事柄を解決するため、互いが積極的に働きかけていると言えるだろう。

以上の結果から、負担度が重い場合の日本語母語話者の謝罪行動のやりとりの特徴として、次のようなことが明らかとなった。まず、日本語男性と日本語女性の類似点について見てみると、負担度が重い謝罪場面において、話題に入る前のやりとりは簡単に納め、不愉快な状況を解決するため互いに努力しているという点である。謝罪する側は「状況説明」、「謝罪」、「責任」、「対人配慮」の発話文を用いてより積極的に働きかけており、謝罪される側も簡単には受け入れず、「事態確認」、「非難」、「譲歩」、「問題解決」の発話文を用いて状況を把握しながら問題を解決する働きかけをしている。また、「代償要求」や「協力要求」等、他の発話文に比べ、話題と関連性が少ない発話文はあまり用いない傾向が見られる。

次に、相違点について見てみると、男性の場合、謝罪する側は「状況説明発話文」を用いて自分の状況を相手側に詳細に説明しようとする働きかけを女性より多く行っているという点が挙げられる。また、自分の責任を認める「責任関連発話文」も女性よりは多用しているが、「謝罪発話文」や「対人配慮発話文」等相手側の気持ちを察する働きがある発話文は、女性より若干使用頻度が少なかった。このような傾向は、謝罪される側の応答と関係があると考えられる。本研究では、謝罪される側が、客観的な「事態確認発話文」や相手に対する理解等を表明する「譲歩発話文」を女性ほど多く使用せず、反対に、相手を攻めるような「非難発話文」を女性より多用し、更に「問題解決発話文」も行っていたため、謝罪する側もこのような発話文を多用していたのではないかと考えられる。しかし、謝罪を受け入れる「受諾発話文」は女性より男性が多く用いていることから考えると、互いにこのようなやりとりが行われたとしても謝罪される側が必ずしも受け入れないというわけではないようだ。

これに対し、女性の場合、謝罪する側は、男性と同様に「状況説明発話文」を多用しているが、「謝罪発話文」や「対人配慮発話文」は男性よりは若干多く使用しており、相手側を察するような働きかけを行っていると考えられる。また、謝罪される側も一方的に「非難発話文」を使用せず、「事態確認発話文」や「譲歩発話文」をほぼ同じく使用し、相手側を配慮しており、「問題解決発話文」を男性より多用するといった不愉快な状況を解決するための働きかけも積極的に行っていると考えられる。つまり、女性の場合、たとえ謝罪場面だとしても互いに自分の立場のみを相手に理解させようとする働きかけをすることより、互いに相手の立場も理解しながら謝罪行動を調整しているのではないかと考えられる。こ

のような働きかけにより、謝罪する側も自分の意向をあきらめて変更したり、謝罪される側も受諾する発話をしたりする等の言語行動を行っているとは推測される。しかし、ここで指摘できることは、「謝罪発話文」は男性より女性の方が若干多く用いていたが、前章でも説明したように、日本語女性の会話では、「謝罪定型表現」を用いていない会話も現れているということである。

以下では、日本語母語話者の謝罪行動のプロセスが実際にどのようにやりとりされているのかを会話例を通して分析し考察を行う。

6.5.1.2 負担度が重い場合の日本語母語話者における謝罪行動の相互作用の特徴

ここでは負担度が重い謝罪場面の日本語母語話者の謝罪行動のやりとりを、会話例をみながら説明するが、「受け入れる謝罪行動のやりとり」と「受け入れない謝罪行動のやりとり」という観点を用いて記述することとする。上記にも説明したように、謝罪される側が謝罪する側が持ち出した不愉快な状況を受け入れるやりとりが行なわれるのを「受け入れる謝罪行動」と見なし、反対に、謝罪される側が謝罪する側が持ち出した不愉快な状況を受け入れなかったため、謝罪する側が意向を変更したり、あるいは、謝罪される側と謝罪する側が保留したりするやりとりが行なわれるのを「受け入れない謝罪行動」と見なし、分析を行なう。

1) 受け入れる謝罪行動の日本語母語話者の特徴

受け入れる謝罪行動のやりとりは、男性で 16 会話中 11 会話現れた。以下では実際の会話例を見ながら説明する。

<会話例 6-18> 負担度が重い場合の日本語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
17	JM16	あーうーん、まあ、その紹介する[↑]のにねー《少し間》あもう、知り合いの「第三者の名前」という人に、色々無理を言って頼んだものだから、ちょっと、ちょっとそんなに簡単に辞められると困るな。	na	非難
18	JM15	うーん、まあ、そうなんだけど、ちょっと、バイト先が遠くてさ。	状況説明	na
19	JM16	そっかー、うんんんー。	na	その他
20	JM15	やあ、本当悪いんですけど。	謝罪	na
21	JM16	うんんんんー、やあ、色々お世話になってるからね、「第三者の名前」には=。	na	非難
22	JM15	=確かにいい人なんだけどねー。	対人配慮	na
23	JM16	うんんくんんー>{<}。	na	その他
24	JM15	<時給>{>}がさ、ちょっと安いんだよね。	状況説明	na

25	JM16	そっーかー。	na	その他
26	JM15	時給ね、600 円ちょっと安すぎるちょっと。	状況説明	na
27	JM16	《少し間》そっーかー、それちょっときついね。	na	譲歩
28	JM15	うん、ちょっときつい<###><{>。	状況説明	na
29	JM16	<「第三者の名前」><{>でもちょっときついね。	na	譲歩
30	JM15	「第三者の名前」には本当悪いんだけど(うん)、やあ、あのう、 「JM16 の名前」にも悪いんだけどさ(うん)。	謝罪 2	na
31	JM15	《少し間》うん、もっといい喫茶店があったので。	状況説明	na
32	JM15	《少し間》そっちで、喫茶店じゃない、飲食店か、飲食店があったか ら。	状況説明	na
33	JM15	《少し間》そっちに変えようと思うんだけど[声が段々小さくなる]。	状況説明	na
34	JM16	そっーかー、じゃー、じゃ、まあ、後で「第三者の名前」に言って置 くよ。 ←<u>受諾</u>	na	受諾
35	JM15	うん、ごめんね、&,、	謝罪	na
36	JM15	よろしく。	協力要求	na

<会話例 6-18>は、注文の話の挿入談話から始まり、JM15 が紹介してもらったバイト先を辞めたい意向を JM16 に述べ、JM16 は、ライン番号 17 で自分の大変さを話しながら、「困る」という単語を用いて相手を非難している。これを受け、JM15 は現在のバイト先の距離が遠いことを言い、「謝罪定型表現」を用いて謝罪をしているが、JM16 は、ライン番号 21 で「色々お世話になってるからね、「第三者の名前」には=。」と、JM15 が辞めると、紹介してくれた自分の立場が困ることを暗示して非難を続けている。その後、JM15 は、「=確かにいい人なんだけどねー。」(ライン番号 22)と、辞めたいという自分の意向を継続し説明するのではなく、一旦、JM16 が紹介してくれた所の人が「いい人」であるということに言及し、JM16 の怒りを収めようとする対人配慮発話を用いている。その後、ライン番号 24 から 28 にかけて、辞めようとする大きな理由の一つである「時給の安さ」に言及し、JM16 の理解を求めながら説明をしている。この説明を受けて、JM16 は、前は継続して非難をしていたが、「《少し間》そっーかー、それちょっときついね。」(ライン番号 27)、「<「第三者の名前」><{>でもちょっときついね。」(ライン番号 29)と、たとえ、自分が紹介してくれたバイト先だとしても、「時給 600 円」はきついと、JM15 のバイト先を変更したいという意向を理解し、一歩譲っている様子が窺える。そして、JM15 は、バイト先の第三者と JM16 に再びお詫びの気持を表した上で、「もっといいバイト先」に移りたいという意向を説明しているが、明確に伝達せずに「《少し間》そっちに変えようと思うんだけど[声が段々小さくなる]。」(ライン番号 33)と、若干遠まわしな表現を使用して、申し訳なさそうに説明している。すると、JM16 は、ライン番号 34 で、「そっーかー、じゃー、じゃ、まあ、後で「第三者の名前」に言って置くよ。」と、JM15 の意向を受け入れ、更に、バイト先の第三者に自分が言うのと協力することにまで言及して

いる。これを受け、JM15 は再び謝りながら相手の協力を要求し、会話が終了している。この謝罪行動のやりとりで、JM15 は「状況説明」、「謝罪」、「対人配慮」の発話文を適切に用いて、自分の責任を認めてはいるが、あまりにも安い「時給」という明確な理由を挙げて、謝罪される側である JM16 を説得しようとしている。これに対し、JM16 も最初は非難発話文を用いていたが、自分も理解できる問題があることを認め、結果的に受け入れているのだと考えられる。しかし、以下の会話例のように互いに感情的な衝突はあるが、受け入れられるやりとりもある。

<会話例 6-19> 負担度が重い場合の日本語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
1	JM17	申し訳ないんだけど、&,	謝罪	na
2	JM17	今やってるバイトは…、《少し間》ちょっと時給が安いし、実は、新聞で[↑]もっといいバイト見付けたんだ。	状況説明	na
3	JM17	本当に紹介してもらって&,	対人配慮	na
4	JM17	申し訳ないけど、&,	謝罪	na
5	JM17	そっちにしようと思ってるだ。	状況説明	na
6	JM18	えー、でも、だって、やあ、なんか、俺も店長に無理言って、その一、“この人いい人だから”って勧めて。	na	非難
7	JM18	《少し間》だから、それで辞めるのはどうかなと思うんだけど。	na	非難
8	JM17	やあ、本当申し訳ないと思ってるんだけど。	謝罪	na
9	JM17	やっぱり、時給がいいし、しかも家も近くてさ、&,	状況説明	na
10	JM17	だいたい、こっちの方が色々、本当に申し訳ないと思ってる。	謝罪	na
11	JM17	どうか[↑]。	対人配慮	na
12	JM18	じゃ、何で、まずこの仕事にしようとしたのかっていうの。	na	非難
13	JM17	やあ、ほとんど見付からなくて、あんたしか頼る所がなかったというか。	責任	na
14	JM18	=やあ、でも、それだと、探せば色々あったんじゃないかなと思う。	na	非難
15	JM17	《沈黙 2 秒》そうね[小さな声で]。	その他	na
16	JM17	やあ、その時は見付からなかったんだよ。	責任	na
17	JM18	やあ、もう俺の立場どうなるわけって。	na	非難
18	JM17	やあ、だから、そこは申し訳ないって謝ってる。	謝罪	na
19	JM18	まあ、それは、じゃ、店長に直接、	-	-
20	JM17	まあ、じゃ、はい。	その他	na
21	JM18	謝罪しに【。←受諾	na	受諾

<会話例 6-19>を見ると、ライン番号 1~5 では、JM17 は「申し訳ない」という丁寧な「謝罪定型表現」を用いながら、紹介してもらったバイト先を変えようとする理由を説明し、これを受け、JM18 は、自分の努力等について言及し、辞めることに対して否定的な考えを持っていることを伝えている。その後、JM17 は再び状況説明をしながら「謝罪定型表現」を用いて謝罪し、「どうか[↑]。」(ライン番号 11)と、不愉快な状況に対する相手の考えを尋ねて、自分勝手な決断を避けようとする働きかけを見せていると考えられる。しかし、JM18 は、最初にバイト先を自分に頼んだ JM17 の無責任な行動を非難し、JM17 は、「やあ、ほとんど見付からなくて、あんたしか頼る所がなかったというか=。」(ライン番号 14)と、当時このような行動をしてしまった自分の責任を認めているような発話をしている。更に、ライン番号 16 で、繰り返して当時は見付からなかったと責任関連発話をしているが、JM18 は、自分の立場の悪さを挙げながら非難する姿勢を継続している。すると、JM17 は、「やあ、だから、そこは申し訳ないって謝ってる。」(ライン番号 18)と、謝罪はしているが、誠実な謝罪である印象ではなく、寧ろ、継続して謝罪し、繰り返して状況説明をしているにも関わらず、JM18 の非難の姿勢が変わらないことに対する不満が窺えるような発話をし、JM18 も「まあ、それは、じゃ、店長に直接謝罪しに【】。」(ライン番号 19、21)と、仕方なく JM17 の意向を不満そうに受け入れている。この謝罪行動のやりとりは、結果的には JM18 が受け入れてはいるが、心地良く JM17 の意向を受け入れるという印象はない。JM17 は自分の意向を変更せずに謝罪はしているが継続して状況を説明しながら相手を説得しようとし、JM18 も自分の意向を変更しない相手に対する不満は残ったまま、仕方なく受け入れている。また、以下の会話例のように謝罪する側も多様な発話文を用いて謝罪し、謝罪される側も多様な発話文を用いて応答し、結果的に受け入れられる会話も見られた。

<会話例 6-20> 負担度が重い場合の日本語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
18	JM26	《沈黙 3 秒》やあ、まあ、確かに[↑]《少し間》まあ君がこの 2 ヶ月間バイト頑張っただけど、まあ僕も君にちゃんとお世話になっているし《少し間》色々お世話になってるけど、&,、	na	譲歩
19	JM26	や、さすがに、2 ヶ月でバイト辞められるのはね…。	na	非難
20	JM25	《沈黙 3 秒》なん、なんとかかないかな。	対人配慮	na
21	JM26	やあ、僕も本当に先輩に本当無理言って頼んでんだから、君が辞めると、その僕のバイトでの立場がなくなっちゃうんだけど。	na	非難
22	JM25	《沈黙 4 秒》そっか、本当に、本当にごめんね。	謝罪	na
23	JM25	《少し間》でも本当に、こ、この、せつかくも、今まで何ヶ月も探して見付けた安件だから。	状況説明	na

24	JM25	この、どうしてもこれまでにない《少し間》ね、場、場所だったからね、本、どうしても応募したいんだよ。	状況説明	na
25	JM26	場所の問題なの？。	na	事態確認
26	JM25	場所的にもそうだし【。	状況説明	na
27	JM26	】何のバイトなの？。	na	事態確認
28	JM25	あのう、飲食店。	状況説明	na
29	JM26	うん？、〈飲食店は、今やってるバイト??〉〈〉。	na	事態確認
30	JM25	〈新しい、なんだけど〉〈〉、また新しい所で、家の近くで見付けたの。	状況説明	na
31	JM26	《沈黙 2 秒》うーん、え、でもさ、それだったら、また新しいバイトが見付かったら[↑]、その、次のバイトもさ、同じような理由でさ、辞めちゃうんじゃないの。	na	非難
32	JM26	だから、その今回、まあ、遠くても、君は 2 ヶ月間頑張ってきたから、もっと頑張れば、あのう、給料も上がるだろうし[→]。	na	問題解決
33	JM25	今が 900 円じゃんって、新しいどこ 1200 円なんだよ。	状況説明	na
ライン番号 34～47 省略				
47	JM26	《沈黙 2 秒》やあ、僕も、僕が、その先輩に、その、無理言って頼んだ時は、もう、「JM25 の名前」君はとてまじめで、絶対途中で辞めることなんてしない[↑]、本当に熱心な学生だからお願いします、雇ってください”と言って、無理言って頼んだんだけど、本当にこれ、どうやって説明すればいいの？、僕は。	na	非難
48	JM25	やあ、僕が言うよ、これは。	責任	na
49	JM25	《少し間》もう、君に頼るのも申し訳ないから、僕になんとかするから。	責任	na
50	JM25	ただ、一応言う前に君に相談したくて。	状況説明	na
51	JM26	《沈黙 5 秒》うーんー。	na	その他
52	JM26	でも、まあ、僕もこの件で、その君とその友人関係を辞めたり、したくないから。	na	譲歩
53	JM25	うんうん。	その他	na
54	JM26	じゃ君から、その先輩に、	-	-
55	JM25	うんうん。	その他	na
56	JM26	《少し間》直接。 ← 受諾	na	受諾

<会話例 6-20>のライン番号 18 の前までのやりとりは、JM25 が連続して謝罪しながら状況説明をし、JM26 の非難が繰り返行なわれていた。そして、ライン番号 18 で JM26 は最初に譲歩をしているような発話をしているが、最後は「や、さすがに、2 ヶ月でバイト辞められるのはね…」と、非難の強さは若干弱まっているものの、バイトの期間を挙げながら非難

している。これを受け、JM25 は相手の意向を聞き、JM26 は自分の立場の悪さを話しながら繰り返し非難をしている。その後、ライン番号 23 から 30 にかけて、JM25 の状況説明と JM26 の事態確認の発話文がやりとりされた後、再び、JM26 は新しいバイトも同じ理由で辞めるかもしれないと相手を非難し、時給も上がるので継続してほしいと説得している。しかし、JM25 は意向を変更せずに「今が 900 円じゃんって、新しいどこ 1200 円なんだよ。」(ライン番号 33)と、時給の差が大きいことを挙げながら繰り返し説明し、その後、JM25 の説得と JM26 の非難が行なわれている。そして、ライン番号 47 で、JM26 は再び最初 JM25 を紹介してあげるため自分が行なった努力を詳細に話しながら非難しているが、JM25 はバイト先を変えることに対する話を自ら行い、責任を負うことを述べながらより積極的に説得をしている。これを受け、JM26 は悩んではいるが、「でも、まあ、僕もこの件で、その君とその友人関係を辞めたり、したくないから。」(ライン番号 52)と、これまで継続していた非難を止めて、「友人関係」等に言及し、譲歩の意を示している。そして、「じゃ君から、その先輩に《少し間》直接。」と、自分を介さず自ら説明することを求めながら、相手の意向を受け入れることを表している。この謝罪行動のやりとりを見ると、上記の会話例と比べ受諾する発話文が遅く現れ、更に、謝罪する側とされる側両方が多様な発話文を交換しながら、互いが自分の意向を貫徹させるため積極的に働きかけていると考えられる。しかし、謝罪される側が譲歩する姿勢を見せることにより受け入れられ、会話は収束している。

以下は、日本語女性母語話者の会話例であるが、受け入れられる謝罪行動のやりとりは、女性で 16 会話中 8 会話現れた。

<会話例 6-21> 負担度が重い場合の日本語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
7	JF13	なんか、うん、せっかく(うん)、すごい色々無理して(うん)、紹介してもらったんだけど(うん)、その「JF14 名」から(うん)、今紹介してもらったバイト(うん)、やってたんだけど、&,、	対人配慮	na
8	JF13	うん、ちょっと、もうちょっと違うバイトをして見ようかなって<思い>【。	状況説明	na
9	JF14	】<え、でも>【、2ヶ月も続けたわけじゃん(うん)、だから、そこまで続けられたっていうのは(うん)、やっぱ少しは向いてる要素があったんじゃない?。	na	問題解決
10	JF13	うーん、そうだよね<2 人笑い>。	その他	na
11	JF14	<うん>【。	na	その他
12	JF13	<うん>【。	その他	na
13	JF13	でもやっぱり(うん)、結構、なんか先輩とかも(うん)、ちょっと厳しかったりして、なんか(うん)、やって結構つらいっていうのが正直あつ	状況説明	na

		て。		
14	JF14	あー、でもうちが紹介したのはさ、一人すごい頼れる先輩がいたじゃん。	na	問題解決
15	JF13	うんうん、<まあ>{<}</>。	その他	na
16	JF14	<店長>{<}</>の人(うん)、あの人に色々相談とか(うん)もつとしたら?。	na	問題解決
17	JF13	うーんー、<笑いながら>そうなんだけど、でもなんかどうしても(うん)、ちょっと一人(うん)いやな(ああー)先輩がいて(うんうんうん)、その人はちょっと、なんか自分的にはもううんか(うん)、つらい見たいな<笑い>,,	-	-
18	JF14	あああー。	na	その他
19	JF13	<あつて>{<}</>。	状況説明	na
20	JF14	<そっか>{<}</>。	na	その他
21	JF13	うん。	その他	na
22	JF14	えー、仕事が向いてないっていうよりは(うん)、人間関係が<いやなんだ>{<}</>。	na	譲歩
23	JF13	<そうそう>{<}</>、うん。	その他	na
24	JF14	<そうか>{<}</>。	na	その他
25	JF13	<そう>{<}</>。	その他	na
26	JF13	だから、本当に申し(うんうん)訳(うんうん)ないんだけど…。	謝罪	na
27	JF14	そうだよ(うん)、人間関係は結構(うん)重要な要素だからね=。	na	譲歩
28	JF13	=うん、そう、なんか、うん、それをちょっと言おうと思って(うん)、今日は,,	-	-
29	JF14	うん、分かった。 ← 受諾	na	受諾
30	JF13	呼んだんだけど。	状況説明	na
31	JF14	うん、じゃさうふうな感じで店長さんにもうちから言ってみよ。 ↑ 受諾	na	受諾

<会話例 6-21>は、挨拶の挿入談話と前置き談話のやりとりの後、ライン番号 7 から本題に入り、JF13 は「紹介してもらった」という恩恵の言葉を 2 回繰り返しながら相手を配慮して会話をスタートし、バイト先を変えたい自分の意向を伝えている。しかし、JF14 は、JF13 の会話を遮って「2 ヶ月も続けたのは向いている要素があるから」等との発話をし、問題解決のための働きかけをしている。その後、若干会話が中断してから、再び、JF13 は、バイトを変更しようとする理由を説明し、JF14 は問題を解決しようとするが、「紹介してもらったバイト先の人間関係の問題」という明確な理由により継続して非難あるいは問題解決の発話は出来ず、「えー、仕事が向いてないっていうよりは(うん)、人間関係が<いやなんだ>{<}</>。」(ライン番号 22)と、JF13 の大変さを共感しているような発話をしている。そして、ラ

イン番号 26 で JF13 は丁寧に謝罪し、JF14 は「人間関係は結構重要な要素」と言いながら譲歩をし、結局、「うん、じゃそうふうな感じで店長さんにもうちから言ってみよ。」(ライン番号 31) と、JF13 の意向を受け入れて受諾する発話をする。この謝罪行動のやりとりで興味深いのは、JF13 が持ち出したバイト変更の理由であるが、負担度が重い謝罪場面のロールカードには、「時給がより多くて、距離も近いバイト先を見付けた」という設定条件が書かれていたが、JF13 はこのような条件は一言も言及せず、「人間関係の問題」を挙げている。本研究で収集した会話は、ロールプレイ会話であるが、協力者らは不愉快な状況を解決するため自ら適切な対応策作り、働きかける様子が伺われる。また、全体的な謝罪行動のやりとりは、JF14 の非難の発話も現れず、JF13 の意向を受け入れているので、互いに相手を配慮しながら会話の収束に向けて働きかけている。しかし、日本語女性の受け入れる謝罪行動のやりとりにおいても、日本語男性と同様に、感情的な衝突はあるが結果的に受け入れて収束する会話も現れた。以下はその会話例である。

<会話例 6-22> 負担度が重い場合の日本語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連 発話文	応答関連 発話文
13	JF24	】<ちよっと>{>}待って、てか、「JF23 名」が(うん)勝手に申し込んだバイトならまだ私も(うん)。	na	非難
14	JF24	私が頼んだやつじゃん、今やってるバイトって(うん)。	na	非難
15	JF24	なんか、そういうことされるの、こっちとしてもなんかその、面子が立たないっていうかなんか。	na	非難
16	JF23	ううんー、それはそっちでちよっとお願いしてあって、&,、	責任	na
17	JF23	本当悪いんだけど、&,、	謝罪	na
18	JF23	でも、こう、なんていうの、バイト選ぶのも私が自分で選んでいいわけだし、&,、	責任 (不満)	na
19	JF23	本当悪いんだけど、&,、	謝罪	na
20	JF23	うんー、そう言おうと思ったんだけど…。	状況説明	na
21	JF24	えー、なんかそれちよっと無責任じゃない?。	na	非難
ライン番号 22~28 省略				
29	JF23	ごめんなさいなんだけど…。	謝罪	na
30	JF24	じゃあ「JF23 名」がちゃんと、その店長さんに話'はんし'付けるんだったら、私に迷惑とかかかんないんだたらく別に>{>}【。← 受諾	na	受諾

<会話例 6-22>は、ライン番号 13~15 を見ると、JF24 は、「勝手」、「面子が立たない」等の言葉を用いて直接的に相手を非難し、JF23 は、一応謝罪はしているが、「でも、こう、なんていうの、バイト選ぶのも私が自分で選んでいいわけだし、&,、」(ライン番号 18)と、JF24 の非難に

対する不満の気持ちを表し、互いに感情的な衝突が起こってる。これを受けて、JF24 は、更に非難の強度を上げ「無責任」であると再び JF23 を責める。その後、JF24 が事態を確認し、JF23 は状況を説明してから、最後に再び謝罪定型表現を用いて謝罪をし、JF24 が「じゃあ「JF23 名」がちゃんと、その店長さんに話'はんし'付けるんだったら、私に迷惑とかかかんないんだったら<別に><>【。】と、不満は抱いているが、仕方なく受け入れているような印象で受諾発話文を発している。特に、受諾発話文の中で、「自分に迷惑を掛からないように」と言及することは、反対に考えると、JF23 のバイトを変更しようとする行動は自分に迷惑をかけることであることを明示的に表していると思われる。この謝罪行動のやりとりは、受け入れられることで会話は収束してはいるものの、謝罪される側の直接的な非難と謝罪する側の不満という否定的な感情の衝突が起こり、互いのフェイスを傷つけているのが見受けられた。

以上の結果から、受け入れる謝罪行動の特徴として、日本語男性の場合、謝罪する側は、主に、相手のフェイスに配慮する言語行動を用いながら自分の意向を説明しているが、謝罪される側は受け入れるよう積極的に繰り返し働きかけという傾向が見られた。また、謝罪される側は、フェイス侵害度が高い「非難発話文」を多く用いているが、フェイスに配慮する「譲歩発話文」も用いながら交渉を行っており、友人である謝罪する側の立場を考えて結局受け入れることを示している。これに対し、日本語女性の場合、謝罪する側は、フェイス侵害度が高い不満な気持ちを表す傾向も若干見られが、主に、相手のフェイスに配慮する言語行動を用いながら自分の意向を説明している。また、謝罪される側は、フェイス侵害度が高い「非難発話文」は用いているが、「事態確認」、「問題解決」、「譲歩」の発話文を多用して反応しており、友人である謝罪する側の立場を考えて結局受け入れることを示している。

2) 受け入れない謝罪行動の日本語母語話者の特徴

受け入れられない謝罪行動のやりとりは、男性で 16 会話中 5 会話現れた。以下では実際の会話例を見ながら詳細に述べる。

<会話例 6-23> 負担度が重い場合の日本語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
76	JM12	《少し間》だから、せめて、その、なに、夏までは、やってもらわないと(うん)、やってもらわないかなって、気がするし(うん)、別に、たん、そう、そゆう、なんだろう、夏に忙しくなることを見込んで(うん)、で、たぶん、雇ってくれたん、だろうと(ああ)思うから、そいう、ことも考えての、なに、そいう考えなのかなと思うし(うーん)。	na	問題解決
77	JM11	《沈黙 3 秒》そっか。	その他	na

78	JM11	《沈黙 2 秒》どの位の時期かね?、大体。	過失修復	na
79	JM12	これからかな(うんうん)、一番 1 年で忙しくなる時期だし(うん)。	na	問題解決
80	JM11	《沈黙 2 秒》後何ヶ月位?。	過失修復	na
81	JM12	まあ夏までだから、そう、後まあ 2 ヶ月。	na	問題解決
82	JM11	2 ヶ月<か>{<}>。	過失修復	na
83	JM12	<別に>{>}その[↑]。	na	その他
84	JM12	《少し間》夏が終わったら、まあ(うん)辞めるなりで、その、相談してもいいと思うけど。	na	問題解決
ライン番号 85~100 省略				
101	JM12	《少し間》別にまだ(うんうん)、そう何つうの、まったくの新人っていうわけでもないし(ああ)、何つうの、まあまだベテランでもないけど、まあ 2 ヶ月もやって来てるわけだから(うん)、何つうの、その一、本当に入って1週間、どこなら、まあ、分かる気がするけど、まあ 2 ヶ月もやって来たんだから(うん)、せめて、まあもうちょっとっていう[声が段々小さくなる]。	na	問題解決
102	JM11	《沈黙 4 秒》その忙しい時期夏に入るのは、オーケー、と、まあ、減らしつつになるけど、オーケーとして。	過失修復	na
103	JM11	《沈黙 6 秒》もう1個の方も試してみてだめかね??。	過失修復	na
104	JM12	《少し間》まあ、別にいいけど、別、試すのは(うん)いいんだけど、別に、だから、その、夏までには(うん)辞めないでほしいなっていうのが、こっちの希望であって。	na	問題解決
105	JM11	うん。	その他	na
106	JM11	《少し間》分かった、夏一、までは、やあ、減らすかもだけど、とか、減らすと思うけど、続けてみる。 ← <u>意向変更</u>	意向変更	na

<会話例 6-23>は、ライン番号 76~84 にかけて、JM12 は、「これからかな(うんうん)、一番 1 年で忙しくなる時期だし(うん)。」(ライン番号 79)、「まあ夏までだから、そう、後まあ 2 ヶ月。」(ライン番号 81)と、最低 2 ヶ月は続けるよう求め、JM11 も不愉快な状況を持ち出した自分の過失を修復するため、「続けるならどの位の期間なのか」等、自分の意向を一步譲るような姿勢を見せている。そして、JM12 はライン番号 101 と 104 で最後に再びバイトを継続することを求め、JM11 も過失修復の発話をしてから、ライン番号 106 で、「《少し間》分かった、夏一、までは、やあ、減らすかもだけど、とか、減らすと思うけど、続けてみる。」と、バイトを変更しようとした最初の意向を諦めて、「続けてみる」と決断してしまう。この謝罪行動のやりとりは、JM12 の積極的な「問題解決発話文」の多用により、結局、JM11 が自分の意向を変更するやりとりであるが、単に、「辞めないでほしい」という考えを伝えるのではなく、これからのバイト先の状況を具体的に言及することにより、謝罪される側の立場からみて、

望ましい方向へと導くことができたと考えられる。以下の会話例は、＜会話例 6-23＞と同様に、謝罪される側の「問題解決」の発話文が多い会話であるが、謝罪する側も自ら責任を感じ、意向変更をしている。

＜会話例 6-24＞負担度が重い場合の日本語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
28	JM31	僕、が我慢すれば続け、僕我慢して続ければ、職場の人に迷惑掛からないし(うん)、そうだよ、友達にもみんな、迷惑掛からないから、それが一番いいかな[↑]。	責任	na
ライン番号 29～34 省略				
35	JM32	<そうそうそう>(うん)、もっと、何っていうか、提案してみるってことも、大切なんじゃないかなと俺も思うんだよ【】。	na	問題解決
36	JM31	【】あー、その自分で辞めて(うんうん)、そのまんま終わりにしないでってこと(うん)、もうちょっと、その、やりとりを通じて[↑](うん)、だよ(うん)、なんか一方的に辞めるのもよくないしね。←意向変更	意向変更	na

＜会話例 6-24＞は、ライン番号 28 で、JM13 は、自分の勝手な行動は、職場の人、友達みんなに「迷惑」であることを明確述べて責任を認めている。そして、JM32 の最後の説得により、自分の意向を変更し、「辞めないこと」を決断しているのがわかる。負担度が重い謝罪場面においての日本語男性の受け入れない謝罪行動のやりとりを見ると、謝罪する側が自分の意向を変更する会話の共通点は、謝罪される側が「問題解決発話文」を多用していることである。謝罪される側の「問題解決発話文」は、男性より女性の方で多く用いていたが、男性の場合、受け入れる謝罪行動のやりとりと、受け入れない謝罪行動のやりとりでの使用の差がかなりあるので、相手側の積極的な「問題解決発話文」に影響を大きく受けるのは男性の方ではないかと推測される。しかし、日本語男性の場合、日本語女性の場合では現れなかった以下のような会話も現れた。

＜会話例 6-25＞負担度が重い場合の日本語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
66	JM08	2ヶ月で辞めたら、他の所も持たないよ。	na	非難
67	JM07	やあ、これやっぱり条件面の問題だから(笑い)。	状況説明	na
68	JM07	うーん、ちょっと申し訳ない。	謝罪	na
69	JM08	多分これで辞めたら、次もすぐ辞めると思うな。	na	非難
70	JM07	まあ、そしたら、それはそれでしょうがない。	責任(否定)	na

71	JM07	あ一本当。	その他	na
----	------	-------	-----	----

<会話例 6-25>は、謝罪される側による「受諾発話文」や、謝罪する側による「意向変更発話文」、どちらも現れず、最後まで JM08 の「非難」が続いている。この会話は、ライン番号 66 の前まで、JM07 は「状況説明」、「対人配慮」、「謝罪」、「責任関連」の発話文を用いてバイトを変更したい自分の意向を伝達し、謝罪される側である JM08 は、「事態確認」、「問題解決」、「非難」の発話文を用いて、相手の意向を変更させようと努力したが、結果的にはそうすることができず会話が終了してしまう。ライン番号 69 で、JM08 は、「多分これで辞めたら、次もすぐ辞めると思うな。」と不満の気持ちを隠さず相手を非難したが、JM07 は、「まあ、そしたら、それはそれでしょうがない。」と、多少無礼そうな発話をし、最後まで、自分の意向を諦めていない。このような謝罪行動のやりとりが現れた理由は、互いに相手の状況を理解せず、自分の意向のみを貫徹させようと働きかけているため、会話が曖昧な状態で終了してしまったと考えられる。本研究の協力者らが 20 代前半の若者であり、更に、親しい友達関係である人々のやりとりで、また、ロールプレイ会話という特殊な状況であったため、このような結果が現れたかもしれないが、実際の日常会話でも起こる可能性があり、女性より男性の方が自分の志を曲げようとしない傾向が強いのではないかと考えられる。

以下は、日本語女性母語話者の会話例であるが、受け入れない謝罪行動のやりとりは、女性で 16 会話中 8 会話現れた。

<会話例 6-26> 負担度が重い場合の日本語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
19	JF03	うん、<すごい自分>{<}、	-	-
20	JF04	<店側としても>{<}困るやろ。	na	非難
21	JF03	うん、自分勝手なことをすごい言ってるのも分かるんだけど…。	責任	na
22	JF04	それはでも自分のことしか考えてなくない?。	na	非難
23	JF03	うん、そうだよ。	その他	na
24	JF03	でも、やっぱりアルバイトだし…。	責任(不満)	na
25	JF04	えーでも、バイトでもそこの店の店員なわけやし<笑い>、	-	-
26	JF03	うん、そうか、<じゃ>{<}、	-	-
27	JF04	<店を>{<}回す人の、には変わりはないわけだし。	na	非難
28	JF03	うん、分かった。← <u>意向変更</u>	意向変更	na
29	JF03	=じゃ、もうちょっと考えて見るわ。← <u>意向変更</u>	意向変更	na

<会話例 6-26>は、JF03 が、「対人配慮」と「謝罪」の発話をしながら「状況説明」の

発話をし、これを受け、JF04 は、最初は「事態確認」の発話をしたが、「非難」を続けている。「困る」、「自分のことしか考えていない」等の言葉を用いて、直接的に非難を続けているので、JF03 も「うん、自分勝手なことをすごい言ってるのも分かるんだけど…。」(ライン番号 21)と、最初は責任を認めているが、繰り返される非難により、「でも、やっぱりアルバイトだし…。」(ライン番号 24)と、責める相手に対して若干不満そうに述べている。そして、結局、ライン番号 29 で、JF03 は、「=じゃ、もうちょっと考えて見るわ。」と、バイトを変えようとした最初の意向を変更している。この謝罪行動のやりとりは、謝罪される側の繰り返される「非難」により、謝罪する側が自分の意向を変更しており、途中、感情的な衝突が若干現れてはいるものの、日本語女性は相手側の非難に対する対応力が男性より弱いのではないかと考えられる。また、以下の会話例のように、互いに戸惑う雰囲気にならず、一方が譲ってしまう会話例が男性と異なり女性の会話では現れた。

<会話例 6-27> 負担度が重い場合の日本語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
27	JF05	《沈黙 3 秒》で無理言って雇ってもらったんだけど(うん)でもうんーく どうかな><{,、	-	-
28	JF06	<ああー>{>}。	na	その他
29	JF05	って。	対人配慮	na
30	JF06	《沈黙 3 秒》<うーん…>{>}。	na	その他
31	JF05	<うーん…>{>}。	その他	na
32	JF05	どう思う?。	対人配慮	na
33	JF06	うーん、結構無理言って頼んだから…。	na	非難
34	JF05	うーくん…>{>}。	その他	na
35	JF06	<うーん…>{>}。	na	その他
36	JF05	《少し間》<うーん…>{>}。	その他	na
37	JF06	<うーん…>{>}。	na	その他
38	JF06	<笑い>もし(うん)そう、本当に大変なら、それはそれでそう話すしか ないけど(うん)、&,、	na	譲歩
39	JF06	もしまだもうちょっとやってみれるなら(うん)、まだ 2 ヶ月だし(うん)、 慣れてきたりしないかなとか[声が段々小さくなる]<思っ…>{>}。	na	問題解決
40	JF05	<ああー>{>}。	その他	na
41	JF05	そう、まだ 2 ヶ月なのが(うん)ね。	責任	na
ライン番号 42~54 省略				
55	JF06	結構、うーん…、頼みに頼んで,,	-	-

56	JF05	あーあー<そうか><>。	その他	na
57	JF06	<だから><>ちょっと合わなかったから、辞めますとか。	na	非難
58	JF05	<うーん…><>。	その他	na
59	JF06	<あー><>。	na	その他
60	JF05	は'わ'、ちょっとだめな,,	-	-
61	JF06	<うーん…><>,,	-	-
62	JF05	<感じ?><>。	対人配慮	na
63	JF06	どうだろうね。	na	非難
64	JF05	うーん…。	その他	na
65	JF06	《沈黙 4 秒》うーん…。	na	その他
66	JF05	そうーだね、でもなんかその新しいバイトがすごい条件がよくて(あー)、て言うのがすごい魅力的で(うん)、だから…。	状況説明	na
ライン番号 67～84 省略				
85	JF05	どう、どうしよっかなー…(うん)って言う感じ。	対人配慮	na
86	JF06	私の立場から言うと、もうちょっと(あー)頑張ってみてほしかったりするけど,,	na	問題解決
87	JF05	<そうか><>。	その他	na
88	JF06	<でも><>、大変なら(うん)それは仕方ないから(うんうんうんうん)、しょうがないと思うけど(うーん)、うん。	na	譲歩
89	JF05	そっか(うん)、じゃ、もうちょっと考えてみようかな(うん)&,、 ↑ 意向変更	意向変更	na
90	JF05	2ヶ月だし。	責任	na

<会話例 6-27>は、ここまでのやりとりでは、自分の意向を明確に述べていた JF05 は、ライン番号 27 からは、「どうかなって」と、JF06 の意向を多少躊躇しているように尋ねている。しかし、JF06 は沈黙の後、戸惑っているように何も答えなため、JF05 は再び「どう思う?」(ライン番号 32)と尋ねているが、JF06 は自分の努力に言及して相手を消極的に非難し、その後、また会話は途切れてしまう。そして、JF06 は相手の状況を共感しているように「譲歩」の発話をするが、続いて、バイト期間に言及しながら継続してほしいとの意向を述べ伝え、JF05 は短いバイト期間に対する責任感を感じているような発話をしている。このようなやりとりが行なわれた後、JF06 は再び JF05 を非難し、また、会話は途切れ、JF05 は、「は'わ'、ちょっとだめな<感じ?><>。」(ライン番号 60、62)と、再び、JF06 の考えを尋ねているが、JF06 は戸惑っているような感じて確答を避けて、その後、もう一度会話は途切れ、JF05 は、また詳細に状況を説明し、相手を説得しようと働きかけている。しかし、JF06 の受諾の発話は現れず、譲歩の発話はしていたが、「私の立場から言うと、もうちょっと(あー)頑張ってみてほしかったりするけど,,」(ライン番号 86)と、バイトを継続することを求める発話のみ

現われ、結局、JF05 は「そっか(うん)、じゃ、もうちょっと考えてみようかな(うん)」(ライン番号 89)と、意向を変更する発話をしてしまう。この謝罪行動のやりとりは、謝罪する側は詳細に説明をして謝罪される側の理解を求めていたが、謝罪される側の非難や問題解決の発話、更に、無応答により会話がスムーズに進まず、結局、謝罪される側の意向に重みを置いた謝罪する側が自ら意向を諦めることにより会話は収束している。また、以下の会話例のように謝罪される側の積極的な問題解決の働きにより、謝罪する側が意向を変更する場合もある。

<会話例 6-28> 負担度が重い場合の日本語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
9	JF10	もうちょっと続けたらなんかもっとこう良いことっていうかあるんじゃないかな>{<}。	na	問題解決
10	JF09	<あるかね>{<}、でもね、2ヶ月続けてみて(うん)、やっぱ時給低いと結構ほら<笑い>、お金がね、入らなくて。	状況説明	na
ライン番号 11~16 省略				
17	JF10	】<えーでも>{<}今接客業やったこと多分将来も役立つ気がする=。	na	問題解決
18	JF09	=役立つかな?=。	その他	na
19	JF10	=うん、なんかこー、ほら他のお客様というか他人に対して(うーん)、こーなんだろう(うんうん)、気を使える<っていうの>{<}。	na	問題解決
ライン番号 20~28 省略				
29	JF09	】<でも>{<}、週 2、でもこっちな、こっちな(うん)、週 2 でもうちょ、100 円ぐらい時給が違うんだよね=。	状況説明	na
30	JF10	=100 円でしょ<笑い>【。	na	問題解決
31	JF09	】100 円、100 円大きいよでも<笑い>、5 時間働けば 500 円よ。	状況説明	na
32	JF10	500 円、えーでも週 2 回で 500 円と 500 円で 1000 円でしょう。	na	問題解決
33	JF09	うん。	その他	na
34	JF10	うん、1000 円は、ほら、月に 2 回雑誌を我慢すればなんとかなるよ<2 人笑い>。	na	問題解決
ライン番号 35~52 省略				
56	JF09	うんうん、じゃあちよっと考える、考える、考える? ← 意向変更	意向変更	na
57	JF10	絶対考えた方がいいって。	na	問題解決
58	JF09	うん、分かった、ちよっと考える。 ← 意向変更	意向変更	na

<会話例 6-28>は、前置き談話を経て、JF09 が「対人配慮」をしながら、「状況を説明」し、JF10 は「事態確認」と「非難」の発話を一回ずつ述べていたが、ライン番号 9 から本

格的な「問題解決」の発話をし、バイトを続けるように説得している。この謝罪行動のやりとりを見ると、JF10 は、若干冗談を交えながら、多様な「問題解決発話文」を用いて積極的に JF09 に働きかけている。謝罪される側である JF10 は、「**】**くえーでも>今接客業やったこと多分将来も役立つ気がする。」(ライン番号 17)、「うん、1000 円は、ほら、月に 2 回雑誌を我慢すればなんとかなるよ<2 人笑い>。」(ライン番号 34)と、友人間の親しみを効果的に用いて、JF09 の感情を損なわずに、自分の考えを述べ伝えている。そして、JF09 は、「うんうん、じゃあちよつと考える、考える、考える?。」(ライン番号 56)と、自分の意向を変更する発話をする。更に、以下の会話例のように「受諾発話文」や「意向変更発話文」は現れず、結果は保留される形で終了する会話も現れた。

<会話例 6-29> 負担度が重い場合の日本語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
16	JF12	《沈黙 8 秒》えー、じゃ、まず知り合いの人と呼んで(うん)、3人で話そうか?。 ← 保留	na	保留
17	JF11	うん、お願いできる?。	協力要求	na

<会話例 6-29> は、会話の最後の部分であるが、JF11 の「状況説明」、「対人配慮」、「謝罪」、「責任関連」の発話が行なわれたが、JF12 は「非難」の発話のみ用いて反応し、結局は、自分の立場では結果を出せず、「《沈黙 8 秒》えー、じゃ、まず知り合いの人と呼んで(うん)、3人で話そうか?。」と、その選択肢を第三者に譲ってしまうような発話をしている。

以上の結果から、受け入れない謝罪行動のやりとりの特徴は、日本語男性の場合、謝罪する側は、「状況説明」と「責任関連」を主に用いて繰り返し理解を求めているが、「謝罪発話文」は、「受け入れる謝罪行動のやりとり」よりは多く用いていない。また、謝罪される側は、フェイス侵害度が高い直接的な「非難発話文」を多用しており、「問題解決発話文」を繰り返し積極的に行っているため、結局、謝罪する側が自分の意向を変更する会話が発話されている。これに対し、日本語女性の場合、謝罪する側は、「謝罪発話文」を用いるやりとりと、用いていないやりとりが半々現れているが、全体的に、「受け入れる謝罪行動のやりとり」よりは多く用いていない。更に、「対人配慮」、「状況説明」、「責任関連」を用いて自分の意向を説明している。また、謝罪される側は、フェイス侵害度が高い「非難発話文」は勿論、「問題解決」、「事態確認」、「譲歩」を繰り返し用いて積極的に謝罪する側の意向を変更させるため働きかけている。

6.5.2 負担度が重い場合の韓国語母語話者の謝罪行動の分析結果及び考察

負担度が重い場合の韓国語母語話者の謝罪行動の類似点と相違点を明らかにし、その特徴を考察するが、分析する際に、まず、謝罪行動を抽出分析しそこから見られる現象を考察した後、会話例を通してより詳細に記述していく。

6.5.2.1 負担度が重い場合の韓国語母語話者における謝罪行動の抽出結果及び考察

表 6-10 では、負担度が重い場合の韓国語母語話者の「謝罪発話文」、「謝罪関連発話文」と「応答関連発話文」の頻度と割合を全体的に示し、どの発話文を多く使用しているかを比較した。分類された発話文の全体的な使用頻度は、韓国語男性で 954 例、韓国語女性で 682 例と、女性より男性の方で多く用いられていることがわかる。

表 6-10 韓国語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の頻度と割合(負担度が重い場合)

発話文	韓国語男性	韓国語女性
話題の前触れ発話【謝罪】	19 (1.99)	19 (2.79)
状況説明【謝罪】	*173 (18.14)	*152 (22.29)
謝罪発話【謝罪】	43 (4.51)	41 (6.01)
責任関連【謝罪】	90 (9.43)	54 (7.92)
	*肯定 51 (56.67)	*肯定 51 (94.44)
	*否定 39 (43.33)	*否定 3 (5.56)
対人配慮【謝罪】	81 (8.49)	74 (10.85)
過失修復【謝罪】	46 (4.82)	38 (5.57)
協力要求【謝罪】	26 (2.73)	11 (1.61)
意向変更【謝罪】	*8 (0.84)	*0 (0.00)
保留【謝罪】	*0 (0.00)	*4 (0.59)
前触れの応答『応答』	9 (0.94)	8 (1.17)
事態確認『応答』	73 (7.65)	47 (6.89)
非難『応答』	*207 (21.70)	*78 (11.44)
譲歩『応答』	60 (6.29)	57 (8.36)
問題解決『応答』	74 (7.76)	46 (6.74)
代償要求『応答』	5 (0.52)	2 (0.29)
受諾『応答』	*39 (4.09)	*45 (6.60)
保留『応答』	*1 (0.10)	*6 (0.88)
合計	954 (100.00)	682 (100.00)

()は割合 *p<.05

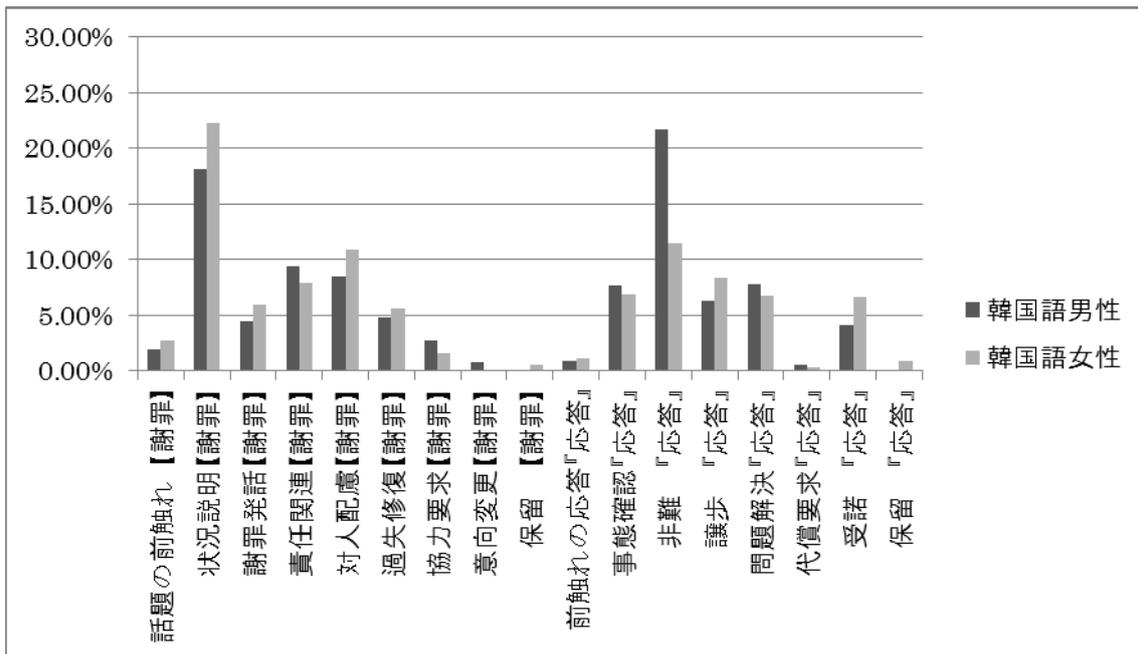


図 6-10 韓国語母語話者における謝罪行動を構成する発話文の総計に占める割合の比較(負担重)

表 6-10 を見ると、「謝罪発話文」、「謝罪関連発話文」においては、韓国語男性の場合、①状況説明>②責任関連>③対人配慮>④過失修復>⑤謝罪>⑥協力要求>⑦話題の前触れ発話文の順に用いられている。韓国語女性の場合、①状況説明>②対人配慮>③責任関連>④謝罪>⑤過失修復>⑥話題の前触れ>⑦協力要求発話文の順に用いられている。男女共に、「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」、「対人配慮」、「過失修復」の 5 種の発話文を用いている。「責任関連発話文」と「協力要求発話文」は、女性より男性の方で多く用いられており、「話題の前触れ発話文」、「状況説明発話文」、「謝罪発話文」、「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」は、男性より女性の方で多く現れている。韓国語男性と韓国語女性の「謝罪発話文」と「謝罪関連発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、「状況説明発話文($\chi^2(1) = 4.3092, p = 0.0379$)」では有意な差が認められたが、「話題の前触れ発話文($\chi^2(1) = 1.1059, p = 0.2930, n.s.$)」、「謝罪発話文($\chi^2(1) = 1.8478, p = 0.1740, n.s.$)」、「責任関連発話文($\chi^2(1) = 1.1387, p = 0.2859, n.s.$)」、「対人配慮発話文($\chi^2(1) = 2.5823, p = 0.1081, n.s.$)」、「過失修復発話文($\chi^2(1) = 0.4593, p = 0.4979, n.s.$)」、「協力要求発話文($\chi^2(1) = 2.2266, p = 0.1357, n.s.$)」では有意な差が認められなかった。

また、本研究で設定した負担度が重い謝罪場面においても、謝罪する側から責任を否定するような発話が現れたが、韓国語男性では、肯定する発話が 90 例中 51 例であり、否定する発話は 39 例現れた。これに対し、韓国語女性で、責任を肯定する発話が 54 例中 51 例であり、責任を否定する発話は 3 例現れ、「責任を肯定する発話文」と「責任を否定する発話文」をカイ二乗検定で比較した結果、韓国語男性と韓国語女性の間で有意な差が認められた($\chi^2(1) = 23.3143, p = 0.000013$)。負担度が重い謝罪場面における韓国語母語話者は、「謝

罪発話文」より、問題になっている事柄を解決することに集中しているため、他の「謝罪関連発話文」を多用する傾向があるのではないかと考えられる。

次に、「応答関連発話文」を見ると、韓国語母語話者の使用傾向は若干異なっていた。韓国語男性の場合、①非難>②問題解決>③事態確認>④譲歩>⑤前触れに対する応答>⑥代償要求発話文の順に用いられた。韓国語女性の場合、①非難>②譲歩>③事態確認>④問題解決>⑤前触れに対する応答>⑥代償要求発話文の順に用いられた。男女による順序の差はあるものの、「非難」、「譲歩」、「問題解決」、「事態確認」の4種の発話文が主な「応答関連発話文」であることが明らかになった。「応答関連発話文」では、「譲歩発話文」は、男性より女性の方で若干多く用いられており、「非難発話文」は、女性より男性の方で多く現れていたが、その他の「前触れに対する応答発話文」、「事態確認発話文」、「問題解決発話文」、「代償要求発話文」は、男女による差があまり見られなかった。カイ二乗検定で比較した結果、「非難発話文」($\chi^2(1)=29.1078, p=0.00068$)では韓国語男性と韓国語女性の間で有意な差が認められたが、「前触れに対する応答」($\chi^2(1)=1.1059, p=0.2930, n.s$)、「事態確認発話文」($\chi^2(1)=0.3384, p=0.5608, n.s$)、「譲歩発話文」($\chi^2(1)=2.5625, p=0.1094, n.s$)、「問題解決発話文」($\chi^2(1)=0.5992, p=0.4389, n.s$)、「代償要求発話文」($\chi^2(1)=0.4975, p=0.7062, n.s$)では有意な差が認められなかった。

謝罪内容を謝罪される側が受け入れる会話は、女性の方が多いが、これは、謝罪する側の「過失修復発話文」や謝罪される側の「問題解決発話文」といった具体的な解決策の使用が女性の方で若干多く現れていたからではないかと考えられる。つまり、男性より女性の方が、効率性が高い謝罪行動のやりとりをしていると考えられる。

表 6-10 で示す謝罪行動のやりとりによる結果的な発話文を見ると、謝罪する側による「意向変更発話文」は、女性の方では現れず、男性のみ現れた。「保留発話文」は、男性の方では現れず、女性のみ現れた。また、謝罪される側による「受諾発話文」は、女性の方で多く使用されており、「保留発話文」は、女性の方で若干多く現れたが、特に、韓国語男女母語話者では、上記の結果的な発話文には属さない特殊なやりとりが1会話ずつ現れていたが、下記の相互作用の特徴で詳細に説明する。カイ二乗検定で比較した結果、韓国語男性と韓国語女性の「謝罪する側の保留発話文」($\chi^2(1)=5.6090, p=0.0300$)、「意向変更発話文」($\chi^2(1)=5.7472, p=0.0242$)、「受諾発話文」($\chi^2(1)=5.1446, p=0.0233$)、「謝罪される側の保留発話文」($\chi^2(1)=5.6057, p=0.0234$)で有意な差が認められた。

「謝罪発話文」、「謝罪関連発話文」と「応答関連発話文」を用いた謝罪行動を相互作用の観点から考えると、負担度が重い場合の韓国語母語話者は、男女間に若干異なる使用傾向が見られた。用いられる発話文には差があるものの、一番最初に現れる「話題の前触れ発話文」と「前触れに対する応答発話文」は、男性で2.93%、女性で3.96%と、男女共に3%程度使用されており、謝罪する側の「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」、「対人配慮」の4種の発話文は、男性で40.57%、女性で47.07%と、女性の方で多く用いており、男女共にほぼ4割程度の高い割合で使用されている。謝罪される側は「事態確認」、「非難」、「譲歩」、「問

題解決」の4種の発話文を、男性は43.40%、女性は33.43%用いており、男女による使用の差があるのが分かる。また、多用してはいないが、「過失修復発話文」は、平均5%程度、「協力要求発話文」は、平均2%程度使用しており、「代償要求発話文」は殆ど使用されていないという共通性が見られる。負担度が重い謝罪場面では、謝罪する側と謝罪される側が問題になっている事柄を解決するため、互いが積極的に働きかけていると考えられる。

以上の結果から考えられる負担度が重い場合の韓国語母語話者の謝罪行動のやりとりは、以下の通りである。

まず、男女共に見られた類似点として、韓国語母語話者は、負担度が重い謝罪場面において、話題に入る前のやりとりは簡単に済ませ、謝罪する側は主に「状況説明」、「謝罪」、「責任」、「対人配慮」、「過失修復」を用い、積極的に働きかけ、謝罪される側は「事態確認」、「非難」、「譲歩」、「問題解決」を用いて状況を把握しながら問題を解決する働きかけをし、不愉快な状況を解決するために互いに努力しているという点が挙げられる。また、「過失修復」や「協力要求」もかなり使用されているが、「代償要求」は殆ど使用しないという傾向が見られた。

次に、相違点を考えると、男性の場合、謝罪する側は「状況説明発話文」を用いて自分の状況を相手側に説明しようとする働きかけを行っていて、「責任関連発話文」の使用は女性よりは多いが、自分の責任を認める「肯定」する発話と不満を言及したり責任を回避する等の「否定」する発話をほぼ半々程度用いていた。また、「謝罪発話文」等、相手側の気持ちを察する働きがある発話文は、女性より若干使用頻度が少なかった。この影響とも思われるが、謝罪される側で一番多いのは「非難発話文」であり、女性より圧倒的に多く使用され、謝罪する側を攻めるような発話が多用されていて、「譲歩発話文」の使用は女性より少なく、「事態確認発話文」や「問題解決発話文」は、女性とあまり差がなかった。謝罪する側の責任を否定する発話と謝罪される側の非難発話のやりとりが行なわれ、結局、「受諾発話文」の使用も女性より少なく、反対に、謝罪する側の「意向変更発話文」の使用は女性より多いという結果をもたらしているのではないかと考えられる。

これに対し、女性の場合、謝罪する側は、男性より「状況説明発話文」を多用し、「謝罪発話文」も男性よりは若干多く用いて相手側を察するような働きかけを行っているとと思われる。また、「責任関連発話文」の使用は男性より少なく、殆ど責任を認める発話であった。更に、「過失修復発話文」を男性より多く用いており、具体的な修復方策等を言及したりする等の特徴が見られた。謝罪される側も一方的に「非難発話文」を使用せず、「譲歩発話文」は、男性より多く用いていた。謝罪する側は、「状況説明発話文」をしながら、「謝罪発話文」や「対人配慮発話文」を多用し、更に、具体的に過失を修復する働きをする発話も男性より多く用いて謝罪行動を行い、これを受け、謝罪される側も男性より多く「受諾発話文」を用いていたと考えられる。また、女性同士の謝罪行動のやりとりには、謝罪する側の「意向変更発話文」が現れないという特徴が見られた。

以下では、韓国語母語話者の謝罪行動のプロセスが実際にどのように進められているの

かを会話例を通して分析し考察を行う。

6.5.2.2 負担度が重い場合の韓国語母語話者における謝罪行動の相互作用の特徴

ここでは負担度が重い謝罪場面の韓国語母語話者の謝罪行動のやりとりを、会話例を見ながら詳細に述べるが、「受け入れる謝罪行動のやりとり」と「受け入れない謝罪行動のやりとり」という観点を用いて記述することとする。

1) 受け入れる謝罪行動の韓国語母語話者の特徴

受け入れる謝罪行動のやりとりは、男性で 16 会話中 10 会話現れた。以下では実際の会話例を見ながら説明する。

<会話例 6-30> 負担度が重い場合の韓国語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連 発話文	応答関連 発話文
11	KM07	어, 미안한데 &, (あ、ごめん&,)	謝罪	na
12	KM07	내가 아르바이트를 그만둬야 될 것 같거든. (俺がさ、バイト辞めることになってさ。)	状況説明	na
13	KM08	어??[놀란듯이].(으ん??[驚いて].)	na	その他
14	KM07	아, 진짜 미안한데&, (あー、マジでごめん&,)	謝罪	na
15	KM07	더 좋-은- 알바가 있어가지고= (もつといーいーバイトがあつて=。)	状況説明	na
16	KM08	=아, 내가 그걸 어떻게[강조하듯이], 그걸 어떻게 넣어줬는데 그 아르바이트<를><[추궁하듯이]. (=あ、俺があそこどうやって[強調するように]、あそこにたので入れて やったのに、あのバイト<を><[責めるように].)	na	非難
17	KM07	<아><[>] 진짜 미안하다.<[>] (あ)マジですまない。)	謝罪	na
18	KM07	내가, 어, 다음에 한 번 밥 쏘게. (俺が、えっと、今度おごるからさ。)	過失修復	na
19	KM08	아니, 아니 그게 문제가 아니고<웃음>, 아니 나도 그 사장님한테 되게 어-, 그렇게 무리해서 부탁했는데 형이 갑자기 그래버리면 내가 어떻게 하자는 거야<웃음>.(いや、 いや、そういう問題じゃなくて<笑う>、いや俺もあの社長にめっちゃ むりやりに頼んだことなのに、急にこうなっちゃうと俺はどうしたらいい<笑う>。)	na	非難
20	KM07	아 진짜[↑]미안하다.(あ、マジで[↑]ごめん。)	謝罪	na

21	KM07	내가 진짜 이 이걸 이 아르바이트를 계속 할 수가 없어 가지고.(俺がマジでこれをこのバイト続けられそうじゃなくて。)	状況説明	na
22	KM07	시급도 높고 집에서든 가까워 가지고 너무 조건이 좋아가지고, 《잠시간격》그만 뒤야 되거든.(時給も高いし、家からも近いし、条件があまりにも良くてさ、《少し間》辞めよう。)	状況説明	na
23	KM08	<어이없다는 듯 웃으면서>아-하, 그러긴 한데 진짜 내 입장이 내 입장이 되게 곤란하긴 하잖아, 형 아르바이트 한 것도 얼마 되지도 않았는데. (<呆れた感じで笑いながら>はーあ、そうだけど、マジで俺の立場が困るんだよ、バイト入ったばかりだし。)	na	非難
24	KM08	나도 그 사장님 되게 바쁘고 그런데 나 엄청 힘들게 부탁해서 형 넣어줬잖아.(俺もあの社長めっちゃ忙しいのに、無理してお願いして入れてあげたのじゃん。)	na	非難
25	KM07	근데【.(だけど【。)	その他	na
26	KM08	【 그렇게 너무 간단하게 그만뒀 버리면 내가 얼-마나 곤란하겠어. (【こんな簡単に辞めちゃうと俺がマジで困るんだってば。)	na	非難
27	KM07	아, 진짜 미안하다.(あー、マジごめん。)	謝罪	na
28	KM07	알았어, 그러-면 내가 한 달 더 할테니깐 그 동안에 다른 알바 구하는 걸로 하자.(わかった、そしたら俺があと一カ月だけやるからさ、その間他の人探すことにしよう。)	過失修復	na
29	KM08	아-하, 진짜 좀 곤란하긴 한데…. (はーあ、マジで困るんだけど…。)	na	非難
30	KM08	알았어[↑] 그러면은 일단은 내가 사장님한테 말씀 드려가지고 해 볼테니깐 그때까지만 열심히 해 줘. (分かった[↑]そしたらいったん、俺が社長に言ってみるからその時までがんばってやってね。) ←受諾	na	受諾

<대화예 6-30>는, 話題と直接に関係がない「挿入談話」から始まり、KM07의 「謝罪發話文」や「状況説明發話文」で、本題に入り、KM08はバイトを紹介してあげた当時の自分の大変さに言及し相手を非難している。すると、KM07は「謝罪發話文」の後、「내가, 어, 다음에 한 번 밥 쓸게.(私が、うん、次回にご飯奢るよ。)」(ライン番号 18)と、「過失修復發話文」を用いて、KM08の怒りを収めようとしたが、KM08は、「아니, 아니 그게 문제가 아니고<웃음>,(いや、いやそれが問題じゃなく<笑い>、)」と、今の問題は何かを奢ることにより簡単に済む次元の問題ではないことを明確に表明し、再び、自分の立場の大変さを挙げて相手を非難し続けている。これを受け、KM07は再び「謝罪發話文」を使用し、より詳細に

状況説明をしているが、KM08 はライン番号 23 から 26 にかけて、連続し「立場」、「困る」、「すっごく苦労して」等の言葉を用いて、KM07 の意向を受け入れることが出来ないことを続けて表している。すると、KM07 は、「알았어, 그러-면 내가 한 달 더 할테니깐 그 동안에 다른 알바 구하는 걸로 하자.(分かった。じゃ、私が一ヶ月更に働くから、その間に他の人を探すこととしよう。)」(ライン番号 28)と、上記の「過失修復発話文」より具体的な代案を提示する「過失修復」の旨を表し、KM08 は、「困る」ことは事実であるが、仕方なく、「알았어[↑] 그러면 일단은 내가 사장님한테 말씀 드려가지고 해 볼테니깐 그때까지만 열심히 해 줘.(分かった[↑]じゃ、一応私が社長にお話しし、やってみるから、その時までには熱心に働いてくれ。)」(ライン番号 30)と、第三者(社長)である人に代わりに話すことにまで言及して、KM07 のバイト先を変えようとする意向を受け入れている。この謝罪行動のやりとりで、謝罪する側は、「謝罪定型表現」を用いた「謝罪発話文」を 5 回も用いて、若干低姿勢で自分の意向を説明していたが、謝罪される側が受け入れずに「非難発話文」を続けて使用していた。しかし、代案を提示する「過失修復発話文」により、不愉快な状況に対する解決の見通しがつき、謝罪される側が受け入れることで収束している。このように、謝罪される側の「非難」はあるものの、代案を提示することで問題が解決される会話は 10 会話中 2 会話現れていた。更に、＜会話例 6-30＞と類似しているが、大まかな代案提示の「過失修復発話文」ではなく、具体的な人を挙げる代案提示の発話文も韓国語女性と同様に現れていた。以下は、その会話例である。

＜会話例 6-31＞負担度が重い場合の韓国語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
20	KM23	근데 음식점에서 서빙을 하다보면 솔직히[↑], 《잠시간격》다 내가 잘 못 한건데...(ただ飲食店のホールで働くと正直[↑]、《少し間》全部俺が悪いけど…。)	責任	na
21	KM24	《잠시간격》아-, 뭐, 니 말도 이해되는데, 뭐 더 좋은 조건이면 당연히 좋지.=《少し間》아-, まあ、おまえの言ってることは分かるけど、もっといい条件があれば当然そっちの方がいいだろう=。)	na	譲歩
22	KM24	=근데, 《잠시간격》어, 상황도 상황이니 만큼 그 너도 나, 내가 너를 넣어 준 게 아니고, 내가 또 아는 사람한테 부탁을 받은 거잖아.(=ただ《少し間》あ、状況も状況だから、あのうおまえも俺、俺が入れてあげたわけではなくて、俺がまた別の知り合いにお願いしたことじゃん。)	na	非難
23	KM23	응.(うん。)	その他	na
24	KM24	내가 그 사람한테 부탁을 어렵게 해서 니가 들어갔는데,	na	問題解決

		<p>니가 그만뒀버리면, 너도 물론 나한테 지금 곤란하다고 얘기를 하지만, 나까지 같이 곤라해지는 상황이니깐, 니가 거기 뭐 지금 다른 데 알아본 곳에 확실히 뭐,《잠시간격》 뭐-, 합격이 되서 거기서 당장 일할 수 있는 것 아니면 조금이라도 더 하는 게 좋지 않을까라는 생각되는데...(俺があの人にお願いでやっとおまえが入ったのに、おまえが辞めてしまうと、おまえもちろん困ってるから俺に話してるんだろうけど、俺まで一緒に困る状況だから、おまえがあそこ、今見つけたとこで確実になんか《少し間》まあ、受かって今すぐ働かなきゃいけないとこじゃなければ、もうちょっと続けてやった方がいいんじゃないか...)</p>		
25	KM23	<p>그럼 나도 한가지 대안을 생각해 봤는데, 내가 지금 하고 있는 아르바이트에 대타를 구하는 거야.(俺も一つ対案を考えてみたけど、俺が今やってるバイトに代わりに入る人を探してさ。)</p>	過失修復	na
26	KM23	<p>내 친구가 지금 아르바이트를 구하고 있거든. (俺の友達が今バイト探してるから。)</p>	過失修復	na
27	KM24	어.(うん。)	na	その他
28	KM23	<p>그럼 그 친구를 소개로, 좀 나보다는 일은 서툴겠지, 처음이니깐.(それであの子を教会して、俺よりは仕事慣れてないと思うけど、はじめてだから。)</p>	過失修復	na
29	KM23	<p>하지만 그래도 짹짹하고 손님 대접 잘할 것 같고, 애가 좀 활발하고 긍정적이고 그런 애로 한명 소개시켜 주면, 나 대신에, 하고 나는 그쪽 학원 쪽으로 가는 게(그래) 서로서로 윈윈하는 게 아닐까?.(でも、優しいから接客はうまいと思うし、あの子結構明るくて、ポジティブなそういう子を一人紹介すれば、俺の代わりに、そしたら俺はあっちの塾に行って(そう)お互いにウィンウィンにならないかな?)</p>	過失修復	na
30	KM24	<p>그래 그러면 니가 말한 친구가 확실히 일을 할 수 있고 이렇다면은 내가 그 부탁했던 형한테 너의 상황을 지금 얘기해주고 그리고 나서 뭐 그 친구가 일하기로 했으니까 뭐 그 친구가 대신 나가도록 이렇게 하겠다 얘기를 해 볼게, 그러면.(そう、そしたらおまえが言った友達が確実に仕事ができるなら、そしたら、俺があのお願いでした人に今のおまえの状況を話して、それであの子が働くことになったって、あの子が代わりに仕事するようにと話してみる、そしたら。) ←受諾</p>	na	受諾

<会話例 6-31>は、「前置き談話」なしで、直ちに、交渉談話から始まり、KM23は「対人配慮」、「責任関連」、「状況説明」の発話文を用いて、紹介してもらったバイト先を変えようとする意向を伝達し、謝罪される側である KM24 は、「事態確認発話文」も用いていたが、主に、「非難発話文」を使用し、KM23 が意向を変えるよう説得している。しかし、KM23 はそれには応じず、再び、「対人配慮」、「状況説明」、「責任関連」の発話文を用いて、自分の意向を説明し、KM24 の理解を求めている。すると、今まで「非難発話文」を続いていた KM24 も、ライン番号 21 で、相手の状況に対する理解を表明している。しかし、結局、「非難発話文」を用いたり、明確な結果が出た状況でもないのに、今のバイトを継続するよう説得する「問題解決発話文」を用いて積極的に自分の考え方を伝えようとしている。すると、KM23 は、「그럼 나도 한가지 대안을 생각해 봤는데, 내가 지금 하고 있는 아르바이트에 대타를 구하는 거야.(なら、私も一つ代案を考えて見たけど、私が今やっているアルバイトに代わりの人を探すのよ。)」(ライン番号 25)と、代案を提示し、更に、自分の友達が探していることに言及しつつ、自分もたらした不愉快な状況を解決するための具体的な働きかけを行なっている。更に、ライン番号 29 で、「気さくでお客様に対する対応が良い」、「明るくて肯定的」等の言葉を用いて、飲食店の仕事に向いているような性格まで備えた友達を紹介することを表明しているのも、KM24 も、KM23 の代案を受け入れ、同調し、更に、第三者に KM23 の状況や代案策を話すことまで買って出ている。この謝罪行動のやりとりは、謝罪する側の具体的な代案の提示により、会話が成立し、謝罪される側は、相手の意向を受け入れる形で会話が収束している。このように、謝罪される側の「非難」はあるものの、具体的な代案を提示することで問題が解決した会話は 10 会話中 2 会話現れていた。本研究で負担度が重い謝罪場面で、「他の人を紹介する代案」を提示し、自分の過失を修復しようとした会話は、韓国語男性で 10 会話中 4 会話現れており、残りの 6 会話は「代案提示」の発話文が現れなくても受け入れることで収束していた。

以下は、韓国語女性母語話者の会話例であるが、受け入れる謝罪行動のやりとりは、女性で 16 会話中 14 会話現れた。

<会話例 6-32> 負担度が重い場合の韓国語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
37	KF03	사장님한테는 일한지 2개월밖에 안돼 갖고(응) <약간 웃으면서> 말을 못 하겠는거야.(社長には働いてから2ヶ月しか経ってないので(うん)<少し笑いながら>話しかけないの。)	責任	na
38	KF04	그래? 어떡하지, 나도 그쪽 사장님을, 근데 내가 도움을 많이 받는 분이라서, 아 이렇게 갑자기 또 그러니깐, 힘들게 소개시켜 준건데<웃음>. (そう?, どうしよう、私もその社長を、だか	na	非難

		ら、私が色々お世話になっている方なので、あーこんなに急にまた、無理に紹介してくれたのにく笑い。)		
39	KF03	어 정말?.(あー本当?.)	その他	na
40	KF04	어떻게 하지...(どうしよう...)	na	非難
41	KF03	그러면 (응) 그냥 그 누구지 [친구 01 이름](응응)?? [친구 01 이름]이 개도(응응) 요세 알바를 구하거든(응응).(それでは(うん)あの誰だっけ[友達 01 の名前](うんうん)??[友達 01 の名前]がその人も(うんうん)最近バイト探しているの(うんうん).)	過失修復	na
ライン番号 42~55 省略				
56	KF04	그치 힘들긴 하지 음식점 알바니깐. (そうだね、大変だよ、飲食店バイト。)	na	讓歩
57	KF03	어 그래 그래 갖고 그냥 아예(응) 그[친구 01 이름]이나 (응응)[친구 01 이름]인 해봤으니깐 좀 편할 거 아니야. (うん、だから、だから(うん)その[友達 01 の名前]は(うんうん) [友達 01 の名前]はして見たからちよっと楽だと思われるけど。)	過失修復	na
ライン番号 58~64 省略				
65	KF04	근데 뭐 이미 뭐 나는 소개를 해 준거니깐(응), 나는 뭐 잘 아는 분이고 그러니깐, 좀 죄송하기는 하지만(응), &, (だけ ど、まあもうまあ私は紹介してくれたし(うん)、私がよく知っている方 なのでちよっとそうだけど、少し申し訳ないけど(うん)、&,)	na	非難
66	KF04	언니 사정이 그렇다니깐(응), 뭐 그러면은 한번 언니가 사장님한테 말해보고.(お姉さんの事情がそうだとすれば(うん)、ま あだったら、一度お姉さんが社長に話して見て。) ← 受諾	na	受諾
67	KF04	<어차피>(,) <どうせ>(,) <,,>	-	-
68	KF03	<어->(,) <그럴까?>(,) <(うん-)>(,) <そうしようか?>(,) <,,>	その他	na
69	KF04	<내 선에선>(,) <떠난 이야기니깐. (私の線では)>(,) <済んだ話なので。> ← 受諾	na	受諾

<会話例 6-32>は、注文の話の挿入談話と前置き談話のやりとりが行なわれた後、KF03が、紹介してもらったバイトを変えたい理由を謝罪しながら説明し、KF04は、最初は事態を確認していたが、紹介してくれたバイト先の社長と自分の人間関係に言及してKF03を非難し、戸惑っているような発話を続けていた。すると、KF03は、ライン番号41で、「그러면(응) 그냥 그 누구지 [친구 01 이름](응응)?? [친구 01 이름]이 개도(응응) 요세 알바를 구하거든(응응).(それでは(うん)あの誰だっけ[友達 01 の名前](うんうん)??[友達 01 の名前]がその人も(うんうん)最近バイト探しているの(うんうん).)」と、自分の代わりにバイトが出来そうな友人の名前を出し、その友人に代わりにバイトを引き受けてもらうという代案を提示し、自ら

の過失を修復しようと働きかけている。その後、非難していた KF04 は、KF03 の友人に関する更なる情報を求め、非難はしていたが、譲歩するような発話もし、結局は KF03 の代案に対して同調している。更に、KF03 は、「어 그래 그래 갖고 그냥 아예(응) 그[친구 01 이름]이나(응응)[친구 01 이름] 인 해봤으니깐 좀 편할 거 아니야.(うん、だから、だから(うん)その[友達 01 の名前]は(うんうん)[友達 01 の名前]はして見たからちょっと楽だと思われるけど。)」(ライン番号 57)と、飲食店のバイト経験がある友人をより積極的に推薦している。その後、KF03 の友人の情報についてやりとりをしてから、KF04 は、社長には申し訳ないと言い、KF03 を非難してはいたが、結局、KF03 の意向を受け入れて、KF03 の意向を直接社長に話すことに言及し、「<내 선에선>{> 떠난 이야기니깐.<私の線では>{>済んだ話なので。)」(ライン番号 69)と、受け入れることを明確に示している。この謝罪行動のやりとりは、最初は事態確認と非難を主に用いていた謝罪される側が、謝罪する側が持ち出した代案、つまり、「自分の代わりに具体的な人を紹介してあげる」という過失修復の発話により、謝罪する側の意向を受け入れる流れで会話が収束するが、韓国語女性の受け入れる謝罪行動のやりとりでは、このように具体的な人の名前にまで言及して積極的に自分の過失を修復しようとした会話が 14 会話中 4 会話現れた。また、具体的な人の名前にまでは言及しないが、「代わりに他の人を紹介してあげる」という考え方が肯定的に受け入れられている会話例も 14 会話中 5 会話現れた。

本研究で設定した負担度が重い謝罪場面の韓国語女性の謝罪行動のやりとりで「代わりに他の人を紹介してあげる」という代案を提示する過失修復の発話により、謝罪する側の意向が受け入れられる会話が、14 会話中 9 会話が現れており、更に、謝罪される側が「問題解決発話文」で「代わりに他の人を紹介してあげる」という代案に言及する会話が、14 会話中 5 会話現れている。韓国語女性の間では、このようなやりとり、つまり、「紹介してもらったバイト先を辞めるために、代わりに、他の人を紹介してあげる」という考え方が肯定的な印象を与え、効果的な働きをしているのではないかと考えられる。しかし、以下の会話例のように、このようなやりとりではないが、受け入れられる会話もある。

<会話例 6-33> 負担度が重い場合の韓国語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
64	KF29	아 막 그 가게에도 미안하고 니한테도 미안하고 막 그러니깐 차마 말을 못하겠는거야.(あ、働いてるところにも申し訳ないし、あなたにもそうだし、それで言えなくて。)	謝罪 2	na
65	KF29	=근간 나만 혼자 이렇게 고민고민하다가,, (=それで、一人で悩んでただけど,,)	-	-
66	KF30	알아, 알아.(分かるよ。)	na	譲歩
67	KF29	<그래서 그냥>{>,,<それでまあ>{>,,)	-	-

68	KF30	<언니가>{> 언니가 이런 얘기하는 그런 타입이 아니니깐<들이서 웃음>. (<姉さんが>{>姉さんがこんな話するタイプじゃないのは知ってるから<2人で笑い>。)	na	讓歩
69	KF30	나도 알지.(分かるよ。)	na	讓歩
70	KF29	아 나도 막 나름대로 고민 많이 해봤는데 그래도 역시 나한테는 나한테 더 좋은 조건이 있는 곳으로 가는게 낫지 않을까 싶어서….(私も自分なりにかなり悩んだんだけど、でも私にはやっぱりいい条件で働いた方がいい気がして…。)	狀況説明	na
71	KF29	그래도 아[↑], 바로 바로 저기다가 막 나 일하는데다가 “나 그만둘래요”, 이려고 확 나온 것도 아니고,,(でも、働いてたところいきなり“辞めます”と言って、出たことでもないし,,)	責任	na
72	KF30	그치.(そうだね。)	na	その他
73	KF29	그래서 니한테 지금 좀 의견을 이렇게 물어보는 거잖아.(だから、あなたの意見を聞きたいの。)	狀況説明	na
74	KF30	그렇쥬.(うん。)	na	その他
75	KF29	응.(うん。)	その他	na
76	KF30	내가 가면 잘 얘기해 볼게.(私が一度聞いてみるよ。)← 受諾	na	受諾
77	KF30	어차피 뭐 그것도 억지로 붙들어 놓을 수도 없고<들이서 웃음>, 너한테, 그분한테 죄송하긴 한데(응), 그래도 사람이 그렇게 되는 게 아니니깐.(どうせいやなのに無理して引っ張っても意味ないし<2人で笑い>, あの方には申し訳ないけど(うん), でも人はそのようになれることでもないし。)←受諾	na	受諾
78	KF30	근데, 뭐 특별히 무슨 문제가 있었거나 그런건 아니야?, 그런 건 아니야?. (他にトラブルとかあった訳ではないよね?)	na	事態確認
79	KF29	그냥 좀 텃세를 부린다고 해야 되나(아-) 좀 그런게 있고, 정말 내가 뭐 그렇게 큰 잘못을 한 것도 아닌데, 좀 시비조, 사람 성격일 수도 있지만(응), 난 그게 참 기분 좋게 받아들여지지는 않으니깐, 난 그것 때문에도 좀 스트레스 좀 받고 그래서…. (うん、なんていうか地元風を吹かすというか、私が大して悪いことをしてわけでもないのに、向こうの性格の問題かもしれないけど、言いがかりをつけてくるの。それがちょっとストレスかな。)	狀況説明	na

<會話例 6-33>는, 互いの近況に関する挿入談話からスタートし、前置き談話を経て、KF29の「責任関連発話文」も若干現れたが、主に、詳細な狀況説明と謝罪発話が繰り返し行われている。これを受けて、KF30は、最初は、事態確認をし状況を把握してから、非難

と問題解決の発話を多用し、相手の意向を変えようと働きかけている。しかし、KF29は、意向を諦めず、より詳細に状況を説明し、更に、「아 막 그 가게에도 미안하고 니한테도 미안하고 막 그러니깐 차마 말을 못하겠는거야=(あ、働いてるところにも申し訳ないし、あなたにもそうだし、それで言えなくて=。)」(ライン番号 64)と、低姿勢で謝り、続く説明でも「悩み」という言葉を3回用いて自分の大変さを強調している。すると、KF30は、譲歩発話文を用いて相手の悩みを理解していることを示し、ライン番号 68で、「<언니가> 언니가 이런 얘기하는 그런 타입이 아니니깐<둘이서 웃음>. (<姉さんが>姉さんがこんな話するタイプじゃないのは知ってるから<2人で笑い>。)」と、過去のKF29のタイプまで言及しながら相手を配慮しようとする。その後、KF29は、再び責任関連発話文と状況説明発話文を用いてKF30の理解を求め、KF30は、結局、「내가 그면 잘 얘기해 볼께.(私が一度聞いてみるよ。)」(ライン番号 76)と、JF29の意向を受け入れ、第三者に自ら話すことを買って出ている。そして、KF30は、バイト先との問題はないかを聞いたが、KF29は、「地元風を吹かす」、「向こうの性格の問題」、「ストレス」等の言葉を用いて、辞める理由が人間関係の問題であることを明確に示している。この謝罪行動のやりとりは、謝罪する側が低姿勢で繰り返し謝り、詳細に状況を説明しながら積極的に謝罪される側に理解を求め、謝罪される側も若干非難はしているものの、繰り返される要求により、結局相手の意向を受け入れている。

以上の結果から、受け入れる謝罪行動のやりとりの特徴は、韓国語男性の場合、謝罪する側は、主に、相手のフェイスに配慮する言語行動や相手のフェイスを侵害する言語行動を用いながら自分の意向を説明しているが、謝罪される側が受け入れるよう積極的に繰り返し働きかける傾向が見られる。また、謝罪される側は、フェイス侵害度が高い「非難発話文」を多く用いており、問題になっている事柄を解決するための働きかけも積極的に行っているが、友人である謝罪する側の立場を考えて結局受け入れることを示している。これに対し、韓国語女性の場合、謝罪する側は、主に、相手のフェイスに配慮する言語行動を用いており、自分が引き起こした問題になっている事柄を自ら解決するため積極的に働きかけながら自分の意向を説明している。また、謝罪される側は、フェイス侵害度が高い「非難発話文」は用いているが、相手のフェイスを配慮する「譲歩発話文」も多く用いて反応しており、友人であるという関係や解決の見込みがある状況を考え、受け入れることを示している。

2) 受け入れない謝罪行動の韓国語母語話者の特徴

受け入れない謝罪行動のやりとりは、男性で16会話中6会話現れた。以下では実際の会話例を見ながら説明する。

<会話例 6-34> 負担度が重い場合の韓国語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文

17	KM21	《잠시간격》내가 너무 미안해 가지고, &,, 《(少し間)俺がマジで申し訳なくて, &,》	謝罪	na
18	KM21	너한테 지금 어떻게 해야 될지 물어보고 있는 거거든.(おまえに今どうすればいいか聞きたくて。)	対人配慮	na
19	KM22	근데, 근데 아《잠시간격》, 니가 말하는 건 알겠는데, 근데 나도 되게 많이 도움 받고 있던 말이야. (だけど、だけど、あ《少し間》、おまえが言ってることは分かるけど、だけど俺も結構お世話になってるから。)	na	非難
20	KM22	근데 니가 그러면 진짜 곤란해-. (なのにおまえがそうすると聞いて困るしー。)	na	非難
21	KM22	《잠시간격》일단은 좀만 나가면 안돼? 《(少し間)とりあえずもうちょっとやってみない?。)	na	問題解決
22	KM21	《침묵 3 초》응?.(《沈黙 3 秒》うん?。)	その他	na
23	KM22	좀만 더 하면 안될까?(もう少しやってくれない?。)	na	問題解決
24	KM21	<조금 더?><.<(もう少し?><.<。)	その他	na
25	KM22	<어><.>조금 더 하고서 거기서 니가 직접 말하는게 더 나올거야, 내가 말하는 것 보다.<(うん)<.>もう少しやってみて、そこでおまえが直接に言った方がいいと思う。俺が言うよりは。)	na	問題解決
26	KM22	《잠시간격》그렇게 할래?.(《少し間》そうする?。)	na	問題解決
27	KM21	《침묵 2 초》그럼,《잠시간격》내가 어차피 사장님하고도 좀 많이 친해져가지고 그렇게 갑자기 관두는 건 나도 좀 아쉬우니깐(응) 그럼 일단 그 음식점에 가 보자 잠깐 (어어)[목소리가 점점 작아짐].(《沈黙 2 秒》)そしたら、《少し間》俺も結構社長と仲良くなって、こうやって急に辞めるのも俺もちょっと寂しいから(えっと) そしたらまずあの店に言ってみよう、ちょっと(うん)[声がだんだん小さくなる]。)	意思変更	na
28	KM21	가서 얘기해 보고, 며칠 더 해보고, 내가 생각해 보고 너에게 또 말해줄께=(言ってみて話してみ、何日かもうちよつとやってみて、俺が考えてみておまえにまた言うから=。)	意思変更	na

<회화예 6-34>는, 前置기 대화를 經て, KM21 가, 謝罪를 しながら 狀況을 說明し, KM22 가 事態를 確認した 後, 再び 謝罪し 代わり に 言っ て くれる よう 協力 を 求 め て いた が, KM22 は 受け 入れ ず 非難 を し 始め, これ を 受け KM21 は, 相手 を 配慮 しながら もう 一度 狀況 を 說明 して いた. 所以て, 라인 番号 17 で, また, 謝罪 를 し 「どう すれば いい か」 を KM22 に 尋ね て, 決定 權 を 讓っ て いる. しか し, KM22 は, 「お世 話 に なっ て いる」, 「困る」 等 の 言葉 を 用い て 非難 し, 更に, 「やっ り 続 け て ほ し い」 と いう 自分 の 望み を 라인 番号 21~26 ま で

連続して言及し、問題を解決しようとする働きを積極的に行なっている。すると、KM21は、「가서 얘기해 보고, 며칠 더 해보고, 내가 생각해 보고 너에게 또 말해줄께=(行って話してみて、何日間ももっとやってみて、私が考えてみて、君にまた言うよ=。)」(ライン番号 28)と、最初バイト先を辞めようとした意向を変更し、「考えてみる」と言及している。この謝罪行動のやりとりを見ると、謝罪する側は「謝罪発話文」を用いながら簡単に状況説明をした後、直ちに、協力を求める発話をするることにより、謝罪される側の気持ちを不愉快にし、「非難」を招いてしまい、更に、繰り返される「問題解決」の発話により、結局自分の意向を変更することで会話が終了する。このように、謝罪する側が「意向を変更」する発話文は、男性で4会話も現れていた。しかし、女性の会話では現れなかった。また、男性の場合、以下の会話例のように結果が出ないまま会話が終了してしまうやりとりもあった。

<会話例 6-35> 負担度が重い場合の韓国語男性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
37	KM01	아-나, 난 니가 화-[↑] 널만 한 것도 이해가 가는데, 내가 못 하겠는 걸 어떻게??.(あー、俺はお前がむかつく[↑]のも分かるけど、俺が無理だつてば、どうする??。)	責任 (不満)	na
38	KM02	니가 못하는 건, 니가 나한테 콧아달라고 했으면, 사회 생활이면 열심히 해야 될 것 아니야, 새끼야[목소리 톤을 높이며 흥분한 듯이].(おまえが無理って言っても、おまえが俺に入れてくれと言ったからには、社会生活だから一生懸命にすべきだろう、このやろう[声のトーンをあげて興奮気味で]。)	na	非難
39	KM01	아, 내가 정말 미안하다.(あ、俺がマジでごめん。)	謝罪	na
40	KM01	근데, 벌써 돼 버린 걸 어떻게= (だけど、もう受かったのはしょうがないじゃん=。)	責任 (否定)	na
41	KM02	=뭘 어떻게 돼-[↑], 그냥 다니는 거지. (=なにがしょうがないんだ-[↑], 続ける。)	na	非難
라인번호 42~46 省略				
47	KM02	너 진짜 쳐 맞는다, 너 그만식으로 하면. (マジで殴るからな、おまえあんなんしたら。)	na	非難
48	KM02	나 간다.(帰る。)	na	非難

<会話例 6-35>は、前置き談話なしで、KM01は直ちに「バイトを辞める」意向を伝達する発話で会話がスタートし、KM02は事態確認も多少しているが、主に、強度が高い直接的かつ激しい「非難発話文」を用いてKM01を繰り返し責めていた。また、KM02の怒りが収まっていないにもかかわらず、KM01は「代わりに第三者に言ってくれるよう求める」協力

要求の発話や「今のバイトは絶対できない」と説明し続けているので、KM02は、更に、興奮し怒っている発話が続けている。そして、KM02の怒りも理解するが、それでも自分ではできないとライン番号37で述べ、また、KM02は興奮して「このやろう」と、激しい言葉を用いて非難をしている。すると、KM01は、謝罪はしていたが、「こうなってしまったから仕方ない」と、無責任な口調で状況を説明し、KM02はライン番号41から48の最後まで、「殴る」等の言葉を用いて非難し続けて会話が終了してしまう。この謝罪行動のやりとりを見ると、たとえ友達関係だとしても無礼に思われる激しい言葉を用いて互いにやりとりされる特殊な場合であるが、謝罪する側は、「紹介してもらったバイト先」という状況にも関わらず、「バイト先に対する悪口」、「無責任な辞め方」、「協力要求」という否定的な姿勢を見せていて、これを受け謝罪される側は「非難」の発話を続け、結果を出せずに会話が終了したと考えられる。

以下は、韓国語女性の会話例であるが、「受け入れない謝罪行動のやりとり」は、女性で16会話中2会話しか現れなかったが、以下の会話例は、上記の〈会話例6-35〉のように、結果を出せずに会話が終了している例である。

<会話例6-36> 負担度が重い場合の韓国語女性母語話者の謝罪行動のやりとり

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
7	KF21	그래서 내가 아 이 알바 그냥 그만두고- 그냥 영화관으로 갈까?.(それで私、あ、このバイトやめて映画館でバイトしちゃうかしら?)	対人配慮	na
8	KF22	영화관으로 간다고?.(映画館に行くって?)	na	事態確認
9	KF21	응.(うん。)	その他	na
10	KF22	아 근데 이거 시작한지, 얼마 안 됐잖아. (あ、でもこのバイト始めてあまり経っていないじゃない。)	na	非難
11	KF21	응, 또 그건 그래 그지? (うん、それはやっぱ引かかるよね、ね?)	責任	na
ライン番号12~22 省略				
22	KF21	근데 생각해봐, 지금 이 상태에서는 영화관에 가면은 시급이 훨씬 세잖아, 세고 일도 좀 덜 힘들것 같아. (でも考えてみて、今、この状態では映画館でバイトすると時給ももっと高いし、仕事も楽そうなの。)	状況説明	na
23	KF22	어어-(うんうん。)	na	その他
ライン番号24~44 省略				
45	KF22	근데, 좀만 더 해보면 안될까? 줌= (でも、もう少しだけ続けたら駄目かな?少しだけ=。)	na	問題解決

46	KF21	=좀만 더 한 한<달?><.>.(=もう少しって、1ヶ月位?><.>)	その他	na
47	KF22	<그리고><.> 거기 될지도 확실하 모르잖아.<.><.> 그 바이트가出来るかもはっきりとはわからないじゃない。)	na	問題解決
48	KF22	그러니깐 우선은 해보다가 지금 엄청 힘든 건 아니랬잖아(응)그러니깐 계속 해보다가【.(だから、まずはやってみて、今すぐ大変ではないと言ったじゃない(うん)だから、続けてみて【。)	na	問題解決
ライン番号 49~64				
65	KF21	근데 시급이 세니깐 그 생각으로 시급 세니깐 참아야지, 이런것 아니면 좀더 덜 힘들면(어) 아 시급도 센데 이 알바는 진짜 돈도 많이 번다 똑같은 시간해도 효율적이지 않을까?<웃음>.(でも時給が高いからって考えて時給が高いから我慢しなくちゃ、こんなの、じゃなかったらもうちょっと大変じゃなかったら(うん)あ、時給も高いし、このバイトは本当にお金もたくさん稼げるし、同じ時間でも効率的じゃないかな?<笑い>。)	状況説明	na
66	KF22	또 그런데, 좀 내 생각도 좀 해주지... (それもそうだけど、私の事も考えてもらわないと...。)	na	非難
ライン番号 67~74 省略				
75	KF22	=신용이 떨어지고 좀 그러잖아. (=信用がなくなってちよっとあれじゃん。)	na	非難
76	KF21	맞아, 그럴 것 같긴 해.(そうね、そうだろうね。)	責任	na
77	KF21	<아-어떻하지><.>...<.>(〈あ-、どうしよう><.>...。)	対人配慮	na
78	KF22	<잘 모르겠다><.>.<.>(〈良く分からない><.>。)<.> ← 保留	na	保留

<会話例 6-36>は、挨拶の挿入談話からスタートし、前置き談話あるいは謝罪発話文なしで、KF21が、直ちに、今のバイト先が大変であり、新しく見つけた所の良い点を説明していた。そして、ライン番号7で「그래서 내가 아 이 알바 그냥 그만두고- 그냥 영화관으로 갈까?.(それで私、あ、このバイトやめて映画館でバイトしちゃうかしら?。)」と、一応、相手を配慮し意向は尋ねているが、直接的にバイトを辞めることに言及して、KF22は、事態確認をしていたが、非難の発話を続け、KF21のバイト期間が短いことを責めている。これを受け、KF21は、責任は認めるが、今のバイト先の大変さや新しいバイト先の良い点を繰り返し強調しながら状況を説明し、KF22は、自分の努力を挙げ、非難を続けて問題を解決しようとしている。しかし、KF21は、ライン番号22を見ると、KF22の非難と問題解決の発話にも関わらず、新しいバイト先について言及し続けている。このような状況説明と非難発話が続き、更に、ライン番号45から48にかけて、KF22は、より積極的にKF21の意向を変えさせようと努力をしているが、KF21は、なかなか自分の意向を諦めず、同様の

説明、つまり、既存のバイト先の問題点と大変さや新しく見付けたバイト先である映画館の良い点を対比させながら説明している。また、ライン番号 65 で、「時給が高い」、「お金もたくさん稼げる」、「効率的」等の言葉を用いて KF22 を説得しようとしたが、KF22 が、「또 그런데, 좀 내 생각도 좀 해주지….(それもそうだけど、私の事も考えてもらわないと…。)」と、KF21 に対する不満の気持ちを若干消極的に表している。また、ライン番号 75 で、「=신용이 떨어지고 좀 그러잖아.(=信用がなくなってちょっとあれじゃん。)」と、KF21 の不愉快な行動により自分の人間関係もどうなるか分からないと責め続けているが、KF21 は、このような発話にも関わらず、最後まで「<아-어떻하지>{<}….(<あ-、どうしよう>{<}…。)」と、相手を配慮し自分の意向を貫徹しようとはしないが、曖昧な姿勢を見せている。そして、KF22 は、「<잘 모르겠다>{<}.(<良く分からない>{<}。)」(ライン番号 78)と、KF21 が持ち出した不愉快な状況自体を保留するような発話をし、会話は結果なしで終了してしまう。この謝罪行動のやりとりの特徴は、会話が終了するまで、謝罪する側の「謝罪定型表現」を用いた「謝罪発話文」が一度も現れていないことである。また、謝罪する側は、「状況説明」、「責任関連」、「対人配慮」の発話のみ繰り返し言及し、自分の過失を修復しようとする働きは全然行なわれず、謝罪される側も、若干の「譲歩」の発話はしていたが、主に、「非難」、「問題解決」の発話のみ繰り返し言及し、相手の意向を受け入れようとする姿勢は全然見せなかった。互いに相手を理解しようとする交渉のやりとりではなく、自己中心的な立場で相手を理解させようとする交渉のみ続けていたので、結局は不愉快な状況自体が保留される形で会話が終了したと思われる。以下の会話例も互いに保留する形で会話は終了するが、<会話例 6-36>の流れと異なっている。

<会話例 6-37> 負担度が重い場合の韓国語女性母語話者の謝罪行動のやり取り

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
36	KF11	그러면 약속을 나중에 한 이틀 후에(응)다시 잡아서 같이 그러면 그사람한테 찾아가 보기로 하자, 괜찮아? (では約束を後ほど、2日後に(うん)再び取って、共にその人に行ってみようね、大丈夫?)	保留	na
37	KF12	그래, 그렇게 해보지, 그러면 일단 내가 그사람한테는 전화는 해 놓게. (そうか、そうしよう、では一応私もその人には電話して置く。)	na	保留
38	KF11	그래.(そう。)	その他	na
39	KF12	그리고 이틀뒤에 그사람도 알아야되니깐 일단. (そして2日後その人も知らなければならないので一応。)	na	保留
40	KF11	그러면 나는 일단 그때까지 미룰게. (では、私が一応その時まで伸ばすよ。)	保留	na

41	KF11	거기 이력서 내는 거를 미루고 너 연락받고 가서 얘기해 보고, 그 다음에 가도록 하자.(そこ履歴書出すの伸ばして、あなた連絡受けて行って話してみて、その後に行くことにしよう。)	保留	na
42	KF12	그래 그러면 그때 연락할게.(そう、ではその時連絡する。)	na	保留

<会話例 6-37>は、KF11 が、「対人配慮」、「状況説明」、「責任関連」の発話を繰り返し用いて自分の意向を伝達し、「謝罪発話文」も一回用いていたが、KF12 は、「事態確認」の発話なしで、直ちに、「非難」の発話を用いて相手を責め続けていたが、「譲歩」の発話も若干用いていた。このようなやりとりが行なわれた後、KF12 は、不愉快な状況自体を自ら解決しようとせず、「第三者に連絡してみる」と、問題の解決を第三者に委ねてしまうような発話をしている。その後、ライン番号 36 から 42 にかけて、KF11 と KF12 は「保留」の発話を交換し、KF11 は、「거기 이력서 내는 거를 미루고 너 연락받고 가서 얘기해 보고, 그 다음에 가도록 하자.(そこ履歴書出すの伸ばして、あなた連絡受けて行って話してみて、その後に行くことにしよう。)」(ライン番号 41)と、直接的に変える時期を延ばすことに言及し、KF12 は、「그래 그러면 그때 연락할게.(そう、ではその時連絡する。)」(ライン番号 42)と、第三者との打ち合わせ時間を調べることに言及している。

この謝罪行動のやりとりは、上記の<会話例 6-36>と異なり、謝罪する側、謝罪される側両方がお世話になっている第三者に決定権を譲り、保留する形で終了している。また、このやりとりにおいても、謝罪する側の「過失修復」の発話と謝罪される側の「問題解決」の発話が現れていない特徴があり、韓国語女性は、負担度の重い場合での謝罪行動では、謝罪する側の積極的な「過失修復」の発話が重要ではないかと考えられる。

以上の結果から、受け入れない謝罪行動のやりとりの特徴は、韓国語男性の場合、謝罪する側は、「状況説明発話文」や「謝罪発話文」、更に、責任を認める発話や責任を認めない発話を用いて繰り返し理解を求めている。また、謝罪される側は、フェイス侵害度が高い直接的な「非難発話文」を多用しており、「問題解決発話文」を繰り返し積極的に行っているため、結局、謝罪する側が自分の意向を変更する会話や保留する会話、更に、結果なしで曖昧に終了する会話が現れている。これに対し、韓国語女性の場合、謝罪する側は、「謝罪発話文」はあまり用いず、謝罪される側は、フェイス侵害度が高い「非難発話文」を多用して受け入れないことを繰り返し言及しており、結局、保留する会話や結果なしで曖昧に終了する会話が現れている。

6.6 負担度が重い場合の日韓母語話者における謝罪行動のまとめ

本節では、負担度が重い場合の日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪行動の類似点と相違点等を明らかにし、相互作用の観点から見られる特徴を考察した。さらに、日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪行動のプロセスを考察した上で、そこから現れる謝罪行動の特徴を対人配慮行動と関連付けて考察を行った。

日本語母語話者は、男女共に、謝罪する側は、主に「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」、「対人配慮」の4種の発話文を用いており、謝罪される側は、「事態確認」、「非難」、「譲歩」、「問題解決」の4種の発話文を用いて謝罪行動を行っているが、そのやりとりにより謝罪内容が謝罪される側に受け入れられる会話と受け入れられない会話が見られた。謝罪する側の「状況説明」、「責任関連」は、女性より男性の方で多く現れ、「話題の前触れ」、「謝罪」、「対人配慮」、「過失修復」は、男性より女性の方で多く現れており、「協力要求発話文」は男女による差があまり見られなかった。また、謝罪される側の「前触れに対する応答」、「非難」は、女性より男性の方で多く現れており、「事態確認」、「譲歩」、「問題解決」、「代償要求」は、男性より女性の方で多く現れた。

受け入れる謝罪行動の特徴として、日本語男性の場合、謝罪する側は、主に、相手のフェイスに配慮する言語行動を用いながら自分の意向を説明しているが、謝罪される側は受け入れるよう積極的に繰り返し働きかけている傾向が見られた。謝罪される側は、フェイス侵害度が高い「非難発話文」を多く用いているが、フェイスを配慮する「譲歩発話文」も用いながら交渉を行っており、友人である謝罪する側の立場を考えて、結局受け入れることを示していた。これに対し、日本語女性の場合、謝罪する側は、不満な気持ちを表す傾向も若干見られたが、主に、相手のフェイスに配慮する言語行動を用いながら自分の意向を説明していた。謝罪される側は、フェイス侵害度が高い「非難発話文」は用いているが、「事態確認」、「問題解決」、「譲歩」の発話文を多用して反応しており、友人である謝罪する側の立場を考えて、結局受け入れることを示していた。一方、受け入れない謝罪行動の特徴は、日本語男性の場合、謝罪する側は、「状況説明」と「責任関連」を主に用いて繰り返し理解を求めているが、「謝罪発話文」は、「受け入れる謝罪行動のやりとり」よりは多く用いていなかった。また、謝罪される側は、直接的な「非難発話文」を多用しており、「問題解決発話文」を繰り返し積極的に行っているため、結局、謝罪する側が自分の意向を変更する会話が見られていた。これに対し、日本語女性の場合、謝罪する側は、「謝罪発話文」を用いるやりとりと、用いていないやりとりが半々現れているが、全体的に、「受け入れる謝罪行動のやりとり」よりは多く用いていなかった。謝罪される側は、「非難発話文」は勿論、「問題解決」、「事態確認」、「譲歩」を繰り返し用いて積極的に謝罪する側の意向を変更させるため働きかけていた。

韓国語母語話者は、男女共に、謝罪する側は、主に、「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」、「対人配慮」、「過失修復」の5種の発話文を用いており、謝罪される側は、主に、「事態確認」、「非難」、「譲歩」、「問題解決」の4種の発話文を用いて謝罪行動を行っているが、そのやりとりにより謝罪内容が謝罪される側に受け入れられる会話と受け入れられない会話が見られた。謝罪する側の「責任関連」、「協力要求」は、女性より男性の方で多く用いられており、「話題の前触れ」、「状況説明」、「謝罪」、「対人配慮」、「過失修復」は、男性より女性の方で多く現れていた。また、謝罪される側の「譲歩発話文」は、男性より女性の方で若干多く用いられており、「非難発話文」は、女性より男性の方で多く現れていたが、その

他の「前触れに対する応答」、「事態確認」、「問題解決」、「代償要求」は、男女による差があまり見られなかった。

受け入れる謝罪行動の特徴として、韓国語男性の場合、謝罪する側は、主に、相手のフェイスに配慮する言語行動や相手のフェイスを侵害する言語行動を用いながら自分の意向を説明しているが、謝罪される側が受け入れるよう積極的に繰り返し働きかける傾向が見られた。謝罪される側は、「非難発話文」を多く用いており、問題になっている事柄を解決するための働きかけも積極的に行っているが、友人である謝罪する側の立場を考えて、結局受け入れることを示していた。これに対し、韓国語女性の場合、謝罪する側は、主に、相手のフェイスに配慮する言語行動を用いており、自分が引き起こした問題になっている事柄を自ら解決するため積極的に働きかけながら自分の意向を説明していた。謝罪される側は、「非難発話文」は用いているが、「譲歩発話文」も多く用いて反応しており、友人であるという関係や解決の見込みがある状況を考え、受け入れることを示していた。受け入れない謝罪行動の特徴は、韓国語男性の場合、謝罪する側は、「状況説明発話文」や「謝罪発話文」、更に、責任を認める発話や責任を認めない発話を用いて繰り返し理解を求めている。謝罪される側は、「非難発話文」を多用しており、「問題解決発話文」を繰り返し積極的に行っているため、結局、謝罪する側が自分の意向を変更する会話や保留する会話、更に、結果なしで曖昧に終了する会話が見れていた。これに対し、韓国語女性の場合、謝罪する側は、「謝罪発話文」はあまり用いず、謝罪される側は、フェイス侵害度が高い「非難発話文」を多用して受け入れないことを繰り返し言及しており、結局、保留する会話や結果なしで曖昧に終了する会話が見れていた。

6.7 謝罪行動のプロセスに関するまとめ

本章では、日韓母語話者における謝罪行動のプロセスの類似点や相違点等の特徴を全体的に比較しながら分析し考察を行い、分析結果から見られる日本社会と韓国社会の対人コミュニケーションの特徴を相互作用の観点からの考察を行った。

分析する際には、先行研究を参照しながら本研究の会話データを基に、「謝罪発話文」や「謝罪関連発話文」の分析項目として「話題の前触れ」、「状況説明」、「責任関連」、「対人配慮」、「過失修復」、「協力要求」、「保留」、「意向変更」、「その他」の9種の発話文を立てて分析を行った。また、「応答関連発話文」は、「前触れに対する応答」、「事態確認」、「非難」、「譲歩」、「問題解決」、「代償要求」、「過失言及」、「受諾」、「保留」、「その他」の10種の発話文を立てて分析を行った。

日韓母語話者の謝罪行動の類似点は、負担度が重い場合には、「状況説明」、「対人配慮」、「問題解決」の3種の発話文が、負担度が軽い場合より、日韓母語話者共に共通的に多く用いられている特徴が見られた。一方、負担度が軽い場合には、「謝罪」、「責任関連」の2種の発話文が、負担度が重い場合より、日韓母語話者共に共通的に多く用いられている特徴が見られた。軽い謝罪場面では、謝罪内容が軽くて深刻ではないため、謝罪する側は、

自分のフェイスを守りたいという欲求よりは、相手のフェイスを侵害したくないという欲求が優先され、「謝罪発話文」が多用されているが、重い謝罪場面では、謝罪内容が重くて深刻であるため、自分のフェイスを守りたいという欲求と相手のフェイスを侵害したくないという欲求が同時に優先され、「謝罪発話文」は減り、代わりに、「状況説明発話文」や「対人配慮発話文」が増えているのではないかと解釈した。また、謝罪される側は、軽い謝罪場面では、相手のフェイスを配慮し、相手のフェイスを侵害したくないという欲求を優先し、謝罪内容を受け入れているが、重い謝罪場面では、自分のフェイスや相手のフェイスを考慮し、「問題解決発話文」も多用しているのではないかと解釈した。しかし、負担度が軽い場合には、「謝罪発話文」、「否定的な責任関連発話文」、「過失修復発話文」と「過失言及発話文」、「非難発話文」で日韓母語話者の謝罪行動で相違点が見られた。一方、負担度が重い場合には、日本語母語話者の「謝罪発話文」、韓国語男性の「非難発話文」、韓国語母語話者の「過失修復発話文」、日本語女性の「問題解決発話文」と「意向変更発話文」のやりとりで日韓母語話者の謝罪行動で相違点が見られた。

次に、負担度が軽い場合の日韓母語話者の謝罪行動の特徴を考察したが、日本語母語話者は、男女共に、謝罪する側は、主に「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」の3種の発話文を用いて謝罪行動を行っており、謝罪される側は、「過失言及」、「事態確認」、「非難」、「譲歩」の4種の発話文を用いて謝罪行動を行い、そのやりとりは簡単に受け入れることで収束した。しかし、「状況説明」、「責任関連」は、女性より男性の方で多く現れており、「謝罪」、「対人配慮」、「過失修復」は、男性より女性の方で若干多く現れていた。また、「事態確認」、「非難」、「譲歩」は、女性より男性の方で若干多く現れており、「過失言及」、「代償要求」は、男性より女性の方で多く現れていた。日本語男性は「責任否定や回避」や「非難発話文」を多用する傾向が見られ、日本語女性は「謝罪発話文」を繰り返し多用する傾向や「受諾発話文」を多く用いて受け入れることを簡単に示す傾向が見られた。一方、韓国語母語話者は、男女共に、謝罪する側は、主に「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」の3種の発話文を用いて謝罪行動を行っているが、日本語母語話者よりは「対人配慮発話文」や「過失修復発話文」もかなり用いていた。謝罪される側は、「非難発話文」を多く用いていたが、「過失言及」、「事態確認」、「譲歩」、「代償要求」の発話文もかなり用いながら、受け入れることで収束させていた。しかし、「状況説明」、「謝罪」は、男性より女性の方で多く現れており、「責任関連発話文」は女性より男性の方で多く用いられたが、「対人配慮」、「過失修復」は、男女による差が殆ど見られなかった。また、「事態確認」、「非難」は、女性より男性の方で多く現れており、「過失言及」、「譲歩」、「代償要求」は、男性より女性の方で多く現れていた。韓国語男性は「責任否定や回避」や「非難発話文」を多用しているが、乱暴で激しい言葉を用いる傾向があった。韓国語女性は「謝罪発話文」や「状況説明発話文」を多用する傾向があり、「非難発話文」も多く用いていたが、「過失言及発話文」や「譲歩発話文」を男性よりは多く用いて受け入れることを示していた。

最後に、負担度が重い場合の日韓母語話者の謝罪行動の特徴を考察したが、日韓母語話

者は、男女共に、謝罪する側は、主に「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」、「対人配慮」の4種の発話文を用いており、謝罪される側は、「事態確認」、「非難」、「譲歩」、「問題解決」の4種の発話文を用いて謝罪行動を行っているが、そのやりとりにより謝罪内容が謝罪される側に受け入れられる会話と受け入れられない会話が見られたが、韓国語母語話者は、「過失修復発話文」も多く用いていた。

受け入れる謝罪行動の特徴は、日本語男性の場合、相手のフェイスに配慮する言語行動を用いながら自分の意向を説明しているが、謝罪される側は受け入れるよう積極的に繰り返し働きかけている傾向が見られ、謝罪される側は、「非難発話文」を多く用いているが、「譲歩発話文」も用いながら交渉を行っていた。日本語女性の場合、謝罪する側は、相手のフェイスに配慮する言語行動を用いながら自分の意向を説明しており、謝罪される側は、「非難発話文」は用いているが、「事態確認」、「問題解決」、「譲歩」の発話文を多用して反応していた。韓国語男性の場合、相手のフェイスに配慮する言語行動や相手のフェイスを侵害する言語行動を用いながら自分の意向を説明しているが、謝罪される側が受け入れるよう積極的に繰り返し働きかける傾向が見られ、謝罪される側は、「非難発話文」を多く用いており、問題になっている事柄を解決するための働きかけも積極的に行っていた。韓国語女性の場合、相手のフェイスに配慮する言語行動を用いており、自分が引き起こした問題になっている事柄を自ら解決するため積極的に働きかけながら自分の意向を説明しており、謝罪される側は、「非難発話文」は用いているが、「譲歩発話文」も多く用いて反応しており、友人であるという関係や解決の見込みがある状況を考え、受け入れることを示していた。

一方、受け入れない謝罪行動の特徴は、日本語男性の場合、「状況説明」と「責任関連」を主に用いて繰り返し理解を求めているが、「謝罪発話文」は、「受け入れる謝罪行動のやりとり」よりは多く用いておらず、謝罪される側は、「非難発話文」を多用しており、「問題解決発話文」を繰り返し積極的に行っていた。日本語女性の場合、「謝罪発話文」を用いるやりとりと、用いていないやりとりが半々現れているが、全体的に、「受け入れる謝罪行動のやりとり」よりは多く用いておらず、謝罪される側は、「非難発話文」は勿論、「問題解決」、「事態確認」、「譲歩」を繰り返し用いて積極的に謝罪する側の意向を変更させるため働きかけていた。韓国語男性の場合、「状況説明」や「謝罪」、更に、責任を認める発話や責任を認めない発話を用いて繰り返し理解を求めており、謝罪される側は、「非難発話文」を多用しており、「問題解決発話文」を繰り返し積極的に行っていた。韓国語女性の場合、「謝罪発話文」はあまり用いず、謝罪される側は、「非難発話文」を多用して受け入れないことを繰り返し言及していた。

次の第7章では、本章の発話文レベルの相互作用の分析をより詳細に分類し、「謝罪発話文と応答発話文」における日韓母語話者の特徴を分析し考察を行う。

第7章 謝罪発話文と応答発話文の分析

本章では、謝罪談話内において謝罪する側の「謝罪定型表現」が用いられた発話(謝罪発話文)やその直後に来る謝罪される側の応答(応答発話文)を中心に、「謝罪行動」という発話行為レベルの相互作用を分析し考察を行う。

謝罪行動の核となる部分は「謝罪定型表現」であるが(彭国躍 1991、熊取谷 1993、高木 1996、崔信淑 2004、泰秀美 2004 等)、先行研究で概観したように、「謝罪定型表現」に関する研究は多数あるが、これらの研究は「謝罪定型表現」のみに焦点をおいたものが多く、「謝罪定型表現」が用いられた前後の発話文の関係やその直後の応答まで視野に入れて分析したものはほとんど研究されていなかったと考えられる。しかし、謝罪行動の核となる「謝罪定型表現」が用いられると、謝罪される側は、肯定的であれ否定的であれ、あるいは中立的であれ、何らかの反応を示すだろう。さらに、負担度に差があれば、その反応にも相違点が現れる可能性があると考えられる。

前章では、「謝罪定型表現」が用いられた謝罪発話文を含め、謝罪する側と謝罪される側のやりとりである謝罪行動を全体的に分析し、そのプロセスを明らかにするため考察を行ったが、本章では、よりローカルな観点で、「謝罪定型表現」が用いられた謝罪発話文とその直後に来る応答発話文にのみ焦点を置き、謝罪する側と謝罪される側の相互作用について考察を行う。

本章の理論的な背景になるのは、会話分析(Conversation analysis, CA)の「隣接ペア」である。「隣接ペア」は、会話有機体の基本的単位であるが、(i) 隣りあっていること、(ii) 異なった話者に依るものであること、(iii) 第一部分(first part)と第二部分(second part)という順序があること、(iv) 第一部分が決まった第二部分を要求するという意味で、例えば、申し出は受容または拒否を、挨拶は挨拶を要求するという具合に型にはまっていること、という特徴を持っている(メイナード、2005)。「隣接ペア」は、第一の発話と第二の発話が対を成すというもので、第二の発話に当たる応答は、優先応答(preferred response)と非優先応答(dispreferred response)に分けられる(Schegloff and Sacks(1973 / 北澤・西阪訳 1989))。特に、「謝罪」における「隣接ペア」は、「謝罪一軽減語」であり、謝罪する側のフェイスを配慮し、その謝罪を受け入れ、負担を軽減するため、働きかけることが優先されている。本研究の実際の会話のやりとりで、このような傾向が見られているのかを視野に入れて、検証を行うこととする。

まず、日韓母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の類似点や相違点等の特徴を全体的に分析し考察を行う。次に、負担度が軽い場合と負担度が重い場合の日本語母語話者と韓国語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」を相互作用の観点から分析し

考察を行うが、分析する際には、「謝罪発話文と応答発話文」の特徴を分析し検討した後、実際の会話例を通して謝罪する側と謝罪される側がどのような相互作用を行っているかを分析し考察を行う。

7.1 「謝罪発話文と応答発話文」における分析方法

本研究における「謝罪発話文」とは、「謝罪定型表現」が用いられた発話文であるが、一つの発話文の中に一つあるいは一つ以上の「謝罪定型表現」が用いられた発話文を指す。一方、「応答発話文」とは、「謝罪発話文」に対し謝罪される側が直後に反応する発話文を指す。これらの「謝罪発話文」と「応答発話文」の相互作用を分析するにあたり、まず、以下では分析項目の詳細について説明する。

7.1.1 謝罪発話文における分類

「謝罪定型表現」は、日本語の場合は「申し訳ない係、ごめん係、すまない係、悪い係」と分類され研究されたものが多く、韓国語の場合は「미안하다 (ミアンハダ) 係、죄송하다 (チェソンハダ) 係」と分類され研究されている。泰秀美(2004)は、「謝罪定型表現」が表す表現内容として、①遂行動詞を用いる類(「謝る」「謝罪する」「お詫びする」など明示的な遂行動詞を用いる類のもの)、②心的態度を表す類(「申し訳ありません」「すみません」のように話し手が当核の事柄に対して抱いている気持ちを表明する類)、③相手に迷惑をかけたことを認める類(相手に迷惑をかけたことを認めるような表現の類としては「悪い」が挙げられる)、④許しを求める類(「ごめん」類が挙げられる)の4種類を挙げて説明している。

本研究では、「申し訳ない係、ごめん係、すまない係、悪い係」のような「謝罪定型表現」やその前後に現れる「謝罪発話文」を分類する際に、Beebe(1987、島岡・卯城・佐久間訳(1998))等が提唱した「意味公式(semantic formula)」を参考にするが、藤森(1995)によると、「意味公式(semantic formula)」とは、発話を社会の相互作用の中で見た場合の発話行為具現化のための最小機能単位である。前章の分析単位は「発話文」であったが、本章の分析単位は、最小機能単位である「意味公式」であるため、より具体的かつ詳細な分析単位と言えよう。「意味公式」を分析単位として研究した発話行為は「断り」が多く、更に、「謝罪」を「断り」の意味公式の一つとして考え、研究されたもの(Beebe 1987(島岡・卯城・佐久間訳(1998))、生駒・志村 1992、藤森 1995 等)がほとんどであり、そのデータ収集方法は、談話完成テストである。しかし、本研究は「謝罪発話文」を、実際にやりとりされた会話データを基に、意味公式を用いて分析し、更に、直後に来る応答発話文も意味公式の観点から分析を行う。

以下の表 7-1 では、「謝罪発話文」を「直接謝罪」、「責任」、「状況説明」、「なだめ」、「代償言及」、「自制の約束」の6つの意味公式に分類し、更に、「責任」を、「責任認め」、「責任否認」、「不満表明」に下位分類し、「状況説明」を、「事態言及」、「理由言及」、「対処行動言及」に下位分類し、その発話例を記す。

表 7-1 謝罪発話文を構成する意味公式の分類

意味公式	下位分類	発話例
直接謝罪		<u>JM01</u> : =そっか、ごめん、ごめん。 <u>KF01</u> : 미안해 <진짜>{<}.(ごめん<本当に>{<}。)
責任	責任認め	<u>負担度軽</u> : <u>JM03</u> : ちょっと遅くなっちゃった。 <u>KF17</u> : 그래서 어 20 분이 나 늦었네, &, (それで、えっと、20分も遅れちゃったね、&,) _ <u>負担度重</u> : <u>JF27</u> : それは本当に「JF28 名」の顔に泥に塗ってしまっ&,, <u>KM03</u> : 너무 내 생각만 해서&, (本当に私のことばかり思っ&,)
	責任否認	<u>負担度軽</u> : <u>JM09</u> : やあ、俺もどうしてもないっ[↑]、どうしてもなかった正直、&,
	不満表明	<u>負担度軽</u> : <u>KM09</u> : <약간 웃음>아-, 왜 전화를 집에, 어렸든&, (<少し笑い>あー、何で電話を家に、とりあえず&,)
状況説明	事態言及	<u>負担度重</u> : <u>JM25</u> : あのう、新聞で、ちょっと家に凄く近くて、条件がいいの見付けちゃって、辞めたいんだけど…。 <u>KF11</u> : 그것보다 더 편한테를 내가 구해가지구-, 지금 거기에 하려고 하는데&, (それよりもっと楽な所を私が探したので、今そこをしようとするけど&,)
	理由言及	<u>負担度軽</u> : <u>JM13</u> : なんか、人身事故でちょっと動かなくて。 <u>JF07</u> : なんか、電車止まっちゃって。 <u>KF03</u> : 아 사고가 나가지고&, (あー事故が起こって、&,)
	対処行動言及	<u>負担度軽</u> : <u>JM11</u> : 電話したんだけどさ、なんか、繋がらなかったんだよね。
なだめ		<u>負担度軽</u> : <u>KF11</u> : 배고프지?(おなか空いたね?) <u>KF13</u> : 어 어휴! 야, <야, 어떻게->{<}[↑[큰 소리로], (あ、もう！ちょっと、<もう、どうしよう>{<}[↑[大きい声で],) <u>負担度重</u> : <u>JM03</u> : せっかく紹介してもらって(まあーね)&, <u>KF01</u> : 그래두, 되게 무리하게 얻어준 건데 그만둔다고 하니깐. (だけど、すごく無理して雇ってもらったのに辞めると言うから。)
代償言及		<u>JF31</u> : <まあ>{<}でも、今日はじゃなんか奢るから&,, <u>KM07</u> : 커피 한 잔 살게. (コーヒー一杯奢る。)
自制の約束		<u>KM17</u> : 내가 안 늦을께. (もう遅れないから。)

7.1.2 応答発話文における分類

本節では謝罪発話文の直後に来る謝罪される側の反応(応答発話文)に焦点を絞り、分析方法を説明する。Schegloff and Sacks(1973 / 北澤・西阪訳 1989)の「隣接ペア」は、根本的に状況の適切性に基づいていて、聞き手が話し手の言ったことに答えるという形で発話する時を指し、しかも、その答えは、社会的な慣習によって決められていると説明している。また、熊取谷(1992)は、修復作業への応答は、基本的にはこれを受け入れるか、拒絶するかから成って、「受け入れ」は修復作業を受け入れ、これにより相手が負う倫理的責任からの解放を、また、「拒絶」は相手の詫びを受け入れないことを指すと述べている。

以下の表 7-2 では、「応答発話文」を「受諾」、「譲歩」、「情報求め」、「回避」、「非難」、「代償要求」の 6 つの意味公式に分類し、更に、「受諾」は、「明示的な受諾」、「非明示的な受

「諾」に下位分類し、「回避」は、「話題転換」、「感嘆詞を漏らす」に下位分類し、その発話例を記す。

表 7-2 応答発話文を構成する意味公式の分類

意味公式	下位分類	発話例
受諾	明示的な受諾	負担度軽 : JM02: 仕方ないよね。 KM08: <웃으면서><괜찮아>{>}. (<笑いながら><大丈夫>{>}.) KF04: 알았어, <어쩔수없지>{>}, (わかった, <仕方ない>{>},) 負担度重 : JF22: =もうちょっと待ってね, うん, じゃ, 一応聞いて(うん)みることは聞いてみるね<笑い>. KF26: 갈때 아니야 괜찮아, 갈때 사람 구할때까지만 계속 일하고 구하면은 관둘수있게 잘 해줄께.(いいよ, 代わりの人が見付かるまで働いてくれたらちゃんと辞めれるようにしておくよ.)
	非明示的な受諾	負担度軽 : JM10: うん, まあー。 負担度重 : JM22: うん。 KF08: 아 그래.(あ, うん。)
譲歩		負担度軽 : JM02: 電車止まってたんだったら(うん), JF22: <そうか, よく止まる>{>}よね, JR=。 JF08: 私も携帯忘れたし。 KF16: 뭐 그럴 수도 있지, 그러면서<웃음>.(そういうこともあるし, なんてね<笑い>). KM12: 핸드폰을 놓고 와 가지고 연락이 안 되니깐 너무 불편하네.(携帯を置いて来たから, 連絡ができないから, とても不便だね。) 負担度重 : JF02: <まあ, バイト>{>}楽しい方がいいもんね, <実際>{>}. JF14: そうだよね(うん), 人間関係は結構(うん)重要な要素だからね。 KF14: 나는 괜찮은데, &, (私は大丈夫だけど&,,)
情報求め		負担度軽 : JM16: 何やってた?(<笑い>). KM06: 왜 이렇게 늦었어?.(何でこんなに遅れたの?.) 負担度重 : KF04: =다른 알바를 뭐 생각해 둔게 있는거야?.(=他のバイトを考えているの?.) JF04: え[↑], そのバイト自体は良くないとか, なんかそのバイト自体に何かあるとかではないんやろ?.
回避	話題転換	JF02: じゃーどうする?何食べる?。 KM04: 우리 빨리 밥이나 먹으러 가자.(私たち早くご飯でも食べに行こう。)
	感嘆詞を漏らす	負担度軽 : JF10: <あーあーあー>{>}. 負担度重 : JM18: うーうんー。 KF04: 그래- 어<약간 웃음>[→].(そうー, あー<少し笑い>[→].)
非難		負担度軽 : JM18: 20分も待ったんだよね。 KF04: 어, 뭐야 20분 지났어-.(何だ, もう20分過ぎたじゃん。) 負担度重 : JF04: なんかすごい, すごい[↑] 頼んだ, んよね, <私>{>}. KM16:]]<년 계속>{>}미안하다고만 얘기를 하는데..., 그럼 미안할 상황을 만들지 말아야지, 그럼[화난 말투로 이야기함].(]]<おまえはずっと>{>}すまないしか言わないけど..., そしたら最初から謝る状況を作んなければいいじゃん[怒った口調].)
代償要求		KF30: 여긴 여긴 언니가 쓰는건가?<웃음>. (ここはお姉さんのおごり?<笑い>.)

7.1.3 「謝罪発話文と応答発話文」の評定者間信頼性係数

「謝罪発話文」と「応答発話文」のコーディング項目の信頼性を確認するために、第二評定者を立て、Cohen's Kappa を用いて確認した。以下の表 7-3 に、「謝罪発話文」におけるコーディングの評定者間信頼性係数を示す。

表 7-3 日韓母語話者の「謝罪発話文」における評定者間信頼性係数

	日本語母語話者	韓国語母語話者
負担度が軽い謝罪場面	$\kappa=0.926$ ($\kappa>0.70$)	$\kappa=0.874$ ($\kappa>0.70$)
負担度が重い謝罪場面	$\kappa=0.899$ ($\kappa>0.70$)	$\kappa=0.767$ ($\kappa>0.70$)

表 7-3 を見ると、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面における日韓母語話者の「謝罪発話文」のコーディングの評定者間信頼性係数は、全て $\kappa>0.70$ で、信頼性があると判断された。次の表 7-4 に、「応答発話文」のコーディングの評定者二者間信頼性係数を示す。

表 7-4 日韓母語話者の「応答発話文」における評定者間信頼性係数

	日本語母語話者	韓国語母語話者
負担度が軽い謝罪場面	$\kappa=0.766$ ($\kappa>0.70$)	$\kappa=0.845$ ($\kappa>0.70$)
負担度が重い謝罪場面	$\kappa=0.75$ ($\kappa>0.70$)	$\kappa=0.855$ ($\kappa>0.70$)

表 7-4 を見ると、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面における日韓母語話者の「応答発話文」のコーディングの評定者間信頼性係数は、全て $\kappa>0.70$ で、信頼性があると判断された。

7.2 「謝罪発話文と応答発話文」に関する日韓対照の分析結果及び考察

本節では、負担度が軽い場合と負担度が重い場合に現れる日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」を全体的に分析し、その特徴を考察する。

以下の図 7-1 と 図 7-2 は 負担度が軽い場合と重い場合の「謝罪発話文」を構成する意味公式の総計に占める日韓母語話者の割合の比較である。

負担度が軽い場合の「遅刻場面」では、場面設定により、「理由言及」と「自製の約束」が現れており、負担度が重い場合の「バイト関連場面」では、場面設定により、「事態言及」が現れているが、これら以外は共通的な意味公式である。

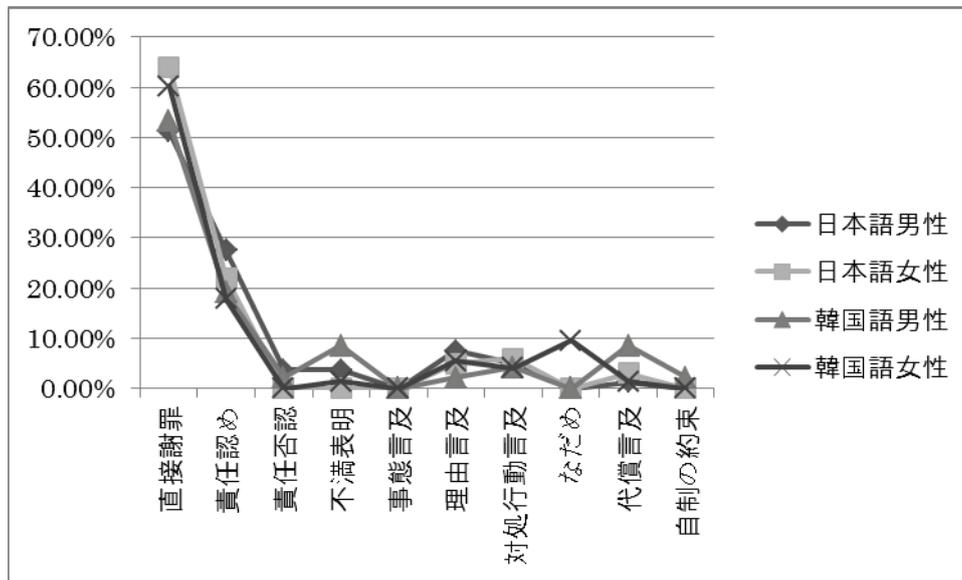


図 7-1 「謝罪発話文」を構成する意味公式の割合の比較(負担度が軽い場合)

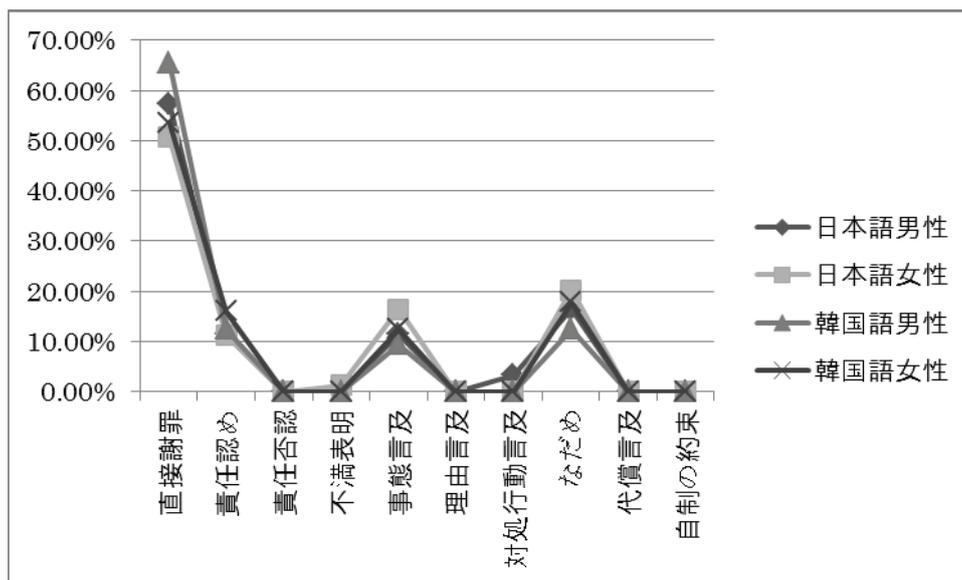


図 7-2 「謝罪発話文」を構成する意味公式の割合の比較(負担度が重い場合)

図 7-1 と図 7-2 をみると、負担度が軽い場合には、日韓母語話者共に、「直接謝罪」と「責任認め」を主に用いており、これら以外の意味公式である「責任否認」、「不満表明」、「理由言及」、「対処行動言及」、「なだめ」、「代償言及」、「自製の約束」は、1割以下の割合である。一方、負担度が重い場合には、日韓母語話者共に、負担度が軽い場合と同様に主に「直接謝罪」を用いているが、「責任認め」、「事態言及」、「なだめ」もかなり用いているのがわかる。負担度が軽い場合より負担度が重い場合に、日韓母語話者の「謝罪発話文」を構成する意味公式の割合が類似している傾向を見せているのではないかと考えられる。しかし、

「責任認め」をみると、日韓母語話者共に、負担度が軽い場合より負担度が重い場合の割合が低く、「なだめ」は、負担度が重い場合の割合が高い共通性を見せている。本研究の謝罪場面設定により現れた特徴と思われるが、負担度が重い場合には、自分のフェイスを考え、「責任」を簡単に認める発話は減り、代わりに、相手のフェイスを考え、相手の怒りを抑えるため「なだめる」発話は増えている傾向があるのではないかと考えられる。前章の分析結果からでも言及したが、負担度が重くなればなるほど、自分のフェイスを守りたいという欲求と相手のフェイスを侵害したくない欲求が複雑に絡み合っ、簡単に責任を認めながら謝罪することより、事態を言及したり、相手をなだめたりしながら、謝罪する発話が多く用いられていると考えられる。

謝罪の先行研究では、「謝罪定型表現」のみ焦点をおいて、「力、距離、男女、状況、責任有無等」の変数により、用いられる「謝罪定型表現」を研究したものが多かった。しかし、「謝罪定型表現」が用いられている「発話文」を分析することにより、謝罪をうまく遂行するためには、「謝罪定型表現」を用いることは無論、「責任認め」、「事態あるいは理由言及」、「なだめ」等の他の意味公式も適切に用いることが重要であることが明らかになった。多く用いられている意味公式には、日韓母語話者で差はあるものの、より深刻な謝罪状況では、相手の怒りを推測し、フェイスを配慮して、更に、自分のフェイスも考慮し、謝罪を遂行することが日韓母語話者で根本的に見られる特徴ではないかと考えられる。謝罪という行動の中核となるのは、「謝罪定型表現」であるが、単に、「謝罪定型表現」を多く用いることで、あるいは、丁寧に用いることで、謝罪がうまく遂行される場合とそうでない場合があるだろう。しかし、「謝罪定型表現」のみならず、自分の責任を認めながら、相手をなだめる発話を共に用いることにより、「応答発話文」が肯定的になる可能性はあると考えられる。

次は、「応答発話文」であるが、以下の図 7-3 と 図 7-4 は、負担度が軽い場合と重い場合の「応答発話文」を構成する意味公式の総計に占める日韓母語話者の割合の比較である。図の「応答発話文」を見ると、「譲歩+明示的な受諾」、「非難+譲歩」、「非難+情報求め」、「非難+代償要求」という分析項目がある。本研究の会話データを分析する際、これらの分析項目を各々に分けて分析するより、見られた現象そのままを分析の方が日韓母語話者の特徴がより明確に見られると判断し、分析項目として立てて、分析を行う。また、「譲歩と共に明示的な受諾を用いる発話」、「明示的な受諾」、「非明示的な受諾」、「譲歩」は、「謝罪発話文」に対する「肯定的な応答」であり、「情報求め」、「話題転換を用いて回避する発話」、「感嘆詞を用いて回避する発話」は、「謝罪発話文」に対する「ニュートラルな応答」であり、「非難」が用いられている発話は、「謝罪発話文」に対する「否定的な応答」であると考えられる。上記の Schegloff and Sacks(1973 / 北澤・西阪訳 1989)の分類から考えると、「謝罪-軽減語」の「隣接ペア」が、優先応答(preferred response)であるため、本研究の分類からでは、「肯定的な応答」が「優先応答」であり、「ニュートラルな応答」と「否定的な応答」は「非優先応答」に当てはまると考えられる。

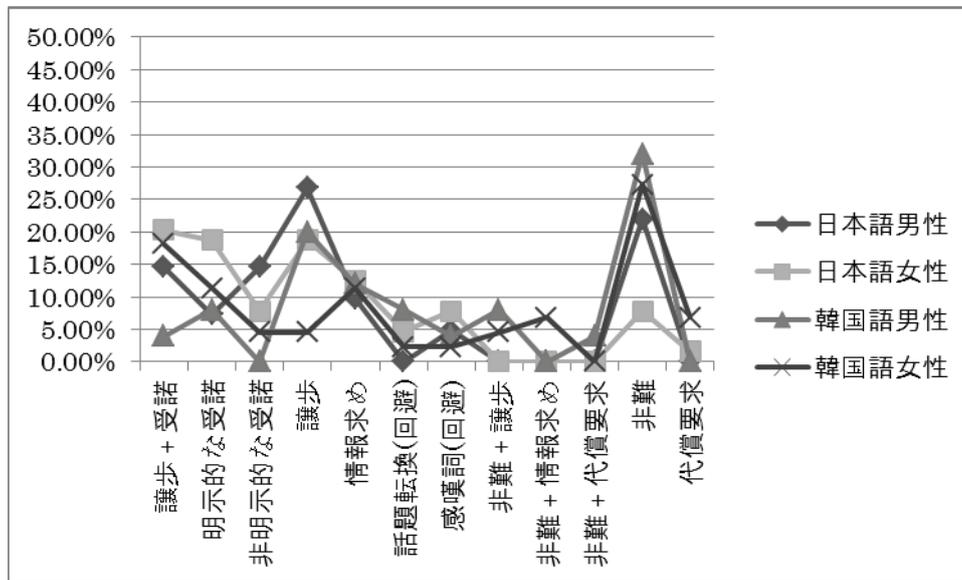


図 7-3 「応答発話文」を構成する意味公式の割合の比較(負担度が軽い場合)

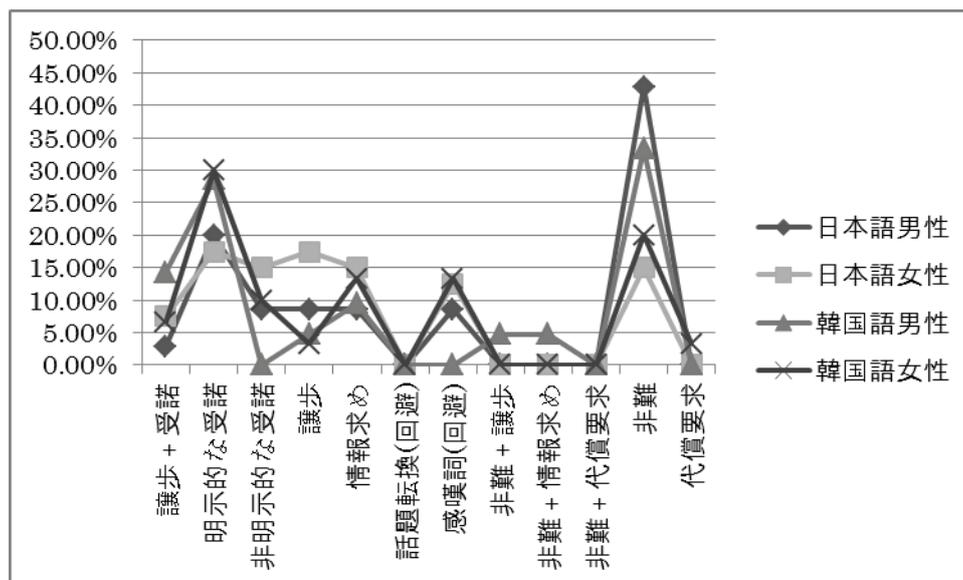


図 7-4 「応答発話文」を構成する意味公式の割合の比較(負担度が重い場合)

図 7-3 と図 7-4 を多く用いられている順で考えると、負担度が軽い場合は、日本語男性は、譲歩>非難>非明示的な受諾=譲歩+受諾>情報求め>明示的な受諾>感嘆詞(回避)であり、日本語女性は、譲歩+受諾>明示的な受諾=譲歩>情報求め>感嘆詞(回避)=非明示的な受諾=非難>話題転換(回避)>代償要求である。一方、韓国語男性は、非難>譲歩>情報求め>明示的な受諾=非難+譲歩=話題転換(回避)>譲歩+受諾=感嘆詞(回避)=非難+代償要求であり、韓国語女性は、非難>譲歩+受諾>明示的な受諾=情報求め>代償要求=非難+情報求め>非明示的な受諾=譲歩=非難+譲歩>話題転換(回避)である。

一方、負担度が重い場合は、日本語男性は、非難>明示的な受諾>非明示的な受諾=譲歩=情報求め=感嘆詞(回避)>譲歩+受諾であり、日本語女性は、明示的な受諾=譲歩>非明示的な受諾=情報求め=非難>感嘆詞(回避)>譲歩+受諾である。一方、韓国語男性は、非難>明示的な受諾>譲歩+受諾>情報求め>譲歩=非難+譲歩=非難+情報求めであり、韓国語女性は、明示的な受諾>非難>情報求め=感嘆詞(回避)>非明示的な受諾>譲歩+受諾>譲歩=代償要求である。負担度が軽い場合に用いられている「応答発話文」の意味公式が多様である。

「肯定的な応答」を考察すると、負担度が軽い場合の日本語男性は、「譲歩」、「非明示的な受諾」、「譲歩+受諾」の意味公式を多く用いており、日本語女性は、「譲歩+受諾」、「明示的な受諾」、「譲歩」の意味公式を多く用いている。一方、韓国語男性は、「譲歩」の意味公式を多く用いているが、韓国語女性は、「譲歩+受諾」、「明示的な受諾」の意味公式を多く用いている。また、負担度が重い場合には、日本語男性は「明示的な受諾」、「非明示的な受諾」の意味公式を多く用いているが、日本語女性は「明示的な受諾」、「譲歩」、「非明示的な受諾」の意味公式を多く用いている。一方、韓国語男女母語話者は、「明示的な受諾」を多く用いている。負担度が重い謝罪場面でも、日韓母語話者共に明示的な受諾を多く用いている傾向が見られるが、特に、韓国語母語話者の方で若干多く見られる。

「肯定的な応答」の中で、一番相手のフェイスを配慮し、受け入れる意を示している応答は「譲歩+受諾」であると考えられるが、韓国語男性以外は、負担度が重くなればなるほど、この応答を用いる傾向は低くなる。次の「明示的な受諾」は、日本語女性以外は、負担度が重い場合により多く現れ、「非明示的な受諾」は、日本語男性は負担度が軽い場合に、日韓女性母語話者は、負担度が重い場合に多く用いられているが、韓国語男性では現れていない特徴が見られる。最後に、「譲歩」は、日韓男性母語話者は負担度が軽い場合に圧倒的に多く現れているが、日韓女性母語話者では差があまり見られない。負担度が軽い場合には、謝罪内容が重くないため、日本語母語話者と韓国語女性で受け入れる意を積極的に表す「譲歩+受諾」が多く用いられていると考えられるが、負担度が重くなると、「明示的な受諾」で受け入れる意を示しており、特に、韓国語母語話者で、その傾向が多く見られている。一方、「譲歩+受諾」や「明示的な受諾」よりは、受け入れる意が消極的であると思われる「非明示的な受諾」は、韓国語男性では現れていなかったが、日韓女性母語話者では、負担度が重くなればなるほど、用いられている傾向が若干見られる。しかし、「譲歩」は、負担度が重くなればなるほど、日韓男性母語話者では用いられていない特徴が見られる。「肯定的な応答」の使用傾向は、日韓により、男女により、負担度の差により、共通的に見られている傾向が明確に現れていないと考えられるが、男性より女性の方が、謝罪内容の重さにより多くの影響を受けているのではないかと考えられる。

「ニュートラルな応答」を考察すると、「情報求め」は大きな差は見られないが、日韓男性母語話者は、負担度が軽い場合に若干多く現れており、日韓女性母語話者は、負担度が重い場合に若干多く現れている。「感嘆詞(回避)」は、韓国語男性以外は負担度が重い場合

に若干多く現れており、「話題転換(回避)」は、負担度が軽い場合のみ現れている。「ニュートラルな応答」の使用傾向も、男性よりは女性の方が謝罪内容の重さにより多くの影響を受けているのではないかと考えられるが、負担度が重くなればなるほど、謝罪内容を受け入れるか受け入れないかを示さず、情報を求めたり、遠回し的に回避する傾向が、女性の方でより明確に見られていると考えられる。

「否定的な応答」を考察すると、「非難」は、日本語母語話者で負担度が軽い場合より負担度が重い場合に多く用いられている特徴が見えるが、韓国語男性は負担度の差による変化はあまり見られず、韓国語女性は、負担度が重い場合に、「非難」が若干低く用いられている。しかし、韓国語母語話者は、「非難」と共に譲歩したり、情報求めをしたり、代償要求をしたりする意味公式を用いている特徴が見られる。「否定的な応答」は、韓国語母語話者の方で多く用いられている傾向は見られたが、韓国語母語話者より日本語母語話者の方が、謝罪内容の重さにより多くの影響を受けているのではないかと考えられる。

「代償要求」は、特に、韓国語男性で若干多く用いられている。

「応答発話文」の日韓母語話者の使用傾向は、共通性があまり見られず、相違している使用傾向を見せていると考えられる。本研究で設定した謝罪場面では、「謝罪一軽減語」である「肯定的な応答」が「優先応答」として用いられている傾向は多く見られているが、友人間という人間関係や場面設定により、「非優先応答」である「否定的な応答」も多く見られている。

以下では、負担度が軽い場合と重い場合の日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」を相違点を中心により詳細に分析し考察を行う。

7.2.1 負担度が軽い場合の日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の分析結果

表 7-5 と表 7-6 では、負担度が軽い場合の日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の頻度と割合を全体的に示し、どの発話文を多く用いているかを比較した。「謝罪発話文」の全体的な使用頻度は、日本語女性 100 例、日本語男性 80 例、韓国語女性 73 例、韓国語男性 47 例の順であり、特に、韓国語男性の「謝罪発話文」の頻度が一番少なかった。

表 7-5 負担度が軽い場合の日韓母語話者の「謝罪発話文」の頻度と割合

謝罪発話文		日本語男性	日本語女性	韓国語男性	韓国語女性
直接謝罪		*41 (51.25)	*64 (64.00)	*25 (53.19)	*44 (60.27)
責任	認め	*22 (27.50)	*22 (22.00)	*9 (19.15)	*13 (17.81)
	否認	3 (3.75)	0 (0.00)	1 (2.13)	0 (0.00)
	不満	3 (3.75)	0 (0.00)	4 (8.51)	1 (1.37)
状況	事態	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
	理由	6 (7.50)	5 (5.00)	1 (2.13)	4 (5.48)
	対処	4 (5.00)	6 (6.00)	2 (4.25)	3 (4.11)

なだめ	<u>*0 (0.00)</u>	<u>*0 (0.00)</u>	<u>*0 (0.00)</u>	<u>*7 (9.59)</u>
代償言及	1 (1.25)	3 (3.00)	4 (8.51)	1 (1.37)
自制の約束	0 (0.00)	0 (0.00)	1 (2.13)	0 (0.00)
合計	80 (100.00)	100 (100.00)	47 (100.00)	73 (100.00)

()は割合 *p<.05

表 7-5 をみると、日韓母語話者の「謝罪発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、「直接謝罪」($\chi^2(3)=15.237, p=0.002$)、「責任認め」($\chi^2(3)=10.319, p=0.016$)、「なだめ」($\chi^2(3)=12.585, p=0.006$)では、有意な差が認められたが、「責任の否認」($\chi^2(3)=6.300, p=0.098, n.s.$)、「不満表明」($\chi^2(3)=5.625, p=0.131, n.s.$)、「理由言及」($\chi^2(3)=4.594, p=0.204, n.s.$)、「対処行動」($\chi^2(3)=3.000, p=0.392, n.s.$)、「代償言及」($\chi^2(3)=3.271, p=0.352, n.s.$)、「自制の約束」($\chi^2(3)=3.000, p=0.392, n.s.$)では、有意な差が認められなかった⁸¹。

「直接謝罪」は、①日本語女性>②韓国語女性>③韓国語男性>④日本語男性の順であり、男性より女性の方で多く用いられ、日韓男性の間に割合の差があまり見られないが、頻度で考えると、韓国語男性が最も「直接謝罪」の使用頻度が少なかった。

「責任関連」の下位分類である「責任認め」、「責任否認」、「不満表明」について見てみると、まず、「責任認め」は、①日本語男性>②日本語女性>③韓国語男性>④韓国語女性の順であり、韓国語母語話者より日本語母語話者の方で多く用いられていたことがわかる。

「責任否認」は、日本語男性と韓国語男性しか現れず、女性では現れなかった。「不満表明」は、①韓国語男性>②日本語男性>③韓国語女性の順であり、日本語女性では現れず、女性より男性の方で多く用いられていた。「責任関連」は、日本語男性で 35.00%、日本語女性で 22.00%、韓国語男性で 29.79%、韓国語女性で 19.18%の割合を占めており、特に、「責任の否認」や「不満の表明」のような否定的な「責任関連」は、日本語男性 7.50%、韓国語男性 10.64%、韓国語女性 1.37%であった。「謝罪定型表現」が用いられた「謝罪発話文」の場合、負担度が軽い謝罪場面としても不可避な状況による遅刻や謝罪される側にも過失がある場合には、相手のフェイス侵害度が高い発話を男性は用いる傾向が見られた。

「状況説明」の下位分類である「事態言及」、「理由言及」、「対処行動言及」は、負担度が軽い場合には、謝罪内容が遅刻であるため、「事態言及」する発話は現れず、「理由言及」は、①日本語男性>②韓国語女性>③日本語女性>④韓国語男性と、特に、韓国語男性はあまり用いていなかった。「対処行動言及」は、①日本語女性>②日本語男性>③韓国語男性>④韓国語女性と、日韓母語話者ではあまり差が現れなかった。「状況説明」は、日本語男性で 12.50%、日本語女性で 11%、韓国語男性で 6.38%、韓国語女性で 9.59%の割合を占めており、日韓母語話者共に、負担度が軽い謝罪場面であるため、「謝罪定型表現」が用いられた「謝罪発話文」で理由に言及したり、その状況で自分が行なった行動を述べたりする「状況説明」をあまり用いないといった類似点が見られたが、韓国語男性で若干そのよ

⁸¹ 統計処理方法として用いられた Kruskal Wallis 検定の結果確認表は、参考資料を参照

うな傾向が強いと考えられる。

「なだめ」は、韓国語女性のみ現れており、その内容は、「どうしよう」、「機嫌直して」、「お腹空いたよね」などで、親しい友人の不愉快な気持ちを納めるための働きかけを行っていた。ここから、韓国語女性は、謝罪場面だとしても、人に認められたい、好かれたいというポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いて働きかける傾向があると言えよう。

「代償言及」は、①韓国語男性>②日本語女性>③韓国語女性＝日本語男性の順であり、「自製の約束」は、韓国語男性のみ現れていた。「代償言及」と「自製の約束」も人に認められたい、好かれたいというポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであるが、韓国語男性で若干多く現れていた。韓国語母語話者がポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを謝罪場面だとしても、友人間の会話では、日本語母語話者より用いる傾向があるのではないかと考えられる。

以下の表 7-6 の「応答発話文」の全体的な使用頻度は、日本語女性で 64 例、韓国語女性で 44 例、日本語男性で 41 例、韓国語男性で 25 例と、韓国語男性の「応答発話文」の頻度が最も少なかった。

表 7-6 負担度が軽い場合の日韓母語話者の「応答発話文」の頻度と割合

応答発話文		日本語男性	日本語女性	韓国語男性	韓国語女性
譲歩+明示的な受諾		*6 (14.63)	*13 (20.31)	*1 (4.00)	*8 (18.18)
受諾	明示的	*3 (7.32)	*12 (18.75)	*2 (8.00)	*5 (11.36)
	非明示的	*6 (14.63)	*5 (7.81)	*0 (0.00)	*2 (4.55)
譲歩		*11 (26.83)	*12 (18.75)	*5 (20.00)	*2 (4.55)
情報求め		4 (9.76)	8 (12.50)	3 (12.00)	5 (11.36)
回避	話題転換	0 (0.00)	3 (4.69)	2 (8.00)	1 (2.27)
	感嘆詞	2 (4.88)	5 (7.81)	1 (4.00)	1 (2.27)
非難+譲歩		0 (0.00)	0 (0.00)	2 (8.00)	2 (4.55)
非難+情報求め		*0 (0.00)	*0 (0.00)	*0 (0.00)	*3 (6.82)
非難+代償要求		0 (0.00)	0 (0.00)	1 (4.00)	0 (0.00)
非難		9 (21.95)	5 (7.81)	8 (32.00)	12 (27.27)
代償要求		0 (0.00)	1 (1.57)	0 (0.00)	3 (6.82)
合計		41 (100.00)	64 (100.00)	25 (100.00)	44 (100.00)

*()は割合 *p<.05

表 7-6 をみると、日韓母語話者の「応答発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、「譲歩+明示的な受諾」($\chi^2(3)=9.940, p=0.019$)、「明示的な受諾」($\chi^2(3)=9.836, p=0.020$)、「非明示的な受諾」($\chi^2(3)=9.053, p=0.029$)、「譲歩」($\chi^2(3)=10.299, p=0.016$)、「非難+情報求め」

($\chi^2(3)=9.295, p=0.026$)では、有意な差が認められたが、「情報求め($\chi^2(3)=2.888, p=0.409, n.s.$)」、「回避の話題転換($\chi^2(3)=3.899, p=0.273, n.s.$)」、「回避の感嘆詞($\chi^2(3)=5.473, p=0.140, n.s.$)」、「非難＋譲歩($\chi^2(3)=4.200, p=0.241, n.s.$)」、「非難＋代償要求($\chi^2(3)=3.000, p=0.392, n.s.$)」、「非難($\chi^2(3)=2.191, p=0.534, n.s.$)」、「代償要求($\chi^2(3)=3.829, p=0.281, n.s.$)」では、有意な差が認められなかった。

まず、「譲歩＋明示的な受諾」は、①日本語女性>②韓国語女性>③日本語男性>④韓国語男性の順で、男性よりは女性の方で多く用いられており、特に、韓国語男性では1例しか現れなかった。「明示的な受諾」は、①日本語女性>②韓国語女性>③韓国語男性>④日本語男性の順で、男性より女性の方で多く用いられており、特に、日本語女性で多く現れ、日韓男性母語話者ではあまり差が見られなかった。「非明示的な受諾」は、①日本語男性>②日本語女性>③韓国語女性の順で、韓国語男性では現れず、韓国語母語話者より日本語母語話者の方で多く用いられていた。「譲歩」は、①日本語男性>②韓国語男性>③日本語女性>④韓国語女性の順で、韓国語母語話者より日本語母語話者の方で多く用いられていた。「謝罪発話文」に対する「肯定的な応答」は、日本語男性で63.41%、日本語女性で65.62%、韓国語男性で32.00%、韓国語女性で38.64%と、韓国語母語話者が3割程度であるのに対し、日本語母語話者は6割程度と、2倍程度多く用いているのがわかる。特に、男性は、明示的に受け入れる言葉を用いる受諾よりは、受諾する言葉は用いていないが、相手のフェイスを配慮し一歩譲る意を示す「譲歩」を多用する傾向が見られた。また、韓国語母語話者は、「非明示的な受諾」をあまり用いていなかった。その反面、日本語母語話者は、多様な言葉を用いて受け入れる意を示している。

次に、「情報求め」は、①日本語女性>②韓国語男性>③韓国語女性>④日本語男性の順で、日韓母語話者で差があまり見られなかった。「話題転換をして回避する発話」は、①韓国語男性>②日本語女性>③韓国語女性の順であり、日本語男性では現れなかった。「感嘆詞を漏らして回避する発話」は、①日本語女性>②日本語男性>③韓国語男性>④韓国語女性の順であり、韓国語母語話者より日本語母語話者の方で若干多く用いられていた。「謝罪発話文」に対する「ニュートラルな応答」は、日本語男性で14.64%、日本語女性で25.00%、韓国語男性で24.00%、韓国語女性で15.90%と、日本語母語話者では女性の方で、韓国語母語話者は男性の方で多く用いられていた。

続いて、「非難＋譲歩」は、韓国語男性と韓国語女性、「非難＋情報求め」は、韓国語女性のみ、「非難＋代償要求」は、韓国語男性のみであり、非難と共に譲歩の発話を用いたり、情報を求めたり、代償を要求したりする発話は、韓国語母語話者にのみ現れていた。「非難」は、①韓国語男性>②韓国語女性>③日本語男性>④日本語女性の順で、日本語母語話者より韓国語母語話者で多く用いられていた。「謝罪発話文」に対する「否定的な応答」は、日本語男性21.95%、日本語女性7.81%、韓国語男性44.00%、韓国語女性38.64%である。「否定的な応答」の使用割合が最も少ない日本語女性に比べ、韓国語男性は5倍以上多く用いているのがわかる。また、7.4.2.2の会話例を通して説明したように、韓国語母語話者は多

様な非難発話を用いて相手を責める傾向があるが、親しい友人間の会話なので、このような傾向が強く現れていると考えられる。

最後に、「代償要求」であるが、日韓女性母語話者にのみ現れており、日本語女性 1 例 (1.57%)、韓国語女性 3 例(6.82%)である。

7.2.2 負担度が重い場合の日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の分析結果

表 7-7 と表 7-8 では、負担度が重い場合の日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の頻度と割合を全体的に示し、どの発話文を多く用いているかを比較した。「謝罪発話文」の全体的な使用頻度は、日本語女性 79 例、日本語男性 61 例、韓国語女性 56 例、韓国語男性 32 例と、特に、韓国語男性の「謝罪発話文」の頻度が一番少なかった。

表 7-7 負担度が重い場合の日韓母語話者の「謝罪発話文」の頻度と割合

謝罪発話文		日本語男性	日本語女性	韓国語男性	韓国語女性
直接謝罪		35 (57.38)	40 (50.63)	21 (65.63)	30 (53.57)
責任	認め	7 (11.48)	9 (11.39)	4 (12.50)	9 (16.07)
	否認	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
	不満	0 (0.00)	1 (1.27)	0 (0.00)	0 (0.00)
状況	事態	7 (11.48)	13 (16.46)	3 (9.37)	7 (12.50)
	理由	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
	対処	2 (3.27)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
なだめ		10 (16.39)	16 (20.25)	4 (12.50)	10 (17.86)
代償言及		0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
自制の約束		0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
合計		61 (100.00)	79 (100.00)	32 (100.00)	56 (100.00)

()は割合

表 7-7 をみると、日韓母語話者の「謝罪発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、有意な差が認められなかった(「直接謝罪($\chi^2(3)=2.483, p=0.478, n.s$)」、「責任認め($\chi^2(3)=2.451, p=0.484, n.s$)」、「不満表明($\chi^2(3)=3.000, p=0.392, n.s$)」、「事態言及($\chi^2(3)=4.056, p=0.256, n.s$)」、「対処行動言及($\chi^2(3)=3.000, p=0.392, n.s$)」、「なだめ($\chi^2(3)=4.129, p=0.248, n.s$)」)。

「直接謝罪」は、①韓国語男性>②日本語男性>③韓国語女性>④日本語女性の順であり、女性より男性の方で多く用いられていた。次に、「責任否認」は 1 例も現れず、「不満表明」は、日本語女性で 1 例しか現れなかった。主に、「責任認め」が現れていたが、①韓国語女性>②韓国語男性>③日本語男性=日本語女性と、韓国語母語話者で若干多く現れ、日本語男女母語話者では差があまり見られなかった。続いて、負担度が重い場合には、謝

罪内容が複雑であるため、「事態言及」する発話が現れており、①日本語女性>②韓国語女性>③日本語男性>④韓国語男性と、男性より女性の方で若干多く現れていた。「対処行動言及」は、日本語男性で2例現れていた。最後に、「なだめ」は、①日本語女性>②韓国語女性>③日本語男性>④韓国語男性の順であり、男性より女性の方で多く用いられていた。負担度が重い場合には、不愉快な状況がより深刻であるため、謝罪する側が相手の怒りを納めるため「なだめ」を多く用いる傾向が日韓母語話者で共通的に見られた。

負担度が重い謝罪場面では、日韓母語話者共に、「直接謝罪」、「責任認め」、「事態言及」、「なだめ」の4つを主に用いるという共通性が見られた。

以下の表 7-8 に示されているように、「応答発話文」の全体的な使用頻度は、日本語女性 40 例、日本語男性 35 例、韓国語女性 30 例、韓国語男性 21 例と、特に、韓国語男性の「応答発話文」の頻度が最も少なかった。

表 7-8 負担度が重い場合の日韓母語話者の「応答発話文」の頻度と割合

応答発話文		日本語男性	日本語女性	韓国語男性	韓国語女性
譲歩+明示的な受諾		1 (2.86)	3 (7.50)	3 (14.29)	2 (6.66)
受諾	明示的	7 (20.00)	7 (17.50)	6 (28.57)	9 (30.00)
	非明示的	3 (8.57)	6 (15.00)	0 (0.00)	3 (10.00)
譲歩		3 (8.57)	7 (17.50)	1 (4.76)	1 (3.33)
情報求め		3 (8.57)	6 (15.00)	2 (9.52)	4 (13.34)
回避	話題転換	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
	感嘆詞	3 (8.57)	5 (12.50)	0 (0.00)	4 (13.34)
非難+譲歩		0 (0.00)	0 (0.00)	1 (4.76)	0 (0.00)
非難+情報求め		0 (0.00)	0 (0.00)	1 (4.76)	0 (0.00)
非難+代償要求		0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
非難		15 (42.86)	6 (15.00)	7 (33.34)	6 (20.00)
代償要求		0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)	1 (3.33)
合計		35 (100.00)	40 (100.00)	21 (100.00)	30 (100.00)

()は割合

表 7-8 をみると、日韓母語話者の「応答発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、有意な差が認められなかった(「譲歩+明示的な受諾($\chi^2(3)=1.095, p=0.778, n.s$)」、「明示的な受諾($\chi^2(3)=0.579, p=0.901, n.s$)」、「非明示的な受諾($\chi^2(3)=5.960, p=0.114, n.s$)」、「譲歩($\chi^2(3)=3.793, p=0.285, n.s$)」、「情報求め($\chi^2(3)=1.921, p=0.589, n.s$)」、「回避の感嘆詞($\chi^2(3)=3.307, p=0.347, n.s$)」、「非難+譲歩($\chi^2(3)=3.000, p=0.392, n.s$)」、「非難+情報求め($\chi^2(3)=3.000, p=0.392, n.s$)」、「非難($\chi^2(3)=2.544, p=0.467, n.s$)」、「代償要求($\chi^2(3)=3.000, p=0.392, n.s$)」)。

まず、「譲歩+明示的な受諾」は、①韓国語男性>②日本語女性>③韓国語女性>④日本語男性と、韓国語男性で若干多く現れていた。「明示的な受諾」は、①韓国語女性>②韓国語男性>③日本語男性>④日本語女性と、日本語母語話者より韓国語母語話者で多く現れていた。「非明示的な受諾」は、①日本語女性>②韓国語女性>③日本語男性と、韓国語男性では現れず、男性より女性の方で多く用いられていた。「譲歩」は、①日本語女性>②日本語男性>③韓国語男性>④韓国語女性と、韓国語母語話者より日本語母語話者の方で多く用いられていた。「謝罪発話文」に対する「肯定的な応答」は、日本語男性は 40.00%、日本語女性は 57.50%、韓国語男性は 47.62%、韓国語女性は 49.99%と、日本語女性が一番多く現れていた。特に、「譲歩+明示的な受諾」、「明示的な受諾」は、韓国語母語話者で多く用いられており、「非明示的な受諾」、「譲歩」は、日本語母語話者の方で多く用いられているという特徴が見られた。

次に、「情報求め」は、①日本語女性>②韓国語女性>③韓国語男性>④日本語男性と、男性より女性の方で多く用いられていた。「感嘆詞を漏らして回避する発話」は、①韓国語女性>②日本語女性>③日本語男性と、韓国語男性では現れず、男性より女性の方で若干多く用いられていた。「謝罪発話文」に対する「ニュートラルな応答」は、日本語男性で 17.14%、日本語女性で 27.5%、韓国語男性で 9.52%、韓国語女性で 26.68%と、女性の方で多く見られていた。

続いて、「非難+譲歩」と「非難+代償要求」は、韓国語男性で 1 例ずつ現れており、「非難」は、①日本語男性 15 例>②韓国語男性>③韓国語女性>④日本語女性と、女性より男性の方で若干多く用いられていた。「謝罪発話文」に対する「否定的な応答」は、日本語男性で 42.86%、日本語女性で 15.00%、韓国語男性で 42.86%、韓国語女性で 20.00%である。

最後に、「代償要求」であるが、韓国語女性で 1 例(3.33%)のみ現れていた。

7.2.3 負担度が軽い場合と重い場合の日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」のまとめ

本節では、負担度が軽い場合と負担度が重い場合に現れる日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」を全体的に分析し考察した後、相違点を中心により詳細に分析し考察を行った。

負担度が軽い謝罪場面では、日韓母語話者共に、「直接謝罪」と「責任認め」を多用し謝罪しているが、負担度が重い謝罪場面では、日韓母語話者共に、「直接謝罪」と共に「責任認め」、「事態言及」、「なだめ」もかなり用いており、負担度が重くなると、より多様な発話と共に「謝罪定型表現」を用いている共通点が見られた。つまり、負担度が重くなればなるほど、自分のフェイスを守りたいという欲求と相手のフェイスを侵害したくない欲求が複雑に絡み合っ、簡単に責任を認めながら謝罪することより、事態を言及したり、相手をなだめたりしながら、謝罪する発話が多く用いられていると考えられた。一方、「応答発話文」の日韓母語話者の使用傾向は、共通性があまり見られず、相違している使用傾向

を見せていると考えられた。本研究で設定した謝罪場面では、「謝罪一軽減語」である「肯定的な応答」が「優先応答」として用いられている傾向は多く見られているが、友人間という人間関係や場面設定により、「非優先応答」である「否定的な応答」も多く用いられていた。

しかし、負担度が軽い謝罪場面では、「直接謝罪」は、日韓男性より日韓女性の方で多く用いられているが、「責任関連」は、日韓女性より日韓男性の方で多く用いられており、特に、「責任の否認」や「不満の表明」のような否定的な「責任関連」は、男性の方で多く用いられている相違点が見られた。「状況説明」は、男女による差はあまり見られず、韓国語母語話者より日本語母語話者が若干多く用いていたが、日韓母語話者共に、負担度が軽い謝罪場面であるため、理由に言及したり、その状況で自分が行なった行動を述べたりする「状況説明」をあまり用いないといった類似点が見られたが、韓国語男性で若干そのような傾向が強いと考えられた。「なだめ」は、韓国語女性のみ現れており、韓国語女性は、謝罪場面だとしても、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いて働きかける傾向があると考えられた。「代償言及」と「自製の約束」も人に認められたい、好かれたいというポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであるが、韓国語男性で若干多く現れていた。一方、「謝罪発話文」に対する「肯定的な応答」は、日本語男性で 63.41%、日本語女性で 65.62%、韓国語男性で 32.00%、韓国語女性で 38.64%と、韓国語母語話者が 3 割程度であるのに対し、日本語母語話者は 6 割程度と、2 倍程度多く用いているのがわかった。「謝罪発話文」に対する「ニュートラルな応答」は、日本語男性で 14.64%、日本語女性で 25.00%、韓国語男性で 24.00%、韓国語女性で 15.90%と、日本語母語話者では女性の方で、韓国語母語話者は男性の方で多く用いられていた。「謝罪発話文」に対する「否定的な応答」は、日本語男性 21.95%、日本語女性 7.81%、韓国語男性 44.00%、韓国語女性 38.64%であり、「否定的な応答」の使用割合が最も少ない日本語女性に比べ、韓国語男性は 5 倍以上多く用いているのがわかった。

また、負担度が重い謝罪場面では、日韓母語話者共に、「直接謝罪」、「責任認め」、「事態言及」、「なだめ」の 4 つを主に用いるという共通性が見られた。一方、「謝罪発話文」に対する「肯定的な応答」は、日本語男性は 40.00%、日本語女性は 57.50%、韓国語男性は 47.62%、韓国語女性は 49.99%と、日本語女性で一番多く現れていた。「謝罪発話文」に対する「ニュートラルな応答」は、日本語男性で 17.14%、日本語女性で 27.5%、韓国語男性で 9.52%、韓国語女性で 26.68%と、女性の方で多く見られていた。「謝罪発話文」に対する「否定的な応答」は、日本語男性で 42.86%、日本語女性で 15.00%、韓国語男性で 42.86%、韓国語女性で 20.00%であり、男性の方で多く用いられていた。負担度が重い場合には、相違点はあまり見られず、日韓母語話者で類似している点が多く現れていた。

以下では、負担度が軽い場合と負担度が重い場合の日本語母語話者と韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」をより詳細に分析し、会話例を見ながらその特徴を考察する。

7.3 日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の分析結果及び考察(負担度が軽い場合)

本節では負担度が軽い場合の日本語母語話者と韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」を分析し考察を行うが、相互作用の観点から見られる「謝罪発話文と応答発話文」の類似点と相違点を明らかにし、その特徴について述べる。

7.3.1 負担度が軽い場合の日本語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の分析結果及び考察

本節では、負担度が軽い場合の日本語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」を相互作用の観点から、類似点と相違点を明らかにし、その特徴を考察する。分析する際には、まず、得られたデータを数値化し、そこから見られる現象を明らかにした後、会話例を通してより詳細に記述する。

7.3.1.1 負担度が軽い場合の日本語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の抽出結果及び考察

表 7-9 では、負担度が軽い場合の日本語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の頻度と割合を全体的に示し、どの発話文を多く用いているかを比較した。

表 7-9 負担度が軽い場合の日本語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の頻度と割合

謝罪発話文		日本語男性	日本語女性	応答発話文		日本語男性	日本語女性
直接謝罪		41 (51.25)	64 (64.00)	譲歩+明示的な受諾		6 (14.63)	13 (20.31)
責任	認め	22 (27.50)	22 (22.00)	受諾	明示的	3 (7.32)	12 (18.75)
	否認	3 (3.75)	0 (0.00)		非明示的	6 (14.63)	5 (7.81)
	不満	3 (3.75)	0 (0.00)	譲歩		11 (26.83)	12 (18.75)
状況	事態	0 (0.00)	0 (0.00)	情報求め		4 (9.76)	8 (12.50)
	理由	6 (7.50)	5 (5.00)	回避	話題転換	0 (0.00)	3 (4.69)
	対処	4 (5.00)	6 (6.00)		感嘆詞	2 (4.88)	5 (7.81)
なだめ		0 (0.00)	0 (0.00)	非難+譲歩		0 (0.00)	0 (0.00)
代償言及		1 (1.25)	3 (3.00)	非難+情報求め		0 (0.00)	0 (0.00)
自製の約束		0 (0.00)	0 (0.00)	非難+代償要求		0 (0.00)	0 (0.00)
合計		80 (100.00)	100(100.00)	非難		<u>*9 (21.95)</u>	<u>*5 (7.81)</u>
				代償要求		0 (0.00)	1 (1.57)
				合計		41(100.00)	64(100.00)

()は割合 *p<. 05

表 7-9 を見ると「直接謝罪」は、女性の方で多く用いられ、「責任認め」は、男性の方で

若干多く用いられていたが、「責任否認」や「不満表明」は、女性の方では現れなかった。「理由言及」や「対処行動言及」、「代償言及」は男女による差があまり現れなかったが、全体的な「謝罪発話文」は、男性より女性の方で多く現れた。特に、負担度が軽い謝罪場面として設定された「遅刻場面」においては、「直接謝罪」や「責任認め」の「謝罪発話文」を用いる割合が、男性で 78.75%、女性で 86.00%を占めており、遅れた理由を述べたり、自分の対処行動を述べる等の状況説明はあまり用いず、責任を認めながら謝罪するという簡単な働きかけを行っているという点で類似していると言える。一方、男性は、「直接謝罪」と共に、不可避な状況による遅刻であったことを述べたり、謝罪される側の過失に関する不満を表明したりする発話を用いており、女性は、何かを奢ることに言及する発話を男性よりは若干多く用いたりする等、使用頻度は多くはないが、男女間で相違点が見られた。つまり、負担度が軽い謝罪場面での「謝罪発話文」は、責任を認めながら謝罪する簡単な発話のみを行う傾向が日本語母語話者で見られたと言える。

日本語男性と日本語女性の「謝罪発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、有意な差が認められなかった。(「直接謝罪($\chi^2(1)=2.9726$, $p=0.0847$, *n.s.*)」、「責任認め($\chi^2(1)=0.7279$, $p=0.3935$, *n.s.*)」、「責任否認($\chi^2(1)=3.8135$, $p=0.0859$, *n.s.*)」、「不満表明($\chi^2(1)=3.8135$, $p=0.0859$, *n.s.*)」、「状況説明の理由言及($\chi^2(1)=0.4841$, $p=0.4866$, *n.s.*)」、「状況説明の対処行動言及($\chi^2(1)=0.0847$, $p=0.7710$, *n.s.*)」、「代償言及($\chi^2(1)=0.6264$, $p=0.6302$, *n.s.*)」)。

次に、「応答発話文」を「肯定的な応答」、「ニュートラルな応答」、「否定的な応答」の観点から考えると、「肯定的な応答」を用いる割合は、男性で 63.41%、女性で 65.62%と、男女共に約 6 割程度が用いられており、受け入れる意を多く示しているという類似点が見られた。しかし、「肯定的な応答」の中でも、「譲歩と共に明示的な受諾を用いる発話」や「明示的な受諾」は、受け入れる意をより積極的に表す応答であると考えられるが、これらは男性より女性の方で多く用いられていた。一方、「非明示的な受諾」や「譲歩」は、受け入れる意を若干消極的に表す応答であると考えられるが、これらは女性より男性の方で多く用いられるという相違点が見れていた。「ニュートラルな応答」を用いる割合は、男性で 14.64%、女性で 25.00%と、女性の方で多く用いられていたが、特に、「話題転換を用いて回避する発話」は女性にのみ使用されていた。「否定的な応答」を用いる割合は、男性で 21.95%、女性で 7.81%と、男性の方がほぼ 3 倍程度多く用いていた。負担度が軽い謝罪場面では、「謝罪一軽減語」である「肯定的な応答」が 6 割程度多く用いられているという傾向が男女共に共通して現れていたが、男性は女性より「否定的な応答」と「消極的に受け入れる意を示す応答」を、女性は男性より「ニュートラルな応答」と「積極的に受け入れる意を示す応答」を多く用いる傾向が見られた。つまり、男性は、「謝罪発話文」に対して、主に、「肯定的な応答」であるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いて相手の崩されたフェイスを立てるため働きかけているが、自分の不愉快な気持ちも直接に表し、フェイス侵害度が高い「非難」も多く用いていると考えられる。しかし、女性は「謝罪発話文」に対して、主に、「肯定的な応答」であるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いて相

手の崩されたフェイスを立てるため働きかけており、フェイス侵害度が高い発話は避けようとする傾向が見られた。

日本語男性と日本語女性の「応答発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、「非難($\chi^2(1)=4.3231, p=0.0375$)」では、有意な差が認められたが、「譲歩+明示的な受諾($\chi^2(1)=0.5437, p=0.4609, n.s.$)」、「明示的な受諾($\chi^2(1)=2.6677, p=0.1024, n.s.$)」、「非明示的な受諾($\chi^2(1)=1.2399, p=0.2655, n.s.$)」、「譲歩($\chi^2(1)=0.9536, p=0.3288, n.s.$)」、「情報求め($\chi^2(1)=0.1859, p=0.6664, n.s.$)」、「回避の話題転換($\chi^2(1)=1.9784, p=0.2791, n.s.$)」、「回避の感嘆詞を漏らす($\chi^2(1)=0.3458, p=0.5565, n.s.$)」では、有意な差が認められなかった。

以上の結果から、負担度が軽い謝罪場面における「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用の特徴として、日本語男性は、謝罪する側が責任を認めながら謝罪する「謝罪発話文」を主に用いながら「責任否認」や「不満表明」の発話も若干用いているのに対し、謝罪される側は主に「肯定的な応答」を用いながら、「否定的な応答」も約2割程度用いて反応していることがわかった。一方、日本語女性は、謝罪する側が責任を認めながら謝罪する「謝罪発話文」を用いており、謝罪される側は「肯定的な応答」や「ニュートラルな応答」を多く用いながら反応していることが明らかとなった。

以下では、日本語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用の特徴を実際の会話例を見ながら考察していく。

7.3.1.2 負担度が軽い場合の日本語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用の特徴

本節では、「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用をより詳細に分析するため、「謝罪発話文と肯定的な応答」、「謝罪発話文とニュートラルな応答」、「謝罪発話文と否定的な応答」に分けて、日本語母語話者の相互作用の特徴を比較しながら記述していく。

1) 「謝罪発話文と肯定的な応答」の日本語母語話者の特徴

「明示的な受諾」として多く用いられた言葉は、日本語男性において、「いい(3例)」、「いや(2例)」、「仕方ない(1例)」、「わかった(1例)」、「全然、気にしない(1例)」、「怒ってない(1例)」等、日本語女性において「明示的な受諾」として多く用いられた言葉は、「いや(11例)」、「大丈夫(7例)」、「全然(4例)」、「しょうがない(3例)」、「いける(1例)」、「いえいえ(1例)」、「いい(1例)」、「わかった(1例)」、「許す(1例)」等が見られた。男性より女性が「大丈夫」等、より明確に受け入れる意を示す言葉を多く使用する傾向があると考えられる。負担度が軽い謝罪場面では、受け入れる意を示す明示的な受諾の言葉が多く現れていたが、男性より女性の方がより多様である。

<会話例 7-1> 負担度が軽い場合の日本語女性の肯定的な応答①

ライン	話者	発話内容	謝罪応答発話文
-----	----	------	---------

番号			
12	JF05	ごめんくね>{<}。	謝罪
13	JF06	<何>{<}、いや全然、何かあったのかと思ったし=。	受諾+譲歩
16	JF05	あー、そうか、ごめんね=。	謝罪
17	JF06	=いやいやいや、ごめん、ごめん>{<}。	受諾+譲歩

<会話例 7-1>は、JF05 は、ライン番号 12 と 16 で「ごめん」と謝罪し、JF06 は「いや」という明示的な受諾の意を示す言葉を用いて受け入れているが、「いや」を連続して発する傾向があり、更に、謝罪する側に対する心配の気持ちを表したり、自分の過ちを「ごめん」という「謝罪定型表現」を用いて謝罪する等の譲歩の発話を用いて、相手の謝罪を積極的受け入れているのがわかる。この会話例のように、謝罪する側の謝罪に対し、譲歩してから受諾したり、あるいは、受諾してから譲歩したりする発話を多く用いていたが、特に、女性の方で多く現れていた。「謝罪発話文と応答発話文」のやりとりで、最も互いのフェイスを配慮している「謝罪-軽減語」であると言える。

<会話例 7-2> 負担度が軽い場合の日本語男性の肯定的な応答①

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
19	JM01	ごめん、ごめん、本当に。	謝罪
20	JM02	やー、うん。	非明示的な受諾

「非明示的な受諾」として多く用いられた言葉は、男女母語話者共に、「うん」と謝罪する側の謝罪を一言で済ませる言葉である。<会話例 7-2>を見ると、JM01 は「ごめん」と 2 回連続し謝罪しているが、JM02 は、明示的な受諾の言葉は用いず、「やー、うん」のみの反応をしている。「非明示的な受諾」は、「明示的な受諾」より受け入れる意を示すことが消極的であるが、「謝罪」により崩された相手のネガティブ・フェイスを配慮する応答であるため、「謝罪-軽減語」として機能していると考えられる。

<会話例 7-3> 負担度が軽い場合の日本語男性の肯定的な応答②

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
9	JM03	そう、ごめん、&,,	謝罪
10	JM03	電車が止、く止まっちゃったので>{<}。	理由
11	JM04	<あー電車だった>{<}、あー、そうだったんだ、ごめん、そういうもん、携帯なかったから確認(おお)できん、そっか。	譲歩

<会話例 7-3>は、JF19 は「ごめん」と謝罪した後、責任を認める発話をし、JF20 は携帯を持って来なかった自分の過失により連絡がつかなかったことを確認しながら相手の謝罪に対して譲歩する発話をしている。<会話例 7-2>、<会話例 7-3>は、謝罪する側の

謝罪に対し明確な受け入れる意を示す言葉は用いていないが、不可避な状況により遅れたことを理解し、自分にも過失があることを謝罪しながら言及しており、間接的に受け入れる意を示している。これらの会話例のように、謝罪する側の謝罪に対し、「非明示的な受諾」や「譲歩」のみの発話は男性の方で若干多く現れていた。

「謝罪発話文」に対する「肯定的な応答」は、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーである「謝罪」を用いて関係回復をしようとする謝罪する側に対する配慮であるため、「謝罪一軽減語」として働いており、謝罪内容が軽い場合には、簡単に受け入れられる傾向が見られた。

2) 「謝罪発話文とニュートラルな応答」の日本語母語話者の特徴

「ニュートラルな応答」は、謝罪内容を受け入れるか否かを示さず、客観的に情報を求めたり、話題転換あるいは感嘆詞を用いて謝罪内容を回避する応答であるが、男性より女性の方で多く現れていた。

<会話例 7-4> 負担度が軽い場合の日本語女性のニュートラルな応答①

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
1	JF03	ごめんね、&,、	謝罪
2	JF03	かなり遅くなっちゃった、着くの。	責任認め
3	JF04	え、ど、どうしたん？。	情報求め

<会話例 7-4>は、JF03 が、「ごめん」と謝罪し、「かなり」という強調の副詞も用いながら自分の責任を認める発話をし、JF04 は、「どうして」という疑問詞を用いて遅れた理由について更なる情報を求める発話をしている。これらの会話例は、謝罪する側が誠実に謝罪しているが、直ちに、受け入れる意は示さず、遅れたことに対する情報を求めているため、受諾よりは相手のフェイスをあまり配慮していない応答であろう。

<会話例 7-5> 負担度が軽い場合の日本語男性のニュートラルな応答①

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
14	JM25	うーん、携帯持ってないから分かんないよね、&,、	不満表明
15	JM25	ごめんね、&,、	謝罪
16	JM25	とりあえず遅れちゃって。	責任認め
17	JM26	そうか。	回避(感嘆詞)

<会話例 7-6> 負担度が軽い場合の日本語女性のニュートラルな応答②

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
-------	----	------	---------

29	JF01	ごめんね。	謝罪
30	JF02	じゃーどうする?何食べる?。	回避(話題転換)

<会話例 7-5>と<会話例 7-6>は、謝罪に対する回避の会話例であるが、<会話例 7-5>は、JM25 は、JM26 が携帯を持って来なかったことに対して若干遠まわしに不満な感情を表した後、「ごめん」と謝罪し一応責任を認める発話をしているが、JM26 は「そうか」のみ用いて明確な応答ではなく回避するような反応をしている。この会話例は、JM25 が、JM26 の過失を若干不満そうに述べており、更に、責任を認める発話はあるが、「とりあえず」という副詞を入れている。これを受け、JM26 は、相手の状況説明は理解した程度の反応をし、受け入れる意は回避している。<会話例 7-6>を見ると、JF01 は「ごめん」と謝罪し、JF02 は、明示的な受諾は用いていないが、食事のことで話題を変えて謝罪する側の不愉快な行動に対して気にしないことを間接的に伝えている。このように相手の謝罪に対して「話題転換」を行っている発話は、女性にしか現れなかったが、繰り返される謝罪と受諾のやりとりの後、最後に現れる謝罪に対して、共通的に「話題転換」を行っている。

「謝罪発話文」に対する「ニュートラルな応答」は、「謝罪」により崩れた謝罪する側のフェイスを回復させるための働きを行っていないため「謝罪-軽減語」として機能できない非優先応答であると言えよう。

3) 「謝罪発話文と否定的な応答」の日本語母語話者の特徴

日本語男性の非難発話文として用いられたのは、「「遅い」という言葉を用いて直接的に非難する発話 (5 例)」、「「待つ」という言葉を用いて非難する発話 (2 例)」、「早く着いたことを言及しながら非難する発話(2 例)」等であり、日本語女性の非難発話文として用いられたのは、「「待つ」という言葉を用いて非難する発話 (3 例)」、「「遅い」という言葉を用いて非難する発話 (1 例)」、「「遅い」という言葉は用いていないが、遅れたことに対して非難する発話(1 例)」等である。

<会話例 7-7> 負担度が軽い場合の日本語男性の否定的な応答①

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
1	JM09	あー、ごめん、&,、	謝罪
2	JM09	遅れちゃった。	責任認め
3	JM10	お前、何分遅れてんだよ、お前。	非難

<会話例 7-8> 負担度が軽い場合の日本語女性の否定的な応答②

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
1	JF31	ごめん、&,、	謝罪

2	JF31	遅くなっちゃってすごく。	責任認め
3	JF32	すごい待ったよ。	非難

<会話例 7-7>と<会話例 7-8>は、謝罪に対し非難する会話例であるが、<会話例 7-7>は、JM09 が、「ごめん」と謝罪し、遅れたことに対して責任を認める発話をしているが、JM10 は受け入れずに、「お前」と「遅れた」という言葉を用いて JM09 を直接的に非難している。<会話例 7-8>は、謝罪する側である JF31 が、「ごめん」と謝罪し、「すごく」という副詞と共に「遅くなっちゃった」ことに対して責任を認める発話をしており、謝罪される側である JF32 は、「すごい」という副詞を用いながら自分が待たされたことに対して相手を非難している。「謝罪発話文と否定的な応答」においては、男女共に、「遅れた」、「待った」という言葉を用いて謝罪する側を直接的に非難する発話をしているが、男性は「遅れた」ことに対する非難を、女性は自分が「待たされた」ことに対する非難を多く用いている。つまり、「遅れた」という言葉は、非難の対象になる相手の行動を非難する視点であり、「待った」という言葉は、それにより自分が待たされてしまったという自分に対する視点であると考えられる。男性は相手の行動に焦点を置いて非難し、女性はそれにより自分が損をしたことに対する非難をする傾向があるのではないかと考えられる。

「謝罪発話文」に対する「否定的な応答」は、「謝罪」により既に崩されている謝罪する側のフェイスを更に侵害している応答であるため、「謝罪－軽減語」として全く機能していない非優先応答である。崩れた人間関係を回復しようとする謝罪する側の働きかけを拒否している反応であるため、互いに摩擦や誤解が起こりうる恐れが高い応答であろう。

日本語母語話者の親しい友人間の「謝罪発話文と応答発話文」は、謝罪内容が軽いため、6割程度は優先応答である「謝罪－軽減語」を用いているが、4割程度は非優先応答を用いている。

7.3.2 負担度が軽い場合の韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の分析結果及び考察

本節では、負担度が軽い場合の韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」を相互作用の観点から、類似点と相違点を明らかにし、その特徴を考察する。分析する際には、まず、得られたデータを数値化し、そこから見られる現象を明らかにした後、会話例を通してより詳細に記述する。

7.3.2.1 負担度が軽い場合の韓国語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の抽出結果及び考察

表 7-10 では、負担度が軽い場合の韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の頻度と割合を全体的に示し、どの発話文を多く用いているかを比較した。表 7-10 の「応答発話文」を見ると、「非難＋譲歩」、「非難＋情報求め」、「非難＋代償要求」という分析項目があ

るが、韓国語母語話者ではこれらの現象が見られた。

表 7-10 負担度が軽い場合の韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の頻度と割合

謝罪発話文		韓国語男性	韓国語女性	応答発話文		韓国語男性	韓国語女性
直接謝罪		25 (53.19)	44 (60.27)	譲歩+明示的な受諾		1 (4.00)	8 (18.18)
責任	認め	9 (19.15)	13 (17.81)	受諾	明示的	2 (8.00)	5 (11.36)
	否認	1 (2.13)	0 (0.00)		非明示的	0 (0.00)	2 (4.55)
	不満	4 (8.51)	1 (1.37)	譲歩		*5 (20.00)	*2 (4.55)
状況	事態	0 (0.00)	0 (0.00)	情報求め		3 (12.00)	5 (11.36)
	理由	1 (2.13)	4 (5.48)	回避	話題転換	2 (8.00)	1 (2.27)
	対処	2 (4.25)	3 (4.11)		感嘆詞	1 (4.00)	1 (2.27)
なだめ		*0 (0.00)	*7 (9.59)	非難+譲歩		2 (8.00)	2 (4.55)
代償言及		4 (8.51)	1 (1.37)	非難+情報求め		0 (0.00)	3 (6.82)
自製の約束		1 (2.13)	0 (0.00)	非難+代償要求		1 (4.00)	0 (0.00)
合計		47(100.00)	73(100.00)	非難		8 (32.00)	12 (27.27)
				代償要求		0 (0.00)	3 (6.82)
				合計		25(100.00)	44(100.00)

()は割合 *p<.05

表 7-10 を見ると、「直接謝罪」は、女性の方で多く用いられ、「責任認め」、「責任否認」、「不満表明」の責任関連発話は男性の方で多く用いられていた。「理由言及」は女性の方で、「代償言及」は男性の方で多く現れ、「対処行動言及」は男女による差があまり現れず、特に、「なだめ」は女性の方のみに現れ、「自製の約束」は男性の方のみに現れたが、全体的な「謝罪発話文」は男性より女性の方で多く現れた。負担度が軽い謝罪場面として設定した「遅刻場面」においては、「直接謝罪」や「責任認め」の「謝罪発話文」を用いる割合が、男性で 72.34%、女性で 78.08%を占めており、主に、「直接謝罪」のみ用いたり、責任を認めながら謝罪する発話をしている。男性は、「直接謝罪」と共に、不可避な状況による遅刻であることを述べたり、謝罪される側の過失に関する不満を表明したり、自分の過失の代わりに何かを奢ることに言及したりする発話を女性より若干多く用いていた。一方、女性は、遅れた理由を述べたり、謝罪される側の怒りを緩和させるための発話を用いたりする傾向が男性より強く現れているといった相違点が見られた。つまり、負担度が軽い謝罪場面での「謝罪発話文」は、責任を認めながら謝罪する簡単な発話のみを行っている傾向が韓国語母語話者でも見られたと考えられる。

韓国語男性と韓国語女性の「謝罪発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、「なだめ($\chi^2(1)=4.7860, p=0.02869$)」で有意な差が認められたが、「直接謝罪($\chi^2(1)=0.5869, p=0.4436, n.s$)」、「責任認め($\chi^2(1)=0.0343, p=0.8530, n.s$)」、「責任否認($\chi^2(1)=1.5335, p=0.3967, n.s$)」、「不

満表明($\chi^2(1)=3.6511, p=0.0560, n.s.$)、「状況説明の理由言及($\chi^2(1)=0.8044, p=0.3698, n.s.$)」、「状況説明の対処行動言及($\chi^2(1)=0.0015, p=0.9688, n.s.$)」、「代償言及($\chi^2(1)=3.6511, p=0.0560, n.s.$)」、「自製の約束($\chi^2(1)=1.5335, p=0.3967, n.s.$)」では、有意な差が認められなかった。

次に、「応答発話文」を「肯定的な応答」、「ニュートラルな応答」、「否定的な応答」の観点から考えると、「肯定的な応答」を用いる割合が、男性で 32.00%、女性で 38.64%と、女性の方が若干多く用いていたが、男女共に負担度が軽い謝罪場面でも約 3 割程度しか受け入れることを示さないという類似点が見られた。しかし、「肯定的な応答」の中でも「譲歩と共に明示的な受諾を用いる発話」や「明示的な受諾」は、男性より女性の方で多く現れた。これに対し、「譲歩」は、女性より男性の方で多く用いられるという相違点が窺えた。「ニュートラルな応答」を用いる割合は、男性で 24.00%、女性で 15.90%と、男性の方で多く用いられ、「否定的な応答」を用いる割合は、男性で 44.00%、女性で 38.64%と、やはり男性の方で多く用いられていた。更に、男女共に、日本語母語話者では現れなかった「非難と共に譲歩、情報求め、代償要求を行う発話」を約 1 割程度用いるという類似性が見られた。負担度が軽い謝罪場面では、「謝罪－軽減語」である「肯定的な応答」が 3 割程度用いられるという傾向が男女共に共通して現れていたが、「ニュートラルな応答」と「否定的な応答」が 2 倍程度多く用いられていた。韓国語母語話者は、負担度が軽い謝罪場面でも、謝罪される側が更なる情報を求めたり、非難する発話も多用する傾向が見られ、「謝罪発話文」に対して、「肯定的な応答」のポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いて相手の崩されたフェイスを回復させるため働きかけているが、フェイス侵害度が高い「非難」も多用する傾向が見られた。

韓国語男性と韓国語女性の「応答発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、「譲歩($\chi^2(1)=4.177, p=0.0409$)」で有意な差が認められたが、「譲歩＋明示的な受諾($\chi^2(1)=2.8269, p=0.0927, n.s.$)」、「明示的な受諾($\chi^2(1)=0.1978, p=0.6564, n.s.$)」、「非明示的な受諾($\chi^2(1)=1.1703, p=0.5311, n.s.$)」、「情報求め($\chi^2(1)=0.0062, p=0.9367, n.s.$)」、「回避の話題転換($\chi^2(1)=1.2574, p=0.2958, n.s.$)」、「回避の感嘆詞を漏らす($\chi^2(1)=0.1690, p=0.6810, n.s.$)」、「非難＋譲歩($\chi^2(1)=0.3484, p=0.6170, n.s.$)」、「非難＋情報求め($\chi^2(1)=1.7820, p=0.5486, n.s.$)」、「非難＋代償要求($\chi^2(1)=0.3458, p=0.5565, n.s.$)」、「非難($\chi^2(1)=0.1731, p=0.6774, n.s.$)」、「代償要求($\chi^2(1)=1.7820, p=0.5486, n.s.$)」では有意な差が認められなかった。

以上の結果から、負担度が軽い謝罪場面における「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用の特徴として、韓国語男性においては、謝罪する側が責任を認めながら謝罪する「謝罪発話文」を主に用いているが「責任否認」や「不満表明」の発話を若干行っており、更に、「理由言及」、「対処行動言及」、「代償言及」、「自製の約束の言及」も多くはないが、用いて謝罪している。また、謝罪される側は「肯定的な応答」、「ニュートラルな応答」、「否定的な応答」といった多様な反応を見せている。一方、韓国語女性の場合、謝罪する側は責任を認めながら謝罪する「謝罪発話文」を用いているが、「責任否認」や「不満表明」の

発話はあまり用いていない。更に、多くないが「理由言及」、「対処行動言及」、「代償言及」も用いて謝罪しており、特に、男性では見られなかった「なだめ」の発話を用いていた。謝罪される側は、男性と同様に「肯定的な応答」、「ニュートラルな応答」、「否定的な応答」を用いて、多様な反応を見せていた。

以下では、韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用の特徴を実際の会話例を見ながら考察していく。

7.3.2.2 負担度が軽い場合の韓国語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用の特徴

本節では、「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用をより詳細に分析するため、「謝罪発話文と肯定的な応答」、「謝罪発話文とニュートラルな応答」、「謝罪発話文と否定的な応答」に分けて、韓国語母語話者の相互作用の特徴を比較しながら記述していく。

1) 「謝罪発話文と肯定的な応答」の韓国語母語話者の特徴

「明示的な受諾」として多く用いられた言葉は、韓国語男性で「됐어(いい(2例))」、「아니(いや(1例))」、「괜찮아(大丈夫(1例))」、「알았다(わかった(1例))」等、韓国語女性で、「괜찮아(大丈夫(7例))」、「아니(아)(いや(5例))」、「어쩔수없지(仕方ない(2例))」、「아니야(いいよ(2例))」、「알았어(わかった(1例))」等であった。

<会話例 7-9> 負担度が軽い場合の韓国語男性の肯定的な応答①

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
11	KM07	《잠시간격》진짜 멈춰가지고 못 온 거니깐, &, (《少し間》本当に止まって来られなかったので, &,)	理由言及
12	KM07	미안해&, (ごめん&,)	謝罪
13	KM07	<내가 어><{,}, (〈私がうん〉<{,},)	-
14	KM08	<웃으면서><괜찮아><{>. (〈笑いながら〉<大丈夫〉<{>。)	明示的な受諾
15	KM07	커피 한 잔 살게. (コーヒー一杯奢る。)	代償言及

<会話例 7-9>は、KM07 が、遅れた理由を説明しているが、自分が遅れた理由は電車のせいであることに言及してから、「미안해(ごめん)」と謝罪し、これを受け、KM08 は「괜찮아(大丈夫)」という明示的な受諾の意を示す言葉を用いて受け入れ、更に、KM07 は「커피 한 잔 살게(コーヒー一杯奢る)」と代償の意を表している。この会話例は、謝罪する側の謝罪に対し、明示的に受け入れる意を示しているが、このようなやりとりは女性の方で多く現れていた。

<会話例 7-10> 負担度が軽い場合の韓国語女性の肯定的な応答①

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
31	KF17	미안하다-, &, (ごめんね-, &,)	謝罪
32	KF17	화풀어.(機嫌直して。)	なだめ
33	KF18	그래 뭐.(そうね、まあ。)	非明示的な受諾

<会話例 7-10>では、KF17 が、「ごめん」と謝罪した後、「화풀어.(機嫌直して。)」と、相手の怒りを納めるためなだめるような発話をしている。これを受け、KF18 は、非明示的に受け入れることを示している。

<会話例 7-11> 負担度が軽い場合の韓国語男性の肯定的な応答②

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
32	KM03	그러니깐, 어쨌든 내가 늦었으니깐,&, (だから、とりあえず私が遅れたから、&,)	責任認め
33	KM03	내가 미안해.(私がごめん。)	謝罪
34	KM04	나도 이번에 핸드폰 안 가지고 온 것도 내 실수니깐 우리 빨리 밥이나 먹으러 가자.(私も今回携帯を持って来なかったのは私の 誤りだから、私たち早くご飯でも食べに行こう。)	譲歩

<会話例 7-11>は、KM03 が、遅れたことの原因を認めながら、「미안해(ごめん)」と謝罪し、KM04 は、自分の過失を認めながら、次の行動を言及するという譲歩の発話をしている。<会話例 7-10>と<会話例 7-11>は、謝罪する側の謝罪に対し明確に受け入れる意を示す言葉は用いていないが、不可避な状況により遅れたことを理解し、自分にも過失があることを認めており、間接的に受け入れる意を示している。これらの会話例のように、謝罪する側の謝罪に対する「非明示的な受諾」は女性のみで現れ、「譲歩」は男性の方で多く現れていた。「肯定的な応答」は、男性より女性の方で多く現れていたが、男性は、「明示的な受諾発話文」はあまり用いておらず、「譲歩」の応答で受け入れる意を示す傾向が見られた。

「謝罪発話文」に対する「肯定的な応答」は、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーである「謝罪」を用いて関係回復をしようとする謝罪する側に対する配慮であるため、「謝罪-軽減語」として働いているが、韓国語母語話者は、謝罪内容が軽い場合にも、簡単に受け入れる意は示されず、やりとりしてから受け入れる意を示す傾向が見られた。

2) 「謝罪発話文とニュートラルな応答」の韓国語母語話者の特徴

「ニュートラルな応答」は、女性より男性の方で多く現れていた。

<会話例 7-12> 負担度が軽い場合の韓国語男性のニュートラルな応答①

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
1	KM05	미안,&, (ごめん,&,)	謝罪
2	KM05	늦었지.(遅れたでしょ。)	責任認め
3	KM06	왜 이렇게 늦었어?(何でこんなに遅れたの?)	情報求め

<会話例 7-12>は、KM05 が、「미안(ごめん)」と謝罪した後、遅れたことを認める発話を行っており、KM06 は、「이렇게(こんなに)」を強調しながら遅れた理由を求めている。この会話例では、謝罪する側が責任を認めながら謝罪しているが、受け入れる意は示さず、「왜 이렇게(何でこんなに)」を強調しながら遅れたことに対する情報を求めているため、謝罪する側のフェイスをあまり配慮していない応答であると言える。

<会話例 7-13> 負担度が軽い場合の韓国語男性のニュートラルな応答②

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
151	KM13	음-, 미안해.(うん-, ごめん。)	謝罪
152	KM14	《침묵 6 초》아무튼 그러면은 다른 데로 갈까?, 아니 이거 먹고 가야 될 것 <아니야>{<}.《沈黙 6 秒》とにかく、そしたら別のとこ行く?, いやでもこれ飲まないと{<}.)	回避(話題転換)

<会話例 7-13>で、KM13 は、「미안해(ごめん)」と謝罪したが、KM14 は、謝罪に対する応答はせず、沈黙の後、次の行動に関する話題を持ち出している。韓国語男性は、謝罪内容が軽い場合には、明示的な受諾の意はあまり示さず、「譲歩」で受け入れる意を示したり、「回避」で遠まわしに反応したりする傾向が女性より多く現れていた。

「謝罪発話文」に対する「ニュートラルな応答」は、「謝罪」により崩れた謝罪する側のフェイスを立てるための働きかけを行っていないため「謝罪一軽減語」として機能できない非優先応答であると言える。

3) 「謝罪発話文と否定的な応答」の韓国語母語話者の特徴

韓国語男性が使用した非難発話文として、「「遅い」、「待つ」という言葉は用いていないが、遅れたことに対して非難する発話(7例)」、「「遅い」という言葉を用いて非難する発話(1例)」、「遅れた時間を上げて非難する発話(1例)」等が見られた。一方、韓国語女性が使用した非難発話文としては、「「遅い」、「待つ」という言葉は用いていないが、遅れたことに対して非難する発話(9例)」、「「待つ」という言葉を用いて非難する発話(2例)」、「遅れた時間を上げて非難する発話(2例)」、「「遅い」という言葉を用いて非難する発話(1例)」等が見られた。

<会話例 7-14> 負担度が軽い場合の韓国語男性の否定的な応答①

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
40	KM31	《잠시간격》알았어,미안해&,((《少し間》わかった、ごめん&,))	謝罪
41	KM31	내가(어) 오늘 술은 내가 살게.(私が(うん)今日お酒奢るよ。)	代償言及
42	KM32	술 사는데 문제가 아니라, 너는 이거 이계, 항상<웃음> 이래 맨날 이래, 항상 늦는다니깐.(お酒奢ることの問題じゃなく、君はこれが、いつも<笑い>)こう、毎日こう、いつも遅れるから。)	非難

<会話例 7-15> 負担度が軽い場合の韓国語女性の否定的な応答①

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
5	KF11	어-, 진짜 미안해 &, (あー、本当ごめん&,)	謝罪
6	KF11	배고프지?.(おなか空いたでしょ?)	なだめ
7	KF12	배는 둘째치고 아- 이자식, <웃음>20 분--[시간을 천천히 강조하듯이].(おなかのことは二番だし、お前、このやろう<笑い>)20分-[時間をゆっくり強調するように。)	非難

<会話例 7-14>と<会話例 7-15>は、謝罪に対し非難する会話例であるが、<会話例 7-14>は、KM31が、「미안해(ごめん)」と謝罪した後、代わりにお酒を奢ると言及し、KM32は、KM31の「お酒を奢る」という発話に対して肯定的な応答はせず、「항상 늦는다니깐(いつも遅れるから)」と「いつも」を2回連続して強調しながら相手を非難している。<会話例 7-15>で、謝罪する側であるKF11は、「미안해(ごめん)」と謝罪した後、「배고프지?(おなか空いたでしょ?)」と、自分により相手が待たされたので、相手の怒りを納めようとなだめているが、謝罪される側であるKF12は、なだめを拒否した後、「이자식(このやろう)」と言及しながら、遅れた時間を強調して言い、若干冗談めかして相手を責めている。韓国語母語話者は、非難発話文を用いる際、「遅れた」、「待った」という決まり表現はあまり用いず、多様な言葉を用いて相手を責めているが、女性より男性の方が直接的に非難する言葉を多く用いている。

<会話例 7-16> 負担度が軽い場合の韓国語男性の否定的な応答②

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
12	KM09	《잠시간격》아- 미안. (《少し間》あー、ごめん。)	謝罪
13	KM10	아-, 이 새끼, 그래도 20 분, 20 분이나 늦었는데, 이 새끼 밥이나 사라 그냥. (あー、このやろう、だけど 20 分、20 分も遅れたから、てめえご飯でも奢りなただ。)	非難+代償要求

<会話例 7-17> 負担度が軽い場合の韓国語女性の否定的な応答②

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
16	KF01	<웃으면서>미<안해>{<}.(<笑いながら>ご<めん>{<}.)	謝罪
17	KF02	<왜 이렇게>{<}.(<どうして>{<}.)	非難
18	KF02	뭐 하다[매우 강한어조로] 늦었는데? (何やって[すごく強い語調で]遅れたの?。)	情報求め

<会話例 7-16>と<会話例 7-17>は、単に、非難せず、非難しながら代償要求をしたり、相手を責めながら情報を求めたりする会話例であるが、このような会話例は韓国語母語話者にのみ現れていた。<会話例 7-16>は、KM09 が、「미안(ごめん)」と謝罪し、KM10 は、KM09 が遅れたことについては非難しているものの、「이 새끼 밥이나 사라 그냥(てめえご飯でも奢りなただ)」と代償を要求している。<会話例 7-17>は、謝罪する側である KF01 が「미안해(ごめん)」と謝罪したが、謝罪される側である KF02 は、「<왜 이렇게>{<}.(<どうして>{<}.)」、「뭐 하다[매우 강한어조로](何やって[すごく強い語調で])」と、強調する言葉を繰り返し言いながら遅れた理由を求めている。これらの会話例のように、韓国語母語話者の謝罪される側は、自分の不満な気持ちを表す際、異なる機能を持つ発話を共に用いる傾向があるのではないかと考えられる。

「謝罪発話文」に対する「否定的応答」は、「謝罪」により既に崩れた謝罪する側のフェイスを更に侵害している応答であるため、「謝罪-軽減語」として機能していない非優先応答である。

韓国語母語話者の親しい友人間の「謝罪発話文と応答発話文」は、3割以上は優先応答である「謝罪-軽減語」を用いているが、7割近くは非優先応答を用いている。つまり、謝罪内容が軽い場合でも、謝罪に対し、直ちに受け入れる意を示すより、「ニュートラルな応答」や「否定的な応答」も多用しながら「肯定的な応答」を用いている傾向が見られる。

7.4 負担度が軽い場合の日韓母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」のまとめ

本節では負担度が軽い場合の日本語母語話者と韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」を相互作用の観点から分析し、類似点や相違点等の特徴を考察した。

日本語母語話者による「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用をまとめると、まず、男女共に、謝罪する側は、遅れた理由を述べたり、その際、自分の対処行動を述べる等の状況説明はあまり用いず、主に、責任を認めながら謝罪する簡単な働きかけを行っていた。しかし、男性は、「直接謝罪」と共に、不可避な状況による遅刻であることを述べたり、謝罪される側の過失に関する不満を表明したりする発話を用いており、女性は、何かを奢ることを言及する発話を男性よりは若干多く用いたりする等の相違点が見られた。謝罪される側は、「謝罪-軽減語」である「受諾」を主に用いる「肯定的な応答」が6割程度多く用いられる傾向が男女共に共通して現れていたが、男性は女性より「非難」を用いる「否定

的な応答」と「消極的な受け入れる意を示す応答」を、女性は男性より「情報求め」などを用いる「ニュートラルな応答」と「積極的に受け入れる意を示す応答」を多く用いる傾向が見られた。男性は、「謝罪」に対して、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いて相手の侵害されたフェイスを立てるため働きかけているが、自分の不愉快な気持ちも直接に表したり、フェイス侵害度が高い「非難」もかなり用いている。しかし、女性は「謝罪」に対して、主に、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いて相手の侵害されたフェイスを立てるため働きかけており、フェイス侵害度が高い発話は避けようとする傾向が見られた。

韓国語母語話者による「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用をまとめると、まず、男女共に、謝罪する側は、主に、「直接謝罪」のみを用いたり、責任を認めながら謝罪する発話を多用する傾向があった。しかし、男性は、不可避な状況による遅刻であることを述べたり、謝罪される側の過失に関する不満を表明したり、自分の過失の代わりに何かを奢ることに言及したりする発話を女性より多く用いており、女性は、遅れた理由を述べたり、謝罪される側の怒りを緩和させるための発話を用いたりする傾向が男性より強いといった相違点が見られた。謝罪される側は、「謝罪一軽減語」である「受諾」を主に用いる「肯定的な応答」が3割程度用いられるという傾向が男女共に共通して現れていたが、男性は女性より「非難」を用いる「否定的な応答」や「情報求め」などを用いる「ニュートラルな応答」を若干多く用いるという傾向が見られた。韓国語母語話者は、負担度が軽い謝罪場面でも、謝罪される側が更なる情報を求めたり、非難する発話を多用するという傾向が見られ、「謝罪発話文」に対して、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いて相手の侵害されたフェイスを立てるため働きかけているが、フェイス侵害度が高い「非難」もかなり多用するという傾向が見られた。

7.5 日韓母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の分析結果及び考察(負担度が重い場合)

本節では負担度が重い場合の日本語母語話者と韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」を分析し考察を行うが、相互作用の観点から見られる「謝罪発話文と応答発話文」の類似点と相違点を明らかにし、その特徴を述べる。

7.5.1 負担度が重い場合の日本語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の分析結果及び考察

本節では、負担度が重い場合の日本語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」を相互作用の観点から、類似点と相違点を明らかにし、その特徴を考察するが、分析する際には、まず、得られたデータを数値化し、そこから見られる現象を明確にさせた後、会話例を通してより詳細に記述する。

7.5.1.1 負担度が重い場合の日本語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の抽出結果及び考察

表 7-11 では、負担度が重い場合の日本語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の頻度と割合を全体的に示し、どの発話文を多く用いているかを比較した。

表 7-11 負担度が重い場合の日本語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の頻度と割合

謝罪発話文		日本語男性	日本語女性	応答発話文		日本語男性	日本語女性
直接謝罪		35 (57.38)	40 (50.63)	譲歩+明示的な受諾		1 (2.86)	3 (7.50)
責任	認め	7 (11.48)	9 (11.39)	受諾	明示的	7 (20.00)	7 (17.50)
	否認	0 (0.00)	0 (0.00)		非明示的	3 (8.57)	6 (15.00)
	不満	0 (0.00)	1 (1.27)	譲歩		3 (8.57)	7 (17.50)
状況	事態	7 (11.48)	13 (16.46)	情報求め		3 (8.57)	6 (15.00)
	理由	0 (0.00)	0 (0.00)	回避	話題転換	0 (0.00)	0 (0.00)
	対処	2 (3.27)	0 (0.00)		感嘆詞	3 (8.57)	5 (12.50)
なだめ		10 (16.39)	16 (20.25)	非難+譲歩		0 (0.00)	0 (0.00)
代償言及		0 (0.00)	0 (0.00)	非難+情報求め		0 (0.00)	0 (0.00)
自製の約束		0 (0.00)	0 (0.00)	非難+代償要求		0 (0.00)	0 (0.00)
合計		61(100.00)	79(100.00)	非難		* 15 (42.86)	* 6 (15.00)
				代償要求		0 (0.00)	0 (0.00)
				合計		35(100.00)	40(100.00)

()は割合 *p<.05

表 7-11 をみると、「直接謝罪」は男性の方で多く用いられ、「責任認め」は男女による差が現れず、「事態言及」と「なだめ」は女性の方で若干多く用いられたが、全体的な「謝罪発話文」は男性より女性の方で多く現れた。負担度が重い謝罪場面として設定された「バイト関連場面」においては、「直接謝罪」と「責任認め」の「謝罪発話文」を用いる割合が、男性は 68.86%、女性は 62.02%を占めており、責任を認めながら謝罪する働きのみならず、自分が引き起こした不愉快な事態を説明したり、謝罪される側の怒りを抑えるための働きをする等、より複雑な「謝罪発話文」を用いているという類似点が見られた。負担度が重い謝罪場面では、「責任否認」、「代償言及」は現れておらず、「不満表明」は女性で1例、「対処行動言及」は男性で2例のみ現れていた。主に、「直接謝罪」、「責任認め」、「事態言及」、「なだめ」の4つで「謝罪発話文」が構成されており、男女による相違点より類似点が多く現れていた。つまり、本研究で負担度が重いと設定された謝罪場面では、日本語母語話者の謝罪する側は、自分により引き起こされた不愉快な状況に集中し、謝罪される側の反応を見ながら、「直接謝罪」と共に多様な発話を用いて謝罪する傾向が見られた。

日本語男性と日本語女性の「謝罪発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、有意な差が認められなかった(「直接謝罪($\chi^2(1)=0.6295$, $p=0.4276,n.s$)」、「責任認め($\chi^2(1)=0.00023$, $p=0.9879,n.s$)」、「不満表明($\chi^2(1)=0.7777$, $p=0.3778,n.s$)」、「状況説明の事態言及($\chi^2(1)=0.6972$, $p=0.4037,n.s$)」、「状況説明の対処行動言及($\chi^2(1)=2.6277$, $p=0.1050,n.s$)」、「なだめ($\chi^2(1)=0.3391$, $p=0.5604,n.s$)」)。

次に、「応答発話文」を「肯定的な応答」、「ニュートラルな応答」、「否定的な応答」の観点から考えると、「肯定的な応答」を用いる割合が、男性で40.00%、女性で57.50%であり、「明示的な受諾」以外の「肯定的な応答」は男性より女性の方で多く用いられ、特に、女性は「譲歩」の「応答発話文」を多用する傾向が見られた。しかし、第5章と第6章で説明したように、謝罪される側に受け入れられた会話は、女性より男性の方で多く現れ、女性は半分ぐらいしか謝罪内容を受け入れられなかった。女性は「謝罪定型表現」を用いている相手のフェイスを配慮して、その「謝罪発話文」に対しては、若干形式的にも見られる「肯定的な応答」を行っている傾向があるのではないかと考えられる。「ニュートラルな応答」を用いる割合は、男性で17.14%、女性で27.50%と、女性の方で多く用いられ、「否定的な応答」を用いる割合は、男性で42.86%、女性で15.00%と、男性の方がほぼ3倍ぐらい多く用いていた。女性は情報を求めながら問題になっている不愉快な事態を把握しようとする働きかけを、男性は自分の不快な感情を謝罪する側に直接に伝達しようとする働きかけを多く用いる傾向があるのではないかと考えられる。負担度が重い謝罪場面では、「謝罪一軽減語」である「肯定的な応答」が、男性で4割程度、女性でほぼ6割程度であったが、上記にも説明したように若干形式的な面が女性には見られ、全体的に簡単に「軽減語」を用いる割合は男女共に低くなると考えられる。一方、「ニュートラルな応答」や「否定的な応答」を用いる割合は高くなるという反対の傾向が見られ、特に、日本語男性では「否定的な応答」が4割も占めている。つまり、負担度が重くなると、侵害された自分のネガティブ・フェイスを守るための働きかけも積極的に行われ、フェイス侵害度が高い発話も多く用いられていると考えられる。

日本語男性と日本語女性の「応答発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、「非難($\chi^2(1)=7.1853$, $p=0.0073$)」で有意な差が認められたが、「譲歩+明示的な受諾($\chi^2(1)=0.7970$, $p=0.3720,n.s$)」、「明示的な受諾($\chi^2(1)=0.0768$, $p=0.7816,n.s$)」、「非明示的な受諾($\chi^2(1)=0.7305$, $p=0.3927,n.s$)」、「譲歩($\chi^2(1)=1.2877$, $p=0.2565,n.s$)」、「情報求め($\chi^2(1)=0.7305$, $p=0.3927,n.s$)」、「回避の感嘆詞を漏らす($\chi^2(1)=0.3023$, $p=0.5824,n.s$)」では、有意な差が認められなかった。

以上の結果から、負担度が重い謝罪場面における「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用の特徴として、日本語男性は、謝罪する側が責任を認めながら謝罪する「謝罪発話文」を用いているが、「直接謝罪」は女性より若干多く用いており、事態を言及したり、相手をなだめる発話も用いて謝罪している。また、謝罪される側は、肯定的な応答を多く用いているが、ニュートラルな応答や否定的な応答もかなり用いて反応するということが明らかになった。一方、日本語女性においては、謝罪する側が責任を認めながら謝罪する「謝罪

発話文」を用いているが、「直接謝罪」の使用は男性より若干少なく、事態を言及したり、相手をなだめる発話は男性より多く用いて謝罪している。また、謝罪される側は、主に、肯定的な応答を用いているが、情報を求めたり、回避する発話のニュートラルな応答は男性より多く用いて反応し、否定的な応答はあまり用いていない傾向が見られた。

以下では、日本語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用の特徴を実際の発話例を見ながら考察していく。

7.5.1.2 負担度が重い場合の日本語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用の特徴

本節では、「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用をより詳細に分析するため、「謝罪発話文と肯定的な応答」、「謝罪発話文とニュートラルな応答」、「謝罪発話文と否定的な応答」に分けて、日本語母語話者の相互作用の特徴を比較しながら記述していく。

1) 「謝罪発話文と肯定的な応答」の日本語母語話者の特徴

「明示的な受諾」として多く用いられた言葉は、日本語男性において「いい(2例)」、「いえ(2例)」、「仕方ない(1例)」、「わかった(1例)」、「謝罪する側の謝罪状況を理解し受け入れることを示す発話(2例)」等、日本語女性においては、「謝罪する側の謝罪状況を理解し受け入れることを示す発話(7例)」、「いい(2例)」、「いやいや(1例)」等であった。負担度が重い謝罪場面では、受け入れる意を示す明示的な受諾の言葉と、これらの明示的な受諾の言葉は用いていないが、謝罪する側が持ち出した謝罪内容を受け入れる意を示す発話が見れている。

<会話例 7-18> 負担度が重い場合の日本語男性の肯定的な応答①

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
55	JM05	やあ(まあ)、でも本当に紹介してくれたのに、結構無理言って、紹介して貰った一のに、&,	なだめ
56	JM05	ちょっと、その###いいのに、いい条件に惹かれて変えちゃうっていうのは、すごく心が痛むんだけど、&,	責任認め
57	JM05	ちょっと申し訳ないんです。	謝罪
58	JM06	まあ、仕方ないのもあるからね。	明示的な受諾

<会話例 7-19> 負担度が重い場合の日本語女性の肯定的な応答①

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
51	JF07	<うんうん>、 「人名 1」さんこの店はすごいいい、雰囲気いいし(うん)、いやな客とかも来ないから、すごい好きなんだけど、&,	なだめ
52	JF07	やっぱり家から近いし(うん)、時給もいいから(うん)、&,	事態言及

53	JF07	うんー、ごめんね。	謝罪
54	JF08	じゃ、ま、時給のことは言わないで(うん)、その「JF07名」のお母さんが家から遠いと夜遅いと不安だからみたいな(うんうん)感じで辞められたみたいな感じで(うん)一応話してみる。	明示的な受諾

<会話例 7-18>と<会話例 7-19>は、謝罪に対する明示的な受諾が現れた会話例であるが、<会話例 7-18>は、JM05 が、「紹介してもらった」と相手からの恩恵等の気持ちを表し、その怒りを納めるためのなだめの発話を用いてから、そのバイトを辞めることは「すごく心が痛むんだけど」と自分の責任を認める発話を用いた後「申し訳ない」と謝罪している。これを受け、JM06 は、「仕方ない」という明示的な受諾の意を示す言葉を用いて受け入れている。<会話例 7-19>は、謝罪する側である JF07 は、まず、謝罪される側である JF08 から紹介してもらったバイトの良い点について言及して相手をなだめてから、事態に対して言及し理解を求め、その後、「ごめん」と謝罪している。これを受け、JF08 は、謝罪する側の謝罪内容を受け入れ、更に、協力することを言いながら明示的な受諾の意を示している。これらの会話例を見ると、男女は、「直接謝罪」と共に「なだめ」、「責任認め」、「事態言及」を用いており、謝罪される側は明示的な受諾の意を示す言葉を用いて受け入れたり、これらの言葉は用いていないが受け入れることを示す発話を行っている。負担度が重い謝罪場面の「謝罪発話文と応答発話文」のやりとりで、最も互いのフェイスを配慮している「謝罪－軽減語」であると言える。

<会話例 7-20> 負担度が重い場合の日本語男性の肯定的な応答②

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
89	JM09	本当に申し訳ないっす。	謝罪
90	JM10	うん。	非明示的な受諾

<会話例 7-21> 負担度が重い場合の日本語女性の肯定的な応答②

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
26	JF13	だから、本当に申し(うんうん)訳(うんうん)ないんだけど…。	謝罪
27	JF14	そうだよね(うん)、人間関係は結構(うん)重要な要素だからね=。	譲歩

<会話例 7-20>では、JM09 が「申し訳ない」と謝罪したのに対し、JM10 は「うん」のみの一語で反応している。<会話例 7-21>では、謝罪する側である JF13 が「申し訳ない」と謝罪したのに対し、謝罪される側である JF14 は、JF13 が紹介してもらったバイト先を辞めたい理由が、人間関係の苦勞であることを理解しているような発話をし、一步譲る姿勢を見せている。<会話例 7-20>、<会話例 7-21>は、謝罪する側の謝罪に対し明確な受け入れる意を示す言葉は用いていないが、消極的に受け入れる意を示している。これらの会話例のように、謝罪する側の謝罪に対し、「非明示的な受諾」や「譲歩」のみの発話は女

性の方で若干多く現れていた。

負担度が軽い謝罪場面と同様に、「謝罪発話文」に対する「肯定的な応答」は、謝罪する側に対する配慮であるため、「謝罪一軽減語」として働いているが、謝罪内容が重いため、直ちに、受け入れる意は示さず、互いのやりとりが行われてから、受け入れる意を示す言葉を用いている。

2) 「謝罪発話文とニュートラルな応答」の日本語母語話者の特徴

「ニュートラルな応答」は、謝罪内容を受け入れるか否かを示さず、客観的に情報を求めたり、話題転換あるいは感嘆詞を用いて謝罪内容自体を回避する応答であるが、男性よりは女性の方で多く現れていた。

<会話例 7-22> 負担度が重い場合の日本語女性のニュートラルな応答

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
15	JF07	えー、全然そういうん、じゃないんだけど、 ⁸² でも何かほら、私やっぱ一人暮らしだから、[声が段々小さくなる]まあお金高い方が(あー)、いいなと思って&,;	なだめ 事態言及
16	JF07	本当悪いんだけど…。	謝罪
17	JF08	そっか、え、新しいとこいくら位上がるの？。	情報求め

<会話例 7-22>は、JF07 が、紹介してもらったバイト先については全然不満などはないとなだめの発話をし、自分の状況を説明し理解を求めるための発話を行ってから「悪い」と謝罪している。これを受け、JF08 は、JF07 が時給のことについて言及したので更なる情報を求める発話をしている。

<会話例 7-23> 負担度が重い場合の日本語男性のニュートラルな応答

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
17	JM05	やあ、本当に申し訳ないけど。	謝罪
18	JM06	《沈黙 3 秒》うんー。	回避(感嘆詞)

<会話例 7-23>は、JM05 が「申し訳ない」と謝罪をしているが、JM06 は沈黙の後、「うんー」のみ発話し、受諾あるいは非難の意を示さず意見を回避している。これらの会話例は、謝罪する側が謝罪しているが、受け入れる意は示さず、問題になっている事柄に対する更なる情報を求めたり、感嘆詞を漏らして応答を回避している。「肯定的な応答」よりは、相手のフェイスをあまり配慮していない応答であるが、謝罪内容が重いため、謝罪する側

⁸² JF08 の「えー、「人名 1」さんとこは何か不満?。」(ライン番号 14)に対する応答。

のネガティブ・フェイスを配慮するより、自分の不愉快な気持ちを間接的に表すことが優先されている。

「謝罪発話文」に対する「ニュートラルな応答」は、「謝罪」により崩れた謝罪する側のフェイスを立てるための働きを行っていないため「謝罪－軽減語」として機能できない非優先応答である。しかし、謝罪内容が重いため、互いが崩されたフェイスの配慮する働きかけよりは、問題になっている事柄の解決に集中しているため、優先応答と非優先応答のどちらが優先されるかについては曖昧になると考えられる。つまり、負担度が重くなると、「謝罪－軽減語」という応答より、非優先応答が多く用いられる可能性があると考えられる。

3) 「謝罪発話文と否定的な応答」の日本語母語話者の特徴

非難発話文として用いられたのは、日本語男性において「自分の立場の大変さや自分の努力等を挙げて非難する発話(5例)」、「バイト期間の短さを挙げながら非難する発話(2例)」、「意向を変更するよう求めながら非難する発話(4例)」、「辞めたいこと自体に対して非難する発話(4例)」等、日本語女性において「自分の立場の大変さや自分の努力等を挙げて非難する発話(2例)」、「バイト期間の短さを挙げながら非難する発話(1例)」、「辞めたいこと自体に対して非難する発話(3例)」等であった。負担度が重い謝罪場面では、多様な表現で「否定的な応答」を表しているが、女性より男子の方で多く用いられている。

<会話例 7-24> 負担度が重い場合の日本語男性の否定的な応答

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
1	JM17	申し訳ないんだけど、&,,	謝罪
2	JM17	今やってるバイトは…、《少し間》ちょっと時給が安いし、実は、新聞で[↑]もっといいバイト見付けたんだ。	事態言及
3	JM17	本当に紹介してもらって&,,	なだめ
4	JM17	申し訳ないけど、&,,	謝罪
5	JM17	そっちにしようと思ってるだ。	事態言及
6	JM18	えー、でも、だって、やあ、なんか、俺も店長に無理言って、その一、“この人いい人だから”って勧めて。	非難

<会話例 7-25> 負担度が重い場合の日本語男性の否定的な応答

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
4	JM25	ごめん、ごめんね、&,,	謝罪
5	JM25	すごい無理に紹介してもらっちゃったんだけど=。	なだめ

6	JM26	=いや、それは[↑]困るね。	非難
---	------	----------------	----

<会話例 7-24>と<会話例 7-25>は、謝罪に対し非難する会話例であるが、<会話例 7-24>は、JM17 が、「申し訳ない」と謝罪してから、新しいバイト先を見つけたことを説明し、「紹介してもらった」という恩について言及した後、再度、「申し訳ない」と謝罪してから、最後に、そこに行きたい自分の意向を述べている。これを受け、JM18 は、自分が JF17 を紹介してあげた当時の大変さ等に言及しながら相手の謝罪を受け入れずに非難しているのがわかる。<会話例 7-25>で、謝罪する側である JM25 は「ごめん」と 2 回連続謝罪した後、恩について言及しており、謝罪される側である JM26 は、JM25 の「謝罪発話文」に対して「困る」という言葉を用いて非難している。

「謝罪発話文」と「否定的な応答」においては、男女共に、「自分の大変さ」、「期間の短さ」、「辞めること自体に対する非難」を共通的に用いながら反応しているが、「否定的な応答」は、女性より男性の方がほぼ 3 倍ぐらい多く用いていた。しかし、上記の受諾発話文で説明したように、第 5 章と第 6 章の分析結果では実際に受け入れない会話は男性より女性の方で多く現れている。従って、一発話文レベルではなく全体的な談話レベルで見なければ正確な結果が得られない恐れがあると考えられる。

「謝罪発話文」に対する「否定的な応答」は、「謝罪」により既に崩れた謝罪する側のフェイスを更に侵害している応答であるため、「謝罪－軽減語」として全く機能していない非優先応答である。しかし、上記の「ニュートラルな応答」と同様に、謝罪内容が重いため、互いが崩されたフェイスを配慮する働きかけよりは、問題になっている事柄の解決に集中されている。従って、或る程度の摩擦は起こる可能性が高くなり、摩擦があるにも関わらず、人間関係を回復させるため互いが働きかけることが重要であろうと考えられる。

日本語母語話者の親しい友人間の「謝罪発話文と応答発話文」は、謝罪内容が重いため、男性で 4 割程度、女性でほぼ 6 割程度の「肯定的な応答」の「謝罪－軽減語」を用いているが、男性は 6 割程度、女性は 4 割程度の非優先応答も用いている。しかし、負担度が重い場合の日本語女性の「謝罪－軽減語」は、謝罪する側が持ち出した謝罪内容を受け入れることとは異なる。

7.5.2 負担度が重い場合の韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の分析結果及び考察

本節では、相互作用の観点から、負担度が重い場合の韓国語母語話者の「謝罪発話文」と「応答発話文」の類似点と相違点を明らかにし、その特徴を考察する。分析する際に、まず、得られたデータを数値化し、そこから見られる現象を明確にさせた後、会話例を通してより詳細に記述する。

7.5.2.1 負担度が重い場合の韓国語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の抽出結果及び考察

表 7-12 では、負担度が重い場合の韓国語男女母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の頻度と割合を全体的に示し、どの発話文を多く用いているかを比較した。

表 7-12 負担度が重い場合の韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の頻度と割合

謝罪発話文		韓国語男性	韓国語女性	応答発話文		韓国語男性	韓国語女性
直接謝罪		21 (65.63)	30 (53.57)	譲歩+明示的な受諾		3 (14.29)	2 (6.66)
責任	認め	4 (12.50)	9 (16.07)	受諾	明示的	6 (28.57)	9 (30.00)
	否認	0 (0.00)	0 (0.00)		非明示的	0 (0.00)	3 (10.00)
	不満	0 (0.00)	0 (0.00)	譲歩		1 (4.76)	1 (3.33)
状況	事態	3 (9.37)	7 (12.50)	情報求め		2 (9.52)	4 (13.34)
	理由	0 (0.00)	0 (0.00)	回避	話題転換	0 (0.00)	0 (0.00)
	対処	0 (0.00)	0 (0.00)		感嘆詞	0 (0.00)	4 (13.34)
なだめ		4 (12.50)	10 (17.86)	非難+譲歩		1 (4.76)	0 (0.00)
代償言及		0 (0.00)	0 (0.00)	非難+情報求め		1 (4.76)	0 (0.00)
自製の約束		0 (0.00)	0 (0.00)	非難+代償要求		0 (0.00)	0 (0.00)
合計		32(100.00)	56(100.00)	非難		7 (33.34)	6 (20.00)
				代償要求		0 (0.00)	1 (3.33)
				合計		21(100.00)	30(100.00)

*()は割合

表 7-12 をみると、「直接謝罪」は男性の方で多く用いられていたが、「責任認め」、「事態言及」、「なだめ」は女性の方で多く用いられており、全体的な「謝罪発話文」は男性より女性の方で多く現れた。負担度が重い謝罪場面として設定された「バイト関連場面」においては、「直接謝罪」と「責任認め」の「謝罪発話文」を用いる割合が、男性で 78.13%、女性で 69.64%を占めており、責任を認めながら謝罪する働きかけのみならず、自分が引き起こした不愉快な事態を説明したり、謝罪される側の怒りを抑えるための働きかけをする等、より複雑な「謝罪発話文」を用いるという類似点が見られた。負担度が重い謝罪場面では、主に「直接謝罪」、「責任認め」、「事態言及」、「なだめ」の 4 つの「謝罪発話文」が現れており、男女による相違点より類似点が多く現れていた。つまり、本研究で負担度が重いと設定された謝罪場面では、韓国語母語話者の謝罪する側は、自分により引き起こされた不愉快な状況に集中し、謝罪される側の反応を見ながら、「直接謝罪」と共に多様な発話を用いて謝罪する傾向があると言える。

韓国語男性と韓国語女性の「謝罪発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、有意な差が認められなかった(「直接謝罪($\chi^2(1)=1.2142, p=0.2705, n.s$)」、「責任認め($\chi^2(1)=0.2063, p=0.6497, n.s$)」、「状況説明の事態言及($\chi^2(1)=0.1974, p=0.6568, n.s$)」、「なだめ($\chi^2(1)=0.4368, p=0.5086, n.s$)」)。

次に、「応答発話文」を「肯定的な応答」、「ニュートラルな応答」、「否定的な応答」の観点から考えると、「肯定的な応答」を用いる割合が、男性で 47.62%、女性で 49.99%と、女性の方が若干多く用いていたが、男女共に負担度が重い謝罪場面では約 5 割程度「肯定的な応答」を見せており、特に、「非明示的な受諾」は女性のみ現れていた。「ニュートラルな応答」を用いる割合は、男性で 9.52%、女性で 26.68%と、女性の方で多く用いられ、「感嘆詞を用いて回避する発話」は女性のみ現れていた。「否定的な応答」を用いる割合は、男性で 42.86%、女性で 20.00%と、男性の方が 2 倍以上多く用いており、男性の方が自分の不快な感情を謝罪する側に直接的に伝達していた。女性は情報を求めながら問題になっている不愉快な事態を把握しようとする働きかけを、男性は自分の不快な感情を謝罪する側に直接に伝達しようとする働きかけを多く用いる傾向があるのではないかと考えられる。

韓国語男性と韓国語女性の「応答発話文」を、カイ二乗検定で比較した結果、有意な差が認められなかった(「譲歩+明示的な受諾($\chi^2(1)=0.8109, p=0.3678, n.s$)」、「明示的な受諾($\chi^2(1)=0.0121, p=0.9122, n.s$)」、「非明示的な受諾($\chi^2(1)=2.2312, p=0.2588, n.s$)」、「譲歩($\chi^2(1)=0.0669, p=0.7959, n.s$)」、「情報求め($\chi^2(1)=0.1727, p=0.6777, n.s$)」、「回避の感嘆詞を漏らす($\chi^2(1)=3.0383, p=0.1336, n.s$)」、「非難+譲歩($\chi^2(1)=1.4571, p=0.4117, n.s$)」、「非難+情報求め($\chi^2(1)=1.4571, p=0.4117, n.s$)」、「非難+代償要求($\chi^2(1)=0.3458, p=0.5565, n.s$)」、「非難($\chi^2(1)=1.1563, p=0.2822, n.s$)」、「代償要求($\chi^2(1)=0.714, p=0.3981, n.s$)」)。

以上の結果から、負担度が重い謝罪場面において韓国語母語話者が用いる「謝罪発話文」と「応答発話文」の相互作用の特徴として、謝罪する側は、多く用いる発話の差は若干あるが、非常に類似している使用傾向が見られ、「直接謝罪」と共に責任を認めながら、事態に言及したり、相手をなだめる発話のみ現れていた。謝罪される側は、肯定的な応答を多く用いているが、情報を求めたり、回避する発話は女性の方で、非難する発話は男性の方で多く現れている相違点は見られた。

以下では、本節で明らかにされた韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用の特徴を実際の発話例を見ながら考察していく。

7.5.2.2 負担度が重い場合の韓国語母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用の特徴

本節では、「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用をより詳細に分析するため、「謝罪発話文と肯定的な応答」、「謝罪発話文とニュートラルな応答」、「謝罪発話文と否定的な応答」に分けて、韓国語母語話者の相互作用の特徴を比較しながら記述していく。

1) 「謝罪発話文と肯定的な応答」の韓国語母語話者の特徴

「明示的な受諾」として多く用いられた言葉は、韓国語男性の場合、「아니(야)(いえ、いや) (5 例)」、「괜찮아(大丈夫)(3 例)」、「謝罪する側の謝罪状況を理解し受け入れることを示す発話(2 例)」等、韓国語女性の場合、「謝罪する側の謝罪状況を理解し受け入れること

を示す発話(3例)」、「괜찮아(大丈夫、いいよ)(4例)」、「아니(야)(いえ、いや)(3例)」、「그래(わかった)(1例)」等である。負担度が重い謝罪場面では、受け入れる意を示す明示的な受諾の言葉と、これらの明示的な受諾の言葉は用いていないが、謝罪する側が持ち出した謝罪内容を受け入れる意を示す発話が現れている。

<会話例 7-26> 負担度が重い場合の韓国語男性の肯定的な応答①

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
92	KM03	미안해,&,,(ごめん,&,)	謝罪
93	KM03	생각이 짧았어.(軽率だった。)	責任認め
94	KM04	어, 그래 그러면은 나중에 또 그 사람한테 연락해서, 알바 구해지면은 더 일찍 그만둘 수 있으면 그만두게 해 줄께. (うん、そしたら 後でまたあの人に連絡して、人決まったらもっと早く 辞めれるように言っとく。)	受諾+譲歩

<会話例 7-27> 負担度が重い場合の韓国語女性の肯定的な応答①

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
111	KF13	<미안>{>}해. (<ごめん>{>}ね。)	謝罪
112	KF14	응 괜찮아, 그럴 수도 <있지>{>}{<<웃음>}. (うん、いいよ、そういう事もくあるよね){<<笑い>}。)	受諾+譲歩

<会話例 7-26>と<会話例 7-27>は、「譲歩」と「明示的な受諾」が一つの発話文に現れた例であるが、<会話例 7-26>は、KM03が、「미안해(ごめん)」と謝罪した後、自分の責任を認める発話を行い、KM04は、KM03が辞めることができるよう協力することに言及し受諾しながら、「알바 구해지면은 더 일찍 그만둘 수 있으면 그만두게 해 줄께(人決まったらもっと早く辞めれるように言っとく)」と更なる譲歩の発話をし、謝罪内容を受け入れることを示している。<会話例 7-27>は、謝罪する側であるKF13が「미안해. (ごめんね。)」と謝罪すると、謝罪される側であるKF14は、「괜찮아(いいよ)」と「그럴 수도 있지(そういう事もあるよね)」と明示的な受諾と共に相手に対する理解を示している譲歩発話を同時に行いながら、積極的に受け入れることを示している。負担度が重い謝罪場面の「謝罪発話文と応答発話文」のやりとりで、一番互いのフェイスを配慮している「謝罪-軽減語」であると言える。

<会話例 7-28> 負担度が重い場合の韓国語女性の肯定的な応答②

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
30	KF19	응 미안.(うん、ごめん。)	謝罪

31	KF20	어.(うん。)	非明示的な受諾
----	------	---------	---------

<会話例 7-28>は、簡単なやりとりであるが、KF19 が、「미안(ごめん)」と謝罪すると、KF20 は、「うん」と言って非明示的に受け入れることを示している。「非明示的な受諾」は、韓国語女性のみにも現れ、韓国語男性では、負担度が軽い場合と重い場合共に、「非明示的な受諾」の応答は見られなかった。

「謝罪発話文」に対する「肯定的な応答」は、謝罪する側に対する配慮であるため、「謝罪－軽減語」として働いているが、謝罪内容が重いため、直ちに、受け入れる意は示さず、互いのやりとりが行われてから、受け入れる意を示す言葉を用いている。

2) 「謝罪発話文とニュートラルな応答」の韓国語母語話者の特徴

「ニュートラルな応答」は、男性よりは女性の方で多く現れていた。

<会話例 7-29> 負担度が重い場合の韓国語男性のニュートラルな応答

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
12	KM05	아-, 미안하다 진짜.(あー、ごめん、マジで。)	謝罪
13	KM06	이유가 뭔데?. 理由は?。	情報求め

<会話例 7-29>は、KM05 が「진짜(マジで。)」と強調しながら「ごめん」と謝罪しており、KM06 その理由を尋ねている。

<会話例 7-30> 負担度が重い場合の韓国語女性のニュートラルな応答

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
9	KF09	조금 힘든 것 같은데(어), &,,(ちょっと大変なので(うん)&,)	事態言及
10	KF09	그래서 아 진짜 미안한데(어)&,, (だからあー本当にすまないけど(うん)&,)	謝罪
11	KF09	그거를 이제 바꿀까 하는데…. (それをもう変えようかなと思うけど…。)	事態言及
12	KF10	음음-. (うんうんー)。	回避(感嘆詞)

<会話例 7-30>は、KF09 は、紹介してもらったバイト先が大変であることに言及してから「미안한데(すまないけど)」と謝罪し、その後、バイト先を変えようとする意向を述べている。これを受け、KF10 は、受け入れるかどうかは示さず、「うんうんー」のみの反応を見せている。「謝罪発話文」に対する「ニュートラルな応答」は、「謝罪」により崩れた謝罪する側のフェイスを立てるための働きを行っていないため「謝罪－軽減語」として機能できない非優先応答であると言えよう。

3) 「謝罪発話文と否定的な応答」の韓国語母語話者の特徴

非難発話文について見てみると、韓国語男性の場合「辞めたいこと自体に対して非難する発話(6例)」、「自分の立場の大変さや自分の努力等を挙げて非難する発話(1例)」等が見られ、韓国語女性者の場合、「辞めたいこと自体に対して非難する発話(4例)」、「自分の立場の大変さや自分の努力等を挙げて非難する発話(1例)」等が見られた。「否定的な応答」は、女性より男性の方で2倍程度多く用いられている。

<会話例 7-31> 負担度が重い場合の韓国語男性の否定的な応答

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
14	KM07	아-, 진짜 미안한데 &, (あー、マジでごめん&,)	謝罪
15	KM07	더 좋-은- 알바가 있어가지고=. (もっというバイトがあつて=。)	事態言及
16	KM08	=아, 내가 그걸 어떻게[강조하듯이], 그걸 어떻게 넣어줬는데 그 아르바이트<를><[추궁하듯이]. (=あ、俺があそこどうやって[強調するように]、あそこにたので入れてやったのに、あのバイト<を><[責めるように].)	非難

<会話例 7-32> 負担度が重い場合の韓国語女性の否定的な応答

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
48	KF13	어(응) 그래서 내가 너 얼굴있어서&,, (うん(うん)それで、あなたの面子もあるし&,)	責任認め
49	KF13	아-좀 미안하긴 한데... (あー、ちょっと悪いとは思うけど...)	謝罪
50	KF14	아 그런데 어딴어 진짜<웃음>. (ちょっと、そういうのってないよ、本当<笑い>。)	非難

<会話例 7-31>と<会話例 7-32>は、謝罪に対し非難する会話例であるが、<会話例 7-31>では、KM07が、「진짜 미안한데(あー、マジでごめん&,)」と謝罪した後、もっというバイトを見つけたことを述べている。これを受け、KM08は、自分の努力を強調しながら、KM07が持ち出した不愉快な状況を非難している。<会話例 7-32>は、謝罪する側であるKF13が、「얼굴(面子)」という言葉も使用しながら自分の責任を認める発話を行った後、「아-좀 미안하긴 한데... (あー、ちょっと悪いとは思うけど...)」と謝罪しているが、謝罪される側であるKF14は、KF13が持ち出した不愉快な状況に対して責めている。「謝罪発話文」に対する「否定的な応答」は、「謝罪」により既に崩れた謝罪する側のフェイスを更に侵害している応答であるため、「謝罪－軽減語」として全く機能していない非優先応答である。韓国語母語話者の親しい友人間の「謝罪発話文と応答発話文」は、男女共に5割程度の「謝罪－軽減語」を用いているが、男女共に5割程度は非優先応答を用いている。

7.6 負担度が重い場合の日韓母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」のまとめ

本節では負担度が重い場合の日本語母語話者と韓国語母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」を相互作用の観点から分析し、類似点や相違点等の特徴を考察した。

日本語母語話者は、男女共に、謝罪する側は、責任を認めながら謝罪する働きかけのみならず、自分が引き起こした不愉快な事態を説明したり、謝罪される側の怒りを抑えるための働きかけをする等、より複雑な「謝罪発話文」を用いていた。しかし、「直接謝罪」は男性の方で多く用いられ、「事態言及」と「なだめ」は女性の方で若干多く用いられた。謝罪される側は、「肯定的な応答」を用いる割合が、男性で4割程度、女性ではほぼ6割程度であり、「明示的な受諾」以外の「肯定的な応答」は男性より女性の方で多く用いられ、特に、女性は「譲歩」の「応答発話文」を多用する傾向が見られた。しかし、「肯定的な応答」を男性より多用していた女性は、実際の会話のやりとりからでは謝罪内容が受け入れないのが半分も占めており、女性の「肯定的な応答」は若干形式的な面があるのではないかと考えられた。「ニュートラルな応答」は、女性の方で多く用いられ、「否定的な応答」は、男性の方がほぼ3倍程度多く用いていた。負担度が重くなると、侵害された自分のネガティブ・フェイスを守るための働きかけも積極的に行われ、フェイス侵害度が高い発話も多く用いられていると考えられた。

次に、韓国語母語話者は、日本語母語話者と同様に、男女共に、謝罪する側は、責任を認めながら謝罪する働きかけのみならず、自分が引き起こした不愉快な事態を説明したり、謝罪される側の怒りを抑えるための働きかけをする等、より複雑な「謝罪発話文」を用いていた。しかし、「直接謝罪」は男性の方で多く用いられ、「責任認め」、「事態言及」、「なだめ」は女性の方で多く用いられていた。謝罪される側は、「肯定的な応答」を用いる割合が、男女共に、約5割程度であり、「ニュートラルな応答」は、女性の方で多く用いられ、「否定的な応答」は男性の方が2倍以上多く用いられていた。女性は情報を求めながら問題になっている不愉快な事態を把握しようとする働きかけを、男性は自分の不快な感情を謝罪する側に直接に伝達しようとする働きかけを多く用いる傾向があるのではないかと考えられた。

7.7 「謝罪発話文と応答発話文」に関するまとめ

本章では、謝罪談話内において謝罪する側の「謝罪定型表現」が用いられた発話(謝罪発話文)やその直後に来る謝罪される側の応答(応答発話文)を中心に、「謝罪行動」という発話行為レベルの相互作用を分析し考察を行った。

本研究の会話データを基に、「謝罪発話文」の意味公式として、「直接謝罪」、「責任(責任認め、責任否認、不満表明)」、「状況説明(事態言及、理由言及、対処行動言及)」、「なだめ」、「代償言及」、「自制の約束」の6つを立て、「応答発話文」の意味公式として、「受諾(明示的な受諾、非明示的な受諾)」、「譲歩」、「情報求め」、「回避(話題転換、感嘆詞)」、「非難」、「代償要求」の6つを立て、分析を行い考察した。

まず、負担度が軽い場合と負担度が重い場合に現れる日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」を全体的に分析し考察を行った。負担度が軽い場合には、日韓母語話者共に、「直接謝罪」や「責任認め」を多用し謝罪しているが、負担度が重い謝罪場面では、日韓母語話者共に、「直接謝罪」と共に「責任認め」、「事態言及」、「なだめ」もかなり用いており、負担度が重くなると、より多様な発話と共に「謝罪定型表現」を用いている共通点が見られた。つまり、負担度が重くなればなるほど、自分のフェイスを守りたいという欲求と相手のフェイスを侵害したくない欲求が複雑に絡み合っ、簡単に責任を認めながら謝罪することより、事態を言及したり、相手をなだめたりしながら、謝罪する発話が多く用いられていると考えられた。一方、「応答発話文」の日韓母語話者の使用傾向は、共通性があまり見られず、相違している使用傾向を見せていると考えられた。しかし、負担度が軽い謝罪場面では、「直接謝罪」は、日韓男性より日韓女性の方で多く用いられているが、「責任関連」は、日韓女性より日韓男性の方で多く用いられていた。「状況説明」は、男女による差はあまり見られず、韓国語母語話者より日本語母語話者が若干多く用いていた。「なだめ」は、韓国語女性のみ現れており、「代償言及」と「自製の約束」は、韓国語男性で若干多く現れていた。一方、「謝罪発話文」に対する「肯定的な応答」は、韓国語母語話者が3割程度であるのに対し、日本語母語話者は6割程度と、韓国語話者の2倍程度多く用いているのがわかった。「謝罪発話文」に対する「ニュートラルな応答」は、日本語母語話者では女性の方で、韓国語母語話者は男性の方で多く用いられていた。「謝罪発話文」に対する「否定的な応答」は、使用割合が最も少ない日本語女性に比べ、韓国語男性は5倍以上多く用いているのがわかった。また、負担度が重い場合には、相違点はあまり見られず、日韓母語話者で類似している点が多く現れていた。「肯定的な応答」を用いる割合は、日本語男性で4割程度、日本語女性でほぼ6割程度であり、韓国語母語話者では男女とも5割程度であった。「ニュートラルな応答」は、日韓共に女性が多く用いていたが、「否定的な応答」は日韓共に男性が多く用いていた。

次に、負担度が軽い場合の日韓母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用の特徴について見てみると、日本語母語話者は、男女共に、謝罪する側は、主に、責任を認めながら謝罪する簡単な働きかけを行っていた。しかし、日本語男性は、「直接謝罪」と共に、不可避な状況による遅刻であることを述べたり、謝罪される側の過失に関する不満を表明したりする発話を用いており、日本語女性は、何かを奢ることに言及する発話を若干多く用いたりする等の相違点が見られた。謝罪される側は、日本語男性は、「謝罪」に対して、相手の侵害されたフェイスを立てるため働きかけているが、自分の不愉快な気持ちも直接に表したり、フェイス侵害度が高い「非難」もかなり用いていた。しかし、日本語女性は「謝罪」に対して、主に、相手の侵害されたフェイスを立てるため働きかけており、フェイス侵害度が高い発話は避けようとする傾向が見られた。一方、韓国語母語話者は、男女共に、謝罪する側は、主に、「直接謝罪」のみを用いたり、責任を認めながら謝罪する発話を多用する傾向があった。しかし、韓国語男性は、不可避な状況による遅刻であることを

述べたり、謝罪される側の過失に関する不満を表明したり、自分の過失の代わりに何かを奢ることに言及したりする発話を多く用いており、韓国語女性は、遅れた理由を述べたり、謝罪される側の怒りを緩和させるための発話を用いたりする傾向が強いといった相違点が見られた。韓国語母語話者の謝罪される側は、負担度が軽い謝罪場面でも、謝罪される側が更なる情報を求めたり、非難する発話を多用するという傾向が見られ、「謝罪」に対して、相手の侵害されたフェイスを立てるため働きかけているが、フェイス侵害度が高い「非難」もかなり多用するという傾向が見られた。

最後に、負担度が重い場合の日韓母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用の特徴について見てみると、日本語母語話者の謝罪する側は、男女共に、責任を認めながら謝罪する働きかけのみならず、自分が引き起こした不愉快な事態を説明したり、謝罪される側の怒りを抑えるための働きかけをする等、より複雑な「謝罪発話文」を用いていた。しかし、「直接謝罪」は男性の方で多く用いられ、「事態言及」と「なだめ」は女性の方で若干多く用いられた。謝罪される側は、「肯定的な応答」を用いる割合が、男性で4割程度、女性でほぼ6割程度であり、「明示的な受諾」以外の「肯定的な応答」は日本語女性の方で多く用いられていた。「ニュートラルな応答」は、日本語女性の方で多く用いられ、「否定的な応答」は、日本語男性の方がほぼ3倍程度多く用いていた。負担度が重くなると、侵害された自分のネガティブ・フェイスを守るための働きかけも積極的に行われ、フェイス侵害度が高い発話も多く用いられていると考えられた。一方、韓国語母語話者の謝罪する側は、男女共に、責任を認めながら謝罪する働きかけのみならず、自分が引き起こした不愉快な事態を説明したり、謝罪される側の怒りを抑えるための働きかけをする等、より複雑な「謝罪発話文」を用いていた。しかし、「直接謝罪」は韓国語男性の方で多く用いられ、「責任認め」、「事態言及」、「なだめ」は韓国語女性の方で多く用いられていた。謝罪される側は、「肯定的な応答」を用いる割合が、男女共に、約5割程度であり、「ニュートラルな応答」は、韓国語女性の方で多く用いられ、「否定的な応答」は韓国語男性の方が2倍以上多く用いられていた。女性は情報を求めながら問題になっている不愉快な事態を把握しようとする働きかけを、男性は自分の不快な感情を謝罪する側に直接に伝達しようとする働きかけを多く用いる傾向があるのではないかと考えられた。

すなわち、負担が重くなると、相手のフェイスや自分のフェイスを総合的に考え、「フェイス均衡」のため、互いがより積極的に働きかけていることが明らかになった。

本研究は、「総合的な会話分析」のアプローチに従い、第5章ではグローバルな観点から、「謝罪談話」を分析対象とし、その展開や構造の分析を行い考察した。第6章ではローカルな観点から、「謝罪行動」を分析対象とし、そのやりとりを分析し考察した。更に、本章では、よりローカルな観点である「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用を分析し考察した。「謝罪一反応する」という言語行動を正確かつ明確に解明していくためには、これらの観点から総合的に分析し解釈する必要があると言えよう。次の8章では本研究の分析結果を「ディスコース・ポライトネス理論」の観点から総括する。

第8章 ディスコース・ポライトネス理論の観点からの考察

本章では、前章の「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」の分析結果を宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008)の「ディスコース・ポライトネス理論」の観点から総合的に考察を行う。

熊谷(2008)は、依頼や謝罪をしている人のフェイスが危うくなったら、相手はそれをそのまま捨て置かず、救う行動、すなわち承認や許しのような行動に出る、このような暗黙のメカニズムが前提として存在するからこそ、依頼や謝罪において話し手はリスクの高い働きかけを行えるのではないだろうかと述べている。この報告の観点から、以下の〈会話例 8-1〉を見ると、謝罪する側である KF11 が謝罪しながら遅れた理由を説明してから、ライン番号 15 で、「미안해[목소리가 점점 작아짐].(ごめん[声が段々小さくなる].)」と自ら自分のフェイスを損なう謝罪発話をする、相手は「아니야, <웃으면서>그렇게 말을 하면.(いやいや、<笑いながら>そのように言えば.)」と他人のフェイスを尊重し救おうとしているのがわかる。

〈会話例 8-1〉負担度が軽い場合の韓国語女性母語話者の会話例

ライン番号	話者	発話内容
15	KF11	미안해[목소리가 점점 작아짐].(ごめん[声が段々小さくなる].)
16	KF12	아니야, <웃으면서>그렇게 말을 하면.(いやいや、<笑いながら>そのように言えば.)

このように、謝罪される側の承認や許しにより、フェイスを救おうとする行動が極めて重要であるが、謝罪する事柄の深刻さや内容によって、フェイスを侵害することが選択されたり、あるいは、フェイス侵害と尊重が同時に起こる場合もありうるし、話し手と聞き手のフェイスに関する概念が複雑かつ微妙であると考えられる。

第2章の先行研究の2.4.5で概観したように「ディスコース・ポライトネス」とは、「一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体である(宇佐美 2001、2002、2003b ; Usami 2002)」と定義される。「ディスコース・ポライトネス理論」には、「ディスコース・ポライトネス」、「基本状態」、「有標ポライトネスと無標ポライトネス」、「有標行動と無標行動」、「ポライトネス効果」、「見積もり差(De 値)と、ポライトネス行動の量的適切性、ポライトネス効果の関係」、「相対的ポライトネスと絶対的ポライトネス」(詳細は、2.4.5節(p42-p47)を参照されたい)という7つの鍵概念がある。これらのディスコース・ポライトネス理論の観点から、日韓母語話者に

における「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」の基本状態を同定し、この基本状態からの離脱により生じる有標行動を考え、そこから引き起こされるポライトネス効果について考察を試みる。

8.1 「謝罪談話」における日韓母語話者の基本状態とポライトネス効果

本節では、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面の日韓母語話者の「謝罪談話」における基本状態を同定し、そのポライトネス効果について考察する。

負担度が軽い場合は、謝罪内容を全て受け入れることで収束していたが、「しょうがない、大丈夫、いいよ、いやいや」等の明示的かつ直接的に受け入れる会話は、日本語男性は 16 会話中 15 会話、日本語女性は 16 会話中 14 会話、韓国語男性は 16 会話中 12 会話、韓国語女性は 16 会話中 13 会話であった。本研究で設定した負担度が軽い謝罪場面では、明示的かつ直接的に受け入れる意を示すことが基本状態であり、非明示的かつ間接的に受け入れる意を示すことは有標行動として捉われ、「マイナス効果」あるいは「ニュートラルな効果」が生まれると解釈できる。

次に、負担度が軽い場合の謝罪談話を構成する各談話を分析した結果、①「核談話」のみ、あるいは、「核談話」が一回現れてから「挿入談話」または「後続関連談話」後に会話が終了する構造、②何回か現れる「核談話」と「核談話」の間に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れてから会話が終了する構造、③「核談話」が連続して現れてから会話が終了する構造が、日韓母語話者で共通的に現れた構造である。

しかし、韓国語男性では、④「交渉談話」後に「核談話」が現れ、その後、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れてから会話が終了する構造がある。また、韓国語母語話者では、⑤「核談話」後に、「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が連続して現れてから会話が終了する構造もある。④と⑤の構造は、韓国語母語話者のみに見られた構造である。

つまり、負担度が軽い謝罪場面における日本語母語話者の謝罪談話を構成する各談話の基本状態は、①「核談話⇒(「挿入」/「後続」)」、②「核談話⇒「挿入」/「後続」⇒核談話⇒「挿入」/「後続」⇒核談話⇒「挿入」/「後続」」、③「核談話⇒核談話⇒核談話⇒核談話⇒(「挿入」/「後続」)」の 3 つに同定でき、日本語男性は①50% - ②19% - ③31%(合計 100%)で、日本語女性は①44% - ②31% - ③25%(合計 100%)であった。一方、韓国語女性の謝罪談話を構成する各談話の基本状態は、①、②、③と、④「核談話⇒「挿入」/「後続」⇒「挿入」/「後続」」が加えられ、韓国語女性①56% - ②25% - ③6% - ④13%(合計 100%)であった。しかし、韓国語男性の謝罪談話を構成する各談話の基本状態に、③「核談話⇒核談話⇒核談話⇒(「挿入」/「後続」)」は現れず、更に、⑤「「交渉談話」⇒核談話⇒核談話⇒(「挿入」/「後続」)」が加えられ、韓国語男性は①31% - ②13% - ④6% - ⑤50%(合計 100%)であった。

①と②の構造は、日韓母語話者の男女で共通的に現れており、基本状態として同定できる。しかし、韓国語母語話者より、日本語母語話者で多く現れた構造は、③「核談話⇒核

談話⇒(核談話⇒核談話)⇒(「挿入」/「後続」)であるが、「核談話」を連続して表すことは、日本語母語話者では、適切行動であり、ポライトネス効果は、プラス、あるいは、ニュートラルな効果を生むと解釈できるが、韓国語母語話者では、許容できるずれの幅を超え、過剰行動として捉われる恐れがあり、マイナス効果を引き起こす場合もあると解釈できる。一方、韓国語男性のみに現れた「交渉談話」⇒核談話⇒核談話⇒(「挿入」/「後続」)であるが、この「交渉談話」のやりとりは、謝罪する側と謝罪される側が互いを責め続けるやりとりを行っている会話で、日本語母語話者と韓国語女性では、許容できるずれに至らない過少行動として捉われる恐れがあり、マイナス効果を生むと解釈できる。

次に、負担度が重い場合の分析結果であるが、負担度が重い場合には負担度が軽い場合と違い、「核談話」が現れていない現象が起こっていた。日韓母語話者の各々16会話中、日本語男性で1会話(6%)、日本語女性で4会話(25%)、韓国語男性で1会話(6%)、韓国語女性で3会話(19%)が現れ、合計9会話であった。日本語男性の会話は、会話終了の際、「謝罪定型表現」が一回現れていたが、会話が収束するまで一回も「核談話」が現れていなかった。この9会話中、謝罪内容が受け入れられる会話は、韓国語男性1会話、韓国語女性2会話であるのに対し、日本語母語話者ではすべて謝罪内容が受け入れられない会話であった。つまり、負担度が重くなると「核談話」が現れていない現象が日韓母語話者で共通して見られ、一般的に「核談話」が用いられる「謝罪談話」の有標行動として捉えることができると考えられた。しかし、日本語母語話者では「核談話」が現れない有標行動は、「過少行動でありマイナス効果が生まれているが、韓国語母語話者では「核談話」が現れない有標行動が必ずしもマイナス効果を生むと判断しにくいと考えられる。言い換えれば、負担度が重い謝罪場面で、「核談話」の有無により敏感に反応しているのは日本語母語話者ではないかと考えられる。「ディスコース・ポライトネス理論」の「無標ポライトネス」は、特定の状況で「あって当たり前で、それが現れないときに初めてそれがないことが意識され、ポライトではないと捉えられる」というようなタイプのポライトネスを指しているが、謝罪場面では「謝罪定型表現」が用いられる「核談話」が現れることが、あって当たり前のことであろう。従って、「核談話」が現れていないことは、「有標ポライトネス」であり、有標行動として捉われ、ポライトネス効果が生まれるが、日本語母語話者では、友人間でも「マイナス効果」として解釈されるが、韓国語母語話者では、友人間では「マイナス効果」あるいは「ニュートラルな効果」として解釈することも可能であると考えられる。

また、負担度が重い場合は、負担度が軽い場合と違い、日本語母語話者あるいは韓国語母語話者のみ用いる構造は見られず、現れる展開や構造が複雑で多様であり、さらに、謝罪される側が謝罪する側の謝罪内容を受け入れたり、受け入れなかったりする現象が現れるため、受け入れる場合と受け入れない場合に分類し説明した。また、「前置き談話」、「交渉談話」、「核談話」、「後続関連談話」、「挿入談話」が現れるか現れないかの観点で考えると全体的な類型が見られないと判断し、日本語母語話者と韓国語母語話者における謝罪談

話の全体的な類型を分析する際に「交渉談話」や「核談話」のやりとりに重点をおいて分析を行った。

まず、受け入れる場合は、1回目の「交渉談話」で受け入れる場合や、2回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れる場合は、韓国語母語話者の方で、特に、女性の方で多く現れる構造であった。3回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れる場合や、4回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れる場合は、日韓による差はあまり現れていないが、男性の方で多く現れる構造であった。しかし、5回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れる場合は、現れる会話の数は少なかったが、日韓による差はあまり見られないが、女性の方で多く現れている傾向が伺われた。さらに、7回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れる場合は、日本語男性で1会話しか現れていなかった。受け入れる場合は、日本語男性は16会話中11会話、日本語女性は16会話中8会話、韓国語男性は16会話中10会話、韓国語女性は16会話中14会話であったが、総計43会話中1回目から4回目の段階で受け入れられる会話は、37会話であり、約9割を占めていた。一方、5回目と7回目の段階で受け入れられる会話は、6会話であり、約1割であった。つまり、本研究で設定した負担度が重い謝罪場面では、「交渉談話」あるいは「核談話」のやりとりが1回目から4回目行ってから受け入れる意を示すことが、友人間の会話の基本状態として同定できるのではないかと考えられた。言い換えれば、「交渉談話」あるいは「核談話」のやりとりをかなり行ってから、ようやく、受け入れる意を示すことは、友人間の会話の基本状態から離脱する有標行動であり、ポライトネス効果が生まれると予想される。

その反面、受け入れない場合は、1回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れない場合の展開は、日本語母語話者、特に、女性の方で多く現れた構造であり、1回目と2回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れない場合は、日韓による差はあまり見られないが、男性の方で多く現れていた構造である。次に、1回目と2回目と3回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れない場合の展開は、日韓による、男女による差があまり見られず、1回目と2回目と3回目と4回目の「交渉談話」あるいは「核談話」で受け入れない場合は、日本語男女母語話者で1会話ずつ現れていた構造である。受け入れない場合は、日本語男性は16会話中5会話、日本語女性は16会話中8会話、韓国語男性は16会話中6会話、韓国語女性は16会話中2会話であったが、1回目から3回目の段階で受け入れられない会話は、総計21会話中19会話であり、約9割を占めていた。さらに、受け入れない場合の特徴は、本題に入る際「交渉談話」のやりとりが行われている会話が、21会話中15会話であり、約7割であった。つまり、受け入れない場合の基本状態は、「交渉談話」を用いてやりとりされる場合が多く、1回目から3回目の段階で自分の意向を変更したり、保留する意を示すことであると考えられる。

負担度が重い場合は、謝罪内容が深刻であるため、まず、謝罪される側に受け入れられる場合と受け入れられない場合が現れ、また、「謝罪定型表現」を用いる「核談話」が現れない場合もあり、さらに、「交渉談話」や「核談話」のやりとりが簡単な場合と複雑な場合

が現れる等、多様かつ複雑な展開や構造を見せている。従って、多く現れた「受け入れられる場合」、「核談話」が現れる場合、「多く用いられている「交渉談話」や「核談話」の展開や構造」を基本状態として同定し、「受け入れられない場合」、「核談話」が現れない場合」「あまり用いられていない「交渉談話」や「核談話」の展開や構造」を有標行動として捉え、考察するとより明確なポライトネス効果を見出すことができると考えられる。

以下では、負担度が軽い場合と重い場合の日韓母語話者における「謝罪談話」の有標行動とポライトネス効果を会話例を見ながら考察していく。

8.1.1 負担度が軽い場合の「謝罪談話」における日韓母語話者の有標行動とポライトネス効果

ここでは、上記の負担度が軽い場合の結果を基に、日韓母語話者の基本状態から離脱された有標行動とポライトネス効果について考察する。

負担度が軽い場合は、受け入れる意を明示的かつ直接的に表すことが基本状態であり、非明示的かつ間接的に受け入れる意を示すことは有標行動として捉えられる。以下は、その会話例である。

<会話例 8-2> 「非明示的かつ間接的に受け入れている」日本語男性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
38	JM31	うん、遅れちゃったんだけど(うん)、&,、	核談話
39	JM31	電車動いて、乗って、降りて、&,、	
40	JM31	今、20分遅れちゃった、&,、	
41	JM31	ごめん。	
42	JM32	あー。	
43	JM31	まあ20分位だから、どうってことじゃないんじゃない??。	
44	JM32	うーん、うんうん。	
45	JM31	そう、そう思わない?<笑い>。	

<会話例 8-2>は、会話の終わりの部分であるが、JM31は、遅れた責任を認めながら状況説明をし、さらに、「ごめん」という「謝罪定型表現」を用いて謝罪しているが、JM32は、明示的に受け入れる意を示さず、反応している。すると、JM31は、不満そうな発話しているが、JM32は、最後まで「うーん、うんうん」と応答し、明確に受け入れる意は示していない。負担度が軽い場合は、不可避な状況による遅刻で、さらに、謝罪される側にも過失がある謝罪場面であるため、明示的に受け入れる意を示す会話が多く現れていた。にもかかわらず、最後まで、明確に受け入れる意を示さないことは、許容できるずれ幅に至らない過少行動であり、失礼、不快等の感情を引き起こし、マイナス効果が生じると解釈

できる。しかし、日本語母語話者より「非明示的かつ間接的」に受け入れる意を示す会話が若干多く現れた韓国語母語話者では、「マイナス効果」あるいは「ニュートラルな効果」が生まれると解釈することも可能であると考えられる。

また、韓国語母語話者に比べ、日本語母語話者、特に、日本語女性で多く現れたのは、「核談話」が連続して現れる傾向である。以下の〈会話例 8-3〉は、「核談話」と「核談話」の間に「後続関連談話」あるいは「挿入談話」が現れた会話であるが、「核談話」が多く用いられている。韓国語母語話者の基本状態から考えると、過剰行動として捉えられる恐れがあると考えられる。

〈会話例 8-3〉 「核談話」が多く現れている日本語女性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
1	JF09	ごめん、もくもく「JF10 愛称」。	核談話
2	JF10	「JF09 名」ちゃんどうしたの?<笑い>。	
3	JF09	なんか途中でね、でんちゃ、でん、でんちゃとか言っちゃった<笑い>,,	
ライン番号 4~22 省略			
23	JF09	=本当ごめん、<本当###><く>。	核談話
24	JF10	<笑いながら>全然、全然><く>。← <u>受諾</u>	
25	JF09	メールとかすればよかったんだけど<笑い>、繋がらねーとか思ってなんかすごい糞せちゃって。	
26	JF10	大丈夫、私も忘れてたし。	
27	JF09	本当、本当ごめん。	
28	JF10	大丈夫、大丈夫。← <u>受諾</u>	
ライン番号 29~36 省略			
37	JF09	<電車だから(うん)><うん、まじで(うん)、本当ごめんね。>	核談話
38	JF10	<笑いながら>大丈夫、<私もよく遅れるから><く>。← <u>受諾</u>	
39	JF09	<間に合わせようと思った><く>。	
ライン番号 40~46 省略			
47	JF10	それより上がいるから,,	核談話
48	JF09	<本当ごめん><く>。	
49	JF10	<20分ぐらい><く>ならいける。← <u>受諾</u>	
50	JF09	もう絶対しないから。	
51	JF10	<笑いながら>まじで、そこまでおいちゃね。	
52	JF09	本当ごめん。	
53	JF10	全然大丈夫。← <u>受諾</u>	

<会話例 8-3>を見ると、JF09 は、「ごめん」という「謝罪定型表現」から会話をスタートし、JF10 は、遅れた理由を求めている。これらのやりとりが行われてから、ライン番号 23 で、JF09 は、再度、謝罪しており、JF10 は、「全然、全然」と、明示的に受け入れる意を示している。また、ライン番号 27 で、JF09 は、再度、謝罪しており、JF10 は、「大丈夫、大丈夫」と、明確に受け入れる意を示している。しかし、ここで会話は終了せず、ライン番号 37 で、JF09 は、再度謝罪し、JF10 は、「<笑いながら>大丈夫、<私もよく遅れるから>{<}。」(ライン番号 38)と受諾し、会話の終わりの部分にも、ライン番号 48 と 52 で、謝罪しており、JF10 は、「<20 分ぐらい>{>}ならいける。」(ライン番号 49)、「全然大丈夫。」(ライン番号 53)と、再度、受け入れる意を示している。更に、ライン番号 50 で、JF09 は「もう絶対しないから。」と、今後のことまで言及しており、JF10 は、「<笑いながら>まじで、そこまでおいちゃね。」と、積極的に受け入れることを示している。

基本状態から考えると、日本語母語話者、特に、日本語女性では、これらの謝罪談話の展開は、見積もりとのずれ幅が許容範囲に収まり、適切行動として捉われるかもしれないが、韓国語母語話者では、これらの謝罪談話の展開は、見積もりとのずれ幅が許容範囲を超え、過剰行動と捉えられると考えられる。つまり、親しい友人関係で、あまりにも礼儀正しく謝罪を繰り返すことは、近づきたいという相手のポジティブ・フェイスを侵害する行為で、マイナス効果を引き起こすだろう。特に、韓国語女性より韓国語男性の方で、これらの展開のポライトネス効果はマイナスになると考えられる。

次に、「核談話」が現れる前に「交渉談話」が現れている韓国語男性の会話例である。

<会話例 8-4> 「核談話」が現れる前に「交渉談話」が現れている韓国語男性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
1	KM16	야-, 너 왜 이제와[→].(お前、何で今来るの[→].)	交渉談話
2	KM15	어우 야, 그게 좀,《잠시간격》그게 오다가 지하철이 멈춰서.(あう、それがちょっと、《少し間》それが来る途中地下鉄がとまっちゃって。)	
ライン番号 3~19 省略			
20	KM15	근데 너무 안 가니깐 일단은 좀 늦은 것 같아가지고 일단은 전화를 할려고 했는데(어) 전화를[↑] 안 받았어, 니가=. (だけどあまりにも行かないので、ちょっと遅れそうで、一応連絡しようとしたけど(うん) 電話を[↑]受けなかった、お前が=。)	
21	KM16	=야-, 전화가 안 왔-다-고-[강조하는 듯한 목소리로]. (=お前、電話が来な-かった-の-[強調するような声で].)	
22	KM16	이, 그, 너 지난 번에도 그러더라, 야=(.お前、前にもそうだったじゃん=。)	
23	KM16	=전화가 안 왔어, 전화가=(.電話が来なかったのよ、電話が。)	
ライン番号 24~30 省略			

31	KM15	《침묵 2 초》아이씨, 알았어, 내 미안한데, 야-. (《沈黙 2 秒》あーゆ、分かった、私が悪いけど、お前。)	核談話
32	KM15	《잠시간격》그래 씨-, 오늘 저녁은 내가 살께, 그럼 돼? (《少し間》そう、ちっしょ、今日の夕食は私が奢る,ならいい?。)	
33	KM16	《잠시간격》야, 저녁이 문제가 아니라, 니 기본자세가 야-사람이 <아무리 친구고><【.《少し間》お前、夕食の問題じゃないでしょ、お前の 基本姿勢がお前、人がくたとえ友だちだとし><【。)	
34	KM15	【<아-, 진짜><【그래가지고[↑] 내가 전화를 했는데, 전화를 니가 안 받더라니깐, 계속….(【<아-,本当><【だから[↑]私が電話したけど、君が 電話を受けなかったの、ずっと…。)	
35	KM15	내가 미안해가지고 전【.(私が悪いから電【。)	
36	KM16	【전화가 안 왔다고 전-화-가-아[흥분한 듯이 큰목소리로. (【電話来な かったのよ、電一話一が-[興奮したような大声で。)	
라인번호 37~47 省略			
48	KM16	아[↑] 그래 알았다 뭐-, 우리가 뭐 시발 데이트하러 온 것도 아니고 술 한잔 하러 온건데=. (아-[↑]そう分かった、まあ、私たちがもう-, ちっしょ、 デートしに来たのじゃなくて、一杯飲みに来てるじゃん=。) ←受諾	

<会話例 8-4>を見ると、KM16의 非難과 KM15의 状況説明의 やりとりから会話は始まり、KM16의 非難や KM15의 状況説明のやりとりが 라인번호 30 まで继续している「交渉談話」が行われる。「交渉談話」のやりとりでは、KM16가 KM15의 페이스를 全然配慮せず、乱暴な言葉で 페이스를 侵害しており、基本状态から考えると、見積もりとのずれ幅が許容範囲に至らない、過少行動と捉えられ、有標行動になると考えられる。라인번호 31 で、KM15 は、「《침묵 2 초》아이씨, 알았어, 내 미안한데, 야-.(《沈黙 2 秒》あーゆ、分かった、私が悪いけど、お前。)」と、ここで、初めて、「謝罪定型表現」が用いられる「核談話」が現れているが、KM15 の不満そうな言い方により、KM16 は、非難を继续しており、「내가 미안해가지고 전【.(私が悪いから電【。)」(라인번호 35)と KM15 は謝罪しながら状況説明をしようとしたが、KM16 の非難により遮られている。その後、ようやく、KM16 は、라인번호 48 で、「아[↑] 그래 알았다 뭐-(아-[↑]そう分かった、まあ、)」と受け入れる意を示している。謝罪により崩された謝罪する側のネガティブ・フェイスを回復するためには、謝罪される側の受け入れの表明が重要であろう。しかし、この会話例では、라인번호 48 で受け入れる意を示しているが、互いのフェイスを配慮するやりとりは殆ど行われていない。親しい韓国語母語話者、特に、男性の方で、俗語を用いた乱暴な言葉遣いのやりとりが多く現れる傾向があり、これらの展開は、韓国語女性と日本語母語話者の基本状态から考えると、許容できるずれ幅に至らない過少行動であり、失礼、不快等の感情を引き起こし、マイナス効果が生じると解釈できる。

66	KM13	23[스물셋][↑].(23[二十三][↑].)
67	KM14	예뻐?.(かわいい?)
68	KM13	그냥 그래, 그렇게 예쁘지 않아.(普通、そんなにかわいくはない。)

<会話例 8-5>を見ると、KM13の「謝罪発話文」から会話が始まる。その後、KM13の「否定的な責任関連発話文」、「状況説明発話文」、「過失修復発話文」と KM14の「事態確認発話文」、「非難発話文」のやりとりが行われる。ライン番号 49 で、KM14 は、明示的な受諾の意を表す「受諾発話文」は用いていないが、KM13の「過失修復発話文」を受け入れる「譲歩発話文」を発しており、間接的に受け入れることで会話は収束されている。しかし、ここで会話は終了せず、いきなり、KM14 は謝罪内容と関係がない「너 여자 친구는 안 보여주냐?(おまえ、彼女は何で見せてくれない?)」(ライン番号 54)という発話をし、ここから「挿入談話」のやりとりが行われる。「挿入談話」の内容をみると、KM13の彼女の年齢、外見、更に、二人の関係まで質問し答えながらやりとりされているのがわかる。友人間の雑談という韓国語母語話者の基本状態では、これらの個人的なやりとりは見積もりとのずれ幅が許容範囲に収まり、適切行動として捉えられるかもしれない。しかし、謝罪談話のやりとりが行われている場面では、見積もりとのずれ幅が許容範囲に至らない、過少行動と捉えられ、有標行動になると考えられる。特に、韓国語母語話者間の会話よりは、韓国語母語話者と日本語母語話者の会話では、さらに、過少行動と捉えられ、失礼、不快等の感情を引き起こし、マイナス効果が生じると解釈できるだろう。個人的な関心事をやりとりすることは、相手に近づきたいというポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであるが、文化により、状況により、誤解を生む可能性が高いため、注意すべきであろう。

以下では、負担度が重い場合の「謝罪談話」の有標行動とポライトネス効果について考察していく。

8.1.2 負担度が重い場合の「謝罪談話」における日韓母語話者の有標行動とポライトネス効果

ここでは、上記の負担度が重い場合の結果を基に、日韓母語話者の基本状態から離脱された有標行動とポライトネス効果について考察する。負担度が重い謝罪場面では、負担度が軽い謝罪場面と違い、「核談話」が現れていない現象が起こる。「謝罪場面」にも関わらず、「核談話」が現れていないのは、謝罪の基本状態から考えると、有標行動になり、ポライトネス効果を生むと解釈できる。以下の<会話例 8-6>は、その会話例である。

<会話例 8-6> 「核談話」が現れていない日本語女性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
3	JF17	「JF18 名」にあの一、紹介してもらったバイト今やってるんだけどさ(うん)、&,	

4	JF17	あの一、今日新聞でね(うん)、あの、時給が高くてもっと、え一、家からももうちょっと近い所に(うん)、バイト募集してるところがあって、で、あの一、ちょっと見付けちゃったから(うん)、そこに履歴書送ろうと思って(うん)、&,,
5	JF17	で、でも「JF18名」に相談、うん一、紹介してもらった所だから&,,
6	JF17	ちょっとどうしようと思って…。
7	JF18	うん一。
8	JF17	うん一、どうしたらいいかな?。
9	JF18	《少し間》うん一、でも、まだ初めて2ヶ月しか(うん一)経ってない(うん)、あと、やっぱなんだ、私、私が紹介っていうより、私がすごいお世話になっている(く笑い)その知り合いの人に(く)、,,
10	JF17	くそうだよ(く)、そう、(うん一)。(く)。
11	JF18	くそう(く)、頼んでまあ雇ってもらってるから(うん)、あん、なんかあんまり簡単に辞めちゃうとちょっとく微妙かな(く)、,,
12	JF17	くそうだよ(く)。
13	JF18	っていう感じも(うん一)するんだけど。
ライン番号 14~22 省略		
23	JF17	く時給が(く)高いのはね。
24	JF18	そうだよ(く)。
25	JF17	く魅力(く)的だよ(く)笑い=。
26	JF18	=そうだよ(く)。
27	JF18	どうせやるならね。
ライン番号 28~34 省略		
35	JF18	うん(うん)、と、そしたら(うん一)とりあえず、まああと1ヶ月位は(うん)、できればくつづけてみてもらって(く)、,,
36	JF17	くあーそうだね(く)。
37	JF18	で、うん、まあ、最終的に(うん)、ね、,,
38	JF17	くそうか(く)。
39	JF18	く別に(く)(うん)無理、無理強いとかなできないから(うん)、最終的には「JF17名」に決めてもらって(うん)、&,,
40	JF18	できれば後1ヶ月位続けて見て(うん)、&,,
41	JF18	本当にそれでもやっぱり、もう別のバイトの方がいいなって思えば(うん)、まあ、辞めてもらってもしようがない(うん)、&,,
42	JF18	もし1ヶ月続ける中でなんか他に(うん)、いい面とか見えてきたら、,,
43	JF17	あーくそうだね(く)。
44	JF18	く面白###(く)続けられるく可能性も(く)、,,

45	JF17	<まだ、まだ2ヶ月位だし>{ }。
46	JF18	そう、あるかもしれないから=。
47	JF17	=うん、とりあえず、まあ(うん)、まああと1ヶ月まあ(うん)ちょっと続けてみようかな。 ↑意向変更

<会話例 8-6>を見ると、JF17とJF18の「交渉談話」のやりとりが行われている。JF17は、状況を繰り返し説明しながら相手に理解を求めており、JF18は、非難はしているが、JF17の状況は理解していることを言及している。これらのやりとりが行われてから、ライン番号35から、JF18は、問題になっている事柄を解決するための発話を繰り返し行い、JF17は、自分の責任を認めているような発話をしてから、ライン番号47で、「=うん、とりあえず、まあ(うん)、まああと1ヶ月まあ(うん)ちょっと続けてみようかな。」と、最初の意向を変更している。

自分により引き起こされた問題に対して謝罪することは、「謝罪」という言語行動の基本状態であろう。しかし、負担度が重い謝罪場面では、謝罪場面にも関わらず「謝罪定型表現」が現れないという現象が起こる。これは、謝罪という基本状態からでは、見積もりとのずれ幅が許容範囲に至らない、過少行動と捉えられ、マイナス・ポライトネス効果を引き起こすと解釈できる。日本語母語話者では、これらの展開が、マイナス効果を生むが、韓国語母語話者では、マイナス効果のみならず、ニュートラル効果として解釈することも可能であると考えられる。韓国語女性の会話では、「核談話」が現れていない3会話中、代案を提示している2会話は、謝罪内容が受け入れられているが、代案を提示していない1会話は、謝罪内容が受け入れられないことで収束していた。つまり、「核談話」がなくても、代案等を提示し、自分の過失を修復しようとする会話では、マイナス効果ではなく、ニュートラル効果を引き起こしていると解釈することも可能であろう。「謝罪談話」で「核談話」を用いていないことは、本質的に謝罪される側のネガティブ・フェイスを侵害する行為である。しかし、負担度が重くなると、問題になっている事柄の解決に互いが集中しており、「謝罪定型表現」が現れていないことに対しても、許容範囲に収まる適切行動として受け入れるという現象が多くはないが観察された。特に、親しい友人間の会話という理由により、これらの現象が現れているのではないかと予想される。

以下の会話例は、「核談話」は現れていないが受け入れられている会話例である。

<会話例 8-7> 「交渉談話」と「挿入談話」が繰り返される韓国語男性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
18	KM19	《침묵 2 초》아니, 그래도 지금 내가 이것때문에 뺏기는 시간도 많고 거긴 너무 이제, 시간이 11 시반에 끝나면 집에 오면 벌써 12 시가 넘는단 말이야 <12 시 반>{ }【】. (《沈黙 2 秒》いや、だけど、今俺がその事で時間も結構使ってるし、あそこはも	交渉談話

		う、時間が 11 時半に終わって家来たら 12 時すぎるよ<12 時半><【。】	
19	KM20	<p>【】<아 근데><{> 야, 내가 솔직히 야, 그 뭐야, 점장님이 나보고 사람 있냐 그래서 니한테, 니 딱 생각해 갖고 니 물어봤잖아, 그때 내가(응).</p> <p>(【】<あ、でも><{> おまえ、俺がぶっちゃけ、おまえ、なんだ、店長が俺にいい子いるつつって、だからおまえに、おまえの事思っって聞いたじゃん、そんとき、俺が(うん。)</p>	
20	KM20	<p>《잠시간격》그러니깐 세, “3 개월 이상 할 애로 내가 데리고 오라”고 했는데 “아 알았다고 확실하 하는 애”라고 데리고 왔잖아 니, 근데 어떻게 해, 빙신아.(《少しの間》だから三、“3 カ月以上続ける人で連れて来い”つつたのに“あ、分かってます、ちゃんとするやつ”つつって連れて来たじゃん、おまえ、なのはどうする、このやろう。)</p>	
21	KM19	그【。(その【。】	
22	KM20	<p>【】내가 그, 내가 뭐가 돼, 나는 거기서 지금 또 지금도 알바 사람도 없다고 막 남한테도 맨날 갈구하고 그러는데 니, 그러면 씨-, 내 입장은 어떻게 되냐?.</p> <p>(【】俺が、その、俺の立場はどうなるのよ、俺はあそこで今、また今も人いないといつも言ってるのに、おまえ、そしたら、ちくしょう、俺の立場はどうなるのよ?。)</p>	
23	KM19	<p>야, 일단 뭐, 뭐 시키면서[↑] 지금 여기 우리 뭐 먹으러 왔잖아.</p> <p>(あ、とりあえずなんか、なんか頼んで[↑]今、ここ、俺たち飲みに来たんだらう。)</p>	挿入談話
24	KM20	《잠시간격》그래, 시켜.(《少しの間》うん、頼んで。)	
25	KM19	여기요[↑].(すみません[↑]。)	
ライン番号 26~83 省略			
84	KM19	<p><너는 너는><{> 더더욱 그렇게 묶여 있는 게 있으니까 그렇지만 나는, 난 뭐 별로 실속도 없었잖아.<{> (おまえは、おまえは)<{> 이っそうそうやってつながっているからそうだけど、俺は、俺には別にいいこともなかったじゃん。)</p>	交渉談話
85	KM20	그게 중요한 게 <아니잖아...><{>.(それが問題ではないだらう...)<{>。)	
86	KM19	<아 뭐 그렇지><{>.<{> (あ、まあ、そうだけど)<{>。)	
87	KM20	아이-씨-그【。(あーちょっと、その【。】	
88	KM19	<p>【】아 예 예 여기 주세요, 콜라 여기.</p> <p>(【】あ、はい、はい、ここにお願いします、コーラ、ここに。)</p>	挿入談話
89	KM20	《잠시간격》나는 씨-。(《少しの間》おまえはちょっと-。)	
90	KM19	<p>=먹으면서 먹으면서 해[뭔가를 먹는 듯한 소리를 냄].</p> <p>(=食べて、食べて[何かを食べる音がする]。)</p>	
91	KM19	배고프다(하-아).(腹減った(は-あ-。))	
ライン番号 92~105 省略			

106	KM20	<p>그래 알았어, 그러면 우선은 뭐 나는 사실 내가 그 점주도 아니고 그리고 뭐, 너한테 허락을 하고 뭐 이럴만한 입장은 아니니깐 아무튼 나는 니 의견 알겠고, 만약에 너가 얘기할 때 뭐 좀 트러블이 생기면 내가 같이 얘기 해줄께. (うん、分かった、そしたらまずは、なんか俺が別にオーナーでもないし、なんか別に俺に許可が必要なそういうことでもないから、とにかく俺はおまえの言うことは十分分かったし、もし、おまえが話すときになんかトラブルになったら俺も一緒に言ってやるから。) ←受諾</p>	交渉談話
-----	------	---	------

<会話例 8-7>を見ると、上記の<会話例 8-6>と同様に、「核談話」は現れていない会話例であるが、「交渉談話」と「挿入談話」のやりとりで、謝罪内容が受け入れられ収束している。KM19は、紹介してもらったバイト先の条件を不満そうに説明しており、KM20は、激しい言葉遣いで相手を非難している。すると、ライン番号 23 で、KM19は「야, 일단 뭐, 뭐 시키면서[↑] 지금 여기 우리 뭐 먹으러 왔잖아.(あ、とりあえずなんか、なんか頼んで[↑]今、ここ、俺たち飲みに来たんだろ。)」と、突然「挿入談話」を用いており、KM20の非難を遮断している。その後、KM19は、状況説明を繰り返し行い、KM20は、継続して非難する「交渉談話」のやりとりが行われている。すると、KM20が「아이-씨-그【.】(あーちょっと、その【.】)」(ライン番号 87)と、非難をしようと話しかけているが、KM19は、再度、「挿入談話」を用いて、KM20の非難を遮断している。これらのやりとりが行われてから、ライン番号 106 で、KM20は、「그래 알았어, (うん、分かった)」と、謝罪内容を受け入れることを示している。

この会話例は、「核談話」を用いていないことと、「交渉談話」と「挿入談話」が繰り返し行われているという特徴を持っている有標行動である。これらの展開は、日本語母語話者と韓国語女性では見られず、韓国語男性でも1会話しか現れていないが、基本状態からでは、許容範囲に至らない過少行動と捉えられ有標行動になると考えられ、失礼、不快等のマイナス効果をもたらしていると解釈できる。「交渉談話」と「挿入談話」を繰り返し用いることにより謝罪内容は一応受け入れることで収束している。しかし、謝罪される側が、非難しながら自分の考えを言及しようとする、謝罪する側が、突然、「挿入談話」を用いて、その話の流れを遮っている。自分が引き起こした不愉快な状況により、謝罪される側のネガティブ・フェイスを侵害しているが、「核談話」は用いておらず、更に、謝罪される側の発話を遮断し、突然、「挿入談話」のやりとりを行っている謝罪する側の有標行動は、非常に失礼で不快なものであろう。しかし、このように失礼な有標行動にも関わらず、謝罪内容が受け入れられることで収束している。これらの現象は、本質的にポジティブ・フェイスが重要視される友人間という関係の特殊性、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー4である集団内アイデンティティマーカの使用、「交渉談話」を多く用いている男性の基本状態等が総合的に働きかけていると考えられる。日本語母語話者より韓国語母語話者で多く現れていたのは、仲間関係を強調する言葉であった。つまり、韓国語母

話し手の方で人間関係に訴えかけるストラテジーが多く用いられる傾向が強いと考えられる。

また、以下の〈会話例 8-8〉は、「交渉談話」と「核談話」のやりとりが繰り返されている会話例である。

〈会話例 8-8〉「交渉談話」と「核談話」が繰り返される日本語男性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪談話
18	JM23	ちょっと、こう、今日、新聞見てたらさ(おお)、なんか、ちょっと、もっと、いい時給がね[↑](うんうんうん)、もらえるようなバイトが、しかも俺ん家から凄く近くて(うん)、なんかね、本当、このバイト、俺に凄く、やっぱ合ってるかなって思えるようなやつ(おおお)見付けちゃってさ(おおお)、なんか、それで、ちょっとそこに、ね、履歴、履歴書送って(まじ)、ちょっと面接とかね(へえー)、しようかなって思っ てて(おおお)、こうだから、せっかくちょっとね、あのう…。	交渉談話
ライン番号 19~21 省略			
22	JM23	いや、ちょっと申し訳ないんだけど、&,、	核談話
23	JM23	ちょっと、ね(へえ)、ちょっと辞めようかなと思っくてて><。	
24	JM24	<俺も><結構さ(おお)、無理したし、<だからその別に[↑]><,、	
25	JM23	<分かるんだよ><。	
26	JM24	そのバイト募集もしてなかったしさ(うん)、結構人手ね、足りてだけど(うん)、かなり俺も言っつて(うん)、実際結構バイト先の人無理して採ったらしいし(うん)、という話聞いてるから。	
ライン番号 27~55 省略			
56	JM23	<まあ><、ちょっと、ちょっとそんな感じでちょっと「友達名」に言っつて貰わな いかな?。	交渉談話
57	JM24	<そーうーね、えええー><。	
58	JM23	<頼む、頼む><。	
59	JM24	「友達名」、えー、でも、結構、あの時無理したしなーあ…。	
ライン番号 60~70 省略			
71	JM23	<まあ、ちょ><多分、ごめん、ごめん。	核談話
72	JM24	いや[↑]、そんな、でも、俺だっつて、あの時めっちゃやりだがつたじゃん[↑]。	
ライン番号 73~83 省略			
84	JM23	そうだね、まあ条件的にすごいいいから。	交渉談話
85	JM24	飲食??。	
86	JM23	そうだね。	

87	JM23	飲、同じ飲食なんだけどね。	
88	JM23	まあ、ちょっと《少し間》頼みます。	
91	JM24	いやー、ねー、俺本当に「友達名」に合わせる顔がないわ、そうしたら。	
ライン番号 92～100 省略			
101	JM23	やあ、申し訳ね、<ちょっと><。>	核談話
102	JM24	<もうちょっと><}>続けて<みないと><。>	
103	JM23	<申し訳ない><}>。	
104	JM24	もうちょっと続けてみない？。	
ライン番号 105～116 省略			
117	JM23	まあ、ちょっと、まあ、今回、ちょっと、まあ、頼み、頼みます、頼みます、<お願い します><。>	交渉談話
118	JM24	<やあ、たぶん><}>でも、頼みはするけど(うん)。	
121	JM24	<まあね、また><}>連絡するよ(うん)。	
122	JM24	とりあえず、言うだけは言う(あ)。	

<会話例 8-8>は、謝罪内容が謝罪される側に受け入れられる日本語男性の会話例であるが、JM24 が受け入れられない意を繰り返し示しても、JM23 は自分の意向を変更せず、最後まで繰り返し頼んでいる。<会話例 8-8>をみると、「前置き談話」から会話は始まり、JM23 が紹介してもらったバイト先を辞めて、新しく見つけたバイト先へ行きたい意向を表す「交渉談話」のやりとりが行われている。その後、ライン番号 22 から「謝罪定型表現」が用いられる「核談話」のやりとりが行われるが、JM24 は、その当時の自分の苦労を言及しながら、JM23 の意向を受け入れないことを表している。しかし、JM23 は自分の意向は変更せず、さらに、JM24 に自分が辞められるよう協力してくれることを求めている「交渉談話」のやりとりが行われている。その後、「核談話」のやりとりが行われているが、JM24 は、「いや[↑]、そんな、でも、俺だって、あの時めっちゃやりだがつたじゃん[↑]。」(ライン番号 72)と、明確に受け入れられない意を示している。しかし、JM23 は、繰り返し「状況説明」をしながら再度協力してくれることを求めており、「謝罪定型表現」を繰り返し用いているが、自分の意向が受け入れられるよう積極的に働きかけている。すると、結局、JM24 は「<やあ、たぶん><}>でも、頼みはするけど(うん)。」、「<まあね、また><}>連絡するよ(うん)。」、「とりあえず、言うだけは言う(あ)。」と、JM23 の意向を受け入れることを示している。この会話例は、「交渉談話」のやりとりが 4 回、「核談話」のやりとりが 3 回現れた会話である。上記で説明したように、1 回目から 4 回目の段階で受け入れられる会話は、約 9 割も占めており、7 回目の段階でようやく受け入れる意を示すことは、友人間の会話では、見積もりとのずれ幅が許容範囲に至らない、過少行動と捉えられ、マイナス効果を引き起こすと考えられる。

8.2 「謝罪行動」のやりとりにおける日韓母語話者の基本状態とポライトネス効果

本節では、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面の「謝罪行動」のやりとりにおける基本状態を同定し、そのポライトネス効果について考察する。

まず、負担度が軽い謝罪場面における日韓母語話者の謝罪行動のやりとりの基本状態として同定できるのは、日本語母語話者は、主に、「状況説明・謝罪・責任関連発話文」を用いて謝罪し、「過失言及・事態確認・非難・譲歩発話文」を用いて応答しているが、男性は女性より「責任に関する否定的な発話文」や「非難発話文」を多用する傾向がある。一方、韓国語母語話者の謝罪行動のやりとりの基本状態として同定できるのは、「状況説明・謝罪・責任関連・対人配慮・過失修復発話文」の多様な発話文を用いて謝罪しており、「過失言及・事態確認・非難・譲歩・代償要求発話文」を用いて応答しているが、男性は女性より「責任に関する否定的な発話文」や「非難発話文」を多用する傾向がある。しかし、「責任に関する否定的な発話文」や「非難発話文」を多く用いる傾向は、韓国語男性で最も顕著に現れ、日本語女性で最も弱かった。負担度が軽い場合には、謝罪内容が軽くて深刻ではないため、日韓母語話者の謝罪する側は、自分のフェイスを守りたいという欲求よりは、相手のフェイスを侵害したくないという欲求が優先されており、謝罪される側も、相手のフェイスを配慮し、相手のフェイスを侵害したくないという欲求を優先し、謝罪内容を受け入れている。しかし、「責任関連発話文」、「過失修復発話文」、「非難発話文」では、日韓母語話者で有意な差が見られており、これらの発話文の使用傾向の相違点が、有標行動になり、ポライトネス効果を生むと解釈できる。

次に、負担度が軽い場合の日本語母語話者は、謝罪する側の「状況説明発話文」が男性 31% - 女性 27%、「謝罪発話文」が男性 37% - 女性 41%、「責任関連発話文」が男性 28% - 女性 23%であった。しかし、責任関連発話文の中で、男性は肯定が 59% - 否定が 41%で、女性は肯定が 86% - 否定が 14%であった。一方、謝罪される側の「過失言及発話文」は男性 33% - 女性 46%であり、「事態確認発話文」は男性 19% - 女性 15%、「非難発話文」は男性 22% - 女性 13%、「譲歩発話文」は男性 26% - 女性 21%であった。謝罪行動のやりとりにおける日本語母語話者の基本状態は、男性の謝罪する側は、「状況説明や謝罪発話文」を 68%用いているが、責任関連発話文中に、不可避な状況によることと相手にも過失があることに対する不満な気持ちを表す発話も 41%用いて謝罪行動を行っていると同定でき、男性の謝罪される側は、「過失言及発話文」や「事態確認発話文」や「譲歩発話文」を 78%用いて応答しているが、「非難発話文」も 22%用いて謝罪行動を行っていると同定できる。これに対し、女性の謝罪する側は、「状況説明や謝罪発話文」を 68%用いているが、責任関連発話文中に、不可避な状況によることと相手にも過失があることに対する不満な気持ちを表す発話は 14%用いて謝罪行動を行っていると同定でき、女性の謝罪される側は、「過失言及発話文」や「事態確認発話文」や「譲歩発話文」を 82%用いて応答しているが、「非難発話文」は 13%用いて謝罪行動を行っていると同定できる。

日本語男女母語話者の謝罪行動のやりとりを見ると、多く用いている発話文には差があ

るものの、全体的には類似点が多い基本状態であると考えられる。しかし、日本語男女母語話者で、特に、差が多く現れたのは責任を否定したり不満な気持ちを表している「責任関連発話文」や「過失言及発話文」、「非難発話文」であり、これらの発話文の使用傾向の差が、日本語男女母語話者における有標行動となりポライトネス効果を生むと解釈できる。女性の基本状態からでは、男性が多く用いている、責任を否定したり不満な気持ちを表している「責任関連発話文」や「非難発話文」は、見積もりとのずれ幅が許容範囲に至らない過少行動と捉えられ、失礼、不快等のマイナス・ポライトネス効果を引き起こすと解釈できる。一方、男性の基本状態からでは、女性が多く用いている「過失言及発話文」は、見積もりとのずれ幅が許容範囲を超える過剰行動と捉われ、マイナス・ポライトネス効果が生まれる可能性もあると考えられる。

最後に、韓国語母語話者は、謝罪する側の「状況説明発話文」が男性 27% - 女性 30% であり、「謝罪発話文」が男性 18% - 女性 24%、「責任関連発話文」が男性 36% - 女性 28% であった。しかし、責任関連発話文の中で、男性は肯定が 29% - 否定が 71%で、女性は肯定が 43% - 否定が 57%であった。更に、「対人配慮や過失修復発話文」も男性は 10% - 女性は 9%用いていた。一方、謝罪される側の「過失言及発話文」は男性 14% - 女性 24%であり、「事態確認発話文」は男性 17% - 女性 9%、「非難発話文」は男性 48% - 女性 37%、「譲歩発話文」は男性 12% - 女性 18%、「代償要求発話文」は男性 9% - 女性 12%であった。謝罪行動のやりとりにおける韓国語母語話者の基本状態は、男性の謝罪する側は、「状況説明発話文」、「謝罪発話文」、「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」を 65%用いているが、責任関連発話文中に、不可避な状況によることと相手にも過失があることに対する不満な気持ちを表す発話は 71%用いて謝罪行動を行っていると同定でき、男性の謝罪される側は、「過失言及発話文」、「事態確認発話文」、「譲歩発話文」、「代償要求発話文」を 52%用いて応答しているのに対し、「非難発話文」を 48%用いて謝罪行動を行っていると同定できる。これに対し、女性の謝罪する側は、「状況説明発話文」、「謝罪発話文」、「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」を 72%用いているが、責任関連発話文においては、不可避な状況によることと相手にも過失があることに対する不満な気持ちを表す発話も 57%用いて謝罪行動を行っていると同定でき、女性の謝罪される側は、「過失言及発話文」、「事態確認発話文」、「譲歩発話文」、「代償要求発話文」を 63%用いて応答しているのに対し、「非難発話文」を 37%用いて謝罪行動を行っていると同定できる。

韓国語男女母語話者の謝罪行動のやりとりは多く用いている発話文の差も大きく、全体的には相違点が多い基本状態であると考えられる。韓国語男女母語話者で、差が多く現れたのは、責任を否定したり不満な気持ちを表している「責任関連発話文」や「過失言及発話文」、「事態確認発話文」、「非難発話文」であり、これらの発話文の使用傾向は、韓国語男女母語話者における有標行動となりポライトネス効果を引き起こしていると解釈できる。女性の基本状態からでは、男性が多く用いている俗語等を用いる乱暴な言葉遣いで、責任を否定したり不満な気持ちを表明する「責任関連発話文」や「非難発話文」は、見積もり

とのずれ幅が許容範囲に至らない過少行動と捉えられ、失礼、不快等のマイナス・ポライトネス効果が生まれると解釈でき、また、男性が多く用いている「事態確認発話文」は、マイナス効果、あるいは、ニュートラル効果があると考えられる。一方、男性の基本状態からでは、女性が多く用いている「過失言及発話文」は、許容範囲を超える過剰行動として捉えられ、マイナス・ポライトネス効果を生むこともあると考えられる。

負担度が重い謝罪場面における日韓母語話者の謝罪行動のやりとりで、基本状態として同定できるのは、日本語母語話者は主に「状況説明・謝罪・責任関連・対人配慮発話文」を用いて謝罪し、「事態確認・非難・譲歩・問題解決発話文」を用いて応答するというやりとりであると考えられるが、男性は女性より「状況説明発話文」や「非難発話文」を多用する傾向があり、女性は男性より「事態確認発話文」を多用する傾向がある。一方、韓国語母語話者は、「状況説明・謝罪・責任関連・対人配慮・過失修復発話文」を用いて謝罪しており、「事態確認・非難・譲歩・問題解決発話文」を用いて応答しているが、男性は女性より「非難発話文」を多用する傾向があり、女性は男性より「譲歩発話文」を多用する傾向がある。負担度が重い場合には、謝罪内容が重くて深刻であるため、自分のフェイスを守りたいという欲求と相手のフェイスを侵害したくないという欲求が同時に優先され、「謝罪発話文」は減り、代わりに、「状況説明発話文」や「対人配慮発話文」が増えているのではないかと考えられる。謝罪される側は、自分のフェイスや相手のフェイスを考慮し、「問題解決発話文」も多用しているのではないかと考えられる。しかし、「状況説明発話文」、「過失修復発話文」、「意向変更発話文」、「非難発話文」では、日韓母語話者で有意な差が見られており、これらの発話文の使用傾向の相違点が、有標行動になり、ポライトネス効果を生むと解釈できる。

次に、負担度が重い場合の日本語母語話者は、謝罪する側の「状況説明発話文」が男性 44% - 女性 34%であり、「謝罪発話文」が男性 13% - 女性 16%、「対人配慮発話文」が男性 18% - 女性 23%、「責任関連発話文」が男性 16% - 女性 15%であった。しかし、責任関連発話文の中で、男性は100%責任認め発話文を用いていたが、女性は肯定が85% - 否定が15%現れていた。一方、謝罪される側の「事態確認発話文」は男性 13% - 女性 24%で、「非難発話文」は男性 43% - 女性 24%、「譲歩発話文」は男性 19% - 女性 22%、「問題解決発話文」は男性 20% - 女性 26%であった。謝罪行動のやりとりにおける日本語母語話者の基本状態は、男性の謝罪する側は、主に、「状況説明発話文」、「謝罪発話文」、「対人配慮発話文」、「責任を認めている発話文」を 91%用いて謝罪行動を行っていると同定でき、男性の謝罪される側は、「事態確認発話文」、「譲歩発話文」、「問題解決発話文」を 52%用いて応答しているが、特に、「非難発話文」を 48%も用いて謝罪行動を行っていると同定できる。これに対し、女性の謝罪する側は、「状況説明発話文」、「謝罪発話文」、「対人配慮発話文」、「責任関連発話文」を 88%用いているが、責任関連発話文においては、不満な気持ちを表明する発話も 15%用いて謝罪行動を行っていると同定でき、女性の謝罪される側は、「事態確認発話文」、

「譲歩発話文」、「問題解決発話文」を72%用いて応答しているが、「非難発話文」は24%用いて謝罪行動を行っていると同定できる。日本語男女母語話者の謝罪行動のやりとりを見ると、多く用いている発話文には差があるものの、謝罪する側の発話には類似点が多く見られ、一方、謝罪される側の発話には相違点がかなりあると考えられる。

日本語男女母語話者で、差が多く現れたのは「状況説明発話文」や「事態確認発話文」、「非難発話文」であり、これらの発話文の使用傾向は、日本語男女母語話者における有標行動となりポライトネス効果を生むと解釈できる。女性の基本状態からでは、問題になっている事柄を詳細に説明している「状況説明発話文」は、見積もりとのずれ幅が許容範囲を超える過剰行動と捉えられ、不快等のマイナス・ポライトネス効果が生まれる可能性があるのに対し、「非難発話文」は、過少行動と捉えられ、失礼、不快等のマイナス・ポライトネス効果を生むと解釈できる。一方、男性の基本状態からでは、女性が多く用いている「事態確認発話文」は、許容範囲を超える過剰行動と捉えられ、不快等の「マイナス・ポライトネス効果」を引き起こすと解釈できる。更に、負担度が重い場合には、負担度が軽い場合と違い、謝罪する側が持ち出した謝罪内容を謝罪される側が受け入れられるか、受け入れられないかの結果が現れている。

最後に、負担度が重い場合の韓国語母語話者は、謝罪する側の「状況説明発話文」が男性36% - 女性39%、「謝罪発話文」が男性9% - 女性11%、「対人配慮発話文」が男性17% - 女性19%、「過失修復発話文」が男性10% - 女性10%、「責任関連発話文」が男性19% - 女性14%であった。しかし、責任関連発話文の中で、男性は肯定が57% - 否定が43%であり、女性は肯定が94% - 否定が6%現れていた。一方、謝罪される側の「事態確認発話文」は男性17% - 女性20%、「非難発話文」は男性48% - 女性33%、「譲歩発話文」は男性14% - 女性24%、「問題解決発話文」は男性17% - 女性19%であった。謝罪行動のやりとりにおける韓国語母語話者の基本状態は、男性の謝罪する側は、主に、「状況説明発話文」、「謝罪発話文」、「責任関連発話文」、「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」を91%用いて謝罪行動を行っていると同定でき、男性の謝罪される側は、「事態確認発話文」、「譲歩発話文」、「問題解決発話文」を48%用いて応答しているが、特に、「非難発話文」を48%も用いて謝罪行動を行っていると同定できる。一方、女性の謝罪する側は、「状況説明発話文」、「謝罪発話文」、「責任関連発話文」、「対人配慮発話文」、「過失修復発話文」を93%用いて謝罪行動を行っていると同定でき、女性の謝罪される側は、「事態確認発話文」、「譲歩発話文」、「問題解決発話文」を63%用いて応答しているが、「非難発話文」は33%用いて謝罪行動を行っていると同定できる。

韓国語男女母語話者の謝罪行動のやりとりを見ると、多く用いている発話文には差があるものの、謝罪する側の発話には類似点が多く見られるが、謝罪される側の発話には相違点が若干あると考えられる。特に、韓国語男女母語話者で、差が多く現れたのは「非難発話文」や「譲歩発話文」であり、これらの発話文の使用傾向は、韓国語男女母語話者における有標行動となりポライトネス効果が生まれると考えられる。女性の基本状態からでは、

男性が多く用いている「非難発話文」は、許容範囲に至らない過少行動と捉えられ、失礼、不快等のマイナス・ポライトネス効果を引き起こしていると解釈できる。一方、男性の基本状態からでは、女性が多く用いている「譲歩発話文」は、プラスあるいはニュートラル効果があると考えられる。

以下では、負担度が軽い場合と重い場合の日韓母語話者における「謝罪行動」の有標行動とポライトネス効果を会話例を見ながら考察していく。

8.2.1 負担度が軽い場合の「謝罪行動」のやりとりにおける日韓母語話者の有標行動とポライトネス効果

ここでは、上記の負担度が軽い場合の結果を基に、日韓母語話者の基本状態から離脱した有標行動とポライトネス効果を、会話例を見ながら考察を行う。負担度が軽い謝罪場面は、謝罪内容が簡単であるため、謝罪される側に受け入れることで会話が収束していた。しかし、日韓母語話者共に、女性よりは男性の方で、謝罪する側と謝罪される側が相手のフェイスを侵害する発話を多く用いる傾向が共通的に見られた。責任を否定したり不満を表明する謝罪する側の発話と非難を多用する謝罪される側の発話は、韓国語男性で一番多く用いられており、次に韓国語女性、日本語男性の順であるが、日本語女性ではあまり用いられていないという傾向が見られた。以下は、その会話例である。

<会話例 8-9> 否定的な「責任関連発話文」と「非難発話文」のやりとりの韓国語女性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
14	KF09	그, 그래서 언니한테 계속 전화했는데 안 받는 거예요, <언니 전화【】>{<}.(それ、それで姉ちゃんにずっと電話したけど繋がらなかったのよ<ねえちゃん電話【】>{<}.)	状況説明	na
15	KF10	【】<나 오늘>{>} 따라 핸드폰을 놓고 와갔고. (【】<私今日>{>}よりによって携帯置いて来たから。)	na	過失言及
16	KF09	[흥분하면서] 왜 핸드폰을 놓고 와 아아—[무엇인가 두드리는 소리] [↑]. ([興奮しながら]なぜ携帯を置いてくるのああ—[何かを叩く音] [↑].)	責任(不満)	na
17	KF10	야 늦은 게 잘못 아니야?. (お前、遅れたのが酷くない?。)	na	非難
18	KF10	장난쳐 와 진짜 어-. (ぶざけるな、わ本当にあー。)	na	非難
19	KF09	아 아무튼 늦어서&, (あーとりあえず遅れて&,)	責任	na
20	KF09	<i>미안해요.</i> (ごめんなさい。)	謝罪	na
21	KF09	내가 근데, 하지만 내 탓이 아니야, 난 나름대로 일찍 왔다고=. (私がだけど、でも私のせいじゃない、私は私なりに早く出たのよ=。)	責任(否定)	na

<会話例 8-9>を見ると、KF09 が状況説明をしているが、KF10 は携帯を置いて来たことに言及している。すると、KF09 は、その過失について興奮しながら不満な気持ちを表しており、これを受け、KF10 も遅れたことを責めながら相手を非難している。その後、KF09 は遅れたことを認め謝罪しているが、ライン番号 21 で、「내가 근데, 하지만 내 탓이 아니야, 난 나름대로 일찍 왔다고=.(私がだけど、でも私のせいじゃない、私は私なりに早く出たのよ=。)」と明示的に責任を否定する発話をしている。

以下は、韓国語男性の会話例であるが、韓国語女性より激しい言葉遣いで自分の感情を表明している。

<会話例 8-10> 否定的な「責任関連発話文」と「非難発話文」のやりとりの韓国語男性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
21	KM04	아 그건 그래도, 늦는 건 아니지, 예의상 약속시간은 제때 와야지.(まあ、それはそうだけど、遅れるのはどうかな、礼儀上約束時間にはちゃんと来なくちゃ。)	na	非難
22	KM03	<웃면서>아니, 새끼야, 전화를 했는데 안 받았잖아.<笑うながら>いや、このやろう、電話したけど受けなかったじゃん。)	責任(不満)	na
23	KM04	아니, 늦은 건 늦은 건데[↑][흥분한 듯이]. (いや、遅れたのは事実でしょ[↑][興奮したように].)	na	非難
24	KM04	일단 먼저 사과를 해야쥐=[↑][흥분한 듯이].(とりあえずまず謝るべきじゃん=[↑][興奮したように].)	na	非難
25	KM03	=야- 그래서 미안하다고 오면서 그랬잖아, "아 미안 미안 미안" 이했는데 갑자기 전화 안 받았냐고 그러니깐 벌써 한숨부터 그리고 뭐 세상이 무너진 듯이 한숨부터 쉬고. (=お前、だからごめんと言ったでしょ、"あー、ごめんごめんごめん" したのに、急に何で電話受けなかったかと聞くから、すぐひと息して、そして世間が終わったようにひと息からして。)	責任(不満)	na
26	KM03	친구 걱정도 안되냐?[흥분한 듯이]. (友達の心配はしないの?[興奮したように].)	責任(不満)	na
27	KM03	내가 너가 만약 20 분 정도 늦으면, '아이 애 사고라도 난 게 아닌가?', 이 생각부터 먼저 드는 게 인륜 아니야??, 그런 게[흥분한 듯이].(私が君が 20 分ぐらい遅れたら、'何か事故でも起こったかな?', さきこの考えをするのは人倫じゃない??、なのい[興奮したように].)	責任(不満)	na
28	KM04	아니, 거기서 또 인륜이 왜 나와-[↑]. (何でここでまた人倫何かが出るの-[↑].)	na	非難

29	KM04	(〈웃음〉)〈약간 웃으면서〉일단 니가 20 분이나 늦었잖아, 씨.(〈笑い〉)〈少し笑いながら〉とりあえずお前が 20 分も遅れたじゃん, もう。)	na	非難
30	KM03	《잠시간격》그건 미안해, 사과할께. (《少し間》それはごめん, 謝る。)	謝罪 2	na

<会話例 8-10>を見ると、KM04 は遅れたことに対して「礼儀」、「約束時間」等に言及しながら相手を非難しているが、KM03 は「このやろう」という俗語も用いて電話を受けなかった KM04 に対する不満を表明している。しかし、KM04 は、更に、遅れたことについて非難しながら、KM03 が謝らなかったことに対しても非難をしている。すると、KM03 は、自分が謝罪したことに言及し、友人関係なのに、責め続けている KM04 に対する不満を「心配」、「人倫」などの言葉まで用いて表明している。しかし、KM04 は、再度、遅れたことに対して非難しており、ライン番号 30 で、KM03 は、「《잠시간격》그건 미안해, 사과할께.(《少し間》それはごめん, 謝る。)」と「謝罪定型表現」を用いて謝罪している。

負担度が軽い謝罪場面は、謝罪する側は電車が遅れてしまったという不可避な状況により遅刻してしまい、謝罪される側は携帯を忘れて来たという過失がある謝罪場面である。本研究の場面設定によりこのようなやりとりが行われていたと考えられるが、特に、韓国語母語話者で、会話例のように互いを責めている会話が多く見られた。日本語女性では、謝罪される側が携帯を忘れて来たという過失に言及しても、謝罪する側は、不満をあまり表明しなかった。韓国語母語話者では、友人間の会話で素直に自分の不満を表明することが「マイナス・ポライトネス効果」を生む有標行動として捉えられていない可能性もあると予想されるが、日韓母語話者の会話においては、友人間の会話だとしてもフェイス侵害度が高い発話を多用することは、許容できるずれ幅に至らない過少行動として捉えられ、失礼、不快等の「マイナス・ポライトネス効果」が生じると解釈できる。また、<会話例 8-9>のように、「내탓이 아니야(私のせいじゃない)」と明示的に自分の責任を否定する発話は、不可避な状況による遅刻だとしても、無責任であると考えられ、日韓母語話者でマイナス・ポライトネス効果を引き起こす有標行動として捉えられると解釈できる。

また、以下の<会話例 8-11>のように、友人間の会話で「謝罪発話文」を繰り返し用いることは、マイナス・ポライトネス効果を引き起こす場合もあると考えられる。

<会話例 8-11>「謝罪発話文」が繰り返し現れている日本語女性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
2	JF17	〈ごめん〉(으), ごめんね, &,	謝罪 2	na
3	JF17	〈遅れて〉(으)〈〉。	責任関連	na
5	JF17	ごめんね。	謝罪	na

7	JF17	なんか、すごく遅刻したね。	責任関連	na
8	JF18	なんか、そう(うん)、結構(うん)心配したくんだけど><。]	na	非難
9	JF17	<なんか、そう></>、ごめんね。	謝罪	na
ライン番号 10~12 省略				
13	JF18	<それで私も連絡とれなくて></>。	na	過失言及
14	JF17	<あーそうか></>(うん)、ごめんね。	謝罪	na
15	JF18	うん、ごめん。	na	過失言及
16	JF17	本当に何回も電話したんだけど(うん)、&,、	状況説明	na
17	JF17	ごめんね<本当></>。	謝罪	na
18	JF18	<ううん></>、いや、なんか忘れた私も<###></>。← 受諾	na	受諾
19	JF17	<あ></>(うん)いやいやいや、ごめん<本当></>。	謝罪	na

<会話例 8-11>をみると、JF17 は遅れたことに対して責任を認めながら連続して謝罪しており、JF18 は「なんか、そう(うん)、結構(うん)心配したくんだけど><。】(ライン番号 8)と言いながら若干非難しているような発話をしている。すると、JF17 は、再度、謝罪しながら遅れた状況について説明しており、JF14 は自分の過失について言及している。これを受け、JF17 は、ライン番号 14 でもう一回謝罪し、さらに、ライン番号 17 と 19 でも繰り返し「謝罪発話文」を用いている。ライン番号 19 まで、謝罪する側である JF17 が「ごめん」という「謝罪定型表現」を 7 回も用いている。日本語母語話者は韓国語母語話者に比べ、「謝罪発話文」を多用する傾向があるが、友人間の会話で「謝罪定型表現」を多用することは、「距離を置いている、よそよそしい」という誤解を招く可能性があると考えられる。特に、友人である韓国語母語話者との会話で、「謝罪定型表現」を繰り返し多用することは、見積もりとのずれ幅が許容範囲を超え、過剰行動と捉えられ、マイナス・ポライトネス効果を引き起こすと思われる。

以下では、負担度が重い場合の日韓母語話者における「謝罪談話」の有標行動とポライトネス効果を会話例を見ながら考察していく。

8.2.2 負担度が重い場合の「謝罪行動」のやりとりにおける日韓母語話者の有標行動とポライトネス効果

ここでは、上記の負担度が重い場合の結果を基に、日韓母語話者の基本状態から離脱した有標行動とポライトネス効果について会話例を見ながら考察を行う。負担度が重い謝罪場面は、謝罪内容が深刻かつ複雑であるため、受け入れられる会話と受け入れられない会話が見られていた。日本語女性以外の負担度が重い謝罪場面の基本状態は、受け入れられる会話が多く現れることと同定できる。受け入れられる会話が多い基本状態では、受け入れられない会話は有標行動になると解釈できる。

以下の<会話例 8-12>、<会話例 8-13>、<会話例 8-14>は、受け入れられない会話例で

あり、＜会話例 8-15＞は、受け入れられる会話例であるが、その謝罪行動のやりとりから見られる特徴について説明する。

＜会話例 8-12＞ 連続して「非難発話文」を用いている日本語女性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
16	JF04	なんか、その頼んだ人もすごい厳しいとか言っとったけど##採用してくれたんやし、それはその人に悪くない??。	na	非難
17	JF03	そうだよね><。	その他	na
18	JF04	<だってまだ2ヶ月><)>しか働いてないやん。	na	非難
19	JF03	うん、<すごい自分><)>,,	-	-
20	JF04	<店側としても><)>困るやろ。	na	非難
21	JF03	うん、自分勝手なことをすごい言ってるのも分かるんだけど…。	責任	na
22	JF04	それはでも自分のことしか考えてなくない?。	na	非難
23	JF03	うん、そうだよね。	その他	na
24	JF03	でも、やっぱりアルバイトだし…。	責任(不満)	na
25	JF04	えーでも、バイトでもその店の店員なわけやし<笑い>,,	-	-
26	JF03	うん、そうか、<じゃ><)>,,	-	-
27	JF04	<店を><)>回す人の、には変わりはないわけだし。	na	非難
28	JF03	うん、分かった。← 意向変更	意向変更	na
29	JF03	=じゃ、もうちょっと考えて見るわ。← 意向変更	意向変更	na

＜会話例 8-12＞を見ると、JF04 は、JF03 の辞めたい意向に対して連続して「非難発話文」を用いているが、「悪くない」、「困る」等の言葉を用いて直接的に不満な気持ちを表明している。これを受け、JF03 は、「自分勝手」という言葉を用いて責任を認めているが、ライン番号 24 で、「でも、やっぱりアルバイトだし…」と責め続けている JF04 に対する不満を表明している。すると、JF04 は、更に、この発話に対して非難しており、結局、JF03 は、「=じゃ、もうちょっと考えて見るわ。」と、自分の意向を変更する発話をしている。

日本語女性で受け入れない会話が一番多く現れていたが、日本語男性より日本語女性の方で多く現れた「応答関連発話文」は、「事態確認発話文」、「譲歩発話文」、「問題解決発話文」であり、日本語男性で多く現れていた発話文は「非難発話文」であった。更に、負担度が軽い場合と負担度が重い場合、両方共、日本語男性よりは日本語女性の方で、相手のフェイスを配慮する謝罪行動が多く用いられていた。しかし、＜会話例 8-12＞を見ると、JF04 は、「困る」等の言葉を用いて直接的に非難発話文を用いており、その結果、JF03 は自分の意向を変更している。日本語女性は、負担度が重い場合でも、「事態確認発話文」や「問題解決発話文」を多用して、遠まわしに自分の不愉快な感情を表す傾向が見られた

が、直接的に相手を非難する発話は多く現れていなかった。従って、「非難発話文」を連続して用いることは、日本語女性の基本状態から離脱することであり、許容できるずれ幅に至らない過少行動となり、失礼等のマイナス・ポライトネス効果を生むと解釈できる。しかし、直接的な「非難発話文」を多く用いていた韓国語男性の基本状態からは、許容できるずれ幅に収まる適切行動となり、ニュートラル・ポライトネス効果があると考えられる。

<会話例 8-13> 否定的な「責任関連発話文」と「非難発話文」のやりとりの日本語男性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
66	JM08	2ヶ月で辞めたら、他の所も持たないよ。	na	非難
67	JM07	やあ、これやっぱり条件面の問題だから(く笑い)。	状況説明	na
68	JM07	うーん、ちょっと申し訳ない。	謝罪	na
69	JM08	多分これで辞めたら、次もすぐ辞めると思うな。	na	非難
70	JM07	まあ、そしたら、それはそれでしょうがない。	責任(否定)	na
71	JM07	あー本当。	その他	na

<会話例 8-13>は、謝罪内容が受け入れられない会話の終わりの部分であるが、JM08は、JM07の意向を変更するため、続けて「非難発話文」を用いている。しかし、JM07は状況説明をしながら謝罪はしているが、最後まで自分の意向を変更せずに、「まあ、そしたら、それはそれでしょうがない。」と、無責任な発話をしている。受け入れない会話では、謝罪する側が自分の意向を変更する傾向が顕著に見られ、第三者と共に相談することになり保留されてしまう場合も多くはないが見受けられた。これらの傾向が受け入れない会話の基本状態であると同定できれば、<会話例 8-13>は、受け入れない会話の中でも有標行動になると考えられる。JM08は最後まで受け入れることができないことを明示的に発話しているにも関わらず、JM07は自分の意向を変更せず、責任まで否定しているような発話をしている。友人間の会話だとしても、このような結果は、許容できるずれ幅に至らない過少行動であり、マイナス・ポライトネス効果を生むと解釈できる。

<会話例 8-14> 否定的な「責任関連発話文」と「非難発話文」のやりとりの韓国語男性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
37	KM01	아-나, 난 니가 화-[↑] 낼만 한 것도 이해가 가는데, 내가 못 하겠는 걸 어떻게??.(あー、俺はお前がむかつく[↑] のも分かるけど、俺が無理だつてば、どうする??.)	責任(不満)	na

38	KM02	니가 못하는 건, 니가 나한테 꺾아달라고 했으면, 사회 생활이면 열심히 해야 될 것 아니야, 새끼야[목소리 톤을 높이며 흥분한 듯이].(おまえが無理って言っても、おまえが俺に入れてくれと言ったからには、社会生活だから一生懸命にするべきだろう、このやろう[声のトーンをあげて興奮気味で].)	na	非難
39	KM01	아, 내가 정말 미안하다.(あ、俺がマジでごめん。)	謝罪	na
40	KM01	근데, 벌써 돼 버린 걸 어떻게=. (だけど、もう受かったのはしょうがないじゃん=.)	責任(否定)	na
41	KM02	=뭘 어떻게 돼-[↑], 그냥 다니는 거지. (=なにがしょうがないんだ-[↑]、続ける。)	na	非難

<会話例 8-14>は、<会話例 8-13>と同様に、「意向変更発話文」や「保留発話文」は現れず、受け入れないことで会話は収束している。KM01は、「내가 못 하겠는 걸 어떻게??.(俺が無理だってば、どうする??。)」と、不愉快な状況を引き起こしているにも関わらず無責任な発話をしている。すると、KM02は、「このやろう」と俗語を用いて、「社会生活」のことにまで言及しながら、無責任な発話をしている KM01 を激しく非難している。すると、KM01 は、一応謝罪はしているが、継続して、「근데, 벌써 돼 버린 걸 어떻게=. (だけど、もう受かったのはしょうがないじゃん=。)」と、再度、無責任な発話をしており、KM02 は非難を続けている。親しい友人間の会話は、許容できる幅に収まれる適切行動が多いただろうと予想される。しかし、余りにも無責任な発話は、その許容できる幅に至らない失礼、不快、不満等のマイナス・ボライトネス効果を引き起こしてしまう。受け入れない会話では、相手のフェイスを配慮する発話よりは相手のフェイスを侵害する発話が多く現れており、特に、謝罪する側もかなり無責任な発話を用いる傾向が見られた。以下では、受け入れられる会話例の有標行動について考察する。

<会話例 8-15> 「過失修復発話文」のやりとりが行われている韓国語女性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪関連発話文	応答関連発話文
40	KF04	어떻게 하지...(どうしよう...)	na	非難
41	KF03	그러면 (응) 그냥 그 누구지 [친구 01 이름](응응)?? [친구 01 이름]이 개도(응응) 요세 알바를 구하거든(응응).(それでは(うん)あの誰だっけ[友達01の名前](うんうん)??[友達01の名前]がその人も(うんうん)最近バイト探しているの(うんうん).)	過失修復	na
라인번호 42~55 省略				
56	KF04	그치 힘들긴 하지 음식점 알바니깐. (そうだね、大変だよ、飲食店バイト。)	na	譲歩

57	KF03	어 그래 그래 갖고 그냥 아예(응) 그[친구 01 이름]이나 (응응)[친구 01 이름]인 해봤으니깐 좀 편할 거 아니야. (うん、だから、だから(うん)その[友達 01 の名前]は(うんうん) [友達 01 の名前]はして見たからちょっと楽だと思われるけど。)	過失修復	na
----	------	--	------	----

<会話例 8-15>は、韓国語女性で多く用いられていた、代案を提示し、自分の過失を修復しようとする会話例である。KF04 は、KF03 が持ち出した問題になっている事柄に対して戸惑う感じで、若干遠まわしに非難をしている。すると、KF03 は、バイト先を探している友達の名前にまで言及し、代案を提示している。更に、自分の代わりにバイトが可能な友達は飲食店のバイトの経験もあるので向いていることに言及し、積極的に自分の過失を修復しようと働きかけている。

積極的な「過失修復発話文」は、韓国語女性では許容できる幅に収まる適切行動として捉えられ、プラス、あるいは、ニュートラル・ポライトネス効果を生むと解釈できる。しかし、「過失修復発話文」をあまり用いていない日本語母語話者では、許容できる幅に至らない過少行動として捉えられ、マイナス・ポライトネス効果が生まれる可能性もあると解釈できる。自分が引き起こした不愉快な状況を解決するためにもかかわらず、自らの努力はせず、他人という代案を提示して、その問題点を解決しようとする働きかけが無責任な行動として捉えられる恐れもあるのではないかと考えられる。

8.3 「謝罪発話文と応答発話文」における日韓母語話者の基本状態とポライトネス効果

本節では、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面の「謝罪発話文と応答発話文」における基本状態を同定し、ポライトネス効果について考察する。上記のグローバルな観点からの「謝罪談話」の分析や、ローカルな観点からの「謝罪行動」のやりとりの分析は、会話全体を視野に入れて分析しているという共通点があるが、「謝罪発話文と応答発話文」は、「謝罪定型表現」が用いられている発話文とその直後に来る応答のみに注目し分析を行っている。つまり、「謝罪発話文」に対して、「肯定的な応答」、「ニュートラルな応答」、「否定的な応答」で反応している「応答発話文」のみに焦点を絞り分析を行っているため、会話のやりとりにより現れた結果は排除し考察を行うこととする。

まず、負担度が軽い場合の「謝罪発話文と応答発話文」を分析した結果、日本語母語話者の「謝罪発話文」は、「直接謝罪(男性 51% - 女性 64%)」と「責任認め(男性 28% - 女性 22%)」であり、不可避な状況による遅刻であるが、責任を認めながら謝罪することが基本状態であると同定できる。これを受け、「応答発話文」は、受諾、譲歩を用いる「肯定的な応答(男性 63% - 女性 66%)」、情報求め、回避を用いる「ニュートラルな応答(男性 15% - 女性 25%)」、非難を用いる「否定的な応答(男性 22% - 女性 8%)」を用いることが基本状態であると同定できる。一方、韓国語母語話者の「謝罪発話文」も、「直接謝罪(男性 53% - 女性 60%)」と「責任認め(男性 19% - 女性 18%)」が基本状態であると同定できるが、「応

答発話文」の基本状態は、「肯定的な応答(男性 32% - 女性 39%)」、「ニュートラル応答(男性 24% - 女性 16%)」、「否定的な応答(男性 44% - 女性 39%)」が基本状態であると同定できる。つまり、「謝罪定型表現」が用いられている「謝罪発話文」においては、日韓母語話者共に、「直接謝罪」や「責任認め」の発話を用いることが基本状態であり、「謝罪発話文」で「責任否認」、「不満表明」、「理由言及」、「なだめ」等を言及することは有標行動として捉えられると考えられる。また、日本語母語話者の「応答発話文」においては、負担度が軽い謝罪場面では、謝罪により崩れてしまった相手のフェイスを回復することを優先する応答が多く現れているが、韓国語母語話者は、多様な応答を用いて反応する傾向が顕著に見られた。日韓母語話者の「謝罪発話文」では、「直接謝罪」、「責任認め」、「なだめ」で、有意な差が認められており、「応答発話文」では、主に「肯定的な応答」で、有意な差が認められ、これらの使用傾向の相違点が、有標行動となり、ポライトネス効果を生む解釈できる。

次に、負担度が重い場合の「謝罪発話文と応答発話文」を分析した結果、日本語母語話者の「謝罪発話文」の基本状態は、「直接謝罪(男性 57% - 女性 51%)」、「責任認め(男性 11% - 女性 11%)」、「事態言及(男性 11% - 女性 16%)」、「なだめ(男性 16% - 女性 20%)」であると同定でき、「応答発話文」の基本状態は、「肯定的な応答(男性 40% - 女性 58%)」、「ニュートラル応答(男性 17% - 女性 28%)」、「否定的な応答(男性 43% - 女性 15%)」であると同定できる。一方、韓国語母語話者の「謝罪発話文」の基本状態は、「直接謝罪(男性 66% - 女性 54%)」、「責任認め(男性 13% - 女性 16%)」、「事態言及(男性 9% - 女性 13%)」、「なだめ(男性 13% - 女性 18%)」であると同定でき、「応答発話文」の基本状態は、「肯定的な応答(男性 48% - 女性 50%)」、「ニュートラル応答(男性 10% - 女性 27%)」、「否定的な応答(男性 43% - 女性 20%)」であると同定できる。つまり、日韓母語話者共に、「謝罪発話文」を用いる際、「直接謝罪」、「責任認め」、「なだめ」、「事態言及」の多様な発話を用いることが基本状態であり、これら4つ以外の発話は、「謝罪定型表現」と共にあまり現れていないという共通点が見られた。また、「応答発話文」においても「肯定的な応答」、「ニュートラルな応答」、「否定的な応答」といった多様な応答を用いて反応しているという共通点も見られた。負担度が軽い謝罪場面に比べ、負担度が重い謝罪場面には、多く用いられている「謝罪発話文」と「応答発話文」には差があるものの、基本状態として同定できる使用傾向は類似していると考えられる。つまり、使用傾向の相違点が多く現れている有標行動として考えられる現象があまり見られなかった。

以下では、負担度が軽い場合と重い場合の日韓母語話者における「謝罪発話文と応答発話文」の有標行動とポライトネス効果について考察する。

8.3.1 負担度が軽い場合の「謝罪発話文と応答発話文」における日韓母語話者の有標行動とポライトネス効果

ここでは、上記の負担度が軽い場合の結果を基に、日韓母語話者の基本状態から離脱し

た有標行動とポライトネス効果について会話例を見ながら考察を行う。

<会話例 8-16> 「否定的な応答」が用いられた日本語男性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
1	JM01	やー、悪り、&,,	謝罪
2	JM01	遅れた。	責任認め
3	JM02	遅いよ[↑]、<まじで>{<},,	-
4	JM01	<そう、やー>{<}。	na
5	JM02	20分も=。	非難

<会話例 8-16>を見ると、JM01は、遅れたことに対して責任を認めながら謝罪しているが、JM02は「遅いよ[↑]、<まじで>{<}20分も=。」と直接的に非難している。負担度が軽い場合には、日本語母語話者の謝罪される側は、相手の謝罪に対し、明示的に受諾したり譲歩したりする「肯定的な応答」を多く用いる傾向があるため、非難する「否定的な応答」をすることは、基本状態から離脱する有標行動であり、相手のフェイスを配慮しない過少行動として捉えられ、マイナス・ポライトネス効果を引き起こすと解釈できる。しかし、韓国語母語話者の会話では「否定的な応答」も多く用いられていたため、許容できるずれ幅に収まり、ニュートラル・ポライトネス効果が生まれると解釈することも可能であろう。

<会話例 8-17> 「ニュートラルな応答」が用いられた日本語女性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
29	JF01	ごめんね。	謝罪
30	JF02	じゃーどうする?何食べる?。	回避(話題転換)

<会話例 8-17>を見ると、JF01が謝罪しているが、JF02は明示的な応答はせず、食べ物のお話に変えており、応答自体を回避している。日本語男性より「肯定的な応答」を多く用いていた日本語女性の基本状態の観点からは、過少行動であり、失礼、不快等のマイナス・ポライトネス効果を生むと解釈できる。

<会話例 8-18> 「なだめ」が用いられていた韓国語女性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
5	KF11	어-, 진짜 미안해 &,,(あー、本当ごめん&,)	謝罪
6	KF11	배고프지?.(おなか空いたでしょ?)	なだめ

7	KF12	배는 둘째치고 아- 이자식, (<웃음>)20 분--[시간을 천천히 강조하듯이].(おなかのことは二番だし、お前、このやろう(<笑い>)20分-[時間をゆっくり強調するように].)	非難
---	------	---	----

<会話例 8-18>を見ると、KF11 は謝罪と共に「배고프지?(おなか空いたでしょ?)」と、相手の怒りを収めるため「なだめる」発話をしているが、KF12 は非難している。負担度が軽い場合には、日本語母語話者と韓国語男性では「なだめ」が用いられていなかったが、韓国語女性のみ「謝罪発話文」で「なだめ」を用いる傾向が見られた。「なだめ」は、状況により、男女により、受け入れられる評価が異なる発話ではないかと考えられる。謝罪内容が軽い場合には、あるいは、韓国語女性の友人同士の会話では、「なだめる」ことが適切行動として捉われ、ニュートラル・ポライトネス効果あるいはプラス・ポライトネス効果を生むかもしれない。しかし、「なだめ」をあまり用いていない男性同士の会話、あるいは、より深刻な状況の会話では、マイナス・ポライトネス効果を生み、相手に不快さを与える可能性もあると考えられる。

<会話例 8-19> 「非難+代償要求」が用いられた韓国語男性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
12	KM09	《잠시간격》아- 미안. (《少し間》あー、ごめん。)	謝罪
13	KM10	아-, 이 새끼, 그래도 20 분, 20 분이 나 늦었는데, 이 새끼 밥이나 사라 그냥. (あー、このやろう、だけど 20 分、20 分も遅れたから、てめえご飯でも奢りなただ。)	非難+代償要求

<会話例 8-19>をみると、KM09 の謝罪に対して、KM10 は代償要求をしているが、単なる代償要求ではなくて「아-, 이 새끼, 그래도 20 분, 20 분이 나 늦었는데, (あー、このやろう、だけど 20 分、20 分も遅れたから、)」と、非難しながら、直接に代償を要求している。代償要求をあまり用いていない日本語母語話者の観点からでは、さらに、非難しながら要求している発話は、過少行動であり、マイナス・ポライトネス効果を生むと解釈できる。しかし、友人同士の会話で、直接かつ乱暴な言葉をかなり用いていた韓国語男性の基本状態からでは、ニュートラル・ポライトネス効果であるという解釈もできるだろう。

8.3.2 負担度が重い場合の「謝罪発話文と応答発話文」における日韓母語話者の有標行動とポライトネス効果

ここでは、負担度が重い場合の結果を基に、日韓母語話者の基本状態から離脱した有標行動とポライトネス効果について会話例を見ながら考察を行うが、上記で説明したように、負担度が重い場合は相違点より類似点が多く見られていた。

<会話例 8-20> 「不満表明」が用いられた日本語女性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
16	JF23	うんー、それはそっちでちよっとお願いしてあって、&,、	責任認め
17	JF23	本当悪いんだけど、&,、	謝罪
18	JF23	でも、こう、なんていうの、バイト選ぶのも私が自分で選んでいいわけだし、&,、	不満表明
19	JF23	本当悪いんだけど、&,、	謝罪
20	JF23	うんー、そう言おうと思ったんだけど…。	事態言及
21	JF24	えー、なんかそれちよっと無責任じゃない？。	非難

<会話例 8-20>をみると、JF23は「責任認め」と「謝罪」をしながら自分の意向をJF24に述べているが、ライン番号18で、「でも、こう、なんていうの、バイト選ぶのも私が自分で選んでいいわけだし、&,、」と、非難を続けていたJF24に対する不満やバイトの選択に関する自分の考えを表明している。すると、JF24は「無責任」と言及しながらJF23をさらに非難している。このやりとりは、「本当に悪いんだけど」という「謝罪定型表現」が2回も連続して現れていたが、正直な自分の不満を言及してしまい、許容範囲に至らない過少行動として捉われ、マイナス・ポライトネス効果が生じると解釈できる。佐久間(1983:63)は、感謝や謝罪の「ことば」も「態度」も、話し手の事実を支えられてこそ「人のほんとうの気持ち」をあらわすものであると述べている。「ことば」として謝罪を用いているが、自分の不満な気持ちを表わすと、謝罪される側に不快さを与えてしまい、有標行動になる恐れがあると考えられる。

<会話例 8-21> 「譲歩」が用いられた日本語男性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
73	JM03	せっかく紹介してもらって(まあーね)&,、	なだめ
74	JM03	申し訳ないんだけど。	謝罪
75	JM04	《少し間》まあー、じゃ、とりあえず、そんな感じでなんか(お)、並、並列する感じですよね=。	譲歩

<会話例 8-21>をみると、JM03は相手の恩恵を言及しながら謝罪しており、JM04は一步譲り、今のバイトと新しいバイトを並列することは許可している。日本語母語話者の会話では、2つのバイトを並列することについて言及した会話が幾つか現れたが、韓国語母語話者の会話では、このような発話は現れていなかった。韓国語母語話者の基本状態から考えると、自分の意向を説明したにもかかわらず、さらに、大変なバイト並列を言及してい

る謝罪される側の発話は、友人を配慮していない行動として捉われ、マイナス効果をもたらす可能性があると考えられる。特に、韓国語男性は、「謝罪発話文」に対して「非明示的な受諾」を用いていない傾向が見られた。言い換えれば、韓国語男性は、謝罪内容を受け入れるか受け入れないかを明確に表す傾向が伺われるため、曖昧な発話に対して不快さを感じるかもしれないと考えられる。

<会話例 8-22> 「代償要求」が用いられた韓国語女性の会話例

ライン番号	話者	発話内容	謝罪応答発話文
42	KF05	소개시켜줬는데<둘이서 웃음>&,, (紹介してくれたのに<2人笑い>,&,,)	なだめ
43	KF05	정말 미안해.(本当にごめん。)	謝罪
44	KF06	맛있는 거나 사줘=(いいよ、美味しいもの奢って=。)	代償要求

<会話例 8-22>をみると、KF05 はなだめながら謝罪しており、KF06 は、「맛있는 거나 사줘=(いいよ、美味しいもの奢って=。)」と、直接に代償を要求している。負担度が軽い場合には、謝罪する側の「代償言及」と謝罪される側の「代償要求」が日本語母語話者と韓国語母語話者で現れていだが、負担度が重い場合に、謝罪される側が代償を要求する発話は、韓国語女性で 1 例しか現れなかった。負担度が重い場合は、謝罪内容が深刻であるため、謝罪内容に集中し、問題を解決するためのやりとりが多く現れていた。従って、「代償要求」は、あまり現れない傾向が日韓母語話者で共通的に見られた。深刻な状況で「代償要求」を直接に言及することは、過少行動として捉われ、マイナス効果を生むと解釈できる。

8.4 ディスコース・ポライトネス理論の観点からの考察のまとめ

本章では、本研究の「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」の主な結果を、「ディスコース・ポライトネス理論」から考察した。ディスコース・ポライトネス理論では、ある特定の「談話」の「基本状態」を同定することにより、そこから離脱した言語行動(有標行動)をもたらすポライトネス効果を相対的に捉えることができる。本研究で得られた結果を基に、基本状態を同定し、ポライトネス効果について主に考察を行った。

まず、負担度が軽い謝罪場面と重い謝罪場面の「謝罪談話」における基本状態を同定し、ポライトネス効果について考察した。負担度が軽い謝罪場面では、日韓母語話者共に、①「核談話」のみ、あるいは、「核談話」が一回現れてから「挿入談話」または「後続関連談話」後に会話が終了する構造、②何回か現れる「核談話」と「核談話」の間に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れてから会話が終了する構造が共通的に現れていた。しかし、日本語母語話者では「核談話」が連続して現れる構造があり、韓国語母語話者では「核談話」後に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が連続して現れる構造が見られ、特に、

韓国語男性では「交渉談話」のやりとりが行われてから「核談話」が現れる構造が見られた。これらの相違している構造を有標行動として捉え、「核談話」が連続して現れることは、韓国語母語話者では、許容範囲を超える過剰行動でありマイナス効果を引き起こすと解釈した。一方、「交渉談話」のやりとりが行われてから「核談話」が現れる構造は、日本語母語話者では許容範囲に至らない過少行動でありマイナス効果が生じると解釈した。

負担度が重い謝罪場面では、謝罪内容が深刻であるため、謝罪される側に受け入れられる場合と受け入れられない場合が現れており、「核談話」が現れない現象や、「交渉談話」と「核談話」のやりとりが簡単な場合と複雑な場合が現れる等、多様かつ複雑な展開や構造を見せた。従って、多く現れた「受け入れられる場合」、「核談話」が現れる場合、「多く用いられている「交渉談話」や「核談話」の展開や構造」を基本状態として同定し、「受け入れられない場合」、「核談話」が現れない場合」、「あまり用いられていない「交渉談話」や「核談話」の展開や構造」を有標行動として捉えて考察を行った。まず、受け入れない場合の特徴は、本題に入る際「交渉談話」のやりとりが行われている会話が約7割を占めていた。次に、日本語母語話者では「核談話」が現れない会話で謝罪内容が受け入れられない現象が起こるため、過少行動であると解釈しマイナス効果を生むと判断した。しかし、韓国語母語話者では「核談話」が現れない会話でも謝罪内容が受け入れられる現象が現れているため、この有標行動はマイナス効果を生むと判断しにくいと解釈した。最後に、1回目から4回目の段階で受け入れられる会話は、約9割も占めており、多くの段階を経てようやく受け入れる意を示すことは、友人間の会話では、過少行動と捉えられ、マイナス・ポライトネス効果を引き起こすと解釈した。

次は、負担度が軽い謝罪場面と重い謝罪場面の「謝罪行動」のやりとりにおける基本状態を同定し、ポライトネス効果について考察した。負担度が軽い謝罪場面では、日本語母語話者は、主に、「状況説明・謝罪・責任関連発話文」を用いて謝罪し、「過失言及・事態確認・非難・譲歩発話文」を用いて応答することを基本状態として同定した。一方、韓国語母語話者は、「状況説明・謝罪・責任関連・対人配慮・過失修復発話文」の多様な発話文を用いて謝罪しており、「過失言及・事態確認・非難・譲歩・代償要求発話文」を用いて応答することを基本状態として同定した。これらの基本状態から離脱した有標行動は、男性の方で多く用いられていた「責任に関する否定的な発話文」や「非難発話文」であると捉え、過少行動となり、失礼、不快等のマイナス・ポライトネス効果が生まれると解釈した。更に、女性の方で多く用いられていた「過失言及発話文」は、過剰行動として捉えられ、マイナス・ポライトネス効果を生むこともあると解釈した。

負担度が重い謝罪場面では、日本語母語話者は、主に「状況説明・謝罪・責任関連・対人配慮発話文」を用いて謝罪し、「事態確認・非難・譲歩・問題解決発話文」を用いて応答することを基本状態として同定した。一方、韓国語母語話者は、「状況説明・謝罪・責任関連・対人配慮・過失修復発話文」を用いて謝罪しており、「事態確認・非難・譲歩・問題解決発話文」を用いて応答することを基本状態として同定した。これらの基本状態が

ら離脱した有標行動は、日本語母語話者では、男性の方で多く用いられていた「状況説明発話文」と「非難発話文」であると捉え、マイナス・ポライトネス効果があると解釈した。また、女性の方で多く用いられていた「事態確認発話文」は、過剰行動となり、不快等のマイナス・ポライトネス効果があると捉えた。韓国語母語話者では、男性が多く用いている「非難発話文」がマイナス・ポライトネス効果を引き起こすと判断し、女性が多く用いている「譲歩発話文」は、プラスあるいはニュートラル効果があると解釈した。

最後に、負担度が軽い謝罪場面と重い謝罪場面の「謝罪発話文と応答発話文」における基本状態の同定を試みた。負担度が軽い謝罪場面では、日韓母語話者共に、「直接謝罪」や「責任認め」の発話を用いることが基本状態であり、「謝罪発話文」で「責任否認」、「不満表明」、「理由言及」等を言及することは有標行動として捉えられ、マイナス・ポライトネス効果が生まれると解釈した。「応答発話文」においては、日本語母語話者では、受諾、譲歩等の「肯定的な応答」が基本状態になるが、韓国語母語話者では、「肯定的な応答」のみならず、情報求め等の「ニュートラルな応答」、非難等の「否定的な応答」も基本状態になると捉えた。従って、日本語母語話者で「否定的な応答」が用いられる場合や、韓国語母語話者で非難しながら代償を要求する場合等は有標行動であると捉え、マイナス・ポライトネス効果が生まれると解釈した。

負担度が重い謝罪場面では、日韓母語話者共に、「謝罪発話文」を用いる際、「直接謝罪」、「責任認め」、「なだめ」、「事態言及」の多様な発話を用いることが基本状態であり、「応答発話文」においても「肯定的な応答」、「ニュートラルな応答」、「否定的な応答」の多様な応答を用いて反応することが基本状態であると考えられた。しかし、多く現れていないが日本語女性が用いた「不満表明」の「謝罪発話文」や直截的な代償要求発話等は有標行動であると考えられ、ポライトネス効果が生まれると解釈した。

ディスコース・ポライトネス理論は、基本状態を同定することにより、そこから離脱した有標行動とポライトネス効果を相対的に捉えることが可能である。さらに、一文レベル、一発話文レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素の分析の重要性を提唱している。

本研究の分析結果を、「ディスコース・ポライトネス理論」から考察することにより明らかになった点は、まず、謝罪場面で「謝罪定型表現」が用いられていない現象の説明が可能になったということである。これらの現象の説明は、談話レベルで見ないと正確に捉えることができない。さらに、ディスコース・ポライトネス理論の有標行動の概念を用いることによりポライトネス効果への解釈も可能になったと考えられる。次に、相互作用の観点から分析しても、一発話文レベルでは正確な言語行動の分析には限界があると考えられ、より長い談話レベルや文レベルの要素も含めた諸要素を分析する必要があると考えられる。例えば、上記の「謝罪発話文と応答発話文」の負担度が重い場合の分析結果では明らかにならなかった点が、「謝罪談話」、「謝罪行動」の双方を総合的に分析することにより浮き彫りになった。最後に、「謝罪」という言語行動における日韓母語話者の基本状態を同定する

ことにより、共通的に見られる普遍性を明確に捉えることができたと言えよう。例えば、「謝罪談話」に「核談話」が現れていない現象、負担度が重くなると謝罪内容を謝罪される側が受け入れられない現象も現れること、負担度が重くなると相手の怒りを納めようと働きかける現象、女性より男性の方でフェイス侵害度が高い発話を用いている現象等である。

「ディスコース・ポライトネス理論」は、ポライトネス理論の普遍性を求めるためには、談話レベルでの考察が必須であるとし、ポライトネスを対人コミュニケーション行動の一つと捉え、「相互作用」、「ダイナミクス」、「相対性」という観点を中心に体系化していくポライトネス研究へのアプローチである。従来の謝罪研究は、一発話文レベルの分析に留まっている研究が多く、謝罪という言語行動の全体像を解明しようとした試みはあまり行われていないと考えられる。

本章は、謝罪という言語行動を「ディスコース・ポライトネス理論」の観点から、談話レベルから発話文レベルまで、総合的に分析し考察することにより明らかになる現象を探ろうと試みた。更に、対人コミュニケーション行動を解明するためには、「ディスコース・ポライトネス理論」が主張しているように、談話レベルからの分析が必須であることを実証的に示した。

第9章 おわりに

9.1 結論

本研究は、日本語母語話者と韓国語母語話者による謝罪という言語行動の特徴を明らかにし、相互作用における対人配慮行動のメカニズムを Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論」と宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008)の「ディスコース・ポライトネス理論」の観点を用いて考察を行った。また、宇佐美(2006b、2008)の「総合的な会話分析」のアプローチに従い、謝罪という言語行動の特徴を解明するために、グローバルな観点から「謝罪談話」の構造を分析し、ローカルな観点から「謝罪行動」のプロセスや「謝罪発話文と応答発話文」のやりとりの分析を行い考察した。更に、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面を設定し、その中で現れる日本語男女母語話者と韓国語男女母語話者の相違点や類似点を分析し考察した。

以下では、3.1 で示した研究課題に沿って本研究の結果をまとめる。

1. 日本語母語話者と韓国語母語話者は、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面でのどのような「謝罪談話」の構造を持っているのか。さらに、どのような展開を見せながら、謝罪し反応するのか。また、如何なる点が類似しており、如何なる点が相違しているのか。更に、その特徴は何か。

日韓母語話者の謝罪談話の構造の類似点と相違点を全体的に比較しながら、考察を行い、各談話がどのような展開を見せているのかを分析した後、相互作用の観点から見られる具体的な特徴を探った。

日韓母語話者における「謝罪談話」を比較すると、負担度が軽い謝罪場面では、日韓母語話者共に、「謝罪定型表現」を含む「核談話」のやりとりで割と簡単に会話が収束する傾向が現れており、「挿入談話」や「後続関連談話」が多く用いられる類似性が見られた。しかし、韓国語男性では、「核談話」が現れる前に、「交渉談話」のやりとりが行われる会話が半分を占めていた。謝罪談話を構成する各談話の展開で一番多く現れた構造は、日韓母語話者共に、「核談話」のみの構造、「核談話」と「核談話」の間に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れる構造、「核談話」の後に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れる構造であった。その反面、「核談話」が連続し現れる構造は日本語母語話者の方で多く現れ、「核談話」の後に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が連続し現れる構造は韓国語母語話者の方で若干多く現れていた。

負担度が重い謝罪場面には、日韓母語話者共に「前置き談話」、「交渉談話」、「核談話」、「後続関連談話」、「挿入談話」で構成される謝罪談話を用いており、謝罪内容を謝罪され

る側が受け入れる場合と受け入れない場合があることや「核談話」が現れない現象が起こる等、複雑かつ多様な展開や構造を見せていた。

受け入れる場合の謝罪談話を構成する各談話の展開は、謝罪内容が割りと簡単に謝罪される側が受け入れている構造は、韓国語母語話者、特に、女性の方で多く現れていた。その反面、謝罪される側が受け入れない意を示しても、自分の意向を貫徹するため働きかけを積極的に行っている展開が多く見られたが、特に、女性より男性の方で多く現れていた。謝罪内容を受け入れる会話は、韓国語女性で 16 会話中 14 会話、日本語男性で 16 会話中 11 会話、韓国語男性で 16 会話中 10 会話、日本語女性で 16 会話中 8 会話であった。また、「核談話」が現れない会話は、日本語男性で 1 会話、日本語女性で 4 会話、韓国語男性で 1 会話、韓国語女性で 3 会話であった。日本語母語話者では、「核談話」は現れず「交渉談話」のみ現れた会話は、謝罪内容を受け入れなかった。しかし、韓国語母語話者では「交渉談話」のやりとりのみで受け入れる会話も現れていた。受け入れない場合は、受け入れる謝罪談話に比べ「核談話」を多く用いない傾向が見られ、「前置き談話」後に、「交渉談話」のやりとりが行われている会話が多く、更に、「交渉談話」が長く続いている会話も現れていた。

謝罪という言語行動を談話レベルで見ることにより、明らかになった点は、「謝罪場面」にも関わらず「核談話」が現れない現象が起こること、負担度が重くなると受け入れる会話と受け入れない会話が現れること、負担度が重くなると「前置き談話」と「交渉談話」が多く現れること、負担度が軽い場合には「核談話」のみの簡単なやりとりが多く現れることである。

2. 日本語母語話者と韓国語母語話者は、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面でのような「謝罪行動」のプロセスを経て、謝罪し反応するのか、また、如何なる点が類似しており、如何なる点が相違しているのか。更に、その特徴は何か。

謝罪行動のプロセスの類似点や相違点等の特徴を全体的に比較しながら分析し考察を行い、分析結果から見られる日本社会と韓国社会の対人コミュニケーションの特徴を相互作用の観点から考察を試みた。

日韓母語話者における「謝罪行動」を比較すると、負担度が軽い謝罪場面では、日韓母語話者共に、「謝罪」、「責任関連」の 2 種の発話文が、負担度が重い場合より、共通的に多く用いられている特徴が見られた。日韓母語話者の謝罪する側は、主に「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」の 3 種の発話文を用いて謝罪行動を行っているが、韓国語母語話者では、「対人配慮発話文」や「過失修復発話文」もかなり用いていた。謝罪される側は、「過失言及」、「事態確認」、「非難」、「譲歩」の 4 種の発話文を用いて謝罪行動を行っていたが、韓国語母語話者では、「代償要求発話文」もかなり用いていた。しかし、日本語男性は「責任否定や回避」、「非難発話文」を多用する傾向が見られ、日本語女性は「謝罪発話文」を繰り返し多用する傾向や「受諾発話文」を多く用いて受け入れることを簡単に示す傾向が

見られた。一方、韓国語男性は「責任否定や回避」や「非難発話文」を多用しているが、乱暴で激しい言葉を用いる傾向があった。韓国語女性は「謝罪発話文」や「状況説明発話文」を多用する傾向があり、「非難発話文」も多く用いていたが、「過失言及発話文」や「譲歩発話文」を男性よりは多く用いて受け入れることを示していた。

負担度が重い謝罪場面では、日韓母語話者共に、「状況説明」、「対人配慮」、「問題解決」の3種の発話文が、負担度が軽い場合より、共通的に多く用いられている特徴が見られた。日韓母語話者の謝罪する側は、主に「状況説明」、「謝罪」、「責任関連」、「対人配慮」の4種の発話文を用いており、謝罪される側は、「事態確認」、「非難」、「譲歩」、「問題解決」の4種の発話文を用いて謝罪行動を行っているが、韓国語母語話者は、「過失修復発話文」も多く用いていた。

「受け入れる謝罪行動」の特徴は、日本語男性の場合、相手のフェイスに配慮する言語行動を用いながら自分の意向を説明しているが、受け入れるよう積極的に繰り返し働きかけている傾向が見られ、謝罪される側は、「非難発話文」を多く用いているが、「譲歩発話文」も用いながら交渉を行っていた。日本語女性の場合、謝罪する側は、相手のフェイスに配慮する言語行動を用いながら自分の意向を説明しており、謝罪される側は、「非難発話文」は用いているが、「事態確認」、「問題解決」、「譲歩」の発話文を多用して反応していた。一方、韓国語男性の場合、相手のフェイスに配慮する言語行動や相手のフェイスを侵害する言語行動を用いながら自分の意向を説明しているが、受け入れるよう積極的に繰り返し働きかける傾向が見られ、謝罪される側は、「非難発話文」を多く用いており、問題になっている事柄を解決するための働きかけも積極的に行っていた。韓国語女性の場合、相手のフェイスに配慮する言語行動を用いており、自分が引き起こした問題になっている事柄を自ら解決するため積極的に働きかけながら自分の意向を説明しており、謝罪される側は、「非難発話文」は用いているが、「譲歩発話文」も多く用いて反応しており、友人であるという関係や解決の見込みがある状況を考え、受け入れることを多く示していた。

「受け入れない謝罪行動」の特徴は、日本語男性の場合、「状況説明」と「責任関連」を主に用いて繰り返し理解を求めているが、「謝罪発話文」は、「受け入れる謝罪行動のやりとり」よりは多く用いておらず、謝罪される側は、「非難発話文」を多用しており、「問題解決発話文」を繰り返し積極的に行っていた。日本語女性の場合、「謝罪発話文」を用いるやりとりと、用いていないやりとりが半々現れているが、全体的に、「受け入れる謝罪行動のやりとり」よりは多く用いておらず、謝罪される側は、「非難発話文」は勿論、「問題解決」、「事態確認」、「譲歩」を繰り返し用いて積極的に謝罪する側の意向を変更させるため働きかけていた。韓国語男性の場合、「状況説明」や「謝罪」、更に、責任を認める発話や責任を認めない発話を用いて繰り返し理解を求めており、謝罪される側は、「非難発話文」を多用しており、「問題解決発話文」を繰り返し積極的に行っていた。韓国語女性の場合、「謝罪発話文」はあまり用いず、謝罪される側は、「非難発話文」

を多用して受け入れないことを繰り返し言及していた。

謝罪という言語行動を発話文連鎖で見ることにより、明らかになった点は、「否定的な責任関連発話文」と「非難発話文」、「問題解決発話文」と「意向変更発話文」、「過失修復発話文」と「受諾発話文」等、謝罪行動のやりとりは、謝罪する側と謝罪されるがどのような相互作用を行っているかにより異なる傾向が現れるという点である。また、負担度が重くなると相違点よりは類似点が多く現れており、日本語母語話者と韓国語母語話者の使用傾向が類似している。日本語母語話者と韓国語母語話者において、多く用いられている発話文には差があるものの、負担度が軽い謝罪場面では簡単に受け入れる傾向があるのに対し、負担度が重い謝罪場面では複雑なやりとりを通して受け入れるか、受け入れないかで収束するという点では共通していると言える。

3. 日本語母語話者と韓国語母語話者は、負担度が軽い謝罪場面と負担度が重い謝罪場面、どのような「謝罪発話文と応答発話文」を用いて、謝罪し反応するのか、また、如何なる点が類似しており、如何なる点が相違しているのか。更に、その特徴は何か。

謝罪談話内において謝罪する側の「謝罪定型表現」が用いられた発話(謝罪発話文)やその直後に来る謝罪される側の応答(応答発話文)を中心に、「謝罪行動」という発話行為レベルの相互作用を分析し考察を行った。

日韓母語話者の「謝罪発話文と応答発話文」を比較すると、負担度が軽い謝罪場面では、日韓母語話者共に、「直接謝罪」や「責任認め」を多用し謝罪していた。しかし、日本語男性は、「直接謝罪」と共に、不可避な状況による遅刻であることを述べたり、謝罪される側の過失に関する不満を表明したりする発話を用いており、日本語女性は、何かを奢ることを言及する発話を若干多く用いたりする等の相違点が見られた。一方、韓国語男性は、不可避な状況による遅刻であることを述べたり、謝罪される側の過失に関する不満を表明したり、自分の過失の代わりに何かを奢ることに言及したりする発話を多く用いており、韓国語女性は、遅れた理由を述べたり、謝罪される側の怒りを緩和させるための発話を用いたりする傾向が強いといった相違点が見られた。一方、「応答発話文」の日韓母語話者の使用傾向は、相違している使用傾向を見せていると考えられた。「肯定的な応答」は、韓国語母語話者が3割程度であるのに対し、日本語母語話者は6割程度と、2倍程度多く用いているのがわかった。「ニュートラルな応答」は、日本語母語話者では女性の方で、韓国語母語話者は男性の方で多く用いられていた。「否定的な応答」は、使用割合が最も少ない日本語女性に比べ、韓国語男性は5倍以上多く用いているのがわかった。

負担度が重い謝罪場面では、日韓母語話者共に、「直接謝罪」と共に「責任認め」、「事態言及」、「なだめ」もかなり用いて謝罪しており、負担度が重くなると、より多様な発話と共に「謝罪定型表現」を用いている共通点が見られた。「肯定的な応答」を用いる割合は、日本語男性で4割程度、日本語女性でほぼ6割程度であり、韓国語母語話者の男女は5割

程度であった。「ニュートラルな応答」は、日韓母語話者共に女性の方で多く用いられていたが、「否定的な応答」は、日韓母語話者共に男性の方で多く用いられていた。

4. 1)、2)、3)で明らかになった日本語母語話者と韓国語母語話者の「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」における類似点と相違点を、宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008)の「ディスコース・ポライトネス理論」から考察することにより、明らかになることは何か。

「謝罪談話」をみると、負担度が軽い謝罪場面では、日韓母語話者共に現れた「核談話」のみ、あるいは、「核談話」が一回現れてから「挿入談話」または「後続関連談話」が現れる構造や、何回か現れる「核談話」と「核談話」の間に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が現れる構造を基本状態として同定した。しかし、日韓母語話者で相違点が見られた「核談話」が連続して現れる構造、「核談話」後に「挿入談話」あるいは「後続関連談話」が連続して現れる構造、「交渉談話」のやりとりが行われてから「核談話」が現れる構造は、有標行動として捉えた。「核談話」が連続して現れることは、韓国語母語話者では、過剰行動でありマイナス効果を引き起こすと解釈した。一方、「交渉談話」のやりとりが行われてから「核談話」が現れる構造は、過少行動でありマイナス効果が生じると解釈した。負担度が重い謝罪場面では、多く現れた「受け入れられる場合」、「核談話」が現れる場合、「多く用いられている「交渉談話」や「核談話」の展開や構造」を基本状態として同定し、「受け入れられない場合」、「核談話」が現れない場合」「あまり用いられていない「交渉談話」や「核談話」の展開や構造」を有標行動として捉えて考察を行った。受け入れられない場合の特徴は、日本語母語話者では「核談話」が現れない会話で謝罪内容が受け入れられない現象が起こるため、過少行動であると解釈しマイナス効果を生むと判断した。しかし、韓国語母語話者では「核談話」が現れない会話でも謝罪内容が受け入れられる現象が現れているため、この有標行動はマイナス効果を生むと判断しにくいと解釈した。

次は、「謝罪行動」をみると、負担度が軽い謝罪場面では、日本語母語話者は、主に、「状況説明・謝罪・責任関連発話文」を用いて謝罪し、「過失言及・事態確認・非難・譲歩発話文」を用いて応答していた。一方、韓国語母語話者は、「状況説明・謝罪・責任関連・対人配慮・過失修復発話文」を用いて謝罪しており、「過失言及・事態確認・非難・譲歩・代償要求発話文」を用いて応答していた。これらの日韓の基本状態から離脱した有標行動は、男性の方で多く用いられていた「否定的な責任関連発話文」や「非難発話文」であると捉え、過少行動となり、マイナス・ポライトネス効果が生まれると解釈した。更に、女性の方で多く用いられていた「過失言及発話文」は、過剰行動として捉えられ、マイナス・ポライトネス効果を生むこともあると解釈した。負担度が重い謝罪場面では、日本語母語話者は、主に「状況説明・謝罪・責任関連・対人配慮発話文」を用いて謝罪し、「事態確認・非難・譲歩・問題解決発話文」を用いて応答していた。一方、韓国語母語話者は、「状

況説明・謝罪・責任関連・対人配慮・過失修復発話文」を用いて謝罪しており、「事態確認・非難・譲歩・問題解決発話文」を用いて応答していた。これらの日韓の基本状態から離脱した有標行動は、日本語母語話者では、男性の方で多く用いられていた「状況説明発話文」と「非難発話文」であると捉え、マイナス・ポライトネス効果があると解釈した。また、女性の方で多く用いられていた「事態確認発話文」は、許容範囲を超える過剰行動となり、不快等のマイナス・ポライトネス効果があると捉えた。韓国語母語話者では、男性が多く用いている「非難発話文」がマイナス・ポライトネス効果を引き起こすと判断し、女性が多く用いている「譲歩発話文」は、プラス効果があると解釈した。

最後に、「謝罪発話文と応答発話文」をみると、負担度が軽い謝罪場面では、日韓母語話者共に、「直接謝罪」や「責任認め」の発話を用いることが基本状態であり、「責任否認」、「不満表明」、「理由言及」等に言及することは有標行動として捉えられると解釈した。「応答発話文」においては、日本語母語話者では、「肯定的な応答」が基本状態になるが、韓国語母語話者では、「肯定的な応答」のみならず、「ニュートラルな応答」、「否定的な応答」も基本状態になると捉えた。負担度が重い謝罪場面では、日韓母語話者共に、「直接謝罪」、「責任認め」、「なだめ」、「事態言及」の多様な発話を用いることが基本状態であり、「応答発話文」においても「肯定的な応答」、「ニュートラルな応答」、「否定的な応答」の多様な応答を用いて反応している基本状態が見られた。

5. 日韓母語話者の「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用における対人配慮行動のメカニズムの特徴が両言語社会で示唆できる点は何か。

「謝罪談話」の相互作用における対人配慮行動のメカニズムの特徴として考えられるのは、負担度が軽い謝罪場面では、日本語男性は、相手のネガティブ・フェイスを侵害してしまった状況を回復させるため、「謝罪」を用いた談話を多用する傾向が日本語女性より強いが、日本語女性は、ネガティブ・ポライトネスの状況の中で、相手に近づきたい欲求が働くポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであると判断される「挿入談話」を用いて、互いに対人配慮行動を行う傾向が日本語男性より強いと考えられた。一方、韓国語男性は、「核談話」が現れる前に、受け入れない「交渉談話」のやりとりが行われる傾向もあり、親しい友人関係では侵害された相手のネガティブ・フェイスを軽減するための働きかけをあまり行っていない傾向があるのではないかと考えられた。韓国語女性は、韓国語男性に比べ、「核談話」が多く用いられているものの、相手に過失がある場合には、直接的に不満な気持ちを表す傾向が強く、これらの傾向は韓国語男性でも多く見られた。

負担度が重い謝罪場面では、日本語男性は、会話が受け入れられるまで、「核談話」や「交渉談話」を用いて繰り返し積極的に働きかける傾向があるが、日本語女性は直接的に受け入れないことを示す謝罪される側の応答に責められると自分の意向を変更する傾向が見られた。つまり、日本語女性の謝罪する側は、相手側から問題解決のため責められると、「自

分」に主体性を持たせるのではなく、「相手」の意向、あるいは、気持ちを優先し、自分の意向をあきらめる傾向があるのではないかと考えられた。更に、日本語母語話者は、謝罪される側のネガティブ・フェイスを侵害してしまったことに対して、「謝罪」を用いることが重要であり、「受け入れない謝罪談話」は、「受け入れる謝罪談話」より、オフ・レコード・ストラテジーが多用される傾向が強く現れた。一方、韓国語男性は、会話が受け入れられるまで、「核談話」や「交渉談話」を用いて繰り返し積極的に働きかける傾向があるが、韓国語女性は、自分が引き起こした不愉快な状況を解決するため代案を提示するなどの解決策を積極的に行う傾向があった。更に、韓国語母語話者共に、「受け入れる謝罪談話」は、韓国語男性で、「友人関係」であることを強調する発話が多く現れたが、これは、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー4である集団内アイデンティティマーカースを使用することであり、韓国語女性では、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー10である提案、約束するを多用する傾向が見られ、更に、謝罪される側もポジティブ・ポライトネス・ストラテジー1である聞き手(の関心、欲求、必要、所有物)に注意・注目するストラテジーを使用しており、謝罪する側と謝罪される側の両方が謝罪場面にも関わらず、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを多く用いる傾向があるのではないかと考えられた。「受け入れない謝罪談話」では、韓国語男性では、若干無礼そうな印象を与えるやりとりも、「受け入れる謝罪談話」より多く現れる傾向が見られた。

「謝罪行動」の相互作用における対人配慮行動のメカニズムの特徴として考えられるのは、日韓母語話者の類似点は、軽い謝罪場面では、謝罪する側は、自分のフェイスを守りたいという欲求よりは、相手のフェイスを侵害したくないという欲求が優先され、「謝罪発話文」が多用されているが、重い謝罪場面では、謝罪内容が重くて深刻であるため、自分のフェイスを守りたいという欲求と相手のフェイスを侵害したくないという欲求が同時に優先され、「謝罪発話文」は減り、代わりに、「状況説明発話文」や「対人配慮発話文」が増えているのではないかと考えられた。また、謝罪される側は、軽い謝罪場面では、相手のフェイスを配慮し、相手のフェイスを侵害したくないという欲求を優先し、謝罪内容を受け入れているが、重い謝罪場面では、自分のフェイスや相手のフェイスを考慮し、「問題解決発話文」も多用しているのではないかと考えられた。

しかし、負担度が軽い謝罪場面では、日本語男性の謝罪する側は、相手のフェイスを配慮する言語行動と相手のフェイスを侵害する言語行動を用いて自分の気持ちを直接表しており、謝罪される側も、相手のフェイスを配慮し受け入れることで会話を収束しているが、フェイス侵害度が高い発話文も用いて自分の気持ちを直接表していた。日本語女性は謝罪する側や謝罪される側共に、「否定的な責任関連発話文」や「非難発話文」は、あまり用いず、主に、相手のフェイスを配慮する言語行動を用いてやりとりし、簡単に謝罪を受け入れる傾向があった。一方、韓国語男性の謝罪する側は、相手のフェイスを配慮する言語行動と相手のフェイスを侵害する言語行動を用いて自分の気持ちを直接的に表しているが、

特に、親しい友人間のやりとりでは、若干無礼そうに不満の気持ちを述べて、相手のフェイスを侵害する傾向が強いと考えられた。謝罪される側も、受け入れることで会話を収束させているが、フェイス侵害度が高い「非難発話文」も多く用いて自分の気持ちを直接的に表しており、謝罪する側と同様に、無礼そうで激しい言葉を用いて相手を責めるような発話を多用していた。韓国語女性は謝罪する側は、無礼そうで激しい言葉はあまり用いずに、不満な気持ちを述べており、謝罪される側も「非難発話文」は多用しているが、謝罪する側と同様に、無礼そうで激しい言葉はあまり用いていない等、相手のフェイスを配慮する言語行動を行っていた。

負担度が重い謝罪場面で受け入れる謝罪行動の特徴は、日本語男性の謝罪する側は、主に、相手のフェイスに配慮する言語行動を用いながら自分の意向を説明しているが、謝罪される側が受け入れるよう積極的に繰り返し働きかけている傾向が見られた。謝罪される側は、フェイス侵害度が高い「非難発話文」を多く用いているが、フェイスを配慮する「譲歩発話文」も用いながら交渉を行っており、友人である謝罪する側の立場を考えて、結局受け入れることを示していた。これに対し、日本語女性の謝罪する側は、不満な気持ちを表す傾向も若干見られるが、主に、相手のフェイスに配慮する言語行動を用いながら自分の意向を説明していた。謝罪される側は、フェイス侵害度が高い「非難発話文」は用いているが、「事態確認」、「問題解決」、「譲歩」の発話文を多用して反応しており、友人である謝罪する側の立場を考えて、結局受け入れることを示していた。一方、韓国語男性の謝罪する側は、主に、相手のフェイスに配慮する言語行動や相手のフェイスを侵害する言語行動を用いながら自分の意向を説明しているが、謝罪される側が受け入れるよう積極的に繰り返し働きかける傾向が見られた。謝罪される側は、「非難発話文」を多く用いており、問題になっている事柄を解決するための働きかけも積極的に行っているが、友人である謝罪する側の立場を考えて、結局受け入れることを示していた。これに対し、韓国語女性の謝罪する側は、相手のフェイスに配慮する言語行動を用いており、自分が引き起こした問題になっている事柄を自ら解決するため積極的に働きかけながら自分の意向を説明していた。謝罪される側は、「非難発話文」は用いているが、「譲歩発話文」も多く用いて反応しており、友人であるという関係や解決の見込みがある状況を考え、受け入れることを多く示していた。

負担度が重い謝罪場面で受け入れない謝罪行動の特徴は、日本語男性の謝罪する側は、「状況説明」と「責任関連」を主に用いて繰り返し理解を求めているが、「謝罪発話文」は、「受け入れる謝罪行動のやりとり」よりは多く用いていなかった。また、謝罪される側は、直接的な「非難発話文」を多用しており、「問題解決発話文」を繰り返し積極的に行っているため、結局、謝罪する側が自分の意向を変更する会話が現れていた。これに対し、日本語女性の謝罪する側は、「謝罪発話文」を用いるやりとりと、用いていないやりとりが半々現れているが、全体的に、「受け入れる謝罪行動のやりとり」よりは多く用いていなかった。謝罪される側は、「非難発話文」は勿論、「問題解決」、「事態確認」、

「譲歩」を繰り返し用いて積極的に謝罪する側の意向を変更させるため働きかけていた。一方、韓国語男性の謝罪する側は、「状況説明発話文」や「謝罪発話文」、更に、責任を認める発話や責任を認めない発話を用いて繰り返し理解を求めている。謝罪される側は、「非難発話文」を多用しており、「問題解決発話文」を繰り返し積極的に行っているため、結局、謝罪する側が自分の意向を変更する会話や保留する会話、更に、結果なしで曖昧に終了する会話が現れていた。これに対し、韓国語女性の謝罪する側は、「謝罪発話文」はあまり用いず、謝罪される側は、フェイス侵害度が高い「非難発話文」を多用して受け入れないことを繰り返し言及しており、結局、保留する会話や結果なしで曖昧に終了する会話が現れていた。

「謝罪発話文と応答発話文」における相互作用における対人配慮行動のメカニズムの特徴として考えられるのは、負担度が軽い謝罪場面では、日本語男性は、「謝罪」に対して、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いて相手の侵害されたフェイスを立てるため働きかけているが、自分の不愉快な気持ちも直接的に表し、フェイス侵害度が高い「非難」も比較的多く用いていた。日本語女性は、「謝罪」に対して、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いて相手の侵害されたフェイスを立てるため働きかけており、フェイス侵害度が高い発話は避けようとする傾向が見られた。一方、韓国語母語話者は、「謝罪」に対して、更なる情報を求めたり、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いて相手の侵害されたフェイスを立てるため働きかけているが、フェイス侵害度が高い「非難」もかなり多用するという傾向が見られた。負担度が重い謝罪場面では、日本語母語話者は、負担度が軽い謝罪場面に比べ、「肯定的な応答」を用いる傾向は減り、「ニュートラルな応答」と「否定的な応答」が相対的に多く現れていたが、男性より女性の方が、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いて相手の侵害されたフェイスを立てるため働きかけているが、受け入れられる会話は男性の方で多く現れていた。一方、韓国語母語話者は、負担度が軽い謝罪場面に比べ、「肯定的な応答」を多く用いていたが、韓国語女性は情報を求めながら問題になっている不愉快な事態を把握しようとする働きかけを、韓国語男性は自分の不快な感情を謝罪する側に直接に伝達しようとする働きかけを多く用いる傾向が見られた。

最後に、日韓母語話者の謝罪という言語行動の相互作用における対人配慮行動のメカニズムの特徴について述べる。

「謝罪」は、相手のネガティブ・フェイスを配慮するネガティブ・ポライトネス・ストラテジーであるが、岡本(2007)が指摘するように、話し手自身の認められたいというポジティブ・フェイスを傷つける行為でもある。つまり、相手のフェイスと自分のフェイスを同時に考えなければならない言語行動であるため、相手のフェイスを優先したら「謝罪発話文」の出現率が高くなり、自分のフェイスを優先したら「謝罪発話文」の出現率が低くな

る可能性があると考えられる。言い換えれば、女性は男性に比べ、相手のフェイスを配慮する言語行動を行おうとする傾向があり、男性は女性に比べ、自分のフェイスを傷つけない傾向が強いのではないかと考えられる。Lakoff(1975)は、女は人間中心で、自分自身およびお互い同士の心理状態、それぞれの立場に興味を寄せ、男は事物中心で、外界のものごとに興味をもつと述べている。この指摘のように、謝罪場面においては、男性は、問題になっている事柄を中心に考えているので、互いを責める発話を多く用いていたと考えられる。しかし、女性は、問題になっている事柄と互いの心理状態、それぞれの立場までも考えているので、互いを責める発話は男性よりは少ないのではないかと考えられる。

日本語母語話者と韓国語母語話者共に、「謝罪」という言語行動を行う際、自分と相手のフェイスを考慮し働きかけているが、負担度が軽い場合には、相手のフェイスを優先し受け入れることで収束している傾向が多く見られた。しかし、負担度が重い場合には、自分のフェイスや相手のフェイスを同時に考え、受け入れるか、受け入れないかを判断する等、より複雑なフェイスワークを行っている。宇佐美(2008:18-19)は、Brown and Levinson(1987)のフェイス侵害度の見積もり公式を修正し、「話し手のフェイス保持欲求度」と「聞き手のフェイス保持尊重度」の兼ね合い、当然性(権利と義務)の観点、傍聴者の有無の要因など、Rx 要因の下位項目の選定と位置づけを行うことを主張している。さらに、いくつかのやり取りだけにとどまらないより長い会話におけるグローバルな観点からのフェイスワークを、「フェイス侵害行為」だけでなく「フェイス充足行為」を加えて捉えることを述べており、さらには、「人間関係の中・長期的な継続の必要性、希望、見通しの有無」という、よりマクロなレベルから話者を捉え、「フェイス均衡原理(Face-balance principle)」という捉え方を導入することを主張している。

本研究は、親しい友人間の会話であるため、人間関係の長期的な継続の必要性が高い会話である。負担度が軽い謝罪場面では、謝罪内容が簡単であるため、謝罪により謝罪する側が自ら「フェイス侵害行為」を行なうと、謝罪される側は「フェイス充足行為」を用いて、崩された謝罪する側のフェイスを立てており、「フェイス均衡」が現れるよう働きかけていると考えられる。しかし、負担度が重い謝罪場面では、謝罪内容が複雑であるため、謝罪する側も簡単に自ら「フェイス侵害行為」を行なっていないと考えられる。したがって、負担度が重い謝罪場面で「謝罪定型表現」を用いる傾向が少なくなる。また、謝罪される側は、簡単に「フェイス充足行為」を用いておらず、謝罪する側に対する「フェイス侵害行為」も多用しながら、相互作用を通して、段々「フェイス均衡」が現れるよう働きかけていると考えられる。例えば、交通事故のように深刻な状況では、事故を起こしてしまった加害者は「自分の過ちにより人に迷惑をかけている状況」であるため、謝罪が現れることが予想されるが、実際には、文化の差はあるものの、深刻な謝罪場面では謝罪が現れない傾向が強いと考えられる。その理由は、「謝罪定型表現」の有無より、問題になっている事柄の解決が重要であり、謝罪＝責任認めという暗黙の社会的なルールにより、むしろ謝罪しない現象が起こるのではないかと考えられる。

本研究で設定された 2 つの謝罪場面では、日韓母語話者共に、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーとポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いて、謝罪行動を行っていたが、日本語母語話者はネガティブ・ポライトネス・ストラテジーを韓国語母語話者より多く用いている傾向があり、一方、韓国語母語話者はポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを日本語母語話者より多く用いる傾向が見られた。

9.2 ポライトネスの研究への示唆

「ポライトネス理論」は普遍理論として捉われているが(Brown and Levinson(1987)、宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008)等)、謝罪に関する本研究の研究結果を取り上げて、その普遍性について考察する。

まず、「謝罪談話」における分析結果をグローバルな観点で考えると、1)負担度が軽い謝罪場面では、謝罪内容が受け入れられることで収束している。2)負担度が重くなると「核談話」は減り「交渉談話」は増える傾向が見られる。3)負担度が重くなると「核談話」が現れない現象が生じる。4)負担度が重くなると、謝罪内容を受け入れる会話と受け入れない会話が見れている。これらの4つは、「謝罪談話」の分析結果で、日韓男女母語話者で共通的に現れている傾向である。これらの結果は、謝罪の相互作用を談話レベルで捉え、分析し考察することにより、明らかになった点である。

負担度が軽い場合の分析結果を談話レベルで簡単にまとめると、謝罪される側が謝罪する側の謝罪を受け入れることで会話は収束していることであろう。謝罪に関する優先応答は謝罪を受け入れることである。謝罪される側のネガティブ・フェイスを侵害してしまったことに対し謝罪し、謝罪される側は受け入れる意を示すことが、対人配慮行動であるポライトネスの観点からは優先すべき言語行動であろう。しかし、文化により、受け入れる意の示し方は異なる可能性があると考えられる。ある文化では、言葉を用いて明示的に表すことが優先され、ある文化では、非明示的に受け入れる意を示すことが多いかもしれないし、ある文化では言葉を用いて受け入れる意を示さなくても人間関係の継続を表すことで間接的に受け入れる意を示すかもしれない。さらに、「謝罪定型表現」を用いることも、文化により異なる可能性はある。ある文化では、「謝罪定型表現」を用いて謝罪することが重要に思われるかもしれないし、ある文化では、「謝罪定型表現」がなくても、申し訳ない意を示す仕草で簡単に済ませることが許される範囲として捉えられる場合もあるだろう。

しかし、負担度が重くなると、つまり、謝罪内容が複雑で、フェイス侵害度も高くなり、補償あるいは利益の問題まで関わりがあると、これらの対人配慮行動の基本状態は変わると予想される。上記の2)、3)、4)は、負担度が重い謝罪場面で現れた基本状態である。負担度が重くなると、謝罪される側のネガティブ・フェイスを侵害してしまったことに対し謝罪はするが、問題になっている事柄に集中し、それを解決するため働きかける傾向が多く現れると考えられる。さらに、謝罪する側と謝罪される側がどのように働きかけるかによって受け入れる場合と受け入れない場合が見れている。

次に、「謝罪行動」における分析結果から考えると、1)負担度が軽い謝罪場面では、「謝罪発話文」、「状況説明発話文」、「責任関連発話文」といった発話文が現れ、「事態確認発話文」、「譲歩発話文」、「非難発話文」といった発話文が現れるが、受け入れることで収束する。2)負担度が重い謝罪場面では、「謝罪発話文」、「状況説明発話文」、「責任関連発話文」に加えて「対人配慮発話文」の発話文が現れ、「事態確認発話文」、「譲歩発話文」、「非難発話文」に加え「問題解決発話文」の発話文が現れているが、そのやりとりにより、謝罪内容を受け入れる会話と受け入れない会話が現れている。負担度が軽い謝罪場面では、謝罪される側が謝罪する側の謝罪を受け入れることで会話は収束していると述べたが、実際に用いられる発話文のやりとりは簡単である。謝罪する側はネガティブ・ポライトネス・ストラテジーである「謝罪」を多く用いているが、「状況説明発話文」と「責任関連発話文」のような発話文を用いており、謝罪される側は、謝罪する側のネガティブ・フェイスを配慮し受け入れてはいるが、「非難発話文」のように、相手のフェイスを侵害する発話文も用いている。しかし、文化により、謝罪内容により、用いられる発話文には差があると予想される。負担度が重くなると、相手の怒りを納めようとする働きかけがより積極的に行われており、謝罪される側も、問題になっている事柄を解決するための働きかけがより積極的に行われている。

つまり、ポライトネス研究の普遍理論をより正確に捉えるためには、グローバルな観点とローカルな観点の双方で分析するのが必要であることを示唆していると考えられる。さらに、ある言語行動の全体像を捉えるためには、相互作用の観点が必須であることも示唆している。

9.3 外国語教育の観点からの示唆

宇佐美(2008:165 - 166)は、第二言語で会話を行う際には、情報を伝達するだけでなく、コミュニケーションを円滑に行えるようになることも必要であるといい、談話研究の成果を踏まえて「オーラル・プロフィシエンシー」を、(1)伝達意図の達成度：当該言語における意思疎通ができる能力、(2)ポライトネスの適切性：当該言語における意思疎通や感情のコミュニケーションが、対人関係的観点から円滑に行える能力、(3)言語行動の洗練度：当該言語・文化において洗練されているとみなされている言語行動ができる能力、の3つの観点から複合的に捉えることを提案している。

また、ネウストプニー(1983、1991)は、社会学者ハイムズの理論をもとに、日本語教育は単なる文法教育ではなく、インターアクション教育をめざすべきであると主張し、その「インターアクションのための能力」の内容は、「社会文化能力」「社会言語能力」「言語能力」の各要素からなる「リテラシー(何かを理解し、その理解を行動のために使うもの)」という考え方を示している。

続いて、飛田(2001)は、送り手のメッセージを受け手が自分の文化のフィルターを通して意味あるものに変えることを知覚(perception)といい、この知覚が不正確なものとなる要因と

して、認知の類似性、ステレオタイプ(stereo type, 固定観念、定形概念、紋切り型)、エスノセントリズム(ethnocentrism, 自文化中心主義、自民族中心主義)の三つを挙げている。さらに、細川(2002)は、実際のインターアクションの場においては、抽象的な枠組みとしての「文化」ではなく、具体的な「他者」のイメージとして「文化」を想定し、そこで個人間のコミュニケーションが行われるのではないかという仮説が成立すると説明している。

最後に、宇佐美(2012: 81-82)は、これからの日本語教育は、教室でのやりとりや活動、非言語行動も含む、シナリオがないという広い意味での「自然なコミュニケーション・データ」に基づく研究が、日本語教育のためのコミュニケーション研究の一つの核になっていくことが必要である、そのためには、文型や機能だけでなく、様々な「活動場面」で現れうる表現や言語・非言語ストラテジーを記述し、可視化すること、および、無限にあるとも言える活動場面の中から何を取り上げるかについての基準や条件を明確にしていき、それらの活動場面を体系化して、日本語教育の現場で扱えるような形にしていくための研究が必須であると主張している。

これらの研究者らの指摘のように、外国語教育は、単なる文法教育ではなく、「インターアクションのための能力」の向上を目指すべきである。また、抽象的な枠組みとしての「文化」に捉われず、ステレオタイプ、エスノセントリズムなどに注意しながら、円滑なコミュニケーションができるよう指導することが重要であろう。さらに、より「自然なコミュニケーション・データ」に基づく研究が、外国語教育の現場に応用できるように工夫し研究することが重要であると考えられる。

本研究では、「謝罪」という言語行動における日本語母語話者と韓国語母語話者の特徴を、「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」を分析し総合的に考察した。本研究の会話データ収集法は、ロールプレイである。会話のインタラクションと話者交替に関連するコミュニケーション行為の順序が研究の焦点である時は、ロールプレイのようなインタラクションの性質を持つ手法を取る必要がある(Kaspar(2000 / 田中他訳 2004:136))、ロールプレイの短所を補足した「タスク先行型ロールプレイ」(山内(1999、2000))、「半構造化ロールプレイ」(山本(2005))等の説明や報告を見ると、ロールプレイを用いた外国語教育の有効性が多く現れている。特に、謝罪、不満表明、非難、断りなどの否定的な言語行動の相互作用を外国語教育の現場で生かす手法としてロールプレイは重要な役割を果たすことができると考えられる。

本研究は、日本語母語話者と韓国語母語話者が母国語で会話しているデータであるが、教育現場で用いることも可能になると考えられる。例えば、まず、「謝罪」という言語行動は、「謝罪し受諾する」という単純なやりとりではないことを認識させ、次に、日本語母語話者と韓国語母語話者の「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」の特徴について説明し、続いて、日本社会と韓国社会の類似点や相違点などを考えさせて、最後に、「謝罪」という言語行動の円滑な対人コミュニケーションの仕方について学習する手順で行うことができるだろう。ここで、重要なことは、日本語教育と韓国語教育の現場で、日

本社会と韓国社会の特徴のみ学習させることなく、上記の宇佐美(2008)が提案しているように、(1)伝達意図の達成度、(2)ポライトネスの適切性、(3)言語行動の洗練度を複合的に捉えて、円滑な対人コミュニケーション能力が向上することであろう。例えば、負担度が重い謝罪場面では、謝罪内容を受け入れない会話が現れていたが、その際、行われるやりとりの特徴を、謝罪内容を受け入れる会話のやりとりの特徴と比較しながら提示することも一つの方法であると考えられる。

また、宇佐美(2008:165)は、「ディスコース・ポライトネス理論」の観点から考えると、第二言語における円滑なコミュニケーションの方法を身につけるということは、目標言語における様々な活動の型における「談話の基本状態」や「談話を構成する諸要素の基本状態」を適切に見積もることができるようになるということであり、また、適切な有標行動が行えるようになるということであると述べている。前章で考察した「ディスコース・ポライトネス理論」の観点の基本状態と有標行動等の概念を用いて、異文化間コミュニケーションの特徴を説明することも重要であると考えられる。例えば、日本語母語話者が多く用いていた有標行動と韓国語母語話者が多く用いていた有標行動を相対的に捉えて、その特徴を明らかにし、自文化の立場で言語行動を解釈することの問題点を指摘しながら学習させることも可能であろう。

外国語でコミュニケーションをする場合には、発音や語彙、文法などのいわゆる言語学的知識に加えて、その言語におけるものの考え方や相互作用のルールを知っていることが重要である。そうでないと、「ことば」は正しく使っても思わぬ誤解や摩擦が生じたりする(中田、1989)。「謝罪」は、非常に複雑かつ微妙な言語行動であるため、異文化コミュニケーションで誤解や摩擦が起こりやすい。したがって、教育現場で「謝罪」という言語行動を正確に学習させることの必要性が高まっている。

9.4 「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」に関する総合的考察

本研究は、日本語母語話者と韓国語母語話者の謝罪という言語行動の特徴を明らかにし、相互作用における対人配慮行動のメカニズムを解明するため、グローバルな観点から「謝罪談話」の構造や、ローカルな観点から「謝罪行動」のプロセス、さらに「謝罪発話文と応答発話文」のやりとりを総合的に分析し考察を行った。

本研究で捉えている「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」の定義は、以下のようである。

「謝罪談話」とは、話し手のあやまちや相手への被害などへの責任を認め、許しを乞い、それによって相手との人間関係における均衡を回復する行為が含まれている意味的なまとまり。

「謝罪行動」とは、「謝罪」を行うための先行するやりとり、「謝罪」が行われているやりとり、「謝罪」が行なわれた後のやりとりなど、「謝罪内容」と関連した話し手と聞き手のすべての相互作用を指す。

「謝罪発話文」とは、「謝罪定型表現」が用いられた発話文であるが、一つの発話文の中に一つあるいは一つ以上の「謝罪定型表現」が用いられた発話文を指す。一方、「応答発話文」とは、「謝罪発話文」に対し謝罪される側が直後に反応する発話文を指す。

本研究では、「談話」を「結束構造と結束性を持つ意味的なまとまりがある言語行動の断片」であると捉えており、「行動」は「その中で行われている話し手と聞き手の実際のやりとり」であると捉え、「発話文」⁸³は「会話という相互作用の中における「文」と捉えている。

言語を用いる人間の相互作用を明らかにするためには、グローバルな観点の談話レベルやローカルな観点の発話文レベルを総合的に分析することにより正確かつ明確に分析することができる。また、「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」では、負担度が軽い場合より負担度が重い場合に日韓母語話者の使用傾向が類似していた。

「謝罪談話」においては、負担度が軽い場合には、主に「核談話」を用いて、相手のフェイスを配慮し、受け入れることで会話が収束されている。さらに、謝罪内容と直接に関係ない「挿入談話」を用いて、謝罪場面和らげようとする働きかけは、負担度が軽い場合に多く現れ、互いのフェイスを配慮しようとする傾向が伺われる。しかし、負担度が重くなると、「核談話」のみならず、「前置き談話」や「交渉談話」も多く現れており、自分のフェイスを考え「核談話」を用いていない傾向も共通的に現れている。

「謝罪行動」においては、負担度が軽い場合には、謝罪する側は、自分のフェイスを守りたいという欲求よりは、相手のフェイスを侵害したくないという欲求が優先され、「謝罪発話文」が多用されているが、負担度が重くなると、自分のフェイスを守りたいという欲求と相手のフェイスを侵害したくないという欲求が同時に優先され、「謝罪発話文」は減り、代わりに、「状況説明発話文」や「対人配慮発話文」が増えていると考えられる。また、謝罪される側は、負担度が軽い場合には、相手のフェイスを配慮し、相手のフェイスを侵害したくないという欲求を優先し、謝罪内容を受け入れているが、負担度が重くなると、自分のフェイスや相手のフェイスを考慮し、「問題解決発話文」も多用しており、受け入れる現象や受け入れない現象が現れていると考えられる。すなわち、謝罪する事柄が重くなればなるほど、謝罪する側と謝罪される側は、複雑な「フェイス侵害行為」や「フェイス充足行為」を行いながら、「フェイス均衡」のため、互いに働きかけていると考えられる。

「謝罪発話文」では、負担度が軽い場合には、相手のネガティブ・フェイスを配慮し、謝罪と責任認めを用いる傾向が多く現れているが、負担が重くなると、相手のネガティブ・フェイスを配慮する発話のみならず、自分のフェイスを考えて事態を言及する発話や、相手のポジティブ・フェイスに訴えかける「なだめ」も用いる傾向があると考えられる。一方、「応答発話文」では、日韓による、共通的な使用傾向はあまり現れていないが、韓国語母語話者より、日本語母語話者の方が、負担度の軽重により敏感に反応している傾向が伺

⁸³ 詳細な説明は、3.2.3.1を参照

われる。すなわち、負担が重くなると、相手のフェイスや自分のフェイスを考え、「フェイス均衡」のため、互いがより積極的に働きかけていると考えられる。

「ポライトネス普遍理論」では、文化による差などはあるものの、根本的な人間の対人配慮行動は普遍的であるという。本研究の結果から考えると、謝罪という言語行動は、日韓による、男女による差はあるものの、負担度が軽い場合には、相手のフェイスを優先する言語行動が現れているが、負担度が重くなると、自分のフェイスや相手のフェイス、両方を考慮し、より複雑かつ多様な言語行動を行っている傾向が共通的に現れている。

しかし、「謝罪発話文や応答発話文」のローカルな観点からの分析より、「謝罪行動」や「謝罪談話」のよりグローバルな観点からの分析を通じて、これらの現象が明確かつ正確に捉えられることができると考えられる。つまり、ポライトネス理論の普遍性を求めるためには、談話レベルでの考察が必須であるとし、ポライトネスを対人コミュニケーション行動の一つと捉え、「相互作用」、「ダイナミクス」、「相対性」という観点を中心に体系化していくポライトネス研究へのアプローチである「ディスコース・ポライトネス理論 (Discourse Politeness theory)」の主張を裏付ける研究結果であると考えられる。

以上のように、ある言語行動を正確に捉えるためには、「相互作用」、「ダイナミクス」、「相対性」という観点から談話レベルで考察することが重要である。「謝罪発話文と応答発話文」のように、一発話文レベルでの分析のみ行うと総合的な言語行動の特徴を捉えることが困難であり、正確な考察にも限界があると考えられる。相互作用が行われる会話では、本研究の研究結果のように、最初は受け入れない意を示しても、相互作用を経て、結局受け入れることで収束される会話が多く現れている。これらの現象は、謝罪行動のみならず、「誘い行動」や「依頼行動」のような言語行動にも共通的に見られるのではないかと予測される。例えば、最初は、誘い手や依頼手の要望に応じていないが、やりとりを行う過程を経て、結局、相手の要望に応じる会話が現れると考えられる。これらの結果を一発話文レベルで解釈すると、謝罪・誘い・依頼の内容が不成立になるが、談話レベルで考えると成立になる正反対の解釈になると考えられる。「総合的会話分析」は、言語社会心理学的アプローチ(宇佐美 1997b、1999)に、ローカルな観点(ローカル分析)とグローバルな観点(グローバル分析)という考え方をより明確に組み込んだものである(宇佐美 2008a)。本研究は、会話の分析ではわりと新しい「総合的会話分析」のアプローチ(鄭栄美、2011)を実証的な研究を通して、その主張を裏付けることができたと考えられる。

本研究では、一発話文一発話文の実際のやりとりが謝罪行動になり、そのやりとりが意味的なまとまりを成すものを謝罪談話として捉えている。つまり、発話文レベルや談話レベルは各々独立しているものではなく、関連性を持ち、相互を補完している。従って、発話文レベルや談話レベル双方を分析して結果を導き出し考察を行い解釈する過程が重要であると考えられる。

本研究は、日韓母語話者における謝罪という言語行動を、談話レベルから発話文レベルまで分析し、ポライトネス理論から考察を行い、円滑な対人配慮行動のメカニズムを探る

うと試みた。今までの謝罪研究では行われなかった新しい試みであるとする。

9.5 今後の課題

本研究では、日本語母語話者と韓国語母語話者の「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用を、宇佐美(2006b、2008)の「総合的な会話分析」のアプローチに従い、グローバルな観点とローカルな観点の双方を分析し考察を行い、その特徴を明らかにした。しかし、更なる研究が必要であり、以下では今後の研究課題について述べる。

9.5.1 理論的な枠組みに関する今後の課題

本研究の理論的な枠組みである「ポライトネス理論」からの考察をより詳細に行う必要があると考えられる。本研究では、Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論」と宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008)の「ディスコース・ポライトネス理論」を理論的な枠組みにして考察を行っていた。しかし、Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論」の重要な鍵概念である「 $W_x=D(S, H) + P(H, S) + R_x$ 」の公式⁸⁴から総合的な考察ができなかった。また、宇佐美(1998、2001、2002、2003b、2008)の「ディスコース・ポライトネス理論」⁸⁵の鍵概念である「基本状態」、「有標行動」、「見積もり差(Discrepancy in estimations: De 値)」と「行為の適切性(appropriateness of behavior)」、「ポライトネス効果(politeness effect)」の関係、「ポライトネス効果」のみ用いて考察しており、総合的な考察が足りなかった。今後は、これらの「ポライトネス理論」を工夫し、より多様な観点からの考察を行っていききたい。

さらに、「ポライトネス理論」の枠組みからの総合的かつ緻密な考察のみならず、異質な他者との自由なダイアログを重視した(田島(2014: 12)「バフチンの論」を共に工夫すると、より考察の範囲を広げることができると考えられる。

バフチンは人格とモノという二つの概念を対置させ、対話的にのみ交流することのできる対象として「汝」というカテゴリーを強調した(見附 2009: 74)。田島(2014: 11)は、バフチン論の醍醐味は、交流テーマについて前提知識の共有が期待できず、異質な見解をもって迫る他者と、どのようにつきあうのかという価値判断(=イデオロギー)の分析にあると述べている。また、Bakhtin(1979,1986/ 김희숙, 박종소 번역(2006)は、発話の本質について次のように説明している⁸⁶。

⁸⁴ 2.4.4 の Brown and Levinson の「ポライトネス理論」を参照(37-42 ページ)

⁸⁵ 2.4.5 の 宇佐美の「ディスコース・ポライトネス理論」を参照(42-47 ページ)

⁸⁶ 일차적(단순)담화장르와 이차적(복합)(이데올로기적)담화장르의 차이는 대단히 크고 근본적이지만, 바로 그 때문에 발화의 본질은 여러 유형의 분석을 통해서 밝혀지고 정의되어야 한다. 일차 장르와 이차 장르의 상호관계, 그리고 이차 장르의 역사적 형성 과정이야말로 발화의 본질(그리고 무엇보다 언어와 이데올로기, 세계관의 상호관계 같은 복잡한 문제들)을 해명할 수 있게 해준다(352-353).

一次的(単純)対話⁸⁷ジャンル⁸⁸と二次的(複合)(イデオロギー的)対話ジャンル⁸⁹の違いは非常に大きくて根本的であるが、従って、発話の本質は様々な類型の分析を通して明らかに定義されなければならない。一次ジャンルと二次ジャンルの相互関係、そして、二次ジャンルの歴史的な形成過程こそが発話の本質(そして、何よりも言語とイデオロギー、世界観の相互関係のような複雑な問題を)を解明できるようにする。(筆者訳)

バフチンの考えでは、話し手は発話を作っていくときには、つねに社会的言語がその拠り所になっているし、社会的言語によって話者の個々の声で言おうとしていることが作られるのである(Wertsch(1991/ 田島・佐藤・茂呂・上村訳(1995))。

本研究は、「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」の相互作用を実証的な研究方法に基づき、分析し考察を行っていたが、上記のバフチンが指摘するように、発話の本質を解明するためには、話し手と聞き手のやりとりの背景にある歴史的・社会的等の文化的やりとりを、つねに年頭において分析し考察する必要があると考えられる。特に、日韓における「謝罪」という言語行動は、非常に敏感かつ複雑な言語行動であるため、研究データから見られる現象を分析し考察する段階で留まらず、歴史的・社会的・文化的な多様な側面を研究し、今後の謝罪研究に適用すべきであると考えられる。

対人配慮行動である「ポライトネス」を基に、価値判断(=イデオロギー)や歴史的・社会的・文化的な側面もつねに年頭においた相互的な対話の重要性を主張した「バフチンの論」を共に工夫すると、考察の枠を広げることができるのではないかと考えられる。

9.5.2 その他の今後の課題

本研究は、日本語母語話者と韓国語母語話者の男女大学生の友人間を協力者としたが、今後はより幅広い世代を対象とし、世代差による言語使用の特徴を探ることが必要である。また、本研究では、「負担の度合い(rating of imposition)」のみに焦点をおいて研究しており、力(power)と距離(distance)、つまり、上下と親疎関係までは研究範囲としていない。負担度の差がある本研究の分析結果でも多様な特徴が現れていたが、上下関係と親疎関係に差がある場合、異なる謝罪行動のプロセスが現れると予想される。今後は、上下関係や親疎関係の差が現れる謝罪場面を工夫し研究を行いたい。

次に、本研究は「謝罪行動」の相互作用の全体像を捉えるために、「謝罪行動」を構成する「謝罪発話文」と「謝罪関連発話文」の9項目と「応答関連発話文」の10項目を立てて分析を行っていたが、より詳細に分類する必要があると考えられる。謝罪する側の「謝罪関連発話文」と、謝罪される側の「応答関連発話文」を各々詳細に分析すると、現れる

⁸⁷ 日本でのバフチンに関する研究では、「対話」という用語を用いているため(見附(2009)、田島(2014)、用語を統一し翻訳する。

⁸⁸ 直接的な対話的やりとりの条件の中で発生された多様なジャンル

⁸⁹ 複雑かつ相対的に発展され組織化された(特に、文語的な)芸術的、学問的、社会-政治的な文化的やりとりの条件の中から発生されたジャンル

傾向がより多様であり、その特徴も多く見られると予想される。今後は、謝罪する側と謝罪される側の特徴をよりローカルなレベルで分析しその特徴を明確にしたい。

続いて、日本語母語話者と韓国語母語話者の「謝罪談話」、「謝罪行動」、「謝罪発話文と応答発話文」の特徴を明らかにした本研究の結果を基に、異文化間コミュニケーションの誤解や摩擦を減らすための有効な材料を提供することが課題となる。上記で説明したようにロールプレイを用いた授業の有効性を研究し、日本語教育と韓国語教育の現場で応用していきたい。

そして、本研究の設定場面をより詳細に分類し分析する必要があると考えられる。本研究の設定場面は、広義では「精神的な被害を与えた場合」の謝罪場面である。しかし、狭義では、負担度が軽い場合は「遅刻関連場面」であり、負担度が重い場合は「バイト関連場面」である。これらの場面を、より詳細に分類し、「遅刻関連場面」という枠で負担度の高/低、「バイト関連場面」という枠で負担度の高/低を設定し、会話データを収集していきたい。

さらに、本研究はロールプレイ調査方法を取っているが、今後は、謝罪を自然談話で収集できる方法を工夫していきたい。謝罪に関する先行研究でも述べたが、他の研究者らも、自然談話での謝罪という言語行動の収集を要望している。謝罪は多様な観点(言語表現・言語行動・発話行為・談話・認識等)で、多様な調査方法(質問紙調査・ドラマの脚本や映像・書籍・ロールプレイ等)を用いて研究され、多くの研究成果が蓄積されており、膨大な研究資料が用意されている非常に貴重な言語行動である。これらの研究成果の結果と自然談話からの結果を対照・比較することが必要であると考えられる。

最後に、筆者は、謝罪のみならず、不満表明、非難等、否定的な言語行動全般に関して興味がある。フェイス侵害度が高い、これらの言語行動が、異文化間コミュニケーションで誤解や摩擦が起りやすいと考えられる。また、適切に対応しないと、人間関係にも深刻な影響を与える可能性が高い言語行動である。したがって、否定的な言語行動を会話分析を通して総合的に研究し、日本社会と韓国社会の円滑な対人コミュニケーションのための資料として用いていきたい。

Spencer-Oatey, H(ed) (2000)が指摘するように、違った状況設定をしたシナリオ(本研究ではロールカード)を使えばまた違った結果が出るということは十分あり得る。しかし、このような研究を積み重ねることにより、異文化理解のための糸口になると考えられる。

参考文献

- 李恩美 (2008) 「日本語と韓国語の初対面二者間会話における対人配慮行動の対照研究—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—」 東京外国語大学大学院学位論文
- 生田少子 (1997) 「ポライトネスの理論」『月刊言語』26(6) 66-77 大修館書店
- 生田少子・井出祥子(1983) 「社会言語学における談話研究」『月刊言語』12(12) 77 - 84 大修館書店
- 池田理恵子(1993) 「謝罪の対照研究—日米対照研究—face という視点からの一考察—」
『日本語学』11 13-21 明治書院
- 生駒知子・志村明彦 (1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー「断り」という発話行為について」『日本語教育』79 41-52 日本語教育学会
- 猪崎保子 (1997) 「日本人とフランス人日本語学習者の会話にみられる「修正」のストラテジー」
『世界の日本語教育』7 77-95 日本語教育論集
- 石井敏・久米昭元編(2005)『異文化コミュニケーション研究法』株式会社有斐閣
- 市川薫・堀内靖雄・土屋俊(2000)「日本語地図課題対話コーパス」『音声研究』4(2) 4-15
日本語音声学会
- 井出祥子 (2006)『わきまへの語用論』大修館書店
- 井出里咲子(2005) 「スモールトークとあいさつ—会話の潤滑油を超えて—」『講座社会言語科学第1巻 異文化とコミュニケーション』井出祥子平賀正子編 ひつじ書房
- 李善雅 (2001) 「議論の場における言語行動—日本語母語話者と韓国人学習者の相違—」
『日本語教育』111 36-45 日本語教育学会
- 李善姫 (2004) 「韓国人日本語学習者の「不満表明」について」
『日本語教育』123 27-36 日本語教育学会
- (2006) 「日韓の「不満表明」に関する一考察—日本人学生と韓国人学生の比較を通して—」『社会言語科学』8(2) 53-64 社会言語学会
- 李麗燕 (1997) 「日本語母語話者の会話における『情報伝達行動の持続』」
『世界の日本語教育』7 61-75 日本語教育論集
- 伊藤恵美子(2001) 「ポライトネス理論の実証的考察—心理的負担の度合いを中心に意味公式の数値の観点から—」『日本語教育論集』17 1-20
- 井上史雄(1994) 「データの収集、整理、分析：アンケート調査を行う」
『日本語学』13(6) 明治書院
- 岩崎勝一・大野剛(2007) 「会話研究から拓かれる文法の世界-米国西海岸機能言語学からの提案-」『月刊言語』36-3 大修館書店
- 生越まり子 (1993) 「謝罪の対照研究—日韓対照研究」『日本語学』11 29-38 明治書院
- (2001) 「謝罪表現の日・英語対照研究—談話における機能を中心に—」
『日本英語コミュニケーション学会紀要』38-47

- (2002)「謝罪慣用表現と謝罪心理—日英対照研究—」
『日本英語コミュニケーション学会紀要』 17-27
- (2003)「日英語における謝罪と感謝—背景心理からの分析—」
『日本英語コミュニケーション学会紀要』 140-152
- 吳俊雅 (1996)「拒絶表現の日韓対照研究」啓明大学校大学院 日語日文学科 碩士論文
- 巖美鈴 (2004)「日本人若年層と韓国人若年層における謝罪の会話分析」『葛野』 8 16-44
- 任炫樹 (2004)「日韓断り談話におけるポジティブ・ポライトネス・ストラテジー」
『社会言語科学』 6(2) 27-43 社会言語学会
- 任栄哲・井出里咲子 (2004)『箸とチョッカラク ことばと文化の日韓比較』大修館書店
- 任栄哲 (1994)「韓国の社会言語学—日本との比較を中心に—」
『日本語学』 9(3) 31 - 39 明治書院
- 元智恩 (2010)「ポライトネス ストラテジーに対する日本人、韓国人、韓国人日本語学習者の意識」『日本研究』 44 269 - 290 明治書院
- 宇佐美まゆみ(1993b)「談話レベルから見た“Politeness”“Politeness theory”の普遍理論確立のために」『ことば』 14 現代日本語研究会
- (1994)「性差か力(Power)の差—初対面二者間の会話における話題導入の頻度と形式の分析より—」『ことば』 15 現代日本語研究会
- (1994-1995)「日本語教師のための心理学入門:1~15」(連載)、『月刊日本語』7(4)、8(6)、アルク.
- (1995)「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—」『学苑』 662、27-42. 昭和女子大学近代文化研究所.
- (1996)「初対面二者間会話における話題導入頻度と対話相手の年齢・社会的地位・性の関係について」『ことば』 17号、44-57 現代日本語研究会
- (1997)『言葉は社会を変えられる—21世紀の多文化共生社会に向けて—』明石書店
- (1997a)「自然会話の文字化資料作成とそのデータベース化に関する一考察:日本人初対面二者間会話 72 会話の文字化資料の整備、データベース化作業を通して」『日本人の談話行動のスキプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』平成 7-8 年度文部省科学研究費基盤研究 C(2) (課題番号: 07680312)(研究代表者: 西郡仁朗)、研究成果報告書、6-11
- (1997b)「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) の開発について」『日本人の談話行動のスキプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』平成 7-8 年度文部省科学研究費基盤研究 C(2) (課題番号: 07680312)(研究代表者: 西郡仁朗)、研究成果報告書、12-26.
- (1997c)「自然会話分析法への言語社会心理学的アプローチ」『日本人の談話行動のスキプト・ストラテジーの研究とマルチメディア教材の試作』平成 7-8 年度

- 文部省科学研究費基盤研究 C(2) (課題番号: 07680312)(研究代表者: 西郡仁朗)、研究成果報告書、1-5.
- (1998) 「ポライトネス理論の展開：ディスコース・ポライトネスという捉え方」東京外国語大学日本課程・留学生課（共編）『日本研究・教育年報 1997 年度版』、147-161. 東京外国語大学.
- (1999a) 「視点としての日本語教育学」『月刊言語』28(4) 大修館書店
- (1999b) 「談話の定量的分析ー言語社会心理学的アプローチー」『日本語学』18(10)、明治書院、40-56.
- (2001b) 「談話のポライトネスーポライトネスの談話理論構想ー」『談話のポライトネス（第 7 回国立国語研究所国際シンポジウム報告書）』、国立国語研究所、9-58.
- (2001c) 「『ディスコース・ポライトネス』という観点から見た敬語使用の機能ー敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆することー」『語学研究所論集』6、1-29. 東京外国語大学語学研究所.
- (2002) 「連載 ポライトネス理論の展開」1-12『月刊言語』31 1-13 大修館書店.
- (2003a) 「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)の開発について」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成 13-14 年度科学研究費補助金基盤研究 C(2)(題番課号 07680312)(研究代表者宇佐美まゆみ)研究成果報告書、4-21.
- (2003b) 「異文化接触とポライトネスーディスコース・ポライトネス理論の観点からー」『国語学』54(3)、117-132.
- (2006b) 「談話研究におけるローカル分析とグローバル分析の意義」宇佐美まゆみ（編）『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、229-243.
- (2006c) 「準自然会話における「誘い行動」の日韓比較ーディスコース・ポライトネス理論の関連からー」国際学術会議シンポジウム「韓日言語・文化の接点を求めて」韓国外国語大学校日本研究所
- (2008) 「相互作用と学習ーディスコース・ポライトネス理論の観点からー」『講座社会言語科学 4 教育』ひつじ書房、150-181.
- (2008) 「ポライトネス理論研究のフロンティアーポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論」『社会言語科学』11(1) (特集「敬語研究のフロンティア」)、社会言語科学会 4-22.
- (2009) 「『伝達意図の達成度』『ポライトネスの適切性』『言語行動の洗練度』から捉えるオーラル・プロフィシエンシー」鎌田修・山内博之・堤良一編『プロフィシエンシーと日本語教育』ひつじ書房、33-67.

- (2009)「視点としての日本語教育学—日本語教育学の新しいパラダイム—」『台湾日本語教育研究』国際学術研究会
- (2011)「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)2011 年改訂版」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』、平成 13-14 年度科学研究費補助金基盤研究 C(2) (研究代表者：宇佐美まゆみ) 1-20
(<http://www.tufs.ac.jp/ts/personal/usamiken/btsj.htm> においても公開)
- (2012)「母語話者には意識できない日本語コミュニケーション」野田尚史編『日本語教育のためのコミュニケーション研究』くろしお出版 63-82
- 宇佐美まゆみ監修(2007d)『BTSJ による日本語話し言葉コーパス 1 (初対面・友人、雑談・討論・誘い)』『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成 15-18 年度科学研究費補助金基盤研究 B(2)(課題番号 15320064)研究成果
- 宇佐美まゆみ(監修)(2006)『言語社会心理学的アプローチによる自然会話分析方法論ハンドブック』、21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学(TUFS)大学院地域文化研究科
- 宇佐美まゆみ、木林理恵、木山幸子、金銀美(2006).「『基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)』の開発と『BTS による多言語話し言葉コーパス』の構築—BTSJ の理論的背景と本コーパスを用いた人間の相互作用の研究例 (日本語会話の場合)—」宇佐美まゆみ (編)『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」、245-261.
- 宇佐美まゆみ、李恩美、鄭榮美、金銀美(2007)「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)の韓国語への応用について」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成 15—18 年度科学研究費補助金 基盤研究 B(2) (課題番号 15320064) (研究代表者：宇佐美まゆみ) 研究成果報告書
- 宇佐美まゆみ、嶺田明美(1995)「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン：初対面二者間の会話分析より」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集 2』名古屋学院大学留学生別科 (日本研究プログラム)、130-145.
- 碓氷尊 (2010)「共生コミュニケーション」トレーニング』『日本交渉学会』 22(1) 4-22
- 内田伸子 (1993)「会話行動に見られる性差」『日本語学』12(6) 156—168 明治書院
- 榎本博明 (2012)『「すみません」の国』日経プレミアシリーズ 日本経済新聞出版社
- 大谷麻美 (1998)「謝罪に対する緩和的返答のストラテジーポライトネスの観点から」『英米学研究』 73-93
- (2001)「謝罪表現の日・英語対照研究—談話における機能を中心に—」

- 『日本英語コミュニケーション学会紀要』 38-47
- (2002) 「謝罪慣用表現と謝罪心理—日英対照研究—」
『日本英語コミュニケーション学会紀要』 17-27
- (2003) 「日英語における謝罪と感謝—背景心理からの分析—」
『日本英語コミュニケーション学会紀要』 140-152
- (2008a) 「謝罪はどのように遂行され、どのように解釈されたのか：英語の謝罪談話のケーススタディー」 『社会言語科学会第21回大会発表論文集』 64-67
- (2008b) 「謝罪研究の概観と今後の課題—日本語と英語の対照研究を中心とした考察—」 『言語文化と日本語教育』
- (2013) 「謝罪とその受け入れのプロセスに見る相互行為—アメリカ英語の謝罪談話の事例研究」 『日本英語コミュニケーション学会』 22/1 55-68
- 大津友美 (2004) 「親しい友人同士の会話におけるポジティブ・ポライトネス「遊び」としての対立行動に注目して」 『社会言語科学』 6(2) 44-53 社会言語学会
- (2007) 「会話における冗談のコミュニケーション特徴スタイルシフトによる冗談の場合」 『社会言語科学』 10(1) 45-55 社会言語学会
- 大原由美子編(2007) 『日本語ディスコースへの多様なアプローチ—会話分析・談話分析・クリティカル談話分析—』 国立国語研究所
- 大淵憲一 (2010) 『謝罪の研究—釈明の心理とはたらき』 東北大学出版会
- 小川治子 (1995) 「感謝と詫びの定式表現—母語使用者の使用実態の調査からの分析」 『日本語教育』85 38-52 日本語教育学会
- 沖裕子 (2001) 「談話の最小単位と文字化の方法」 信州大学『人文科学論集文化コミュニケーション学科編』 35
- 小野礼子 (2003) 「謝罪方略と大学生の英語スピーキング能力—社会言語学的・語用論的視点からの考察—」 『神戸海星女子学院 大学研究紀要』 61-87
- 小野由美子外(2001) 「日本語母語話者にみる感謝と謝罪表現の使用—「ありがとう」、
「すみません」再考—」 『鳴門教育大学実技教育研究』 75-83
- 小野寺典子(1992) 「エスノメソドロジーにおける電話会話の研究と日本語データへの応用」 『日本語学』 11(9) 26-38 明治書院
- 岡本真一郎・多門靖容(2000) 「失礼」の諸用法—用法の相互関連性に着目して—
『日本語教育』104 30-39 日本語教育学会
- 岡本真一郎(2007) 『ことばのコミュニケーション—対人関係のレトリック』 ナカニシヤ出版
- 岡本成子(2008) 「日本語における女性の言葉遣いに対する「規範」の再考察」 『文化とことばの標準を問う』 日本語ジェンダー学会
- 岡本能里子・吉野文(1997) 「電話会話における談話管理-日本語母語話者と日本語非母語話者の相互行為の比較分析-」 『世界の日本語教育』 7 45-59 日本語教育論集
- 尾崎喜光 (2005) 「依頼行動と感謝行動の<関係>に関する日韓対照」

- 『社会言語科学』8(1) 106 - 119 社会言語学会
- (2005b)「依頼行動と感謝行動から見た日韓の異同」『日本語学』24(7)42-51 明治書院
- (2006)「第5章 依頼・勧めに対する断りにおける配慮の表現」『言語行動における「配慮」の諸相』国立国語研究所 くろしお出版
- 海保博之・原田悦子(1993)『プロトコル分析入門—発話データから何を讀むか』新曜社
- 加藤重広 (2007)「ソシユールから語用論へ」『月刊言語』36(5) 大修館書店
- 金沢庄三郎(1973)『広辞林』三省堂編修所(第5版)
- カノックワン ラオハブラナキッ(1995)「日本語における「断わり」—日本語教科書と実際の会話との比較—」『日本語教育』87 25-39 日本語教育学会
- (1997)「日本語学習者にみられる「断り」の表現—日本語母語話者と比べて—」『世界の日本語教育』7 97-112 日本語教育論集
- 川上恭子 (1993)「話し合いの具体的分析—共感と反発—」『日本語学』4(12) 47 - 57 明治書院
- 川崎晶子 (1989)「日常会話のきまりことば」『日本語学』8(2) 26 - 35 明治書院
- 川村よし子(1991)「日本人の言語行動の特性」『日本語学』5 51 - 60 明治書院
- 木内明 (1998)『今すぐ話せる韓国語』東進ブック
- 北綾子 (2003)「日本語ディスコースにおける謝罪の機能-依頼の前置きとしての謝罪に関して」『人工知能学会』81-86
- 北尾謙治・北尾 S キヤスリーン(1988)「ポライトネス—人間関係を維持するコミュニケーション手段」『日本語学』7(3) 52 - 63 明治書院
- 木山幸子・関崎博紀・木林理恵・施信余・金庚芬(2003)「先行研究におけるトランスクリプト・システムの概観と「基本的な文字化の原則 (BTSJ) の意義」『多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究』平成 13-14 年度科学研究費補助金 基盤研究 C (2) (課題番号: 13680351) (研究代表者: 宇佐美まゆみ) 研究成果報告書 平成 15 年度版
- 金田一秀穂(1987)「お礼とお詫びのことば」『月刊言語』16(4) 75-83 大修館書店
- 國廣哲彌、柴田武、南博、渡辺友左、外山滋比古、森岡健二、杉本つとむ(1977)『岩波講座 日本語 2 言語生活』岩波書店
- 熊井浩子 (1992)「外国人の待遇行動の分析(1)—依頼行動を中心にして—」『静岡大学教養部 研究報告 人文、社会科学篇』28(1) 1-44
- (1993)「外国人の待遇行動の分析(2)—断り行動を中心にして—」『静岡大学教養部 研究報告 人文、社会科学篇』28(2) 1-40
- (2009)「日本語の Politeness と対人行動に関する一考察」『静岡大学国際交流センター紀要』3 1 - 26
- 熊谷智子 (1993)「研究対象としての謝罪—いくつかの切り口について—」『日本語学』11 4-12 明治書院

- (2008)「依頼と謝罪における働きかけのスタイル」『言語』26-33
- (1997)「はたらきかけのやりとりとしての会話—特徴の束という形でみた『発話機能』」茂呂雄二編『対話と知—談話の認知科学入門—』21-46
新曜社
- 熊谷智子・篠崎晃一(2006)「第3章 依頼場面での働きかけ方における世代差・地域差」
『言語行動における「配慮」の諸相』国立国語研究所 くろしお出版
- 熊取谷哲夫(1988)「発話行為理論と談話行動から見た日本語の「詫び」と「感謝」」
『広島大学教育学部紀要』223-234
- (1992a)「発話行為対照分析の課題(1)—日英語の「詫び」の対照を例に—」
『広島大学日本語教育学紀要』35-41
- (1992b)「発話行為対照研究のための総合的アプローチ—日英語の「詫び」を例に—」
『日本語教育』79 26-40 日本語教育学会
- (1994)「発話行為としての感謝—適切性条件、表現ストラテジー、談話機能」
『日本語学』13(7) 63-72 明治書院
- 串田秀也(2006)『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社
- クモハマドナビル(2006)「日本人とマレーシア人の謝罪行動の対照分析—謝罪ストラテジーを重点に」『比較社会文化研究』53-61
- (2007)「日本人とマレーシア人の謝罪行動の対照分析—謝罪意識を焦点に」
『比較社会文化研究』13-19
- 金庚芬(2005)「会話に見られる「ほめ」の対象に関する日韓対照研究」『日本語教育』124
日本語教育学会
- (2006)『「ほめの談話」に関する日韓対照研究—日・韓大学生の会話データを用いて』桜美林大学大学院国際研究科学学位論文
- 金秀容 (2002)『発話行為としての謝罪の相互作用に見られる性差—韓・日両国の対照を中心に—』韓国外国語大学大学院 碩士学位論文
- 金恵援 (2006)『日本の映像物に見られる挨拶言語行動—謝罪表現と感謝表現を中心に—』韓国外国語大学大学院 碩士学位論文
- 金在龍(2009)『日韓両言語の感謝表現の比較対照研究—「待遇表現」の観点から』韓国外国語大学大学院 日語日文学科 碩士学位論文
- 金珍京(2007)『日本語反対意見表明の談話分析-韓国人日本語学習者と日本語母語話者を対象으로 -』建国大学校教育大学院教育学科 日語教育専攻 碩士学位論文
- 金珍娥 (2004)「韓国語と日本語の文、発話単位、Turn—談話分析のための文字化システムによせて—」『朝鮮語研究』2
- 金ジナ (2006)『日本語と韓国語の談話における文末の構造』東京外国語大学大学院地域文化研究科学学位論文

- 小磯花絵(1999)「談話研究を支える会話コーパス—その作成と利用の仕方」『日本語学』18(11)
69 - 77 明治書院
- 小磯花絵・土屋菜穂子・間淵洋子・斉藤美紀・籠宮隆之・菊池英明・前川喜久雄(2001)「『日本語話し言葉コーパス』における書き越しの方法とその基準について」
『日本語科学』9 43-58 国立国語研究所
- 小玉安恵(2000)「ラボビアンモデルによる日本語のナラティブ分析の可能性と諸問題」『日本語国際センター紀要 第10号 国際交流基金 日本語国際センター』17-32
- 近藤富美子(2002)「日米比較「謝罪」考—謝罪のあり方とその照準—」『現代社会学』49-62
- 坂原茂(2007)「認知と語用論のインターフェイス」『月刊言語』36(12) 大修館書店
- 佐久間勝彦(1983)「感謝とお詫び」『講座日本語の表現3 話しことばの表現』54-66
筑摩書房
- 佐久間まゆみ(2006)「文章・談話の分析単位」『月刊言語』35(10) 大修館書店
- 佐久間まゆみ, 杉戸清樹, 半澤幹一(1997)『文章・談話のしくみ』おうふう出版
- 佐々木倫子(1983)「会話の自然さについて—日英対照研究の視点から」
『国立国語研究報告書』105 研究報告集14、361-401 国立国語研究所
- 佐竹千草(2005)「日中語「謝罪」に関する一考察—母語話者の意識調査を通じて—」
『聖心女子大学大学院論集』27(1) 42-64
- 佐藤直樹(2011)『なぜ日本人はとりあえず謝るのか「ゆるし」と「はずし」の世間論』
PHP新書
- ザトラウスキー・ポリー(1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』
くろしお出版
- (1991)「会話分析における「単位」について—「話段」の提案—」『日本語学』10(10)
明治書院
- (1994)「インターアクションの社会言語学」『日本語学』13(9) 明治書院
- 沈貞美 (2004)『韓・日両国における「謝罪行為」の比較』
慶北大学校 教育大学院 教育学 硕士学位論文
- 柴田武・山田進(2002)『類語大辞典』講談社
- 末田美香子(2000)「初対面場面における不同意表明と調整のストラテジー」
『日本語教育論集』(16) 23-46 国立国語研究所日本語教育センター
- 杉本なおみ(1997)「謝り方の日英比較研究—問題点と今後の課題—」
『フェリス女子院大学』103 - 120
- 杉戸清樹(1983)「待遇表現としての言語行動—「注釈」という視点」
『日本語学』2(7) 32-42 明治書院
- (1989)「言語行動についてのきまりことば」『日本語学』8(2) 4 - 14 明治書院
- (1994)「データの収集、整理、分析：録音を文字化する」『日本語学』13(6)
明治書院

- 杉戸清樹・生越直樹・佐々木倫子・早田美智子・堀江プリヤ(1992)『『誤解』のメカニズムの記述をめぐって』『日本語学』11(13) 54-63 明治書院
- 鈴木陵(1989)「聞き手の私的領域と丁寧表現—日本語の丁寧さは如何にして成り立つか—」『日本語学』3(1) 58 - 67 明治書院
- 関陽子 (2001)『韓国語と日本語における謝罪の対照研究—語用論的視点から—』漢陽大学校大学院 硕士学位论文
- 高井次郎(2002)「依頼および断りの状況における直接的、間接的対人方略の地域比較」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学』49 181 - 190
- 高木羽衣子(2009)「断わり場面にみる日韓配慮の仕方」가톨릭대학교 대학원 일어일본문화학과 일본어학 전공석사논문
- 高崎三千代・古川嘉子(2000)「ビジターセッションにおけるロールプレイの効果—1998年度海外日本語教師長期研修「聴解口頭表現」における実践—」『日本語国際センター紀要』10
- 高田久美子(1996)「詫び表現からみた日本人の言語行動— 詫びと感謝の心理的接点—」『福岡YWCA日本語教育論文集』8 87-112
- 滝浦真人 (2005)『日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討—』大修館書店
- (2006)「単位で捉えられるもの、捉えられないもの—「ほのめかし」とポライトネス—」『月刊言語』35(10) 大修館書店
- (2008)「ポライトネスから見た敬語、敬語から見たポライトネス—その語用論的相対性をめぐって—」『社会言語科学』11(1) 23 - 38 社会言語学会
- (2008)『ポライトネス入門』研究社
- 田島充土(2014)「異質さと向き合うためのダイアローグ—バフチン論からのメッセージ—」『心理学ワールド』64 9-12 日本語心理学会
- 田中智子 (1991)「会話にあらわれるくり返しの発話」『日本語学』10(10) 52-62 明治書院
- 谷口龍子 (2010)「詫びおよび感謝表現の選択と文・談話構造との関わり—日本語と中国語のヴォイスに注目して—」『東京外国語大学論集』第80号 179-198
- ダニエル・ロング・中井精一・宮治弘明(2003)『応用社会言語学を学ぶ人のために』世界思想社
- 鄭加禎・上原麻子(2005)「謝る意識—中国人、日本人、台湾人の対照研究—」『日本コミュニケーション学会』99-119
- 鄭榮美(2006)「友人間で行われる『誘い』の日韓対照研究—『誘い』におけるストラテジーを中心に—」『自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
- (2011)『友人間の会話における「誘い行動」の日韓対照研究—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—』東京外国語大学大学院地域文化研究科 学位论文
- 鄭賢児 (2009)「謝罪行動とその反応に関する日韓対照研究—ポライトネス理論の観点か

- らー」東京外国語大学大学院 修士論文
- (2011a)「遅刻場面における謝罪行動とその反応に関する日韓対照研究—ポライトネス理論の観点から—」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』No.6、グローバルCOEプログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」
東京外国語大学 大学院総合国際学研究院
- (2011b)「謝罪行動とその反応に関する日韓対照研究—ポライトネス理論の観点から—」大学院博士後期課程論叢『言語・地域文化研究』17 95 - 112
東京外国語大学大学院
- (2012)「友人間の「謝罪談話」における韓日対照研究—Brown and Levinson のポライトネス理論の観点から—」17 31 - 52 西京大学校 韓日文化研究所
- 鄭加偵 (2006)「謝罪行為における差異—日本語母語話者と中国語母語話者の事例研究」
『アジア社会文化研究会』57-73
- 奏秀美(2002)「日韓における感謝の言語表現ストラテジーの一考察」
『日本語教育』114 70 - 79 日本語教育学会
- (2004)「日韓における謝罪表現の一考察」『日本語・日本文化研究』23-35
- (2013)「日韓における謝罪の「定型表現」の使用について」
『関西大学外国語教育フォーラム』(12), 関西大学外国語教育研究機構、1-16,
- 郭碧蘭 (2007)「日本語における不満表明のスピーチアクトの研究—台湾人学習者と日本語母語話者の比較—」明海大学大学院 応用言語学 博士論文
- (2012)「日本語学習者による謝罪行為の遂行—台湾人大学生の場合—」
香港第九回国際日本語教育・日本研究シンポジウム予稿集
- (2013)「日本人大学生による謝罪行為の談話構造—社会的ファクターが与える影響に着目して—」『明海日本語』第18号 251-258
- 陶琳 (2005)「人間関係修復のための方略—謝罪表現を中心に—」『社会環境研究』33-45
- 直塚玲子(1980)『欧米人が沈黙するとき 異文化間のコミュニケーション』大修館書店
- 中嶋洋介 (2005)「交渉構造の5つの側面」『日本交渉学会』15(1) 53-65
- 中田智子 (1989)「発話行為としての陳謝と感謝」『日本語教育』68 191-203 日本語教育学会
- (1990)「発話の特徴記述について—単位としてのMoveと分析の観点」
『日本語学』9(11) 112-118 明治書院
- 永田良太(2004)「会話におけるあいづちの機能—発話途中に打たれるあいづちに着目して—」
『日本語教育』114 53 - 62 日本語教育学会
- 中道真木男・土井真美 (1993)「日本語教育における謝罪の扱い」
『日本語学』11 66-74 明治書院
- 中村桃子(2001)『ことばとジェンダー』勁草書房
- (2002)「言語とジェンダー研究」『月刊言語』31(6) 170 - 175 大修館書店
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫 (2000)『岩波国語辞典』岩波書店(第6版)

- 西阪仰 (1997)『相互行為分析という視点—文化と心の社会学的記述』金子書房
 ——— (2001)『心と行為』株式会社 岩波書店
 ——— (2008)「トランスクリプションのための記号—v.1.2 2008年1月」
<http://www.meijigakuin.ac.jp/~aug/transsym.htm>
- 西田ひろ子編(2003)『異文化間コミュニケーション入門』創元社
 西山佑司 (1983)「発話行為」太田朗(編)『英語学大系第5巻意味論』627-690 大修館書店
 日本語教育学会・水谷修(編)(2005)『新版日本語教育事典』大修館書店
 ネウストプニー, J.V. (1983)「敬語回避のストラテジーについて—主として外国人場面の場
 合—」『日本語学』2(1) 62-67 明治書院
 ——— (1991)「新しい日本語教育のために」『世界の日本語教育』1 1-14
- 朴福德 (2001)「在韓日本人の言語生活について—感謝、詫び、詫びと感謝の表現を
 中心に—」『翰林情報産業大学論文集』31 247-276
 ——— (2002)「韓日言語行動比較—感謝、詫び、詫び形感謝の表現を中心に」
 中央大学院 博士論文
- 橋内武 (2004)『ディスコース—談話の織りなす世界—』くろしお出版
 橋元良明 (1992)「間接的発話行為方略に関する異言語間比較」
 『日本語学』11 92-102 明治書院
- 初鹿野阿れ・熊取谷哲夫・藤森弘子(1996)「不満表明ストラテジーの使用傾向—日本語母語話者
 と日本語学習者の比較—」『日本語教育』88 128-139 日本語教育学会
- 服部四郎(1960)「具体的言語単位と抽象的言語単位」『言語学の方法』16-27 岩波書店
 林四郎・野元菊雄・南不二男・国松昭 (2001)『例解新国語辞典』三省堂(第6版)
 崔信淑 (2006)「社会における謝罪行為に関する日中韓対照研究—重大事件に関する新聞記
 事の分析—」『大阪大学言語文化学』135-148
- 飛田良文(2001)『異文化接触論 日本語教育学シリーズ〈第1巻〉』おうふう出版
 平松亜由美(2006)「「謝り」のコミュニケーション—日本とアメリカの比較から—」
 『愛知淑徳大学英文学』89-105
- ビヴァリー・エンゲル、石井礼子(訳)(2006)『人はなぜ謝れないのか—自分も相手も幸せ
 になれる「謝罪」の心理学—』日本教文社
- 藤森弘子 (1994)「日本語学習者にみられるプラグマティック・トランスファー「断り」行為の場合」
 『名古屋学院大学日本語学 日本語教育論集』1 1-19
 ——— (1995)「日本語学習者にみられる「弁明」意味公式の形式と使用—中国人・韓国人学習
 者の場合—」『日本語教育』87 79-90 日本語教育学会
- 彭国躍 (2005)「現代日本語の謝罪発話行為の類型と機能」『日本語学』24 78-90 明治書院
 彭飛 (1996)「「気」「気配り表現」をめぐる」『日本語学』15(7) 76-83 明治書院
 ボイクマン総子・宇佐美洋(2005)「友人間での謝罪時に用いられる語用論的方策
 —日本語母語話者と中国語母語話者の比較—」『語用論研究』7 31-44

- 細川英雄(2002)『日本語教育は何をめざすかー言語文化活動の理論と実践』明石書店
 ——— (2005)「文化リテラシー獲得をめざす教育設計」『月刊言語』34(6)大修館書店
- 堀江・インカピロム・プリアー (1993)「謝罪の対照研究ー日タイ対照研究」
 『日本語学』11 22-28 明治書院
 ——— (1993)「『謝る』ー日・タイの謝ることばと行動の比較」『国研報告』105 研究報告集 14
- 堀口純子(1987)「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」
 『日本語教育』64 13-26 日本語教育学会
- 洪珉杓(2006)「日韓両国人の言語行動の違い1ー感謝とお詫び表現の日韓比較」
 『日本語学』25 84-89 明治書院
- 麻殖生健治(2009)「異文化マネジメントの交渉プロセス」『日本交渉学会』19(1) 51-63
- 前川喜久雄・籠宮隆之・小磯花絵・小椋秀樹・菊池英明(2000)「日本語話し言葉コーパスの設計」
 『音声研究』4(2) 51-61 日本語音声学会
- 前川喜久雄(2002)「『日本語話し言葉コーパス』を用いた言語変異研究」
 『音声研究』6(3) 48-59 日本語音声学会
- 松原健二(2001)「謝罪行動の日米比較ーえひめ丸事故とタイヤ破裂事故ー」
 『松商短大論叢』169-187
- 松本善子(2007)「会話の中のいわゆる<女性語>」『月刊言語』36(3) 大修館書店
- 三木浩二 (2002)『日・韓両国語における謝罪表現の対照研究』
 韓国外国語大学校大学院 硕士学位论文論文
- 水谷修 (1991)「会話研究の新開拓」『日本語学』10(10) 4-8 明治書院
- 水谷信子(1989)「待遇表現指導の方法」『日本語教育』69 24-33 日本語教育学会
- 南不二男 (1972)「日常会話の構造ーとくにその単位についてー」
 『月刊言語』1(2) 108-115 大修館書店
 ——— (1979)「言語行動研究の問題点」『言語と行動』南不二男(編) 大修館書店
- 三牧陽子(2000)「丁寧体基調の談話にみる独話的発話・直接引用・心情の直接表出ー「働きかけ方式」のポライトネス・ストラテジーとしてー」『大阪大学留学生センター研究論集』4 37-53 多文化社会と留学生交流
 ——— (2002)「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示ー初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に」
 『社会言語科学』5(1) 56-74 社会言語学会
- 宮内桂子 (2007)『韓国人日本語学習者の謝罪の言語行動』建国大学大学院 硕士学位论文論文
- 三宅和子 (1993)「『詫び』以外で使われる詫び表現ー多様化の実態とウチ・ソト・ヨソの関係」『日本語教育』82 134-146 日本語教育学会
 ——— (2011)『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』ひつじ書房
- 三宅和子・岡本能里子・佐藤彰(2004)『メディアとことば』ひつじ書房
- 見附陽介 (2009)「M.M.バフチンの対話理論における人格とモノの概念ーC.JI.フランクと

の比較の観点から —」『スラヴ研究』No. 56 p63-89

村上かおり(1997)「日本語母語話者の「意味交渉」に非母語話者の接触経験が及ぼす影響—
母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて—」

『世界の日本語教育』7 137 - 155 日本語教育論集

村上恵・熊取谷哲夫(1995)「談話トピックの結束性と展開構造」

『表現研究』62 101-111 表現学会

メイナード, 泉子・K(1997)『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性—』

くろしお出版

———— (2000)『情意の言語学—「場交渉論」と日本語表現のパトス—』くろしお出版

———— (2004)『談話言語学—日本語のディスコースを創造する 構成・レトリック・ス
トラテジーの研究—』くろしお出版

———— (2005)『会話分析』くろしお出版

守屋美佐子(2001)「言語行動としての「謝罪」に関する一考察」『慶州大学論文集』211-220

———— (2007)『韓日両言語における謝罪表現と感謝表現の対照研究—大学生の意識調査を
中心に—』慶尚大学校大学院 日本学科 博士論文

森山卓郎 (1990)『「断わり」の方略-対人関係調整とコミュニケーション-』

『月刊言語』19(8) 59 - 66 大修館書店

———— (1999)「お礼とお詫び—関係修復のシステムとして」『国文学—解釈と教材の研究』
44(6) 78 - 82 学灯社

茂呂雄二・小高京子(1993)「日本語談話研究の現状と展望」『国立国語研究報告書』105

研究報告集 14、245 - 279 国立国語研究所

藪内昭男 (2004)「プライトネス量の異文化間比較-謝罪・プライバシー・実質行為」

『和歌山県立医科大学紀要』27-52

山内博之 (1994)「日本語中級クラスにおける新しいロールプレイ学習の試み」

『岡山大学文学部紀要』101 - 116

———— (1999)「タスク先行型ロールプレイの実践方法について」

『岡山大学文学部紀要』107 - 116

———— (2000)『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話』アルク出版

山路奈保子(2006)「日本語の「ほめ」についての—考察—「ほめ」を攻撃的に作用させる要
因の分析—」『日本語教育』130 100 - 109 日本語教育学会

山下早代子(1999)「異文化間における語用の比較—母語話者と学習者の謝罪の方略—」

『第二言語としての日本語の習得研究』115-120

山下仁 (2005)「言語行動と伝達能力に関する日独対照社会言語学的考察」

大阪大学大学院言語文化研究科 平成 14 年度～平成 16 年度科学研究費補助金
(基盤研究(C)一般(2))研究成果報告書 9 - 34

山梨正明 (1986)『発話行為』大修館書店

- 山本千津子(2005)「実践的なコミュニケーション能力向上のための待遇表現教育—「言いにくい場面」への取り組みを例に」『日本語教育』126 84 - 93 日本語教育学会
- 山本もと子(2004)「社会的相互行為としての謝罪表現—言語表現選択の背景には何があるのか—」『信州大学留学生センター紀要』19-31
- 梁智媛 (2009)『日韓両言語の謝罪表現の対照研究』韓国外国語大学校大学院
日語日文学科 碩士論文
- 湯川純幸・斉藤正美(2006)「イデオロギー研究としての「日本語とジェンダー」研究」
『月刊言語』35(3) 大修館書店
- 横溝環 (2000)「中国人学生と日本人学生の「お礼及び謝罪」に関する比較の事例研究」
『青山国際コミュニケーション研究』75-91
- 吉岡泰夫 (1993)「言語行動としての話し合い—目的遂行のためのコミュニケーション方略」
『日本語学』12(4) 21-29 明治書院
- 吉成祐子 (2006)「謝罪場面における話者の心的態度と言語表現」
『日本認知言語学会論文集』444 - 453
- 米川明彦 (2005)「日本語が変わった—「話し言葉」の活力」
『月刊言語』34(1) 大修館書店
- (2006)「若者ことば研究序説」『月刊言語』35(3) 大修館書店
- ルンティエラ ワンウィモン(2004)「タイ人日本語学習者の「提案に対する断り」表現における語用論的転移—タイ語と日本語の発話パターンの比較から—」
『日本語教育』121 46 - 55 日本語教育学会
- 頼美麗 (2005)「依頼における「当然性」と「謝罪型表現」の使用について」
『早稲田大学日本語教育研究』64-78
- れいのるず=秋葉かつえ(1993)『おんなと日本語』有信堂高文社
- ロング・クリストファー(2004)「日本語の「感謝」における謝罪表現とそれを規定する要因」
『Linga』3-21 上智大学
- (2005)「感謝場面での謝罪表現の使用—四つの要因の影響をめぐって—」
『社会言語科学会第16回大会発表論文集』212-215
- 구영신 (2013) “한국어 사과 응답 화행의 실현 양상연구 : 중국인 학습자를 대상으로”계명대학교 대학원 석사학위논문
- 김경석 (1996) „요청, 거부, 사과 발화 행위의 전략“ “사회언어학”4(2)
한국사회언어학회
- 金光泰 (2005) “日韓両言語의 感情의 오노매토피아研究”
韓国外国語大学校大学院 日語日文学科 博士論文
- 김명운 (2009) “현대국어의 공손성 연구”
서울대학교 대학원 국어국문학과 국어학전공 문학박사학위논문

- 김선희 오승신(2002) „음성 말뭉치의 구축“ “한국어 구어 연구(1)-구어 전사 말뭉치와 그 활용” 한국문화사
- 김양진 (2001) “다툼대화분석을 통한 말하기 교육 방법 연구”
인천교육대학교 교육대학원 초등국어교육전공 교육학 석사학위논문
- 김연희 (2004) “일본인의 감사와 사죄에 관한 언어행동 고찰”
단국대학교 교육대학원 석사학위논문
- 김윤미(2000) “우리나라 고등학교 영어 학습자의 사과화행에 관한 연구”
이화여자대학교 교육대학원 석사학위논문
- 金珠璉 (2009) “談話를 중심으로 한 韓日 稱賛話行의 对照研究”
東国大学校大学院 碩士論文
- 金泰子 (1987) “담화분석의 화행의미론적 연구”
全北大学校大学院 國語國文學科 博士論文
- 김형정 (2002) „구어 전사 말뭉치의 표기 방법“ “한국어 구어 연구(1)-구어 전사 말뭉치와 그 활용” 한국문화사
- 김혜련 (1997) „사회문화적 능력과 언어전이: 한국어와 영어에서의 사과와 경우“
“사회언어학”5,2 한국사회언어학회 p191-219
- 미즈시마 히로코 (2002) “한국어 불평 화행의 중간언어적 연구”
이화여자대학교 대학원 외국어로서의 한국어교육전공 석사학위논문
- 박경선 (2000) “직장 내에서의 사과유형에 대한 한일대조고찰”
계명대학교 대학원 석사학위논문
- 박선호 (1993) “영한 화행 대조연구: 사과(Apology)를 중심으로”
서울대학교 대학원 석사학위논문
- 박영순 (2004) “한국어 담화·텍스트론” 한국문화사
- 박영순 (2007) “한국어 화용론” 도서출판 박이정
- 박용익 (2010) “대화분석론” 언어의사소통연구 4
- 박은영 (2000) “영어권 한국어 학습자와 한국어 원어민의 화행 실현 비교연구: ‘사과’와 ‘감사응답’을 중심으로” 이화여자대학교 교육대학원 석사학위논문
- 朴恩貞 (2009) “드라마를 통한 [말다툼]의 일한비교-가족 간의 [말다툼]을 중심으로-”
漢陽大学校大学院 日本言語文化學科 碩士論文
- 박은지 (2005) “일본어에 나타나는 사죄 및 감사의 공손전략에 관한 연구-판매직 종사자의 대고객 표현을 중심으로” 동의대학교 대학원 석사학위논문
- 박지나 (2009) “한중 사과화행 대조연구” 한국외국어대학교 교육대학원 석사학위논문
- 박진숙·이상도(2014) „한국과 필리핀 대학생들의 영어사과화행연구“
“현대영어교육(modern English Education)”제 15 권제 2 호 현대영어교육학회 p113-131
- 서상규 구현정(2002) “한국어 구어 연구(1) 구어 전사 말뭉치와 그 활용”
연세대학교 언어정보개발연구원 한국문화사

- 손세모들(2012) ‘한국어와 중국어의 사과표현 대조연구’“國際語文”제 55 집
국제어문학회 p183-249
- 송경숙 (2002) “담화분석: 대화 및 토론 분석의 실제” 한국문화사
- 세가와 교코 (1997) “대화관리의 전략 연구-대학생의 대화를 중심으로-”
연세대학교 대학원 국어국문학과 석사학위논문
- 안의정(2002) „국내외 구어 말뭉치 현황“ “한국어 구어 연구(1)-구어 전사 말뭉치와 그
활용” 한국문화사
- 안현정 (2000) “대인접촉행동의 한일 비교연구”중앙대학원 석사학위논문
- 연구동 (1998) “통일시대의 한글 맞춤법”박이정
- 에린 피츠제럴드(2013) “호주영어와 한국어에서의 사과 화행 대조 분석”
청주대학교대학원 석사학위논문
- 유경애(2013) „한국대학생들의 사과화행인식과 평가:공손성의 범문화적 비교 가능성의
탐색“ “영어학(Korean journal of English language and linguistics)” 제 13 권제 3 호
한국영어학회 p601-625
- 柳享善 (1996) „거절“과 관련된 表現에 대한 研究“ “語文研究” 110號 29(2)
韓國語文教育硏究會
- 왕양 (2013) “한국어 사과화행 전략에 대한 중국인 인식 양상 연구”
연세대학교대학원 석사학위논문
- 이상옥 (2010) “일본어의 아마에(甘え)의 언어행동에 관한 고찰”
한양대학교대학원 일본언어, 문화학과 박사학위논문
- 이유미(2008) “한국어 사과 화행연구” 인제대학교대학원 석사학위논문
- 이원표 (2001) “담화분석 방법론과 화용 및 사회언어학적 연구의 실제” 한국문화사
- 이정희 (2004) “일본어의 공손표현에 관한 연구-담화상에 나타나는 남녀차이를
중심으로-” 부산외국어대 일어일문학과 박사논문
- 이희승·안병희 (1996) “한글 맞춤법 강의”(1989년 초판)신구문화사
- 임리라(2008) “한국어 교재 구성을 위한 사과 화행 인접쌍 연구”
상명대학교 교육대학원 석사학위논문
- 임영철·김순미 (1997) „사죄행위와 사회적 요인과의 상관관계““일본학보” 37 권
- 임영환·김규철·김종윤·이기운·정재민·박형우 (2004) “화법의 이론과 실제” 집문당
- 전영옥(2002) „구어 원시 말뭉치 구축 방법“ “한국어 구어 연구(1)-구어 전사 말뭉치와 그
활용” 한국문화사
- 전영옥(1999) “한국어 담화에 나타난 반복 표현 연구: 유형, 분포 및 가능” 상명대학교
대학원 국어국문학과 박사학위논문
- 최상진·유승엽 (1992) „한국인의 체면에 대한 사회심리학적 분석““한국심리학회”
- 홍민표 (1996) „감사와 사죄표현의 한일대조“ “일본학년보” 제 7 호
- 홍민표 (2005) „한국, 중국, 일본, 호주 대학생의 거절전략에 관한 대조 고찰“

- “日本語文学” 29 韓国日本語文学会
- 홍선수(2003) “한국어 사과 화행 교육 연구” 경희대학교 교육대학원 석사학위논문
- 홍주희(2009) “드라마에서 나타난 한국어와 중국어의 사과 화행 연출”
연세대학교대학원 석사학위논문
- 黄慧仙 (2010) “한 중 일 불만표명에 대한 해명의 대조사회언어학적 연구”
中央大学校大学院 日語日文学科 日語学専攻 碩士論文
- Austin, J.L. (1962) *How to Do Things with Words*. Oxford University Press. (坂本白大訳(1978)
『言語と行為』大修館書店)
- Barnlund, D.C. and Yoshioka, M. (1990) Apologies: Japanese and American Styles.
International Journal of Intercultural Relations, 14 New York: Pergamon Press. 193-206.
- Beebe, L.M. (1987) *Issues in Second Language Acquisition*. International Thomson Publishing. (島
岡丘・卯城祐司・佐久間康之訳(1998)『第二言語習得の研究—5つの視点から』大修館
書店)
- Blakemore, D. (1992) *Understanding utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford University
Press. (武内道子・山崎英一訳(1994)『ひとは発話をどう理解するか—関連性理論入門—』
ひつじ書房)
- Blum-Kulka, S. and Olshtain, E. (1984) Requests and Apologies: A Cross-Cultural Study of Speech
Act Realization Patterns (CCSARP). *Applied Linguistics 5-3* 196-213.
- Blum-Kulka, S., House, J. and Kaser, G. (eds) (1989) *Cross-Cultural Pragmatics. Requests and
Apologies*. Norwood, NJ: Ablex.
- Brown, R. (1958) *Words and Things*. Published by Illinois. (石黒昭博訳(1978)『ことばともの一言
語論序説』研究社)
- Brown, P. and Levinson, S.C. (1987) *Politeness—Some universals in language usage*. Cambridge
University Press.
- (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press. (田
中典子・斉藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子訳(2011)『ポライト
ネス—言語使用における、ある普遍現象—』榊研究社)
- Cohen, A.D. and Olshtain, E. (1981) Developing a Measure of sociocultural competence: the case of
apology. *Language Learning, 31*: 113-134.
- Culpepper, J. (1996) Towards an anatomy of impoliteness. *Journal of Pragmatics, 25*: 349-367.
- Coulmas, F. (1981) Poison to Your Soul. Conversational Routine: Explorations in Standardized
Communication Situations and Prepatterned Speech. *The Hague: Mouton*.
- Durkheim, E. (1924) *In Sociology and Philosophy*. London. (佐々木交賢訳(1985)『社会学と哲学
—道徳の科学的研究—』恒星社厚生閣)
- Edmund, L. (1976) *Culture and Communication*. Cambridge University Press. (青木保・宮坂敬造

- 訳 (1982)『文化とコミュニケーションー構造人類学入門ー』紀伊国屋書店)
- Fishman,J.A.(1972) *The sociology of language : an interdisciplinary social science approach to language in society*. Newbury House. (湯川恭敏訳(1974)『言語社会学入門』大修館書店)
- Fukada, Atsushi and Asato, Noriko (2004) Universal politeness theory; application to the use of Japanese honorifics *Journal of Pragmatics*. 36
- Fraser, B.(1990) Perspectives on politeness. *Journal of Pragmatics* 14(2) 219-236.
- Fraser,B. and Nolen, W. (1981) The association of deference with linguistic form. *International journal of the sociology of language*, 27 93-109.
- Garcia,C.(1989) Apologizing in English: Politeness strategies used by native and non-native speakers. *Multilingua*,8 3-21.
- Goffman, E.(1967) *Interaction ritual: essays on face to face behavior*. Garden City, New York. (浅野敏夫訳(1986)『儀礼としての相互行為ー対面行動の社会学』法政大学出版社)
- Grice, P. (1989[1975]) *Studies in the way of words*. Harvard University Press. (清塚邦彦・飯田隆訳(1998)『論理と会話』(榊草書房)
- Gumperz, John J.(1982) *Discourse Strategies*. Cambridge University press. (井上逸兵・出原健一・花崎美紀・荒木端夫・多々良直弘訳(2004)『認知と相互行為の社会言語学ーディスコース・ストラテジー』松柏社)
- Hall,E.T.(1959) *The Silent language*. New York: Doubleday.(國弘正雄・長井善見・斉藤美津子訳 (1995)『沈黙のことばー文化 行動 思考ー』南雲堂)
- Hall,E.T.(1966) *The Hidden dimension*. New York: Doubleday. (日高敏隆・佐藤信行訳 (1992)『かくれた次元』みすず書房)
- Halliday, M.A,K. and Hasan, Ruqaiya(1976) *Cohesion in English*. London:Longman. (安藤貞雄・多田保行・永田龍男・中川憲・高口圭轉 言語学翻訳叢書 (1997)『テキストはどのように構成されるかー言語の結束性ー』ひつじ書房)
- (1985) *Language, context, and text: Aspect of language in a social-semiotic perspective*. Deakin University press.(笈壽雄訳(1991)『機能文法のすすめ』大修館書店)
- Herriot,P. (1970) *An introduction to the psychology of language*. London:Methuen. (管野衷訳(1975)『言語心理学入門』大修館書店)
- Holmes,J.(1990)Apologies in New Zealand English. *Language in Society*, 19 155-199.
- Hymes,D.(1974) *Foundations in Sociolinguistics: An Ethnographic Approach*. Pennsylvania University Press.(唐須教光訳(1979)『ことばの民族誌ー社会言語学の基礎』紀伊国屋書店)
- Ide, Sachiko(1989) Formal forms and discernment: two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua* 8(2/3) 223-248.
- Jakobson, R. (1963[1973]) *Essais de Linguistique generale*. Paris: Minuit. (川本茂雄・田村すびこ・村崎恭子・長嶋善郎・中野直子訳(1985)『一般言語学』みすず書房)
- Kasper,G.(2000) Data collection in pragmatics research. In: Spencer-Oatey,H.(ed)(2000) Culturally

- Speaking: Managing Rapport through Talk across Cultures. London: Continuum.(浅羽亮一(監修)・田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・熊野真理・福島佐江子訳(2004) 『異文化理解の語用論—理論と実践』東京：研究社出版)
- Kondo, Sachiko(1997) The Development of Pragmatic Competence by Japanese Learners of English: Longitudinal Study on Interlanguage Apologies. *Sophia Linguistica*, 41 265-284.
- Lado,R.(1958) *Linguistics across Cultures*. Michigan University press.
(上田明子訳(1959) 『文化と言語学』大修館書店)
- Lakoff,R. (1975) *Language and woman's place*. New York : Harper and Row(かつえ・あきば・れいのるず訳(1990) 『言語と性—英語における女の地位』有信堂)
- Leech, G.N.(1983) *Principles of Pragmatics*. London:Longman.
(池上嘉彦・河上誓作訳(1987) 『語用論』、紀伊国屋書店)
- Levinson, Stephen C.(1983) *Pragmatics*. Cambridge University press.
(安井稔・奥田夏子訳(1990) 『英語語用論』 研究社)
- Malcolm,C.(1977) *An Introduction to Discourse analysis*. London:Longman. (吉村昭市・貫井孝典・鎌田修訳(1999) 『談話分析を学ぶ人のために』世界思想社)
- Matsumoto, Yoshiko (1988) Reexamination of the Universality of Face; Politeness Phenomena in Japanese. *Journal of Pragmatics* 12 403-426.
- Mikhail Bakhtin(1979,1986) *Estetike slovesnogo tvorchestva*. S.Bocharov and V.Kozhinov (김희숙, 박중소 옮김(2006) “말의 미학” 도서출판 길)
- Olshstein, E. and Cohen,A.D.(1983) Apology: a speech-act set. In N. Wolfson and E. Judd(eds.),*Sociolinguistics and Language Acquisition*,Rowley: Newbury House,18-35.
- Olshstein,E.(1989) Apologies across languages.In S. : Blum-Kulka, J. House and G. Kasper(eds) *Cross-Cultural Pragmatics:Requests and Apologies*. Norwood,NJ:Ablex, 155-173.
- Owen, M.(1983) *Apologies and Remedial Interchange*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Pizziconi, B. (2003) Re-examining politeness, face and the Japanese language. *Journal of Pragmatics* 35 1471-1506.
- Psathas,G.(1995) *Conversation Analysis – The Study of Talk-in-Interaction-*.Sage Publication.
(北澤裕・小松栄一訳(1998) 『会話分析の手法』マルジュ社)
- Rintell, E. and Mitchell, C.J.(1989) Studying requests and apologies : an inquiry into method. In S. Blum-Kulka, J. House and G. Kasper(eds), *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies*.Norwood, New Jersey.Ablex. 248-272.
- Russell,B. (1940) *An Inquiry into Meaning and Truth*. Harvard University press (毛利可信訳(1973) 『意味と真偽性—言語哲学的研究—』文化評論出版)
- Ruth,B.(1967) *The chrysanthemum and the sword* .Houghton.(長谷川松治訳(1979) 『菊と刀—日本文化の型—』社会思想社)
- Sapir, E. (1921) *Language-an Introduction to study of speech*. New York

- (泉井久之助訳(1957)『言語—ことばの研究—』紀伊国屋書店)
- Schegloff, E. and Sacks, H. (1973) *Opening up Closings*. *Semiotica*, 7. (北澤裕・西阪仰訳(1989)「会話はどのように終了されるのか」『日常性の解剖学』マルジュ社)
- Searle, John R. (1969) *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge University Press. (坂本百台・土屋俊訳(1986)『言語行為—言語哲学への試論—』勁草書房)
- Spencer-Oatey, H. (ed) (2000) *Culturally Speaking: Managing Rapport through Talk across Cultures*. The Continuum Publishing Company. (浅羽亮一(監修)・田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・熊野真理・福島佐江子訳(2004)『異文化理解の語用論—理論と実践』研究社)
- Sperber, D. and Wilson, D. (1986) *Relevance: Communication and Cognition*. Harvard University Press. (内田聖二・中達俊明・宗南先・田中圭子訳(1999)『関連性理論—伝達と認知—』研究社)
- Stephen, D. Krashen and Tracy D. Terrell (1983) *The natural approach : language acquisition in the classroom*. New York : Pergamon Press. (藤森和子訳(1988)『ナチュラル・アプローチのすすめ』大修館書店)
- Stubbs, M. (1983) *Discourse Analysis The Sociolinguistic Analysis of Natural Language*. Blackwell. (南出康世・内田聖二訳(1989)『談話分析—自然言語の社会言語学的分析—』研究社)
- Sugimoto, Naomi (1998) Norms of Apology Depicted in U.S. American and Japanese Literature on Manners and Etiquette. *International Journal of Intercultural Relations*, 22 No 3 New York: Pergamon Press 251-276.
- Tanaka, N. (1991) An investigation of apology: Japanese in comparison with Australian. *Meikai Journal* 4 35-53.
- Thomas, J. (1995) *Meaning in interaction : An Introduction to Pragmatics*. London: Longman. (浅羽亮一(監修)・田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理訳(1998)『語用論入門—話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味—』研究社)
- Usami, Mayumi (2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation-Some Implications for a Universal Theory of Politeness*. ひつじ書房
- Vanderveken, D. (1990) *Meaning and Speech Acts*. Cambridge University Press. (久保進・渡辺扶美枝・西山文夫・渡辺良彦訳 (1997)『意味と発話行為』ひつじ書房)
- Watts, R. (2003) *Politeness*. Cambridge University Press.
- Weinrich, H. (1976) *Sprache in Texten*. Ernst Klett Verlag, Stuttgart. (脇阪豊 他訳(1984)『言語とテキスト』紀伊国屋書店)
- Wertsch, J.V. (1991) *Voices of the Mind-A sociocultural approach to mediated action*. Harvard University Press. (田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子訳(1995)『心の声—媒介された行為への社会文化的アプローチ』福村出版)
- Yule, G. (1996) *Pragmatics*. Oxford University Press. (高司正夫訳(2000)『ことばと発話状況』リーベル出版)